

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）

埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—千曲市内その 1—

しゃ ぐう じ
社 宮 司 遺 跡 ほか

《第 1 分冊》

2006.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



千曲市・社宮司遺跡全景1（北から）



千曲市・社宮司遺跡全景2（北から）



社宮司遺跡出土の墨書土器



社宮司遺跡出土の柱及び礎板（掘立柱建物跡）



社宮司遺跡出土の木簡



社宮司遺跡出土の六角木幢（宝珠・笠・装飾品）



六角木幢の装飾部品 1 (蕨手)



六角木幢の装飾部品 2 (風鐸)



六角木幢の装飾部品 3 (風招)



六角木幢の幢身



疾行餓鬼「餓鬼草紙」中の笠塔婆（東京国立博物館蔵）



水施餓鬼「餓鬼草紙」中の笠塔婆（京都国立博物館蔵）



六角木幢現物の複製品（組立合成）



社宮司遺跡出土の土器（地鎮遺構）

はじめに

長野県千曲市は、県都長野と東信・中信地域との結節点にあたります。市の中心部には千曲川が北流し、これに沿って高速道路や新幹線、しなの鉄道、篠ノ井線など、多くの幹線が南北に通過する交通の要衝でもあります。なかでも国道18号は、東・北信を結ぶ大動脈であるにもかかわらず、交通量の増加に伴って、死傷事故や慢性的な渋滞に悩まされております。国土交通省関東地方整備局は、こうした交通障害の緩和策として、上田市から長野市にまたがる国道バイパスの建設を計画しました。本書は、その一部にあたる坂城・更埴バイパスの建設に伴って実施された千曲市八幡遺跡群の発掘調査報告書です。

八幡遺跡群は千曲川の左岸に位置し、聖山の山塊に源を発する佐野川と宮川に画された扇状地上に展開しています。「八幡」の地は、その名のとおり、古代延喜式神名帳に記載される武水別神社（通称八幡さま）を中心に発達した門前町であり、田毎の月で知られる名勝姨捨の麓に広がる肥沃な田園地帯でもあります。今回の調査では、遺跡群のほぼ中央部を南北およそ2kmにわたって掘り進み、北稲付、大道、社宮司の諸遺跡の実態を明らかにすることができました。

調査内容の詳細は本書をご覧くださいと思いますが、とくに律令税制に関わる記述がある漆紙文書が社宮司遺跡で発見されたことによって、この地が古代更級郡衙比定地であるという確証を得たことは、本調査における重要な成果のひとつといえましょう。また、平安時代末期に製作されたと目される国内唯一の六角木幢は、善光寺を中心とする長野盆地に浄土信仰が普及した背景を追究する上でまたとない資料となりました。今回の調査成果が、さらしなの里の歴史解明の一助となれば、これにすぐる喜びはありません。

最後になりましたが、発掘作業から本報告書刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省関東地方整備局、千曲市、千曲市教育委員会をはじめとする関係機関、地元の地権者や関係者の皆さま方に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

例 言

1. 本書は国道 18 号坂城更埴バイパス線建設事業にかかわる長野県千曲市所在の八幡遺跡群及び宮川遺跡の発掘調査報告書である。八幡遺跡群内の主な遺跡は、外く祢遺跡、北稲付遺跡、稲付遺跡、中道遺跡、大道遺跡、社宮司遺跡である。
2. 発掘調査は、国土交通省関東地方建設局長野国道工事事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 遺跡の概要は、県埋蔵文化財センター『年報』17～21を始め、第2章第3節2(7)「整理の中間報告と資料の公開」で示してきた。内容に於いて本書と違いのある場合は、本書をもって正式見解とする。
4. 本書で使用した地図は、千曲市(旧更埴市)都市計画基本図(1:2500)、千曲市遺跡分布図(1:20000)、国土交通省国土地理院発行の地形図「稲荷山」(1:25000)、カシミール3D図である。航空写真は、国土交通省国土地理院及び米軍撮影によるものを使用した。
5. 発掘調査は、重機等請負契約を中信建設株式会社と現場プレハブを(株)内藤ハウスと請負契約して進めた。現地測量業務は、第2章第3節1(3)「調査方法」に記述してある。
6. 調査記録及び出土資料の整理は、県埋蔵文化財センターが行った。資料の理化学的分析委託、指導者の招聘等は第2章第3節2「発掘記録の整理方法」に記述してある。
7. 発掘調査及び整理事業の体制は、第2章第3節1(4)と2(5)に掲載してある。
8. 本書は、2分冊、DVD1枚から構成され、第1章から第3章12節2-2までを1分冊、第3章12節2-3以降を2分冊とする。付属のDVD内には、八幡遺跡群全体の遺構観察表、遺物観察表、六角木幢の画像写真、動画が収録してある。
報告書の作成方針、執筆、編集の業務は、第2章第3節3に記載してある。なお、種実・珪藻・花粉の分析、付着物分析に関しては、(株)パレオ・ラボ社が報告を行い、その結果を本書に引用転載あるいは加除筆して掲載してある。
9. 発掘調査から報告書の刊行まで、以下の機関及び方々より協力・助言を頂きました。
国土交通省長野国道工事事務所 同事務所笹平出張所 千曲市役所建設部建設課
文化庁 奈良文化財研究所 東京文化財研究所 東京国立博物館 京都国立博物館 国立歴史民俗博物館 千曲市教育委員会生涯学習課 長野県教育委員会文化財生涯学習課 長野県立歴史館 西部沖土地改良区 (株)ツルヤ稲荷山店、JAちくま(八幡支所・桑原支所・西部流通センター)、八幡小学校、八幡郵便局、八幡保育園、千曲有線 (株)ジャパン通信情報センター
茂原信生(京都大学霊長類研究所所長) 櫻井秀雄(独協医科大学) 平川 南(国立歴史民俗博物館館長) 上原真人(京都大学教授) 山田昌久(東京都立大学助教授) 宇野隆夫(国際日本文化研究センター教授) 山中敏史(奈良文化財研究所) 井上喜久男(愛知陶磁資料館学芸員) 高橋照彦(大阪大学助教授) 濱田 隆(山梨県立美術館館長) 斉藤 忠(静岡県埋蔵文化財研究所所長) 工楽善通(大阪府立狭山池博物館館長) 坪井清足(元興寺文化財研究所所長) 藤澤典彦(大谷女子大学教授) 沢田正昭(筑波大学教授) 武笠 朗(実践女子大学教授) 矢島 新(渋谷区松涛美術館) 森田 稔(京都国立博物館) 高妻洋成(奈良文化財研究所保存室長) 牛嶋 茂(奈良文化財研究所技術職) 三浦定俊(東京文化財研究所協力調整官) 早川泰弘(東京文化財研究所主任研究官) 福島正美(石川県埋蔵文化財センター) 北嶺澄照(関山中尊寺執事) 佐藤亜聖(元興寺文化財研究所) 宮川康雄(信州大学名誉教授) 倉澤正幸(上田市国分寺資料館館長) 石井義長(東洋大学講師) 嶋村 薫
10. 本書で報告した記録及び資料一式は、平成21年度まで県埋蔵文化財センターが保管する予定である。

凡 例

1. 記述・表記の仕方

八幡遺跡群は、第2章第2節に記したが、佐野川扇状地上に位置する遺跡すべての総称である。すでに遺跡範囲を指定した文化財包蔵地はもとより、未周知の遺跡が埋没している可能性は高い。したがって、今回の事業で掘削される路線内すべてに試掘調査を先行させ、その結果を明記することで、遺跡群全体の全貌が理解されるものと考えた。指定遺跡については「○○遺跡の調査」と表記し、それ以外は「○○地籍の調査」と表記した。個々の遺跡説明は、位置（地籍ほか）・調査期間・調査面積（実面積）を記し、土層堆積状況（埋没土）、調査状況と結果を記述する形式とした。この中で、遺構検出数と遺物量の多い遺跡は、遺構と遺物の概要、さらに遺跡の総括を項の末尾に記述した。

堆積層位の説明は、八幡遺跡群全体を通観できる基本土層（鍵層・柱状図中のスクリーン・トーン）の設定を念頭に進め、考古学的調査の手法上から、遺構検出可能となった層位をそこに含めた。堆積土の説明中、北から準じ整合を示しつつ表記したので、実際の土壌の顔つきが少々違う場合もある。

出土遺物の表記は、添付DVD内の遺物観察表中に示した属性観察のほか、観察留意点を記述した。遺物の分類基準は、土器は2000年県埋蔵文化財センター「第4章時期区分」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』に基づき、凡例図のように行った。なお、そこに登場しない分類基準は、1990年県埋蔵文化財センター「第3章第5節古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』から引用している。木製品の分類は、1996年奈良文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』に基づく。

2. 遺構図面類の表示は、原図修正を経てデジタルトレースを行った。縮尺は以下に統一した。

土層柱状図 1:20 竪穴式住居跡・建物跡、掘立柱建物跡 1:60 土坑 1:40

使用ソフトはAdobe社 Illustrator10。上場線を1Pで、下場線を0.5Pで描いた。図表記で1点破線は、遺構の切り合い関係が不明瞭な場合に用い、破線は切り合い関係が明瞭な場合に使用した。編み掛けの種類は、焼土や炭化物の分布等に用い、仕様は原則として以下のように統一したが、例外もある。遺構図中の出土遺物は、土器（No～）、木製品（木No～）、骨（骨No～）、石器（SNo～）、単なる礫をSとする。また竪穴式住居跡・建物跡の埋土注記は、柱穴さらにカマド埋没土の注記と、別々に観察しており、図中の層位番号が同じ表記となってしまった。これについては、可能な限り文中にて記述したが、不足もある。土坑等で文中に掲載のない、すべての遺構属性は、添付DVD内に納めてある。ただし土坑から掘立柱建物跡に組成させた例は、掘立柱建物跡として掲載したので、観察表中にはない。

	…… 焼土（塗り 30%～40%）		…… 木材
	…… 火床（塗り 20%）		…… 柱痕（塗り 40%）
	…… 炭		…… 礫集中

遺物図面類の表示は、土器・金属器等の実測図を1/2大でトレースし、デジタル化した後、編み掛け・断面塗り等を行った。土器を始めすべての遺物は、1:4掲載を原則とし、適宜1:2・1:3・1:6を用いた。柱材等規模の大きな資料は1:8で表示した場合もある。木製品は委託実測（第2章2(4)遺物類）を多用し、すべてデジタルトレースとした。編み掛けは、焼き物の種類を明示する目的で黒色土器、須恵器に施し、他に付着物、墨痕、朱墨痕等に用いた。凡例は以下のように統一した。

網掛け…… 内面黒色土器

断面塗…… 須恵器

 …… 朱墨痕（塗り 20%）

 …… 墨痕（塗り 30%）

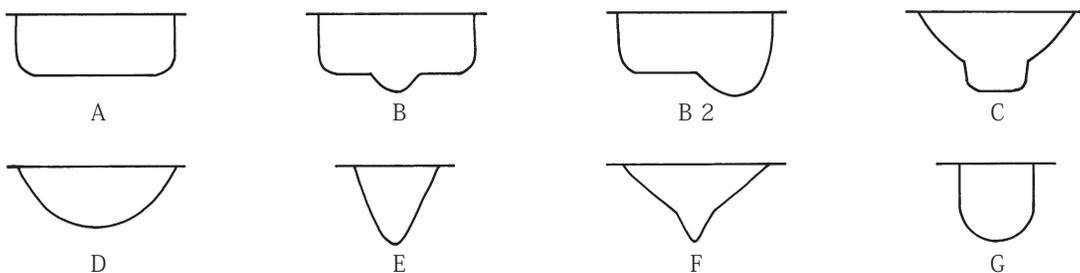
 …… 付着物（塗り 50%）

 …… 漆（塗り 100%）

3. 写真は焼き付け後またはフィルムからの直接取り込みにより、デジタル化した。読み込み値は3200dpiで統一した。使用ソフトはAdobe社Photoshop 6.0。写真は、調査区の全景及び調査状況、土層状況等の写真を可能な限り掲載した。遺構は、検出時の全景と遺物出土状態、堆積土層、完掘状態を1セットとして掲載するようにした。柱穴及び土坑に関しては、半截状態と柱材・礎板材の出土状態、完掘状態を1セットとして掲載した。遺物写真は、集合写真（8×10インチ）以外を委託（第2章2（2）写真類）し、デジタル撮影（600万画素）とした。取り込みは遺構写真同様の使用で、デジタル化している。

4. 土坑及び柱穴に関しては、記述にあたり、形状（断面）と埋土堆積状態を模式図化し、記号表記した。
断面形態：

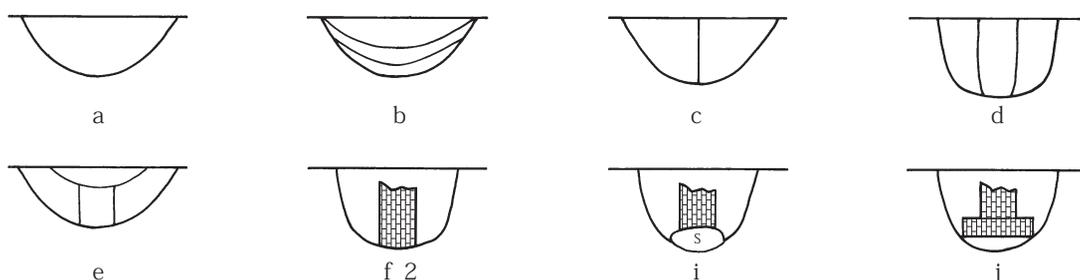
A類 タライ状（底面が平坦で断面形が方形）、B類 階段状（底面中央に段を有するもので、壁面に段を有するものをB2）、C類 アサガオ形（底面が平坦で、立ち上がりが広がる）、D類 皿状（底面が平坦面を持たず、丸く、すり鉢状）、E類 V字状（底面が尖る）、F類 ロート状（底面が尖る）、G類 砲弾状（U字状）、H類 断面分類が不可能な例。



堆積状態：

a類 単純堆積（埋土が単一層）、b類 水平かレンズ状、c類 縦位分割状（中心部で土層が区分）、d類 柱痕（1は土坑中心部に柱痕が残り、柱痕底面が土坑底面と同じか、低いもの・2は柱痕跡が土坑底部にまで達していない例・3は柱痕跡が残るが位置がどちらか壁面に偏っている例）、e類 類別dの土層を他土層が切っている場合（2は柱痕部分に柱材が残っている例）、f類 柱材が残る例（残存長により、長いものを2とする）、g類 礎石が残っている場合、i類 礎石+柱材が遺存している場合、k類 礎板のみが残る場合、j類 礎板+柱材が遺存している場合

埋土の堆積形状と基礎材遺存の状況は、本来切り離せないものである。したがって、礎板材が残るkで、堆積状態がbであった場合、b(k)の表記とした。



5. 掘立柱建物跡等の柱穴内からは、多くの柱材と礎板材が出土した。それらについても模式図化し、記号として表記した。柱材の形態分類は、正面形態（Ⅰ類）と底部の切断状況（Ⅱ類）に分けて考えた。

柱材の分類

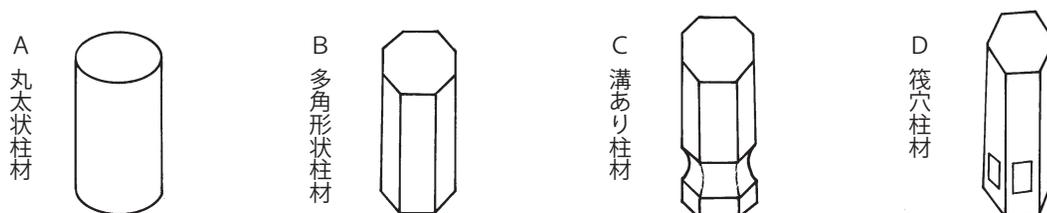
Ⅰ類. 正面形態の分類

A類 丸太材（面加工が施されていない柱材）、B類 多角形状柱材（木表が面加工され、断面形が多角形状となる柱材）、C類 溝あり柱材（底部付近に木目に直行する溝状の欠き込みを持つ）、D類 筏穴柱材（底部付近に方形のホゾ穴、「筏穴」と称される加工を持つ）。

Ⅱ類. 底部切断加工の分類

a 木目に対し垂直に切断する、b 柱底面の角のみ落としし切断する、c 柱底面中央部に向けて斜行に切断、尖らせる。

したがって、B a類とは、「多角形状の柱材で、底部が垂直に切断された材」を意味する。



礎板材の分類

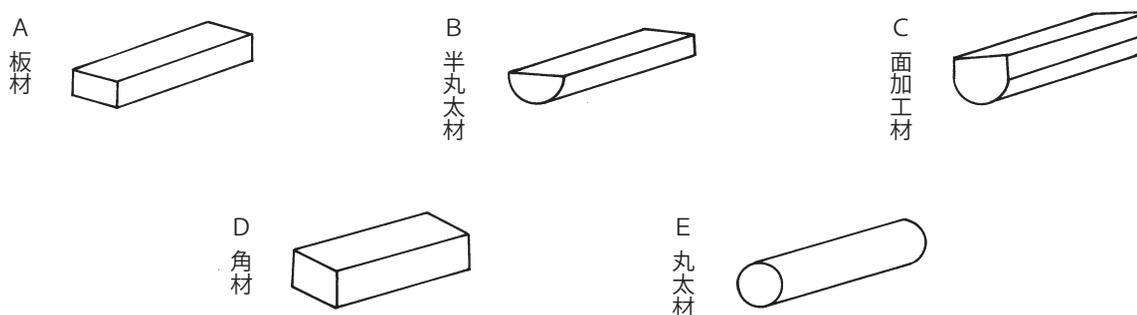
Ⅰ類. 正面形態の分類

A類 板材、B類 半丸太材（面加工なし）、C類 面加工が施されている材、D類 角材、E類 丸太材

Ⅱ類. 端部切断加工の分類

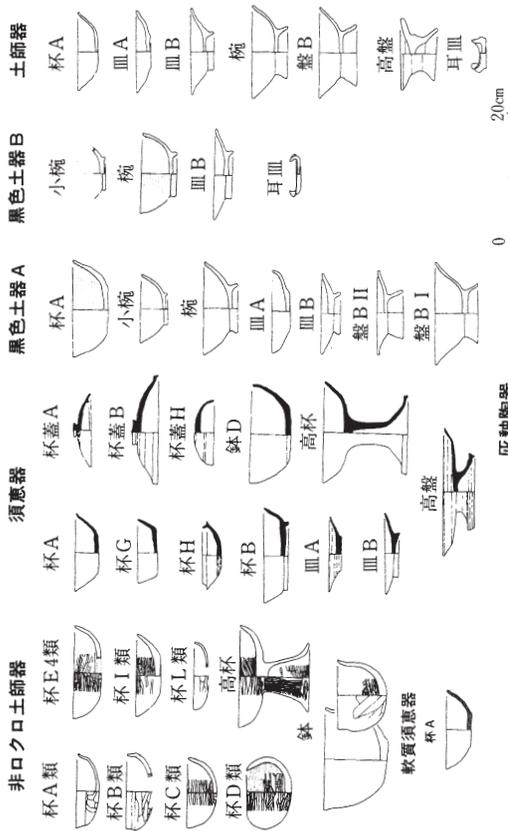
a 両端部を垂直に切断する、b 一端は垂直に、もう一端は斜行に切断する、c 両端とも斜行に切断する、d 端部を山形に切断する、e 腐蝕や欠損等により不明。

したがって、C a類という表記は、「面加工され、端部が垂直に切断された材」を意味する。

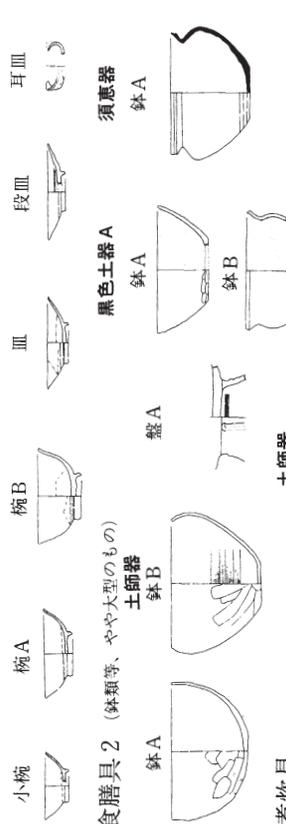


6. 土器の編年的区分と比定年代については、土器分類基準同様に、2000年県埋蔵文化財センター「第4章時期区分」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』の凡例（P vi）に基づいた。八幡遺跡群は善光寺平南部に位置することから屋代編年に準拠したが、松本平の編年的研究とは比定年代に若干のずれが生じている。屋代編年は、概ね1期松本平より古く位置付けられるようで、屋代編年の9期の土器様相は、松本平では10期相当近くになる。今回の発掘調査では、これら編年観を左右する新知見は得られないので、屋代編年の成果を従順に継承した。県内の広域編年対比には、編年根拠（検証可能なデータ）の提示と、その検証が未だに必要である。相対年代の幅、絶対年代へのアプローチには、少なからず慎重さが求められるか。

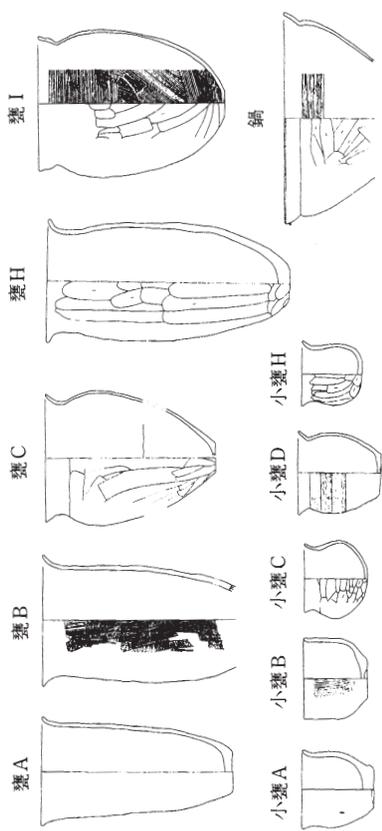
食膳具 1



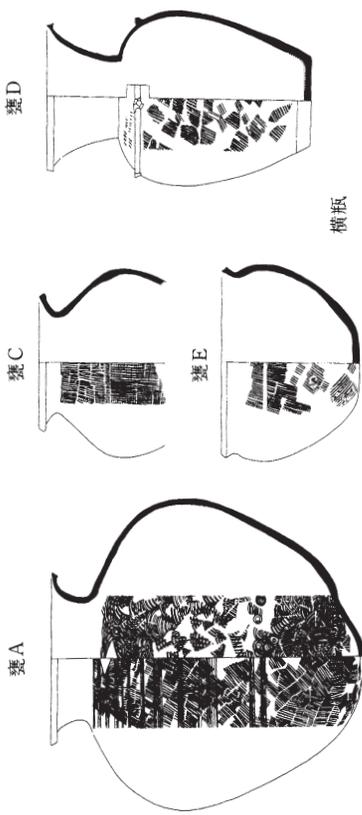
灰軸陶器



煮炊具



貯蔵具



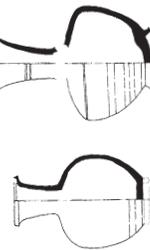
平瓶



横板



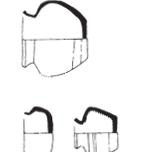
長頸壺A



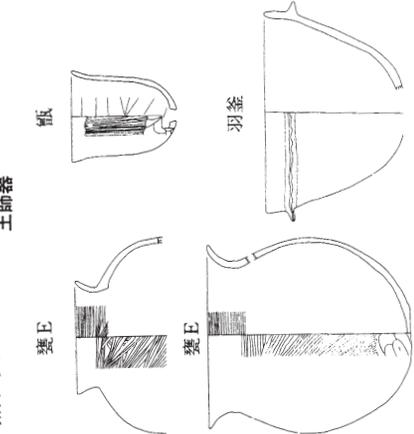
短頸壺A



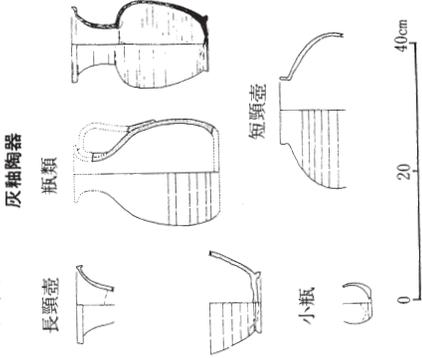
短頸壺B



煮炊具



貯蔵具



0 20 40cm

	7c前半 中葉	7c前半	古墳9期 (古代0期)	食膳具の主体は非ロクロ土師器のみの段階で、歴史時代的須恵器（須恵器杯蓋A、杯G、杯A、杯B等）はともなわない段階。非ロクロ土師器杯C類・I類が主体をしめる。出土量が少ない遺構で、非ロクロ土師器のみしか出土がない場合、古代0期～1期前半前葉として幅をもって扱う。	
1期前半前葉 1期前半後葉		7c後半	古代1期前半	須恵器杯蓋Aのみの段階。	古代1期 食膳具の中に歴史時代的須恵器（以後須恵器と呼ぶ）が登場する段階。須恵器杯蓋Aを組成にもち、須恵器杯蓋Bとの共伴関係により前半と後半に分けられる。
	7c末	古代1期後半	須恵器杯蓋Bが登場し、須恵器杯蓋Aと共存する段階。		
	7c最末 ～8c前半		古代2期	食膳具の主体は須恵器がほとんどで、須恵器杯Aはすべてへら切り（手持ちへら削り、回転へら削り、へら切り後ナデ等も含む）の段階。須恵器杯蓋Aはなくなり須恵器杯蓋Bのみになる。	
	8c中葉		古代3期	食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯Aにへら切りと回転糸切り（以後糸切りと呼ぶ）が共存する段階。へら切りの方が糸切りよりも多い。糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均は7cm中ごろ～7cm後半以上に集中する。	
	8c後半		古代4期	食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯Aにへら切りと糸切りが共存する段階。糸切りの方がへら切りよりも多い。糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均は7cm台～8cm台に集中する。	
	8c末～ 9c初頭		古代5期	食膳具の主体は須恵器だが、黒色土器が増え始め、その比率は2割前後以下の段階。須恵器杯Aは糸切りのみとなり、その内面底径の平均は6cm末～7.5cm前後に集中する。	
	9c前半		古代6期	食膳具における須恵器の比率が低下し、黒色土器が増大して、その比率が2割前後～4.5割前後の段階。須恵器杯Aの内面底径の平均は5cm後半～6cm後半に集中する。	
7期前半 7期後半	9c中 後半	9c中葉 後半	古代7期	食膳具の主体は黒色土器になり、その比率が4.5割前後以上の段階。須恵器杯A（含、軟質須恵器杯A）の内面底径の平均は5cm後半～6cm前半に集中する。須恵器杯Aの胎土と焼きが明らかに悪くなり、須恵器の質AタイプとBタイプ（両タイプとも軟質須恵器）が6期まで主体だった硬質のDタイプの量を圧倒するようになる。出土量が豊富な場合黒色土器の比率が6.5割前後を境に前半と後半とに分ける場合もある。	
8期前半 8期後半	9c末				古代8期
	10c前半		古代9期	食膳具の主体は、黒色土器から土師器に逆転し（以後、食膳具の主体は土師器となる）、土師器杯A IIの口径は、おおむね11.0cm～13.5cmの範囲に分布し、その口径平均は12cm台となる段階。	
	10c中葉		古代10期	土師器杯A IIの口径は、おおむね10.0cm～12.9cmの範囲に分布し、口径平均は11cm台に縮小する段階。	
	10c後半		古代11期	土師器杯A IIの口径は、おおむね9.5cm～11.5cmの範囲に分布し、口径平均は10cm台に縮小する段階。器高はおおむね2.5cm～3.6cmに分布し、器高平均は2.9cm～3cm強の段階に集中する。	
		古代12期	土師器杯Aに明瞭な大小の2法量分化が出現する段階。土師器杯Aの縮小傾向と明瞭な2法量分化に伴い前段階の土師器杯A IIは杯A IIIと呼称されるようになるが、その口径、器高は前段階とほぼ同じ値となる。		
	10c末 ～11c初頭		古代13期	土師器杯A IIIの器高は、おおむね2.0cm～3.4cmの範囲に分布し、器高平均は縮小し、2.6cm～2.8cmになる段階。	
	11c前半		古代14期	土師器杯A IIIの器高は、おおむね2.0cm～3.0cmの範囲に分布し、器高平均は縮小し、2.1cm～2.5cmになる段階。少数であるが器高1cm台のものがみられ始める。	
	11c後半		古代15期	土師器杯A IIIの器高は、1cm台のものが増え、おおむね1.4cm～2.3cmの範囲に分布し、器高平均は、2.1cm未満となる段階。	

古代土器編年区分と比定年代（屋代遺跡群報文より転載）

本文目次

第1分冊

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

本文目次

挿図目次

挿表目次

第1章 事業の概要	1
第1節 道路建設の概要	3
第2節 文化財保護の計画	4
1. 埋蔵文化財保護協議	4
2. 埋蔵文化財発掘許可と契約	5
第2章 発掘調査の準備	7
第1節 八幡遺跡群周辺の環境	9
1. 地形と地質	9
2. 気候と植生	12
3. 名勝地	12
第2節 八幡遺跡群周辺の歴史	13
1. 周辺の遺跡	13
2. 周辺の歴史的背景	18
第3節 記録保存の方法	21
1. 発掘調査の方法	21
(1) 調査範囲 (2) 調査の留意点と進め方 (3) 調査方法	
(4) 調査の体制と期間 (5) 調査日誌抄 (6) 調査の公開	
2. 発掘記録の整理方法	30
(1) 図面類 (2) 写真類 (3) 所見等の記述類 (4) 遺物類	
(5) 整理の体制と期間 (6) 整理日誌抄 (7) 整理の中間報告と資料の公開	
3. 発掘調査報告書の作成	34
(1) 方針 (2) 編集 (3) 執筆	
第3章 発掘調査の概要	35
第1節 境なし地籍の試掘調査	37
第2節 砂田地籍の試掘調査	38
第3節 外く衾遺跡の試掘調査	39
第4節 北稲付遺跡の調査	47
第5節 稲付遺跡の調査	62
1. 調査の概要	62
2. 遺構と遺物	65
第6節 薬師堂地籍の試掘調査	74
第7節 中道遺跡の試掘調査	80
第8節 ふけ地籍の試掘調査	83

第9節	大道遺跡の調査	85
1.	調査の概要	85
2.	遺構と遺物の概要	88
第10節	清水下地籍の試掘調査	119
第11節	宮川遺跡の試掘調査	123
第12節	社宮司遺跡の調査	125
1.	調査の概要	125
2.	遺構と遺物の概要	126
— 1.	土坑・集石及び溝跡	133
— 2.	竪穴式建物跡	258

第2分冊

— 3.	掘立柱建物跡	358
— 4.	区画的溝状遺構	482
3.	特殊遺構	615
— 1.	地鎮的遺構	615
— 2.	土壇墓跡	627
4.	特殊遺物	637
— 1.	墨書土器・漆紙文書・習書木簡	637
— 2.	土器に付着する漆・油脂・硫黄	646
— 3.	奈良三彩及び緑釉陶器	650
— 4.	六角木幢	652
5.	総括	698
第4章	発掘調査のまとめ	713
第1節	更級郡とは	715
第2節	更級郡衙とは	716
第3節	社宮司遺跡とは	717
第4節	社宮司遺跡にみる郡内官衙の変遷とその背景	718
1.	律令国家への歩みと評制の成立	718
a.	7世紀後半の八幡遺跡群	718
b.	7世紀後半の国史概略	719
2.	律令国家と郡制の施行	720
a.	8世紀の八幡遺跡群	720
b.	8世紀の国史概略	727
3.	律令国家の衰退と郡制の変質	728
a.	9世紀の八幡遺跡群	728
b.	9世紀の国史概略	733
4.	王朝国家の成立と富豪層の台頭	734
a.	10世紀の八幡遺跡群	734
b.	10世紀の国史概略	737
5.	摂関政治と武士の台頭	738
a.	11世紀前半の八幡遺跡群	738
b.	11世紀の国史概略	741
付	シンポジウム 六角木幢と信濃中世の幕開け	742
第5章	結語	745
索引		
抄録		
奥付		

挿 図 目 次

第 1 図	国道18号坂城更埴バイパス線の計画線概要	3	第 40 図	薬師堂地籍調査区全体.....	75
第 2 図	八幡遺跡群の位置.....	9	第 41 図	薬師堂地籍出土木製品.....	77
第 3 図	高尾山山系の地質略図.....	10	第 42 図	薬師堂地籍出土土器.....	78
第 4 図	千曲市川西地区の遺跡分布図.....	16	第 43 図	土層柱状図.....	80
第 5 図	記録基準区の呼称.....	23	第 44 図	調査地と試掘坑位置図.....	80
第 6 図	調査地と試掘坑位置図.....	37	第 45 図	中道遺跡調査区全体.....	81
第 7 図	土層柱状図.....	37	第 46 図	中道遺跡出土土器・木製品	82
第 8 図	調査地と試掘坑位置図.....	38	第 47 図	土層柱状図.....	83
第 9 図	土層柱状図.....	38	第 48 図	調査地と試掘坑位置図.....	83
第 10 図	調査地と試掘坑位置図.....	39	第 49 図	ふけ地籍調査区全体.....	84
第 11 図	外く祢遺跡調査区全体.....	41.42	第 50 図	土層柱状図.....	85
第 12 図	SD 03 出土土器及び木製品.....	44	第 51 図	調査地と試掘坑位置図.....	85
第 13 図	SD 03・SD 05 出土木製品.....	45	第 52 図	大道遺跡調査区全体 1.....	86
第 14 図	SD 03 出土土器及び木製品.....	46	第 53 図	大道遺跡調査区全体 2.....	87
第 15 図	調査区と試掘坑位置図.....	47	第 54 図	SB 01 完掘状態.....	89
第 16 図	土層柱状図.....	47	第 55 図	カマド完掘状態.....	89
第 17 図	北稲付遺跡調査区全体.....	48	第 56 図	SB 01 出土土器.....	89
第 18 図	北稲付遺跡出土土器及び木製品 1.....	50	第 57 図	SB 02 完掘状態.....	90
第 19 図	北稲付遺跡出土木製品 2.....	51	第 58 図	SB 03 完掘状態及び出土土器.....	92
第 20 図	SD 01 内試掘坑.....	52	第 59 図	SB 04 完掘状態及び出土土器.....	93
第 21 図	北稲付遺跡堆積物の珪藻化石分布.....	54	第 60 図	SB 05 完掘状態.....	95
第 22 図	北稲付遺跡の珪藻化石顕微鏡写真.....	55	第 61 図	SB 05 出土土器.....	95
第 23 図	北稲付遺跡堆積物の花粉化石分布.....	57	第 62 図	SB 07 完掘状態.....	97
第 24 図	北稲付遺跡の花粉化石顕微鏡写真.....	58	第 63 図	カマド完掘状態.....	97
第 25 図	千曲市調査 A 地点の出土遺物.....	60	第 64 図	SB 07 出土土器.....	97
第 26 図	土層柱状図.....	62	第 65 図	SB 08 完掘状態.....	98
第 27 図	調査地と試掘坑位置図.....	62	第 66 図	SB 09 完掘状態.....	99
第 28 図	稲付遺跡調査区全体 1.....	63	第 67 図	SB 10 完掘状態.....	101
第 29 図	稲付遺跡調査区全体 2.....	64	第 68 図	カマド完掘状態.....	101
第 30 図	ST 01 完掘.....	65	第 69 図	SB 10 出土木製品・土器.....	101
第 31 図	ST 02 完掘.....	65	第 70 図	SB 11 完掘状態.....	102
第 32 図	ST 03 完掘.....	66	第 71 図	SB 12 完掘状態.....	103
第 33 図	ST 04 完掘.....	66	第 72 図	SB 12 出土土器.....	103
第 34 図	土坑完掘状態及び出土土器.....	67	第 73 図	SB 15 遺物出土分布.....	104
第 35 図	稲付遺跡出土土器及び石製品ほか.....	70	第 74 図	SB 15 出土木製品・土器.....	104
第 36 図	稲付遺跡出土木製品 1 及び骨角製品・歯	71	第 75 図	SB 15 完掘状態.....	105
第 37 図	稲付遺跡出土木製品 2.....	72	第 76 図	カマド完掘状態.....	105
第 38 図	土層柱状図.....	74	第 77 図	SB 15 出土石器・シカ角.....	106
第 39 図	調査地と試掘坑位置図.....	74	第 78 図	ST 01 完掘状態.....	107
			第 79 図	ST 01 出土土器・石器.....	108
			第 80 図	ST 02 完掘状態.....	109

第 81 図	ST 03 完掘状態	109	第125 図	SK 338 の全景	147
第 82 図	ST 04 完掘状態	110	第126 図	SK 349 の全景	147
第 83 図	ST 05 完掘状態	110	第127 図	SK 349 出土の板材	147
第 84 図	ST 06 完掘状態	111	第128 図	SK 526 の全景	147
第 85 図	ST 07 完掘状態	111	第129 図	SK 523・SK 524 の全景	148
第 86 図	ST 07 出土木製品	112	第130 図	SK 532 の全景	148
第 87 図	北区土坑の完掘状態	114	第131 図	SF 04 の全景	148
第 88 図	SK 44 出土柱材	114	第132 図	SF 05・SF 06 の全体	148
第 89 図	南区土坑の完掘状態	114	第133 図	SK 276 の全景	149
第 90 図	検出面出土の土器・金属器・石器	116	第134 図	SK 277・SK 278 の全景	149
第 91 図	土層柱状図	119	第135 図	SK 296 の全景	149
第 92 図	調査地と試掘坑位置図	119	第136 図	SK 427・SK 428・SK 1203 の全景	149
第 93 図	清水地下水籍調査区全体 1	120	第137 図	SK 531 の全景	149
第 94 図	清水地下水籍調査区全体 2	121	第138 図	SK 533 の全景	150
第 95 図	土層柱状図	123	第139 図	SK 533 出土の土器	150
第 96 図	調査区と試掘坑位置図	123	第140 図	SK 266 の全景	150
第 97 図	宮川遺跡調査区全体	124	第141 図	SK 269 の全景	150
第 98 図	土層柱状図	125	第142 図	VIII X-5.10.15, Y-1.6.11 全体	151
第 99 図	調査地と調査区位置図	125	第143 図	SK 443 の全景	152
第100 図	社宮司遺跡調査区全体	127.128	第144 図	SK 214 の全景	152
第101 図	社宮司遺跡グリット枠取り図	129.130	第145 図	SK 214 出土の柱材	152
第102 図	VIII S-2.3.7.8 全体	131	第146 図	SK 707 の全景	152
第103 図	VIII S-11.12.16.17.21.22 全体	132	第147 図	VIII Y-2.3.7.8.12.13 全体	153
第104 図	SD 32 の木製品出土部分	133	第148 図	社宮司遺跡B地点SD 01 出土遺物 1	155
第105 図	SD 32 出土の木製品	134	第149 図	社宮司遺跡B地点SD 01 出土遺物 2	156
第106 図	SD 34 の木製品出土部分	135	第150 図	VIII Y-4.5.9.10.14.15 全体	157
第107 図	SD 34 出土の木製品	135	第151 図	VIII W-19.20.24.25, IX C-5 全体	159
第108 図	VIII S-13.14.18.19.23.24 全体	136	第152 図	VIII X-16.17.21.22, IX D-1.2 全体	160
第109 図	VIII W-4.5.9.10.14.15 全体	138	第153 図	SK 1190 全景及び柱材	161
第110 図	SK 239 木製品出土状態	139	第154 図	SK 569 の全景	163
第111 図	SK 462 遺物出土状態	139	第155 図	SK 627 の全景	163
第112 図	SK 469 柱材出土状態と材	139	第156 図	SK 704 木製品出土状態	163
第113 図	SK 481 木製品出土状態	140	第157 図	SK 702 木製品出土状態	163
第114 図	SK 481 出土の木製品	140	第158 図	SK 709 木製品出土状態	163
第115 図	SD 11 礫出土部分	141	第159 図	SK 744 の全景	163
第116 図	SD 11 出土の土器・木製品	142	第160 図	SK 746 の全景	163
第117 図	VIII X-1.2.6.7.11.12 全体	143	第161 図	SK 746 出土の漆紙	162
第118 図	SK 468 の全景	144	第162 図	SK 750 の全景	163
第119 図	SK 509 の全景	144	第163 図	SD 80 木製品出土部分	164
第120 図	SK 607 の全景	144	第164 図	SD 80 出土の木製品	165
第121 図	SK 623 の全景	144	第165 図	VIII X-18.19.23.24, IX D-3.4 全体	166
第122 図	SK 827 の全景	144			
第123 図	SD 46 出土の石器	145	第166 図	SK 567 の全景	167
第124 図	VIII X-3.4.8.9.13.14 全体	146	第167 図	SK 254 の全景	167

第168 図	SK 394 の全景	167	第210 図	IX D - 16.17.21.22 全体	196
第169 図	SK 242 の全景	168	第211 図	SK 722 の全景	197
第170 図	SK 243 の全景	168	第212 図	SK 725 の全景	197
第171 図	SK 244 木製品出土状態と礎板材	168	第213 図	SK 894 の全景	197
第172 図	SK 321 木製品出土状態	168	第214 図	SK 1152 の全景及び出土の土器	197
第173 図	SK 422 木製品出土状態と柱材	168	第215 図	SK 727・SK728 の全景	198
第174 図	SK 742 の全景	169	第216 図	SK 766 の全景	198
第175 図	SK 743 木製品出土状態と柱材	169	第217 図	SK 769 の全景	198
第176 図	SK 257 木製品出土状態と柱材	170	第218 図	SK 776・SK777 の全景	199
第177 図	SK 281 木製品出土状態と柱材	170	第219 図	SK 787 の全景	199
第178 図	SK 284 木製品出土状態と礎板材	170	第220 図	SK 799 の全景	199
第179 図	SK 289 木製品出土状態と土器・礎板材	170	第221 図	SK 802 の全景及び出土の土器	199
第180 図	SD 25 遺物出土状態	172	第222 図	SK 832 の全景	199
第181 図	SD 25 堆積土層	172	第223 図	SK 868・SK869 の全景	199
第182 図	SD 25 出土の土器・石器・金属器	174	第224 図	SK 1051 の全景	199
第183 図	SD 25 出土の木製品	175	第225 図	SK 828 の遺物出土状態	200
第184 図	SD 27 遺物出土状態	177	第226 図	SK 828 出土の土器	200
第185 図	SD 27 出土の土器・木製品	177	第227 図	SK 829 の遺物出土状態	200
第186 図	SD 63 堆積土層	178	第228 図	SK 840 の遺物出土状態 1	201
第187 図	SD 59 出土の木製品	179	第229 図	SK 840 の遺物出土状態 2	201
第188 図	X 区出土の土器	179	第230 図	SK 840 の遺物出土状態 3	202
第189 図	VIII - 20.25, Y - 16.21, IXD - 5, E - 1 全体	180	第231 図	SK 840 出土の土器 1	202
第190 図	SK 232 の全景	181	第232 図	SK 840 出土の土器 2	203
第191 図	SK 207 礎板材出土状態と礎板	181	第233 図	SK 491 の全景	204
第192 図	SK 210 礎板材出土状態と礎板	181	第234 図	SK 550 の全景	204
第193 図	SK 17 木製品出土状態と礎板?	182	第235 図	SK 641・662 の全景	204
第194 図	SK 28 の完掘	182	第236 図	SK 861 の全景	204
第195 図	SK 30 の完掘	182	第237 図	SK 984 の全景	204
第196 図	VIII Y - 17.18.23, IX E - 2.3 全体	183	第238 図	SK 1005 の全景	205
第197 図	VIII Y - 19.20.24.25, IX E - 4.5 全体	184	第239 図	SK 1010 の全景	205
第198 図	IX D - 6.7.8.11.12.13 全体	186	第240 図	SK 1154 の全景	205
第199 図	SK 830 の全景と出土の土器	187	第241 図	SK 1158 の全景	205
第200 図	SK 1007 の全景と出土の土器	187	第242 図	SK 1164 の全景	205
第201 図	SK 698 の全景	188	第243 図	SK 1166 の全景	205
第202 図	SK 718 の全景	188	第244 図	SK 820 の遺物出土状態	206
第203 図	SK 720 の全景	188	第245 図	SK 820 出土の土器・金属製品	206
第204 図	SK 831 の全景	188	第246 図	SD 52 出土の土器・木製品	207
第205 図	SD 84 遺物出土状態	190	第247 図	SD 76 出土の土器	208
第206 図	SD 84 出土の土器・木製品・石器	191	第248 図	SD 56 の木製品出土状態部分	209
第207 図	IX D - 9.10.14.15, E-6.7 全体	193	第249 図	SD 56 出土の土器・木製品	210
第208 図	IX E - 7.8.12.13 全体	194	第250 図	D - 17・22 区出土の土器・土製品	210
第209 図	D 区出土の土器	195	第251 図	IX D - 18.23 全体	211
			第252 図	SK 736 の全景	212
			第253 図	SK 774 の全景	212

第254 図	SK 780 の全景	212	第298 図	SD 77 出土の土器	227
第255 図	SK 851 の全景	212	第299 図	D - 19・24 区出土の土器	227
第256 図	SK 879 の全景	212	第300 図	IX I - 2.3.7.8 全体	228
第257 図	SK 880 の全景及び出土の土器	212	第301 図	SK 367 の全景	229
第258 図	SK 883 の全景	213	第302 図	SK 381 の全景	229
第259 図	SK 898 の全景	213	第303 図	SK 486 の全景と出土の土器	229
第260 図	SK 933 の全景	213	第304 図	SK 660・SK661 の全景	229
第261 図	SK 1040 の全景及び柱材	213	第305 図	SK 961 礫出土状態と完掘	229
第262 図	SK 696 の遺物出土状態	214	第306 図	SK 581 土器出土状態と半截	230
第263 図	SK 696 出土の土器	214	第307 図	SK 581 出土の土器	230
第264 図	SK 591 の全景	215	第308 図	SK 664 の全景	230
第265 図	SK 913 の全景	215	第309 図	SK 664 出土の土器	230
第266 図	SK 593 の全景	215	第310 図	SK 670 の全景と出土の土器	231
第267 図	SK 584 の全景	215	第311 図	SK 1147 の完掘状態	231
第268 図	SK 590 の全景	216	第312 図	SK 1147 出土の土器	231
第269 図	SK 590 出土の木製品	216	第313 図	SK 1169 礫出土状態と完掘	231
第270 図	SK 870 の遺物出土状態	217	第314 図	SK 1170 礫出土状態と完掘	231
第271 図	SK 870 出土の土器	217	第315 図	SK 1180 の全景	231
第272 図	SD 58 の土層観察部分	218	第316 図	SK 1193 礫出土状態と完掘	231
第273 図	SD 58 出土の土器	218	第317 図	SK 350 の全景	232
第274 図	SD 75 出土の土器	219	第318 図	SK 380 礫出土状態と完掘	232
第275 図	SD 78 出土の土器	219	第319 図	SK 398 礫出土状態と完掘	232
第276 図	D - 18・23 区出土の土器・木製品	219	第320 図	SK 404 の全景	232
第277 図	IX D - 19.24 全体	220	第321 図	SK 411・SK 412 の完掘状態	232
第278 図	SK 692 の全景	221	第322 図	SK 541 の全景	233
第279 図	SK 910 の全景	221	第323 図	SK 580 の全景と出土の土器	233
第280 図	SK 971・SK972 の全景	222	第324 図	SK 666 の全景	233
第281 図	SK 1045 の全景	222	第325 図	SK 678 の全景	233
第282 図	SK 1045 出土の土器	222	第326 図	SK 659 の全景と出土の土器	234
第283 図	SK 973 の全景及び出土の土器	222	第327 図	SK 955・SK 368 の全景	234
第284 図	SK 694 の全景	223	第328 図	SK 959 礫出土状態	234
第285 図	SK 976 の全景	223	第329 図	SK 960 木製品出土状態と完掘	234
第286 図	SK 1031 の全景	223	第330 図	SK 965・SK 674 の全景	234
第287 図	SK 978 の全景	224	第331 図	SK 1181～SK 1183 遺物出土状態	235
第288 図	SK 980 の全景及び遺物出土状態	223	第332 図	SK 1181・SK 1183 出土の土器	235
第289 図	SK 980 出土の石器	223	第333 図	SK 1182 遺物出土状態	236
第290 図	SK 1046 の全景及び出土の土器	224	第334 図	SK 1182 出土の土器	236
第291 図	SK 839 の全景	224	第335 図	SD 40 完掘状態	237
第292 図	SK 839 出土の土器	224	第336 図	SD 49 出土の土器	237
第293 図	SK 912 遺物出土状態	225	第337 図	IX I - 2・3 区検出面出土の土器	237
第294 図	SK 912 出土の土器	225	第338 図	IX I - 4.5.9.10 全体	238
第295 図	SD 61 の土層観察部分	226	第339 図	SK 419 の全景	239
第296 図	SD 61 出土の土器	226	第340 図	SK 419 出土の土器	239
第297 図	SD 77 の土層観察部分	227	第341 図	SK 420 の全景	239

第342 図	SK 420 出土土器	239	第384 図	SK 112 出土の土器	253
第343 図	SK 455 の全景	239	第385 図	SK 113 の全景	253
第344 図	SK 474 の全景	239	第386 図	SK 121 の全景	253
第345 図	SK 1016 の全景	239	第387 図	SK 37 の全景と出土の土器	254
第346 図	SK 454 の全景	240	第388 図	SK 39 の全景	254
第347 図	SK 454 出土の土器・木製品	240	第389 図	SK 39 出土の土器	254
第348 図	SK 1024 の全景	240	第390 図	SK 44 木製品出土状態と柱材	254
第349 図	SK 1140 の全景	240	第391 図	SK 51 の全景と出土の石器	254
第350 図	SK 1141 の全景	240	第392 図	SK 54 の全景と SK 58・SK 459 の全景	254
第351 図	SK 458 の全景	241	第393 図	SK 58 出土の土器	254
第352 図	SK 458 出土の土器・土製品	241	第394 図	SK 117 木製品出土状態と完掘	254
第353 図	SK 1090 の全景と出土の土器	241	第395 図	1 号列石検出状態	256
第354 図	SK 03 の全景	241	第396 図	磔 1 の半截状態	257
第355 図	SK 03 出土の土器	241	第397 図	磔 3 と磔 4 の半截状態	257
第356 図	SD 41 出土の土器	242	第398 図	磔 5 の半截状態	257
第357 図	IXD-20.25, E-16.21, I-5, J-1 全体	243	第399 図	I-8・9・14 区検出面出土の土器	257
第358 図	IX E-17.18.22.23, J-2.3 全体	244	第400 図	SB 01 床面完掘の状態	259
第359 図	SK 344・SK 345・1 号集石の全景	245	第401 図	SB 01 遺物出土の状態	260
第360 図	SK 344・SK 345 出土の土器	245	第402 図	Pit2 上・中層土器出土状態	260
第361 図	SK 05 の全景	246	第403 図	Pit2 下層土器出土状態	260
第362 図	SK 04 の全景	246	第404 図	Pit2 磔出土状態	260
第363 図	SK 04 出土の木製品	246	第405 図	SB 01 掘り方完掘の状態	261
第364 図	SK 02 の全景	246	第406 図	SB 01 出土の土器	264
第365 図	SD 64 出土の土器	247	第407 図	SB 01 出土の土器・石器・金属器	265
第366 図	IX D-20・25 ほか出土の土器・金属製品	248	第408 図	SB 02 床面完掘の状態	268
第367 図	IX I-8.9.13.14.18.19.23.24 全体	249	第409 図	壁柱穴断面及び土層	268
第368 図	SK 950 の全景	250	第410 図	Pit7 土層及び半截状態	269
第369 図	SK 136 の全景	250	第411 図	Pit10 土層及び完掘状態	269
第370 図	SK 144 の全景	250	第412 図	Pit13 土層及び半截状態	269
第371 図	SK 352 の全景	250	第413 図	Pit14 土層及び完掘状態	269
第372 図	SK 353 の全景	250	第414 図	床面柱穴断面及び土層	269
第373 図	SK 185～SK 187 の全景	251	第415 図	SB02 遺物出土の状態	271
第374 図	SK 167 の全景	251	第416 図	Pit1 磔出土状態	272
第375 図	SK 176 の全景	251	第417 図	Pit1 1～3 層土器出土状態	272
第376 図	SK 181 の全景	251	第418 図	Pit1 4 層土器出土状態	272
第377 図	SK 181 出土の土器	251	第419 図	Pit12 磔出土状態	273
第378 図	SK 191 の全景	252	第420 図	Pit12 1・2 層土器出土状態	273
第379 図	SK 472 の全景	252	第421 図	Pit12 3 層土器出土状態	273
第380 図	SK 473 の全景	252	第422 図	Pit15 遺物出土状態	274
第381 図	SF 02 の全景	252	第423 図	SB 02 掘り方完掘の状態	274
第382 図	SK 75 の全景	253	第424 図	SB 02 出土の土器・金属器・石器 1	277
第383 図	SK 112 の全景	253	第425 図	SB 02 出土の土器・金属器・石器 2	279
			第426 図	SB 02 出土の土器・金属器・石器 3	281

第427 図	SB 03 床面完掘の状態	288	第460 図	No4 砥石出土状態	316
第428 図	SB 03 遺物出土の状態	288	第461 図	Pit2 遺物出土状態	317
第429 図	Pit1 上層土器出土状態	289	第462 図	Pit2 礫出土状態	317
第430 図	中層土器出土状態	289	第463 図	SB 12 出土の土器 1	319
第431 図	下層土器出土状態	289	第464 図	SB 12 出土の土器・石器ほか 2	321
第432 図	Pit2 完掘及び土層	288	第465 図	SB 14 カマド埋没土層	323
第433 図	Pit3 遺物出土状態	288	第466 図	SB 14 床面完掘の状態	323
第434 図	SB 03 出土の土器	291	第467 図	SB 14 床面木樋等の出土状態	324
第435 図	SB 04 遺物出土の状態	293	第468 図	SB 14 カマド内遺物出土の状態	326
第436 図	SB 04 出土の土器	294	第469 図	SB 14 遺物出土の状態	326
第437 図	SB 05 床面完掘の状態	295	第470 図	SB 14 出土の土器・木製品 1	330
第438 図	SB 05 出土の土器	296	第471 図	SB 14 出土の木製品 2	331
第439 図	SB 06 床面完掘の状態	297	第472 図	SB 14 出土の木製品 3	332
第440 図	SB 06 出土の土器	297	第473 図	SB 14 木樋出土の状態	333
第441 図	SB 07 床面遺物出土の状態	299	第474 図	SB 14 出土の木製品 4	334
第442 図	SB 07 遺物出土の状態	300	第475 図	SB 14 出土の木製品 5	335
第443 図	SB 07 床下完掘の状態	300	第476 図	SB 14 出土の木製品 6	336
第444 図	SB 07 出土の土器・石器	302	第477 図	SB 15 床面完掘の状態	337
第445 図	SB 08 床面完掘の状態	304	第478 図	SB 15 遺物出土の状態	338
第446 図	SB 09 床面完掘の状態	306	第479 図	SB 15 出土の土器・石器・木器 1	340
第447 図	SB 09 遺物出土の状態	306	第480 図	SB 15 出土の土器ほか 2	342
第448 図	Pit1 上・中層遺物出土状態	307	第481 図	SB 15 出土の土器ほか 3	343
第449 図	Pit1 下層遺物出土状態	307	第482 図	SB 16 完掘の状態	344
第450 図	Pit1 礫出土状態	307	第483 図	SB 16 出土の土器	346
第451 図	SB 09 出土の土器 1	309	第484 図	SB 17 完掘の状態	347
第452 図	SB 09 出土の土器 2	310	第485 図	SB 17 柱穴内柱・礎板出土の状態	348
第453 図	SB 10 床面遺物出土の状態	311	第486 図	SB 17 出土の土器	350
第454 図	SB 10 出土の土器・石器	312	第487 図	SB 17 柱穴出土の礎板 1	351
第455 図	SB 11 床面遺物出土の状態	313	第488 図	SB 17 柱穴出土の礎板 2	352
第456 図	SB 11 出土の土器	314	第489 図	SB 17 柱穴出土の礎板 3	353
第457 図	SB 12 床面遺物出土の状態	315	第490 図	SB 17 柱穴出土の礎板 4	354
第458 図	SB 12 床下完掘の状態	316	第491 図	SB 17 柱穴出土の礎板 5	355
第459 図	Pit1 遺物出土状態	316	第492 図	SB 17 柱穴出土の礎板 6	356

挿 表 目 次

第 1 表	埋蔵文化財事業受託費の概要	5	第 7 表	出土土器組成	49
第 2 表	遺跡地名表	17	第 8 表	出土土器属性	49
第 3 表	遺構内出土土器組成	43	第 9 表	出土木製品組成	49
第 4 表	SD 03 出土土器属性	43	第 10 表	SD 01 出土木製品属性	50
第 5 表	遺構内出土木製品組成	43	第 11 表	北稲付遺跡堆積物の珪藻化石産出 その 1	53
第 6 表	SD 03～SD 05 出土木製品属性	43			

第 12 表	北稲付遺跡堆積物の珪藻化石産出 その 2	54	第 55 表	SB 01 出土刻書土器属性.....	263
第 13 表	土坑の属性	67	第 56 表	SB 02 柱穴属性.....	275
第 14 表	土器組成.....	69	第 57 表	SB 02 Pit1 出土土器組成.....	282
第 15 表	土器属性.....	69	第 58 表	SB 02 Pit12 出土土器組成	282
第 16 表	木製品組成.....	69	第 59 表	SB 02 Pit15 出土土器組成	282
第 17 表	木製品属性.....	69	第 60 表	SB 02 出土土器属性 1	283
第 18 表	出土土器組成.....	79	第 61 表	SB 02 出土土器属性 2	284
第 19 表	出土木製品組成.....	79	第 62 表	SB 02 出土木製品属性.....	284
第 20 表	出土木製品属性.....	79	第 63 表	SB 02 出土土器組成 1	285
第 21 表	出土土器組成.....	82	第 64 表	SB 02 出土土器組成 2	286
第 22 表	出土木製品属性.....	82	第 65 表	SB 03 出土土器組成.....	292
第 23 表	出土土器組成.....	83	第 66 表	SB 03 柱穴属性.....	292
第 24 表	大道遺跡出土木製品属性.....	117	第 67 表	SB 03 出土土器属性.....	292
第 25 表	大道遺跡出土土器組成.....	117	第 68 表	SB 03 出土墨書土器属性.....	292
第 26 表	宮川遺跡出土土器組成.....	124	第 69 表	SB 04 出土土器組成.....	294
第 27 表	SD 32 出土土器組成.....	134	第 70 表	SB 04 出土土器属性.....	294
第 28 表	SD 32 出土木製品組成.....	134	第 71 表	SB 05 出土土器組成.....	296
第 29 表	SD 34 出土土器組成.....	135	第 72 表	SB 06 出土土器組成.....	297
第 30 表	SD 34 出土木製品組成.....	135	第 73 表	SB 07 柱穴属性.....	301
第 31 表	SD 11 出土土器組成.....	142	第 74 表	SB 07 出土土器組成.....	303
第 32 表	SD 11 出土木製品組成.....	142	第 75 表	SB 08 柱穴属性.....	304
第 33 表	SD 73 出土土器組成.....	163	第 76 表	SB 08 出土土器組成.....	305
第 34 表	SD 80 出土土器組成.....	164	第 77 表	SB 09 出土土器属性.....	307
第 35 表	SD 80 出土木製品組成.....	164	第 78 表	SB 09 出土土器組成.....	308
第 36 表	SD 25 墨書土器属性.....	173	第 79 表	SB 10 出土土器属性.....	312
第 37 表	SD 25 出土土器組成.....	173	第 80 表	SB 10 出土土器組成.....	312
第 38 表	SD 25 出土木製品属性.....	176	第 81 表	SB 11 出土土器属性.....	314
第 39 表	SD 25 出土木製品組成.....	176	第 82 表	SB 11 出土土器組成.....	314
第 40 表	SD 27 出土土器組成.....	177	第 83 表	SB 12 柱穴属性.....	317
第 41 表	SD 63 出土土器組成.....	178	第 84 表	SB 12 出土土器属性.....	318
第 42 表	SD 84 出土土器組成.....	192	第 85 表	SB 12 出土墨書土器属性.....	320
第 43 表	SD 84 出土木製品属性.....	192	第 86 表	SB 12 出土土器組成.....	320
第 44 表	SD 52 出土土器組成.....	207	第 87 表	SB 14 柱穴属性.....	324
第 45 表	SD 76 出土土器組成.....	209	第 88 表	SB 14 出土土器属性.....	327
第 46 表	SD 56 出土土器組成.....	210	第 89 表	SB 14 出土木製品属性.....	328
第 47 表	SD 56 出土木製品組成.....	210	第 90 表	SB 14 出土土器組成.....	328
第 48 表	SD 58 出土土器組成.....	218	第 91 表	SB 15 出土土器属性.....	338
第 49 表	SD 61 出土土器組成.....	226	第 92 表	SB 15 出土土器組成.....	338
第 50 表	SD 77 出土土器組成.....	227	第 93 表	SB 16 柱穴属性.....	345
第 51 表	SK 1182 出土土器属性.....	236	第 94 表	SB 16 出土土器組成.....	345
第 52 表	SD 64 出土土器属性.....	247	第 95 表	SB 17 柱穴属性.....	348
第 53 表	SB 01 出土土器組成.....	261	第 96 表	SB 17 出土土器属性.....	349
第 54 表	SB 01 出土土器属性.....	263	第 97 表	SB 17 出土土器組成.....	349
			第 98 表	SB 17 出土木製品属性.....	349

第 1 章

事業の概要



面影や姨ひとり泣く月の友

芭蕉

第1章 事業の概要

第1節 道路建設の概要

一般国道18号線（篠ノ井ー上田間）の改築事業

一般国道18号線は、群馬県高崎市から新潟県上越市に至る総延長220kmの主要幹線道路である。全長の約半分、114kmの区間を経過地である長野県が占める。その内、約50kmが長野ー上田間で、長野県広域道路基本計画の「交流促進型」に位置付く地域にあたる。18号線は道幅27mの広規格道路ではあるが、昭和40年代以降、この区間の交通量増大は目覚しく、慢性的な交通渋滞を引き起こしている。国は、交通渋滞の緩和と地域発展の促進を図る目的で、上田ー篠ノ井バイパス（全長27.3km）を計画し、昭和61年に更埴拡幅事業を、平成3年に上田・坂城バイパスを、平成9年度に坂城・更埴バイパス（全

坂城・更埴バイパスの概要

一般国道18号は、群馬県高崎市から長野県を経由し、新潟県上越市に至る延長220kmの主要幹線道路です。長野県区間(L=114km)の坂城・更埴バイパスを含む工業都市上田市～県都長野市間約50kmについては、経済および文化活動など、地域間交流の盛んな地域であることから長野県広域道路基本計画の中で「交流促進型」に位置づけられ、年々交通量が増加しています。

千曲市内の坂城・更埴バイパス周辺は、国道403号や(主)長野ー上田線バイパスなどの道路整備や工業団地、圃場整備事業などが先行して実施されており、周辺道路事業と連携しながら坂城・更埴バイパスL=3.0kmを整備することにより、渋滞緩和と地域の活性化を支援することが出来ます。



●諸元	
路線名	一般国道18号
区間	自 千曲市八幡山 至 千曲市稲荷山
計画延長	L=3.0km 標準幅員27m
都市計画決定	昭和60年12月23日 第3種第1級
計画速度	80km/h

国土交通省 長野国道事務所

工法説明



計画路線説明



第1図 国道18号坂城更埴バイパス線の計画線概要

長 19.2km の内、3.0km) の事業化を図った。特に千曲市内（2004 年 4 月、旧更埴市から合併改称）の杭瀬下交差点付近では、交通量が一日 2 万 5 千から 2 万 9 千台（混雑度：1.54 ～ 2.41）を数えるに至っており、坂城・更埴バイパス線の早期実現が望まれている。

今回の事業計画は、全長 3 km の坂城・更埴バイパス線の新設（第 1 図右上）であり、千曲市稲荷山地区の佐野川橋梁から八幡地区宮川橋梁までの全長 1500m を第 2 工区前半部分（左下写真）として 2005 年 12 月までに供用開始し、宮川橋梁から県道 77 号線（篠ノ井―上田線）までを第 2 工区後半部分とし、2009 年 4 月に供用予定とするものである。



佐野川橋梁の工事（平成 16 年）



治田小学校児童の絵（境なしボックス内）

第 2 節 文化財保護の計画

1. 埋蔵文化財保護協議

坂城・更埴バイパス線建設に係る工事対象用地内の埋蔵文化財包蔵地の保護措置とその協議を平成 11 年 9 月と 11 月、平成 12 年 1 月に千曲市教育委員会（旧更埴市）、同市建設部建設課、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、及び建設省（平成 13 年 1 月、国土交通省と改称）関東地方建設局長野国道工事事務所の間で実施した。その内容は、国道改築の公共的見地から埋蔵文化財の記録保存を前提とした上で、道路の工事方法と工程、路線内に周知される八幡遺跡群全体にわたる埋蔵文化財調査の方法と受託者の選定であった。

協議内容

工事は、2 本の橋梁（佐野川と宮川）と 1 箇所のカルバートボックス（境なし地籍）と水路（中道遺跡）を除き、大部分が簡単な盛土工法である。上信越自動車道の 4 車線化工事に伴う五里ヶ峰トンネル掘削土の残土利用が建設費用面から支持されており、12 年度後半から実施の予定があった。ことに県道姨捨停車場線から国道 403 号線については、設計協議が妥結し、用地買収も 11 年度中には終了する見込みであったため、12 年度より迅速な発掘調査が必要となり、調査の早期終了が望まれた。建設工事の着手は 14 年度以降が予定されていた。

八幡遺跡群は、古代更級郡衙との関連が指摘される社宮司遺跡や稲付遺跡を始め、青木廃寺跡や外く祢遺跡、中道遺跡など、極めて歴史的重要な度の高い遺跡があり、調査は難航するものと考えられた。考古学

的知見の示されていない遺跡も数多く存在する可能性があり、八幡条里的遺跡の想定も加味すれば、記録保存対象面積は膨大で、千曲市教育委員会での実施は不可能である。長野県埋蔵文化財センター等の大規模な調査体制が必要であると結論づけられた。

長野県埋蔵文化財センターの平成12年度事業計画は、ほぼ確定しており、大規模な調査体制を組織することはすでに難しい状況にあった。しかしながら遺跡調査の重要性と広域性、なにより迅速性を考えれば、長野県埋蔵文化財センターへの業務委託が望ましく、妥当であると判断し、長野県としても可能な限りの協力をするこゝで合意した。

1月24日、「国道18号（坂城・更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」を、長野県埋蔵文化財センターが、建設省長野国道工事事務所より委託を受けて実施することで妥結。センターは、周辺遺跡の跡査、発掘計画書を作成し、協議を進める。

2. 埋蔵文化財発掘許可と契約

4月3日、関東地方建設局より長野県教育委員会に、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木事業等について」の依頼。

4月20日、長野県教育委員会より12教文第18－39号で、関東建設局に対し、工事前の発掘調査につき、長野県埋蔵文化財センターへ委託する旨、通知。

5月30日、埋蔵文化財保護協議、用地取得等事業進捗状況と工事計画、発掘調査計画の最終調整。

・建設省長野国道工事事務所、更埴市建設部建設課・教育委員会、長野県教育委員会、県埋蔵文化財センター

・用地取得は遅れており、取得済みの地籍より発掘調査を開始。周知の遺跡周辺を早急に試掘調査し、本調査等計画・協議する。発掘調査は平成12年から16年までの5カ年計画とし、年度ごとに契約する。

6月1日、「国道18号（坂城・更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」を建設省（現国土交通省）関東地方建設局長高田邦彦を委託者甲とし、財団法人長野県文化振興事業団理事長吉村午良（当時長野県知事）を受託者乙として受委託契約を締結する。

6月1日、県埋蔵文化財センターより12長埋第1－8号ほかで、県教育委員会あてに文化財保護法第57条にもとづく発掘届を提出。

6月21日、長野県教育委員会より12教文第4－9号ほかで、県教育長から県埋蔵文化財センターに発掘調査の許可。

	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
調査契約遺跡	八幡遺跡群 (北稻付遺跡ほか)	八幡遺跡群 (社宮司遺跡ほか)	東中曽根遺跡ほか 八幡遺跡群・残件	峯謡坂遺跡ほか	峯謡坂遺跡ほか	東條遺跡
発掘面積	6.000	10.595	16.317	3.960	3.450	1.180
試掘面積	50.000	20.000	22.561			(契約面積)
整理契約遺跡				八幡遺跡群 (社宮司遺跡ほか)	八幡遺跡群 (社宮司遺跡ほか)	報告書刊行
受託費	72,176,129	125,537,057	145,957,710	93,030,052	81,289,212	44,795,773 (当初額)

第1表 埋蔵文化財事業受託費の概要

第1章 事業の概要



八幡遺跡群の調査前全景



社宮司遺跡周辺の調査前全景



千曲市八幡地区航空写真（米軍撮影）

第2章

発掘調査の準備



姨捨や月をむかしのかッミなる

白
雄

第2章 発掘調査の準備

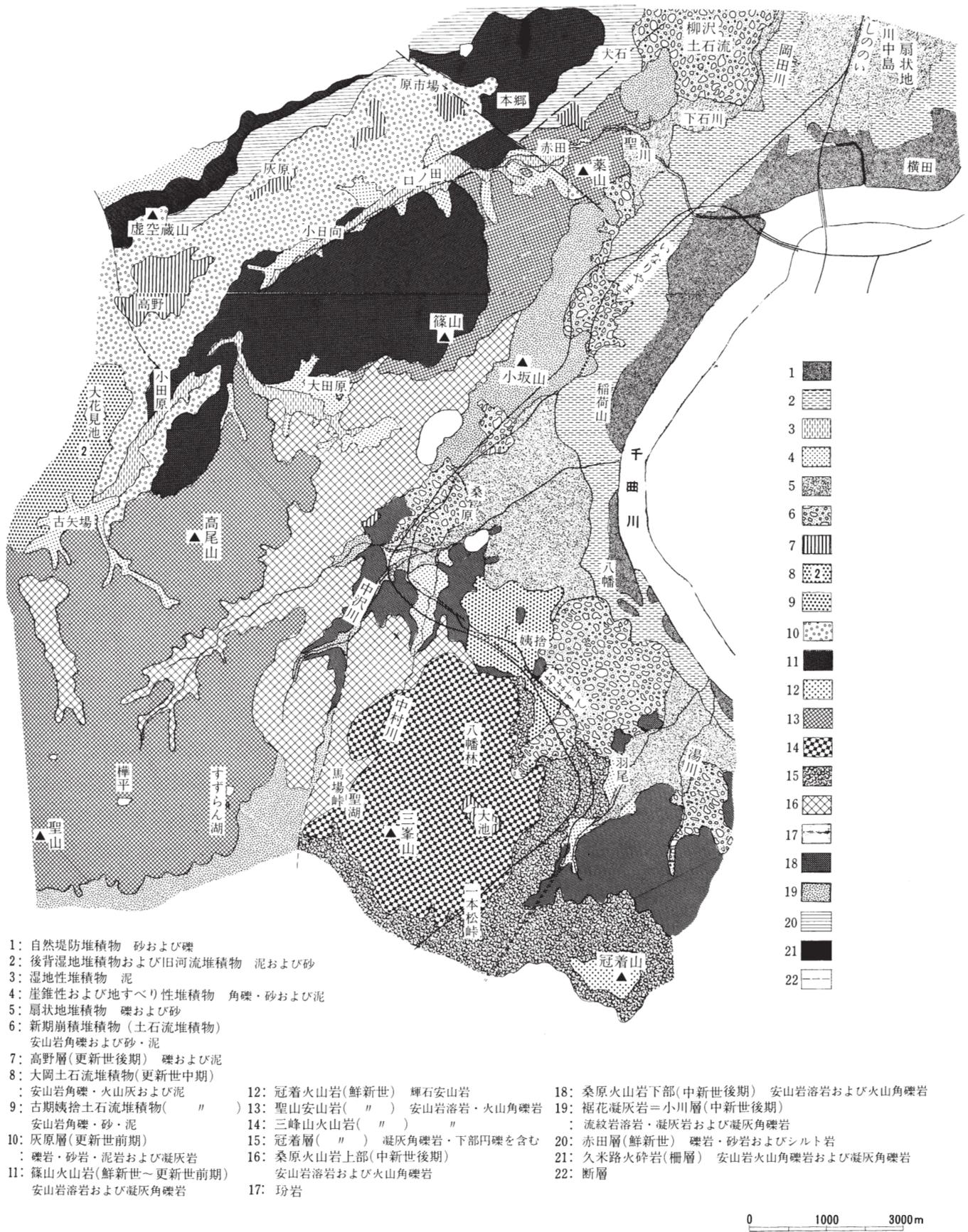
第1節 八幡遺跡群周辺の環境

1. 地形と地質

長野盆地は、日本列島のほぼ中央部にあり、大河として名高い信濃川（長野県内は千曲川）の中流部にあたる。盆地は中期更新世に形成された構造盆地で、西縁と東縁に断層群がある。西縁断層群は、西上がり東落ちの性質で、階段状に盆地側が沈み、結果、善光寺地震など内陸部直下型の地震が多発している。沈んだ盆地部には千曲川や犀川など河川による多量の土砂が堆積し、広大な千曲川氾濫原に、自然堤防や後背湿地が発達している。ボーリング調査によると、沖積層は86m、第四系の堆積物は400m前後と推定される。この地域の基盤岩類は、北部フォッサ・マグナに分布、千曲川西部の西側山地は、後期中新統の裾花凝灰岩・鮮新統の桑原火山岩・冠着凝灰角礫岩・聖山火山岩・三峰山火山岩・鮮新統末の篠山火山岩からなる。その山麓には、中期更新統の古期土石流堆積物、完新統の新时期土石流堆積物、扇状地堆積物などが分布する。信濃川は源流から河口まで、総延長366.8kmあり、長野県川上村の源流から、千曲市域までは、約131kmある。千曲市はほぼ中央に千曲川を挟んで、平野と山地が両翼に広がる「羽を伸ばしたチョウ」の形を呈し、標高600m未満の土地が約6割を占める。長野県全体でのそれが1割程度であることと比較して、極めて低位の沖積地に位置するといえる。遺跡のある八幡地区は、千曲川の流れが、北西方向から大きく北東方向へ屈曲する場所、河川勾配が3.77/1000から1.09/1000へと転換し、急峻な礫床から中流性の砂泥床に大きく変化する場所にあたる。地形区分上は、標高360mから390m程度の緩やかな傾斜地である山麓部と、標高400mから600m前後、さらには600mを越える急峻な山地部が該当する。



第2図 八幡遺跡群の位置（鳥瞰図）



- | | | |
|----------------------------|----------------------------|----------------------------------|
| 1: 自然堤防堆積物 砂および礫 | 12: 冠着火山岩(鮮新世) 輝石安山岩 | 18: 桑原火山岩下部(中新世後期) 安山岩溶岩および火山角礫岩 |
| 2: 後背湿地堆積物および旧河流堆積物 泥および砂 | 13: 聖山安山岩(") 安山岩溶岩・火山角礫岩 | 19: 裾花凝灰岩=小川層(中新世後期) |
| 3: 湿地性堆積物 泥 | 14: 三峰山火山岩(") | 20: 流紋岩溶岩・凝灰岩および凝灰角礫岩 |
| 4: 崖錐性および地すべり性堆積物 角礫・砂および泥 | 15: 冠着層(") 凝灰角礫岩・下部円礫を含む | 21: 赤田層(鮮新世) 礫岩・砂岩およびシルト岩 |
| 5: 扇状地堆積物 礫および砂 | 16: 桑原火山岩上部(中新世後期) | 22: 久米路火砕岩(柵層) 安山岩火山角礫岩および凝灰角礫岩 |
| 6: 新期崩積堆積物(土石流堆積物) | 17: 玢岩 | |
| 7: 高野層(更新世後期) 礫および泥 | | |
| 8: 大岡土石流堆積物(更新世中期) | | |
| 9: 古期姨捨土石流堆積物(") | | |
| 10: 灰原層(更新世前期) | | |
| 11: 篠山火山岩(鮮新世~更新世前期) | | |
| | | |

第3図 高尾山山系(川西地区)の地質略図(文献2より転載)

山地部は、冠着山（1152.2m）、三峰山（1131.3m）、聖山（1447.0m）と続く山列から北方へ高尾山（1166m）、篠山（907.7m）と1000m級の山並みが連なり、急な東側斜面を形成している。冠着山西方の鳥居平から一本松峠にかけては、第三系の冠着凝灰角礫岩で、安山岩角礫や石英安山岩質の凝灰岩を膠結し、粒径は5～30cmを中心に100cm近いものまでが含まれる。三峰山周辺は、黒色の輝石安山岩及び凝灰角礫岩からなる三峰火山岩で、聖山を中心として高尾山山塊、篠山の南東斜面から鳥坂峠・薬山にかけては聖山



佐野川扇状地遠景

火山岩がある。聖山火山岩は、下部に黒色緻密な玄武岩質安山岩、上部は板状節理の発達した複輝石安山岩が目立っている。火山岩の下位には桑原火山岩や裾花凝灰岩層を不整合に覆い、高尾山では約300mの堆積厚がある。聖山山塊の最下部付近に分布する溶岩は、カリウム-アルゴン年代で540万±30万年を得ており、鮮新世前期の活動が推定される。篠山や高尾山の南東山麓、聖高原北斜面の佐野川・中沢川流域などに分布する桑原火山岩は、緑黒色緻密なガラス質輝石安山岩で、八幡の梵天山鉱床は、ろう石鉱床が桑原火山岩中に胚胎したものである。また八幡の郡・大雲寺裏山（霊浄山塊）の石切り場は、石英角閃石普通輝石ひん岩である。これら岩質によって形成された山地部の斜面は、三峰山山体の崩落による地すべり性の土石流によって、典型的な押し出し地形を形成している。押し出し地形は10°～15°の傾斜を計り、標高550mのJR姨捨駅付近から八幡上町の380m付近までの広がりをもつ。姨捨土石流堆積土は、新第四系に属し、三峰火山岩や桑原火山岩等の不ぞろいの角礫を多く含む基質泥土である。地すべりにより二次的に移動し、姨捨から八幡の斜面地に分布、下方は佐野川扇状地まで接する古期堆積物（炭素年代は、13,550±460年前）と、千曲高原を開析した谷頭から崩壊し、姨捨駅付近から千曲川氾濫原までを覆う新期堆積物（炭素年代は3,250±260年前）がある。後者は不ぞろいの安山岩垂角礫を多量に含む砂泥土で、長楽寺の姨岩は、この土石流で移動した凝灰角礫岩の巨岩である。現在、緩斜面地は溜池灌漑による水田化により、階段状に並んだ大小さまざまな棚田となっており、更級川流域の棚田は「田毎の月」として著名である。

山麓部は、更級川や佐野川などの小川が北東流し、更新世～完新世にかけて形成された崖錐地形や扇状地からなる。佐野川上流の不動滝より下流域、八幡の郡地区・峰地区・姨捨上町地区などには、裾花凝灰岩層が分布している。流紋岩～石英安山岩質の凝灰岩を主体に、火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩・火山角礫岩からなり、一部に砂岩や泥岩、礫岩をはさむ。更級川は大池のくぼ地を源流とし、佐野川は聖山東方のくぼ地、鍋久保を源流とする。八幡遺跡群は、その佐野川によって形成された扇状地上に立地する。佐野川扇状地は、背後の山地から供給された粗粒の堆積物からなり、扇頂部（標高400m）から表面勾配19/1000で傾斜し、千曲川の侵食崖付近まで続く。現在は、扇頂部付近の果樹栽培と扇中央部以下の水田が主な土地利用である。扇状地には湧水があり、柳清水（八幡七頭・七清水のひとつ）、大ふけ、水別、清水などの小字名も残るが、水田利水の大部分は、佐野川から引水している。しかしながら佐野川は酸性鉱毒水（多量の二価・三価鉄イオンを含む）であることから、水田に沈殿池を造るなど鉱毒対策を施す一方、昭和44年以後、千曲川から揚水し、酸性（pH1.8～pH4.6）の緩和を図っている。発掘調査の対象地は、扇状地の扇中央部付近で、北緯36度30分58秒、東経138度5分51秒（中道遺跡）を中心とした地籍に相当する。

2. 気候と植生

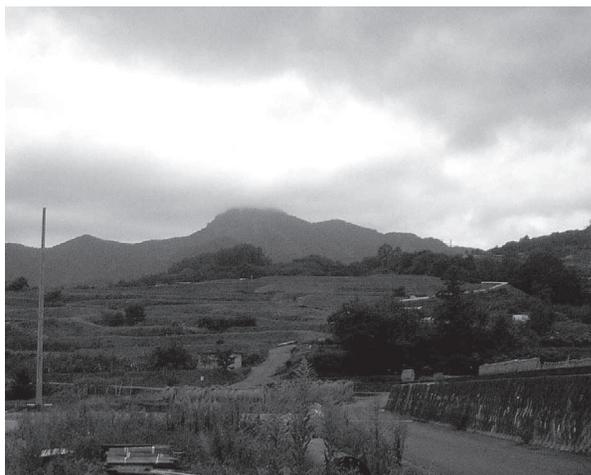
標高が低く、沖積地を中心とした地形で、海の影響を受けない内陸性気候の特質がある。ことに千曲川貫通谷という特殊地形であり、寒暑の差が大きく、少雨（積雪も少ない）、日照時間が短い。気温は、冬が比較的低温、春から夏にかけての気温上昇が著しいのが特徴である。「更埴市消防署資料」（文献1より引用）によると、1月の最低平均気温（1977～1984年間の平均値）は、屋代で -4.5°C 、長野では -5.0°C を測り、8月の最高平均気温では、屋代で 31.2°C 、長野で 30.2°C を測る。最暖月と最寒月の較差は、最高気温で約 28°C 、最低気温で 27°C もある。日平均気温が 0°C 以下になる厳冬期は1月上旬から2月中旬ごろまでで、 25°C 以上に上がる盛夏は7月下旬から8月中旬までである。

また8月平均気温での最高と最低の格差は 9.2°C もあり、田植え時期が遅い地域となっている。年平均降水量は約950mmで、日本列島全体の平均に対し、約半分程度と、極めて少ない。春から夏にかけて少なく、梅雨と台風による降水量が全体の1/2ほどを占めている。また夏には雷の発生件数が高いことも、ひとつの特徴で、桑原左近将監とかみなりの子供の民話、「桑原桑原＝くわばらくわばら」の口承は、あまりに有名である。この他にも天候に係ることわざは数多く、「冠着山に横雲あれば雨」、「冠着曇れば晴れとなり聖が曇れば雨となる」、「冠着山になご（冠雪）三度来れば、雪降る」などは、八幡遺跡群から間近かに見える冠着山を題材にした観天望気である。風は盆地特有の乱流が発生し易く、千曲市域の南高北低の地形は、ことに日中に南風が卓越し、夜間北風が強い特質がある。

内陸性気候の特質は、植生にも影響を与えて、太平洋側の南方型植物と日本海側の植物群が接する地域を生み出している。かつて、冠着山から聖山にかけては、ブナの混在する自然林があったとされ、猿ヶ馬場峠近くには、栗の原生林が現在も残っているようである。『更埴市誌』に記載された市域での植物は、木本植物301種、野草（地衣類等抜く）664種、帰化植物101種がある。主なものでは、ブナ・トチ・アカマツ・ヒノキ・モミ・サワグルミ・クリ・シラカバ・ツノハシバミ・カツラ・コブシ・ホオノキ・シナノキ・オオボダイジュ・サワラなどが挙げられる。

3. 名勝地

八幡遺跡群の南方、姨捨土石流台地上には、西行法師が阿弥陀仏の四十八願にちなんでつけたとされる「四十八枚田」がある。元禄元年（1688年）に松尾芭蕉も来遊した長楽寺は、「信濃三十三番札所」十四番の名刹として知られている。これらは冠着山裾部の棚田と合わせ、平成11年5月10日に国指定名勝地（ $3,1748.46\text{ m}^2$ ）に指定されている。



冠着山に横雲



冠着山の冠雪

第2節 八幡遺跡群周辺の歴史

1. 周辺の遺跡

八幡遺跡群が所在する長野盆地南西部の千曲川左岸域は、旧更級郡に属する。地形的には盆地部の千曲川氾濫原と扇状地、姨捨土石流台地と呼ばれた標高 400m 以上の山麓部、そして標高 600m を超える山地部に分かれている。千曲市教育委員会作成（旧更埴市 1988）の遺跡分布図で、川西地区と呼称された地域（第4図）が直接該当し、その図を参照して、八幡遺跡群周辺の遺跡について概観する。

先土器時代

該期所産と考えられる石器採集地が1箇所確認されている。桑原の大田原峠と呼称される地区にある佐野山遺跡（82）である。ここでは、黒曜石製の縦長状剥片の基部に簡単な調整加工を施したナイフ形石器、片面調整の押し切り状石器などが採集され、先土器時代後半期（約 13000 年ほど前）の遺跡である可能性が示唆されている。

縄文時代

草創期（10000 年ほど前）の遺跡は知られていない。更埴市誌（1994 年）では、池尻遺跡採集の石器を取り上げるが、石器の形態的特徴のみでは、時期判断は難しい。祖先たちの確かなる足跡が認められるのは、縄文時代も早期（8000 年ほど前）に入ってからで、ことに押型文土器（楕円文が主体）を中心とした遺跡が顕著である。八幡遺跡群には該期の資料はなく、地理的に近い治田池遺跡（95）から押型文土器と特殊磨石が採集されている。この遺跡のように、千曲川に近い低い平地部の湿地帯周辺に、人々の足跡を読み取ることもできるが、大部分の遺跡地は標高 700m 代の山地部にある。八幡遺跡群の北西部、標高 1166m の高雄山麓域には、佐野川中上流域で押型文土器と特殊磨石を採取した横手開拓地遺跡（122）、柄木沢川流域で峠遺跡（81）と池尻遺跡（83）がある。峠遺跡は土器破片のみの採取地であるが、池尻遺跡は楕円押型文土器を中心とする確かな生活痕跡を確認できた遺跡である。池尻は前期以降まで、半ば継続的に選地された地籍であり、縄文時代初源期の営地として留意しておくべき定点である。池尻より下った標高 470m の崖水地形上には、押型文土器初頭期の集落遺跡として知られた鳥林遺跡（68）がある。幸い中央自動車道の開設に伴い発掘調査が行われたため、集落の概要が半ば推定できている。小竪穴3軒、土坑6基を調査し、押型文土器（格子目文及び山形文が中心）と石器（石鏃と特殊磨石）が大量に出土している。また八幡遺跡群南西部に位置する三峯山麓域、大池灌漑用溜池周辺でも押型文土器採集地が確認されており、大池南尾根遺跡（45）などが代表例である。大池より下り標高 800m の地点には、古屋敷遺跡（46.47）、八幡林遺跡（48）等、古手の押型文土器、特殊磨石、石鏃などを採集できる地籍がある。早期も押型文土器期を除くと、明瞭な集落痕跡は確認できず、断片的な土器破片資料を持って、考えざるを得ない状況である。押型文土器を採集している佐野山遺跡や古屋敷遺跡から、胎土に多量の繊維を含む絡条体圧痕文の土器、貝殻条痕の土器などが同じく採取されている。

前期（6000 年ほど前）は、気温の上昇（現在の平均気温より約 2 度高い）と、人々の定住化が促進された時期である。該期の初頭に位置付けることのできる植物質繊維混入の縄文施文土器は、池尻遺跡や古屋敷遺跡で採集されており、中葉期は断片的ではあるが、佐野山遺跡で確認されている。半截竹管による沈線文を多用した後半期の土器は、池尻遺跡で数多く確認されている。池尻では時期不明瞭な落とし穴状土坑が検出され、小坂西遺跡（72）では住居跡1軒が発掘されている。このように前期段階の当地域は、早期での遺跡とほぼ同一の遺跡地内に土器破片が採集され、新出する遺跡の発見は今のところない。八幡遺跡群近傍に至っては、該期の資料は皆無である。

中期（5000 年ほど前）は、いわゆる縄文農耕と呼ばれる食料生産の開始された時期である。しかしながら、

八幡遺跡群を始め、川西地区については該期の資料がほとんど発見されてない。更級川右岸の尾根上端部にある坪山遺跡（112）では、ほ場整備事業に伴う発掘調査で、大溝から該期初頭の土器がまとまって出土したが、生活遺構は確認できなかった。佐野川下流域にある八幡遺跡群の真光寺遺跡（85-12）からは、中期後葉と考えられる深鉢形土器の装飾把手破片が採集され、治田池下遺跡からも同時期と考えられる土器破片が出土している。池尻遺跡は標高 770m にあり、小規模の竪穴状遺構が検出され、中期初頭と考えられる土器と打製石斧や磨石の出土がある。前期からの継続的な選地で、中期段階としての先進性はあまり感じられない。

後期（4000 年ほど前）は、気温の冷涼化（現在の平均気温より 1 度低い）が進み、食料生産様式に変化が現れる時期である。中期段階に小竪穴状遺構を確認している池尻遺跡から、後期前半の土器破片資料と仮面形土偶の破片が出土している。大池灌漑用溜池周辺にある大池南遺跡では、後期初頭から中葉期の土器破片がまとまって採取されている。八幡遺跡群の近傍では、標高 400m 台にある石原 A・B 遺跡（120.121）で土器集中区が検出され、後期中葉から後半のまとまった土器破片が採取されている。

晩期（3000 年ほど前）は、いよいよ稲作農耕へと突入していく前段階であり、縄文文化終焉の時期にあたる。川西地区では、桑原の小坂西沖遺跡、長尾根地区の坪山遺跡から晩期後半の土器破片が採取され、池尻遺跡ではこれに東海地方と関係のある条痕文土器も出土している。後期段階同様、確固たる生活痕跡は認められない。

弥生時代

桑原の返町遺跡（71-1）から中期後半（2000 年ほど前）の土器破片が採取されているほか、治田神社境内から、該期と考えられる太型蛤刃石斧がまとまって発見されている。千曲川左岸域の川西地区は、稲作開始期の弥生時代になっても、縄文時代と同様に断片的な遺物採集のみに留まっている。これは、縄文遺跡も同様なことではあるが、当該地域に大規模発掘がまだに及んでいないこと、集落遺跡の営まれるであろう平坦地の大部分が現在も水田耕作されている点によると考えられる。がしかし、今回、ある程度広域に発掘対象となった地区でも、縄文そして弥生時代の生活痕跡がほとんど確認できなかったことは、当地域の発展史を考えていく上に、極めて重要な情報である。弥生時代も後期後半（1800 年ほど前）となると、竪穴式住居跡や土坑で構成される集落遺跡が確認できる。八幡遺跡群近傍では、遺跡群の南端の宮川下流域に宮川遺跡（104）がある。竪穴式住居跡、土壇、井戸跡からなり、後期終末の様相を呈する。宮川以南の姨捨土石流台地端部には、外西川原遺跡（119）、舞台遺跡（107）、東中曽根遺跡（89）、峯謡坂遺跡（105）がある。外西川原遺跡は標高 380m 前後と少々高位置にあり、後期後半の竪穴式住居跡 8 軒が発掘され、舞台遺跡は西中曽根遺跡上段の標高 390m に位置し、竪穴式住居跡 7 軒と 2 間×2 間の掘立柱建物跡 1 棟を発掘している。今回の発掘調査でも東中曽根遺跡で竪穴式住居跡を、峯謡坂遺跡で壺棺再葬墓 1 基を確認している。このことから、弥生時代の後期後半から終末期には、姨捨土石流台地端部を中心に、中小規模の集落遺跡が本格的に設営され始めたことが理解される。最大の特徴は、八幡遺跡群のある佐野川扇状地上ではなく、あくまでも台地縁辺部に集落が選地された点であろうか。この傾向は古墳時代前期・中期にも引き続くものと予想されるが、良好な集落遺跡は確認できていない。

古墳時代

該期は、時代名称に相応しい古墳そのものが築かれる時期であり、川西地区にも小規模な古墳が数多く築造されている。諸所での古墳造営と相俟ってか、集落遺跡は拡散選地される。これまで集落遺跡の確認できなかった佐野川扇状地にも、志川遺跡（85-11）、横まくり遺跡（85-10）等が設営され、今回新発見の大道遺跡（85-17）も、この時期の集落遺跡である。宮川以南の土石流台地上では、峯遺跡（103）があり、古墳時代の住居跡 2 軒と土坑 1 基を確認している。現在、当該地域の集落遺跡と古墳との対比は、稲荷

山元町遺跡(74)と塚穴古墳群(76)、返町遺跡と吹上塚古墳(66)、志川遺跡と八幡古墳群、外西川原遺跡と姨捨古墳群が予想・設定されている。集落遺跡と古墳、歴史的要素が充実した段階といえる。川西地区の古墳は、北から塚穴古墳群(7世紀前半中心)、八稜鏡2面を出土した一本松古墳(77、7世紀代中心で9世紀ころまで追葬か)、小坂古墳群(6から7世紀代)、吹上塚古墳群(5世紀末ころか)、八幡古墳群(6世紀代中心か)、姨捨古墳群(6から7世紀代)がある。今回調査した八幡遺跡群は、佐野川扇状地上にあり、その扇頂部に築造された八幡古墳群と直接関連あることは疑いない。八幡古墳群には小形倣製鏡と直刀を出土した矢先山1号・2号古墳(60)を始め、矢先山下古墳(59)、山の神古墳(62)、こがの峯古墳群3基(63)、糠塚古墳(58)の8基がある。

古代以降

当地方は古代には更級郡に属し、犀川以南の川中島から南は筑摩郡の本城村におよぶ地域に該当する。更級郡衙の比定地は、八幡にある社宮司遺跡(110)であり、ほ場整備事業に伴う発掘調査で掘立柱建物跡9棟が確認され、奈良三彩陶器、灰釉陶器、墨書土器、そして豊富な木製品が出土し、郡衙との関連は濃厚である。また社宮司の北方にある北稲付遺跡(122)でも、青銅製の帯金具に木簡、墨書土器などが出土し、やはり更級郡衙との関連が推定されている。両遺跡とも今回の調査対象遺跡であり、本格的な調査を実施した。志川にある青木遺跡(117)は、古手の瓦が採集され、該期の廃寺跡の可能性が示唆されていたが、過去1回の調査で該期に相当する遺構は確認できなかった。これら集落関連の遺跡以外に、大田原には上日向窯跡群(162)があり、3号窯の灰原から8世紀中ごろと推定される須恵器と瓦が出土し、更級郡内の須恵器生産窯として注目されている。また石原A遺跡では、厳密な時期比定は難しいが、該期の終末頃と考えられる木棺墓が1基確認され、横沢遺跡群上ノ田(78)・平田遺跡(79)などでは火葬墓の検出がある。矢先山(61)は平安時代の経塚として著名である。武水別神社遺跡は平成5年度に調査された遺跡地で、近世と考えられる石列1基と、中世から近世期の埋蔵銭39000枚(この内20000枚が寛永通宝)が出土している。

引用・参考文献(五十音順)

- 1 更埴市 1994 『更埴市史 第一巻 古代・中世編』
2章は本書及び文献2を参考に執筆した。記述内容の原著は、それら2書を参照のこと。
- 2 長野県埋蔵文化財センター 1994 『烏林遺跡』
- 3 更埴市教育委員会 1995 『長野県更埴市 坪山遺跡・判官塚古墳』
- 4 更埴市教育委員会 1998 『長野県更埴市 湯ノ崎遺跡・一本松古墳』
- 5 千曲市教育委員会 2005 『長野県千曲市遺跡分布図』
発掘調査時は1998 『長野県更埴市遺跡分布図』に基づいた。
- 6 武水別神社 1994 『長野県宝武水別神社高良社本殿修理工事報告書』
- 7 岡田正彦・竹内三千夫 1972 「更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』14)
- 8 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市八幡遺跡群北稲付遺跡—西部沖ほ場整備に伴う発掘調査報告書』
- 9 更埴市教育委員会 1986 『長野県更埴市社宮司遺跡—西部沖泉宮ほ場整備に伴う発掘調査報告書—』
- 10 更埴市桑原村誌編纂委員会 1967 『桑原村誌』
- 11 佐藤信之 1987 「更埴市・大池南遺跡出土土器について」(『長野県考古学会誌』53)
- 12 更級埴科地方誌刊行会 1978 『更級埴科地方誌 第二巻 原始古代中世編』
- 13 下平秀夫 1970 「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査概報(2)」(『信濃』Ⅲ—22—4)
- 14 文化財保護委員会 1967 『全国遺跡地図 長野県』
- 15 森嶋稔・米山一政 1964 「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査報告(1)」(『上代文化』34)
- 16 矢口忠良 1968 「長野県更埴市桑原地区太田原向山古窯址出土の須恵器について」(『信濃』Ⅲ—20—7)



第4図 千曲市川西地区の遺跡分布図（文献5に加筆転載）

番号	遺跡名	旧石器	縄文			弥生		古墳		奈良	平安	中世	近世	文献
			草・早	前・中	後・晩	中	後	前・中	後					
50	婦人塚古墳							○						
51	上平沢遺跡		○											
52	京塚1号古墳							○						
53	京塚2号古墳							○						
54	坪山古墳							○						
55	吉野塚古墳							○						
56	上人塚古墳							○						
57	丸山古墳							○						
58	糠塚古墳							○						
59	矢先山下古墳							○						
60	矢先山1号古墳							○					45	
60	矢先山2号古墳							○					45	
61	矢先山経塚									○			3,89	
62	山ノ神古墳							○						
63	こがの峯古墳							○	○				45	
64	中原南遺跡									○				
65	中原古墳							○						
66-1	吹上塚東古墳							○	○					
66-2	吹上塚西古墳							○	○					
67	雁塚遺跡			○						○				
68	鳥林遺跡	○	○	○		◎	○			◎	○		66	
69	塚ノ口1号古墳							○						
69	塚ノ口2号古墳							○						
70	宝殿ノ塚古墳							○	○					
71-1	返町遺跡			○	○	○	○	○	○	○	○		37,45	
71-2	後安遺跡									○	○			
71-3	宮沖遺跡									○	○			
71-4	湯屋遺跡									○	○			
71-5	駒清水遺跡									○	○			
72	小坂西遺跡	○	◎	◎		◎	◎			◎	◎	◎	66	
73	遠見塚古墳							○	○					
74	元町遺跡							○	○				45	
75	小坂城跡											○	33	
76	塚穴古墳							○					45	
77	一本松古墳							○	○				12,45	
78	湯ノ崎遺跡									○				
79	東谷古墳									○				
80	湯ノ崎1号古墳							○						
80	湯ノ崎2号古墳									○				
82	佐野山遺跡	○	○	○						○	○		45	
85-1	大伝寺遺跡									○	○	○		
85-2	成沢遺跡									○	○			
85-3	中道遺跡									○	○			
85-4	北堀遺跡									○	○			
85-5	御頭免遺跡									○	○			
85-6	稲付遺跡									○	○	○		
85-7	青木遺跡									○	◎		8,15	
85-8	外くね遺跡									○	○			
85-9	六反田遺跡							○		○	○		45	
85-10	横まくり遺跡							○		○	○			
85-11	志川遺跡							○	○	○	○		45	
	よこみぞ遺跡									○				
	れんでは遺跡									○				
85-12	真光寺遺跡			○								○	45	
85-13	北なめり石遺跡										○	○		
85-14	田畑遺跡										○	○		
85-15	北稲付遺跡										○	○	21	
85-16	社宮司遺跡										○	◎	24	
86	赤坂遺跡				○					○	○	○		
87	曾根塚古墳									○				
88	上吉野遺跡										○	○		
89	東中曾根遺跡										○	○	○	
90	判官塚古墳										○			
91	稲荷山城跡												○	45,108
92	検見塚古墳										○	○		
93	小坂塚古墳										○	○		
94	小坂東遺跡			○							○	○	◎	
95	治田池遺跡	○	○			○								45
97	町屋敷遺跡										○	○		
101	山ノ神遺跡				○									45
102	柳下遺跡											○	○	
103	峯遺跡										○	○	○	
104	宮川遺跡									○	○	○	○	
105	峯謡坂遺跡									○		○	○	
106	西中曾根遺跡										○	○	○	
107	舞台遺跡									○	○	○	○	
108	姨捨遺跡										○	○	○	
109	杉ノ木古墳										○			90
110	姨捨塚穴〃										○			
111	坪山A遺跡										○	○	○	
112	坪山B遺跡										○	○	○	
113	判官塚遺跡										○	○	○	
114	丸山遺跡												○	23
115	下吉野A遺跡										○	○		23
116	下吉野B遺跡										○	○		
117	下吉野C遺跡									○		○	○	23
117-1	下吉野C-1遺跡												◎	20
117-2	下吉野C-2遺跡										◎	◎	○	20
118	東条遺跡										○	○		
119	外西川原遺跡									○	○	○	○	
120	石原A遺跡										○	○		
121	石原B遺跡										○	○		
123	町裏遺跡											○	○	
124	堂林遺跡										○	○	○	
127-1	籠田遺跡										○	○		19
129	平田遺跡										○	○		19
130	久保田遺跡										○	○		
131	元町焼窯跡												○	
139	篠山遺跡	○	○									○		45
204	西久保瓦窯跡												○	20
205	西久保遺跡										○	○		20
208	寺山遺跡											○	○	
209	白石遺跡											○	○	
213	武水別神社遺跡												○	
214	八幡松田館跡												○	108

第2表 遺跡地名表（文献5に加除筆）

2. 周辺の歴史的背景

1項で概観した八幡遺跡群周辺にある既知の遺跡を基軸として、当該地区の歴史的背景について学習する。本項の内容が、発掘調査の留意点となり、方針決定の立脚点となる。

a. 古墳時代終末の背景

八幡遺跡群内に人々の生活痕跡が濃厚となるのは、前節で述べたように古墳時代後期（7世紀代）からである。集落遺跡として横まくり遺跡や志川遺跡があり、古墳群には八幡古墳群が直接該当する位置にある。更級埴科地域における古墳文化の開幕は、千曲川右岸域に森將軍塚古墳や土口將軍塚古墳を頂点とした古墳築造の流れがあり、左岸域では川柳將軍塚や越將軍塚古墳を頂点とした流れを把握できる。越將軍塚古墳以下、塚穴古墳群、小坂古墳群、吹上古墳群等の階層的築造の流れは、佐野川以南の八幡地区には直接及んでいないことから、古墳文化の開始期、当該地区に積極的な開発、集落選地の認められないことを暗示する。6世紀後半から7世紀代にかけて、大雲寺背後にある霊浄山一帯に八幡古墳群が築造される。矢先山1号・2号古墳、矢先山下古墳、山ノ神古墳、この峯古墳群3基、糠塚古墳の8基である。これらとほぼ同時期と考えられる集落遺跡は、現在のところ、志川遺跡、横まくり遺跡のみで、全体像の把握には至っていない。古墳群からは遠距離でもあり、八幡遺跡群内に、いまだ未発見の集落遺跡が存在する可能性は多分にある。古墳群の被葬者が血縁的・地縁的系列として固定化した者であれば、その人物排出の集落は、好適地にまとまりをもって存在していたに違いない。ましてや、八幡古墳群が7世紀を前後して、当該地区を開拓、進出した集団の統率者の墓であれば、続く、律令社会の開幕を担う新出集団として、集落像を把握しておく必要がある。

大和朝廷の政策は、氏姓制度、世襲性による地域社会の契りを粉碎し、その力を中央に集権させることを国家形成の目標とした。645年の大事件、大化の改新は、一に土地私有権の否定と公有権の規定（公地公民制）、二に地方行政と軍事機構の定め、三で戸籍・班田収授の法と租税の定め、四で賦税（調・庸）の定めを掲げた。ことに三では地割面積が定められ、長さ30歩、広さ12歩を1段、10段を1町（約109m）、縦横6町を1里とし、縦並びに条、横並びに里を呼称する、いわゆる条里制を施行した。条里は北と西から計りだされ、千曲川右岸域の更埴条里的地割と同一の計りだしで八幡条里が施行されていた可能性が指摘されている。残念ながら、これまでの発掘調査で古代条里水田面の確認はないが、大道や中道の地籍名、航空写真にみる現行の土地区割りの状態から、条里面の存在は十分予想されるところである。埋没水田の発見は、古代律令時代の幕開けを語る極めて重要な事象である。

b. 奈良・平安時代の背景

律令制は、官制や身分制、土地・財政、政治・司法等を国家的に確立する制度である。701年大宝律令の制定に始まり、718年の養老律令等、律令格式によって体制化・整備されていった。国郡制から、当時の信濃国は、東山道の一国で上国に位置づけられ、国司は四等官が配置、美濃按察使美濃守笠朝臣麻呂の管下に置かれた。伊那郡・水内郡・諏訪郡・高井郡・筑摩郡・更級郡・埴科郡・安曇郡・小県郡・佐久郡の10郡があった。この内で更級郡は9郷よりなり、中郡にあたる。9郷とは、麻績郷・村上郷・當信郷・小谷郷・更級郷・清水郷・斗女郷・池郷郷・氷鉤郷である。八幡地区は、小谷（乎宇奈＝おうな）郷に比定されている。小谷は小長谷部（おはつせべ）の小長谷が変化したものとされ、今日の行政地区では八幡・桑原・稲荷山・塩崎・長谷が該当する。一郷は50戸、1戸が40人として、平均2000人で小谷郷は構成されていたと考えられ、極めて高い人口密集地域である。更級郡は9郷であるから、およそ18000人の人口を数える。郷や郡域の広さにも影響されるが、当時の信濃国で第一位を誇る。その郡衙施設が八幡の「郡こおり」地区にあったとされるのである。今回調査対象となった社宮司遺跡及び北稲付遺跡は、郡衙関連遺跡と考えられている。社宮司遺跡は1976年の千曲市教育委員会の発掘調査で、

掘立柱建物跡のみが確認され、竪穴式住居跡を伴わないこと、奈良三彩小壺や墨書土器など特殊な遺物が豊富に出土したことなどから、郡衙との関連が示唆された遺跡である。北稲付遺跡は、1978年に調査され、竪穴式の小建物跡1棟を始め、銅製の帯金具、墨書土器、斎申、付け札状の木簡（「□三縄」）が出土し、やはり関連が示唆された。八幡遺跡群の「郡」を中心にし、その北と南に、郡衙関連と目される遺跡が調査されている。さらに東側には青木廃寺跡と調査こそないが大伝寺地籍名がある。更級郡衙を想定するには、恵まれた条件がある。しかしながら更級郡の郡衙が更級郷ではなく、小谷郷域にあること、定額寺（安養寺）が上石川廃寺に比定されていることなど、八幡「郡」説に異論も挙げられている。866年『日本三代実録』二月の条には、信濃国に5つの定額寺が定められたとある。更級郡では安養寺がある。現在の篠ノ井上石川の上石川廃寺跡をそれとする説が強いが、1594年の上杉影勝領、信濃越後の知行人等員数目録に「更級郡八幡別当安養院」の記述があり、武水別（たけみずわけ）神社内の神宮寺との関連も指摘されるところである。1郷1社の原則からすれば、小谷郷には武水別神社と治田神社、さらには長谷神社の3社が存することとなる。郷域比定と郡衙及び定額寺の位置づけには、もう少し状況証拠が必要なようだ。一方、武水別神社は、866年に諏訪大社と肩を並べ、従二位に叙せられる。このことが武水別神社を、諏訪社の祭神、建御名方富命（たけみなかたとみのみこと）の御名別けであるとする説を補強する。神社の故地が、郡地区大雲寺近くの本八幡にあるのは、安養寺の位置を考える上に大事な要素である。

郡衙の位置と密接不離な条件に官道がある。八幡地区は、東山道の支道が通過していたと考えられており、筑摩郡錦織駅（にしごへり）から更級郡麻績駅（おみ）、日理駅（わたり）、水内郡多古駅、沼部駅を経て、北陸道へ通じる道である。詳細なルートは3説ほどあり、古峠説（麻績駅→古司→松葉→大野田→沓掛→古峠→扇平→御籠→直路→立石→吉野→代→峰→郡→反町→小坂→長谷→日理駅）、一本松説（麻績駅→古司→松葉→大野田→一本松→青木→吉野→代→峰→郡→反町→小坂→長谷→日理駅）、猿ヶ馬場峠説（麻績駅→馬の口→真米→猿ヶ馬場峠→中原→郡→反町→小坂→長谷→日理駅）であり、いずれも郡集落を抜けると考えられている。

『続日本紀』の神護景雲二年（769年）、「信濃国更級郡の人建部大垣、人となり恭順にして、親に事へて孝有り、・・其の田租を免じて身を終へしむ」の有名な記述がある。親孝行から田租の免除を受ける、稀に見る人物の記録である。このことから、更級郡に建部が置かれていたことは確実で、建部が職業的軍事集団であるなら、国の重要拠点として本郡を位置づけることも可能であろうか。残念ながら、考古学的資料で、これを補強する証拠はまだ不十分である。

『古今和歌集』巻17にみる「わが心なぐさめかねつ更級や 姨捨山にてる月を見て」の作が、8世紀後半に読まれたものとすれば、かの有名な姨捨伝説は、少なくとも9世紀前半には成立していたことになる。姨捨は小長谷の地名に由来し、小谷も小長谷から生まれたとされる。8世紀後半から9世紀代の長野盆地南部には、左願廃寺、芋井廃寺、道島廃寺、青木廃寺等の氏寺と考えられる寺院がいくつもあり、これに上石川廃寺、雨宮廃寺（屋代廃寺）などの定額寺の建立を加えると、極めて仏教的色彩の強い地域である。小谷郷域？に比定される篠ノ井遺跡群では、瓦塔と埴仏が出土、八幡遺跡群青木廃寺でも瓦塔片が採取されている。この地へ、いつごろ『雑宝蔵教』の説話が伝来したか不明だが、建部大垣の善行と姨捨伝説の誕生は、該期の更級郡域を考える大事な要点のひとつである。

平安時代末期から鎌倉時代初期の末法思想下に流行した遺構に経塚がある。末法思想と係りが深いとされる姨捨山の外延部に経塚が構築され、八幡遺跡群周辺では、矢先山経塚や堂城山経塚、小丸山経塚、徒行山経塚などがある。矢先山では12世紀後葉頃と判断できる経筒外容器が採集されている。これら経塚が平安時代末期の寺院や廃寺の周辺部に多いことから、青木廃寺以外に、寺院跡の存在する可能性は高い。

社宮司遺跡の東に隣接する大伝寺地籍などは、その有力地のひとつとなろうか。現在の大雲寺は大伝寺といい、室町時代に移設されたと伝承される。

c. 鎌倉幕府の成立前夜

『中右記』嘉保元年（1094年）八月の条に、参河守源惟清の末弟盛清が、白河上皇呪詛の咎で信濃国へ配流となったとある。源盛清の配流地は、その子、為国が村上を名乗ったことにより、更級郡村上郷が想定される。為国は保元の乱（1156年）に崇徳上皇側として参戦、敗北している。この時、後白河天皇側に参戦した信濃源氏は、海野、望月、祢津の滋野三家、諏訪、蒔田、桑原、木曾、根井、静間、片桐、熊坂氏などであった。為国の末裔には、屋代氏、栗田氏などがいる。源氏の棟梁、源義朝は平治の乱（1159年）により失脚、平氏の時世となったことは通説である。八幡遺跡群を含む地域が、小谷郷にあたることは前述したが、当該地域には庄園、小谷庄が比定される。小谷庄は1158年の『石清水家文書』宮宣旨の中に、始めて登場する。石清水八幡の庄園を領家等が押領したことに對し、宮宣旨により本所へ返附する旨、命じた文書である。このことから、小谷庄が石清水八幡の宮寺領であったことが分かり、少なくとも1158年以前には庄園が寄進され、さらにそれ以前には庄園の成立があったことが予想できる。

『参考源平盛衰記』久寿二年（1155年）八月、源為義の次男、帯刀先生義賢（たてわきせんじょう）は、埼玉県児玉郡で討たれとある。その子が駒王丸こと、木曾義仲である。『吾妻鏡』治承四年（1180年）には、平家方である高井郡の笠原平吾頼直が義仲を攻めようと侵攻し、川中島にて村山七郎義直、栗田別当大法師乗範覚、義仲と戦い敗戦したとある。当時、義仲は小県郡依田にあり、北陸道への侵攻を狙ったとされる。養和元年（1181年）六月、越後の城資輔（じょうすけもと）は、笠原頼直、保科権八等を従え、篠ノ井横田河原に布陣し、屋代周辺に陣をしく義仲軍と戦闘する。いわゆる横田河原の戦いである。この時、資輔軍は横田・篠野井・石川に火をかけ焼き払ったとある。合戦の場は、八幡地区より北方の小谷郷域にあたる。ただし、義仲軍の楯親忠が八幡宮の前で勝利を祈り、これを受けて義仲自らも八幡宮で戦勝祈念したとあることから、義仲が千曲川を渡河し、当該地区を経過した可能性は十分ある。とすれば、本八幡や前法殿、奥法殿の地名の残る大雲寺周辺の「郡」地区にあったとする八幡宮に立ち寄ったことになるのか。霊静山からは篠ノ井方面は一望できる。横田河原の戦勝後、義仲は、越中の俱利伽羅峠の戦い、加賀の篠原合戦で勝利し、上洛することとなる。その後、わずかに3年足らずで失脚し、1184年、近江粟津で戦死してしまう。



武水別神社幟旗と大鳥居

第3節 記録保存の方法

1. 発掘調査の方法

(1) 調査範囲

今回報告の埋蔵文化財発掘対象地域は、千曲市教育委員会並びに長野県教育委員会作成の遺跡台帳にある「八幡遺跡群」の全体及び「宮川遺跡」である。八幡遺跡群は、佐野川扇状地のほぼ全体を囲む、いわゆる八幡条里的遺跡地の全域を指し、開発計画の18号バイパス線予定地内のすべてが対象地となる。しかしながら遺跡台帳では、八幡遺跡群内にいくつかの個別遺跡を単独に登録しており、それら以外の場所については遺物等の散布が、現状で確認できない地籍として判断されている。したがって、今回の発掘調査では、八幡遺跡群としての登録を尊重しつつも、個別に登録された遺跡範囲内を面的な調査対象地として第一位に判断し、それら以外の地籍については試掘後の結果に基づいて、随時、調査手法を検討し、遺跡の範囲決定を下すこととした。

(2) 調査の留意点と進め方

考古学的調査の視点と留意点は、周辺遺跡の状況と歴史的背景を考慮した上で、決定するものであることは言うまでもない。以下に、調査にあたっての要点をまとめる。

a. 弥生時代終末期～古墳時代前半期

八幡遺跡群内には、該期の集落遺跡は確認できていない。しかしながら、遺跡群南端に流れる宮川以南の姨捨遺跡群内には、外西川原遺跡を始め、西中曾根遺跡、そして宮川遺跡等、中小規模の集落遺跡が存在する。このことから本遺跡群内にも、未発見の弥生後期遺跡が存在する可能性を十分想定できる。比較的低位の扇状地上であるため、水田等の生産域が存在していることも考えるべきか。

b. 古墳時代後半期

遺跡群内には、确实なところで、六反田及び横まくり等の遺跡地がある。それらは千曲川に接する扇状地端部に立地し、八幡古墳群からは直線距離にして1,500mほどある。八幡古墳群8基は、霊浄山一帯に築造されており、山頂の径20mを計る糠塚古墳を筆頭に、直刀や鏡（四乳念文鏡）が副葬された径10mの矢先山古墳等、当該地域を治めた氏族首長の墓がある。北には桑原古墳群が、南には姨捨古墳群が築造されることから、それらと対峙した氏族勢力であり、広大な佐野川扇状地を直轄する集団と考えてよいだろう。しかしながら、古墳群の規模に比べうる十分な集落として、六反田等の志川地区の遺跡のみでは、少々貧弱である。状況から推察して、八幡遺跡群内の、ことに扇状地中央部付近での7世紀前後期の集落遺跡を想定して調査を進める必要があるか。

c. 奈良・平安時代

該期は、八幡遺跡群の最も特徴的で、考古学的調査として成果を期待したい時期である。かねてより、更級郡衙の推定地として注目された社宮司遺跡、さらには郡衙関連遺跡と目される北稲付遺跡、古代寺院跡が予想される青木廃寺跡等の代表的な遺跡が知られている。また千曲川右岸域に展開した古代条里的地割（更埴条里）と、ほぼ同一の計りだしで左岸域に条里が展開した可能性が示唆されており、以前から八幡条里的遺跡の名称が与えられている。今回のバイパス調査では、全域で、この条里的地割を確認する作業が第一にあり、これまでの更埴条里の調査成果から、30間×12間の半折型の区画構造、小さな畦、そして何よりも古代水田面を追求する必要がある。社宮司遺跡は扇状地の南端、宮川沿いにある。2間×3間を中心とする掘立柱建物跡9棟、溝跡6本が確認され、竪穴式建物跡のない点に特徴がある。出土遺物に奈良三彩小壺の蓋、「大」や「友主（坂主のことか）」などの墨書土器、下駄や鍬などの木製品があり、

現在の「郡」集落とも兼ね合い、古代更級郡衙との関連が指摘されている。今回の調査は、千曲市調査地（本書ではB地点）の西側隣接地点を10000㎡ほど調査する。三彩の出土した東西方向の1号溝（本書のSD 01）、さらには黒色土の堆積部とされて未調査の西側落ち込み部分（本書のSD 03 南北流路）に関しては、連続部分を検出・調査できる可能性がある。官衙関連施設と呼ばれる遺跡の実態に迫るとともに、郡衙として条件を満たすことのできる要素を慎重に確認・追跡する必要がある。北稲付遺跡は、社宮司から見て北、扇状地の扇央よりやや北に位置する。竪穴式建物跡1軒と黒色土の落ち込みが広範囲に確認され、出土遺物に「春」の墨書土器や銅製帯金具、「□三縄」の木簡、下駄、曲げ物などがある。今回は、千曲市調査地（本書のA地点）の東側隣接地点1,000㎡ほどを調査する。掘立柱建物跡の有無、竪穴式建物の性格、黒色土の正体を確認し、やはり官衙関連施設としての再検討を行う必要がある。青木廃寺跡は、掘立柱建物跡と竪穴式住居跡2軒が確認され、平瓦や宇瓦の出土から、古代寺院の可能性が示唆されている。今回の18号線調査地よりは東に約400mの距離があり、直接的な調査対象とはならないが、竪穴式住居跡が9世紀から10世紀代であることや、表採ではあるが瓦塔片が出土していることから、該期の集落遺跡が別に存在する可能性もある。比較的至近の北稲付遺跡や外く祢遺跡の調査は、この点から注意する必要がある。

d. 鎌倉以降、中世

古代末期から中世にかけての時期は、小谷庄が想定された地域であるだけに、庄園関連の施設、あるいは生産域を追求していく必要がある。小谷庄は石清水八幡宮に寄進された庄園で、武水別神社の八幡宮勧請と強い関連があるとされる。本八幡の位置や前法田、奥法田といった地籍名は、「郡」集落近傍が神社本来の建立地であった可能性を暗示する。今回は直接、「郡」集落に開発の手は伸びないが、八幡宮にまつわる問題は心しておく必要があろう。また「郡」集落には、現在の大雲寺があり、かつては大伝寺と称したとあり、社宮司遺跡の東隣接地に残る大伝寺地籍との関わりが問われる。社宮司遺跡に、寺院的要素をもつ遺物が出土する可能性は、十分考えられる。

（3）調査方法

A. 手順

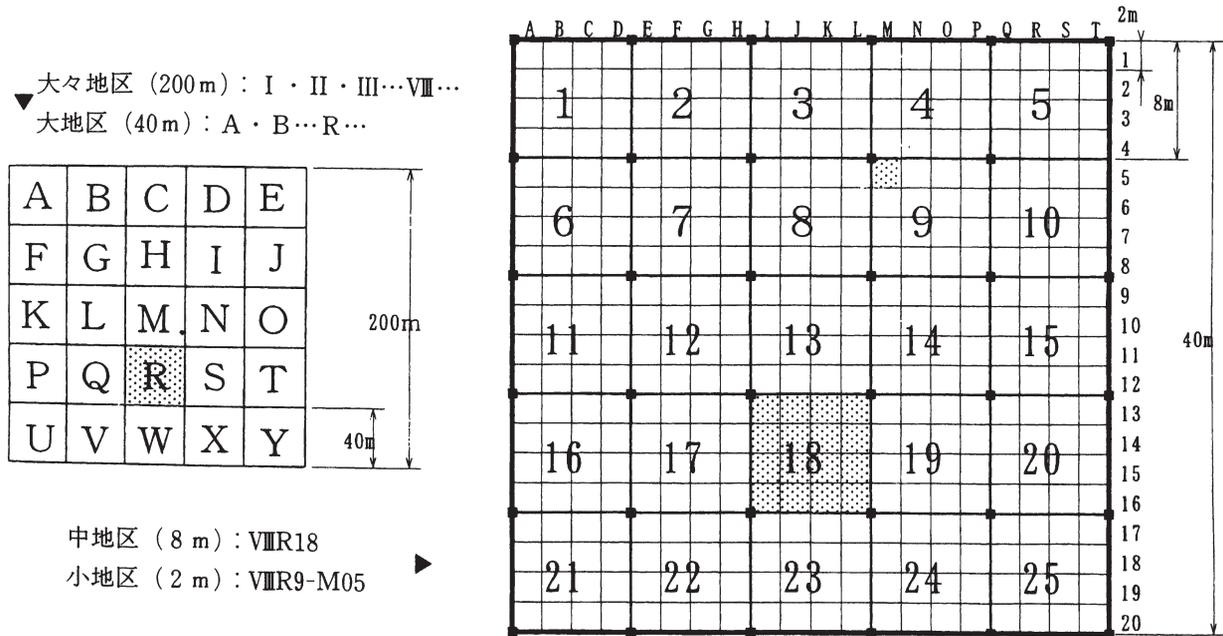
調査は、まず遺物を包含する堆積土、あるいは遺構の構築が判別できる堆積土の境界付近まで、重機（バックホー）による掘削を行う。次に手作業による堆積土表面の精査、いわゆる遺構検出を実施し、遺構等が検出された場合には、以下に記載する方法で遺構を調査する。遺構調査を終了した時点で、最低1回の再掘削（ダメ押し）を実施、遺構の調査もれ、さらにはより古期の文化層の有無を確認した後に、遺跡立地の表層地形まで重機による掘削を進める。これは、地形形成に関わる堆積土から遺跡立地あるいは遺跡埋没、そして今日の現況に至るまでの土壌堆積記録を作成する目的から実施する。したがって、遺物あるいは遺構が検出されなかった場合、あるいは試掘対象地籍の場合にも、同様な方法で、現耕土から表層地形までの掘削を実施し、調査を終了させることを旨とする。

B. 記録基準区の設定

遺跡の記録用測量基準点は、GPS測量による。受信機はトプコンGR-RADY。観測3点の測量解析ソフトは、トプコン、GPPS-Lプログラム：LINECOMPバージョン5.2による。測量用基準杭（BM1）は北稲付遺跡のSD 01周辺部に設定。水準測量は長野標識番号5091号、稲荷山保育園（稲荷山字治田町198番地）内にある二等水準点（金属標）及び長野標識番号5093号、桑原字椿田1168-2道路敷の二等



重機による表土の掘削



第5図 記録基準区の呼称

水準点（金属標）よりひき、ちょうどトラバース点8が大道遺跡周辺部にくる。これを受けて、記録用基準区（グリッド）を国家座標に従って設定する。国土地理院の定める平面直角座標系の原点（X = 0.000 Y = 0.000 長野県第8系・等級区分3級）を基点に、200倍の数値を選んで調査範囲内のX軸・Y軸の測量基準線を設ける。これから、200m × 200mの基準区（大々地区）を設定し、さらにこれを40m × 40mの区画（大地区）に分割する。大々地区は発掘対象範囲の北から南へI～VIIIとローマ字表記し、大々地区の中に25区画入る大地区については、北西から南東方向へ順次A～Yのアルファベット記号を与えて呼称する。大地区は、さらに8m × 8mごとの区画（中地区）に分割し、やはり北西から南東に向けて1から25の算用数字で表記する（第5図）。つまり、VIII R18区のように呼称していく。この中地区の呼称法が、調査区内の割付平面図（縮尺1：20）を作成する基準であり、調査を進めていく上の一つの単位となる。

基準杭の設定並びに絶対高の算出は測量業者に委託し実施した。

平成12年度（株）協同測量社 [外く柵地籍～社宮司遺跡の全体基準区の設定]

平成13年度（株）写真測図研究所 [社宮司遺跡と宮川遺跡]

平成14年度（株）ジャスティック [境なし地籍と砂田地籍]

C. 遺跡の認定と遺構の確定

遺跡とは、過去人類の残した人工構築物のある場所を言う。人類の生活活動は、山河跋涉し、広域にわたるものであり、居住の空間でなくとも、罌を仕掛けた場所、食物を生産する畠なども当然のことながら遺跡として認定する必要がある。逆に、事前の分布調査によって、人工的遺物が採取され、台帳登録されていた文化財包蔵地であっても、調査の結果、遺跡と認定できない場合も多々ある。したがって、発掘の結果から、遺跡の範囲外と考えるべき所、あるいは未周知で新発見の遺跡となる所があり、それらに関しては報告文の各節中に「調査結果」としてまとめる。この成果は、今後の埋蔵文化財保護行政に資するべき財産として活用される。

遺構とは、人類の残した人工構築物そのものを指し、動かすことのできない遺産である。開発行為によって破壊される遺跡は、文化財保護法の下に記録保存という手法で守られる。これを行政執行する行為が埋

蔵文化財の発掘調査である。重機による掘削の後、地面に掘り込みが確認できる例、遺物の分布が視覚的に捉えられ、何らかの構築物を想定できる例など、遺構の検出には様々な状況が予想される。その都度、記録保存に最も適した手法を選択し、調査を行うことが肝要である。

D. 遺跡の名称と遺跡記号

遺跡の名称は、遺跡台帳に掲載された遺跡名に基づき、それを表す記号は、長野県埋蔵文化財センターで使用するアルファベット3文字の表記で行う。遺跡記号の目的は、発掘調査段階での便宜を図ることはもちろん、今後の情報処理システムにおけるデータ・ベース化に対応するためのものである。したがって、当センターで用いる遺跡記号については、3文字の構成に原則、重複はない。表記法は、まず長野県域全体を9地区に分割し、北から南へローマ文字符号する。千曲市該当区域は「B」で、それを頭文字に、次の2文字は遺跡のローマ字表記、例えば「社宮司SHAGUUJI」の「SH」を付加して「BSH」とする。この時、すでに別の調査遺跡で「BSH」が使用されている場合には、2文字目の「A」、さらには3文字目の「G」を使用し記号化する。結果、社宮司は「BSG」となる。調査では、遺物への注記を始め、遺構・遺物の実測図に至るまで、すべてに「BSG」の略号を用い、例外はない。

E. 遺構の名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様の観点から、その性格や発見状況により分類化した記号を用いる。記号は、当センター作成の『発掘調査の方針と手順』に規定されたものを原則使用する。遺構記号の多くは、その検出時に符号していくため、調査を進めていく段階で、あるいは整理作業を進めていく途中で、記号が表す遺構の性格と実際の遺構の性格とが合致しなくなる場合もある。こうした場合でも、遺構と遺物の記録類に齟齬がないよう、遺構記号の変更は行わないことを原則とする。

竪穴式住居跡(SB)は、人間の生活痕跡、ことに恒常的な起居の痕跡を認めうる遺構である。多くの場合、煮炊きの痕跡を確認でき、生活用具の出土がある。一辺の大きさ200cm以上を測る方形あるいは円形状の落ち込みを検出した場合に、住居跡を想定する。社宮司遺跡では、起居の痕跡を始め、食料加工としての煮炊き痕跡の認定根拠が不十分なことと、該期の発掘事例報告を参考に、SBを竪穴式建物跡と呼称する。

土坑(SK)は、一辺200cm以下の方形または円形状の落ち込みを指す。これには土器の焼成遺構や粘土等採掘坑、井戸や貯蔵穴、ゴミ穴、便所、墓などが含まれる。特に用途が墓であると確定できれば土壙(SM)の記号を用いる。SKと類似した遺構には、落ち込み(掘り込み)を伴わない焼土あるいは礫の集中があり、これらは焼土跡(SF)、集石跡(SH)とする。また土器や石器の集中は(SQ)と呼称する。

掘立柱建物跡(ST)は、SKと認定した落ち込みが規則的な配置、尺取りをもって認められた場合に呼称する。多くの場合、高床式建物と考えられる遺構である。

溝跡(SD)は、細長い溝状を呈する落ち込みを指す。

極端な不整形の落ち込みには、(SX)の記号を冠し、遺構として取り扱う。

なお、今回の調査では、遺構記号の後に付加した番号、SB 01等は、八幡遺跡群内にある遺跡単位で個別に使用しており、番号のみでは位置を判別できない。遺跡記号と合わせ読むことで、その所在は理解される。

F. 遺構の調査法と記録法

遺構と認定した落ち込みは、それぞれ推定される性格に基づき、調査法を勘案して進める。調査番号は、検出・発見順に符号し、番号の欠落は、整理段階で可能な範囲、再符合することとした。なお、調査記録とは、図面と写真、所見記述からなる。

竪穴式建物跡(SB)は、土層観察用の畔、いわゆる十字ベルトを基本に設定し、埋没土の掘り下げを実施する。埋土中の出土遺物は、原則として出土位置の記録を行うこととするが、その意味付けの判断は細

部にわたり、各遺構調査担当者が行った。埋土掘削後、床面調査を実施、この時点でカマド等の施設を調査する。完掘後に、カマド下部あるいは床下部の調査を行い終了とする。これら調査経過の中で、遺物出土状態平面図、完掘平面図、土層セクション図、カマド平面図、カマド土層図、柱穴土層図、土坑等土層図、掘り方平面図、掘り方等エレベーション図の遺構個別図を、それぞれ必要に応じて作成する。写真記録は、図面記録と方法上の両輪をなすものであり、その都度実施することを原則とした。

土坑(SK)は、検出状態の土壌(色調や混入物の度合い)を写真記録することから始める。土層観察用畔は、土坑の規模に応じて、十字や一本、柱状であれば半截を設定する。土坑平面図は当センターの方針に従い割付図面(1/20)への記録を原則とし、特筆すべき遺構と判断した場合について、個別に平面図(1/10)の作成を行う。完掘図面は原則、割付図面として作成する。

掘立柱建物跡(ST)は、多くの場合、高床式建物であるから、検出状態は柱状土坑として個々にある。精査の結果、土坑の規模と配列、尺取り等に規則性が認められた場合に、それをSTと認定する。これも地区の調査を担当した者の判断により、あくまでも土坑として記録される場合もあり、これらについては、整理段階でSTとして報告する。この際、個別の土坑にはすでにSK番号が付されていることから、ST内の柱番号Pit○を与えたほかに、旧土坑番号が存在することになるが、やむを得ない。

溝跡(SD)は、割付図面内に平面図を作成し、土層セクション図は、長大であるため、最良の箇所を選定して数カ所を記録する。写真は、高位置からの撮影を余儀なくされるが、ローリングタワー3段の設定ができる場合は、それを使用し、不可能な場合には3mの脚立上から斜位置で撮影する。

なお、北稲付遺跡の埋没流路及び社宮司遺跡の大溝の土壌に関しては、古環境推定の一要素として、花粉分析及び珪藻分析を行った。昆虫遺体に関しては、分析受託先が選定できず、分析には至らなかった。委託業務は(株)パレオ・ラボが受託し分析した。

図面類

記録基準区の設定に従い、調査範囲及び遺構の位置は、すべて手作業で平面図として記録する。当センターで呼ぶところの「割付(平面)図」である。SBとST、特別なSKに関しては、これとは別に「個別(平面)図」を作成する。個別図の作成された遺構は、割付図面内に、その輪郭線のみが記録される。すべての遺構は平面図のほかに土層セクション図を作成するが、SBなど特別な遺構に対しては、適宜、上述のように「遺物出土状態図」や「掘り方図」の作成が加わる。遺跡の全体図は、手作業で作図するほか、単点測量または航空写真測量として業務委託した。平成12年度から14年度の業務受託者は、基準杭の受託者とする。

写真類

遺跡・遺構・出土遺物等の写真記録は、当センター仕様により、ニコンFM2(35mm)を基準に、モノクロプリント(フジネオパン)とカラーリバーサル(フジクローム)で撮影する。公開用または報告書掲載用の記録として、必要に応じてマミヤRB6×7を併用する。写真撮影は調査研究員が行い、現像及び焼き付けは業者委託する。また航空写真については、上記の全体図作成業務の受託者に合わせて委託する。



航空写真の撮影

平成12年度から平成14年度 長野フジカラー(ながの光画堂)

所見等記述

遺構調査の経過及び土層注記等の観察記録は、各遺構を担当した調査研究員が原則記録する。担当者の記述が何らかの理由で記されない場合は、可能な限り遺跡担当者が必要記録を追加作成する。所見の多く

は報告書の執筆をもって、それに替える。

G. 遺物の認定と取り上げ方

遺物とは、過去人類の生活活動総体の結果として、遺跡に残された人工物及び活動の痕跡物を指す。したがって、遺跡の調査で出土した土製あるいは石製の人工品はもちろん、木材加工の残片や食料残滓なども対象とする。今回の調査では、この点に留意し、人工的作為の判断できない石や木も、調査区から取上げて、木材に関しては現場事務所で加工の有無を判別し、樹種鑑定用サンプルの採取後に破棄、石材については整理事務所で肉眼観察の上、「ただの石」と仮称し、重量と石材を記録して仮保管とした。

遺物の取り上げは、表土掘削時から遺構の検出に至るまで8m×8mの中地区を基本単位とし、特に出土位置の記録が必要と判断した資料に関しては、割付図面(1/20)に3次元ドットで測量または図化して取り上げる方針とした。

(4) 調査の体制と期間

平成12年度体制

所 長： 佐久間鉄四郎 副所長(兼管理部長)： 春日光雄 管理部長補佐： 宮島孝明
調査部長： 小林秀夫 調査第二課長： 土屋 積
調査研究員： 町田勝則 上田典男

平成13年度体制

所 長： 佐久間鉄四郎(6月まで)、深瀬弘夫 副所長： 春日光雄
管理部長補佐： 田中照幸 調査部長： 小林秀夫 調査第二課長： 土屋 積
調査研究員： 町田勝則 上田典男 西 香子 寺内貴美子 谷 和隆(8月まで)

平成14年度体制

所 長： 深瀬弘夫 副所長(兼管理部長)： 原 聖 管理部長補佐： 田中照幸
調査部長： 小林秀夫 調査第二課長： 土屋 積
調査研究員： 町田勝則 寺内貴美子 伊藤友久 豊田義幸
青木一男 西 香子 太田秀保(青木以下3名、5月まで)

発掘補助員(平成12年度から14年度)

朝倉清之 赤羽利治 池内なつ子 池田豊一 石浦市郎 石浦光子 市村桂子 今井和男 今井節夫
今井せつ子 岩崎鷹男 植野早苗 (故)浦澤秀雄 白井高喜 牛沢政子 宇都宮義久 大田節子
大原はるゑ 大内秀子 大矢敏夫 岡藤清流 岡部つる子 (故)長田圭二 落合孝市 小根山貞子
風間夏枝 金沢義昭 北沢清貴 北澤三枝子 清道忠文 小林憲一 小林多雅二 小林健郎
小林英子 小林奈美江 小松よね 駒村和子 近藤武三 齊藤いづみ 酒井節子 坂田恵美子
坂田昭二 坂田良人 佐藤昭子 佐藤志津子 島田米子 清水七郎 清水 満 清水嘉弘 春原正心
高橋康子 田尻 勝 塚田徳雄 鳥羽仁美 中島勝雄 中沢 幸 長澤雄一郎 中村成志 新村雅仁
西澤たか子 西澤京子 西澤貞雄 西野入金己 祢津春美 野村貞子 原田美峰子 深沢優子
古田幸子 松川くに子 松林明子 松林貴子 松林深水 松林宣男 松本 晃 丸山登美雄 三浦正美
三上義子 南沢順造 宮島正己 宮坂寿美子 宮崎米雄 宮下容子 宮本幸江 山崎静枝 山崎 忠
山崎智子 山崎みず江 山下千幸 藪 一義 柳沢悦子 柳沢君雄 米沢須美子 吉沢福治

(5) 調査日誌抄

平成12年度

- 6月1日 契約の締結
発掘調査開始の地元連絡
千曲市八幡地区、土地改良事務所ほか
- 5日 重機等請負業者入札・中信建設落札
測量等委託事業入札・協同測量社落札
現場プレハブ（稲付遺跡北区）等周辺施設の設置・準備に入る。
- 12日 北稲付遺跡の表土除去・調査開始
- 16日 埋没流路SD01の検出・調査
- 20日 SD01より曲げ物ほかの木製品出土
- 22日 外く祢遺跡南区（2266-1）の表土除去・調査開始
- 29日 SD01及びSD02・03の検出・調査
- 7月4日 外く祢遺跡北区（2269-1ほか）の表土除去・調査開始
- 7日 SD03及びSD04の検出・調査
- 10日 稲付遺跡南区（1818-5ほか）の表土除去・調査開始、建設道路境界部分と現水田畦畔設置につき現地協議（宮下組）
- 12日 北稲付遺跡等の航空写真・測量実施
- 17日 薬師堂地籍の表土除去・試掘開始
- 21日 中道地籍の表土除去・試掘開始
SD07の検出・調査
- 25日 外く祢地籍の暗渠復旧につき協議
- 26日 ふけ地籍の表土除去・試掘開始
- 8月8日 清水下地籍の表土除去・試掘開始
- 9日 薬師堂・ふけ・中道・清水下地籍の航空写真・測量実施
- 21日 社宮司遺跡（12年度分）の表土除去・遺構の確認
- 9月4日 大道地籍の表土除去・調査開始
- 8日 現場プレハブの移転（清水下地籍）
- 18日 稲付遺跡（北区・旧プレハブ下）の表土除去・調査開始
- 21日 大道地籍（南区）に多数の竪穴式住居を検出する。新規の発見遺跡として、大道遺跡（BOH）を命名する。
- 28日 稲付遺跡の暗渠復旧につき現地協議
- 10月4日 稲付遺跡周辺の暗渠排水施設復旧作業
- 10日 稲付遺跡で複数の掘立柱建物跡を検出、調査
- 18日 大道遺跡（北区）の表土除去・調査開始、特殊高圧線下の掘削につき現地協議（東京



発掘開始式



北稲付遺跡の調査開始



中道遺跡の試掘調査



知人の畑でお昼休憩

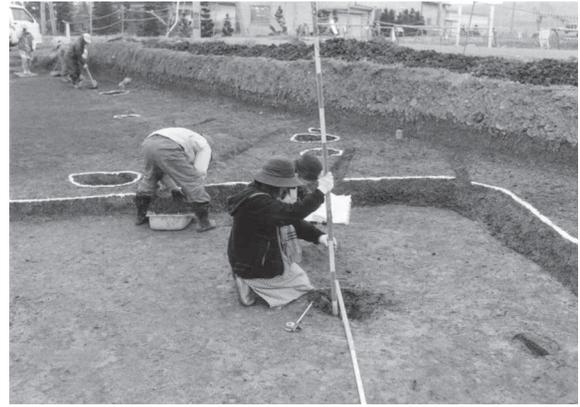
第2章 発掘調査の準備

電力・東京電設)

- 11月 大道遺跡住居跡等の調査継続
8日 冠着山(嫉捨山)初冠雪
30日 淵井先生(センターOB)来跡
- 12月 大道遺跡住居跡等の調査継続
12日 大頭祭
13日 大道遺跡航空写真・測量
19日 12年度調査終了報告及び13年度事業分につき現地協議(国土交通省)
26日 現況復帰作業終了確認・立会い
- 1月から3月まで、冬季間基礎整理作業
3月1日 薬師堂地籍の暗渠復旧につき立会い

平成13年度

- 4月10日 13年度事業につき現地確認協議(国土交通省)
11日 発掘開始の地元連絡
土地改良事務所・千曲市役所
12日 現場プレハブ(清水下地籍)等周辺施設の設置・準備
17日 社宮司遺跡(13年度分)、宮川遺跡の表土除去・調査開始
18日 清水下地籍残地分の表土除去・試掘
19日 社宮司遺跡に多数の掘立柱建物跡を検出・調査開始
- 5月8日 社宮司遺跡南側宮川付近の先行工事着手につき現地協議(国土交通省長野国道工事事務所岡村専門官ほか3名)
10日 笹沢浩(センターOB)、佐藤信之(千曲市教委)来跡
14日 大溝SD03の検出・調査開始
17日 SD03より青銅製帯金具出土
18日 社宮司南側部分の先行調査終了
- 6月1日 埋文センター管理部、現地視察
8日 八幡小学校教員一同、現地見学
六角木幢部品が出土し始める
11日 都立大学山田昌久助教授、現地見学
12日 大溝SD01の検出・調査開始
県立歴史館保存処理班、現地見学
- 7月10日 社宮司遺跡東側部分の先行工事着手につき、
現地協議(国土交通省・北信土建・関東弘済会)
12日 遺跡東側工事用道路部分ほかの航空写真・
測量。東側部分の先行調査終了
13日 藤澤典彦(大谷女子大学)・佐藤亜望(元興
寺研究所)招聘指導



個別測量の様子(大道遺跡)



管理部現場視察



八幡小学校教員の見学



出土遺物の洗浄

- 23日 宮川橋梁工事の開始
- 25日 県文化財保護課吉岡係長ほか1名現場視察
- 27日 前奈良国立博物館館長濱田 隆氏来所
- 8月 遺構の調査継続
- 9月5日 箕輪町教委2名来跡
- 9日 社宮司遺跡現地説明会
500人以上が見学
- 13日 航空写真・測量
- 17日 SD 53の調査開始
- 26日 現場プレハブ移転(社宮司遺跡)
- 10月4日 SK 740の検出・調査
- 23日 大道遺跡残件部分の表土除去・調査開始
- 31日 航空写真・測量
- 11月12日 県文化財保護協会更埴支部見学
- 13日 国立歴史民俗博物館平川 南教授 SD 01 出土木簡等の判読
- 14日 愛知陶磁資料館井上喜久雄学芸員奈良二彩等の指導
- 15日 京都大学上原 真人教授現地見学、SK 740 木棺墓教示
- 20日 県埋蔵文化財担当者会議
社宮司遺跡見学と報告
- 27日 東條遺跡・北田・蛭坪地籍の試掘につき現地協議(国土交通省)
- 12月7日 北田・蛭坪地籍の試掘調査開始
- 18日 社宮司遺跡の13年度調査終了
- 19日 13年度調査終了報告及び14年度事業分につき現地協議(国土交通省)
- 20日 東條遺跡・東中曾根遺跡の試掘現況復帰の確認・立会い
- 1月から3月まで、冬季間基礎整理作業
- 平成14年度
14年度は、18号バイパス線事業の峯謡坂遺跡以南を対象としており、今回の調査報告書の範囲外である。したがって、本書に所収する地籍・遺跡の調査のみに絞って14年度調査の経過を以下に列記する。
- 4月9日 14年度事業につき現地確認協議(国土交通省長野国道工事事務所)
- 4月26日 現場プレハブ(東中曾根と東條遺跡内に2箇所)等周辺施設の設置・準備
- 30日 砂田地籍の表土除去・試掘調査
- 5月9日 砂田地籍の試掘調査終了
- 6月3日 社宮司遺跡14年分表土除去・調査現場プレハブ(道路用地内)設置



市町村担当者の現地研修



上原真人教授の木器解説

- 13日 ST 27・ST 30等の検出・調査
- 7月3日 社宮司遺跡の調査終了
- 17日 境なし地籍の試掘調査開始
- 23日 境なし地籍の試掘終了
- 31日 県遺跡指導委員会、六角木幢視察
- 11月9日 冠着山初冠雪
- 15日 社宮司遺跡残件分の調査開始
- 27日 SD 25・ST 15等の検出・調査
- 29日 社宮司遺跡残件分調査終了
本日をもって、八幡遺跡群の残件分は完全終了となる。
- 12月5日 14年度調査終了報告及び15年度事業分につき協議(国土交通省)
- 20日 14年度調査地の現況復帰と立会い
1月から3月まで、冬季間基礎整理作業

平成15年度

15年度は、東條遺跡及び峯謡坂遺跡の調査を対象とし、本書所収の遺跡は本格的な整理作業として1名が配属となる。これについては、以下、整理経過の項にて記述する。

※文中、氏名等敬称略す。

(6) 調査の公開

平成13年9月9日、社宮司遺跡の調査進捗状況を見計らって現地説明会を開催した。六角木幢出土地点は、工事用道路として先行引き渡ししたため、現説ではSD 01とSD 03に囲まれた②地区、さらに地鎮遺構を中心とする③地区に限定し実施した。遺物では六角木幢の宝珠、風鐸等飾り物を中心に、緑釉手付瓶、墨書土器などを展示解説した。当日は、午前と午後の説明では事足りないほど、県内外の見学者（記帳者で520名）があり、盛況であった。

2. 発掘記録の整理方法

調査記録の3種類（図面・写真・所見記述）は、整理作業の後、各台帳類（図面台帳・遺構台帳・遺物台帳・写真台帳）とともに収納できることを方針とする。

(1) 図面類

割付平面図を始めとする遺構等の図面類は、1枚ごとに図面通し番号を付し、図面内容のチェックを行う。内容とは、測量基準杭や水準高、遺構番号等の必要項目から入り、平面図と断面図の照合、さらには出土遺物との照合まで幅広い作業項目があり、当センターで呼ぶ「基礎図面整理」を指す。基礎的な図面の修正作業を終えると、公開または報告書に使用する目的で2次的な図面を作成する。割付図面は膨大な記録数に及ぶため、原則1/100で作成する。個別図面では、平面図として完掘図、遺物出土状態図、掘り方図の3通りを、断面図として土層図とエレベーション図を1/60で2次原図化する。したがって、特別の場合を除き、発掘記録されたデータは最小限、報告書に掲載される。

出土遺物に関する図面類も、1枚ごと連番とし、土器、石器、木製品と材質ごとに整理・収納する。遺物台帳と合致していることが前提である。

(2) 写真類

写真の整理は、発掘調査と一部並行して進められるが、年度別・遺跡単位を原則に、アルバム・台帳を完備する。この時点で「写真台帳」に記載された撮影記録は、すべて写真アルバムに転記される。整理作業に至り、検索の利便性を図るために、遺構ごとの「遺構別写真台帳」を新たに作成した。

(3) 所見等の記述類

発掘調査を担当した調査研究員は、遺構調査の経過や判断を所見として、各遺構単位に「所見カード」として残す。整理段階で作成した2次原図にそのコピーを貼付し図面化するのが、当センターの仕様であるが、近年の記録媒体の多様化により、職員の対応も一様でなくなりつつある。「所見カード」そのものの方式にも、統一性が欠落している實際を配慮し、方式を統一することはやめて、「所見カード綴り」として紙媒体での収納法のみを統一した。報告書の調査経過や観察、所見は、所見カード化された各遺構担当者の記述に基づいて作成するが、前術のように、それに齟齬や不備のある場合は、遺跡担当者が検討を加え、事実と反しない限りで記述した。

(4) 遺物類

遺物の整理作業は、洗浄→遺物台帳作成→注記→分類・属性記録→接合・復元→実測→写真撮影という一連の作業工程で実施する。「洗浄」から「注記」までは、冬季に実施した。

土器・石器

出土土器は、当センターで調査した中央道長野線建設に伴う松塩筑地域の調査成果—総論編—の分類基準を参考とし、当該地域の千曲市屋代遺跡群—総論編—の名称・時期区分（凡例参照）を採用した。

接合は、遺構ごと、遺構外は中地区ごとに実施、重複関係にある遺構あるいは独特な器形・胎土を示す例については、遺構間等で接合作業を行った。復元は、原則として「接合補強」に留め、実測・図化に耐

えられることを目的とし、展示用復元は実施していない。なお、接合・復元は徳永哲秀調査研究員（平成13年度）及び豊田義幸調査研究員（平成14年度）の指導に基づき、復元班で実施した。

分類・選別は、出土したすべての土器を、焼き物の種類（非ロクロ土師器・ロクロ土師器・黒色土器A・B・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器等）に分類し、さらにそれぞれの属性（部位と重量）を記録する。個体数の算出はSBとSDについてのみ実施するが、本書には掲載していない。実測対象資料は分類作業中に適宜抽出し、実測用土器として台帳管理する。土器の分類及び属性記録は石上周蔵調査研究員が中心となって実施し、中世以降の焼き物については市川隆之調査研究員の助言を得た。なお、灰釉陶器及び緑釉陶器の産地・窯式については、愛知県陶磁資料館学芸員 井上喜久雄氏の指導に基づくほか、緑釉陶器については大阪大学助教授 高橋照彦氏の教示を得た。

漆等の付着物分析は、(株)パレオ・ラボに業務委託し分析した。

実測・墨入れ作業は、接合・復元された資料を、廣田和穂調査研究員の指導に基づき、実測班で実施する。実測法は当センターの「(仮)古代の土器実測法」仕様に基づく。

遺物写真は、(株)写真の宮川に業務委託し、600万画素にてデジタル撮影したほか、集合写真に関しては、奈良文化財研究所技術職 牛嶋 茂氏に技術指導、撮影協力を得た。

木製品

木製品は、発掘調査の段階で自然木の選別及び樹種鑑定用サンプルの抽出を西 香子調査研究員が実施。発掘調査終了後、冬季期間にシーラパックし、仮保存して置いた。整理時に開封し、台帳との照合、接合及び実測作業を行うが、大道遺跡ほかを寺内貴美子調査研究員が、社宮司遺跡を豊田義幸調査研究員が中心となって実施した。また大形木製品等の実測に関しては、大部分を(株)シン技術コンサルに実測業務委託した。なお、木製品に関しては、東京都立大学助教授 山田昌久氏、京都大学教授 上原真人氏より指導、助言を受けた。整理後、PEG処理ほかの保存処理は、県立歴史館にて水沢教子専門主事が中心となって実施する。保存処理の工程は、概ね以下のように行う予定である。

処理前記録→脱色処理→洗浄→(脱硫処理)→PEG含浸処理→自然乾燥→表面処理→接着・復元→古色仕上げ→処理後記録

この他、出土木材及び種実の樹種同定作業は、資料を任意選定した後、(株)パレオ・ラボに業務委託する。炭素年代測定は、(株)パレオ・ラボ、(株)パリノ・サーヴェイ、(株)加速器研究所に年次ごと、業務委託した。写真に関しては、(株)シン技術コンサル及び長野共同データサービスに業務委託した。なお、六角木幢については、寺内貴美子調査研究員が専従して実施し、その概要は以下に別記する。

金属製品

金属製品は、数量が極めて少なく、出土時の状態に緊急性が危ぶまれないことから、実測等の記録作業を優先した。保存処理は整理後に県立歴史館で実施する予定だが、工程は概ね以下となる。

処理前記録→写真撮影→X線写真撮影→錆取り→有機溶剤による洗浄→脱塩処理(青銅製品の場合はベンゾトリアゾール処理)→樹脂含浸→強制乾燥→錆取り・接着→欠損部復元・強化→樹脂塗布→古色仕上げ→処理後の記録

また鍛冶関係資料については、絶対量が稀少で、特定の鍛冶関連遺構も確認できなかったことから、目的意識を持った磁力検査や化学分析等は実施していない。必要に応じ、再整理・分析を行う必要がある。

人骨及び獣骨

出土人骨(SK 740)の形質的分析は、京都大学霊長類研究所所長 茂原信生氏に依頼した。獣骨及び骨角牙製品は、独協医科大学助手 桜井秀雄氏の鑑定を得たほか、姉崎智子氏(平成15年4月より群馬県立自然史博物館)の指導を得た。出土遺構・地区ごと、タッパーウェアに乾燥保存してある。

漆紙関連資料

SD 03 出土の漆紙文書は、整理開始期の注記作業時に発見した。したがって、出土状態等の情報に欠落する部分があり、出土位置と層位のみが確認できる。他の文字関係資料とともに、国立歴史民俗博物館教授（平成 17 年 4 月より館長）平川 南氏に解説を依頼し、指導を得た。

六角木幢関連資料

木幢は、国内初の発見遺物であったが、発掘期間中は、篠ノ井整理棟にて水槽に仮保管されていた。平成 14 年の冬季期間に、寺内貴美子調査研究員が、木幢仏画の観察と実測を実施した。平成 15 年 4 月以降、本格的整理を計画し、寺内貴美子調査研究員が実測図化作業を、町田勝則調査研究員が仏画のデジタル画像トレースを行った。また、平成 15 年 6 月には藤澤典彦大谷女子大学教授を委員長とする「六角木幢等整理検討委員会」を組織し、18 年 3 月まで継続予定である。委員は、藤澤委員長以下、沢田正昭筑波大学教授、武笠 朗実践女子大学教授、森田 稔文化庁主任文化財調査官（平成 17 年 3 月まで）、矢島新渋谷区松涛美術館学芸員の 5 名に委嘱する。

樹種分析及び炭素年代測定（AMS 法）は、(株)パレオ・ラボ社に業務委託し実施した。

顔料分析は、赤外線分析を長野県立歴史館白沢勝彦専門主事に、蛍光 X 線分析を東京文化財研究所早川泰弘主任研究官及び奈良文化財研究所 高妻洋成主任研究官に、エミシオグラフィ分析を東京文化財研究所 三浦定俊協力調整官に依頼し実施した。

仏画は、元奈良国立博物館館長 濱田 隆氏の教示を得たほか、仏画の読み取りは、デジタル画像処理法を用い、(株)セビアスに業務委託した。なお、元興寺文化財研究所研究員 佐藤亜望氏からは、建造物の観点から教示を得た。

写真撮影は、奈良文化財研究所 牛嶋 茂技術職に指導依頼し、撮影した。

保存処理前の現物レプリカの作成は、(株)京都科学に業務委託した。

保存処理は、奈良文化財研究所との協同研究で、平成 16 年度に開始、20 年度終了予定である。

(5) 整理の体制と期間

平成 15 年度体制： 図面等基礎整理及び遺物分類、接合

所 長： 深瀬弘夫 副所長（兼管理部長）： 原 聖 管理部長補佐： 上原 貞

調査部長： 市澤英利 調査第二課長： 平林 彰

調査研究員： 寺内貴美子（11 月まで） 町田勝則（8 月から） 石上周蔵 豊田義幸（11 月より）

平成 16 年度体制： 図面等基礎整理及び遺物実測、遺構・遺物のトレース等、文章執筆、編集

所 長： 小沢将夫 副所長（兼管理部長）： 藤岡俊文 管理部長補佐： 上原 貞

調査部長： 市澤英利 調査第二課長： 平林 彰

調査研究員： 町田勝則 豊田義幸

平成 17 年度体制： 遺物観察表等 DVD の編集、収納、報告書刊行業務

所 長： 仁科松男 副所長（兼管理部長）： 根岸誠司 管理部長補佐： 上原 貞

調査部長： 市澤英利 調査第二課長： 平林 彰

調査研究員： 町田勝則（7 月まで）

整理補助員（平成 15 年度から 17 年度）

阿部貴子 飯島公子 飯塚妙子 石田多美子 浅井とし子 大内秀子 大田節子 大久保貴美江 風間夏枝 窪田順 倉沢より子 近藤朋子 斉藤いづみ 佐藤進 鳥羽仁美 三浦正美 柳沢澄子 稲玉美紀 山下千幸 坂田恵美子 山本和美 滝沢みゆき 半田淳子 丑山和江 加藤周子 黒岩美恵 日向富美子

(6) 整理日誌抄

平成 15 年度

- 4 月 1 日 八幡遺跡群出土遺物の注記作業、木製品観察表の作成、木幢の実測開始
- 5 月 注記・観察表の作成・木幢実測
- 6 月 24 日 砂田地籍出土木製品実測開始
- 7 月 1 日 外く衿地籍出土木製品実測開始
- 18 日 北稲付遺跡出土木製品実測開始
- 24 日 稲付遺跡出土木製品実測開始
- 29 日 第一回六角木幢等整理検討委員会開催（センターにて）
- 8 月 4 日 薬師堂地籍・中道遺跡・大道遺跡出土木製品の实測開始
- 11 日 社宮司遺跡木製品の实測等整理開始
- 9 月 1 日 八幡遺跡群の基礎図面修正等開始
- 17 日 六角木幢表面部赤外線撮影（県立歴史館白沢専門主事）
- 10 月 21 日 樹種分析委託（パレオラボ）
- 22 日 文化庁森田 稔主任調査官、六角木幢指導
- 27 日 大道遺跡ほかの土器観察・接合
- 28 日 京都大学霊長類研究所茂原信夫所長、SK740 等人骨肉眼観察
- 31 日 六角木幢実測終了
- 11 月 13 日 木幢表面部顔料分析（東京文化財研究所早川主任研究官）
- 30 日 寺内貴美子調査研究員産休入り
- 12 月 1 日 社宮司遺跡図面修正、土器観察・接合
- 4 日 樹種分析委託（パレオラボ）
- 8 日 六角木幢仏画像像解析委託（セビアス）
- 9 日 木幢保存処理計画協議（奈良文化財研究所）
- 16 日 中道遺跡等図面修正開始
- 1 月 5 日 大道遺跡図面修正開始
- 15 日 六角木幢仏画作図
- 23 日 炭素年代分析委託（パリノサーヴェイ）
- 2 月 2 日 宮川遺跡図面修正開始
- 5 日 人骨・獣骨類の鑑定委託（京都大学霊長類研究所）
- 13 日 大形木製品実測委託（シン技術コンサル）
- 20 日 県立歴史館伊藤友久専門主事、木製品観察
- 3 月 4 日 六角木幢復元図作成
- 10 日 平成 15 年度埋蔵文化財センター速報展、遺物展示
- 12 日 第二回六角木幢等整理検討委員会（センターにて）

平成 16 年度

- 4 月 1 日 大道遺跡の図面修正、社宮司遺跡の土器観察・接合継続
- 11 日 埋蔵文化財センター速報展・社宮司遺跡概要報告
- 5 月 11 日 社宮司遺跡の図面修正開始
- 12 日 外く衿、稲付遺跡等の出土土器実測開始
- 14 日 社宮司遺跡の土器実測開始
- 土器観察表等入力開始
- 17 日 県遺跡指導委員会視察
- 27 日 社宮司遺跡出土木製品の追加実測委託（シン技術コンサル）
- 6 月 6 日 長野県考古学会にて六角木幢研究発表
- 9 日 奈良文化財研究所高妻洋成主任研究官、保存処理等指導
- 7 月 26 日 都立大学山田昌久助教授木製品指導
- 29 日 六角木幢、奈良文化財研究所へ輸送、保存処理業務開始
- 8～11 月 社宮司図面修正・土器実測・観察表入力等継続
- 12 月 3 日 木製品再追加実測開始
- 6～8 日 奈良文化財研究所牛嶋 茂専門職写真撮影指導
- 13 日 炭素年代分析委託（加速器研究所）
- 15 日 遺物写真撮影委託（宮川写真館）
- 1 月 4 日 社宮司遺跡図面修正、観察表入力、土器実測継続、遺構図トレース開始
- 1 月 12 日 人間文化研究機構 平川 南理事、漆紙文書等指導
- 14 日 報告書編集委託（アルケーリサーチ）
- 2 月 9 日 第三回六角木幢等整理検討委員会（奈良文化財研究所にて）
- 10 日 実測作業終了、遺物図トレース開始
- 15 日 国立歴史民俗博物館で、漆紙文書の再判読
- 3 月 8 日 国際日本文化研究センター宇野隆夫教授、集落研究指導
- 10 日 遺物及び図面等の収納開始

平成 17 年度

- 4 月 1 日 16 年度に続き、報告書の編集業務
- DVD 等の編集委託（アルケーリサーチ）
- 本年度より、西中曾根遺跡の整理を開始する。
- 2 月 21 日 発掘調査報告書の印刷入札
- 信毎書籍印刷が落札し、印刷業務に入る。

(7) 整理の中間報告と資料の公開

報告:

- 2001年11月 市町村埋蔵文化財担当者発掘技師術者研修会「官衙的要素をもつ遺跡について」
- 2004年5月 「長野県の遺跡発掘2003」「調査報告 千曲市社宮司遺跡」
- 2004年6月 長野県考古学会研究発表会「千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢」
- 2005年2月 長野県立歴史館手前味噌講座「千曲市八幡遺跡群の成果と課題」
- 2005年5月 長野県立歴史館手前味噌講座「社宮司遺跡にみる律令支配から中世的世界への転換」
- 2005年9月 上田市信濃国分寺資料館「六角木幢と社宮司遺跡の概要」

公開:

- 2001年9月 社宮司遺跡現地説明会
- 2002年3月 長野県立歴史館「発掘整理速報展2001」
- 2003年4月－5月 千曲市森將軍塚古墳館 第8回企画展「地下に眠る古代の更埴」
- 2003年3月－5月 長野県立歴史館 7月 伊那文化会館「長野県の遺跡発掘2002」
- 2004年3月－5月 長野県立歴史館 7月 伊那文化会館「長野県の遺跡発掘2003」
- 2005年9月－11月 上田市信濃国分寺資料館「信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡」
- 2005年11月－2006年1月 長野県立歴史館「特別公開 六角木幢」

報道:

- 2001年9月 六角木幢の発見報道: 朝日新聞、信濃毎日新聞、中日新聞、毎日新聞、読売新聞
- 2001年11月 木棺墓の報道: 朝日新聞
- 2001年12月 遺跡紹介: 朝日新聞「日本の10大遺跡」
- 2002年5月 遺跡の概要: 文化財発掘出土情報「各地の動向」
- 2004年4月 六角木幢の仏画報道: 信濃毎日新聞、中日新聞
- 2005年2月 墨書土器の報道: 中日新聞
- 2005年2月－3月 漆紙文書の報道: 信濃毎日新聞、中日新聞、読売新聞

3. 発掘調査報告書の作成

(1) 方針

本報告書の編集方針は、調査時の記録3種(図面・写真・所見)を具体的に資料提示することにある。基礎整理の不十分さと相まって、ややもすると、基礎資料(一次資料)の中に取り捨選択されて埋没し勝ちな情報を可能な限り提示することに主眼を置いた。

(2) 編集

編集は、八幡遺跡群の全体を、北から地籍・遺跡ごとに節分けして掲載する。ページ構成は、所見・図面・写真の組み込み方式とし、該当する節のみで、遺跡調査のすべてが理解できるように編集した。遺構写真は、掲載した図面の方位に合わせるように提示したため、一見、天地が逆転したように配置される場合も多々ある。これは、実際の調査状態と記録した図面の比較(作為的な図化がないか等の第三者の検証)を目的としたもので、目視し易くするための方策である。本来は、記録化の運用を見据えて、同一方向からの撮影が好ましいのだが、間々ならない。また遺物写真に関しても、実測図化の方法が推定完形反転法によるため、あたかも実測図では完形個体と判断されかねない誤解を払拭する目的で、隣り合わせに提示してある。

なお、本書の編集組版の作業は、(有)アルケーリサーチに業務委託した。

(3) 執筆

本書は、調査第二課長平林 彰の指導と助言のもとに、調査研究員町田勝則と豊田義幸が執筆した。編集及び校正作業は町田勝則が行い、調査部長市澤英利が全体を校閲した。

なお、本書には、茂原信生氏(京都大学霊長類研究所所長)、桜井秀雄氏(独協医科大学助手)、平川南氏(国立歴史民俗博物館館長)より玉稿を賜り、第3章及び第4章に掲載した。記して謝意を表します。

第 3 章

発掘調査の概要



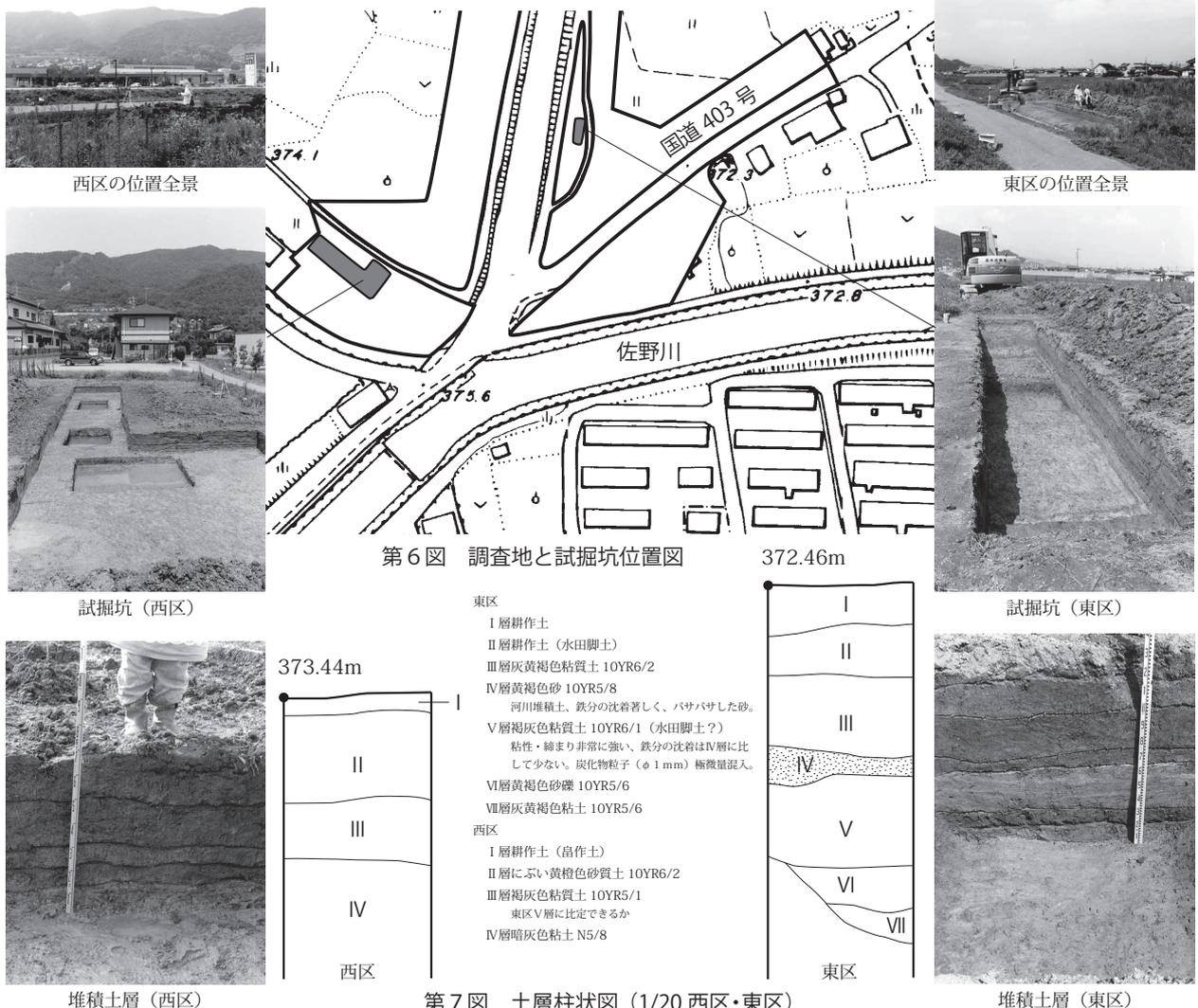
姨石の高きわすれて月や月や

碩
布

第3章 発掘調査の概要

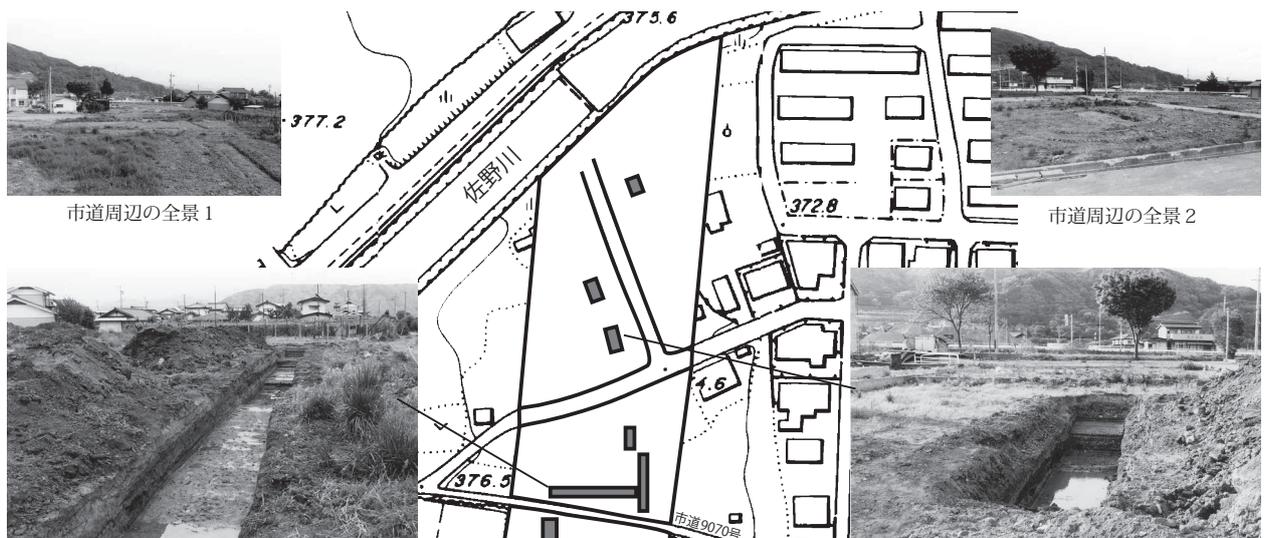
第1節 ^{さかい}境なし地籍の試掘調査

- 地籍：千曲市大字桑原字境無 1847-3、1850-7 ほか
- 期間：平成14年7月17日から23日
- 調査区：国道403号線をはさみ、東区と西区を仮称し、試掘調査を実施した。
- 調査面積：試掘面積 西区 91 m²、東区 19 m² 調査担当：町田勝則
- 調査状況：佐野川以北の工事用地内に遺跡が所在するか否かを確認する。工事工程に伴う緊急試掘調査であり、長野国道工事事務所から依頼のあった買収済みの地籍のみ試掘を行った。
- 調査結果：西区・東区ともに、佐野川の河川堆積物に覆われており、人為的構築物及び人工遺物の発見はなかった。
- 堆積層位：調査時の現況は畠地もしくは水田の荒地。重機による表土掘削作業の結果、東区に7つ、西区に4つの自然堆積層を確認した。黄褐色砂質土（10YR5/8）及び褐色灰色粘土（10YR6/1）は佐野川扇状地に堆積する基本土層である。東区第VII層は地下水位面に相当するようで、地表下、約120cm（標高372.8m）あたりで出水が認められた。

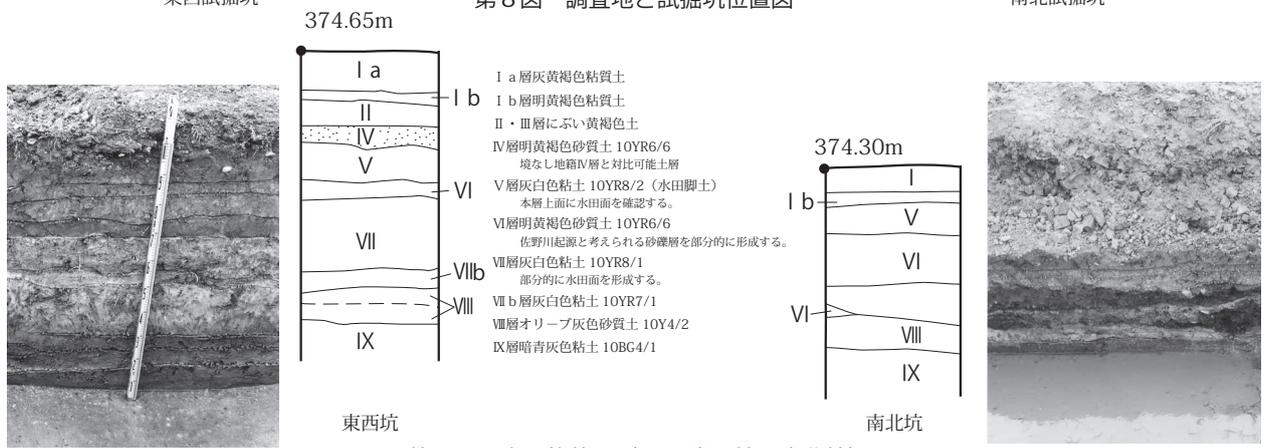


すなだ 第2節 砂田地籍の試掘調査

- 地 籍： 千曲市大字八幡字砂田 2296-7、2300 ほか
- 期 間： 平成 14 年 4 月 30 日から 5 月 9 日
- 調 査 区： 市道 9070 号線以北から佐野川までを対象とし、試掘調査を実施した。
- 調査面積： 調査対象面積 6,360 m²、試掘面積（試掘坑 9 本分） 203 m²
- 調査担当： 西 香子 太田秀保 青木一男
- 調査状況： 佐野川以南の工事用地内につき、遺跡所在の有無を確認する。当地籍も工事工程に伴う緊急試掘調査であり、長野国道工事事務所から依頼のあった買収済みの地籍を試掘した。
- 調査結果： 佐野川の河川堆積層と埋没水田跡（2 面）を確認した。埋没水田跡は現地表下約 -30cm で 1 面（上位水田面）、約 -40cm で 1 面（下位水田面）がある。出土遺物がなく、時期の特定はできないが、隣接する外く柵地籍の成果に従えば、少なくとも近世以降と推定できる。
- 堆積層位： 調査時の現況は水田もしくは宅地である。表土掘削作業の結果、水田耕土を含む 8 つの自然堆積層を確認した。基本土層となる黄褐色色砂質土（10YR5/8）及び褐灰色粘土（10YR6/1）の堆積は認められる。第Ⅷ層は地下水位面と考えられ、地表下、約 110cm（標高 374.1 m）あたりで出水が認められた。
- 出土遺物： なし



第 8 図 調査地と試掘坑位置図



第 9 図 土層柱状図（1/20 東西坑・南北坑）

第3節 ^{そとくね}外く柵遺跡の試掘調査

地 籍： 千曲市大字桑原字外く柵 2266-8、2269-1 ほか

期 間： 平成 12 年 6 月 22 日から 7 月 12 日

調 査 区： 農道 8623 号線以北から市道 9070 号線までを対象とし、試掘調査を実施した。

調査面積： 調査対象面積 7,143 m²、試掘及び本調査面積 (1,838 m²)

調査担当： 町田勝則 上田典男

調査状況： 千曲市内の遺跡登録番号 (85-8) にあたり、奈良・平安時代の遺物散布地として周知されている。今回の調査に先立ち、県埋蔵文化財センターでは遺跡記号 (BSK) を与えた。調査は既存の登録遺跡であることから、幅 4 m ほどの広めの試掘坑を設定して進め、遺物の発見あるいは埋没土壌に変化が認められた場合に、試掘坑を拡張して面的確認に入った。ただし、調査時点で未買収地 (2266-5) であり、周辺の試掘結果から、試掘の必要性が認められないと判断した地籍については、調査を実施しなかった。

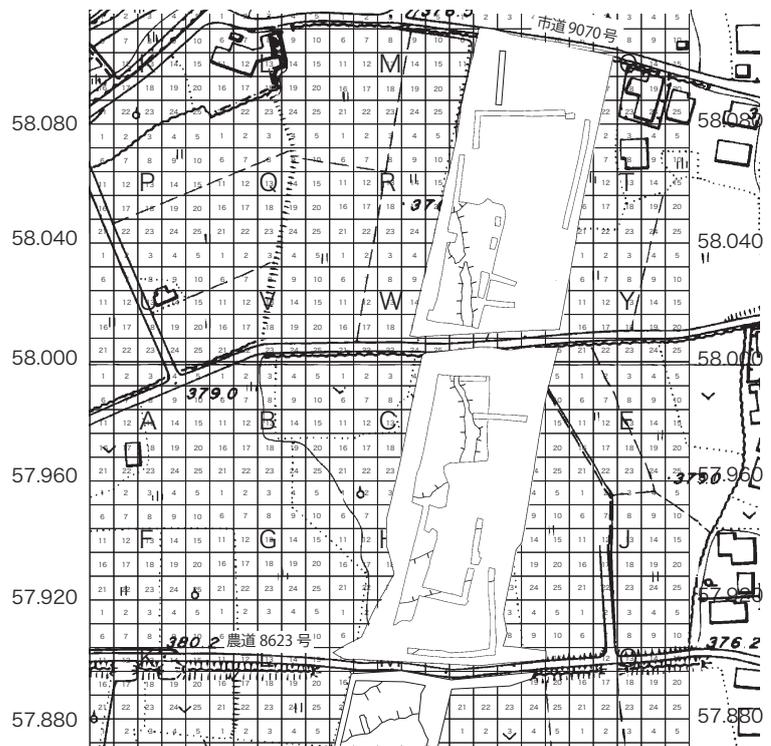
調査結果： 佐野川の河川堆積土と埋没流路 5 本を確認した。調査区内は南高北低の地形を示し、北稲付地籍よりの南側は、現地表下約 -40cm から -50cm で基本土層の黄褐色砂礫層を確認、砂田地籍よりの北側では約 -70cm から -80cm で、黄褐色砂礫層を認めた。同面にて検出された褐灰色粘土の堆積層が埋没流路の埋土に相当し、堆積層を -30cm 程度掘削するも、流木等の流下物はほとんど認められず、出土遺物も極めて少なかった。隣接する現水田直下から伸びる暗渠排水施設の現況保護と止水の必要性から流路底面までの掘削は断念した。埋没流路は調査区北端に確認されたものを SD 05、中央部西側の広がるものを SD 03、東側に広がるものを SD 04、南端の東西に横断するものを SD 02 とし、北稲付地籍から伸びるものを SD 01 と符号した。SD 02 から SD 05 までの流路は、検出状況から判断して自然流路と考えられ、発見された幾つかの人工物は、そこに流下し包含された遺物と推定できる。ただし堆



調査前の全景(X区)



II層掘り下げ風景(W区)



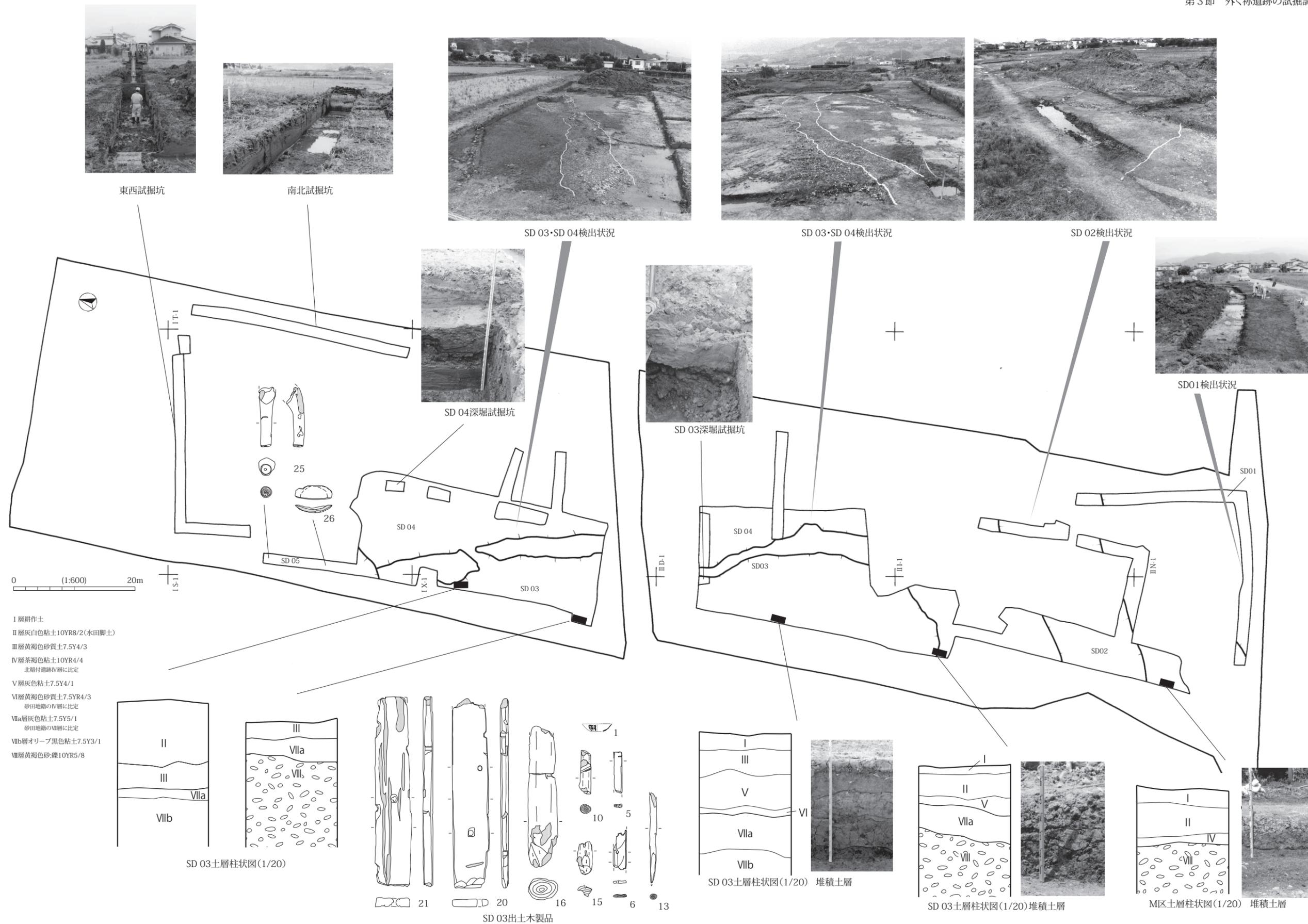
第 10 図 調査地と試掘坑位置図

積層の状態と SD 01 で行った土壌分析結果を参考とすれば、流路の流れは恒常的ではなく、流下物の移動距離もごく至近であったと考えることができる。

堆積層位： 調査時の現況は水田である。表土掘削作業の結果、水田耕土（Ⅱ層）を含む7つの自然堆積層を確認した。基本土層となる黄褐色砂礫（Ⅷ層 10YR5/8）を基盤とし、当調査区のほぼ全面にわたり褐色砂質土（Ⅲ層 7.5YR4/3）及び灰色粘土（Ⅴ層 7.5Y4/1）の堆積が認められた。Ⅳ層とした茶褐色粘土は、調査区南側の SD 01 付近に堆積が認められた。多量の有機物を混入した粘土層で、北稲付遺跡のⅣ層に比定できる。調査区北側に確認した埋没流路は、SD 03 例で地表下約 80cm（標高 376.2 m）を検出面とする。Ⅴ層の灰色粘土下に堆積したオリブ黒褐灰色粘土（Ⅶb層 7.5Y3/1）が埋土である。

出土遺物： 出土した遺物には、土器 8 点、木製品 95 点、黒曜石剥片 1 点がある。土器の器種別内訳は表 3 に示すとおり、土師器杯類を中心とする。図示した 1 は SD 03 より出土した須恵器杯 A 類。回転ロクロ成形、糸切り離しで、外面に墨書一字「田か」がある。口径 13cm を測り、口縁部外面は使用により磨耗光沢し、墨書の一部が擦れている。内面には焼成時のタスキ文がある。

木製品の内訳は表 5 に示したとおり SD 03、SD 04、SD 05 から木製遺物が出土した。SD 03 からは、図示した 2～24 が出土している。2 は板材木片で 3 片からなる。3 は薄い板破片。4 は板状木製品で薄い板材の破片。5 は板材で両端及び両側面が欠損している。表面は平滑で金属製刃物の刃痕がわずかに残る。6 は両端の欠損した板状木製品。表裏面とも平滑である。側面近くに径 4 mm の孔が穿たれている。7 は表面が平滑で、裏に割れ痕が残る板材。一端欠損する。8 は板材で両端が欠損する。加工材の断欠材と考えられる。9 は板材で 3 片からなる。製材され表裏面は平滑である。両端に切断面が残り、一方には斜め方向の切断痕が残る。右側面部は木目に沿って欠損する。10 は棒状木製品。木目の成長線の様子から、春から夏にかけての切り込みであることが想定できる。表面は平滑で両端は欠損する。11 も棒状木製品。10 と同様に春夏にかけての切り込みであろうか。一端は切断後、折った痕跡がある。もう一端は斜めに切断された可能性がある。12 は棒材で、一端は斜めに切断される。表面は平滑。13 は棒状木製品。図の下端はふたつの方向から削って切断している。切断角は浅いため切断面が長い。もう一端は欠損する。14 は棒状木製品。端部は欠損し、表面は調整加工される。樹芯部よりのほぼ半割部分のみ残存する。15 は杭材。樹芯部に沿って割り成形する。斜めに入る切断痕が明瞭に残る。16 は杭材である。上端は欠損し、下端は斜めにふたつの方向より切断痕が入る。17 は角状木製品。右側面のみ平滑で調整加工されるが、他の面は破損し形状ははっきりしない。二方柱であるため、部材である可能性を考える必要がある。18 は建築材等の破材か。形状ははっきりしない。19 は板目板材で下端部が欠損する。左側面垂直に切断（鋸）し、右側面に浅いホゾ加工が施される。ホゾは長さ 1.5cm、深さ 0.5cm を計る。20 は板目板材。21 に形状が類似する。右側面よりと下方中央部に 0.8～1 mm の孔がある。右側面上方には、長さ 1.0cm、深さ 0.6cm の台形状の欠き込み孔がある。さらに中心から対応するように下方には、同様の欠き込みがあったと考えられる浅い段が残る。21 は板目板材。中心部に径 1.0cm の孔がある。右側面中心部に長さ 1.5cm、深さ 0.7cm の切り込みがあり、釘穴と思われる痕跡が残る。また同じ側面の下端近くに、長さ 2.5cm、深さ 0.8cm の欠き込みが残る。両端に切断面があり、下端は切り折った痕跡が残る。22 は板目板材。不整形な孔が左側面側にあるが、当初は円形の孔をあけたが、剥がれ割れが生じたとも考えられる。長さ、厚みなど形状から判断し、20、21 と同じ用途に使われたものと考えられる。23 は加工材。一端欠損し、一部炭化する。2 方向より斜めに切断さ



第11図 外く祢遺跡調査区全体

れる。切断面はやや腐蝕しているものの先端部がやや尖る。24 は器種不明品。表面は比較的平滑。裏面は腐蝕したのか木目に沿って窪みが観察できる。SD 05 からは以下2点が出土している。26 は椀の一部であろうか。赤漆が外面部の端に残るが、木地全面に塗られていたと判断できる。図の右端は口縁部。全体形は両側面が欠損していて、はっきりとした形状はつかめないが、平底状の部分はない。椀や匙など食膳具の類と考えられる。25 は棒状木製品。表面は調整されて滑らか。下端は垂直方向に切断される。上端は枝根の部分をそのまま留め厚みがある。残滓と考えられる種子は、SD 03 よりモモ1 個体、クルミ2 個体分が出土している。

遺構名	土師器			須恵器		数 / 総重量 (破片 / g)
	杯 A	杯 ?	杯 A (内黒)	杯 A	鉢	
SD 02	1		1			2/10.1
SD 03	2	1	1	1	1	6/95.4

第3表 遺構内出土土器組成

挿図番号	出土地区	遺構名	層位	器種名	残存	接合	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特 徴
第12 図1	I X・II C	SD 03	埋土	須恵器杯A	1/3	2片	13.0	3.4	5.3	回転ナデ

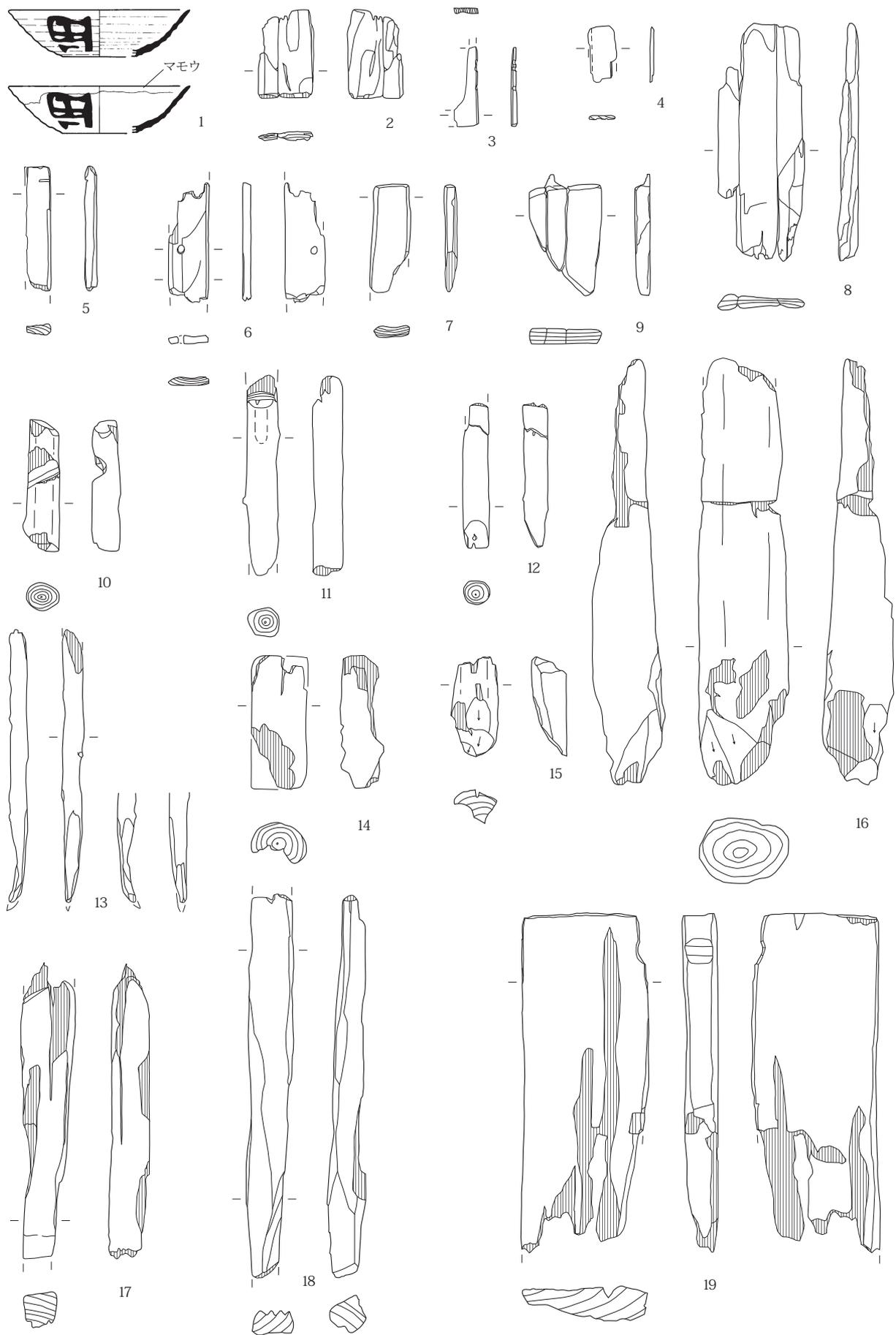
第4表 SD 03 出土土器属性

遺構名	椀状木製品	板状木製品	棒状木製品	柱	板材	角材	棒材	杭	加工材	破片	自然木	総数
SD 03		3	7	1	35	1	8	2	2	18	15	92
SD 04					1							1
SD 05	1		1									2

第5表 遺構内出土木製品組成

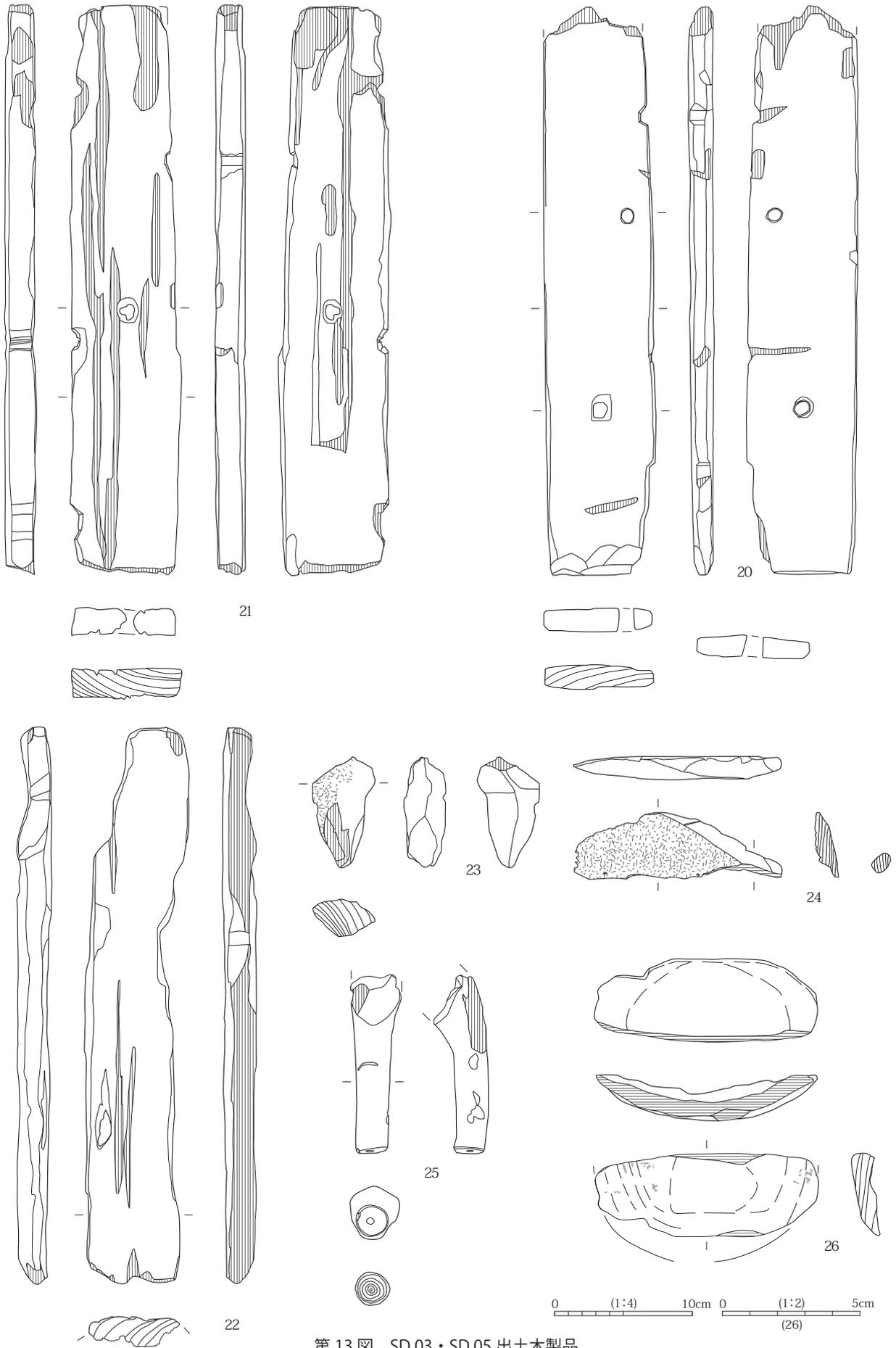
挿図番号	出土地区	遺構名	層位	器種名	木目・木取	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状の特徴
第12 図2	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	モミ属	6.4	4.0	0.6	No21・22 と接合
第12 図3	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	サワラ	5.8	1.8	0.4	
第12 図4	I X・II C	SD 03	埋土	板状木製品	—	ヒノキ	(4.1)	1.9	0.3	
第12 図5	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	サワラ	(4.0)	(1.8)	0.8	
第12 図6	I X・II C	SD 03	埋土	板状木製品	板目	サワラ	(8.7)	2.9	0.6	孔有り
第12 図7	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	サワラ	(7.8)	2.6	0.8	
第12 図8	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	アスナロ	(8.6)	(5.0)	(1.0)	No83・84 と接合
第12 図9	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	ヒノキ	(9.0)	(4.0)	1.0	No68・74 と接合
第12 図10	I X・II C	SD 03	埋土	棒状木製品	丸木芯持	ヤナギ属	(9.6)	直径 2.4		切り込み、削りだし
第12 図11	I X・II C	SD 03	埋土	棒状木製品	丸木芯持	クリ	(14.6)	直径 2.5		切り込み
第12 図12	I X・II C	SD 03	埋土	棒材	丸木芯持	ニフトコ	(10.5)	直径 1.9		先端切断痕有り
第12 図13	I X・II C	SD 03	埋土	棒状木製品	丸木芯持	ネジキ	(19.8)	直径 (1.6)		先端加工
第12 図14	I X・II C	SD 03	埋土	棒状木製品	丸木芯持	クマノミズキ類	(9.6)	直径 (3.9)		一部 1/2 材
第12 図15	I X・II C	SD 03	埋土	杭材	斜め	クマシデ属	(7.2)	直径 (3.3)	(2.5)	1/2 材
第12 図16	I X・II C	SD 03	埋土	杭材	丸木芯持	オニグルミ	(21.0)	直径 5.0		
第12 図17	I X・II C	SD 03	埋土	棒状木製品	二方板	モミ属	(21.4)	(3.9)	(2.6)	割材
第12 図18	I X・II C	SD 03	埋土	棒状木製品	板目	モミ属	(27.7)	(3.3)	(2.7)	割材
第12 図19	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	モミ属	24.6	9.0	2.5	削りだし
第13 図20	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	サワラ	41.5	8.0	1.8	孔 2 つ
第13 図21	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	モミ属	41.5	7.6	2.0	孔 1 つ
第13 図22	I X・II C	SD 03	埋土	板材	板目	サワラ	40.6	6.7	2.2	孔 1 つ
第13 図23	I X・II C	SD 03	埋土	加工材	斜め	クヌギ節	(8.0)	(4.5)	(2.7)	炭化
第13 図24	I X・II C	SD 03	埋土	不明	板目	モミ属	(15.1)	(4.8)	(1.6)	
第13 図25	I R・S	SD 05	埋土	棒状木製品	丸木芯持	オニグルミ	13.2	3.5	3.7	切断痕有り
第13 図26	I R・S	SD 05	埋土	椀	横木取り	クリ	(8.0)	(3.0)	0.5	赤漆あり 削りだし

第6表 SD 03 ~ SD 05 出土木製品属性



第12図 SD03 出土土器及び木製品

0 (1:4) 10cm



第13図 SD 03・SD 05 出土木製品



第14図 SD 03 出土土器及び木製品（写真）

第4節 きたいなつき 北稲付遺跡の調査

地 籍： 千曲市大字八幡字北稲付 2262-1 ほか

期 間： 平成 12 年 6 月 13 日から 6 月 26 日

調 査 区： 市道 9100 号線以北から農道 8623 号線までを対象とし、試掘調査を実施した。

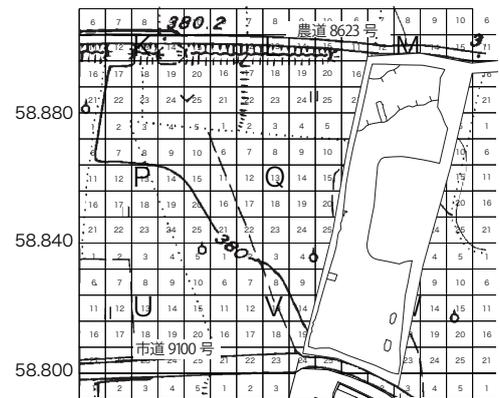
調査面積： 調査対象面積 3,011 m²、試掘及び本調査面積 (1,818 m²)

調査担当： 上田典男 町田勝則

調査状況： 千曲市内の遺跡登録番号 (85-15) にあたり、奈良・平安時代の集落跡として認知されている。過去の遺跡調査は、旧更埴市教育委員会・同遺跡調査会による 1982 年度の試掘並びに 1983 年 7 月の発掘調査 (1984 更埴市教委会ほか) がある。今回の調査は、それらの成果に基づき、県埋蔵文化財センター遺跡記号 (BKI) を与え、面的掘削を行って集落遺跡の広がりを目指した。

調査結果： 面的掘削の結果、佐野川の河川堆積土と埋没流路 1 本を確認した。流路は調査区北端から外く柵地籍にかけて確認でき、若干量の人工物を包含する。検出位置は、83 年度調査地の東方 70 m にあたり、埋没土及び遺物包含状況から判断して、「水分を多く含んだ黒色土」(P8, 1984 旧更埴市教委会ほか) と報告された V 層とほぼ同一の堆積土と推定できた (第 16 図)。今回の調査区は、現地表下約 -40cm ほどで基本土層の黄褐色砂礫層に至り、SD 01 は同面にて検出された黒褐色粘土層以下、6 層程度の堆積土が確認できた。出土遺物の大部分は、第Ⅲ層黒褐色粘土中に含まれており、出土状況から判断して廃棄あるいは流下物と推定できた。SD 01 以外に遺構の確認はない。

堆積層位： 調査時の現況は水田である。表土掘削の結果、水田耕土を含む 4 枚の自然堆積層を確認した。Ⅲ層の灰色粘土 (7.5Y3/1) 直下に黄褐色砂質土 (7.5YR4/3) が存在する。また II W 区には、Ⅲ層直上に黄褐色砂質土 (10YR5/3) が広範囲に分布している。埋没流路 SD 01 では、第Ⅲ層以下第Ⅸ層暗緑灰色粘土 (7.5GY4/1) まで、第 16 図のように約 60cm に及ぶ堆積層が認められた。



第 15 図 調査地と試掘坑位置図



調査前の全景 (W 区)

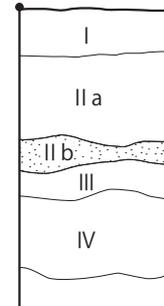


遺構検出の様子 (V 区)



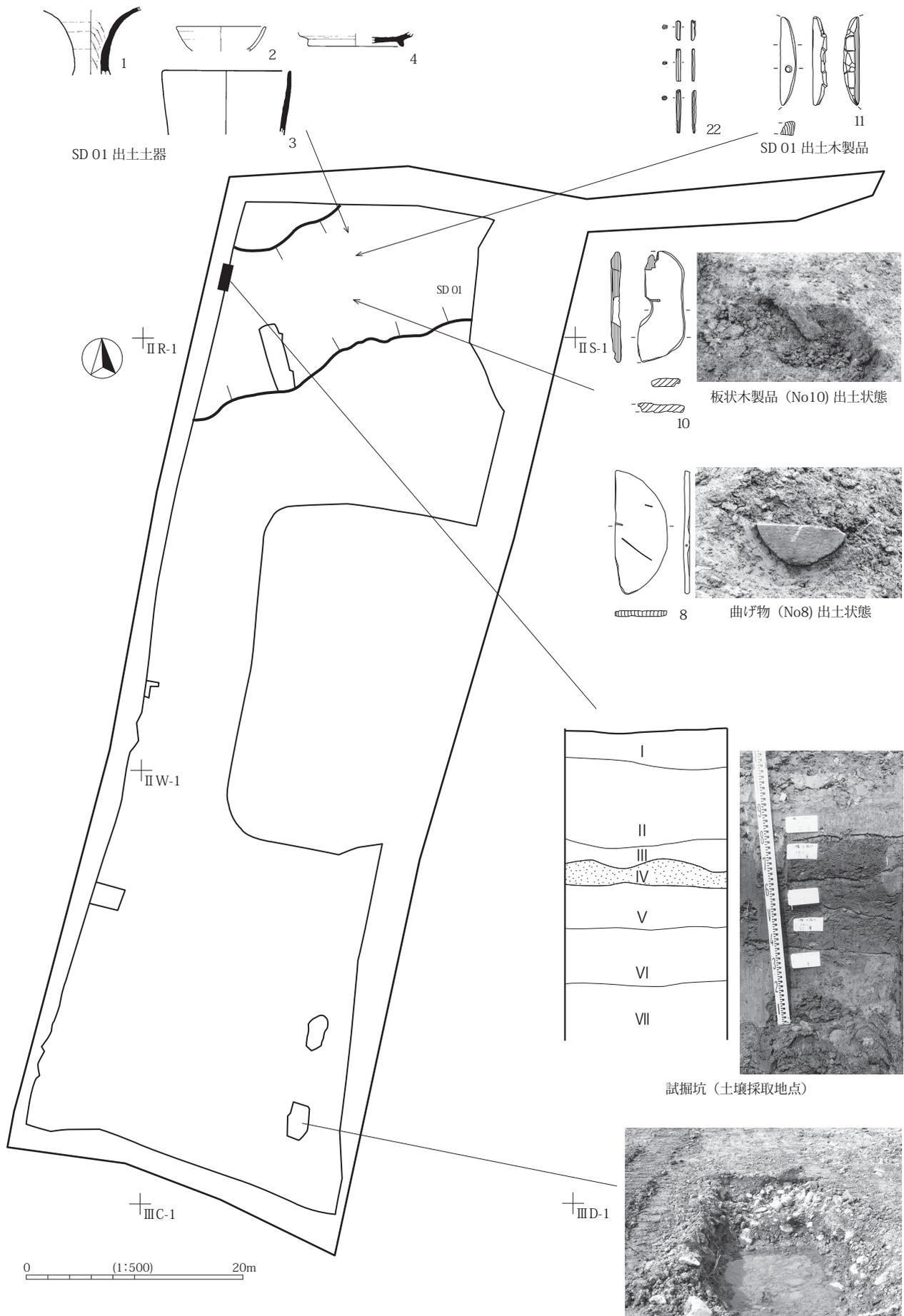
堆積土層

379.54m



- I 層耕作土
- II 層灰色粘土 7.5Y5/1 (水田脚土)
- II a 層にふい黄褐色砂質土 10YR5/3
本遺跡にのみ堆積する
- II b 層にふい黄褐色粘土 10YR5/3
外く柵遺跡のⅢ層に対応か
- Ⅲ層灰色粘土 7.5Y3/1
- Ⅳ層黄褐色砂質土 7.5YR4/3

第 16 図 土層柱状図 (1/20)



第17図 北稻付遺跡調査区全体

試掘坑

出土遺物： 出土した遺物には、土器65点、木製品87点、古銭2点（永楽通寶1・不明1）、馬の歯1点がある。土器及び木器の器種別内訳は表7・9に示すとおりである。土器は土師器甕及び杯類の破片を中心とするが、須恵器では壺類の破片が多く出土している。図示した1は須恵器長頸壺A類の頸部破片で表採。2は黒色土器杯A類の口縁部破片。3は須恵器杯B VI類?であろうか。4は須恵器杯B類の底部破片で、高台は外面接地型である。2から4はSD 01の埋没土IV層からの出土。5は馬の歯である。6・7は「永楽通寶」・「□□□□」名ある銭貨。8は曲物底板で1/2を欠失する。表裏面とも平滑で、表面には斜めに刻線が一本確認できる。また側面には1箇所、釘穴が認められる。サワラ材の柾目板。9は板状木製品としたが、表裏両面とも平滑で、端部はやや弧状、薄板の特徴から、曲物の残欠品と考えられる。板目のサワラ材。10は板状木製品。中心部に3.5cmの孔があり、欠損により半孔状となっている。欠損と判断できそうな側面は直線的で、他はやや弧状に形づくられる。表裏面とも平滑に加工されている。11は連歯下駄の一部。前歯、後歯ともに磨耗が激しい。歯は削り出しで、表面は平滑にいていねいに加工され、堅固である。欠損部があり全体の形状ははっきりしないが、大きさから子ども用と判断でき、その右足用である。横木取り、サワラ材。12は板状木製品とした薄板材。破材、断欠材であろうか。ヒノキ属の柾目板。13も板状木製品の薄板材木片。曲物側板と考えられるか。柾目のサワラ材である。14は薄板材木片の破材。サワラ材で柾目板。15は板状木製品。木目はみかん割りである。両端が欠損している。破材か。16は板状木製品。柾目のサワラ材。表面は平滑に仕上がっている。両端は欠損。17は板状木製品。板目の加工材、破材か。サワラ材。18も板状木製品で、柾目、サワラ材。19は板状木製品。分割材で、上端には垂直方向に切断痕跡が認められるが、表裏面ともに堅著な加工の痕跡はない。20は板状木製品。柾目、薄板材の破材。21は棒状木製品としたが、削り出しで、下端に近づくほど径を減じることから、ハシの可能性が考えられる。接点はないが、同一片と考えられる破片3点がある。22は棒状木製品。端部は欠損。表面平滑に調整されているが、枝芯部が残る。芯持ち丸木材を半截したものでミヤマハイツ材である。23は杭材。みかん割りの6分1材。上端を欠損する。下端には木目を横切るわずかな刃痕が観察できる。カエデ属。24・25は一部に燃焼痕を留める自然木。25は湾曲した枝部分で、24同様に端部が一部炭化している。樹種はカヤカ。

遺構名	土師器				須恵器								灰釉 椀?	白磁 皿?	数/総重量 (破片/g)
	杯A	杯A(内黒)	甕	不明	杯A	杯B	杯?	杯蓋	四耳壺	長頸壺	瓶	甕			
表土 検出面		3	2	7		1	1	5	2		1				12/330.5
SD 01. IV層	7	2	10		2	2	2		2	5	1		1	34/401	

第7表 出土土器組成

挿図番号	出土地区	遺構名	層位	器種名	残存	接合	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特 徴
第18図1	表土		埋土	須恵器長頸壺	頸部	-	-	-	-	回転ナデ
第18図2	II M	SD 01	IV	土師器杯A(内黒)	1/4	○	(13.0)	-	-	回転ナデ・内面ミガキ
第18図3	II M	SD 01	IV	須恵器杯B	口縁	-	(9.6)	-	-	回転ナデ
第18図4	II M	SD 01	IV	須恵器杯B	底部	-	-	-	(13.0)	外面設置高台

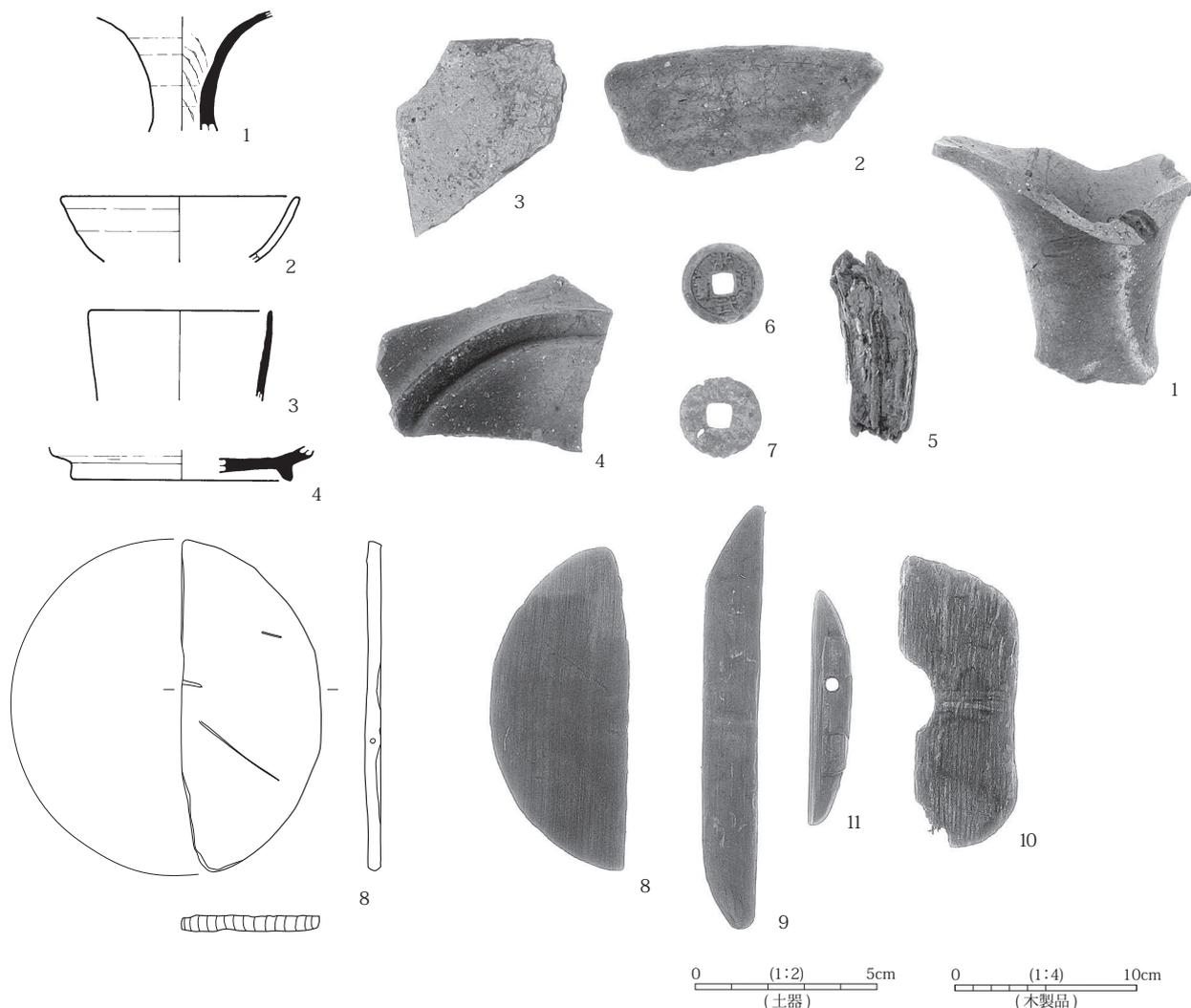
第8表 出土土器属性

遺構名	下駄	曲げ物	板状木製品	棒状木製品	板材	角材	棒材	杭	加工材	破片	自然木	総数
SD 01	1	2	34	10	6	3	8	3	1	9	10	87

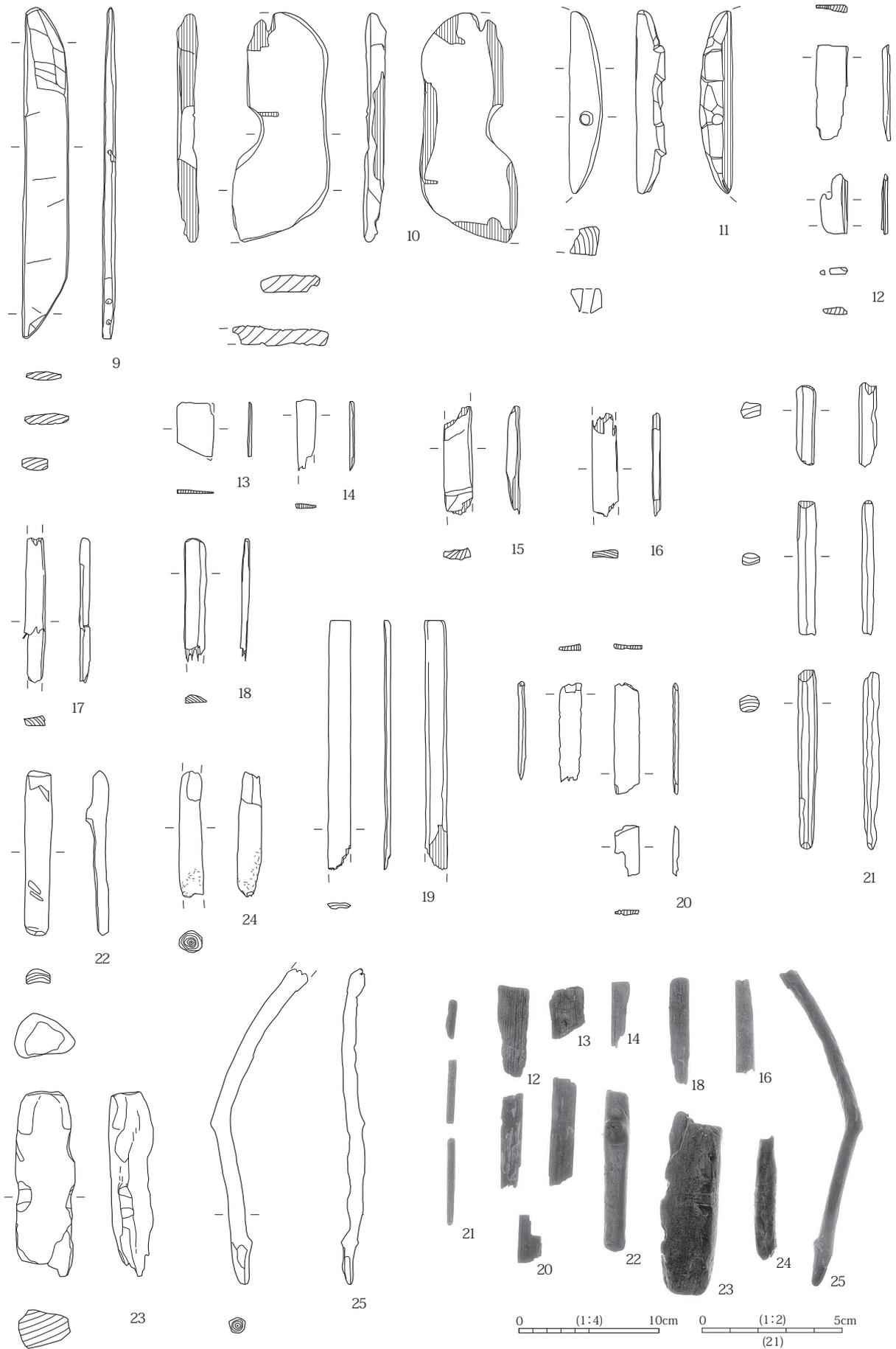
第9表 出土木製品組成

挿図番号	遺構名	層位	器種	木目・木取り	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状の特徴
第18図 8	SD01	埋土	曲物底板	柂目	サワラ		直径 18.3	0.9	1/2 欠
第19図 9	SD01	埋土	曲物?	板目	サワラ	(23.8)	(3.3)	0.9	両端に加工痕有
第19図 10	SD01	埋土	板状木製品	追柂目	サワラ	16.5	(6.9)	1.4	中心に直径 3.5cm のくりぬき有り有孔
第19図 11	SD01	埋土	下駄歯	横木取り	サワラ	13.1 + α	2.3 + α	2.0	3/4 欠 孔 1 つ 連歯下駄の歯か
第19図 12	SD01	埋土	板状木製品	柂目	ヒノキ属	(6.8)	2.3	0.5	No23 と同一個体
第19図 13	SD01	埋土	板状木製品	柂目	サワラ	(3.9)	2.6	0.2	一部炭化
第19図 14	SD01	埋土	板状木製品	柂目	サワラ	(5.1)	1.4	(0.3)	No16・19・38 同一個体
第19図 15	SD01	埋土	板状木製品	斜め	カヤ	(7.8)	2.1	(0.8)	
第19図 16	SD01	埋土	板状木製品	柂目	サワラ	(7.4)	1.8	0.6	
第19図 17	SD01	埋土	板状木製品	—	サワラ	(10.4)	(1.4)	0.7	No21 と同一個体
第19図 18	SD01	埋土	板状木製品	柂目	サワラ	(8.8)	(1.5)	0.6	
第19図 19	SD01	埋土	板状木製品	分割	タケ亜科	(17.9)	1.6	0.4	炭化
第19図 20	SD01	埋土	板状木製品	柂目	サワラ	(7.0)	1.6	0.4	No18・19・38 と同一個体
第19図 20	SD01	埋土	板状木製品	斜め		(8.0)	2.0	(0.3)	No16・18・38 と同一個体
第19図 20	SD01	埋土	板状木製品	斜め		3.6	1.8	0.3	No16・18・19 と同一個体?
第19図 21	SD01	埋土	棒状木製品	削出	ヒノキ	(6.4)	0.7		削りだし No42・43 と同一個体?
第19図 21	SD01	埋土	棒状木製品	削出	ヒノキ	(4.8)	0.6	0.4	削りだし No40・43 と同一個体?
第19図 21	SD01	埋土	棒状木製品	削出	ヒノキ	2.9	0.7	0.6	削りだし No40・42 と同一個体?
第19図 22	SD01	埋土	棒状木製品	半截	ミヤマハハソ	(11.8)	2.0	1.0	
第19図 23	SD01	埋土	杭材	斜め	カエデ属	(13.0)			1/6 材
第19図 24	SD01	埋土	自然木	丸木芯持	ナシ亜科	(9.1)	直径 1.6		一部炭化
第19図 25	SD01	埋土	自然木	丸木芯持	カヤ	25.6	直径 1.2		炭化

第10表 SD01 出土木製品属性



第18図 北稻付遺跡出土土器及び木製品 1



第19図 北稲付遺跡出土木製品2

北稲付遺跡 SD 01 内堆積土の珪藻分析

1. 珪藻分析の目的

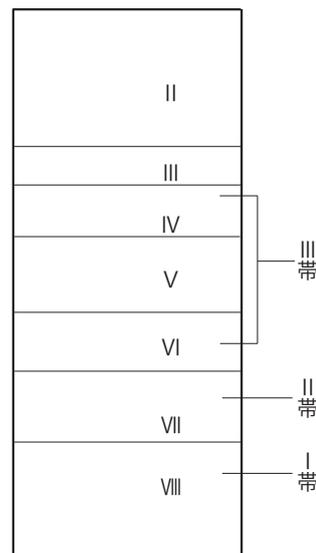
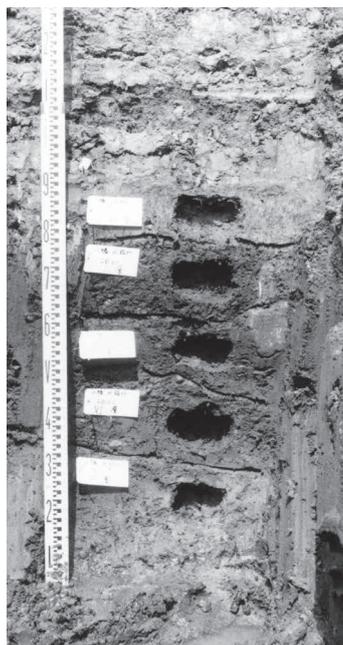
SD 01 は埋没流路と考えられる。埋没土内の珪藻化石を分析することで、流路内の水の流動状況を間接的に復元する。

2. 分析地点

SD 01 西側調査区境の深掘地点(第20図)を上からⅡ層、Ⅳ層からⅧ層にかけて土壌採取する。Ⅳ層茶褐色土(10YR4/4)以下がSD 01の埋没土に相当する。

3. 珪藻化石群集の特徴

検出された珪藻化石は、95分類群27属78種5亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広域種を含め5種群である。こ



第20図 SD 01 内試掘坑(土壌採取場所)

これらの種群の出現状況から3つの珪藻帯が設定できる。以下にその特徴と堆積環境について述べる。

I 帯 (Ⅷ層)

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 3.88×10^4 個。完形殻の出現率は約 56% である。この I 帯からは沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis* が特徴的に出現し、同じく沼沢湿地付着生種群の *Neidium iridis*、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が随伴して産出する。

これらのことから沼沢湿地環境であると推定できる。

II 帯 (Ⅶ層)

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.11×10^4 個。完形殻の出現率は約 46% である。この I 帯からは陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* と *Pinnularia borealis*、沼沢湿地付着生種群の *Neidium iridis* が比較的多くに出現する。

これらのことから沼沢湿地に近接した陸域環境であると推定できる。

III 帯 (Ⅱ, Ⅳ～Ⅵ層)

堆積物 1g 中の珪藻殻数は $7.12 \times 10^3 \sim 1.27 \times 10^6$ 個、完形殻の出現率は約 31～53% となる。この III 帯からは I 帯と同様に沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis* が特徴的に出現する。

これらのことから沼沢湿地環境であると推定できる。

4. 小結

北稲付遺跡 SD 01 において珪藻分析をおこなった結果、堆積物が堆積した環境は、概ね沼沢湿地環境であったと考えられる。その中でⅦ層は陸域環境になり、またⅡ層では河川の影響を受けている沼沢湿地環境であったと考えられる。

引用・参考文献

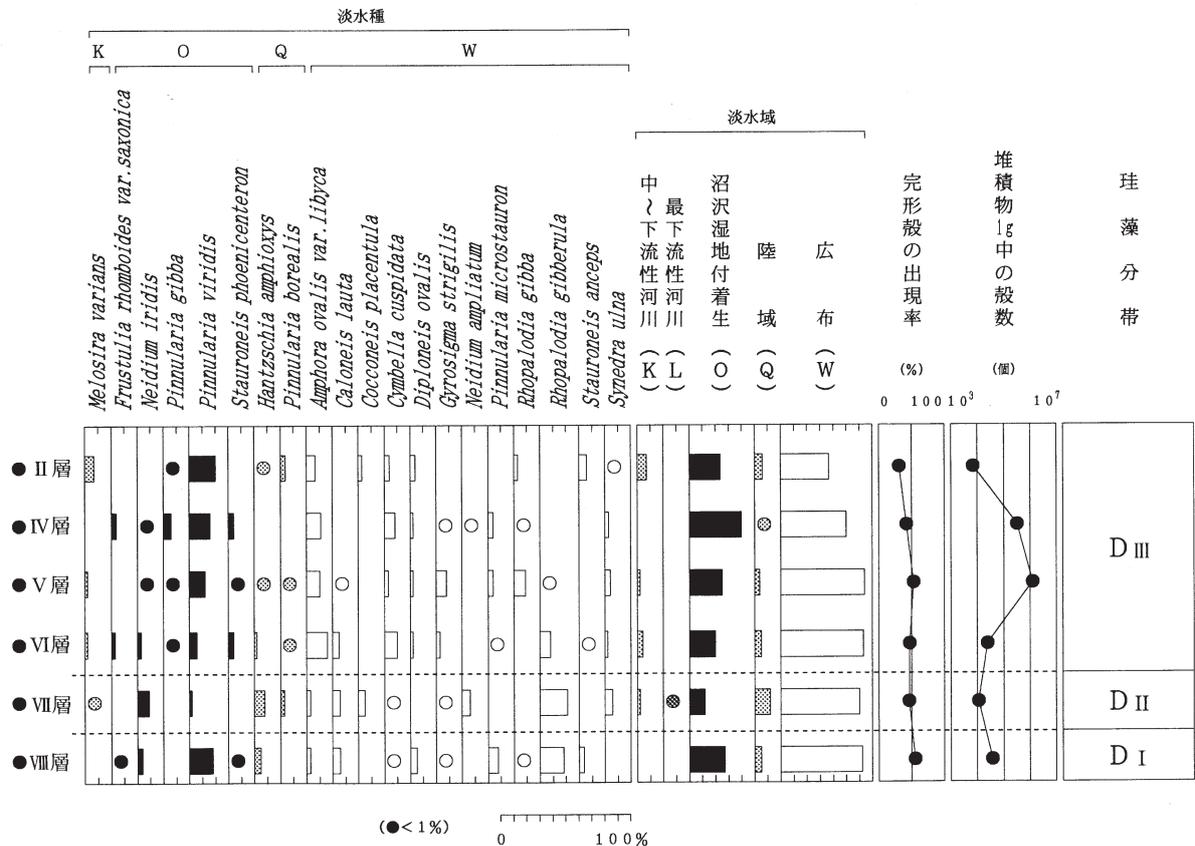
安藤一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、73-88。

分類群	種群	II層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i>	W	5	23	20	32	3	6
<i>Anomoeoneis serians</i>	O	-	-	1	-	-	-
<i>A. sphaerophora</i>	W	-	-	1	-	-	-
<i>A. sphaerophora</i> f. <i>costata</i>	W	-	2	1	-	-	-
<i>Aulacoseira crassipunctata</i>	W	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i>	W	-	-	-	-	1	-
<i>C. hyalina</i>	W	-	-	-	-	-	1
<i>C. lauta</i>	W	-	-	2	10	6	13
<i>C. schroederi</i>	W	-	-	-	-	-	1
<i>C. schumanniana</i>	W	1	-	-	-	-	-
<i>C. silicula</i>	W	-	-	6	2	1	5
<i>C. tenuis</i>	W	-	-	-	-	1	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	2	1	-	-	5	1
<i>Cyclotella meneghiniana</i>	L	-	1	1	-	1	-
<i>Cymbella aspera</i>	O	-	1	-	-	-	-
<i>C. amphicephala</i>	W	-	2	-	-	-	-
<i>C. cistula</i>	O	-	2	-	-	-	-
<i>C. cuspidata</i>	W	3	17	6	20	1	3
<i>C. elegendensis</i>	W	-	2	3	-	-	-
<i>C. minuta</i>	W	-	4	2	-	1	-
<i>C. naviculiformis</i>	O	-	1	7	2	-	-
<i>C. subaequalis</i>	O	1	-	-	-	-	-
<i>C. tumida</i>	W	-	-	6	-	-	-
<i>C. tumidula</i>	W	-	6	-	3	-	-
<i>C. turgidula</i>	K	-	-	-	2	-	-
<i>C. spp.</i>	?	3	1	-	1	-	-
<i>Diploneis elliptica</i>	Q	-	-	-	1	1	-
<i>D. ovalis</i>	W	3	5	5	4	-	10
<i>D. spp.</i>	?	2	-	-	-	-	-
<i>Epithemia</i> spp.	?	-	-	-	-	1	-
<i>Eunotia arcus</i>	W	-	-	-	-	1	-
<i>E. curvata</i>	O	-	-	-	-	1	3
<i>E. fallax</i>	Q	-	1	3	4	-	-
<i>E. pectinalis</i>	O	-	-	-	1	-	-
<i>E. praerupta</i> var. <i>bidens</i>	O	-	-	-	1	-	-
<i>E. spp.</i>	?	1	-	-	1	1	-
<i>Fragilaria capusina</i>	W	-	1	3	1	-	-
<i>F. tenera</i>	W	-	1	-	-	-	-
<i>F. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>saxonica</i>	O	-	8	1	6	-	2
<i>F. spp.</i>	?	2	2	-	2	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	1	-	-	-	-	-
<i>G. angustatum</i>	W	2	3	7	1	2	4
<i>G. gracile</i>	O	-	7	5	3	-	3
<i>G. truncatum</i>	W	-	-	2	-	-	-
<i>G. spp.</i>	?	-	2	-	-	-	1
<i>Gyrosigma strigilis</i>	W	-	2	16	7	1	3
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	1	1	3	4	9	11
<i>H. distincte-punctata</i>	W	-	-	-	-	1	-
<i>Melosira varians</i>	K	5	-	4	5	1	1
<i>M. spp.</i>	?	5	-	-	-	-	1
<i>Meridion circulae</i> var. <i>constricta</i>	K	-	-	-	2	1	-
<i>Navicula cryptocephala</i>	W	-	3	7	-	-	-
<i>N. decussis</i>	W	-	-	1	-	-	-
<i>N. harderii</i>	W	-	-	-	-	-	2
<i>N. minima</i>	W	-	-	-	1	-	-
<i>N. pupula</i>	W	-	5	1	6	1	3
<i>N. spp.</i>	?	2	-	1	-	2	1
<i>Neidium alpinum</i>	W	-	-	-	-	-	2
<i>N. ampliatus</i>	W	-	2	1	1	6	-
<i>N. bisulcatum</i>	W	-	-	-	1	1	-
<i>N. iris</i>	O	-	3	3	6	10	9
<i>N. spp.</i>	?	-	-	1	1	1	-
<i>Nitzschia amphibia</i>	W	-	-	-	-	-	1
<i>N. parvula</i>	W	-	-	-	2	-	1
<i>N. umbonata</i>	W	-	-	-	-	-	1
<i>N. spp.</i>	?	-	3	4	-	1	1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	O	-	3	3	-	-	-
<i>P. appendiculata</i>	W	-	-	1	-	-	-
<i>P. borealis</i>	Q	3	-	2	2	3	-

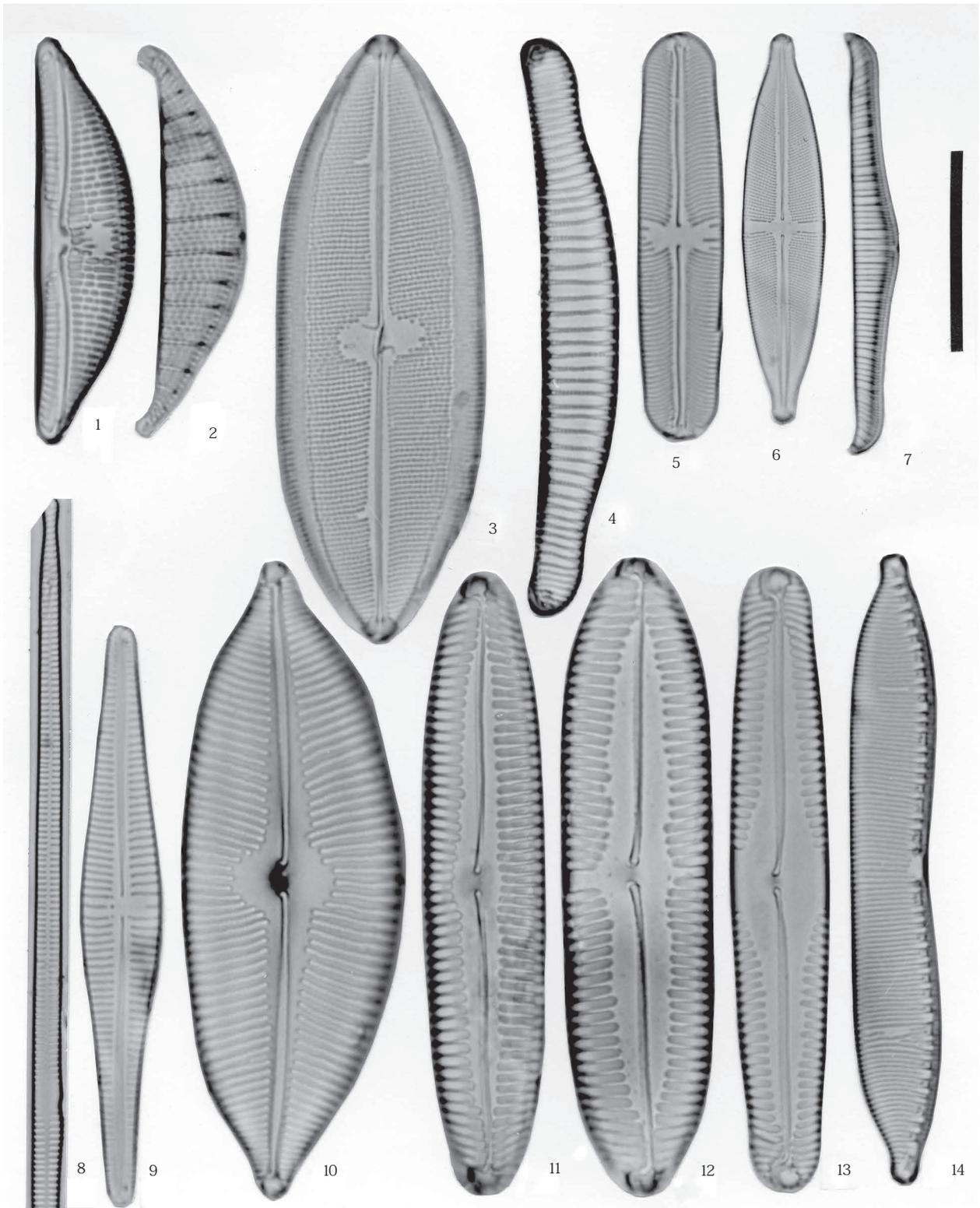
第11表 北稲付遺跡堆積物の珪藻化石産出 その1

分類群		種群	II層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層
<i>Pinnularia brevicostata</i>		W	-	-	1	-	-	-
<i>P. cardinaliculus</i>		W	1	1	-	3	-	-
<i>P. gibba</i>		O	1	13	2	2	-	-
<i>P. hemiptera</i>		W	-	-	-	-	-	2
<i>P. maior</i>		W	-	2	-	-	-	-
<i>P. microstauron</i>		W	-	8	9	3	-	17
<i>P. subcapitata</i>		O	-	1	3	-	-	-
<i>P. viridis</i>		O	14	33	25	12	2	38
<i>P. spp.</i>		?	1	4	1	4	3	1
<i>Rhopalodia gibba</i>		W	2	3	18	1	-	2
<i>R. gibberula</i>		W	-	-	3	16	23	39
<i>R. operculata</i>		W	-	-	-	-	-	1
<i>R. spp.</i>		?	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis acuta</i>		W	-	1	1	4	-	1
<i>S. anceps</i>		W	4	-	1	2	-	8
<i>S. obtusa</i>		W	-	-	-	-	1	-
<i>S. phoenicenteron</i>		O	-	8	2	9	-	2
<i>S. spp.</i>		?	2	3	-	1	-	2
<i>Surirella angusta</i>		W	-	-	-	-	-	-
<i>S. splendida</i>		W	-	-	2	5	-	5
<i>S. spp.</i>		?	-	1	2	-	2	1
<i>Synedra ulna</i>		W	1	7	8	5	7	-
<i>S. spp.</i>		?	-	-	1	-	-	-
<i>Tabellaria flocculosa</i>		W	1	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira bramaputrae</i>		W	-	-	-	-	2	-
Unknown		?	1	1	1	3	3	3
中～下流性河川 (K)			5	-	4	9	2	1
最下流性河川 (L)			-	1	1	-	1	-
沼沢湿地付着生 (O)			17	80	52	42	13	57
陸域 (Q)			4	2	8	11	13	11
広布種 (W)			26	101	134	130	65	132
不明 (?)			19	17	11	13	14	12
珪藻殻数			71	201	210	205	108	213

第12表 北稲付遺跡堆積物の珪藻化石産出 その2 (種群は安藤(1990)による)



第21図 北稲付遺跡堆積物の珪藻化石分布 (4%以上の分類群を表示)



- | | | |
|---|---------------------------------------|---|
| 1 <i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i> (V層) | 2 <i>Rhopalodia gibberula</i> (VIII層) | 3 <i>Neidium iridis</i> (V層) |
| 4 <i>Eunotia arcus</i> (IV層) | 5 <i>Navicula pupula</i> (IV層) | 6 <i>Stauroneis phoenicenteron</i> (V層) |
| 7 <i>Rhopalodia gibba</i> (V層) | 8 <i>Synedra ulna</i> (V層) | 9 <i>Gomphonema gracile</i> (V層) |
| 10 <i>Cymbella cuspidata</i> (IV層) | 11 <i>Pinnularia viridis</i> (V層) | 12 <i>Pinnularia viridis</i> (IV層) |
| 13 <i>Pinnularia gibba</i> (V層) | 14 <i>Hantzschia amphioxys</i> (V層) | |

スケール 1-5,9-14 20 μ m, 6-8 40 μ m

第22図 北稲付遺跡の珪藻化石顕微鏡写真 (括弧内は試料採取層位)

北稲付遺跡 SD 01 内堆積土の花粉分析

1. 花粉分析の目的

埋没流路内に遺存した花粉化石を分析することで、古代の古植生を推定復元する。

2. 分析地点

珪藻分析と同一場所、同一サンプル。

3. 花粉化石群集の特徴

検出同定できた分類群数は、樹木花粉 32、草本花粉 29、形態分類を含むシダ植物胞子 3 である。種構成や各分類群の出現率によって、堆積土下位より 3 つの花粉化石群集帯を設定できる。

I 帯 (VI～VIII層)

樹木花粉の占める割合は約 27～43%と低率である。その中で、コナラ亜属が約 22～28%と最も高率であり、クマシデ属－アサダ属 (約 6～17%)、カバノキ属 (約 3～13%)、ブナ属 (約 8.8～17%)、ニレ属－ケヤキ属 (約 10～11%) が比較的高率である。またトチノキ属も約 4～8%と本帯で比較的目的立つ。草本花粉では、イネ科が約 27～60%と高率であり、カヤツリグサ科 (約 6～12%)、ヨモギ属 (約 2～10%) も比較的目的立つ。他に、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、クワ科、アカザ科－ヒユ科などが出現する。

II 帯 (IV層、V層)

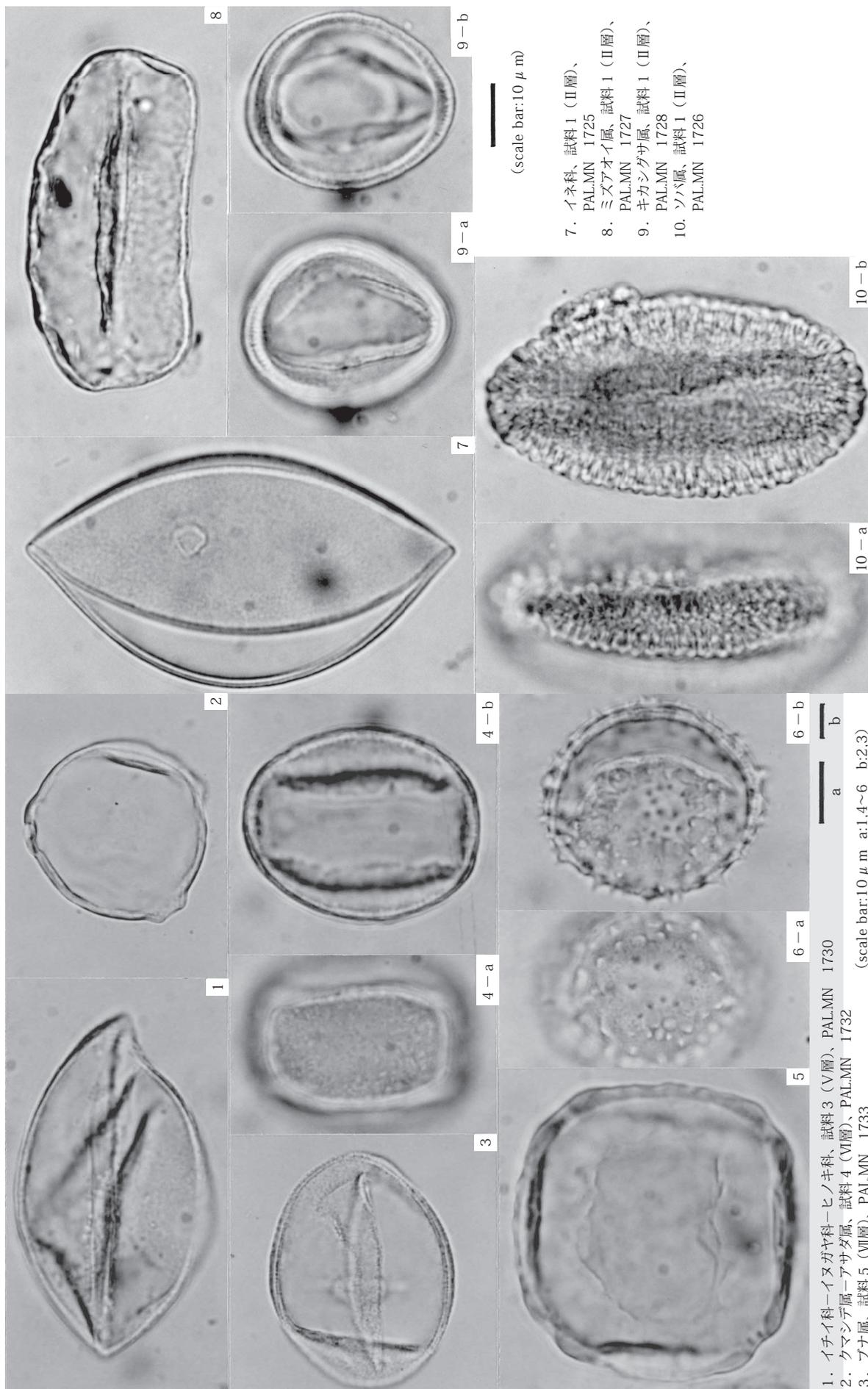
樹木花粉の占める割合は約 30～42%と低率である。その中で、引き続きコナラ亜属が約 26%で最も高率であり、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 (約 11～19%)、クマシデ属－アサダ属 (約 9～12%)、ブナ属 (約 11～12%)、ニレ属－ケヤキ属 (約 9～10%) も比較的高率である。他では、1%以下の低率であるが、マツ属複維管束亜属、マツ属 (不明) が出現を開始する。本帯は、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の急増・高率、トチノキ属の減少で主に特徴付けられる。草本花粉では、引き続きイネ科が約 29～48%と高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属 (各約 6%) も比較的目的立つ。他では、クワ科が 1%以下～約 4%、キジムシロ属近似種が 1%以下～約 2%、セリ科が 1%以下～約 3%、オモダカ属、スブタ属－ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、オオバコ属、水生シダ植物のサンショウモなどが 1%以下で出現する。

III 帯 (II層)

樹木花粉の占める割合は約 19%と極めて低率である。その中で、引き続きコナラ亜属が最も高率であるが、約 15%と減少する。次いで、ハンノキ属 (約 14%)、ブナ属、ツガ属 (各約 10%)、マツ属複維管束亜属、カバノキ属 (各約 9%)、クマシデ属－アサダ属 (約 8%) の順に高率である。下位帯で比較的高率であったイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科は全く出現せず、ニレ属－ケヤキ属も約 4%と大幅に減少する。このことと、コナラ亜属の減少、マツ属複維管束亜属の急増で主に本帯は特徴付けられる。草本花粉では、イネ科が更に増加して約 61%に達する。他では、カヤツリグサ科 (約 4%)、ヨモギ属 (約 5%) が若干目的立つ程度であり、ガマ属、オモダカ属、スブタ属－ミズオオバコ属、ミズアオイ属、ソバ属、タケニグサ属、キカシグサ属などが概ね 1%以下で出現する。

4. 小結

I 帯の古植生は、コナラ亜属を主体にクマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属を主要な要素とした落葉広葉樹林が発達していたと予想できる。付近にはトチノキ属も普通にみられたと考えられる。草本類についてみると、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが出現しており、SD 01 は水位の低い湿地ないし水溜りのような溝であったと予想できる。イネ科は高



第24図 北稻付遺跡の花粉化石顕微鏡写真(括弧内は試料採取層位)

総括：北稲付遺跡は、1983年の本格的発掘調査を経て、今回、いわば第2次調査とも呼ぶべき発掘を実施した。それぞれの地点は、70m程の距離を隔てており、この意味では広がりのある遺跡内を2箇所試掘した結果となった。1983年の調査の全貌を含めて、ここで総括することは、北稲付遺跡の考古学的評価を与える意味に於いて、極めて妥当な思考といえる。がしかし、過去の調査資料の全体を再び確認し、調査担当者から記録の一つ一つについて、教示を得ることは、時の経過が長ければ長いほど、難しいものとなっていく。今回は、2次調査（以下B地点）によって想定できた遺跡の特徴を念頭に、1983年調査（以下A地点）の概要を担当者に消化し、北稲付遺跡の性格を総括しておく。図示した遺物は、千曲市教育委員会の了解を得、1983年調査報告書中の一部資料を再掲した。

北稲付遺跡とは：

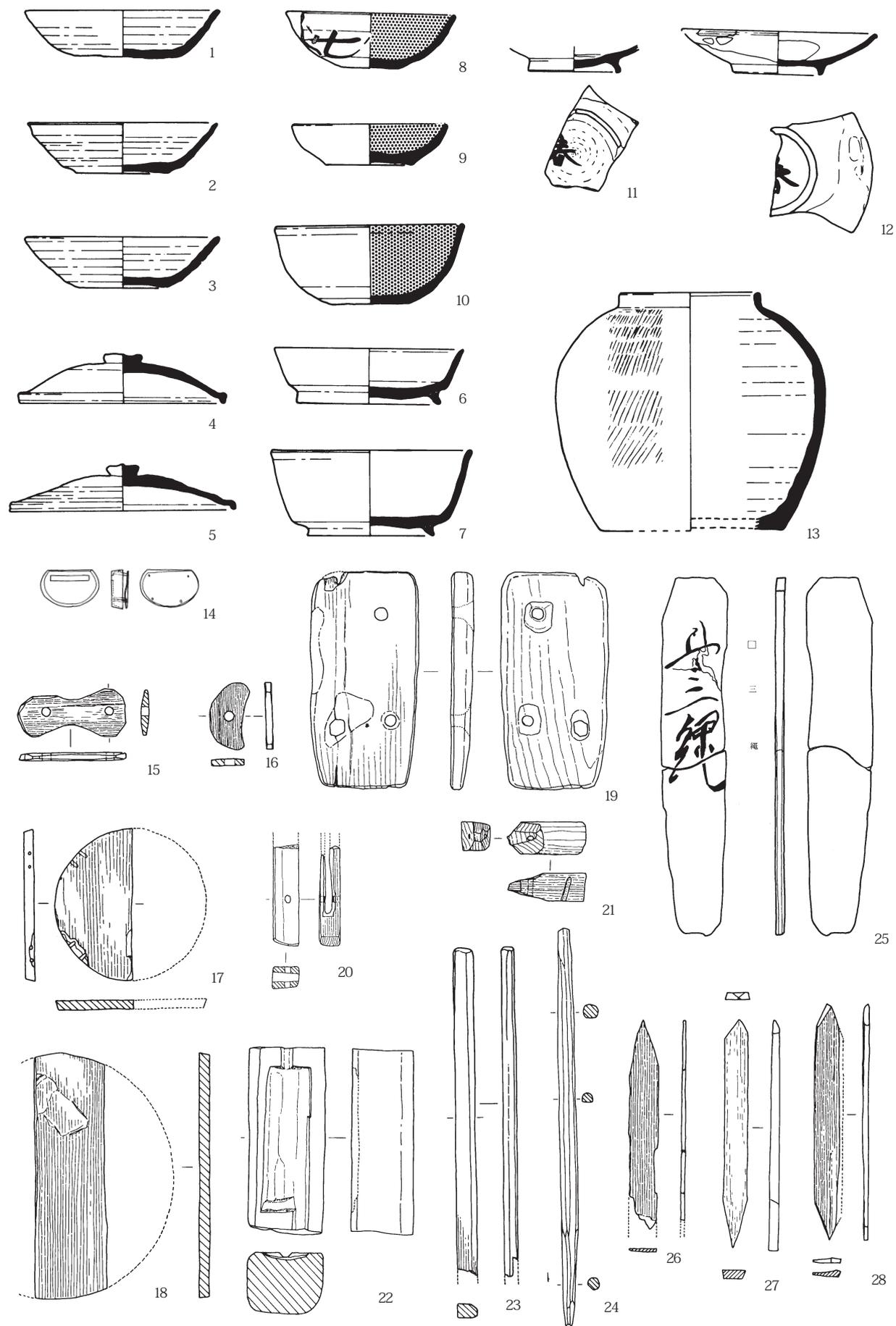
遺構 佐野川扇状地上の扇中央部、やや北よりに位置する。標高380mを測り、現佐野川から直線距離にして150mないしは200mほど南に立地する。市調査のA地点では、住居跡1軒、竪穴跡2基、土坑1基、暗渠排水2本（P6）が確認されている。住居跡は、規模2.0mを測る非常に小規模な例で、西側に焼土跡が存在することから、小規模な竪穴式の建物と考えられる。竪穴跡とされた2例は、先の竪穴式建物より、ひとまわり小振りの浅い土坑状の掘り込みで、埋土中から、土器に伴ない木製品と植物遺体が出土している。住居と考えるよりも、何らかの技術的な生産行為をした竪穴式建物、もしくは土坑と考えられようか（註1）。また調査区西南には幅10mほどの規模で、黒色土の厚い堆積が確認され、埋没土中から多くの木製遺物が出土した。埋没土層、遺物の出土状況から判断して、今回B地点で確認したSD01に相当する埋没流路と判断できる。

遺物 出土土器は、須恵器杯形土器を中心に、黒色土器A類の杯、そして灰釉陶器の椀ないし皿が提示されている。黒色土器の特徴は底部付近を回転削り成形する古式のタイプ（第25図10）と、器高の低い皿に近い後出のタイプ（第25図9）が観られる。須恵器杯A類はヘラ切り離し調整（第25図1）1点と糸切り離し調整7点（第25図2・3）がある。杯B類は器高のある箱形で、口縁はやや垂直に立つ形態的特徴を持つ（第25図9）。墨書の書かれた例を含め灰釉陶器7点がある。貼り付け高台で、漬かけ施釉。これら土器の特徴から判断して、所属時期は屋代編年古代4期から6期前後（8世紀後半から9世紀前半）と考えられる。木製品では、「□三縄」と墨書された付札状の木簡（第25図25）、方形の下駄（第25図19）、斎串（第25図26～28）、曲げ物（第25図17・18）など多種類が出土している。木簡は長さ13.0cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm、裏面に墨書はない。斎串は長さ16.0cm程で、両端を山形にカットするC型式の例6点がある。曲げ物は樺皮結合式及び釘結合式（第25図17）がそれぞれ図示されている。14は銅製の帯金具で、丸柄。表裏両方の金具が残存し、縦3.1cm、横4.2cmを計る。

性格 B地点で確認したSD01と、A地点の黒色土の落ち込みが同一の埋没流路と考えると、SD01以外の、何ら遺構・遺物の出土していない大部分の場所は、北稲付遺跡の範囲外と考えることができる。この場合、遺跡の主体はA地点近傍にあり、A地点南側を流下するSD01によって遺跡が区切られていた可能性を考える必要がある（註2）。付札状の木簡や金属製の帯び金具、斎串等の出土、そしてそれらの所属年代から「古代更級郡衙」関連の施設跡の可能性は高い。1軒のみ確認された一辺2.0mほどの小さな竪穴式建物の性格がなんであるのか、今回行えなかった出土遺物の再考を待ちたい。

註1）千曲市教育委員会 佐藤信之氏のご教示。

註2）SD01が一過性の流路として北稲付遺跡を破壊してしまっていたとしたら、また別の想定となる。



第25図 千曲市調査A地点の出土遺物 (No14はS=1/1、No25はS=1/2、ほかS=1/4)



第5節 いなつき 稲付遺跡の調査

1. 調査の概要

地 籍： 千曲市大字桑原字稲付 1819-9 ほか

期 間： 平成12年7月10日から7月19日、9月18日から10月12日

調 査 区： 市道9100号線以南から市道9110号線までを対象とし、試掘及び本調査を実施した。

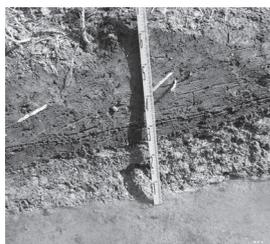
調査面積： 調査対象面積7,251㎡、試掘及び本調査面積（1,477㎡）

調査担当： 町田勝則 上田典男

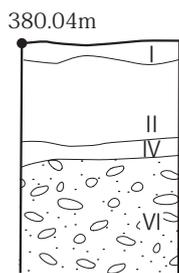
調査状況： 千曲市内の遺跡登録番号（85-6）で、奈良・平安時代及び近世の遺物散布地として認知されている。県埋蔵文化財センター遺跡記号（BIN）を与え、遺物の表採された市道9100号線の隣接地で面調査を実施、遺構の広がりを確認しつつ、準じ試掘調査に切り替えた。市道9110号線を挟む南北は、調査当時に旧字切図に従ったために、薬師堂地籍として調査した。本報告では、変更後の字切図に従い、稲付地籍分に含めて扱うこととする。ただし、遺跡立地上の観点から判断して、市道の北側と南側では地勢に違いが認められるために、北分を本節に含め、南分を次節にて報告する。

調査結果： 現地表下-70cmほどで、基本土層の黄褐色砂礫（10YR5/8）を検出した。同面にて遺構の検出を行った結果、市道9110号線までの広範囲に、埋没流路あるいは湿地状の凹地と考えられる黒色土の落ち込みを数箇所に確認した。ⅢC-6からⅢC-11にかけての範囲、ⅢB-24、ⅢC-21を結んだ部分、ⅢG-3からⅢG-22及びⅢL-9にまたがる部分、ⅢL-1からⅢL-23にかけての範囲が相当する。この中で、人工遺物を包含しないのは、ⅢG-3からⅢG-22及びⅢL-9にまたがる部分、ⅢL-1からⅢL-23にかけての部分であり、これについては埋没流路状の堆積層と判断し、底面までの掘削は実施しなかった。また木製品を包含したⅢB-24、ⅢC-21にかけての落ち込み部分に関しては、埋没流路を想定してSD 06を呼称し調査した。結果、出土土器は皆無で、木製品13点が検出面で発見され、良好な包含土層を保っていると判断されたため、底面までの掘削を行った。しかしながら落ち込み範囲の大半が未買収地であったため、流路あるいは湿地状の落ち込み部の全貌は不明確のままに終了した。一方、調査区内にて発見された明確な遺構には、掘立柱建物跡4棟、溝跡1本、土坑30基があり竪穴式建物跡は認められない。

堆積層位： 調査時現況はリング畑である。表土掘削後、近現代の水田脚土を1枚、遺物を包含する暗灰色粘質土（N1.5/O）を1枚確認する。以下、基本土層である黄褐色砂礫（7.5YR4/3）に至り、落ち込み部の検出となる。



堆積土層

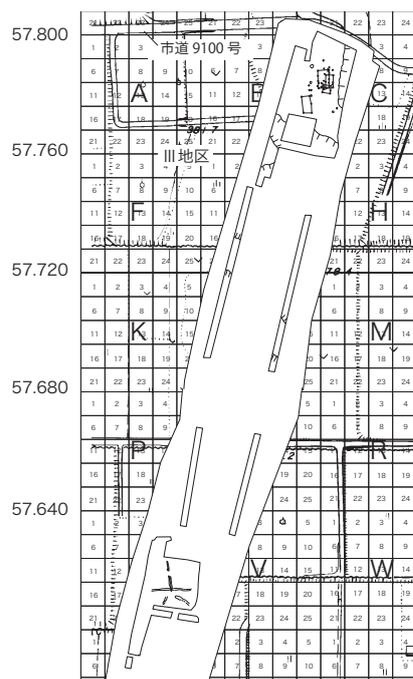


第26図 土層柱状図 (S=1/20)

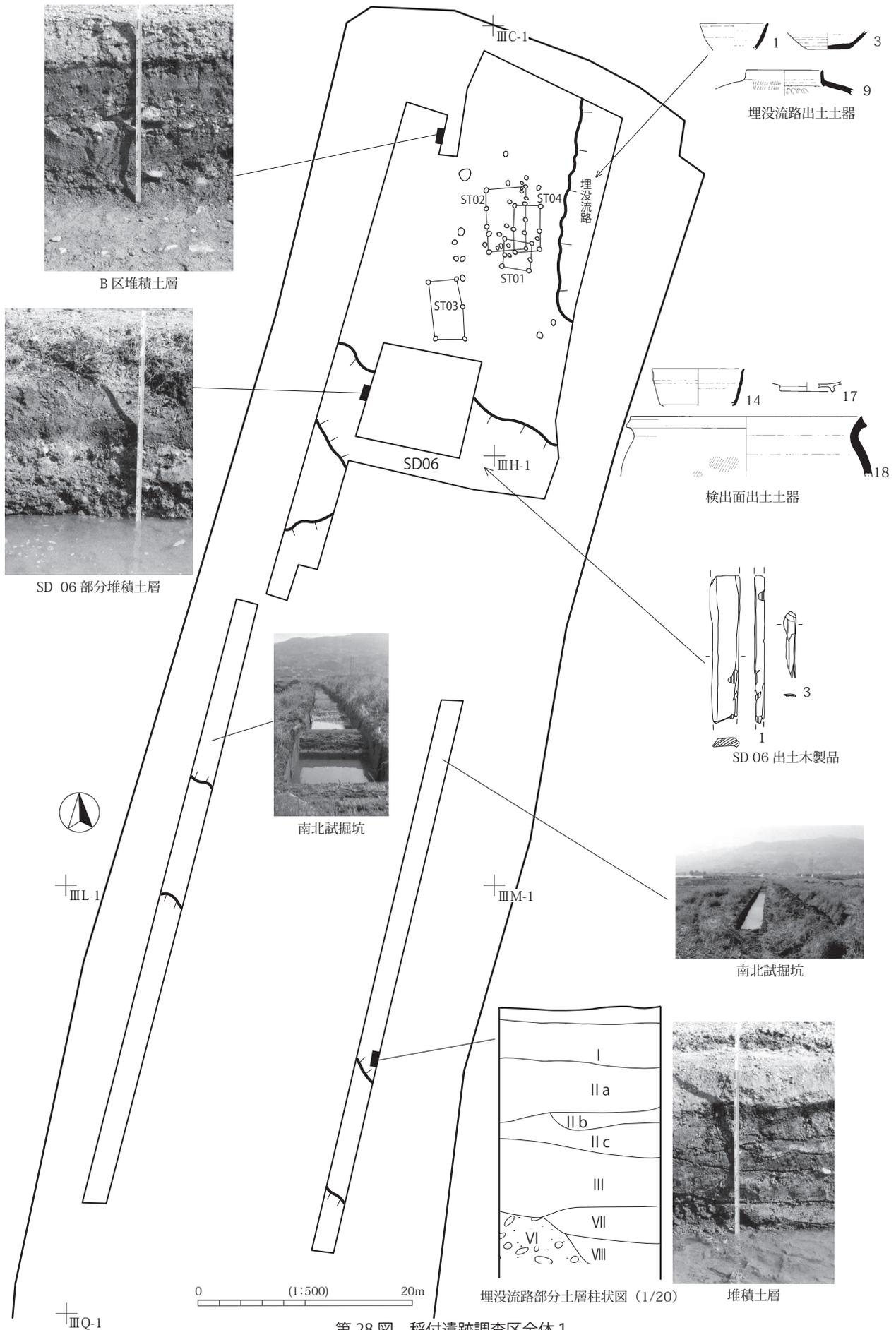
- I a. I b 層耕作土
- II a ~ c 層灰色粘土 7.5Y5/1 (水田脚土)
- Ⅲ層暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2
稲付南部のみ広がる砂質土
- Ⅳ層黒色粘土 N 1.5/O
遺物を包含する土層
- V層黄褐色砂質土 10YR5/3
北稲付のII b層相当か
- Ⅵ層黄褐色砂礫 7.5YR4/3
- Ⅶ層青灰色砂 5B5/1
- Ⅷ層黒色粘土 10BG2/1



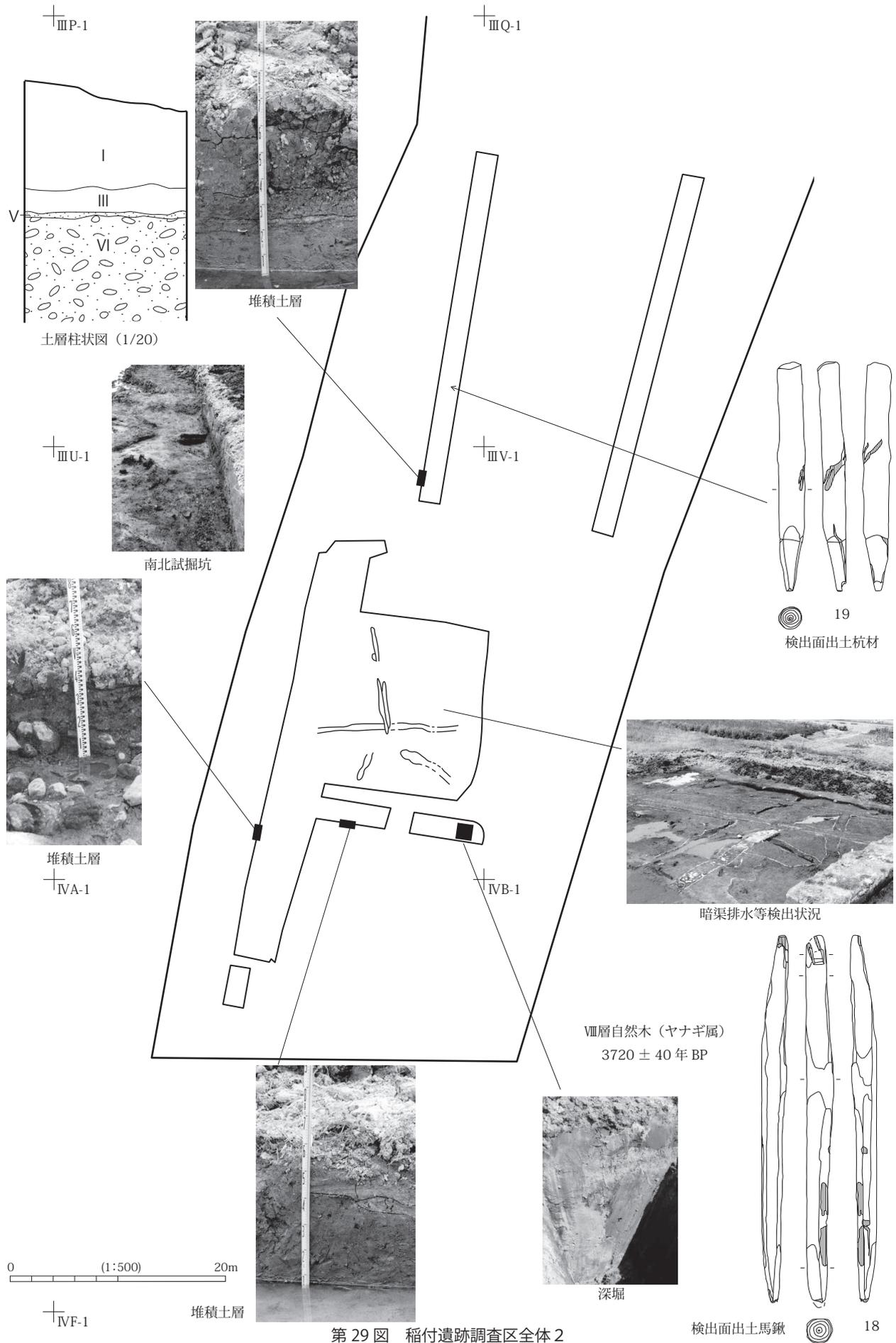
試掘坑表土の掘削



第27図 調査地と試掘坑位置図



第28図 稲付遺跡調査区全体1

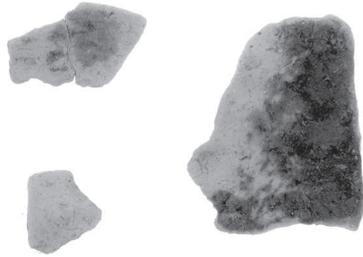


第29図 稲付遺跡調査区全体2

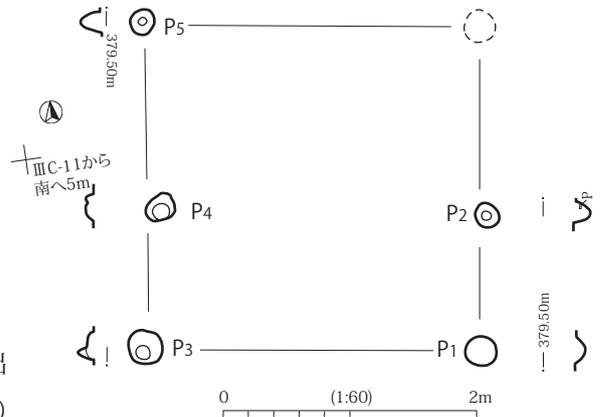
2. 遺構と遺物

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡は、ⅢC-11区にて検出された。柱穴の配置は1間(270cm)×2間(258cm)の6本柱であり、主軸はN-6.5°-Eを指す。桁行270cm、梁間150・108cmの寸法を計り、床面積6.8㎡である。Pit2の規模は、20×18cm、深さ8cmを計る。2号及び4号掘立柱建物跡と重なる。出土遺物は、Pit2から土師器の甕形土器の胴部破片4点(写真)がある。器厚5mmほどの薄手、外面にスズ状の付着物が認められる。



Pit2出土土器



第30図 ST 01 完掘

2号掘立柱建物跡は、ⅢC-10区・11区にて検出された。柱穴の配置は1間(375cm)×3間(576cm)の8本柱で、主軸は真北を指す。桁行375cm、梁間160・256cmの寸法を計り、床面積19㎡。Pit1からPit5までは、深く明瞭な掘り込みであり、Pit1の規模は27×22cm、深さ27cmを計る。Pit3では27×25cm、深さ23cm、礎石を持つ(写真)。Pit6からPit8までは、基本土層の砂礫を掘り込んだ柱穴である。Pit7の規模は、25×21cm、深さ14cmを計る(写真)。1号及び4号掘立柱建物跡と重なる。出土遺物は、Pit1から土師器の杯形土器胴部破片1点と須恵器の杯形土器A類?の口縁部破片1点がある。後者の推定口径は12cmである。



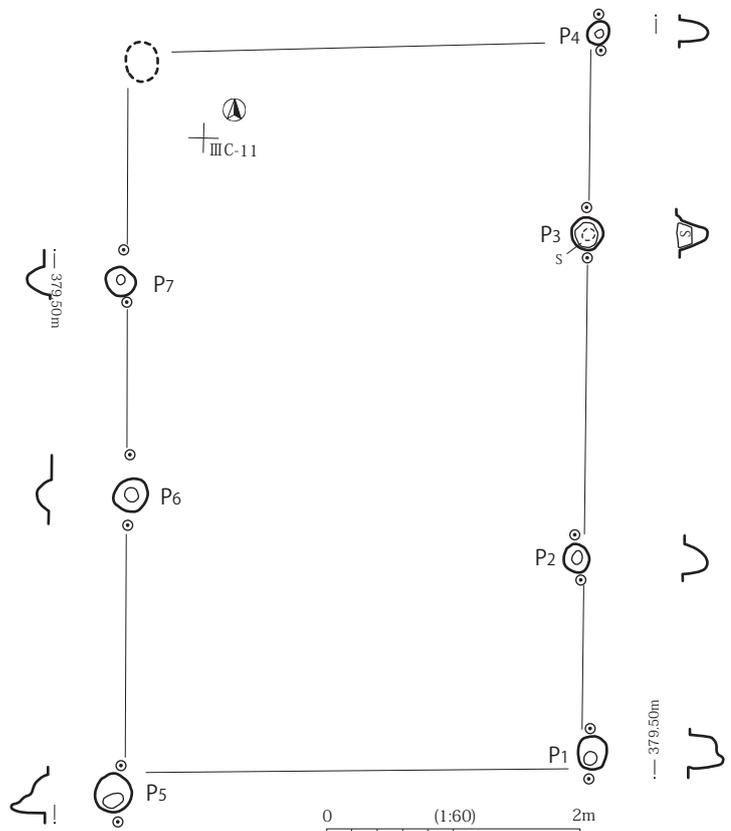
Pit7出土土器



Pit3 礎石の出土状態

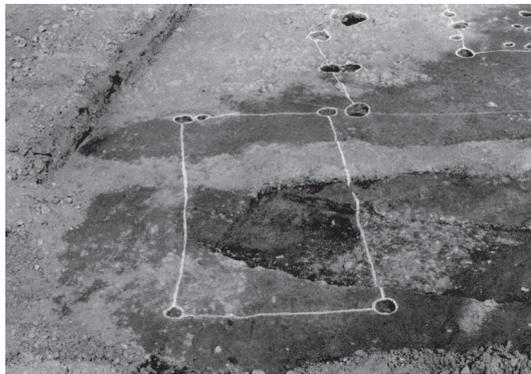


礎石除去後の様子



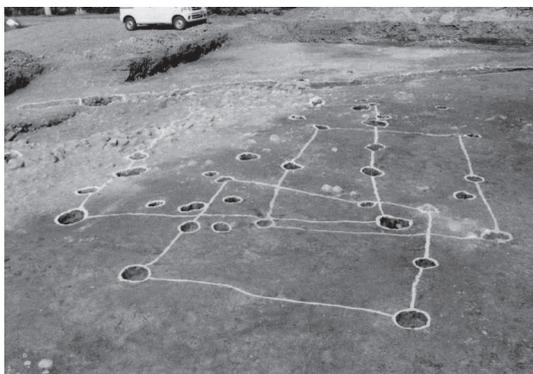
第31図 ST 02 完掘

3号掘立柱建物跡は、ⅢB-20区にて検出された。柱穴の配置は1間(260cm)×1間(558cm)の4本柱であり、主軸はN-45°-Eを指す。床面積15.8㎡である。Pit2及びPit4には明瞭な柱痕がある。Pit4の規模は、30×27cm、深さ23cmを計る。出土遺物はない。



ST 03 完掘全景

4号掘立柱建物跡は、ⅢB-20区にて検出された。柱穴の配置は1間(252cm)×2間(422cm)の6本柱であり、主軸はほぼ真北を指す。桁行252cm、梁間182・240cm、床面積9.9㎡である。Pit3からPit5はやや深い明瞭な掘り込みであり、Pit5は基本土層の礫面を掘り込む。Pit5の規模は、23×23cm、深さ13cmを計る。出土遺物はない。

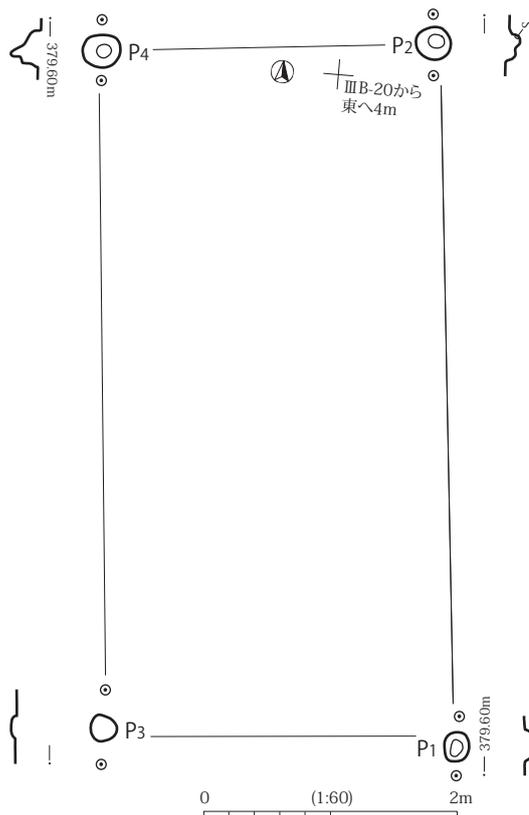


ST 01 ~ 03 完掘全景

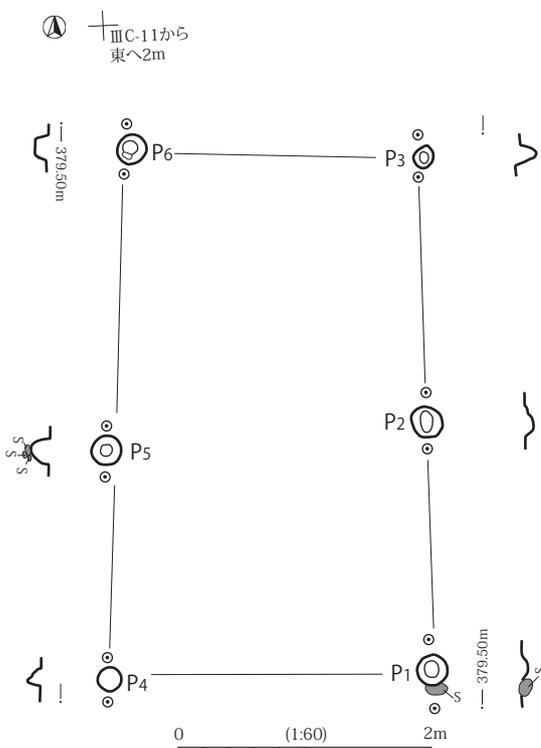
土坑

ⅢC-6区からC-11区にかけて、円形状を呈する落ち込み30基を確認した。配置から掘立柱建物跡を想定できるような組み合わせを認定することができず、土坑として調査した。結果、埋没土に土器を包含した例4基が認められた。これについて所見を記す。

19号土坑は、ⅢC-6区にて検出された。平面形状は円形状を呈し、すり鉢状の断面形態で、遺跡基本土層の礫層を掘り込んで構築されている。規模は、36×28cm、深さ14cmを計る。出土土器は、須恵器杯形土器

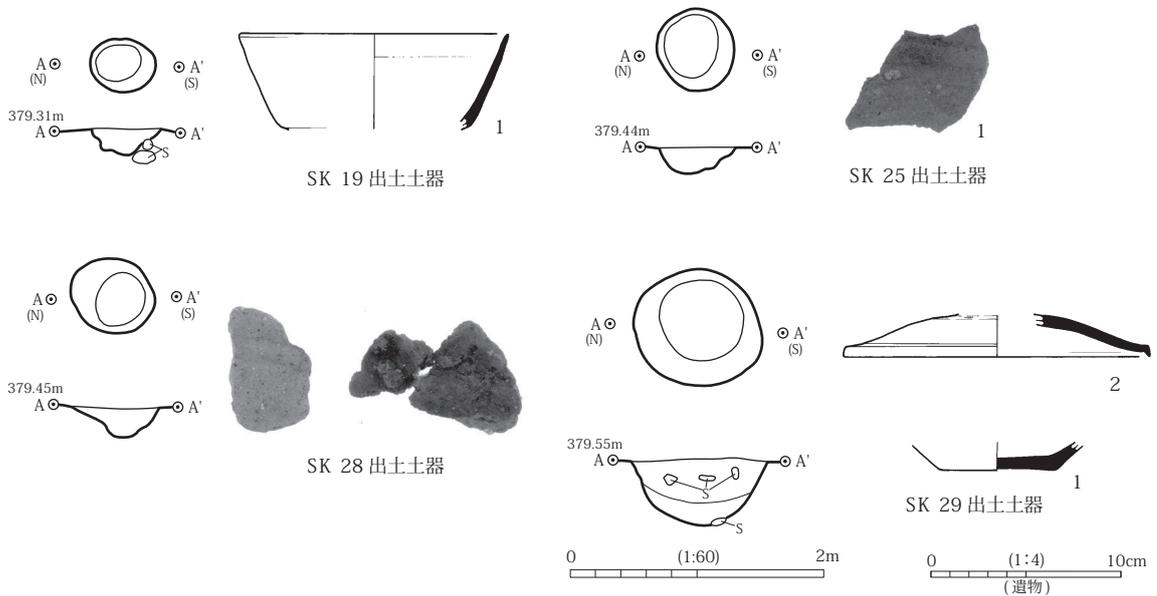


第32図 ST 03 完掘



第33図 ST 04 完掘

B類の口縁部破片1点、推定口径14cmがある(第34図)。25号土坑は、ⅢB-15区に検出された。2号掘立柱建物跡の柱穴P6に隣接し、P5からP8と主軸ラインを同じくすることから同跡の所属とも考えられる。規模は44×40cm、深さ13cmを計る。出土土器は、回転ロクロ成形の須恵器杯形土器胴下半部の破片1点がある(写真)。28号土坑は、ⅢB-15区にて検出された。27号及び29号土坑とともに南北一列に配置することから、掘立柱建物跡の一部である可能性も考えられる。しかしながら、調査では3基のみの確認であったこと、29号土坑の性状が他と異なっている点などから、土坑として扱った。45×38cm、深さ15cmを計り、礫面を浅く掘り込み構築している。出土土器は、土師器甕形土器の胴部破片2点(写真)と土師器杯形土器A類?の胴部破片1点(写真)がある。29号土坑は、68×62cm、深さ35cmを計り、他の土坑に比して規模が大きい。礫面を掘り込み、埋土の暗灰色粘質土は、中位に灰層を挟むもので拳大の礫を包含する。出土土器は、すべて須恵器の破片である。1は杯形土器A類の底部破片で、糸切り離して底径6cmを計る(第34図)。2は蓋形土器の破片で、折り返し部は退化しているが、垂直で調整が外側に強い特徴をもつ。直径は12cm程度。他に、杯形土器胴部小破片が2点ある。1及び2の特徴から、8世紀末から9世紀前半代の資料と考えられる。



第34図 土坑完掘状態及び出土土器

番号	調査地区	時期	長径	短径	深さ (cm)	備考	番号	調査地区	時期	長径	短径	深さ (cm)	備考
SK 01	Ⅲ C - 16	古代?	56	50	7		SK 18	Ⅲ C - 11	〃	21	20	10	ST 02 と関連?
02	〃	〃	18	16	8		19	Ⅲ C - 6	8末・9初	36	28	14	須恵器杯 B 類
03	Ⅲ C - 11	〃	22	21	12	ST 01 と関連?	20	〃	古代?	20	16	20	
04	〃	〃	23	18	18	ST 01 と関連?	21	〃	〃	20	16	20	ST 02 と関連?
05	〃	〃	(12)	18	6	ST 06 と切り合う	22	〃	〃	34	28	12	ST 02 と関連?
06	〃	〃	22	18	6	ST 05 と切り合う	23	〃	〃	29	26	17	
07	〃	〃	16	13	21	ST 02 と関連?	25	Ⅲ B - 15	古代?	44	40	13	ST 02 と関連?
09	〃	〃	16	13	11	ST 04 の P3 と関連?	26	〃	〃	23	20	9	
11	〃	〃	42	22	7	2 基複合	27	〃	〃	40	34	11	ST か?
12	〃	〃	26	23	28	ST 02 と関連?	28	〃	〃	45	38	15	土師器甕
13	〃	〃	16	14	26		29	〃	8末・9初	68	62	35	須恵器杯 A 類・蓋
14	〃	〃	18	14	10		30	〃	古代?	36	36	27	ST か?
15	〃	〃	16	12	10	ST 01 と関連?	31	〃	〃	36	20	12	ST か?
16	〃	〃	20	17	24		32	Ⅲ B - 10	〃	84	74	29	
17	Ⅲ C - 6	〃	18	17	23	ST 02 と関連?	33	Ⅲ B - 15	〃	24	20	12	ST か?

第13表 土坑の属性

埋没流路状の落ち込み

稲付遺跡の大部分は、埋没流路状の落ち込みないしは湿地状の場所で占められている。とともに、近現代の無数の暗渠排水施設が設けられていた。土層の堆積状況は、Ⅲ G 区以南に遺物を包含するⅣ層黒色粘土の堆積が認められず、Ⅲ層暗灰黄色砂質土が広域にわたり厚く堆積していた。Ⅲ U - 5 区の周辺では、Ⅲ層直下に基本土層と考えられる黄褐色砂質土（Ⅴ層）が堆積し、礫層に至る。Ⅴ層は北稲付遺跡のⅡ b 層に相当するものであろうか。Ⅲ L - 9 区で確認したⅦ層及びⅧ層が埋没流路の堆積土である。Ⅲ C - 6 からⅢ C - 11 にかけての範囲に確認した流路状の落ち込みは、大部分が調査区外に伸びるため、全貌は不明であるが、埋没土中に土器及び木製品を包含していた（写真）。以下に、その主な資料を報告する。

1～5は須恵器杯形土器A類である。1は口縁部破片3点の復元実測例。回転ロクロ成形で口径10cmを計る。2は回転糸切り離し、口径14cm、底径7.0cmを計る1/4個体破片である。8世紀末から9世紀初頭と推定される。3は糸切り離して底径7.0cmを計り、底部に黒漆状の付着物がある。4も糸切り底で、底径6.0cmを計る。5は低部からの屈曲がやや強い例で、口径14cm、丁寧な成形仕上がりである。6は灰釉陶器の皿形土器B類、底部破片である。7右は緑釉陶器の椀形土器？口縁部破片である。口縁端部は緩やかに外反し、釉葉は剥落著しい。7左は青磁の水注？肩部破片。12世紀から13世紀の所産と考えられる。8は土師器甕形土器C類の口縁部破片。頸部に明瞭なナデ成形痕が観察できる。9は須恵器短頸壺A類の口縁部破片である。外面は刷毛状工具による縦方向の条線が僅かに残り、内面には当て具による叩き締めが観られる。10は須恵器甕E類？の底部の復元個体である。外面は刷毛状工具による縦方向の条線が明瞭に観られ、内面はナデ成形仕上げされる。19は板材。木表は平滑で、一端は欠損し、もう一端は材に対して斜めに切断されている。破材であろうか。20は板状木製品。二方桁の削り出し材である。断面方形状を呈し、柄等の一部であろうか。

6号溝からは13点木製品が出土している。21は板状木製品。木表部分は平滑で、表面と側面は直角ではなく斜めにつくりだされている。22は棒材で両端部欠損。一端は節部分。削り出され、断面形状は楕円形を呈する。23は木っ端。材の剥がれ。樹種は数少ないスギ材である。24は棒状木製品。削り出され、断面形は方形。一端は僅かに幅を減じ、垂直に切断される。木表、側面部は平滑。25は板状木製品で、両端欠損し、表面の一部が剥がれる。側面の湾曲面を削り平滑、刃痕がわずかに確認できる。

遺構検出面出土遺物

黄褐色砂礫（7.5YR4/3）上面にて発見された土器は、僅かである。以下に、主な例を報告する。11は須恵器の杯蓋、1/4復元個体である。外面のケズリは1/2弱で、折り返しは垂直、端部の反りはほとんどない。推定直径18cmを計る。8世紀末から9世紀前半か。12・13は須恵器杯形土器A類、糸切り離し例である。12の推定底径は5.0cmと小さい。9世紀前半代の資料か。13は推定口径12cm、底径7cm、ロクロ成形痕跡を明瞭に残す。14は須恵器杯形土器B類と考えられる1/6破片個体。推定口径14cmを計る。15は須恵器杯形土器A類の胴部破片。外面に「王か？」の墨書がある。16は須恵器鉢形土器の口縁部破片。推定口径16cm。17は灰釉陶器椀の底部破片。底径推定7cm、D字高台。18は甕形土器E類の口縁部破片。推定口径40cm、口縁端部は尖り、くの字状に突帯が作出されている。胴部外面には刷毛による斜め方向の調整がある。内面は叩き締めの棒状工具痕が僅かに残る。また検出面から縄文式土器（後期堀の内式深鉢形土器の口縁部破片1点）、第35図右下掲載資料の鉄くず6片、黒曜石の碎片1点、チャートの小片3点が出土している。26～30は板状木製品。26は木表が平滑に調整され、一端角に斜めに切断痕が入る。27は下端欠損、上端にいくにつれわずかに幅が減じる。上端付近は垂直に切断され、端部下3ミリに径2.5mmの孔がある。28の表面は比較的丁寧に平滑加工されている。両端両側面ともに欠損であろうか。29は薄板材で、端部欠損。30は表、両側面ともに平滑に仕上げられている。一端近くやや幅が減じる。31は加工材の割り片か。32は木片。一端は垂直で、もう一端は斜めに切断される。表面には明確な加工痕跡

は認められない。33は編み針状の木製品。棒状で端部の5mmは角状に削り出され、0.1mmの孔がある。34は柄であろうか。両端は欠損するが、径は一定で面加工されている。35は棒状木製品である。一端は垂直に切断された痕跡がある。その断面形は半円形に近い。もう一端は欠損で断面は角状である。36は器種不明品。両端ともに斜めに切断され、一端近くには1cmほど突起状に削り出している部分がある。37は割り材。木表面は平滑に調整加工され、断面は木表方向に反る。また、径2mmの孔が中央部側面際に穿孔されている。両端は割れによる欠損。38は形状から馬鍬の歯と考えられる。上端部に角孔がある。台木の上に突出させて横木等でとめたものであろうか。下端部は削られ一方にやや反る。断面形は上端に行くにつれ方形で、厚みが減じる。中心部が一番太く、やや丸みを帯び、下端は幅を減じ、半楕円状に近くなる。炭素年代測定により584±40年(6世紀末～7世紀)を得た。39・40は杭材。39の面は丸く平滑で、わずかに工具の刃痕が残る。先端部は5つの方向より切断され尖る。一端は垂直に切断。40は全体に腐蝕しているが、形状はとどめている。先端部は5つの方向より切断され、もう一端は垂直に切断された完成品。

遺構名	土師器										須恵器										灰釉	緑釉	青磁	縄文(後期?)	数/総重量 (破片/g)		
	杯A	杯B	杯(内黒)	杯?	鉢	甕?	甕C	高杯?	不明	杯A	杯B	杯?	杯蓋	鉢	甕A	甕E	甕?	長頸壺	短頸壺A	壺?						横瓶?	不明
検出面	16	1	5	44	2	117	1	1		53	1	18	13	5	1	10	64	5	8		1	1	1			1	369/4,902
埋没流路	19		58	104	3	335	1	1		75	6	86	22		36	30	110	27	41	1	10	1	1	3	1	1	972/13,571
ST 01						4																					4/17.3
ST 02					2																						2/9.7
SK 19														1													1/16.7
SK 28					1	1																					2/11.2
SK 25												1															1/6.0
SK 29										1		2															4/43.5

第14表 土器組成

挿図番号	出土地区	遺構名	層位	器種名	残存	接合	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴
第34図1	III C-6	SK 19	埋土	須恵器杯B類	1/4	—	14.0	5.3	—	回転ナデ・口唇磨耗
第34図2	III B-10	SK 29	埋土	須恵器杯蓋	1/6	—	16.0	—	—	ケズリ 2/7・折返退化
第34図1	—	—	—	須恵器杯A類	底部	—	—	—	6.0	糸切り・内面回転ナデ
第35図1	III C-6~11	埋没流路	埋土	須恵器杯A類	1/4	—	10.0	—	—	褐色・3点同一個体
第35図2	—	—	—	須恵器杯A類	1/3	2点	13.0	3.5	6.0	糸切り・外有段
第35図3	—	—	—	須恵器杯A類	底部	3点	—	—	5.0	回転ナデ・糸切り・墨痕?
第35図4	—	—	—	須恵器杯A類	底部	2点	—	—	6.0	回転ナデ・糸切り
第35図5	—	—	—	須恵器杯A類?	1/6	—	14.0	2.7	—	ヘラ切り?
第35図6	—	—	—	須恵器皿B類	底部	—	—	—	—	—
第35図8	—	—	—	土師器甕C類	口縁	—	22.0	—	—	回転ナデ
第35図9	—	—	—	須恵器短頸壺A類	口縁	3点	10.0	—	—	刷毛条痕・内面締め
第35図10	—	—	—	須恵器甕E類	1/4	○	—	—	○	刷毛条痕・内面締め
第35図11	検出面	—	—	須恵器蓋	1/4	—	18.0	—	—	ケズリ 1/2弱・折返退化
第35図12	—	—	—	須恵器杯A類	底部	—	—	—	5.0	糸切り・板目?
第35図13	—	—	—	須恵器杯A類	1/3	—	14.0	2.7	7.0	回転ナデ・糸切り
第35図14	—	—	—	須恵器杯B類	1/6	—	14.0	4.7	—	回転ナデ・口唇磨耗
第35図15	—	—	—	須恵器杯A類	体部	—	—	—	—	墨書「王?」
第35図16	—	—	—	須恵器鉢D類	口縁	—	16.0	—	—	—
第35図17	—	—	—	灰釉陶器椀	底部	—	—	—	7.0	D字高台
第35図18	—	—	—	須恵器甕E類	口縁	○	○	—	—	刷毛条痕・内面締め

第15表 土器属性

遺構名	曲げ物	柄	馬鍬	板状木製品	棒状木製品	板材	角材	棒材	割材	杭	加工材	破片	自然木	総数
SD 06	1			4	1			1				5	1	13
埋没流路				9	1	1	1		1		1	23	15	53
検出面		1	1	7	1	10	2	22	2	8		40	15	109

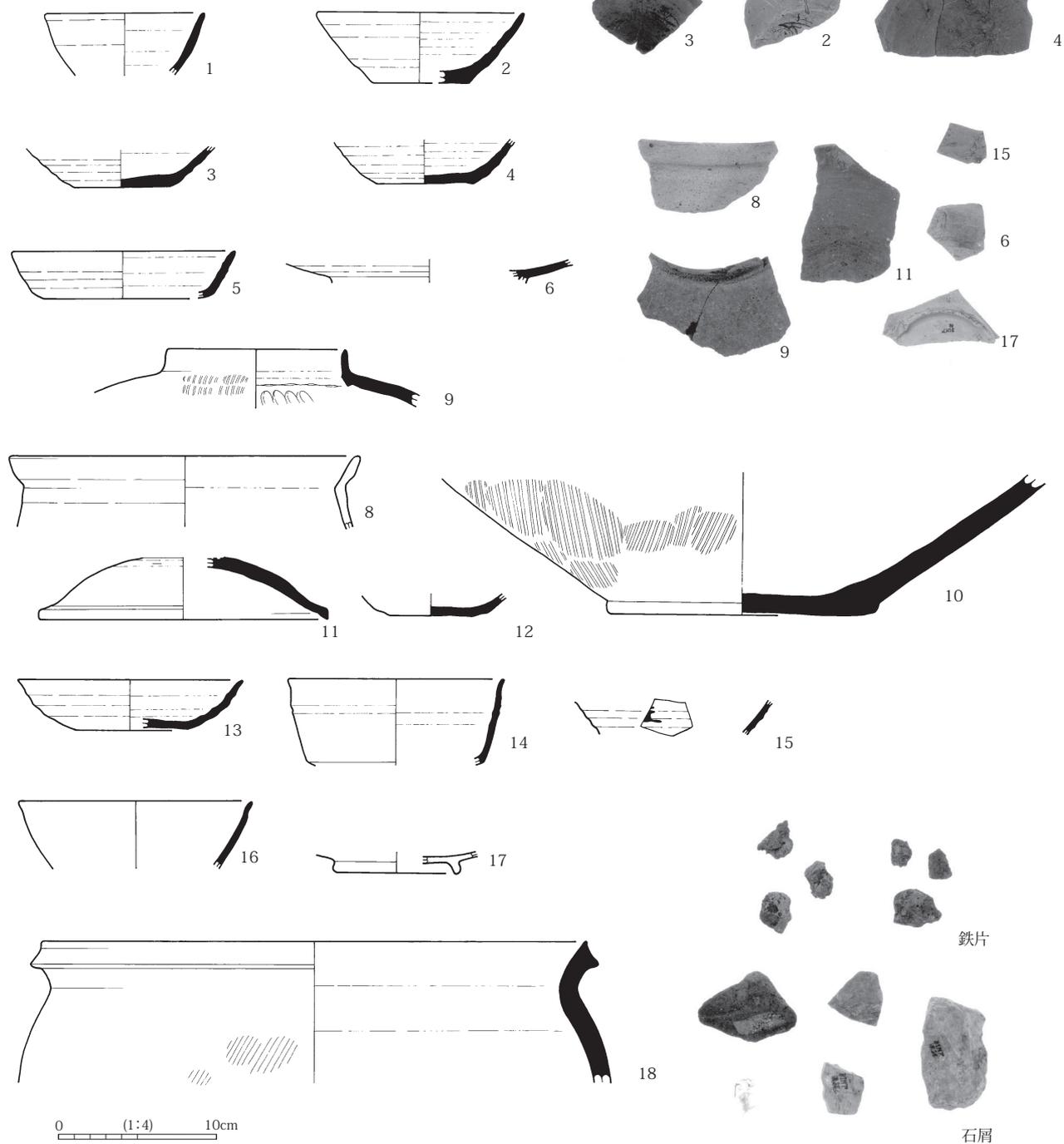
第16表 木製品組成

挿図番号	出土地区	遺構名	層位	器種	木目・木取り	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状の特徴 (C14年代)
第36図19	III C-6~11	埋没流路	検出面 (黒色土上面)	板材	板目	モミ属	(13.0)	(4.3)	(1.5)	切断痕有り
第36図20	—	埋没流路	検出面 (黒色土上面)	板状木製品	二方疋	アカマツ	(8.5)	(1.0)	0.9	炭化
第36図21	III B-24~	SD 06	黒色粘土層	板状木製品	板目	サワラ	(22.2)	4.5	1.2	
第36図22	—	SD 06	黒色粘土層	棒材?	丸木芯持ち	モミ属	(10.2)	直径 2.5		
第36図23	—	SD 06		木ノ端	板目	スギ	(10.0)	(1.5)	(0.4)	
第36図24	—	SD 06		棒状木製品	板目	サワラ	6.5	0.5	0.4	
第36図25	III C-21	SD 06	黒色粘土層	板状木製品	分割	タケ亜科	(24.7)	2.4	0.4	
第36図26			茶褐色粘土層	板状木製品	—	モミ属	21.3	3.0	1.8	切断痕有り
第36図27			茶褐色粘土層	板状木製品	板目	サワラ	(10.1)	2.6	0.8	穴有り (直径 2.5)
第36図28			茶褐色粘土層	板状木製品	板目	カラマツ属	(11.2)	(0.8)	0.5	
第36図29			茶褐色粘土層	板状木製品	追板目	アスナロ	(12.7)	2.1	0.2	
第36図30			検出面	板状木製品	二方疋	サワラ	10.4	1.9	0.9	
第36図31			茶褐色粘土層	板状木製品	板目	ヒノキ	(3.0)	(1.0)	0.4	
第36図32			茶褐色粘土層	板状木製品	分割	タケ亜科	4.5	1.4	0.2	切断痕有り
第36図33			茶褐色粘土層	編み針状木製品	芯持	カヤ	9.9	0.4	0.5	穴有り (直径 0.1)
第36図34			検出面	柄?	丸木芯持ち	コナラ節	(9.0)	直径 2.2		
第36図35			茶褐色粘土層	棒状木製品	削出	サワラ	(17.4)	2.3	(1.4)	柄?
第36図36			茶褐色粘土層	不明木製品	二方疋	サワラ	(5.6)	1.0	1.1	
第36図37			茶褐色粘土層	割材	板目	モミ属	(14.9)	(4.6)	1.1	穴有り (直径 0.2)
第37図38			検出面	馬くわのは	芯持削出	モミ属	55.0	3.9	3.6	1420 ± 40BP
第37図39			検出面	杭材	丸木芯持ち	クサギ	34.2	直径 3.4		
第37図40			検出面	杭材	丸木芯持ち	ヌルデ	69.7	直径 5.1		No138と接合

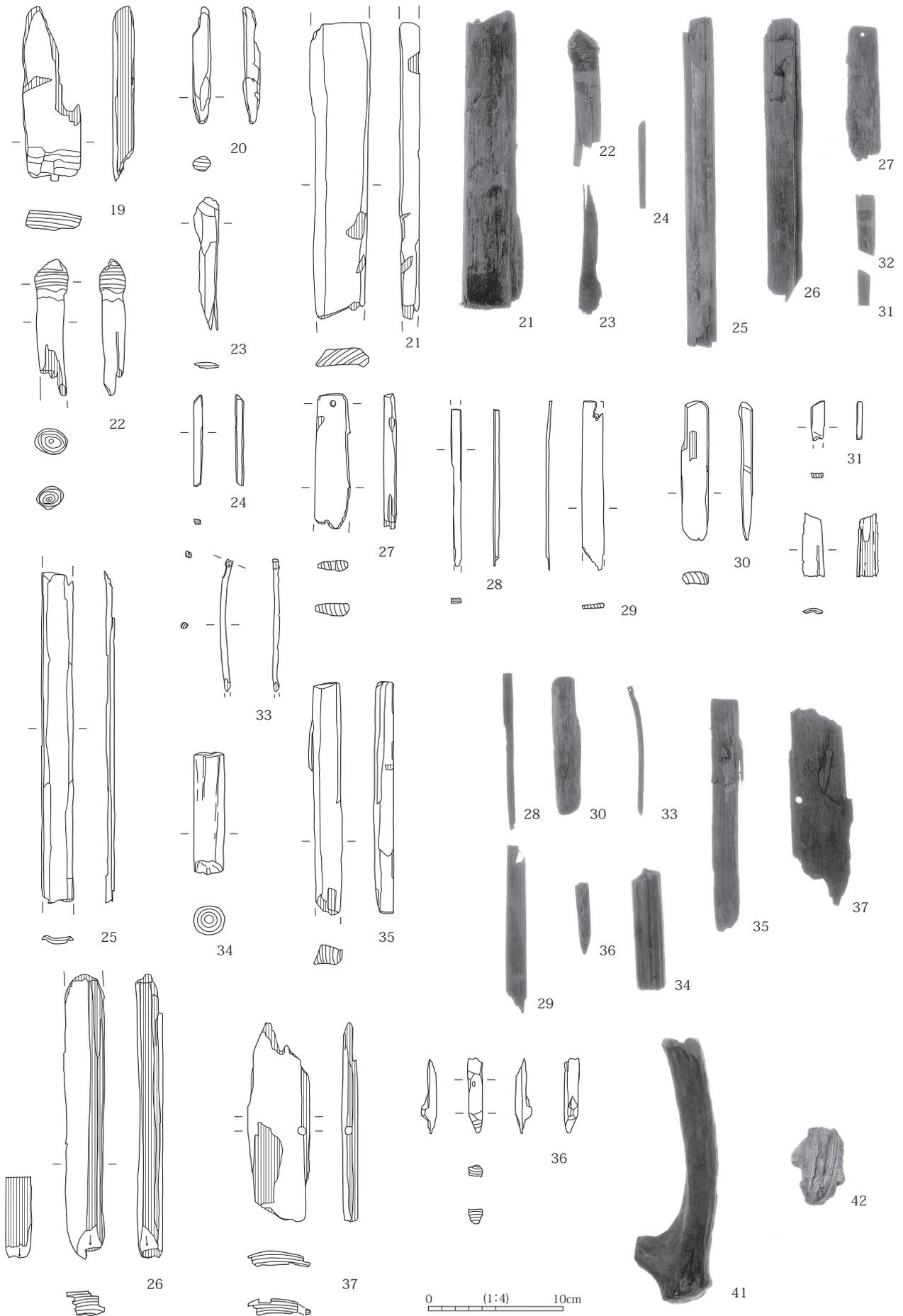
第17表 木製品属性



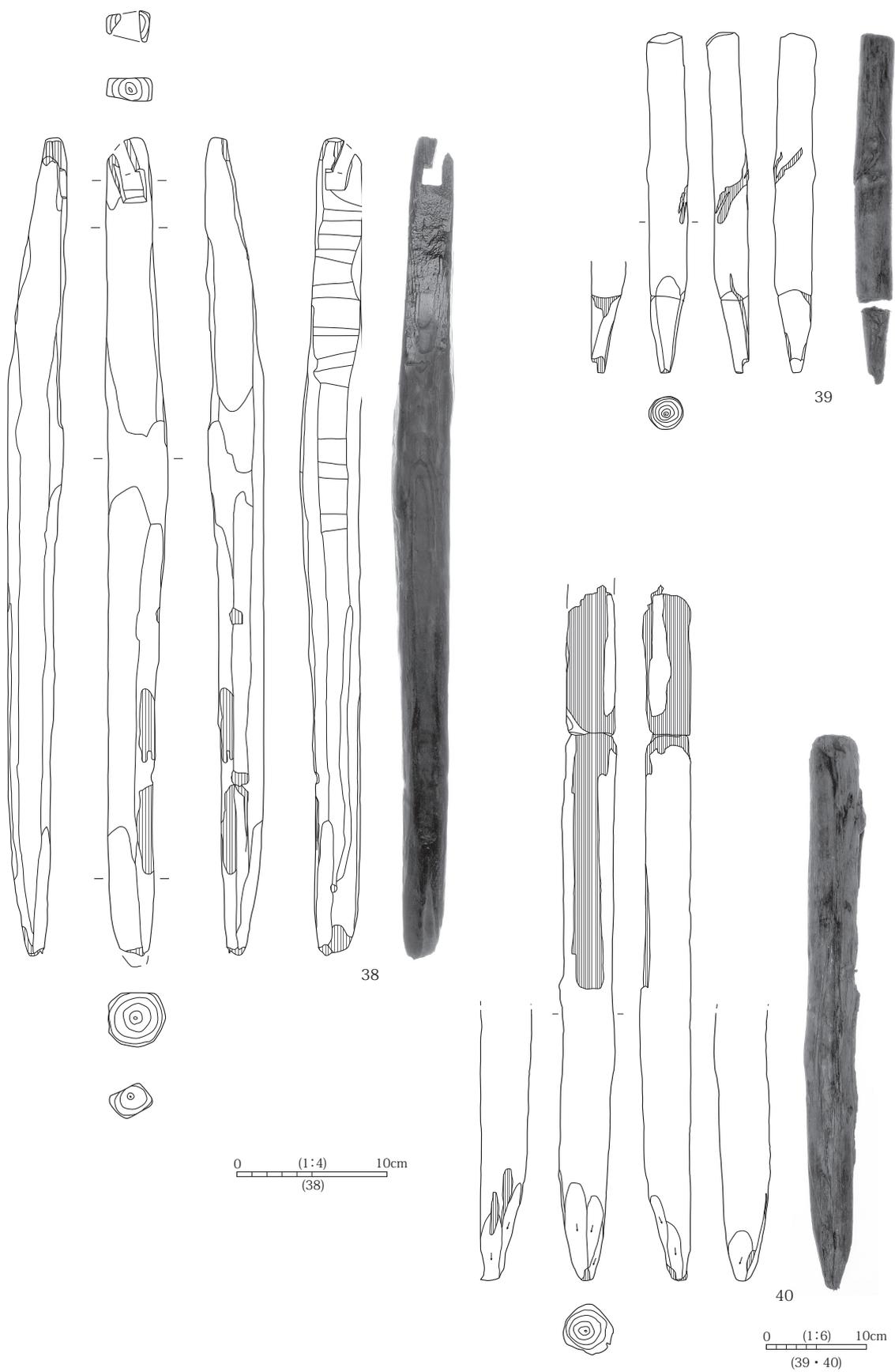
埋没流路全景



第35図 稲付遺跡出土土器及び石製品ほか（鉄片・石屑 1/3）



第36図 稲付遺跡出土木製品1及び骨角製品・歯



第37図 稲付遺跡出土木製品2

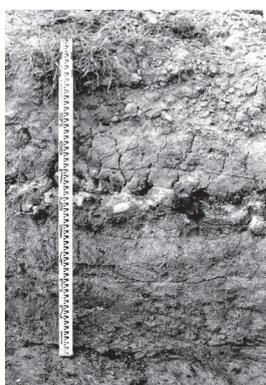


第6節 やくしどう 薬師堂地籍（稲付地籍分）の試掘調査

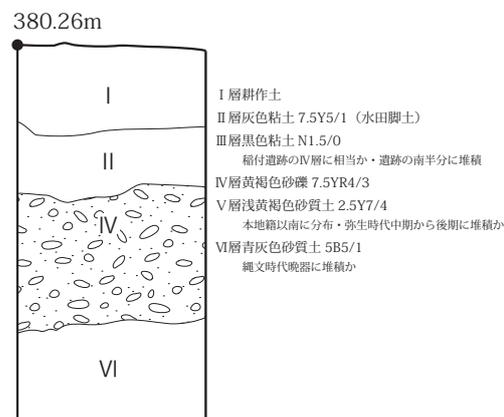
- 地籍： 千曲市大字八幡字薬師堂 1816-7 ほか
- 期間： 平成12年7月17日から7月28日
- 調査区： 市道9100号線以北農道8623までを対象とし、試掘調査を実施した。
- 調査面積： 調査対象面積2,755㎡、試掘面積（452㎡）
- 調査担当： 上田典男 町田勝則
- 調査状況： 市道9110号線以南から用悪水路（1816-4）までの地籍につき、遺跡所在の有無を確認した。調査時、旧字切地籍を薬師堂としたが、変更後の更埴市字切図で稲付地籍に包括されていることから、現在は稲付遺跡分に該当する。調査区に対し、南北の試掘坑を一本、東西の試掘坑3本を設定し、遺構確認を実施した。
- 調査結果： 試掘坑は、基本土層と推定した黄褐色砂礫層まで掘削、一部その直下の青灰色砂層までの掘り下げを行った。北側のIVF-1区周辺では、地表下40cmほどで黄褐色砂礫層を、60cmほどで青灰色砂層を確認する。IVF-2区へかけて拡張して深掘した東西の試掘坑では、黄褐色砂礫層と青灰色砂層間に砂層を確認、そこからは第41図7の自然木及び6の木製高杯を収集した。IVF-6区周辺では黄褐色砂礫層上面から礫層中にかけて、縄文後期から弥生後期までの土器破片を収集した。第41図6及び7の年代測定結果が、AD10年から20年であり、IVF-2区砂層は弥生時代中期の遺物を包含した土層と判断できる。したがって、上位に堆積した黄褐色砂礫層の年代は、それ以降と推定でき、そこから出土した土器破片は混在であり、摩滅状況から判断しても礫層中への流れ込みと判断できる。黄褐色砂礫層は、当地籍の試掘坑ほぼ全域に堆積し、VO-5区以南では当砂礫層上面にて、黒色粘質土の溝状の落ち込み3本を確認した。少なくとも弥生時代後期以後と推定できるが、人工的遺物及び自然木等の出土がないため、時期及びその性格については不明である。調査時に遺構番号SD07からSD09までを呼称し完掘した。
- 堆積層位： 調査時の現況はリンゴ畑である。表土掘削の結果、旧水田耕土にあたるII層を確認する。II層下部には、III層黒色粘質土が若干堆積するが、その多くはII層により削平され残土状況が悪い。恐らくこの土層がSD07



調査前の全景 (A区)



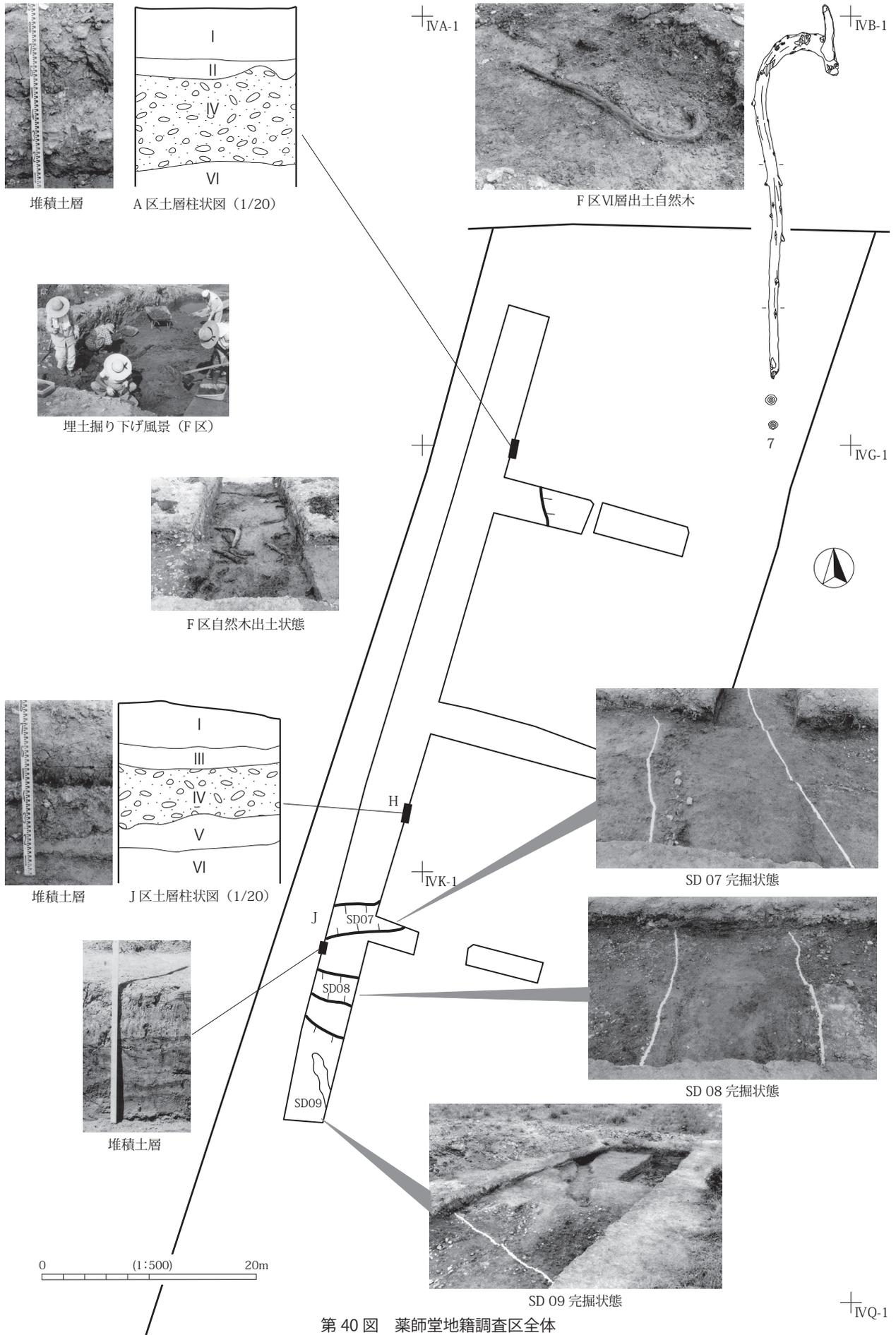
堆積土層



第38図 土層柱状図



第39図 調査地と試掘坑位置図



から09の埋没土と同質と推定できる。第IV層は黄褐色砂礫層であり、以下、一部に砂層を挟み青灰色砂層となる。青灰色砂層は、稲付遺跡試掘坑の深掘より出土した自然木の年代測定値により、BC1720年(3720±40)、縄文時代晩期末葉以降に堆積した河川堆積層であると判断できる。

出土遺物： 出土した遺物には、土器193点、木製品112点がある。土器及び木器の器種別内訳は第18・19表に示すとおりである。土器は縄文時代後期から晩期の小破片を主体とする。

礫層中の出土遺物

第41図1～7は木製品。1は角材。木目は分割材(みかん割)であり、両端部欠損する。残存部から考え、径4cm前後の製材した芯持ち材を分割したものか。樹種はカバノキ属。表面は比較的平滑であり、加工製品の割材であろうか。2は棒状木製品。断面形状からみて芯持ち材の板目部分のみ残存したと考えられる。樹種はタラノキ。表面は平滑で、端には長さ5mm、幅3mm前後の凹状の痕跡が残る。3は板状木製品で、ケヤキの板目材である。全体の形状は半杓子状。上端は3cm幅で把手と思われる部位があり、下端にいくにつれて広がる。表面には20前後の孔が不規則に散在し、左側面では木目に対し幅2mm前後の釘の痕跡がある。この孔より木目に沿って割れたとみられる。上端近くの右側面には、鋭く深い斧の痕跡が残る。4は板状木製品。木目は追柱目材で、樹種はクリである。製材の剥がれで全体の形状はつかめないが、表面及び側面が平滑に加工されている。5は木っ端、板目部分である。樹種はクリ。両面は平滑であり、製材板の破材とも考えられる。6はIVF-2区の砂層出土の高台付きの杯形木製品。ケヤキ材で縦木取り。高台部を中心に6片からなる。台部は厚く、表はロクロにより成形され、平滑であるが、内面は比較的粗く加工痕が残る。復元口径は20cm。7は砂層出土の自然木。木目は芯持ち丸木材である。両端は欠損。樹種はモミ属。

第42図8～27は土器。8は沈線区画で磨り消し縄文の深鉢形土器胴部破片。縄文時代後期の称名寺式であろうか。9は沈線による綾杉状文の施された深鉢形土器胴部破片、加曾利B式土器であろう。10は異形台付形土器の台部の破片である。幅9mmほどの隆帯を巡らし、篋状工具により刻みを施す。晩期安行式併行期の土器であろうか。11も異形台付形土器の台部の破片で、研磨仕上げの無文。12は内外面研磨仕上げした波状口縁深鉢形土器、口縁部破片である。口縁直下に隆帯を一条巡らせ、棒状工具により刻みを施す。晩期隆帯文系土器群であろうか。13は器面をナデ成形し、口唇端部をナデ押圧形成により、やや外反状に仕上げた深鉢状の土器である。不明瞭であるが、口唇外面には一条の沈線があるのか。晩期後半に位置付けられようか。14は器面ナデ成形の後、沈線による変形工字文風のモチーフ、屈曲部に棒状工具による刺突列点文を施す土器である。晩期佐野Ⅱ式併行期の深鉢形土器であろうか。15は弥生中期栗林式の甕形土器口縁部破片である。口縁には櫛描波状文を施し、口唇を波状に摘み成形している。この他に、黒色頁岩製の片刃刃器1点(3.6×4.6×1.0cm、17.5g)の出土がある。

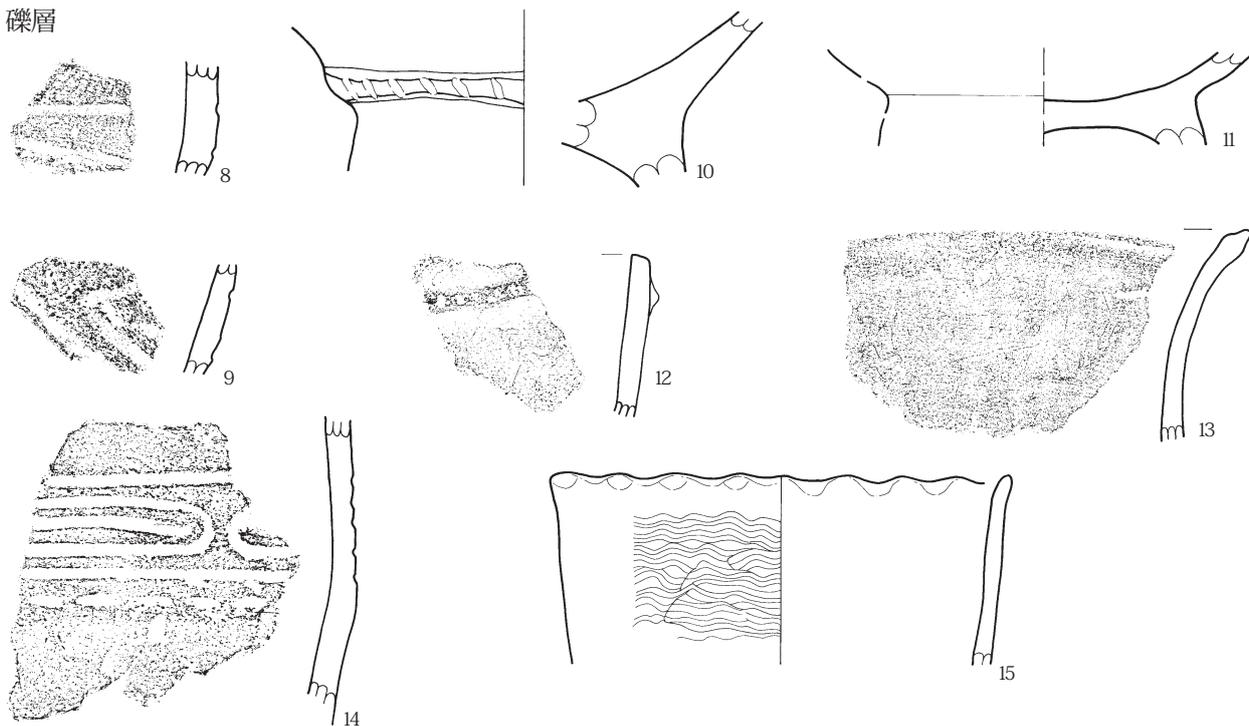
砂礫層中の出土遺物

16は器面の内外面を研磨成形した波状口縁深鉢形土器の波頂部破片である。口縁部には一条の隆起帯が巡る。篋状工具により隆起帯及び口唇を刻む。後期隆帯文系土器群であろうか。17は波状口縁深鉢形土器の波頂部破片で、ボタン状の貼付文に縦方向の押捺が入る。18は器面ナデ成形、口唇端部をナデ押圧形成により仕上げた深鉢形土器口縁部破

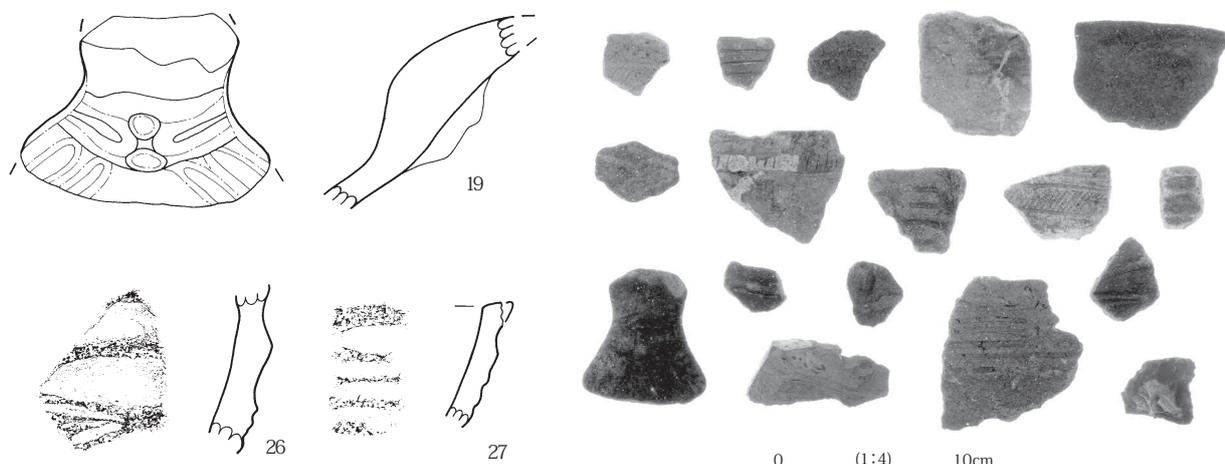
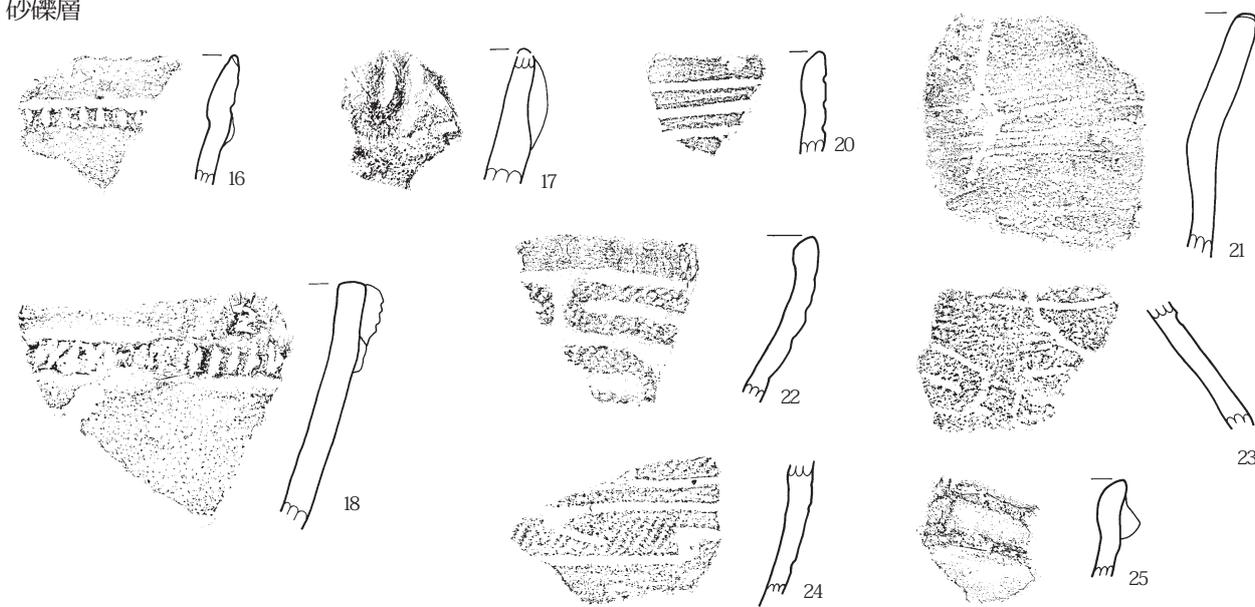


第41図 薬師堂地籍出土木製品

礫層



砂礫層



第42図 薬師堂地籍出土土器

片。口唇直下に篋状工具による刻み隆帯を巡らし、コブ状貼付文を付した土器。19は波状口縁深鉢形土器の突起部。突起は魚尾状を呈し、2本の隆起帯とそれらを結合させるようにコブ状の隆起がある。口縁に沿って2本の沈線が横走する。後期後葉の中ノ沢式であろうか。20は深鉢形土器の口縁部破片である。口縁は肥厚し、内外面は丁寧に研磨される。口縁に沿って深い3本の沈線が横走する。19同様、後期後葉の土器であろう。21は平口縁深鉢形土器の口縁部破片である。口縁外反し、口唇部には篋状工具による浅い刻みがある。外面はケズリ成形後、ナデ整形仕上げされている。晩期前半の粗製土器である。22は平口縁の浅鉢形土器、口縁部破片である。口縁は内削ぎ状に肥厚し、内外面丁寧に研磨整形される。縄文施文後、沈線により入り組み状にモチーフ仕上げした土器。晩期前半の土器であろうか。23は台付き鉢形土器の胴部破片であろうか。沈線区画による帯状の縄文施文に沈線による眼がね状のモチーフの文様が施されている。晩期前半に比定できようか。24は平口縁浅鉢形土器の胴部破片である。口縁部は欠損するが、外面丁寧に研磨し、沈線及び縄文による雲形文のモチーフを施す。晩期前半大洞C式土器である。25は口縁部破片。口縁は粘土帯の貼りナデによる帯状モチーフとなり、突起状の貼り付けがある。B字状突起に似る。26は平口縁浅鉢形土器の口縁部破片。口縁に沿って浮線が3段巡る。晩期末葉、氷I式土器である。27も氷I式の平口縁浅鉢形土器の口縁部破片である。この他に黒色頁岩製の片刃刃器1点(7.3×3.5×1.1cm)の出土がある。

遺構名	縄文後期(後期~晩期?含む)				縄文晩期						弥生中期			現代(暗渠内?)			数/総重量 (破片/g)		
	深鉢		破片		浅鉢		深鉢		異形台付鉢		破片		甕	台付甕	破片				
	口縁部	胴部	底部	不明	口縁部	胴部	口縁部	胴部	台部	不明			不明	すり鉢	排水管	不明			
V層青灰色砂	1			4															5/37.4
IV層砂		1		7															8/82.4
III層黄褐色砂礫	8	2	2	121	3	2	2	1	3	22	4	1		1	1	2			175/3,067
検出面			1	2									2						5/93.0

第18表 出土土器組成

遺構名	高杯	曲物	板状木製品	棒状木製品	板材	角材	棒材	炭化材	破片	自然木	総数
砂層	1									29	30
検出面		1	2	1	1	1	2	5	22	47	82

第19表 出土木製品組成

挿図番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状の特徴 (C-14年代測定)
第41図1	検出面	板状木製品	斜め	カバノキ属	(17.0)	3.0	2.0	切断痕あり
第41図2	検出面	板状木製品	板目	タラノキ	6.0	3.0	1.0	2/3欠 刻み有り
第41図3	検出面	板状木製品	—	ケヤキ	(29.0)	(8.0)	2.0	穴有り No12と同一個体か?
第41図4	検出面	板状木製品	追柱目	クリ	(17.0)	(4.0)	1.0	No9と同一個体か?
第41図5	検出面	木っ端	板目	クリ	9.0	4.0	2.0	先端切断痕
第41図6	砂層	高杯	継木取り	ケヤキ	(9.0)	(直径9)		木片6ヶ、1990±40BP
第41図7	砂層	自然木	丸木芯持ち	モミ属	112.0	直径5.5	6.0	1980±40BP

第20表 出土木製品属性

第7節 なかみち 中道遺跡の試掘調査

地 籍： 千曲市大字八幡字中道 1950-1 ほか
 期 間： 平成 12 年 7 月 21 日から 8 月 8 日
 調 査 区： 薬師堂地籍と境界を接する市用悪水路から市道 9130 号線までの区間を対象とし、試掘調査を実施した。

調査面積： 調査対象面積 4,629 m²、試掘面積 (679.4 m²)

調査担当： 町田勝則 上田典男

調査状況： 千曲市内の遺跡登録番号 (85-3) にあたり、奈良・平安時代の遺物散布地として認知されている。今回の調査は遺構の有無を確認し、遺跡の性格を判断するものであった。すでに登録遺跡であったことから、センター遺跡記号 B N M を付して試掘調査を実施した。

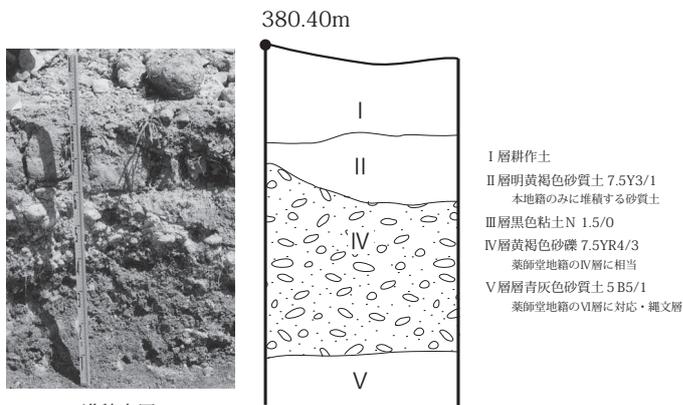
調査結果： 試掘の結果、薬師堂地籍から続く埋没流路状の落ち込み SD 09 と、調査区の広域にわたる湿地状の落ち込み SD 10 を確認する。SD 09 には人工遺物がなく掘削時期は判然としないが、基本土層の黄褐色砂礫層を切り込んでいることから、それよりも新しいと判断できる。黄褐色砂礫層中からは、縄文式土器片や弥生式後期土器片の出土があり、薬師堂地籍と同様な堆積状況を看取できた。湿地状の落ち込み部からは、人工遺物はまったく出土していない。V Y-6 で杭列を検出したが、杭が生木に近い状態であったことから、近現代の所産と考え、断ち割り、断面図の記録化のみ行った。V E-1 以南の地区にはグライ化した土壌が厚く堆積しており、植物根茎 (ピート) が無数に存在、人工的遺物はいっさい確認できなかった。状況から半過去の的に湿地と判断できたため、調査を終了した。以上から、今回の調査では、遺跡を決定付けるような遺構・遺物の確認はできなかった。

堆積層位： 調査時の現況は水田荒地である。表土掘削の結果、水田耕土を含む 3 枚から 4 枚の自然堆積層を確認した。耕土下、にぶい黄橙色砂層 (7.5Y3/1) を部分的に挟み、直下に基本土層の黄褐色砂礫 (10YR5/8) IV 層が存在する (第 43 図)。SD 09 及び SD 10 の埋土は、砂とピートの互層を基本とする。V E-1 区以南では、黒色粘土とピートの互層を基本とし、表土下 -70cm ほどで砂層に達する (第 45 図)。

出土遺物： 出土した遺物には、土器 8 点、木製品 2 点、石器 4 点がある。土器の器種別内訳は第 21 表に示す。

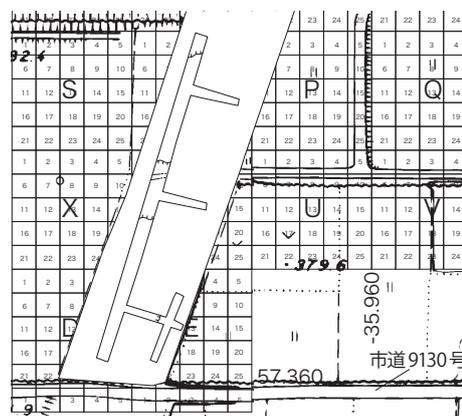


調査前の全景

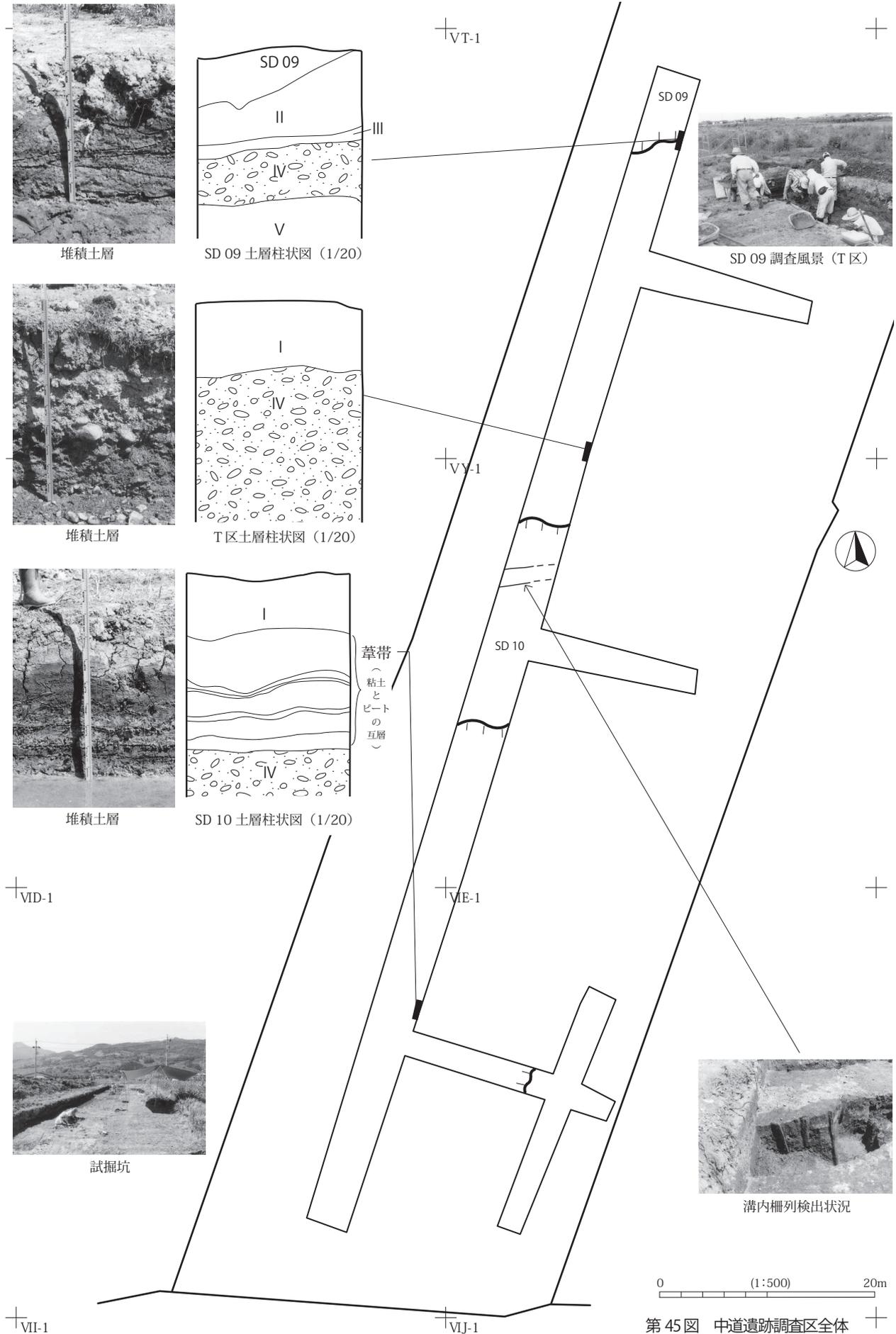


堆積土層

第 43 図 土層柱状図



第 44 図 調査地と試掘坑位置図



第45図 中道遺跡調査区全体

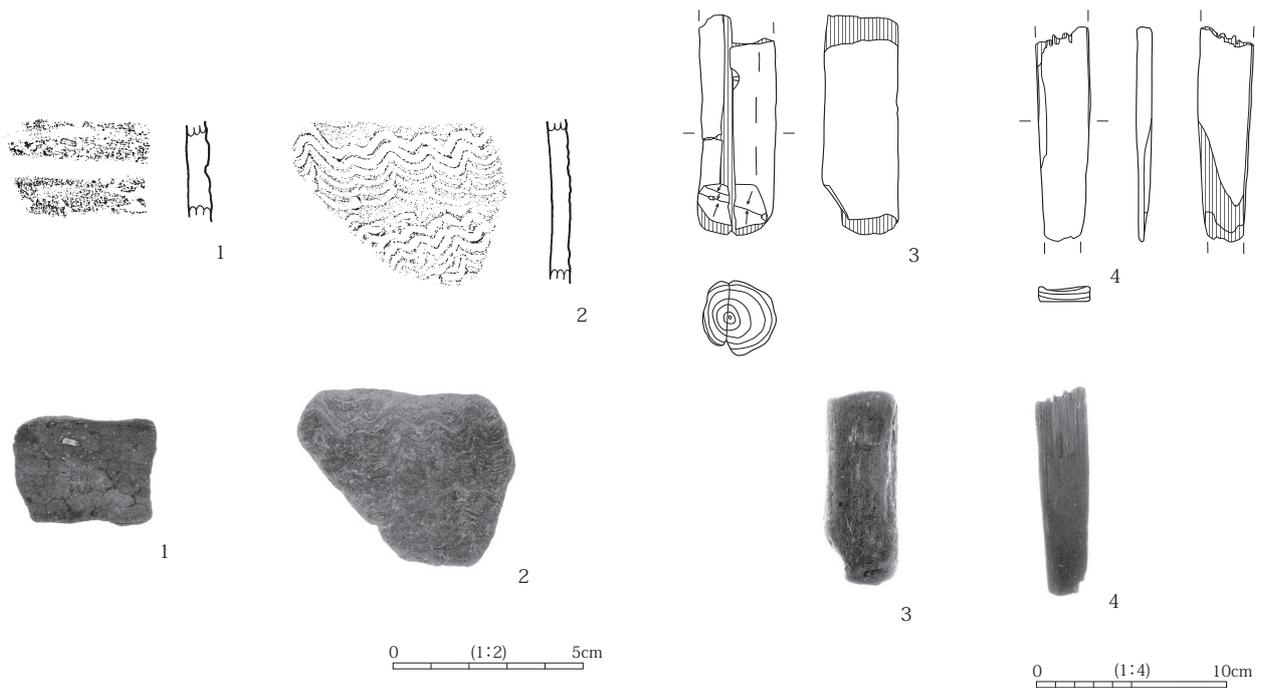
土器はすべて小破片で、縄文時代後期から中・近世陶磁器までがある。黄褐色砂礫層中に混在した資料は、薬師堂地籍同様、縄文後期から弥生後期までの資料に限定される。図示した1は深鉢形土器の胴部破片である。器面研磨後に直径5mmほどの棒状工具で沈線を2から3本描く。縄文後期に位置付けられる土器であろう。2は甕形土器の口縁部破片。全面に櫛描波状文が施される。弥生後期箱清水式であろう。表土から出土した遺物には中・近世に位置付けられる焼き物があり、唐津産と推定できる瓶そして椀と考えられる破片が各1点である。石器は、すべて剥片類でチャート材1点(4.6g)、黒曜石材2点(0.7g・2.2g)。木製品は検出面より2点のみ出土した。3は棒状木製品。丸木芯持ち材で、両端とも欠損する。下端部の周縁の一部が欠け、そこに刃痕が残る。表面は滑らかに調整されるが、浅い刻線がわずかに入る。径は、上端から下端まで一定で、どの部でも円く均質。端部に加工があることから目的のある製品として利用されたと考えられる。樹種はオニグルミ。4は板状木製品。板目材で両端が欠損する。樹種はサワラ材。下端近くは剥がれているため、幅、厚みともに減じる。面は製材加工され平滑。また木裏面も木目に沿って割れ痕があるものの比較的平滑である。

遺構名	縄文後期(後期~晩期?含む)			弥生後期		古代	中・近世		不明	数/総重量 (破片/g)
	深鉢 胴部	底部	破片 不明	甕	破片 不明	甕? 胴部	椀?	瓶?	破片	
黄褐色砂礫 検出面	3	1	1	1		1	1	1	2	7/82.4 4/38.6

第21表 出土土器組成

挿図番号	出土地区	層位	器種	木目・木取り	分析No (樹種)	分析No (年代)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状の特徴
第46図3	VT	検出面	棒状木製品	丸木芯持ち	オニグルミ		(11.7)	直径3.8		No4・No5と接合,先端加工
第46図4	VT	検出面	板状木製品	板目	サワラ		12.4	2.7	1.5	No7と接合

第22表 出土木製品属性



第46図 中道遺跡出土土器・木製品

第8節 ふけ地籍（中道地籍分）の試掘調査

地籍： 千曲市大字八幡字中道 1916-3 ほか

期間： 平成 12 年 7 月 21 日から 8 月 8 日

調査区： 市道 9130 号線から大道地籍境の用悪水路隣接地（字北なめり地籍）までを対象とし、試掘調査を実施した。

調査面積： 調査対象面積 3,078 m²、試掘面積（570.7 m²）

調査担当： 町田勝則 上田典男

調査状況： 調査時、ふけ地籍として発掘したが、現在の字名は中道地籍に属す。千曲市遺跡登録番号（85-3）の中道遺跡隣接地であり、奈良・平安時代の遺跡確認を目的とし、試掘坑を設定した。

調査結果： 試掘の結果、市道 9130 号線付近で基本土層と考えられる黄褐色砂礫層を部分的に確認した。試掘区の大部分については粘土層の厚い堆積であった。状況からして、薬師堂地籍と同様な湿地化した土地であったと判断できる。出土遺物はほとんどなく、VII-8 区付近で部分的に確認された黄褐色砂礫層中に弥生時代後期と平安時代の土器片が数点採集されたに留まった。したがって今回の調査では、遺構の存在を決定付ける要件は見当たらないと判断した。

堆積層位： 調査前の現況は水田荒地である。表土掘削の結果、水田耕土を含む 4 枚から 5 枚の自然堆積層を確認した。耕土下に灰色粘土と黒色粘土層（10YR1.7/1）を堆積し、下部に緑黒色粘土層（7.5GY2/1）が広域に厚く堆積する（第 47 図）。

出土遺物： 出土した遺物には、土器 6 点、石器 1 点がある。土器の器種別内訳は第 23 表に示すとおりである。土器はすべて小破片で、黄褐色砂礫層中より出土したのが、第 49 図左上の箱清水式土器、壺の口縁部破片 2 点のみである。



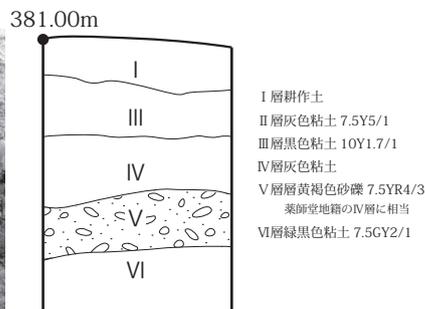
試掘坑全景

遺構名	弥生後期	古代		不明	数 / 総重量 (破片 / g)
	壺	杯 胸部	底部	破片	
黄褐色砂礫 検出面	2	1	1	2	2/19.7 4/26.3

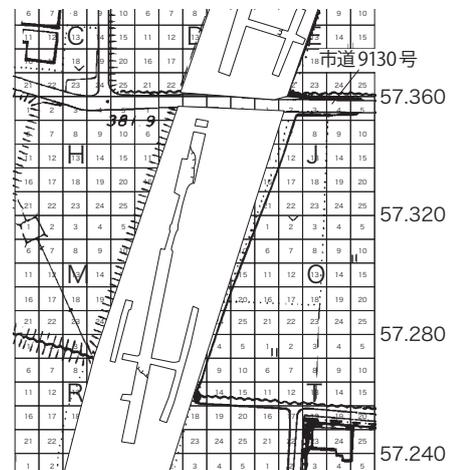
第 23 表 出土土器組成



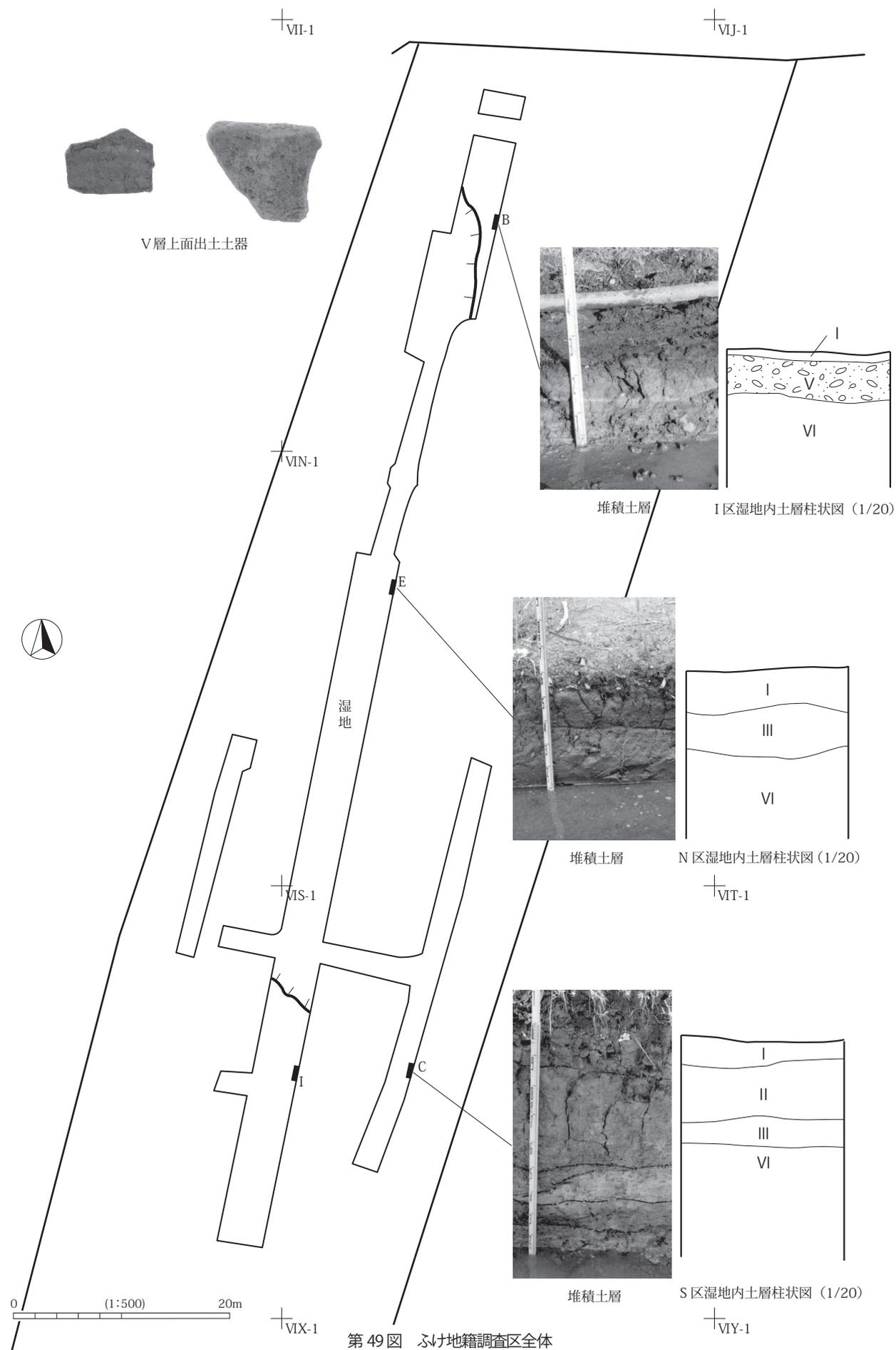
堆積土層



第 47 図 土層柱状図



第 48 図 調査地と試掘坑位置図



おおみち 第9節 大道遺跡の調査

1. 調査の概要

地籍： 千曲市大字八幡字北なめり石 3178-4、大道 3275-3 ほか
 期間： 平成 12 年 8 月 11 日から 12 月 19 日、平成 13 年 10 月 23 日から 11 月 1 日 (平成 12 年調査残地部分)
 調査区： 市道 9140 号線 (大道線) を挟む南北の地籍。
 調査面積： 調査対象面積 6,154 m²、試掘及び本調査面積 (2,368 m²)
 調査担当： 上田典男 町田勝則
 調査状況： 大道地籍は遺跡登録のない未周知の地点であったが、今回の試掘調査で遺跡の存在が確認できた。面的な掘削作業の結果、竪穴式住居跡等複数の遺構が検出され、古墳時代後期を中心とした集落遺跡であることが判明した。遺構は市道 9140 号線をまたいで以北のなめり石地籍まで連続して広がっており、同一遺跡地と判断できたことから、両地籍まとめて大道遺跡 (BOH) と命名する。調査経過から便宜的ではあるが市道を境になめり石地籍を北区、大道地籍を南区と仮称した。北区は北側にふけ地籍が隣接し湿地帯で画される。南区は南方向に清水下地籍と隣接、同じく湿地帯で区分されると推定できる。ただし南区には一部に大規模な攪乱が存在し、遺構の一部が破壊されてしまった可能性がある。

また南区では、調査区東側の幅 8 m ほどに及ぶ範囲が、平成 12 年度未買収残地となったために 13 年度に追加調査した。12 年度調査区は道路盛土工事が着工され、残地部分との間に未調査部分が生じたが、結果として、遺構としての連続性を大きく逸したのは 7 号住居跡のみであった。VII C-19 区は、市道 9140 号線への民地侵入路取り付け舗装によって、調査不能であった。

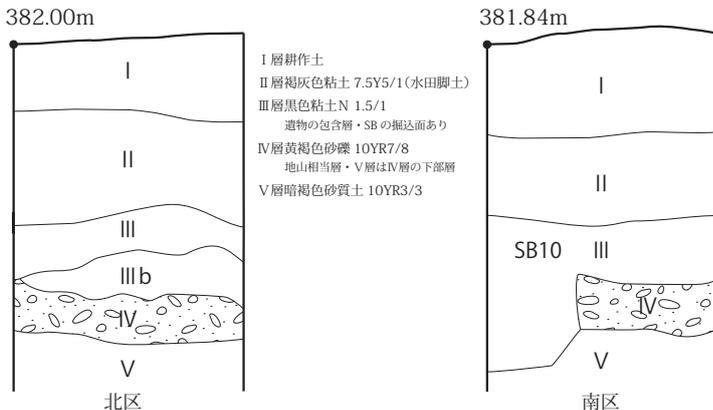
調査結果： 現地表下 - 50cm ほどで、若干量の遺物を包含する暗灰色粘土層 (N1.5/1) を検出、さらに - 10cm 程下位に黄橙色砂質粘土層 (10YR7/8) を確認、確実な遺構検出面とした。調査区には遺構検出面まで達する無数の暗渠排水が存在し、遺構の一部を破壊していた。北区では VI R-18 区以北にふけ地籍から連続する湿地の東西ラインを確認できた。ラインから南の VI R-23 区から VI R-25 区にかけては、黄橙色砂質粘土層が広がっており、遺構・遺物の



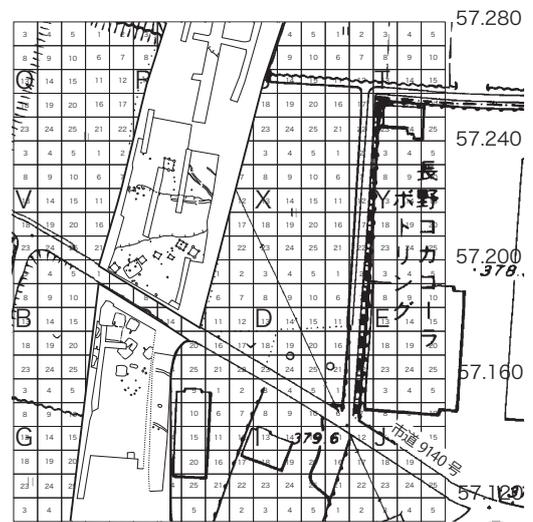
調査前の全景(市道大道線より)



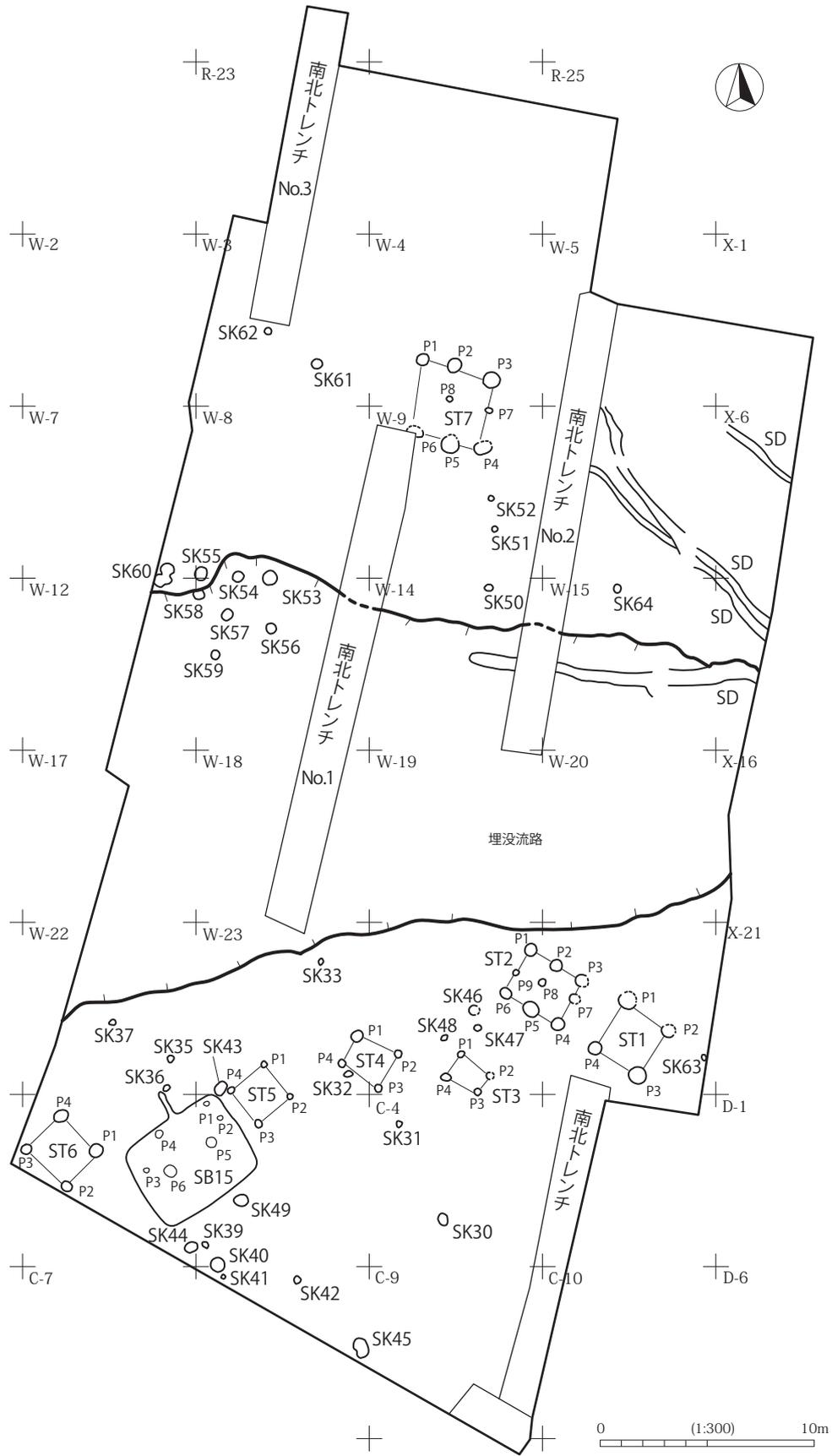
平成 13 年度調査状況



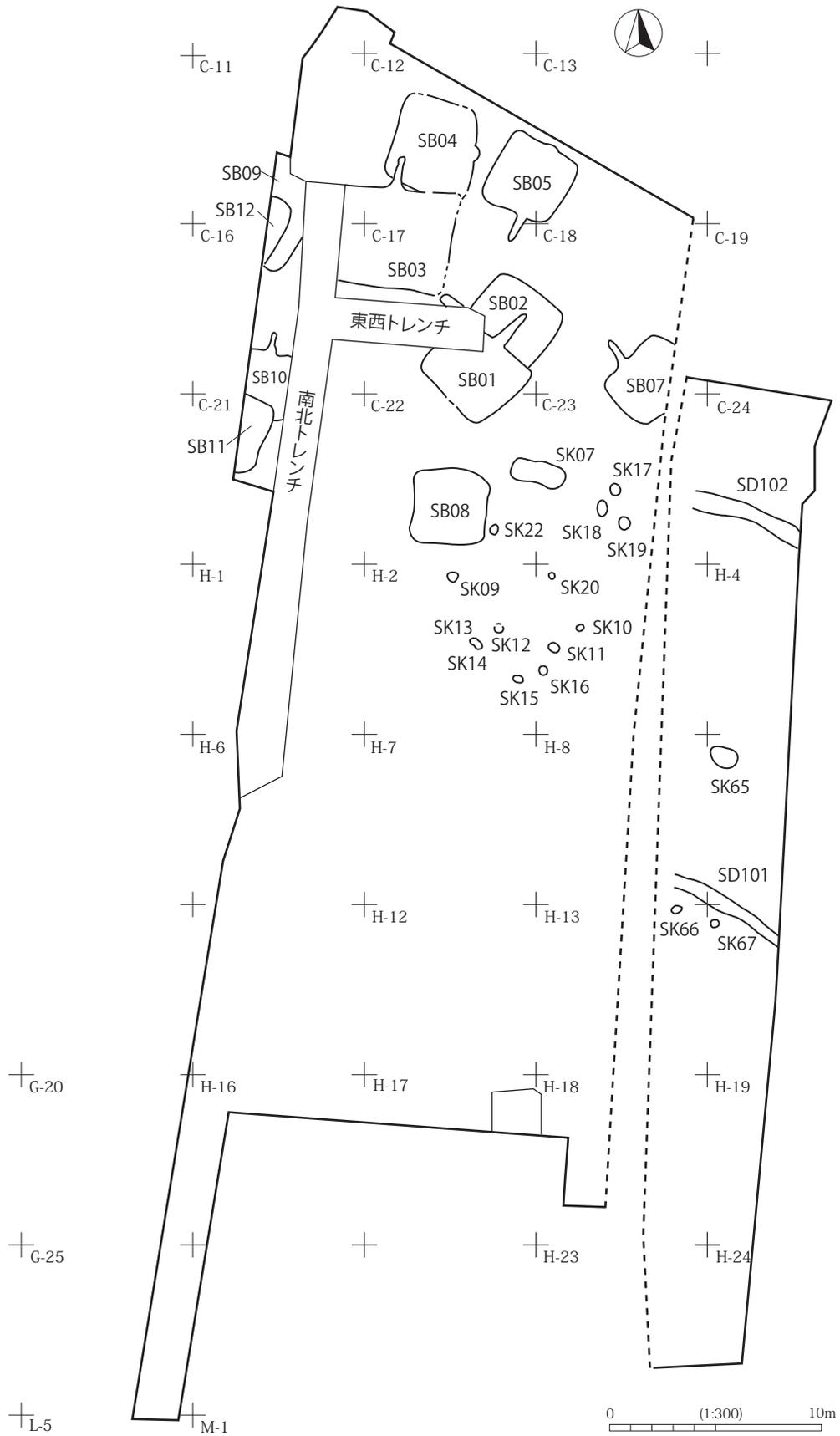
第 50 図 土層柱状図 (S=1/20)



第 51 図 調査地と試掘坑位置図



第52図 大道遺跡調査区全体1（北区）



第53図 大道遺跡調査区全体2（南区）

発見はない。さらに南のW区に至ると掘立柱建物跡（ST 07）及び土坑を数基確認できたことから、W区までは遺構の広がりがある、R区以北の湿地帯によって、それが画されていたと判断できた。VI W-13区から18区にかけては幅16mの流路状の落ち込み（埋没流路と推定）を確認した。流路は遺跡を東西方向に分断し、遺構を一部破壊して流下したものと推定される。流路以南では、竪穴式住居跡1軒、掘立柱建物跡6棟、土坑33基を確認した。

市道以南の南区では、北区から続く遺構を確認したが、その広がりにはVI H-1区からH-19区にかけての湿地ライン及び溝跡1本（SD 101）までで、そこ以南から清水下地籍にかけては遺構・遺物の発見がない。竪穴式住居跡は北区のC-3区からC-22区までの30m幅に集中して構築されている。2軒の切り合い関係が判明していることから、少なくとも2時期は確実に存在したらしい。複数の土坑を確認したが、掘立柱建物跡を確定できる柱穴の組み合わせはない。調査した遺構は、竪穴式住居跡11軒、土坑17基、畝立状の溝である。

堆積層位： 調査前の現況は北区がリング畑、南区が畠及び廃土置き場であった。表土掘削後、近現代の水田脚土を1枚、遺物を若干量包含する暗灰色粘質土（N1.5/1）を1枚確認する。以下、基本土層に近いと考えられる黄橙色砂質粘土（10YR7/8）に至る。

2. 遺構と遺物の概要

古墳時代後期

今回の調査で確認した遺構は、出土土器の編年の位置付けから、すべて古墳時代後期・所謂白鳳時代（7世紀後半代）に比定できる。善光寺平古代1期相当、八幡遺跡群古代開始期の遺跡である。

竪穴式住居跡

1号竪穴式住居跡（第54図から第56図）

時期： 7世紀後半を推定（古代1期比定）

位置： 南区 VII C-17, 22

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 12.3 m²（南北 3.56 m×東西 4.14 m）、残存深度 22cm

主軸方向： N-37°-E

カマド位置： 北東壁中央

壁立ち上がり： 63度程度の傾斜

柱穴： 主柱穴等なし

埋土堆積： 暗灰黄色粘質土（10YR4/2）の単純堆積

遺構重複： 2号竪穴式住居を破壊して構築

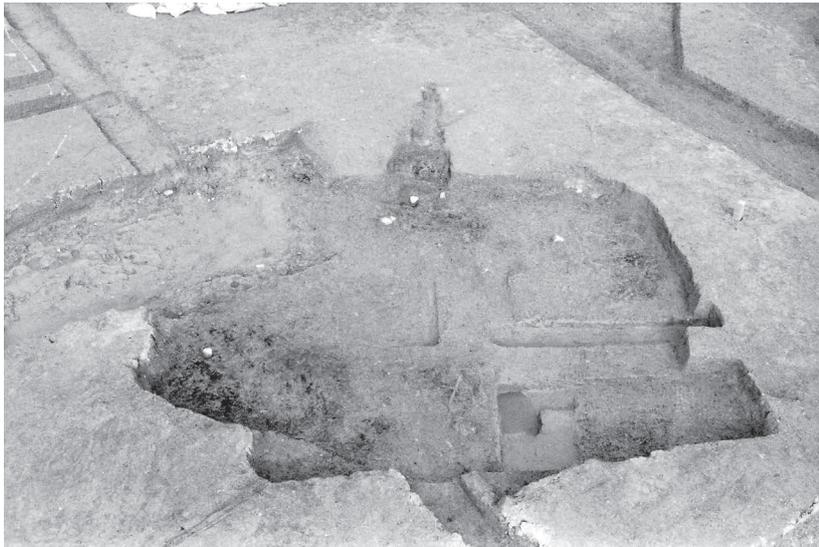
検出経過： 2号竪穴式住居と重複して確認したが、本跡の煙道部分が2号跡埋土中に認められたことから、それよりも新しいと判断した。住居の輪郭は確認時に不明瞭で、調査途中で幾分かの輪郭修正を得て、結果として床面に堆積した炭化物層の広がりから全体形を推定した。

遺物出土状況： 埋土中から小破片が散在して出土。カマド燃焼部より、円筒形の小型甕形土器（第56図1）1点が出土している。

床面の様子： 堅緻な面及び貼り床等の痕跡は確認できない。

カマドの様子： 袖部は石芯と粘土で構築されていたと考えられるが、残存状況は余り良好ではない。左袖部では石芯の抜き取り痕跡が明瞭に確認でき、右袖部には石芯（残欠片か）が遺存していた。火床は両袖のほぼ中央にあり、燃焼部は奥壁を円形に挟りこんで、16度の角度で煙道部と連結する。煙道長は2m60cmを計る。

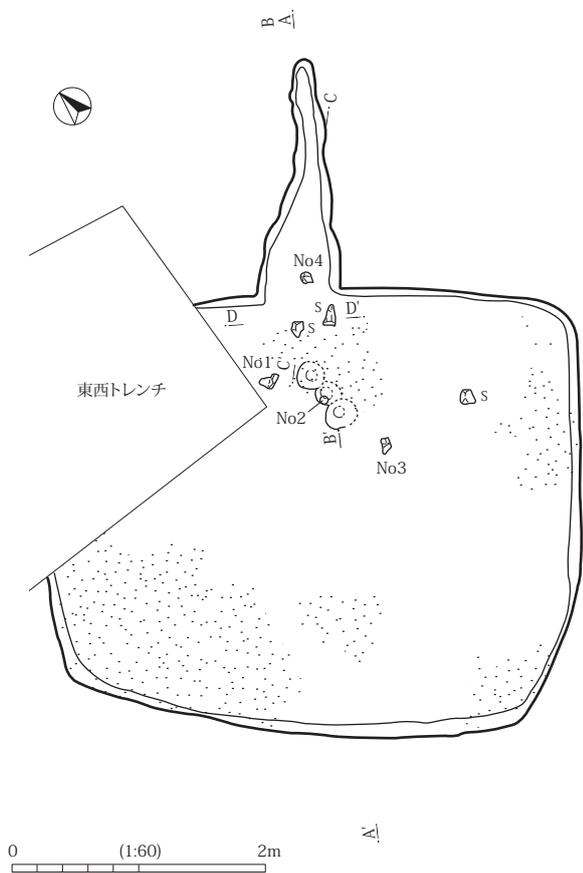
出土遺物： 埋土中の遺物は、土師器を主体とし、須恵器は杯底部と考えられる小破片1点と瓶の胴部破片1片（22.6g）、杯蓋形土器の破片1片（13.4g 体1）の出土である。土師器はいずれも破



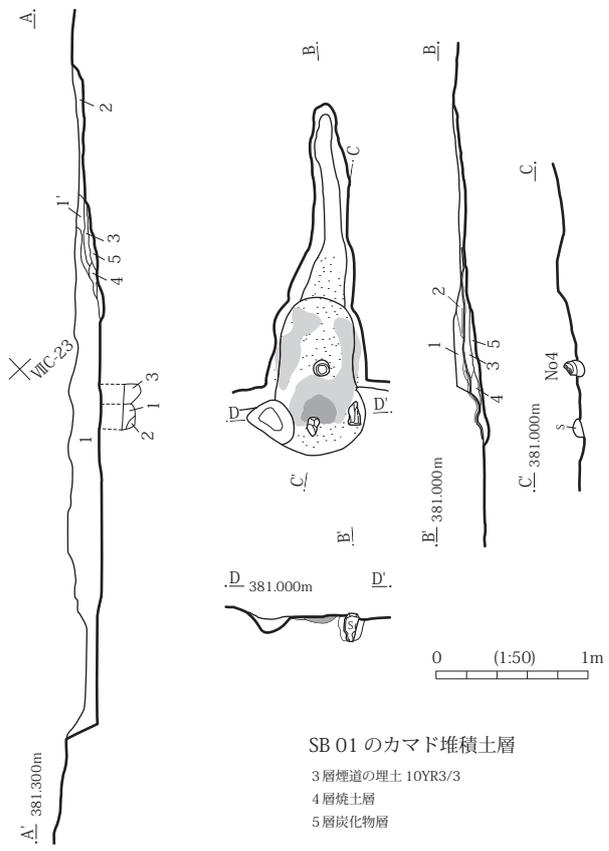
SB 01 完掘



カマド完掘



第 54 図 SB 01 完掘状態



SB 01 のカマド堆積土層

- 3層煙道の埋土 10YR3/3
- 4層焼土層
- 5層炭化物層

第 55 図 カマド完掘状態



第 56 図 SB 01 出土土器

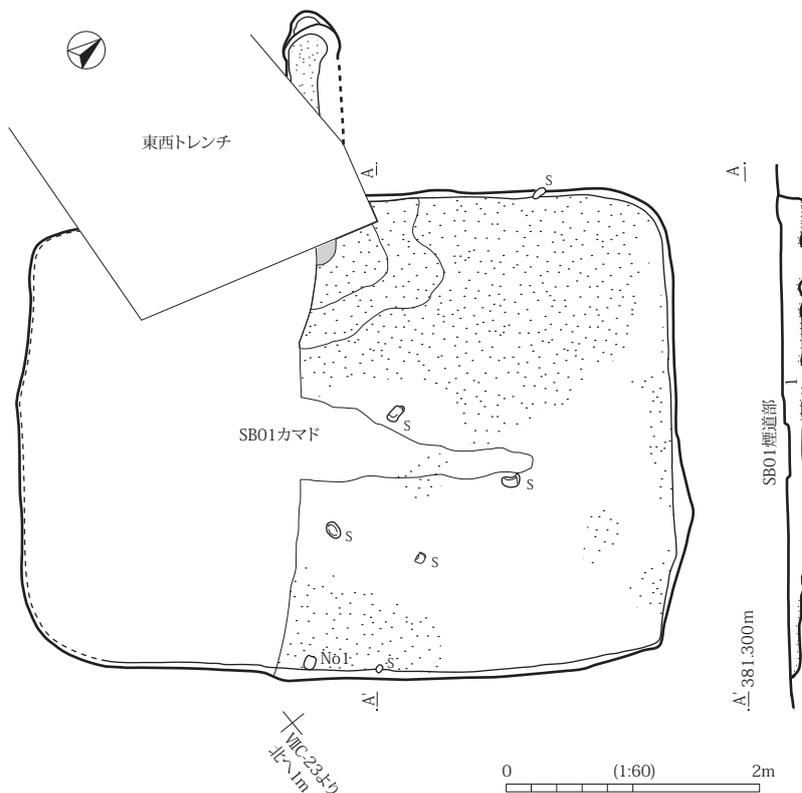
片資料で、甕形土器 61 片 (355g, 口縁 2・胴 57・底 2)、杯形土器の破片 12 片 (73.9g 胴 12)、器種判定不能の破片 67 片 (93.6g) がある。この他、復元可能な個体に杯形土器 1 点 (85.6g, 第 56 図 2) と小形の甕形土器 1 点 (300.9g, 第 56 図 1) がある。1 は輪積み痕を残す筒型円筒の土器である。底部の作出が明瞭に認められることから、小型の甕形土器と判断した。袖部芯材やカマド内支脚として用いられる所謂筒型の円筒形土製品と形状に類似点もあり、出土位置を考慮すれば、カマド施設関連の用途を想定すべきと考える。2 は非口クロ土師器で平底化した杯 I 類、内面は良好な研磨整形で黒色化。口径 15.4cm、器高 5.5cm。

2号竪穴式住居跡 (第 57 図)

- 時 期： 7 世紀代を推定 (古代 1 期比定)
- 位 置： 南区 VII C - 17, 18 平面形態： 隅丸長方形
- 規 模： 表面積 18.4 m² (南北 5.2 m × 東西 3.86 m)、残存深度 18cm
- 主軸方向： N - 51° - E カマド位置： 北西壁中央
- 壁立ち上がり： 70 度程度の傾斜 柱 穴： 主柱穴等なし
- 埋土堆積： 暗灰黄色粘質土 (10YR4/2) の単純堆積、白色粘土の混在あり。
- 遺構重複： 1 号竪穴式住居に破壊される
- 検出経過： 1 号竪穴と重複して確認したが、1 号の煙道部分が本跡の埋土中に認められたことから、それよりも古いと判断。住居の輪郭は白色粘土を混在する埋土の広がりから判断した。
- 遺物出土状況： 埋土中から小破片が散在して出土。
- 床面の様子： 堅緻な面及び貼り床等の痕跡は確認できない。
- カマドの様子： 〈北西壁カマド〉 試掘トレンチ及び 1 号竪穴式住居により大部分が破壊されている。残存状況から判断すると、袖部は粘土で構築されていたと考えられる。火床及び燃焼部には炭化



SB 02 床面炭化物の状態



第 57 図 SB 02 完掘状態

物層の重なりが確認できた。燃烧部から煙道への立ち上がりは緩やかで、煙道長は1m46cm。
 出土遺物： 埋土中から土師器の小破片のみが出土。いずれも全体形を復元できる程度の資料ではない。
 甕形土器 50片 (252.3g, 口縁1・胴部47・底2)、杯形土器 28片 (130g, 口縁2・胴部26)、高杯形土器の脚部破片 1点 (7.8g)、器種判定不能破片 53点 (92.8g)、磨石様の石 1点 (626.3g)、敲石様の石 1点 (512.2g)。また埋土中に拳大の円礫が目立った。

3号竪穴式住居跡 (第58図)

時期： 7世紀前半を推定 (古墳9期比定)

位置： 南区 VII C - 11, 12, 16, 17 平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 24.8 m² (南北 4.8 m × 東西 5.1 m)、残存深度 18cm

主軸方向： N - 9° - E カマド位置： 北東壁中央

壁立ち上がり： 60度程度の傾斜 柱 穴： 主柱穴3本

埋土堆積： 埋土は上下2層に分層可能で、レンズ状堆積を示す。上層より1層オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3)、2層オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) と区分する。

遺構重複： 4号竪穴式住居と重複して検出。4号跡は床面直上の検出状態で、確認状況も著しく悪いため、両跡の新旧関係を掴むことはできなかった。

検出経過： 4号竪穴式住居と重複して検出、上記の理由からほぼ同時に調査を行った。新旧関係は不明。また本跡の南壁付近の輪郭も検出当初不明瞭であり、別に1基の遺構 (6号竪穴式住居跡) を想定していた。調査進行に伴い本跡の輪郭が明瞭となるに従い、南壁側に想定した仮称6号の遺構認定根拠は希薄化、住居跡の重複とは判断できない状況に至ったことから、これについては遺構登録を抹消した。

遺物出土状況： 埋土中から小破片が散在して出土したほか、床面付近より完形推定可能な大形の破片 (第58図ナンバー付き土器) が出土した。カマド灰掻き出し部より甕形土器底部破片 (第58図 No3 と No4) が出土し、煙道先端部からは杯形ないしは鉢形の土器 (第58図 No5 と No6) が出土している。

床面の様子： やや堅緻で平坦な面。

カマドの様子： 〈北壁カマド〉袖部は粘土で構築されていたと考えられるが、ほとんど残存していなかった。火床は両袖のほぼ中央に明瞭に遺存し、燃烧部は奥壁をほぼ円形に挟りこみ、28度の角度で煙道部と連結する。煙道長は1m44cmを計る。

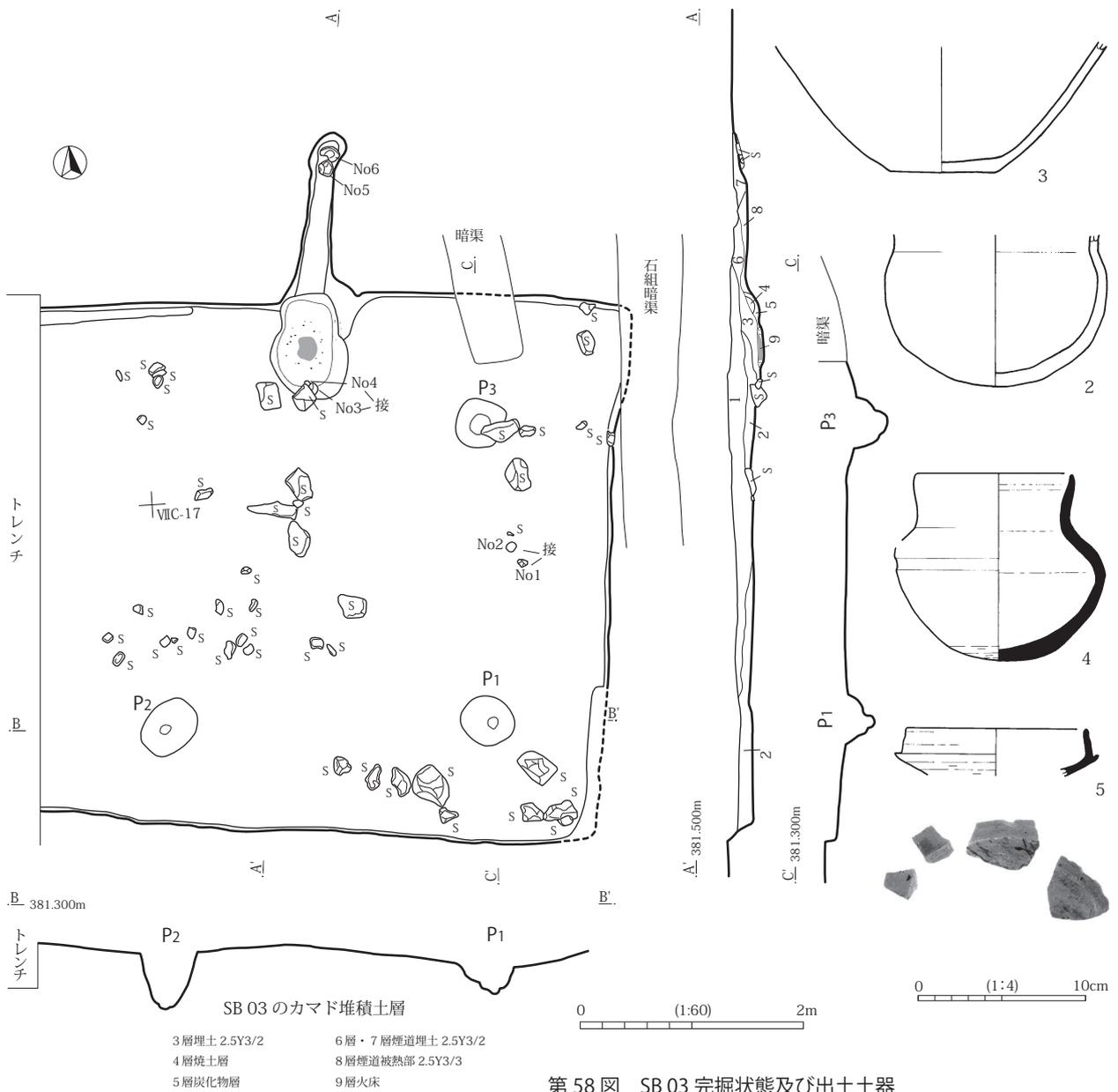
出土遺物： 埋土中の遺物は、土師器を主体とし、須恵器が若干ある。破片資料が主体で、土師器甕形土器 159片 (984.8g, 口縁1・胴部138・底部20)、杯形及び鉢形の土器 22片 (249.8g, 口縁4・胴部17・底部1)、甕形土器 75片 (401.7g, 一括63・胴部11・底部1)、高杯形土器 3片 (10.3g, 皿部2・脚部1)、器種判定不能の破片 228点 (613.9g) がある。須恵器では、甕形土器破片 1点 (61.6g, 口縁1)、杯形土器 3片 (11.5g, 胴部3)、杯蓋形土器 1片 (3.4g) がある。以上の他に完形復元可能な個体が5点ある (第58図)。土師器杯形土器 1点 (106.3g 第58図1)、鉢形土器 2点 (149.5g 第58図2・172.7g 第58図3)、須恵器の壺形土器 1点 (112.1g 第58図4) と杯形土器 1点 (7.8g 第58図5) である。1は第58図 No2、非ロクロで平底化した杯I類、内面は良好な研ぎ整形、黒色仕上げである。東壁よりの床面直上から出土、No1と同一個体と推定できる。口径 13.8cm、器高 4.2cm。2は第58図 No5 で、非ロクロ丸底の鉢形土器、口径 12.5cm、器高 5.5cm を推定。煙道先端部分から出土した。3は第58図 No6 で、



SB 03 完掘 (南から)



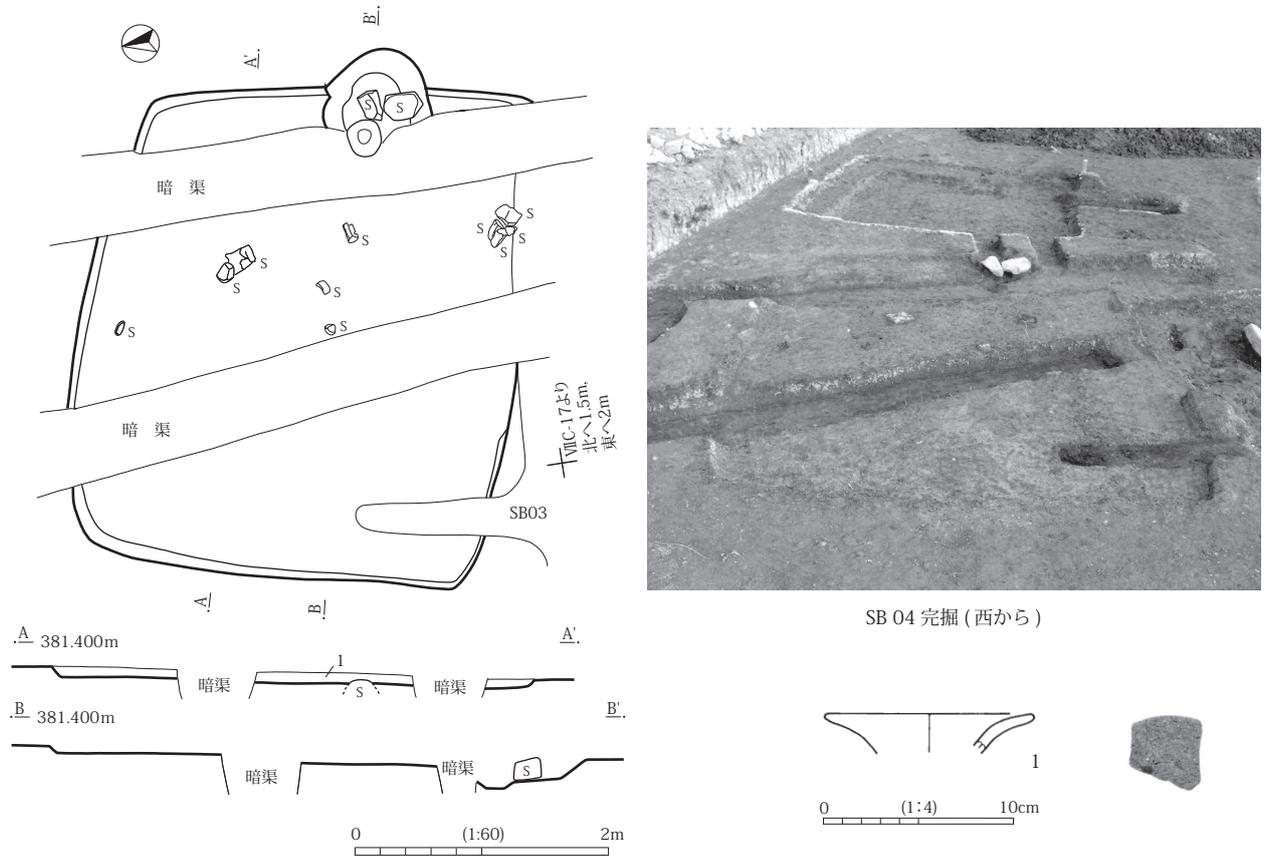
煙道部遺物出土状態 (No5 と No6)



非ロクロの鉢形土器底部破片であり、No5 と接して出土した。明瞭な平底で、外面は丁寧にナデ仕上げされている。4は埋土中より出土した須恵器短頸壺で、底部丸底で、回転ケズリ成形。底部はヘラ削り・ナデ整形で、肩部に沈線が横走する。口縁部は大半を欠失する。5は、埋土1層より出土した須恵器杯型土器である。底部ケズリ、返しのあるTK 10 型式か？。

4号竪穴式住居跡(第59図)

- 時 期： 推定不能
- 位 置： 南区 VII C - 12 平面形態： 隅丸方形変形
- 規 模： 表面積 12.6 m² (南北 3.4 m×東西 3.9 m)、残存深度 10cm
- 主軸方向： N - 105° - E カマド位置： 東壁中央
- 壁立ち上がり： 43 度程度の傾斜 柱 穴： 主柱穴等なし
- 埋土堆積： 埋土は暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) の単純堆積
- 遺構重複： 3号竪穴式住居と重複。両跡の新旧関係は確認できず。
- 検出経過： 3号竪穴式住居と重複して検出。表土掘削後、人頭大の礫を確認、遺構の存在を想定し精査、竪穴状の落ち込みを認める。検出時、3号竪穴式住居の煙道想定部分が本跡内に認められたことから、3号による破壊を考えたが、検出確認レベルが床面直上付近(埋土の深さ5cm程度)であったこと、床自体が不明瞭で、その認定も不確実さを伴ったことなどから、厳密には新旧の切り合いを判断することはできなかつた。検出した礫が焼け礫であり、炭化物の堆積・掘り込みの確認等を根拠として、カマド部を想定したが、この落ち込みを住居と認定するには、根拠が希薄である点は否めない。



第59図 SB04 完掘状態及び出土土器

遺物出土状況： 住居プラン検出時に土器の小破片が散在して出土した。しかし、埋土中の遺物と特定できない状況であったため、遺構外出土遺物として扱った。確実に本跡に伴うと判断できる遺物は、カマド想定部分より出土した甕破片1片だけである。

床面の様子： 極めて不明瞭。

カマドの様子： 〈東壁カマド〉袖部の芯材と考えられる人頭大の石及び火床と推定できる掘り込み部のみが残存していた。35度の角度で想定される煙道部と連結する。煙道部分は残存していない。

出土遺物： 確実に埋土中と判断できる遺物はない。カマド想定部分より、小型の甕形土器口縁部破片1片(10.5g, 第59図1)のみが出土している。

5号竪穴式住居跡(第60図から第61図)

時期： 7世紀後半を推定(古代1期比定)

位置： 南区 VII C-12, 13, 17, 18 平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 12.1 m² (南北 3.6 m×東西 3.3 m)、残存深度 20cm

主軸方向： N-25°-E カマド位置： 南西壁中央(旧北東壁中央)

壁立ち上がり： 62度程度の傾斜 柱 穴： 主柱穴等なし

埋土堆積： 埋土は基本的に単一土層と判断できたが、炭化物の混入度合いにより上下2層に分層した。上層より1層黒褐色粘質土(10YR3/2)、2層黒褐色粘質土(10Y2/3)と区分し、2層は1層に比して炭化物量が2%程度多い。

遺構重複： なし。ただしカマド及び床面の様子から、カマドの移設が想定される。

検出経過： 表土掘削後の平面精査により、方形に広がる黒褐色土の落ち込みを確認、竪穴状の遺構を想定し調査を実施した。床面はやや不明瞭であったが、1号竪穴式住居跡と同様な観方、すなわち炭化物層の広がりを捉えて床面調査とした。北東壁のカマド部分では、煙道部の張り出し及び左袖部が残存し被熱痕跡が認められた。南西壁のカマド部分には、明瞭な煙道部及び燃焼部が残存しており、残存状況から本跡の最終的なカマドと判断し、調査した。

遺物出土状況： 南西壁カマド付近の埋土中から土器破片が集中して出土した。ことにカマド燃焼部からは比較的大きな破片(第60図ナンバー付き土器ほか)が出土した。一方、北西側の埋土中からは小児頭大の礫が複数出土し、北東壁カマドの袖部芯材の2次埋没と推定。

床面の様子： 堅緻な面及び貼り床等の痕跡は確認できないが、南西壁カマドでは、火床から灰掻き出し部にかけて、3枚程度、粘土による貼り替え補強面を確認した。

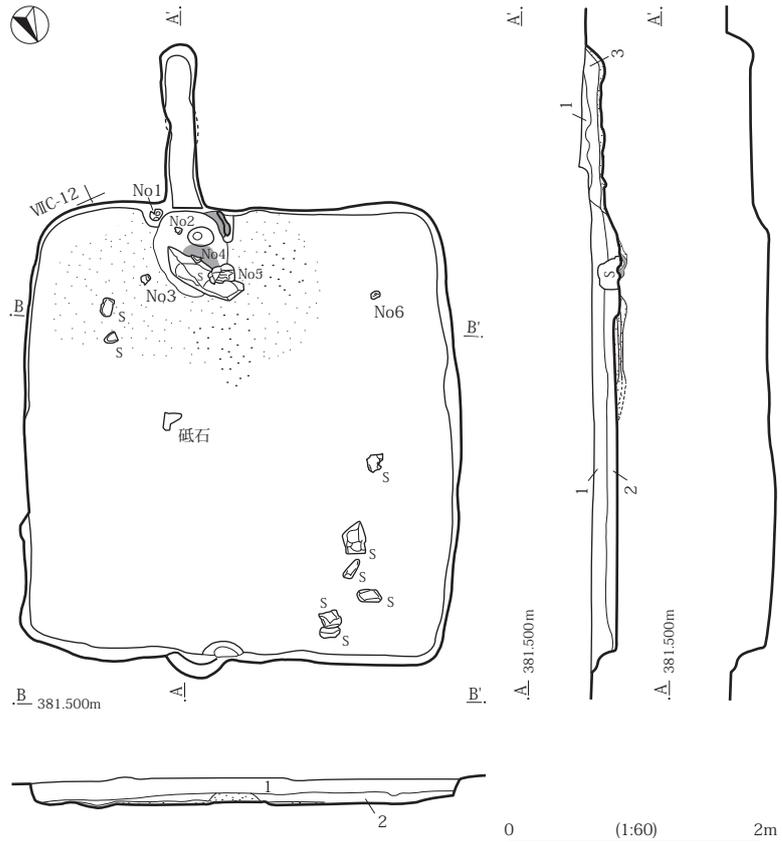
カマドの様子： 〈北東壁カマド〉粘土構築による左袖部と燃焼部が残存し、煙道立ち上がり部と考えられる張り出しが認められた。状況から人為的な破壊を受けた結果と推定した。住居北西側の埋土中から出土した小児頭大の礫は、本カマド袖部芯材の2次的な埋没遺物と考えられる。

〈南西壁カマド〉袖部は粘土で構築されていたと考えられる。燃焼部は皿状に掘り窪められ、手前に火床、奥よりに支脚抜き取り痕と考えられる穴が認められた。また火床は明瞭に残存し、直径70cm程度の長方形板状の天井石が出土した。煙道部との角度は28度、煙道長は1m20cmを計る。

出土遺物： 土師器436片が主体を占め、須恵器は僅か3片である。土師器甕形土器360片(1,600g, 口縁2・胴部231・底部3・推定不能69)、小型甕形土器72片(221.6g, 口縁14・胴部54・底部4)、高杯形土器4片(100.7g, 皿部2・脚部2)。須恵器では、杯形土器1片(12.8g, 底部1)、壺形土器2片(22.4g, 口縁1・胴部1)。1は埋土1層出土の短頸壺の



SB 05 完掘 (東から)

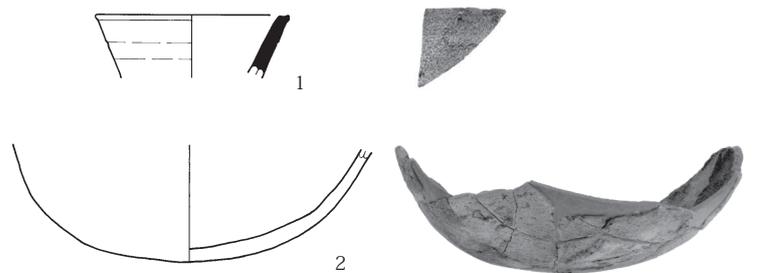


SB 05 のカマド堆積土層
3層煙道の埋土 10YR3/1
焼土及び炭化物粒子、砂礫混入層

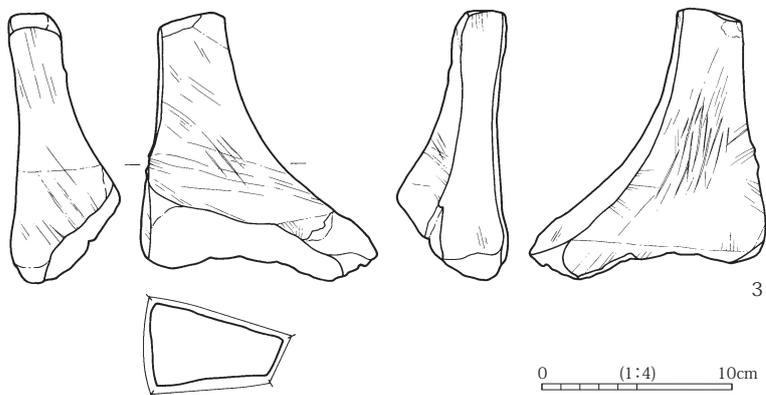
第60図 SB 05 完掘状態



カマド完掘 (北から)



燃焼部遺物出土状態 (西から)



第61図 SB 05 出土土器

口縁部破片である。2は第60図 No5で、土師器甕形土器の底部付近の一括個体と考えたが、丸底である点から大形の鉢形土器とすべき資料かもしれない。3は検出面より出土した持ち碇石。4面使用。

7号竪穴式住居跡（第62図から第64図）

時期： 7世紀後半を推定（古代1期比定）

位置： 南区 VII C - 18, 23 平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積（7.25）㎡（南北3.0 m×東西3.6 m）、残存深度 26cm

主軸方向： N - 42° - E カマド位置： 北西壁中央

壁立ち上がり： 75度程度の傾斜 柱 穴： 主柱穴等なし

埋土堆積： 埋土は3層に分層できた。上層より1層暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）、2層黒褐色粘質土（2.5Y3/1）、3層黄灰色粘質土（2.5Y4/1）とした。

遺構重複： なし。ただし東側1/3程度は平成12年の未買収地であり、以後工事との関連で調査できなかった部分に相当する。

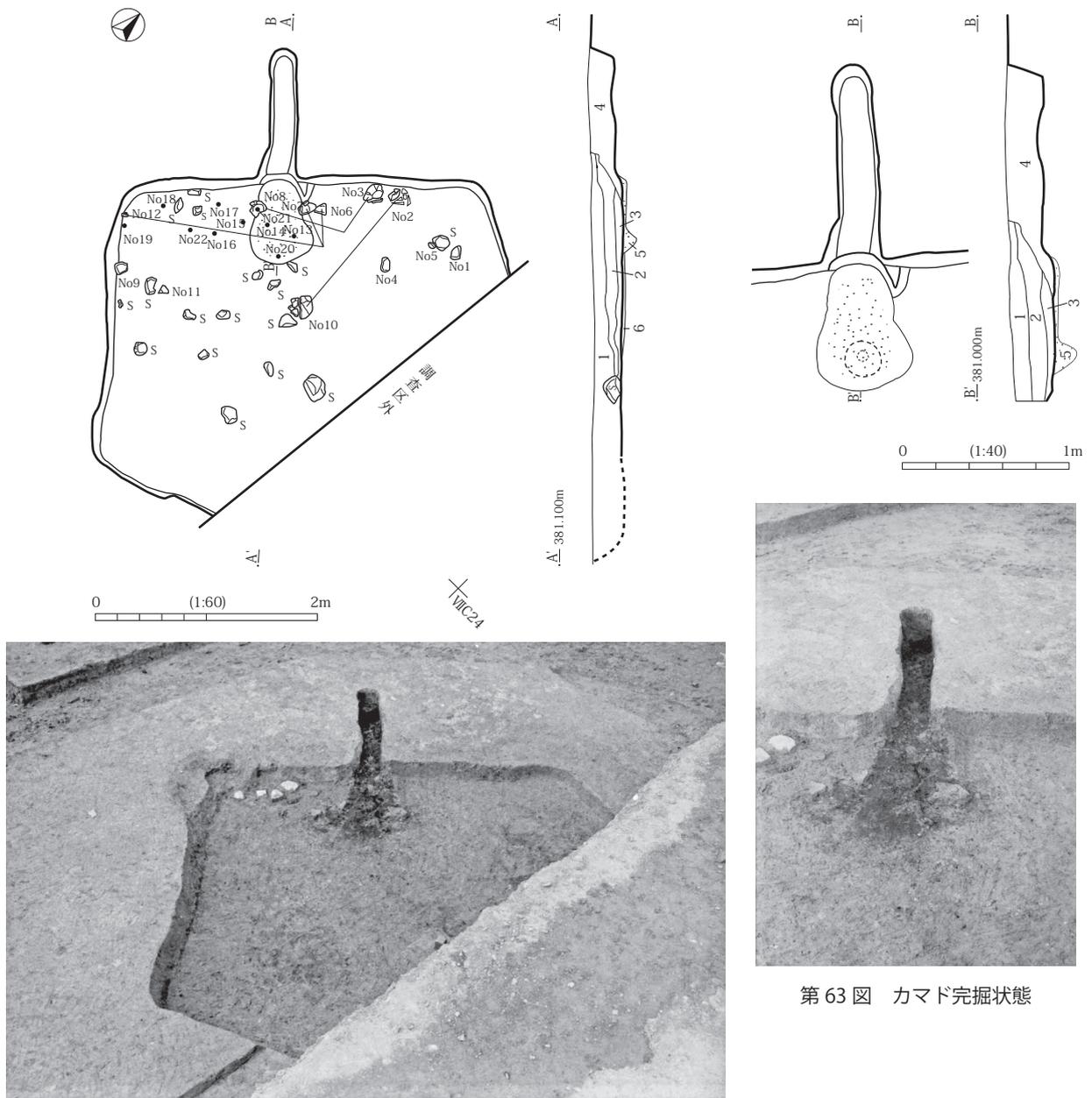
検出経過： 表土掘削後の平面精査により、炭化物の混在する暗灰黄色粘質土の落ち込みを確認、明瞭な方形状を呈することから竪穴状の遺構を想定し調査を実施した。煙道南にカマド部を想定し埋土の掘り下げを行った結果、土師器破片が複数出土、一括性あると考えられる個体が東側よりまとまって出土した。床面を想定できる面には繊維質の敷物痕跡かと考えられる炭化物層が存在し、ことにカマド周辺部には炭化物層の重なりを3枚ほど確認した。カマドは大部分が破壊されており、燃烧部及び煙道を中心に調査した。床はぎを含め、カマド掘り方・床下想定部を調査し終了にする。

遺物出土状況： 住居西側部分の埋土中に比較的集中して土器破片が出土した。カマド東側に一括出土した土器及び西側に散在した破片は、大部分が土師器甕A類で、3個体程度推定できる（第62図）。また住居内の南西方向には、拳大の礫と磨石様の川原石が複数個出土した。

床面の様子： とくに堅緻な面は認められなかったが、床面直上には繊維質の炭化物層が確認できた。

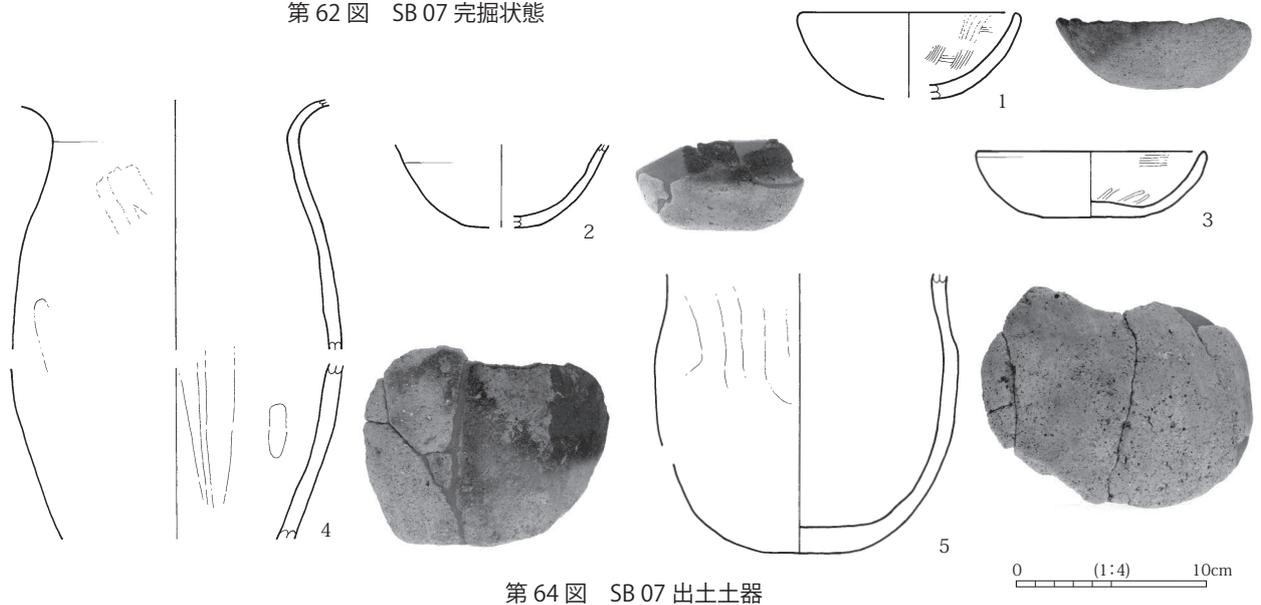
カマドの様子： 〈北西壁カマド〉粘土構築による。燃烧部は深さ5cmほどに掘り窪められ、焼土と炭化物層の互層が堆積。火床の直下には直径20cm、深さ12cmほどの穴が穿たれていた。煙道部との角度は48度、煙道長は1m20cmを計る。

出土遺物： 土師器328片（一括含む）、須恵器は僅か1片である。土師器甕形土器はA類?を主体とし216片（2,913.2g、口縁8・胴部167・底部5・一括4）、甕F類あるいは壺形土器の破片2片（154.6g、底部2）、小型甕形土器4片（90.7g、胴部3・底部1）、小型丸底土器1片（22.5g、底部1）、鉢形土器2片（13.9g、胴部2）、甑形土器1片（38.7g、底部1）、杯形土器はI類とC類に判別でき32片（469.5g、口縁2・胴部20・底部7・一括3）、器種判別不能が70片（350.7g）ある。須恵器は、器種判別不能な小破片が1片（4.1g）出土している。2はNo4で杯形土器I類で内面黒色処理、口縁は若干外反し、外面横方向のナデ整形。4は取上げNo3・No8、長胴のナデ甕で底部付近を欠失する。5は第62図No10・No2にあたり、土師器球胴甕（あるいは鉢形土器か）の1/3程度の一括個体である。ただし外面の整形は、ミガキではなくナデと観察できる。4と同質の胎土である。



第 63 図 カマド完掘状態

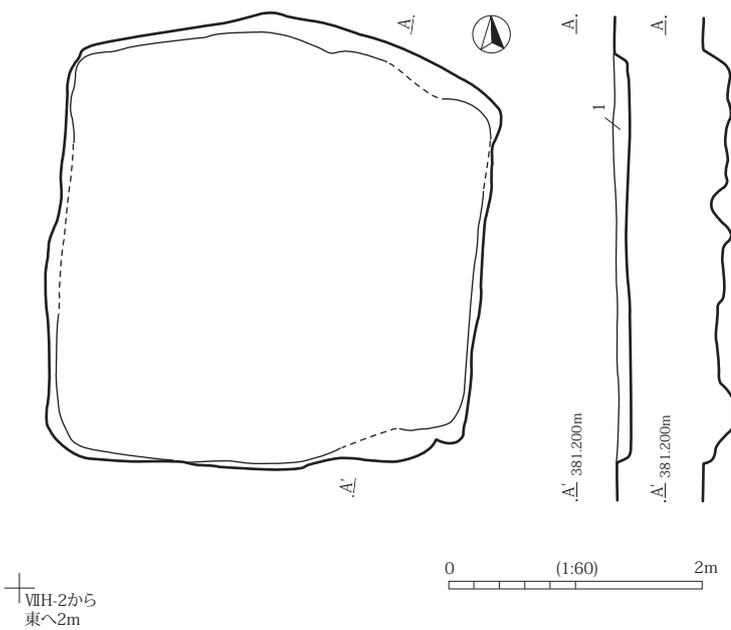
第 62 図 SB 07 完掘状態



第 64 図 SB 07 出土土器

8号竪穴式住居跡（第65図）

時 期： 判定不能
 位 置： 南区 VII C - 22
 平面形態： 隅丸方形
 規 模： 表面積（11.39） m^2 、
 （南北 3.6 m × 東西 3.4 m）、
 残存深度 10cm
 主軸方向： 不 明
 カマド位置： 不 明
 壁立ち上がり： 64 度程度の傾斜
 柱 穴： 支柱穴等なし
 埋土堆積： 埋土は 1 層のみ確認でき、
 暗灰色粘質土（10YR3/3）。
 遺構重複： なし。ただし畝跡の畝状痕
 とも考えられる溝状の落ち
 込みが、東西方向に 2 本程度重複。



第 65 図 SB 08 完掘状態

検出経過： 表土掘削後の平面精査により、暗灰色の落ち込みを確認した。北西端が隅丸状を呈し、かつ土師器甕形土器と考えられる破片がまとまって複数出土したことから住居跡を想定し調査を実施した。他の住居跡に認められたと同様な炭化物層はなく、わずか 10cm 程度で床面と考えられる白色粘土混じりの平坦面に達した。床面には遺物の出土はなく、柱穴や焼土も確認できなかった。床面推定部を掘削した後、掘り方と推定できる部分の掘り下げ調査を行い終了に至った。

遺物出土状況： 住居検出時に北西部分から甕形土器と考えられる小破片が出土。掘り方部分から 1 点のみ杯形土器の破片が出土した。

床面の様子： 堅緻な面は認められないが、白色粘土混じりの平坦面を確認し、床面と認定した。

カマドの様子： 確認できない。

出土遺物： 土師器 48 片出土。小形の甕形土器と考えられる破片が 1 片（6.6g、口縁 1）と器種判別不能の小破片 47 片（90.0g）がある。いずれも完形状況を推定するに困難な小破片。

9号竪穴式住居跡（第66図）

時 期： 7 世紀後半を推定（古代 1 期後半比定）
 位 置： 南区 VII C - 11, 16
 平面形態： 隅丸方形
 規 模： 表面積（調査分 9.9） m^2 、（南北 5.2 m × 東西 2.9 m 調査分）、残存深度 20cm
 主軸方向： N - 126° - E
 カマド位置： ほぼ東壁中央
 壁立ち上がり： 52 度程度の傾斜
 柱 穴： な し
 埋土堆積： 埋土は暗灰黄色土（2.5Y2/4）の単純堆積。床面との境には炭化物層を挟む。
 遺構重複： 南側を 12 号住居により破壊されている。

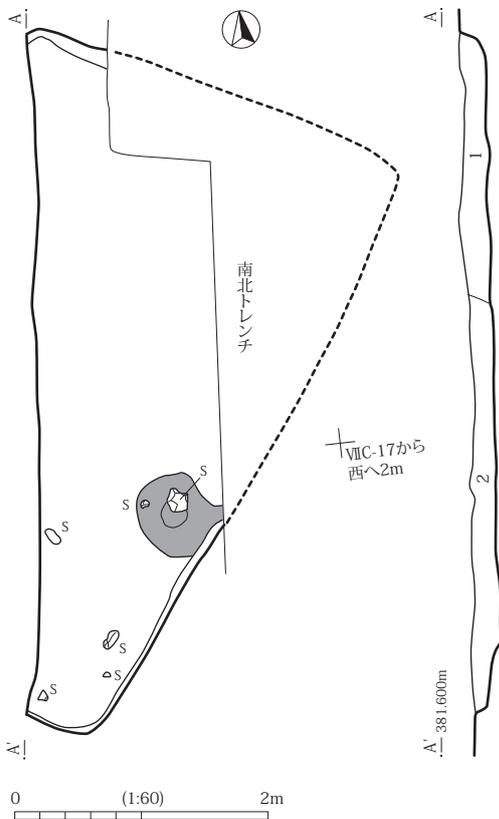
検出経過： 南区の南北方向に試掘溝を設定し掘削、試掘溝断面に炭化物層を確認した。壁面を精査した結果、炭化物層上面に暗灰黄色土の落ち込みが認められたことから、竪穴状遺構を想定し調査を行った。埋土を掘り下げ、炭化物層を削除したところ、東側にカマド燃焼部と考えられる凹部と、そこに堆積する焼土及び炭化物層を検出した。床面調査の後、掘り方を掘削し、完掘にいたる。

遺物出土状況： 埋土中の出土遺物はほとんどなく、炭化物層下の床面から土師器甕形土器を中心とする小破片が僅かに出土している。

床面の様子： 床は埋土下部に確認できた炭化物層直下の平坦面を想定した。床下には明瞭な掘り方が存在し、掘削時の凹凸が観察できた。掘り方部には黄褐色や黒褐色の粘質土がブロック状に混在したオリーブ褐色土（2.5Y4/3）が充填されていた。

カマドの様子： 東側壁のほぼ中央に、燃焼部と考えられるタライ状の掘り込みがある。焼土及び炭化物が堆積し、被熱痕跡のあるハンドボール大の礫が1点出土した。カマド奥壁部から煙道部分については未検出である。

出土遺物： 土師器 39 片、須恵器は僅かに 1 片である。土師器はいずれも小破片で、類別の難しい甕形土器の破片 15 片（91.2 g、口縁 2・胴部 13）、杯形土器の破片 2 片（12.1 g、口縁 1・胴部 1）、器種判別不能な土師器破片 22 片（19g）がある。須恵器は、杯形土器の小破片が 1 片（1.2g）のみ出土している。



第 66 図 SB 09 完掘状態



SB 09 炭化物出土分布

10号竪穴式住居跡（第 67 図から第 69 図）

時期： 7 世紀代か

位置： 南区 VII C - 16, 21

平面形態： 隅丸方形を推定

規模： 表面積（調査分 6.4）㎡、（南北 2.9 m × 東西 2.2 m 調査分）、残存深度 44cm

主軸方向： N - 15° - E

カマド位置： ほぼ北壁中央

壁立ち上がり： 67 度程度の傾斜

柱 穴： 柱穴 1 基あり

埋土堆積： 埋土は 2 層に分層できた。上層より 1 層オリーブ褐色土（2.5Y4/3）、2 層暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）、2 層以下を床構築土とした。

遺構重複： 南側を11号住居により破壊されている。

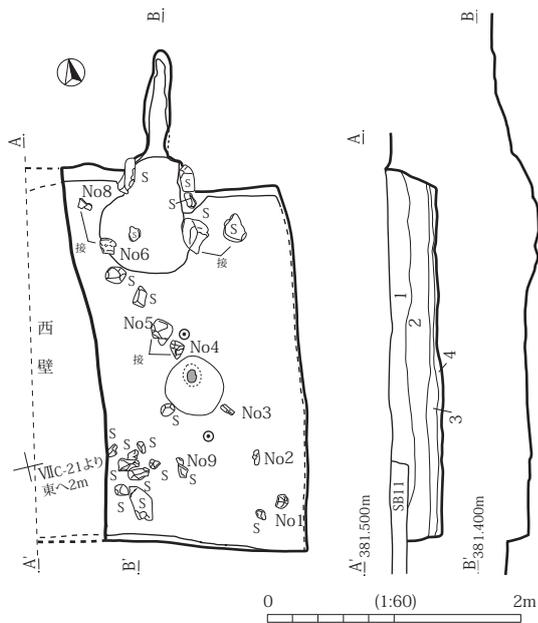
検出経過： 南区の南北方向に試掘溝を設定し、掘削した結果、断面に暗灰色粘質土(N3/O)上面からの落ち込みを確認、断面形状から竪穴状遺構を想定し調査を行った。試掘溝西側部分を面的に拡大・精査したところ、落ち込みの北側部分にカマド袖石と考えられる川原石2個と焼土を確認した。さらに南側では、本遺構を破壊する別の落ち込み(11号竪穴住居)も確認した。本跡床面には炭化物層があり、それのない11号住居とは明瞭に区別できた。床面調査の後、掘り方部分を調査し、凹凸著しい掘削面と柱跡1基を検出した。

遺物出土状況： 埋土中からの出土遺物は少なく、床面近くに拳大の礫とともに散在して出土した。多くは破片資料であるが、カマド付近には土師器甕形土器の大形破片(第69図3)があり、住居中央部では甕形土器の大形破片資料(第69図2)が出土した。また床下で検出された柱穴からは柱材(第69図4)1点が出土している。

床面の様子： 床は埋土2層下に3枚にわたり確認できた。上層面は炭化物層であるが、以下黄褐色砂質土がブロック的に広がる床面であった。床下から検出された柱穴は、柱材(第69図4)を留めているが、掘り込み面の確定はできなかった。掘り方は、掘削痕跡と考えられる凹凸が顕著であった。

カマドの様子： 〈北壁カマド〉扁平な礫を利用した石組の芯材である。右袖部には礫3個を設置するが、左袖部では1個のみが確認できた。芯材の礫は、立面形が「ハ」の字状を呈し、燃烧部側の礫面は被熱により赤色化あるいは黒色化していた(第68図)。燃烧部は焼土と炭化物層が互層に堆積、奥壁部は箱形状に作出されて、14cmの高さ、23度の傾きで煙道部に直結する。煙道長は1m78cmを計り、傾斜15度、壁面著しく被熱赤化し、被熱のとだえる部分から傾斜11度程度に変換する。

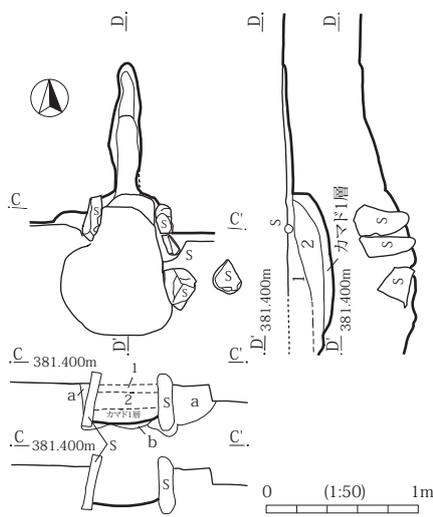
出土遺物： 土師器301片(一括含む)、須恵器は僅かに7片である。土師器は甕形土器の破片を主体とし、ミガキ整形の甕あるいは壺形土器の破片18片(一括個体510.6g)、類別の難しい甕形土器の破片154片(一括個体含む864.7g, 口縁4・胴部71・底部2・一括3)、小型甕形土器15片(115.4g, 胴部15)がある。杯形土器はいずれも非ロクロ成形で、胴部と考えられる小破片を主体に38片(184.7g, 胴9・底1・一括2)があり、この内の一括資料は杯I類である。高杯形土器は皿部推定の小破片が1片(6.7g)出土している。以上のほかに器種判別不能な土器片が85片(215.5g)ある。須恵器は、杯形土器の小破片が5片(44.6g, 口縁3・底部2)と器種判別不能の小破片2片(11.2g)がある。杯形土器底部の破片はヘラ切り離しである。2は第67図No4・No5にあたり、土師器ミガキ調整の球胴甕?(壺形?)の1/3程度の胴下部の一括個体である。3は図No6・No8で、甕形土器の底部破片一括である。調整は不明瞭だが、ミガキ調整のようである。1は図No1・No3の接合個体で杯形土器I類、口縁が若干外反する器形で、内面はミガキ調整の黒色処理、外面は劣化激しく整形は観察できない。第69図4は柱穴出土の柱材。丸木芯材でトネリコ属。



第 67 図 SB 10 完掘状態



SB 10 完掘 (南から)



第 68 図 カマド完掘状態



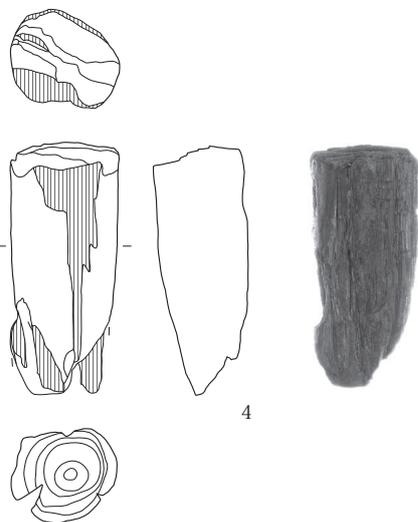
カマド完掘 1 (南から)



カマド完掘 2 (南から)



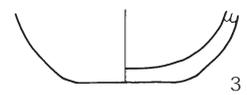
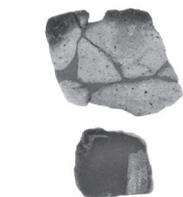
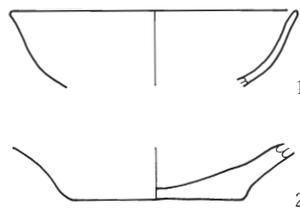
カマド堆積土層



第 69 図 SB 10 出土木製品・土器



Pit1 柱材出土状態



0 (1:4) 10cm

1 1号竪穴式住居跡（第70図）

時期： 判定不能（古代1期後半から2期相当か？）

位置： 南区 VII C - 21

平面形態： 隅丸方形を推定

規模： 表面積（確認部分 5.1） m^2 、（南北 3.7 m×東西 1.7 mのみ確認）、 残存深度 7 cm

主軸方向： 不明

カマド位置： 不明

壁立ち上がり： 74度程度の傾斜

柱 穴： 主柱穴等なし

埋土堆積： 埋土は1層のみ確認でき、暗灰色粘質土（10YR3/3）。

遺構重複： 10号竪穴式住居を破壊して構築。

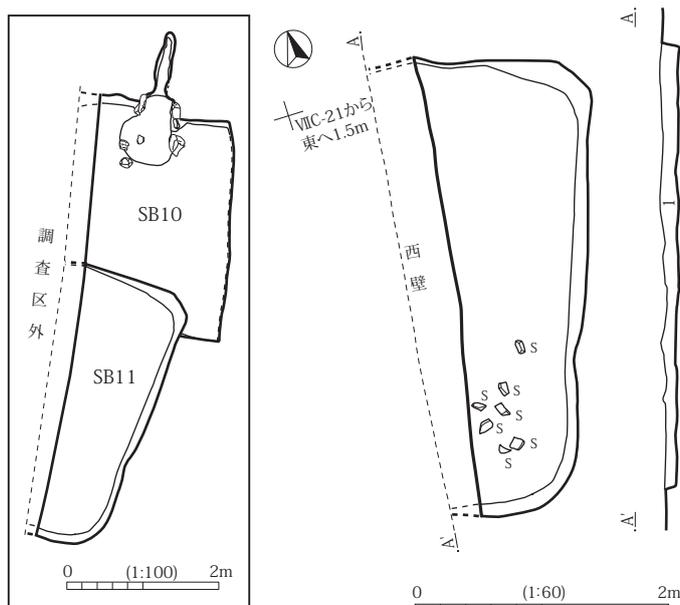
検出経過： 10号住居の南側を確認するために入れた試掘溝の断面に10号を破壊する炭化物層を確認、住居の重複を想定し調査に入った。床面は9号住居と同様な土質であり、遺物の出土はほとんどない。掘り方は確認できなかった。

遺物出土状況： 住居発見時の試掘溝中から、僅かに土師器片が出土したのみ。

床面の様子： 堅緻な面は認められず、白色粘土混じりの平坦面を確認、床面と認定した。

カマドの様子： 確認できない。

出土遺物： 土師器7片出土。杯形土器と考えられる小破片が1片（6.0g, 胴部1）と器種認定不能の土師器小破片が6片（6.8g）ある。



第70図 SB11 完掘状態



SB11 炭化物出土分布

1 2号竪穴式住居跡（第71図から第72図）

時期： 判定不能（古代1期後半から2期相当か？）

位置： 南区 VII C - 11

平面形態： 隅丸方形を推定

規模： （南北 3.1 m×東西 1.0 mのみ確認）、残存深度 20cm

主軸方向： 不明

カマド位置： 不明

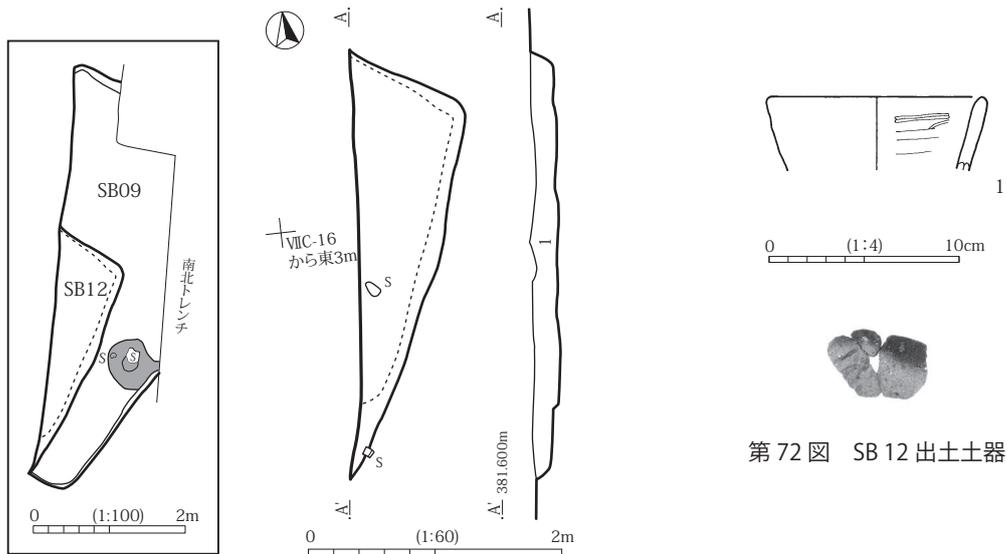
壁立ち上がり： 50度程度の傾斜

柱 穴： 主柱穴等なし

埋土堆積： 埋土は1層のみ確認でき、暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）。

遺構重複： 9号竪穴式住居を破壊して構築。

検出経過： 9号住居の床面直上の炭化物層を精査した結果、炭化物層が面的に広がらない部分を確認し



第71図 SB12完掘状態

第72図 SB12出土土器

た。調査区境の西側壁を精査し、明瞭な落ち込み部分が検出できたことから、竪穴状の遺構として調査を行った。

遺物出土状況： 埋土中からごく僅かな土師器破片が出土。器種がある程度推定できる破片は図示した鉢形土器1点のみである。

床面の様子： 堅緻な面は認められず、9号住居より5cm程度低い。

カマドの様子： 確認できない。

出土遺物： 土師器17片出土。甕形土器と考えられる小破片9片（29.2g、口縁4・胴部5）と鉢形土器の口縁部破片（21.2g一括）、器種認定不能の土師器小破片7片（4.3g）がある。第72図1は、内面ミガキ調整の黒色処理を施した鉢形土器の口縁部破片である。

15号竪穴式住居跡（第73図から第77図）

時期： 7世紀後半から末を推定（古代1期後半比定）

位置： 北区 VII C-2, 3 平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 21.9 m²（南北 4.4 m×東西 5.2 m）、残存深度 28cm

主軸方向： N-25°-E カマド位置： 北西壁中央

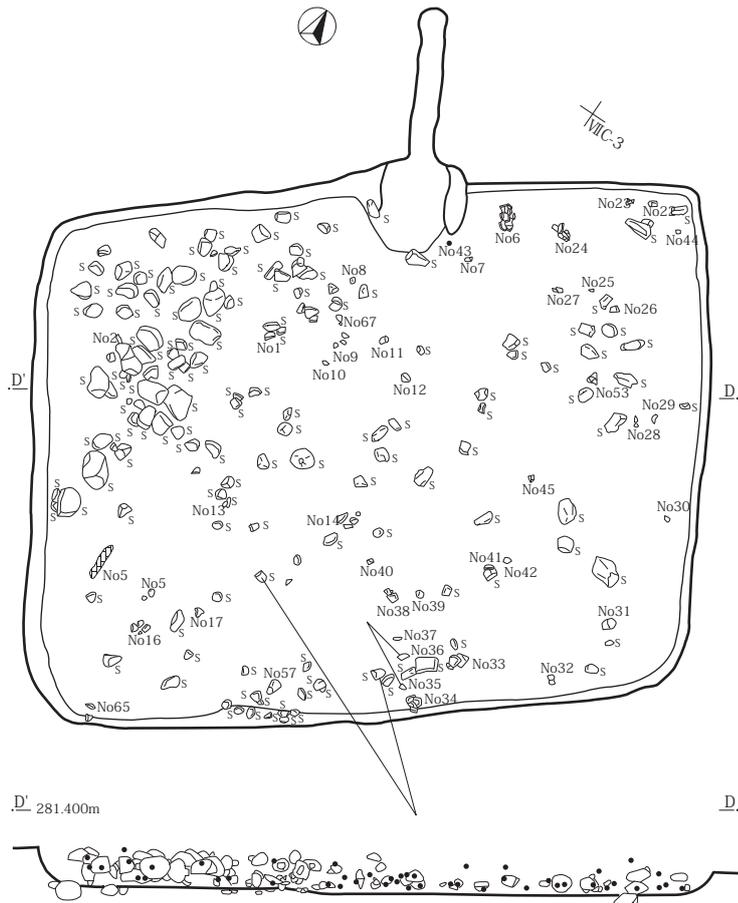
壁立ち上がり： 60度程度の傾斜 柱穴： 柱穴6基あり

埋土堆積： 埋土は3層に分層できた。上層より1層暗灰色土（N3/0）、2層灰色土（7.5Y4/1）、3b層暗灰色土（N3/0）とし、2層と3b層の漸移的な堆積土を3a層と命名した。3b層の直下に床構築土がある。

遺構重複： なし。

検出経過： 北区の表土掘削時、基本土層である黄橙色砂質粘土（10Y5/8）面にて、暗灰色粘質土（N3/0）の方形の落ち込みを確認、形状から竪穴状遺構を想定し調査を行った。検出時、東西方向に走る畝状の溝跡が重複し、本跡を切って確認できた。調査は、埋土を面的に掘り下げ、遺物の混入状態を確認しつつ進め、カマドは個別に調査、断ち割り完掘した。柱穴は、床面に検出した落ち込み6基を認定し、調査した。

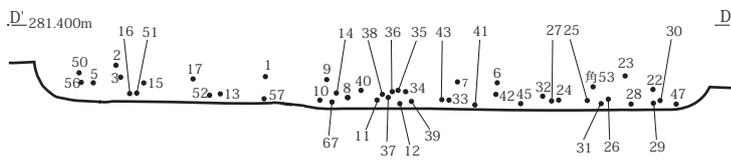
遺物出土状況： 埋土中に土器片の出土は稀少であった。北西部には拳大からバレーボール大の礫が集中、礫は壁際から中央部に傾斜する状態で出土しており、流れ込みあるいは人為的な投棄の可能



SB 15 遺物出土状態 1 (南から)



SB 15 遺物出土状態 2 (東から)

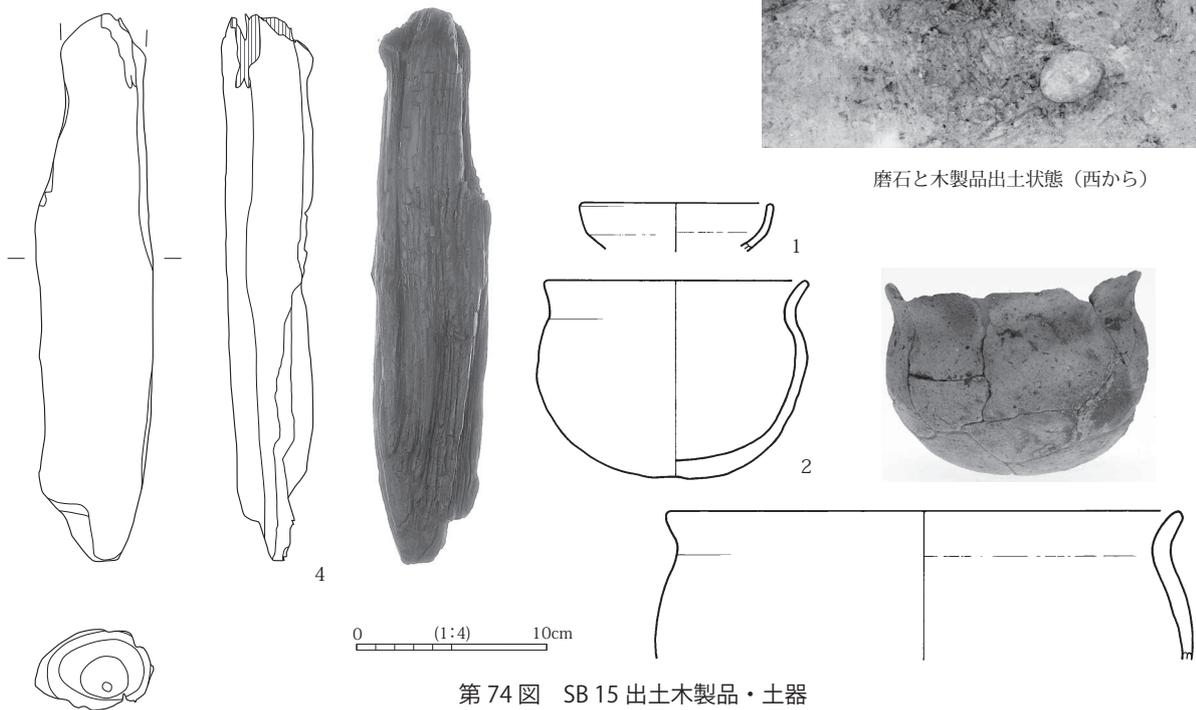


第73図 SB 15 遺物出土分布

0 (1:60) 2m

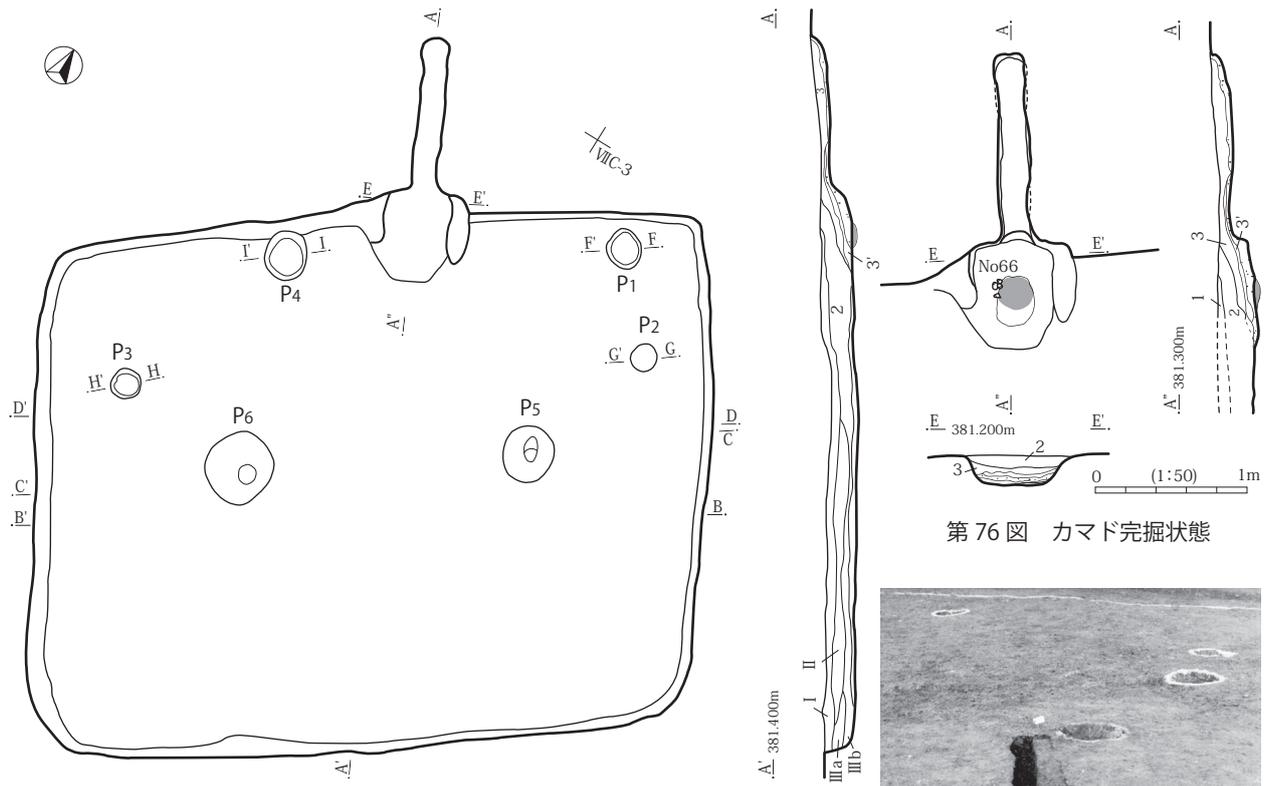


磨石と木製品出土状態 (西から)

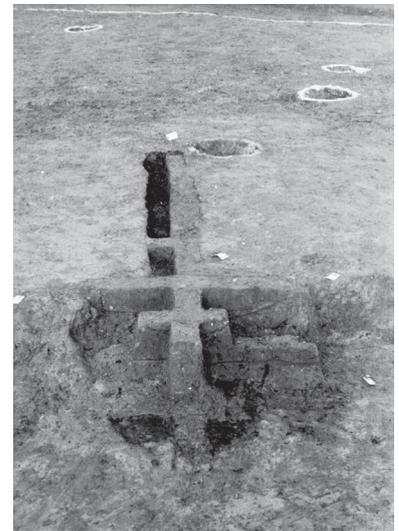


第74図 SB 15 出土木製品・土器

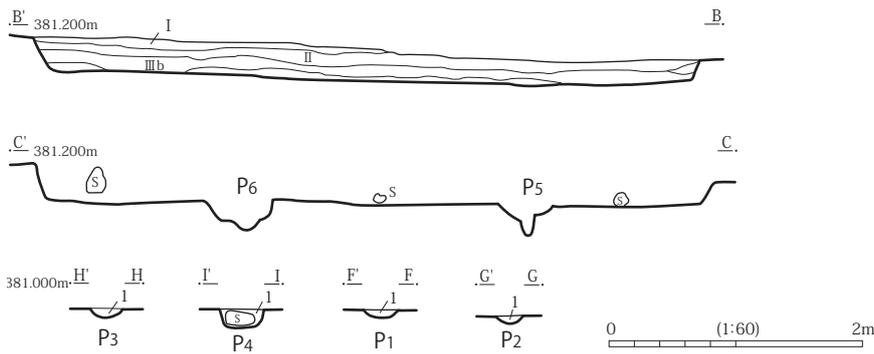
3



第76図 カマド完掘状態



カマド堆積土層



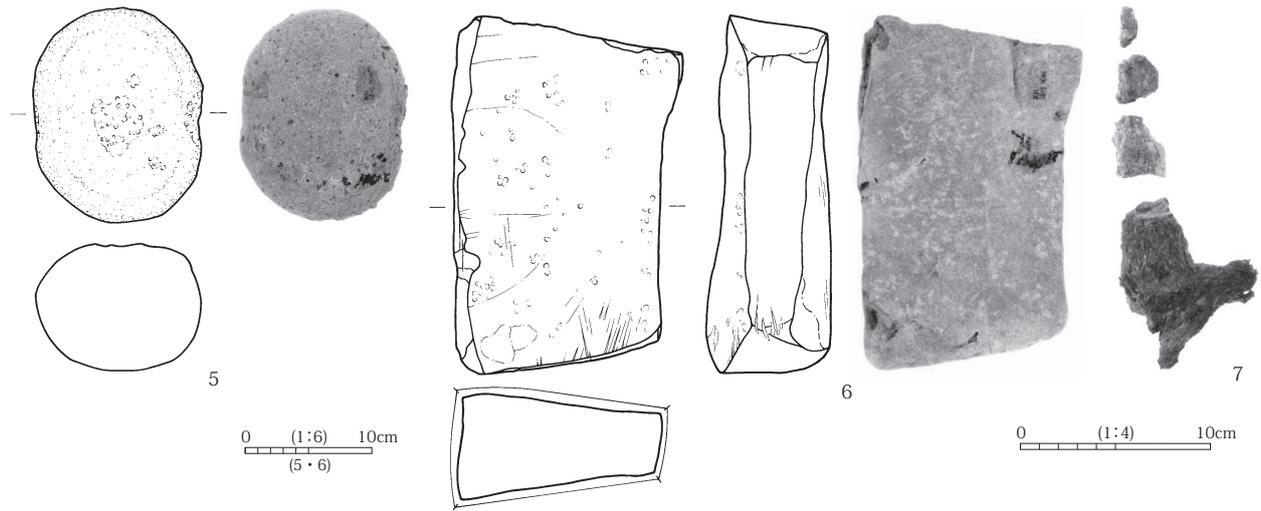
第75図 SB 15 完掘状態



SB 15 完掘 (南から)



カマド完掘 (南から)



第77図 SB15出土石器・シカ角

性が考えられた。床面の出土遺物も微量で、土器は、いずれも摩滅し壊れそうな小破片であった。また杭材と炭化材が各1点出土している。

床面の様子： 床は堅緻にて明瞭。掘削痕跡と考えられる凹凸が床下8cmほどの面で確認できた。

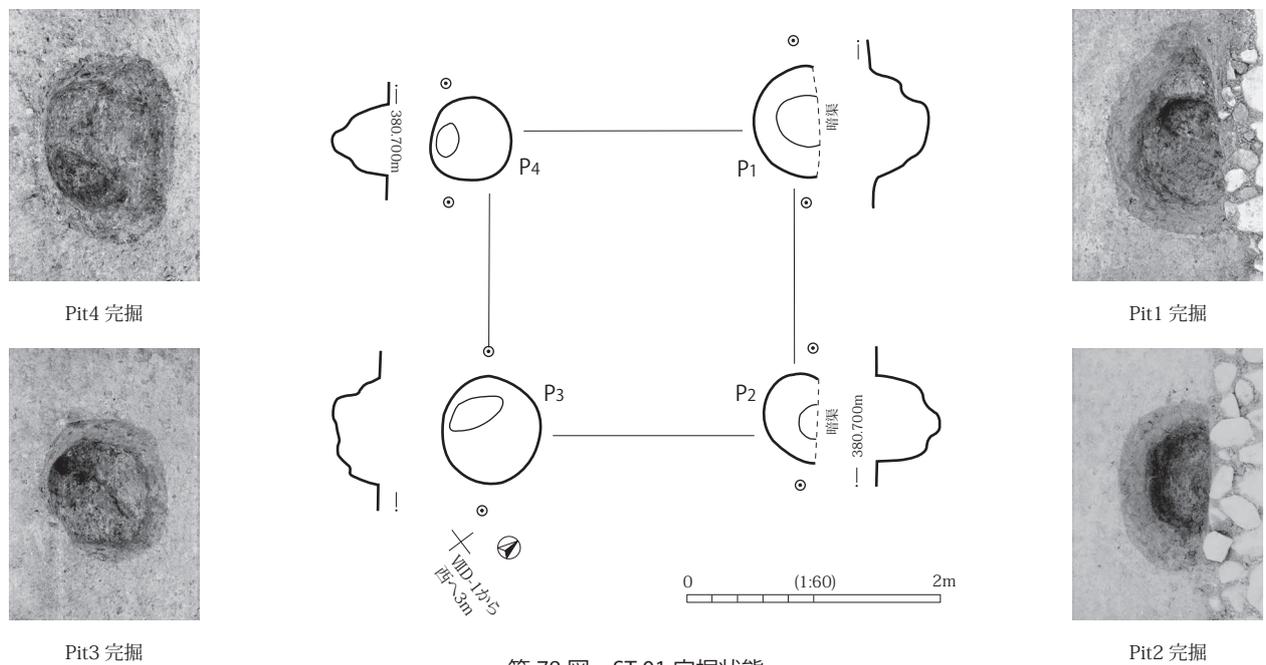
柱穴の様子： 床面にて確認できた柱穴は、6本ある。本跡の上屋を構築すると考えられる支柱は、Pit5とPit6である。この他、左右に2対の柱穴、Pit2とPit3、Pit1とPit4を確認できた。埋土は5Y3/1（オリーブ黒色粘質土）の単純堆積で、Pit4には礎石が存在する。

カマドの様子： 〈北西壁カマド〉袖部は粘土構築による。火床はカマド掘り方に黄褐色粘土を貼り造られている。そこから、高さ10cmほどで煙道部入り口となり、煙道は全長120cm、煙道よりの90cm程度まで黄褐色粘土が貼られる。カマド内は焼土と炭化物層が互層に重なり、3層及び3'層は、天井部分の崩落土と考えられる。両袖部分は、粘土による構築材が明瞭に残存し、芯材利用の痕跡はつかめなかった。

出土遺物： 土師器81片（一括含む）、須恵器は僅かに2片である。土師器は甕形土器の破片が主体で、ミガキ成形の甕形土器胴部破片2片（20.3g）、小型甕の破片6片（109.7g、口縁5・胴部1）、類別の難しい甕形土器の破片23片（600.8g、口縁1・胴部18・底部4）がある。鉢形土器はいずれも非ロクロ成形で、胴部小破片を主体に16片（一括個体含む490.0g、口縁1・胴部9・底1部・一括2）がある。杯形土器は小破片が5片（28.9g、口縁2・胴部2・底部1）出土した。以上のほかに器種判別不能な土器片が29片（88.4g）ある。須恵器は、瓶と考えられる小破片が1片（27.5g、胴部1）と甕小破片1片（77.1g、胴部1）がある。この他、川原石19点と敲石2点、磨石3点、砥石1点がある。また埋土中には、器種判別不能の瀬戸美濃1片と伊万里碗2片が出土した。1は第73図No22にあたり、内面黒色処理した杯形土器の口縁部破片である。口唇直下は幅1.0cm程度のナデ整形が施されている。2は図No6・No34の接合個体で、鉢形土器の2/3程度の個体である。内面黒色処理し、調整は不明瞭だが、ミガキ・ナデ調整のようである。3は図No31の甕形土器口縁部破片である。表裏面磨耗し観察に適さないが、ナデ整形の可能性ある個体である。4は図No5の木材で、柱材であろうか。5は図No48の安山岩材のくぼみ石で、表面と両側面にアバタ状の敲打痕がある。6は図No46の細粒砂岩製の砥石。4面を砥面とし、表面には台石として利用したものか無数の敲打痕がある。1875g。この他、床面近くからシカ角1本（第77図7）が出土し、検出面では寛永通宝1点を収集した。

掘立柱建物跡

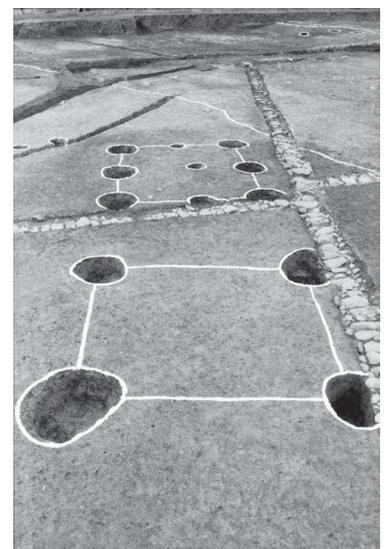
1号掘立柱建物跡は、VIW-25区にて検出された。柱穴の配置は1間(270cm)×1間(258cm)の4本柱であり、主軸はN-43°-W、床面積6.9㎡である。Pit1及びPit2に関しては、北側1/2程度が近現代の暗渠施設により破壊を受けている。それぞれ4本の柱穴とも柱材は残存していないが、その痕跡部分は明瞭に認められた。Pit4では、その規模62×66cm、深さ43cmを計る。遺物はPit1から土師器の甕形土器胴部破片1点(27.5g, 第79図3)、甕と考えられる胴部破片1点(13.6g)が出土した。Pit2からは土師器甕形土器口縁部破片が1点(22.6g, 第79図4)出土している。また本跡検出面では、土師器の小破片53片と須恵器の大形破片29片が出土した。土師器の器種別内訳は、甕形土器23点(116.4g, 口縁1・胴部22)、甕形土器5片(141.1g, 底部5)、器種判別不能23片(70.9g)である。須恵器では、甕形土器A類一括1点(1.046.7g, 第79図2)、胴部破片21片(1,814.9g)、埴瓶一括1点(672.6g, 第79図1)、甕3片(66.8g, 胴部1・底部2)、杯形土器3片(37.4g, 口縁1・ヘラ切り離し底部2)、壺形土器と考えられる小破片1(174.2g)がある。



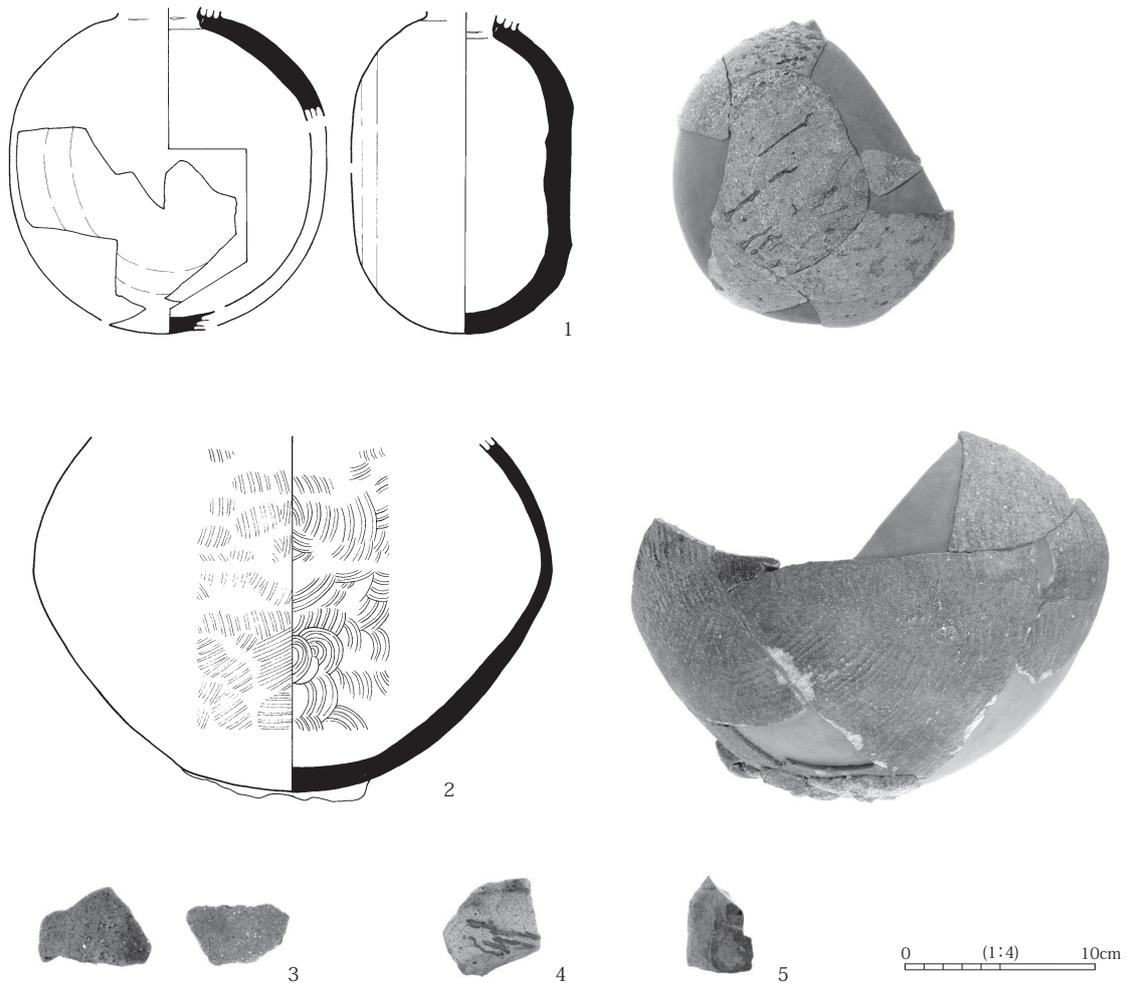
第78図 ST 01 完掘状態



ST 01 完掘

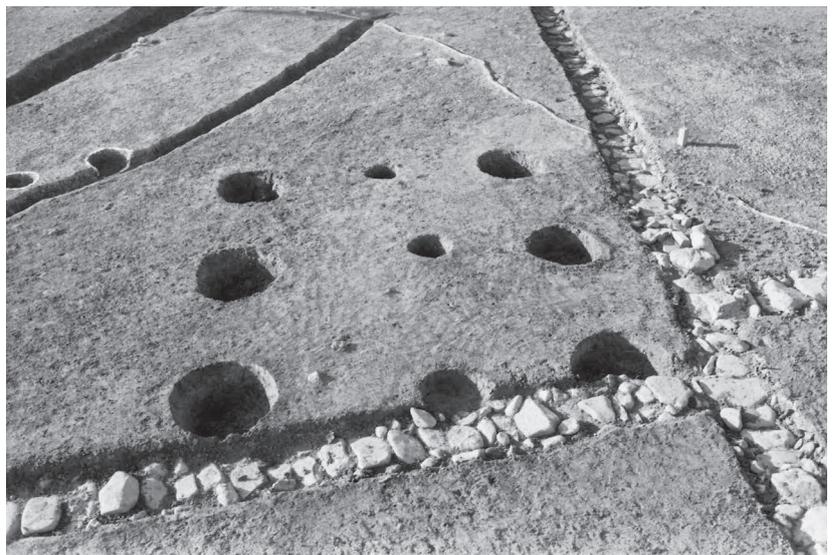


ST 01 及び ST 02 完掘 (白線入)

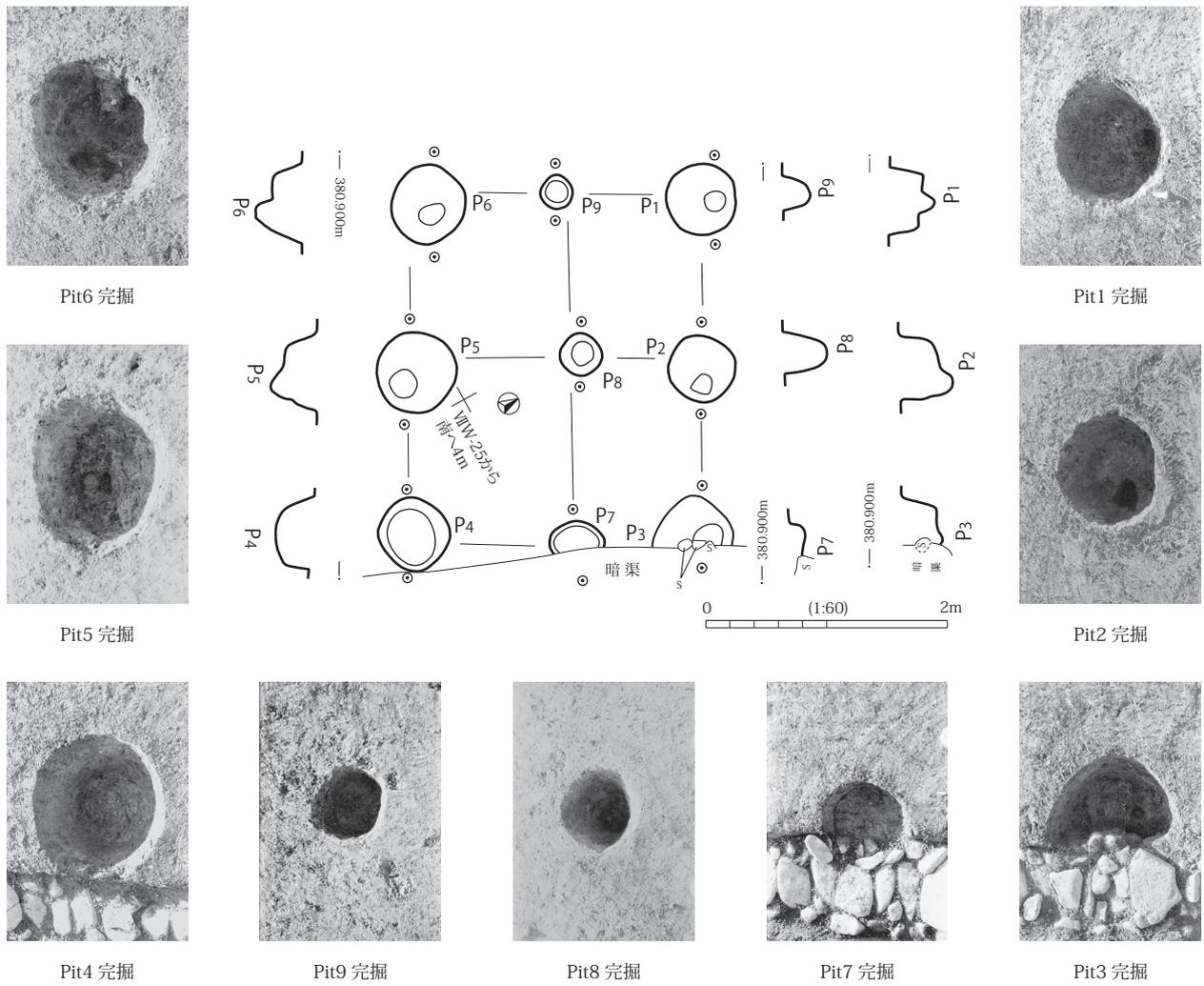


第79図 ST01 出土土器・石器

2号掘立柱建物跡は、VIW-24, 25区にて検出され、1号掘立柱建物跡の西側2mに位置する。柱穴の配置は2間(154cm・124cm)×2間(106cm・130cm)の総柱式で9本の支柱を持つ。主軸はN-43°-W、桁行278cm、梁間236cmの寸法を計り、床面積6.56㎡である。Pit3とPit7は、東側半分を暗渠により破壊されていた。外周にあるPit1からPit3、Pit5とPit6は、柱跡の痕跡が明瞭である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みで、Pit1の規模は50×60cm、深さ38cmを計る。出土遺物はない。

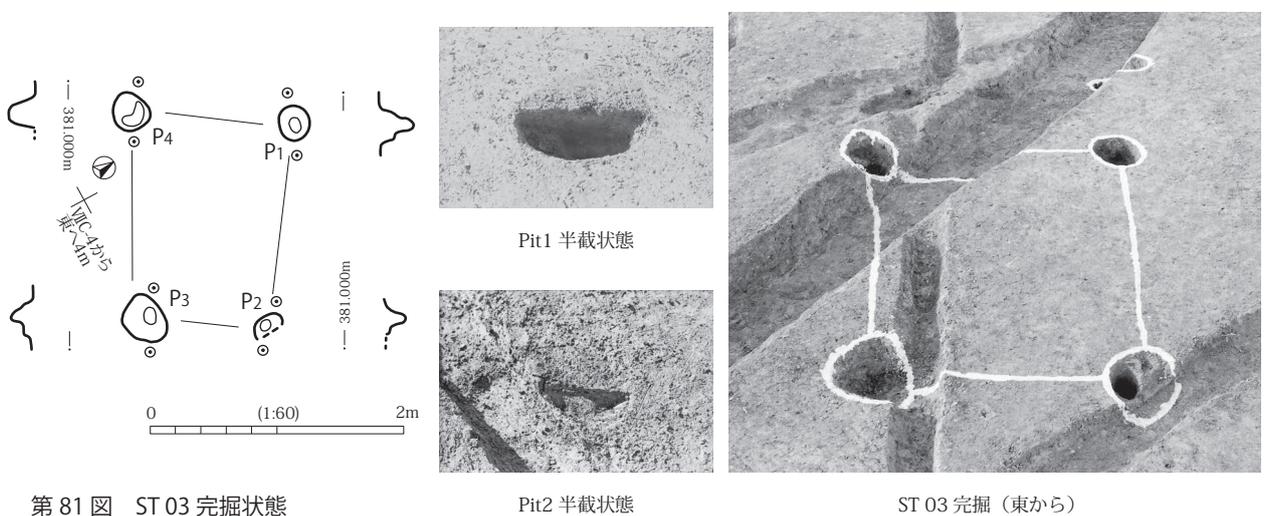


ST02 完掘 (東から)



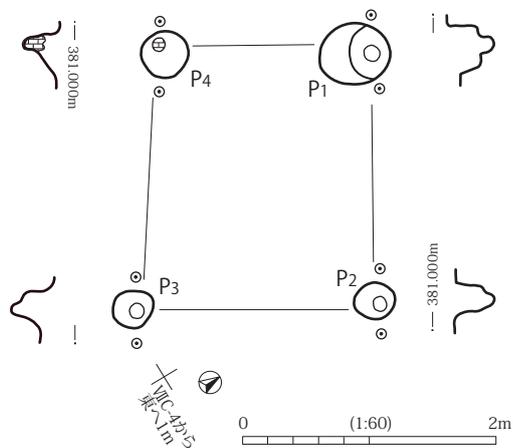
第80図 ST02 完掘状態

3号掘立柱建物跡は、VIW-24区にて単独に検出された柱穴4本を、その配置から掘立柱建物跡と認定して調査した。柱穴の配置は1間(158cm)×1間(126cm)の4本柱で、主軸はN-53°-W、床面積1.9㎡である。Pit2及びPit4は部分的に暗渠による破壊を受けていた。Pit1及びPit3は柱の痕跡を明瞭に留め、Pit3では、その規模は、27×24cm深さ18cmを計る。出土遺物はない。

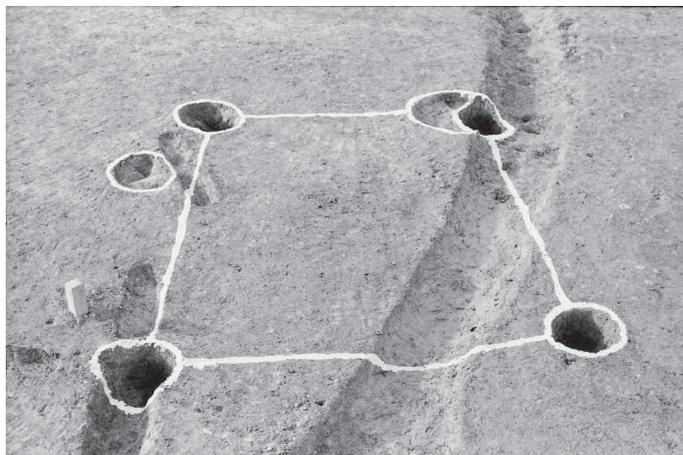


第81図 ST03 完掘状態

4号掘立柱建物跡は、VIW-23, 24区にて検出された4本の柱穴を、配置から掘立柱建物跡と認定し調査した。柱穴の配置は1間(212cm)×1間(190cm)の4本柱で、主軸はN-61°-W、床面積4.0㎡である。4本とも柱の痕跡を明瞭に留め、Pit4では柱材が残存していた。Pit4の規模は46×48cm、深さ35cmを計る。

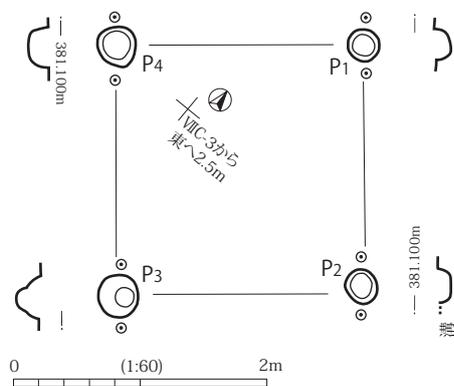


第82図 ST 04 完掘状態

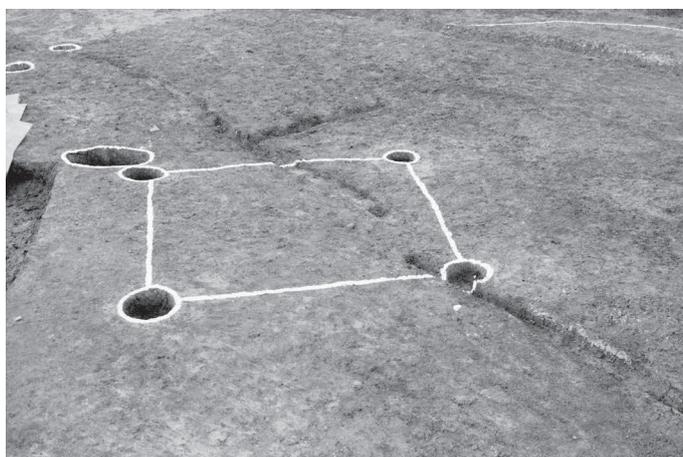


ST 04 完掘 (東から)

5号掘立柱建物跡は、VIW-23区からVIC-3区にて検出された4本の柱穴を、配置から掘立柱建物跡と認定、調査した。柱穴の配置は1間(200cm)×1間(195cm)の4本柱で、主軸はN-50°-W、床面積3.9㎡である。4本の柱穴は、Pit4を除き、浅いタライ状を呈する。Pit4は柱の痕跡を明瞭に留める形態で、その規模は35×32cm、深さ18cmを計る。

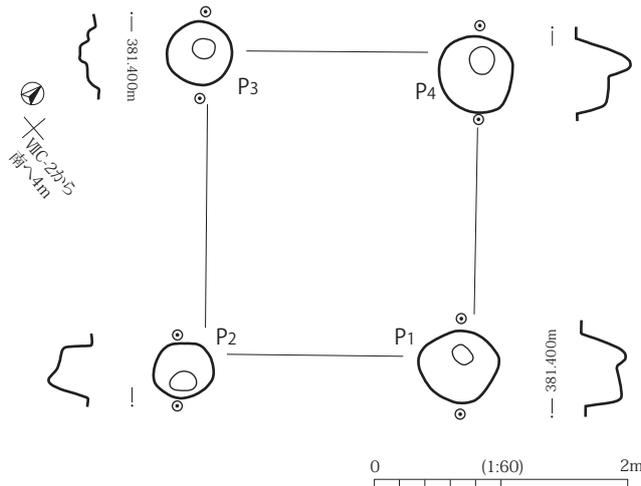


第83図 ST 05 完掘状態



ST 05 完掘 (東から)

6号掘立柱建物跡は、VIC-2区にて検出された。調査区西南隅に位置し、4本の柱穴の配置から掘立柱建物跡と認定したが、建物規模に関しては、これより大きくなる可能性もある。Pit3の東側には、近現代の暗渠が1本確認できた。柱穴の配置は1間(240cm)×1間(212cm)の4本柱で、主軸はN-51°-W、床面積5.1㎡である。4本の柱穴は、柱材こそ残存していないが、すべてその痕跡を明瞭に留めるものである。Pit4では規模56×64cm、深さ36cmを計る。Pit2には土師器甕形土器胴部小破片が1点出土しており、規模42×46cm、深さ33cmを計る。



第84図 ST06 完掘状態



Pit1 半截状態

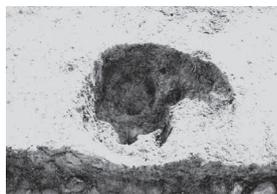


Pit4 半截状態



ST06 完掘 (東から)

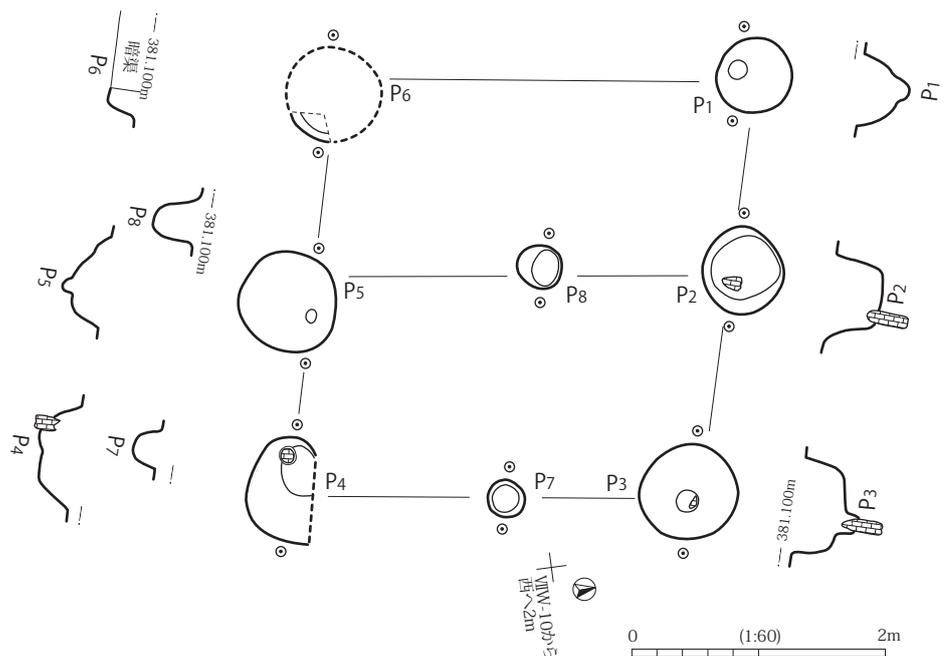
7号掘立柱建物跡は、VW-4区及び9区にて検出された8本の柱穴を、掘立柱建物跡と認定した。南側の3基、Pit4～Pit6は暗渠に一部破壊されている。柱穴の配置は2間350cm(170cm・180cm)×2間315cm(175cm・140cm)の総柱式と考えられるが、柱穴1本を欠く、8本のみ確認できた。主軸はN-75°-W、床面積11.0㎡である。Pit2・Pit3・Pit4の柱穴には柱材が残存していた。柱穴規模は、Pit1で60×60cm、深さ30cmを計り、Pit2は67×63cm、深さ68cm、Pit3は75×75cm、深さ73cmを計る。中間の2基の柱穴(Pit7とPit8)規模は、側柱に比して小さく、Pit8で35×46cm、深さ35cmである。また検出面から、須恵器甕形土器胴部小破片1点が出土した。第86図1はPit2より出土した柱材。みかん割りで、樹種はフジキ。上部は腐蝕による欠損。底部は斜めに切断され、斧の痕跡が残る。とくに、中心部には5.0cm前後の刃の痕跡が明瞭。表面が腐蝕したためか、面加工の痕跡ははっきりしない。西暦600年～520年(1440±40BP)の炭素年代値を得た。古墳時代後期、7世紀の前半



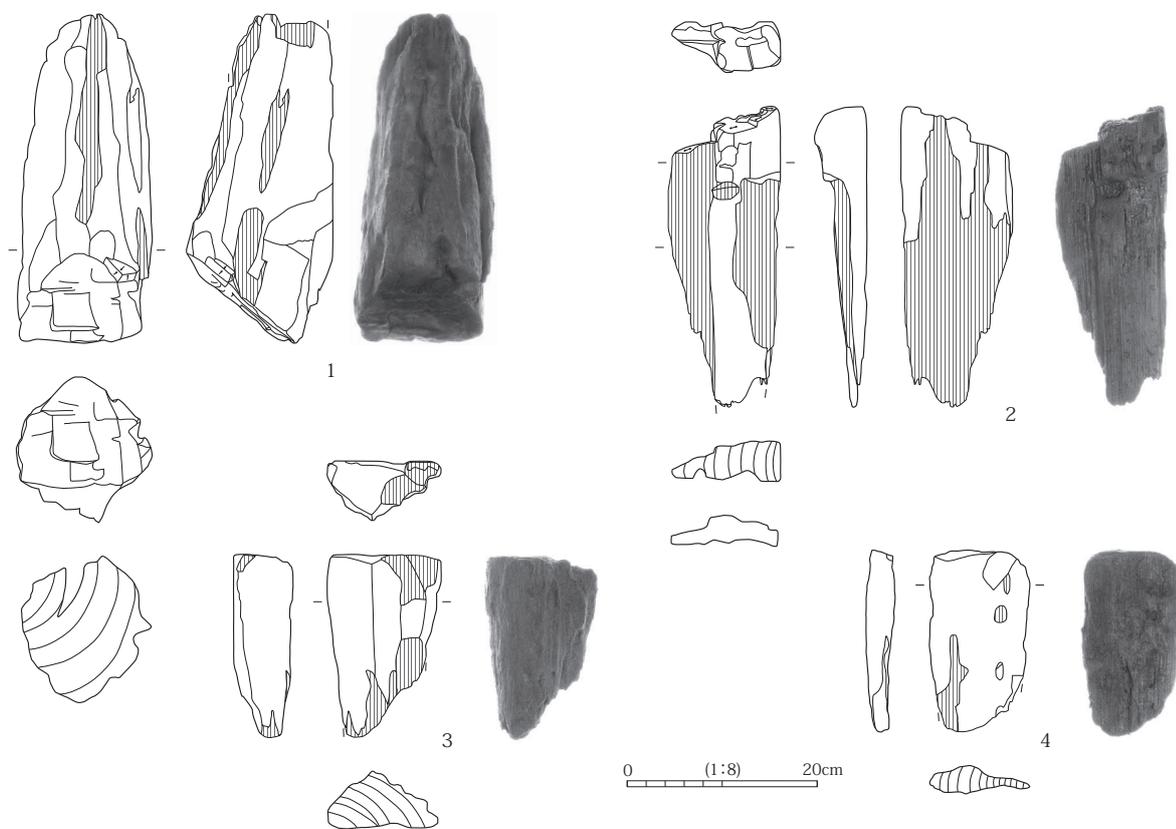
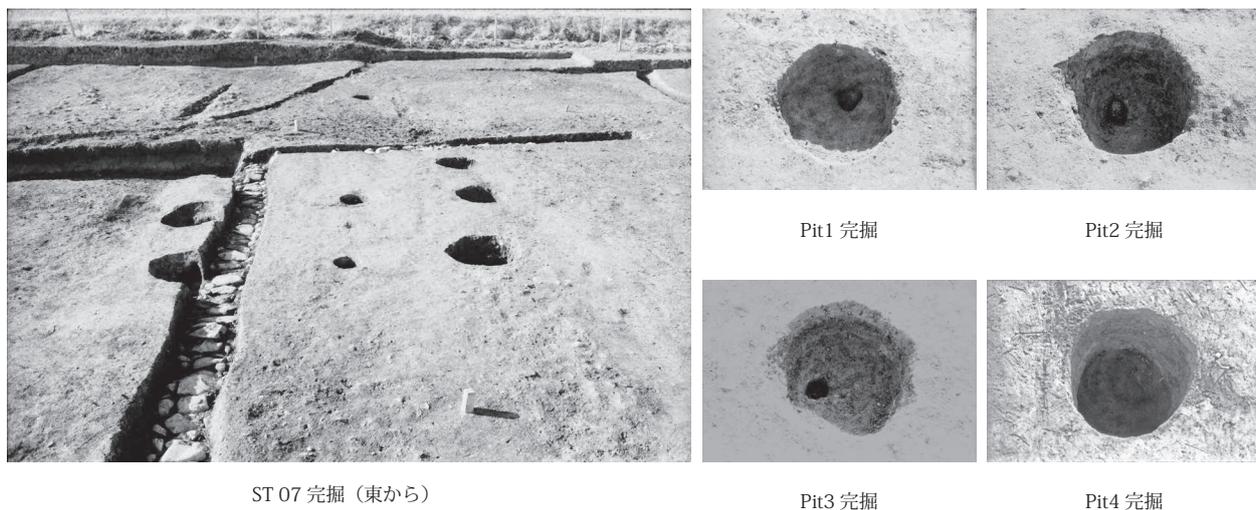
Pit5 完掘



Pit4 完掘



第85図 ST07 完掘状態



第86図 ST 07 出土木製品

代の値である。2は Pit3 より出土した板材（柱材）で、柂目。樹種はモミ属。腐蝕は激しいものの一端に斧痕が残る。3は Pit4 から出土した板材。柱材の一部であろうか。柂目でフジキ。腐蝕が激しいが端部の一部に切断面が残る。4は Pit4 出土の柱材。みかん割り。腐蝕が激しいが、残存する底面の一部から判断してやや斜めに刃を入れて切断したと考えられる。樹種はフジキである。

土 坑 北 区

北区にて確認された円形状を呈する落ち込みは 33 基ある。配置から掘立柱建物跡を想定できるような組み合わせは、53 号土坑から 60 号土坑に限られる。ただし、それらも列状の配置を認めうるものの建物跡を積極的に評価するまでに至らないため、土坑として調査した。基本土層である黄橙色砂質粘土層上面にて検出され、落ち込み内の埋没土は、基本的に黒色粘質土系の単純堆積を主とする。

30 号土坑は、VII C - 4 区にて単独で検出した。平面は楕円形状を呈し、断面形は浅いすり鉢状で中央部に柱痕を持つ形態である。規模は 56 × 43cm、深さ 12cm を計る。東側及び西側は暗渠により破壊されている。埋土中から土師器の小破片が 1 点出土した。

47 号土坑は、VI W - 24 区にて、ST 03 の北側に近接し、SK 46 及び SK 48 とともに検出した。平面形は円形状で、断面形はすり鉢状を呈する。規模は 35 × 34cm、深さ 16cm を計る。埋土中から土師器の甕形土器胴部破片と器種判別不能の小破片が 1 点ずつ出土した。

45 号土坑は、VII C - 8 区にて単独で検出された。平面形は不正楕円形状を呈し、断面形は柱状を 2 つ連ねたような形態である。土坑 2 基の重複の可能性もあるが、調査では確認できなかった。規模は 83 × 57cm、深さ 32cm を計る。

44 号土坑は、VII C - 2 区及び 3 区にて、SB 15 の南側に近接して検出した。平面は円形状を呈し、断面は深さのある有段の柱状を呈する。明瞭な柱材 1 本を伴う。規模は 63 × 55cm、深さ 60cm を計る。掘立柱建物跡を想定し周辺部を精査した結果、本跡と関連付けることの可能な土坑は、SK 49 のみであった。柱材が出土し、1/4 の分割材で樹種はクリ材（第 88 図 1）。底部は腐蝕が激しいものの垂直に切断される。削り出し材と考えられるが面加工痕は残っていない。

49 号土坑は、VII C - 3 区にて、SB 15 の南東側に近接し、SK 44 の北に位置して検出した。平面は円形状を呈し、断面は明瞭な柱痕ある有段形態を示す。規模は 65 × 55cm、深さ 44cm を計り、柱材 1 本を伴う。4 分の 1 分割材で、上部にいくほど腐蝕が激しく厚みが細る。底面付近は原寸を留める。面加工はされていると思われるが、加工痕ははっきりしない。底面は水平に切断されている。底部中央部に僅かに斧痕跡が残る。

61 号土坑は、調査区の北端より VII C - 3 区にて検出した。平面は円形状で、断面形は深いボウル状を呈す。規模は 49 × 47cm、深さ 21cm を計る。埋土は赤褐色の砂質粒子を多く含む灰色粘質土(N4/O)で、埋土中からは土師器鉢形土器及び甕形土器の胴部破片が各 1 点ずつ出土した。

54 号土坑は VI W - 8 区と 13 区にかけて検出し、平面は円形状で、断面形は深い有段柱状を呈す。規模は 61 × 56cm、深さ 44cm を計り、明瞭な柱材を伴う。55 号土坑もほぼ同様である。54 号土坑から出土した杭材は、クリ材の板目部分。全体に腐蝕し、残存部の断面形状は角状に近い。一端は明瞭な加工痕跡がないまま緩やかに削られ幅を減じる。55 号土坑例は、分割後、先端部が尖るよう加工されているものの、明確な切断痕は腐蝕のため明確ではない。樹種はクリ材。

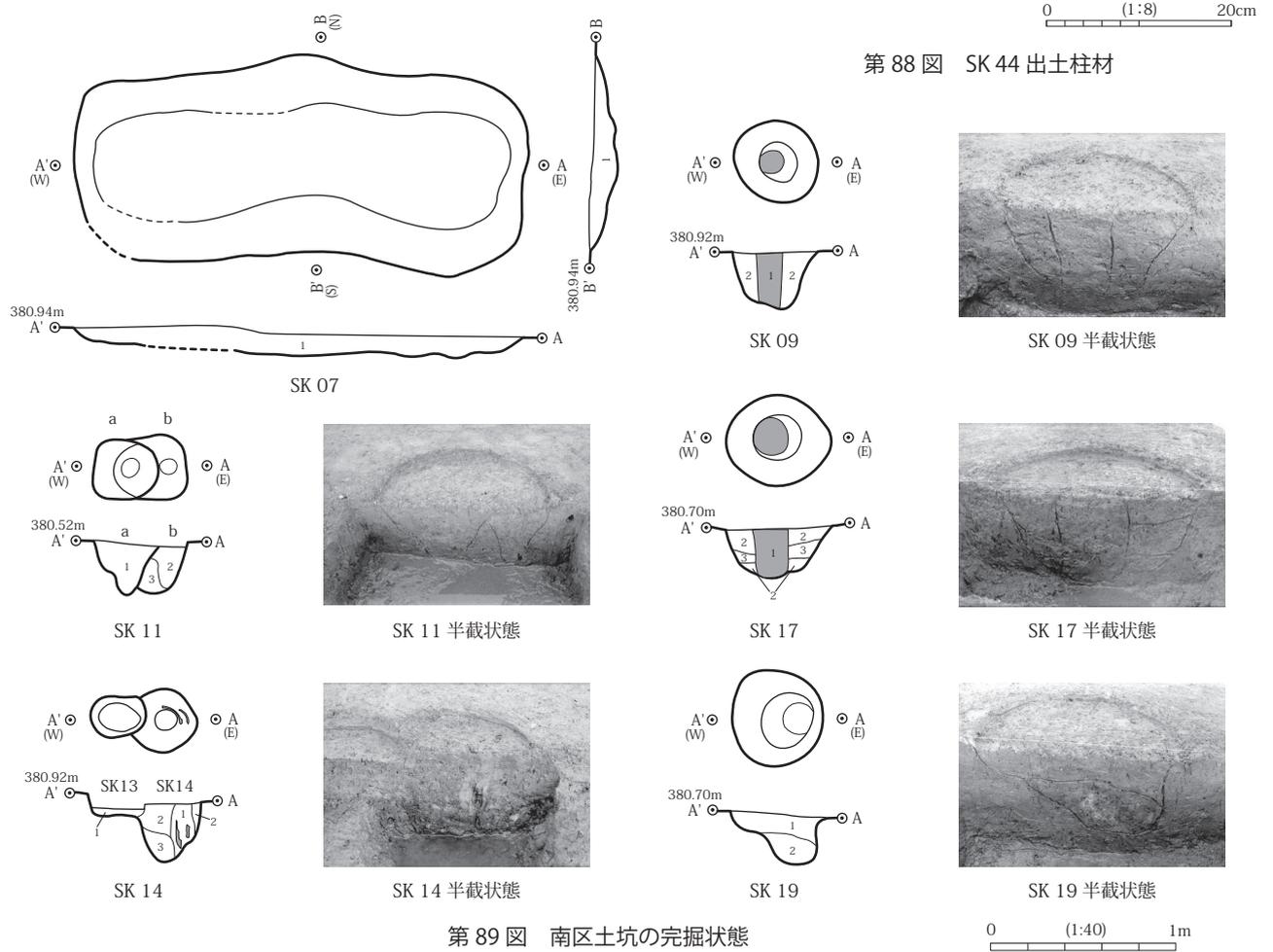
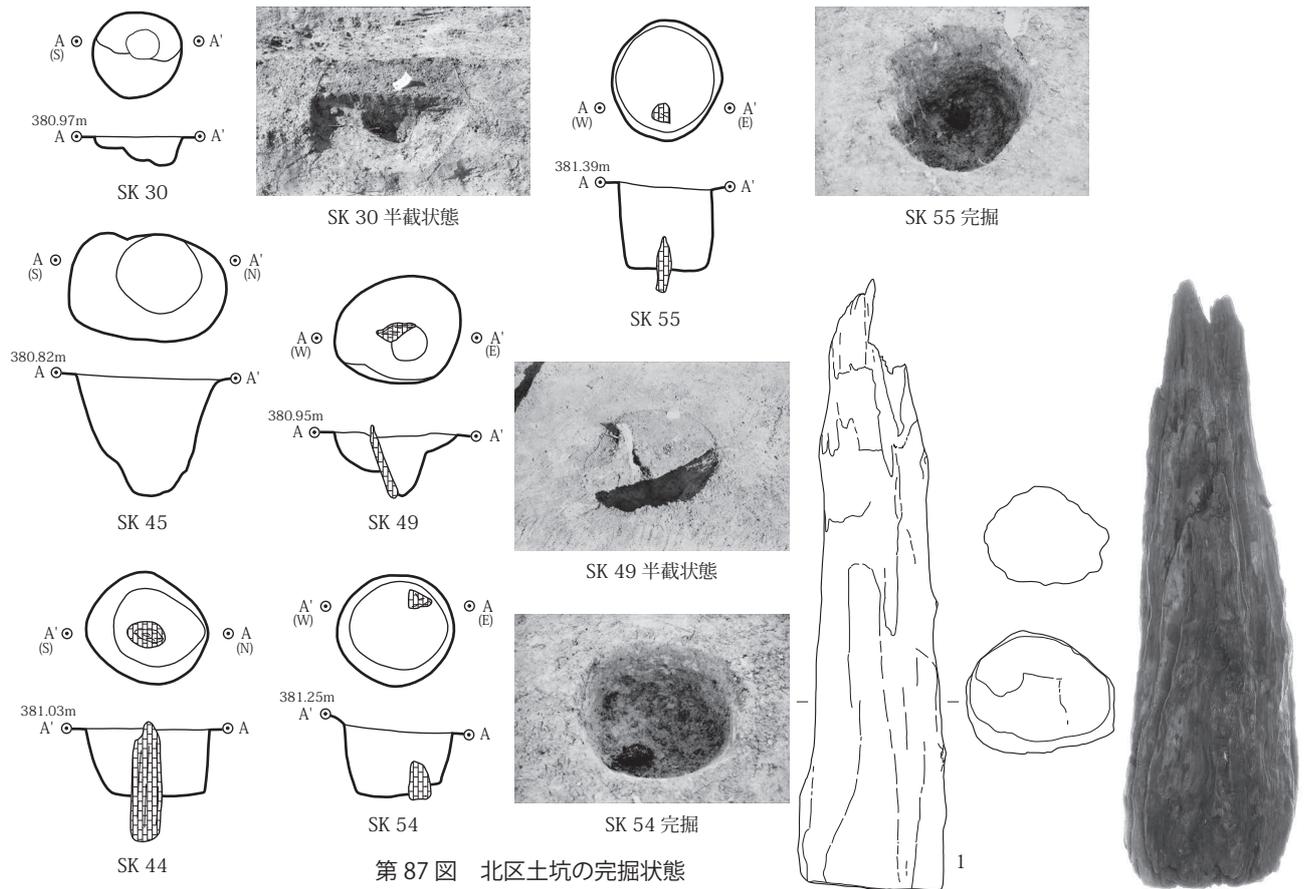
59 号土坑は VI W - 13 区で検出し、平面は楕円形状で、断面形はナベ底状を呈す。規模は 42 × 35cm、深さ 19cm を計る。

南 区

南区にて確認された円形状を呈する落ち込みは 17 基ある。基本土層である黄橙色砂質粘土層にて検出され、落ち込み内の埋没土は、北区同様に、黒色粘質土系の単純堆積を基本とする。すべての落ち込みから遺物は出土していない。

17 号土坑は、調査区の VII C - 23 区にて、他の土坑 2 基 (SK 18 と SK 19) とまとまりをもって検出した。

第3章 発掘調査の概要



平面は楕円形状で、断面形は柱穴状を呈す。規模は58×49cm、深さ26cmを計る。埋土は3層に分かれ、ほぼ中央部には柱材の痕跡が明瞭に認められる。土層は2層と3層が互層となっており、人為的な埋め戻しの可能性を示唆する。

7号土坑は、ⅦC-22区・23区にて、SB 08の東側で検出した。検出時、時期不明の溝状の落ち込みに一部を破壊されていた。平面は不正長方形形状で、断面は浅いタライ状の形態である。規模は243×102cm、深さ12cmを計る。出土遺物はなく、時期・性格不明である。

9号土坑は、ⅦH-2区にて、SB 08の南側で単独に検出した。平面は円形状で、断面は柱穴状を呈す。埋土は2層に分かれ、中央部には柱の痕跡を明瞭に留める。規模は47×44cm、深さ30cmを計る。

11号土坑は、ⅦH-3区にて、土坑2基(SK 10, SK 16)とともに検出した。検出時、平面形は、不正長方形形状を呈していたが、断面調査の結果、土坑2基が重複している可能性も示唆された。断面形から西側をa、東側bとすると、aがbを壊して構築されたと判断できる。規模は両者で50×32cm、深さ28cmを計る。

16号土坑は、ⅦH-3区にて検出した。平面形は円形状を呈し、断面はボール状である。埋土は黒褐色土を基調とし4層に分けられた。中央部には柱穴と考えられる痕跡1層及び2層が明瞭に残る。規模は42×39cm、深さ16cmを計る。

15号土坑はⅦH-2区にて検出した。平面形は楕円形状を呈し、断面は柱状である。埋土は16号土坑同様、4つに分層でき、柱穴痕跡は明瞭に残る。規模は38×28cm、深さ33cmを計る。

19号土坑は、ⅦC-23区にてSK 17と近接して検出した。平面は円形状で、断面は柱穴状を呈す。埋土は黒褐色の粘質土(10YR3/1)が上下2層に分かれて堆積し、柱の痕跡を明瞭に留める。規模は50×50cm、深さ26cmを計る。

溝状の落ち込み

本遺跡の遺構は、黄橙色砂質粘土層面(10YR5/8)にて検出でき、遺構埋没土は、基調として暗灰色の粘土層(N3/0)であった。これら遺構とは埋没土を異にした溝状の落ち込みが南区を中心に認められ、幅20cmから30cm程度で、深さ10cm未満、暗灰黄色土(2.5Y4/2)を単純堆積とする。調査所見に従えば、検出された遺構よりも新しく、畝跡を想定できるとする。状況から判断して、畝立て状の溝跡と考えるべき落ち込みであろうか。出土遺物はなく、所属時期の特定もできないため、調査区全体図にそれらの位置のみを図示しておく。また平成13年度に追加調査した東側の調査区(C-24, N-14)にも、溝跡2本があるが、他同様の畝立て溝の可能性も考えられる。わずか3片であるが、土師器甕形土器と考えられる胴部破片が出土した。

埋没流路状の落ち込み

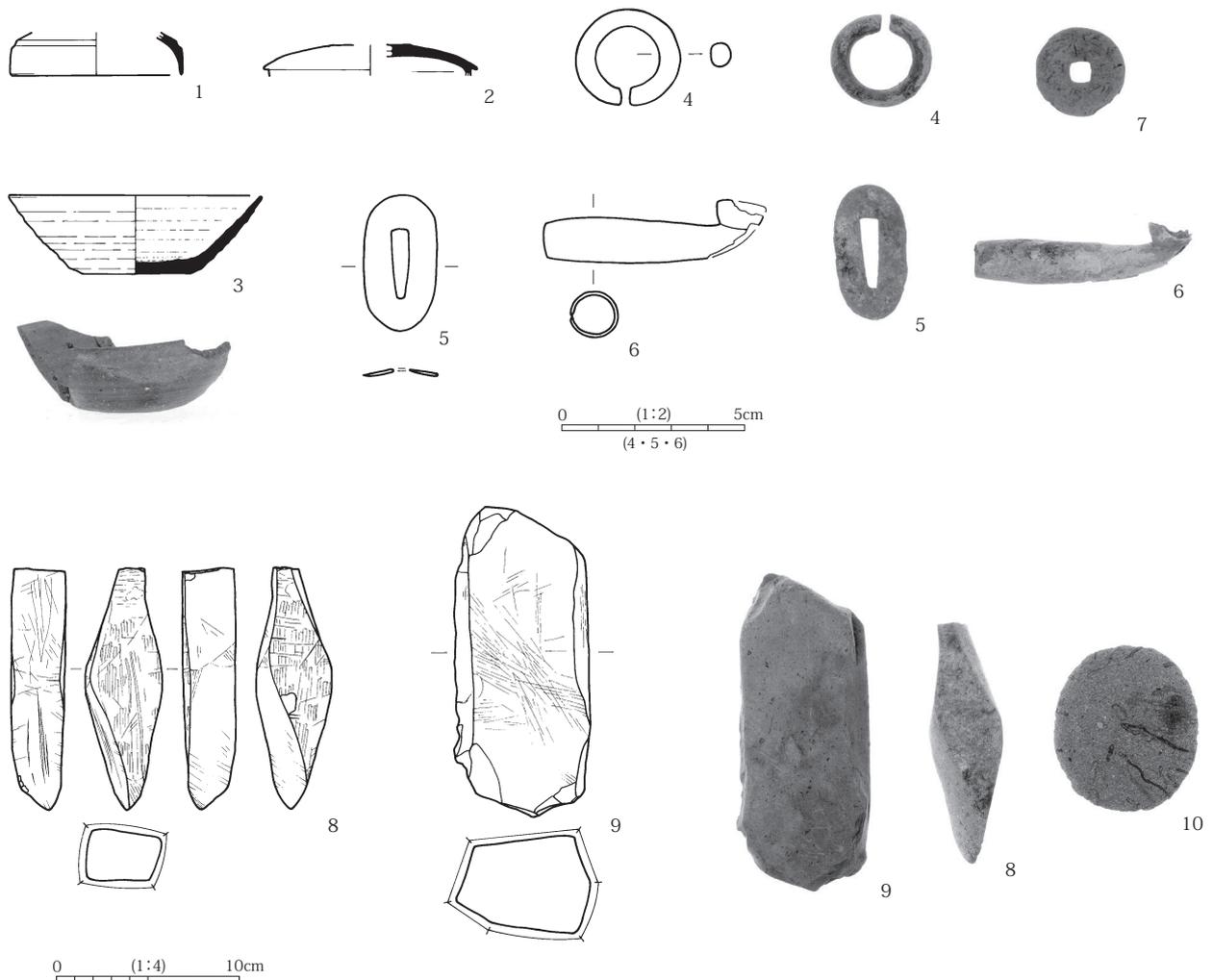
ⅥW-12区から22区にかけての幅20m、ⅥX-11区にかけての長さ28m範囲に、暗灰色粘質土(N3/0)の広い落ち込みを確認した(第52図)。落ち込み部は検出面から-60cm程度の埋没土の厚さがあり、グライ化の進んだ泥質土であることから、湿地状あるいは流路状(一過性の?)の落ち込みを想定した。流路状の落ち込みは、調査区を分断するように東西方向に流下しており、大部分が調査区外に伸びるため、全貌は不明である。埋没土中に土器及び木製品等の遺物は包含されていない。

遺構検出面出土遺物

黄橙色砂質粘土層を上にて発見された古代の土器は、2,197片ある。以下に、主な例を報告する。1

と2は須恵器の杯蓋で、古代1期（7世紀後半代）の所産と考えられる。いずれも丁寧な整形で外来系と判断できる。3は須恵器杯A類の1/4程度の破片個体。3はへら切り離しで、明るい灰色（N7/0）、非常に硬質感ある土器。古代1期の後半（7世紀後半代）の所産と判定できる。4は北区畝状の跡から出土した金環。直径2.6cm、厚さ0.4cm、15g。5は北区暗渠内出土の小刀の鏢止め。3.75cm × 2.0cm。6は北区暗渠内出土のキセルの鴈首。5.9cm、径1.2cm。7はVII H - 18区検出面出土の銭。「乾元通宝」と読めるか。8と9は砥石。8は凝灰岩質で、かつぶし形を呈する。砥面は6面で、表裏面には金属製刃物による筋状砥面の痕跡が多数ある。9は北区埋没流路内出土で、凝灰岩質の岩石。川原石をそのまま使用し、4面を砥面とする。10はSB 07の検出面にて出土した安山岩材の凹石 1/2 個体。この他に、検出面から直径7.0cm、厚さ3.0cmを計る有孔土製品 1/2 個体 1点がある。土製の紡錘車であろうか。木製品では木っ端材がVII H - 11区から1点、棒状木製品がVII H - 6区で1点出土した。

また第25表に示した出土土器以外に、検出面等から出土した中近世の陶磁器類がある。内耳鍋 10片 291.8g、すり鉢 5片 211.0g、天目茶碗 1片 3.6g、青磁椀 2片 31.9g、白磁椀 1片 12.8g、皿 1片 1.5g、瀬戸美濃焼（染め付け椀 6片 79.5g、盃 1片 5.3g、皿 3片 19.2g、丸皿 1片 3.1g、大皿 1片 7.8g、片口鉢 1片 18.5g、はけ皿 1片 7.0g）、唐津焼（片口鉢 1片 26.7g、椀 2片 8.9g、すり鉢 1片 13.7g、不明 3片 8.1g）、伊万里焼（皿 1片 12.2g、椀 3片 38.6g、不明 2片 6.4g）、古瀬戸焼（小皿 1片 2.7g、鉢 1片 24.3g）、珠洲焼（壺 1片 53.5g）、志野焼（椀 2片 6.2g）、磁器急須 1片 1.0g、陶器 2片 19.5g、松代焼 5片 52.5g である。



第90図 検出面出土の土器・金属器・石器

挿図番号	出土地区	器種	木目・木取り	分析No (樹種)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状の特徴
第 69 図 4	SB10 PIT1	柱材	丸木芯持ち	トネリコ属	26.0	直径 11.4		
第 74 図 4	SB15	棒材	斜め	カヤ	28.7	5.9	3.8	
第 86 図 1	ST07 PIT2	柱材	みかん割り	フシキ	31.0	13.4	13.5	
第 86 図 2	ST07 PIT3	柱材	柁目	モミ属	29.0	11.7	4.7	
第 86 図 4	ST07 PIT4	柱材	柁目	フジキ	18.6	11.2	2.4	
第 86 図 3	ST07 PIT4	柱材	斜め	フジキ	18.6	11.8	5.5	
第 88 図 1	SK44	木杭	4分割	クリ	55.4	13.7	12.3	

第 24 表 大道遺跡出土木製品属性

遺構名	非ロクロ土師器										須恵器										灰釉 数 / 総重量 (破片 / g)												
	杯?	杯C	杯I	鉢	高杯	甕?	甕A	甕B	甕F	小型甕A	小型甕B	小型丸底	甌	不明	杯A	杯B	杯?	高杯	杯蓋	鉢		甕A	甕?	はそう	壺?	長頸壺	短頸壺	瓶?	横瓶	提瓶	不明	杯	椀
SB 01	12					61									67																		144/945.0
SB 02	26	2				1	50								53																		132/482.9
SB 03	3			22	3	159									75	228		4		1		1	1										497/2,885.4
SB 04											1																						1/10.5
SB 05				4	273	23	6	58	45	27							1							2									439/1,957.5
SB 07	6	25	1	2		168	48		2		4	1	1	70																1			329/4,057.5
SB 08										1					47																		48/96.6
SB 09	2					14			1						22			1															40/123.5
SB 10	38			1	128	26		18	9	6					85		5													2			318/1,953.4
SB 11	1														6																		7/12.8
SB 12				1		9									7																		17/54.7
SB 15	5			16		23			2		6				29						1									1			83/1,442.7
ST 01						24			1					6	23			3			1	21	3	1						1			84/4,204.7
ST 07																																	1/131.7
検出面	116			75	19	907			54		18			18	718		50	1		1	81	30	2	21	23	40	6		16	1	1		2,198/17,210.0

第 25 表 大道遺跡出土土器組成

総括： 大道遺跡は今回の発掘調査で、初めて確認できた遺跡である。市道大道線を挟んだ南北に、
 竪穴式住居跡 11 軒と掘立柱建物跡 6 棟を中心とした遺構群を確認した。古墳時代後期にほ
 ぼ限定できる当集落は、これまで未周知であり、千曲川左岸の当該地域としては、一定程度
 の規模で調査できた時代的に初出の遺跡である。以下に、その概要を総括しておく。

大道遺跡とは、

佐野川扇状地上の扇央部、やや南よりに位置する。社宮司遺跡の南端を流れる宮川より、直
 線距離にして、北へ 500m、現標高 382m の微高地にある。北は、ふけ地籍の湿地帯で区
 切られ、そこでの試掘状況を鑑みると、集落設営時期から、すでに湿地化した境が集落の北
 に存在したようだ。南の清水下地籍には、まったく人工的な構築物や遺物が存在しない点から、
 居住区外と判断できるか。東端では SD 102 (SD 07 含む) 及び SD 101 が東に伸びるものの
 住居や掘立柱の痕跡は認められない。西端は、すでに西部沖の土地整備事業が実施されており、
 遺構は不明。当時の調査では、遺構等の検出はなかったと言う (千曲市教育委員会のご教示)。

規模

このように東西の遺構範囲は非常に曖昧であるが、現状での事実証拠から判断すると、大道
 集落の規模は、北から南へ約 100m、東西に約 40m 程度広がる居住空間を確保していると
 判断できることになる。

遺構

SB 01 と SB 02 等竪穴式住居跡の切り合い関係から、少なくとも 2 時期があり、SB 05 のよ
 うに、カマド方向が他の住居跡と異方向にある住居跡の存在から、さらにもう 1 時期程度の
 想定が可能か。竪穴式住居跡出土土器の検討から、時代的な差異はほとんど看取できないの
 で、短時期に集落全体の建替えが行われたものと考えられる。カマドの構築方位から SB 02
 と SB 07 と SB 15、SB 03 と SB 10、SB 01 ないしは SB 05 と SB 11 と SB 12 が同時に組成
 した建物と想定でき、ひとつの時期に存在した竪穴式住居は、2 軒ないしは 3 軒程度と少数
 であったといえる。このことは、居住空間と考えた範囲内に、集落と呼ぶべき規模よりは各
 段に小さな居住単位が存在していたと理解できる。SB 02、SB 07、SB 15 の組み合わせが妥

当とすれば、良好な一単位であろう。SB 03 や SB 15 は、一辺 5.0m を測る大型規模の住居跡で、主たる居住者の宅と考えられる。

竪穴式住居跡の密集する中央部と北端の湿地帯との間に掘立柱建物跡群がある。掘立柱建物と竪穴式住居とが、明瞭に区別された区域に限定されて構築されている点に、特徴がある。掘立柱の所属時期は推定しかねるが、建物方位がほぼ N - 40° - W 近辺に一致としていることから SB 15 等と同一時期の建築と考えてよいであろう。ST 02 と ST 07 は 2 間 × 2 間のしっかりした建物で、ST 07 には柱材が残存していた。クリのみかん割り材を基本とし、丸太材ではない点に特徴がある。これらは、居住施設の一単位に付属した収納建物と考えられるか。現状では、これらに建替え状況を確認できない。これは、ST 02 以北に遺跡形成以後と考えられる一過性の埋没流路があつて、おそらく SK 53 から SK 59（これらも掘立柱建物の一部と考えられるが、流路により破壊される）以南は、破壊されてしまった可能性が高い。

遺物

以上の遺構群は、出土土器の型式年代から、古墳時代の終末期、歴史的須恵器出現前夜に位置付けることができる。古代 1 期の前半段階、7 世紀の後半を主体とした年代である。土器の特徴は、須恵器杯 B 類の出現はなく、椀形の凹線蓋と蓋 A 類、底部ヘラ切りの杯 A 類が登場する。また壺・甕類では短頸壺に、甕 A 類であろうか、一括個体が ST 01 付近から出土している。土師器では、非ロクロの杯 C 類が僅かで、多くは若干平底化した I 類である。鉢形土器が卓越し、ケズリ調整の L 類をはじめ、杯類の種類は少ない。甕形土器はナデあるいはミガキ整形のみが存在し、ハケ甕とケズリ甕はない。甕の欠落も特筆すべきか。遺構内はもちろん、堆積土中からほとんど出土遺物がない点から考えると、居住者移転の際に、土器類の大半が持ち去られたと考えるべきであろう。欠落した土器の種類が、必ずしも存在しなかったとはいえない。

年代

ST 07 には柱材がある。これの炭素年代値は、西暦 600 年 ~ 520 年 (1440 ± 40 年 BP)、古代 6 世紀末 ~ 7 世紀初頭の値がある。樹木の伐採年に近い値と判断すると、土器型式とは 50 年から 100 年近い開きがある。SB 03 に組成する単位、カマドがほぼ北 (SB 03 で N - 9° - E) を指す住居は、出土土器が若干古く 7 世紀前半代の傾向があることから、これらを集落形成期と考えると、遺構の構築年から廃絶時まで、約半世紀から 3/4 世紀間を存続期間と推定することが可能か。この間に、少なくとも 2 ~ 3 回の建替えがあつたことから、25 年単位にそれが実施されたと推定できるか。最終的には、歴史的須恵器の登場しない時期に、集落は終息するものと判断できる。

性格

当集落は、千曲川左岸域の、ことに更級地域を開発した古代最初期の集落のひとつである。その時代は、大化の改新 (645 年) 前後から、大宝律令 (701 年) の制定される時期ころまで 3/4 世紀近くにわたる。おそらくは、佐野川扇状地の扇中央部に東西方向に大きく展開した集落で、その単位は 2 ~ 3 軒程度の住居と幾つかの付属施設により構成されていたと考えられる。居住施設と収納施設が分離されて配置される様は、極めて計画的な集落である。今回は出土遺物に恵まれず、具体的な構造に踏み込むことはできないが、社宮司遺跡の建設期が、ほぼ該期まで遡る可能性があることから、何らかの関連性、あるいは集落としての継続性 (移転または統合など) を、そこに読み取ることができるともかもしれない。扇頂部付近の霊浄山に築造された八幡古墳群 (糠塚古墳、矢先山 1 号・2 号墳、山ノ神古墳など 7 基) こそが、大道遺跡等にかかわる開発氏族の墳墓と考えられようか。とすれば、「この群の最大級の古墳である山頂墳糠塚古墳を主墳とする小支群」(P365『更埴市誌第一巻』) との階層的解釈は、更級郡衙建設に向けての地域的律令政策の構造を考究していく上に、極めて重要で、傾聴に値する指摘であると考えられる。

第10節 ^{しみずした}清水下地籍の試掘調査

地 籍： 千曲市大字八幡字清水下 3448-1 ほか

期 間： 平成 12 年 8 月 7 日から 8 月 21 日、平成 13 年 4 月 18 日から 4 月 23 日

調 査 区： 用悪水路（字大道地籍境）から農道 8603 号線までを対象とし、試掘調査を実施した。

調査面積： 調査対象面積 7,393 m²、試掘面積（979.8 m²）

調査担当： 町田勝則 上田典男

調査状況： 大道地籍に隣接する用悪水路境から、以南の地籍について試掘調査を実施した。北側Ⅶ R-1 区周辺では、地表下-30cm 程で、にぶい黄褐色砂層（10YR4/5）と赤褐色砂礫層（2.5YR2/1）の堆積を確認した。これらの互層は、これまでの地籍では認められない土層であったため、部分的に面的な精査を行った。同様にⅦ C-13 区周辺では、-40cm ほどで基本土層と同質の黄褐色砂礫層の広がりを確認したので、部分的に面的精査を実施した。南北の試掘坑は 4 m 幅で実施し、片側 2 m に 40cm から 50cm 程度の深掘を入れた。H 区以南は平成 13 年度に試掘し、-20cm ~ -30cm ほどで基本土層の黄褐色砂礫層を確認した。

調査結果： 試掘の結果、調査区全域に基本土層の青灰褐色砂層（-70cm 程度）を確認した。これより上層には、暗灰色粘土層の落ち込み部分が処々に認められ、合計 4 本の埋没流路ないしは湿地状の落ち込みを推定できた。しかしながら、落ち込み部分からの人工物は皆無で、表土層付近にて、古代から中世にかけての土器・陶磁器の小破片を発見したに留まった。H 区以南は、表土直下にて、黄褐色砂礫層を認め、遺構・遺物の発見はなかった。したがって、当該地区について、本調査の必要なしと判断し試掘を終了した。

堆積層位： 調査前の現況は旧水田耕土上の畝地ないしは荒地である。表土掘削の結果、旧水田耕土と直下に基本土層の黄褐色砂礫層を検出した（第 91 図）。埋没流路内の堆積土は 3 枚から 4 枚あり、黒褐色粘土層（10YR3/2）または暗灰色粘土層（N3/0）の堆積が認められた（第 93 図）。

出土遺物： 出土した遺物には、土器 14 片、家畜骨 1 点がある。土器はすべて小破片で、表土ないしは試掘土中より出土した。



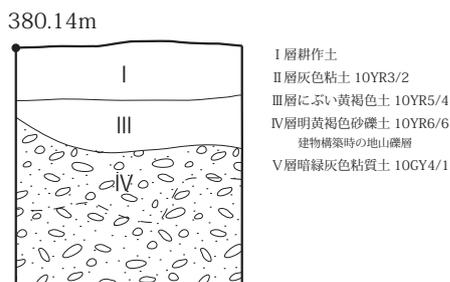
調査前の全景（東から）



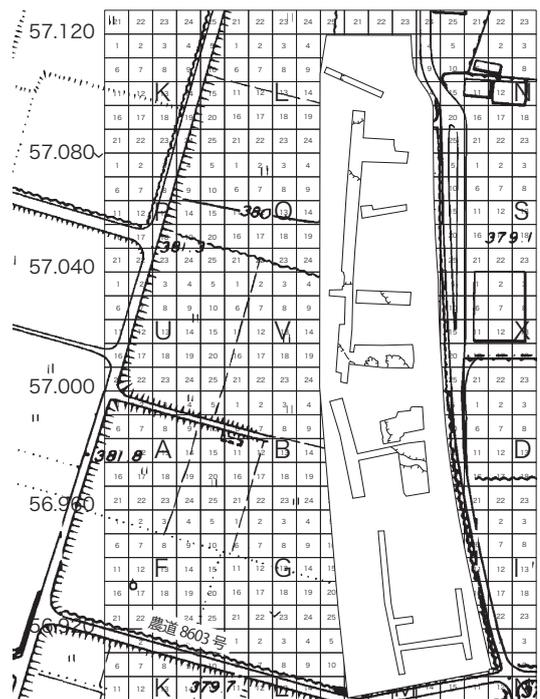
試掘坑全景（北から）



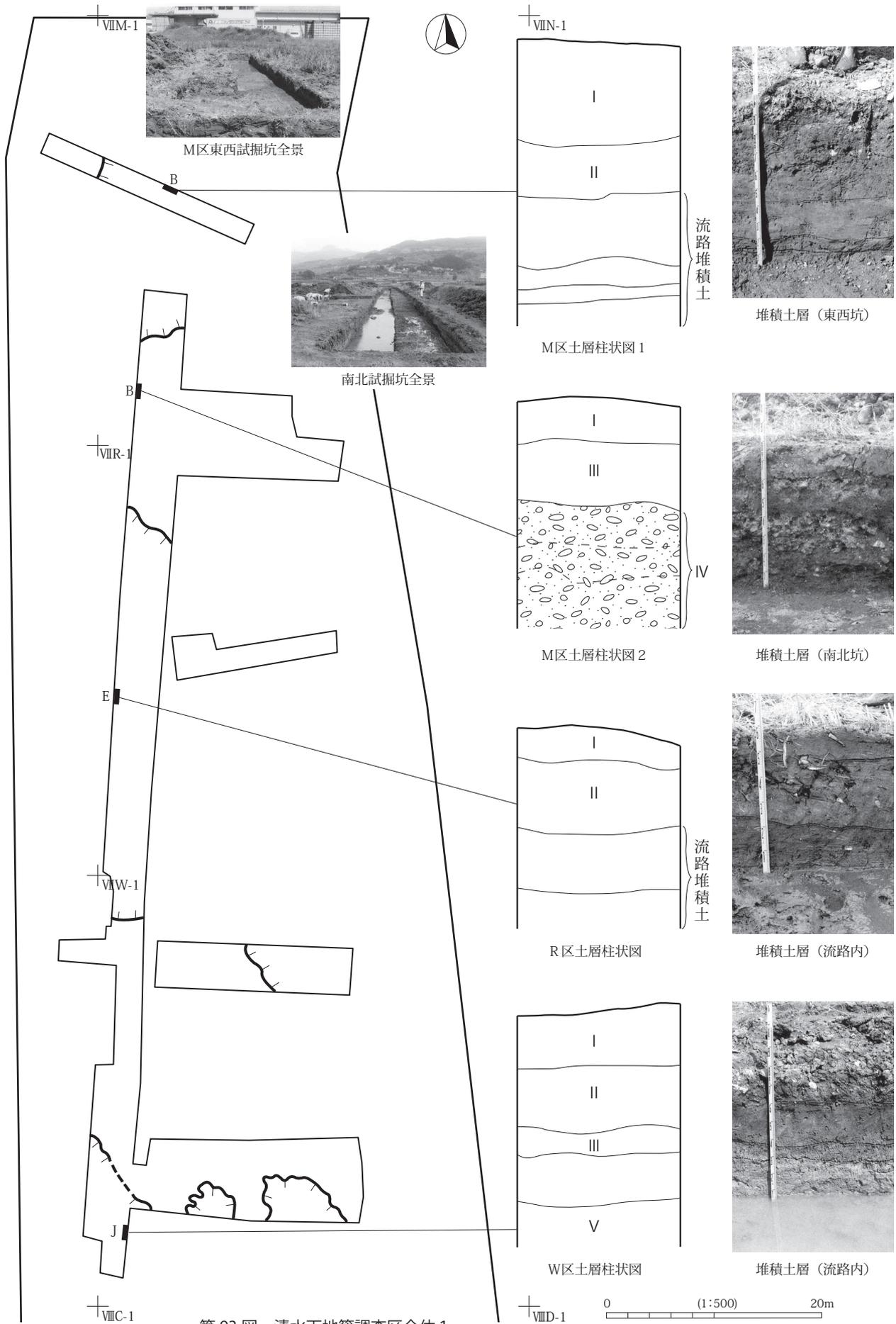
堆積土層

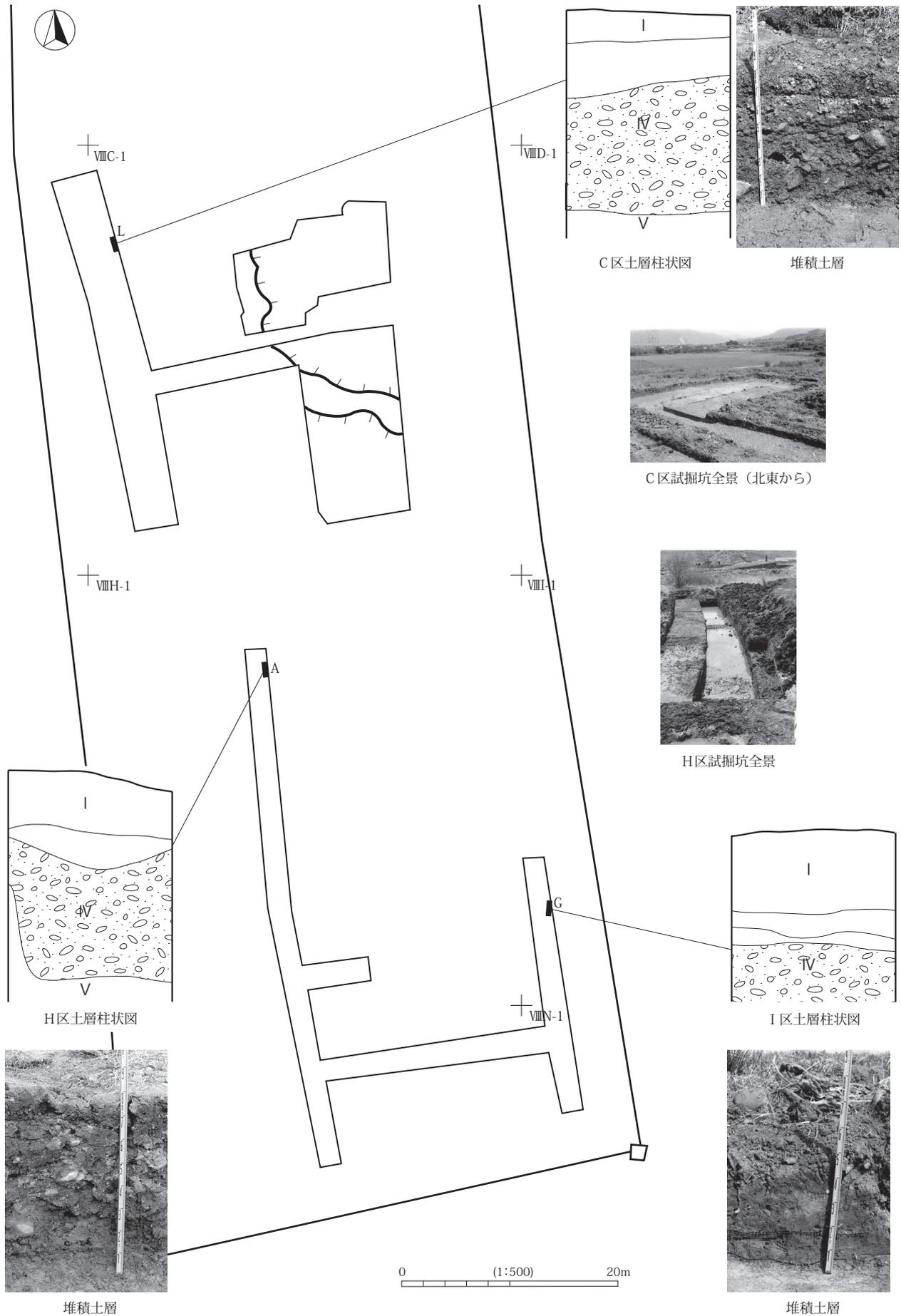


第 91 図 土層柱状図（S = 1/20）



第 92 図 調査地と試掘坑位置図





第 94 図 清水地下地籍調査区全体 2



第 11 節 みやがわ 宮川遺跡の試掘調査

地 籍： 千曲市大字八幡字宮川 4566-1 ほか

期 間： 平成 13 年 4 月 17 日から 4 月 19 日

調 査 区： 宮川から県道姥捨停車場線までを対象とし、試掘調査を実施した。

調査面積： 調査対象面積 1,462 m²、試掘面積 (138 m²)

調査担当： 谷 和隆 上田典男

調査状況： 千曲市遺跡登録番号 (105) に当たり、県道施設に伴い 1987 年に試掘調査、1988 年に発掘調査が市教育委員会により実施された。今回の調査地は、1987 年試掘時の 6 トレンチ及び 7 トレンチ付近に該当し、峯謡坂遺跡直下の県道と宮川に挟まれた斜面地に当たる。試掘坑は、斜面傾斜方向及び、これに直行する東西方向に設定、遺構の確認及び遺跡範囲の確定に努めた。表層の黒褐色腐植土 (10YR2/2) は厚く、地表下 - 80cm ほどに及んだ。基本土層である純粋な黄褐色砂層の堆積は確認できず、斜面地からの 2 次的堆積物と考えられる砂礫層の堆積を確認した。最下位にある泥炭混じりの砂層上面までを掘削し、遺構確認を行った。

調査結果： 厚い黒褐色腐食土の堆積を除去し遺構確認に努めたが、結果、遺構の存在は認められず、腐植土中に土器片が僅かに混在していたに留まった。87 年の試掘結果にある黒褐色腐植土の落ち込みは遺構としては認定できなかった。遺物の出土状況と堆積層の様子から、宮川遺跡の遺構密集の範囲外、あるいは遺跡外であると判断し、本調査の必要なしと結論付けた。

堆積層位： 試掘調査時の現況は、果樹園 (リンゴ) 後の荒地である。表土掘削の結果、部分により異なるが、上部に黒褐色腐植土 (10YR2/2)、中位にピート層と互層となるにぶい黄褐色砂層 (10YR5/3) が堆積、最下層の V 層にオリーブ灰色砂層 (5GY6/1) が認められた。V 層は泥炭を含む土層で基本土層になると考えられるが、それより上層の堆積物は、いずれも斜面地からの 2 次的堆積層と考えられる (第 95 図)。

出土遺物： 遺物には土器 14 片、家畜骨 1 点があり、いずれも表土ないしは腐植土中より出土した。土器はすべて小破片で、時期を特定できる遺物に恵まれないが、いずれも古代の土器片 (8 世紀から 9 世紀代か?) である。



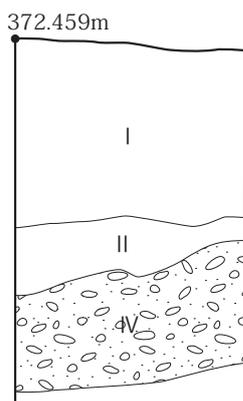
調査前の全景 (南から)



試掘坑全景 (北から)

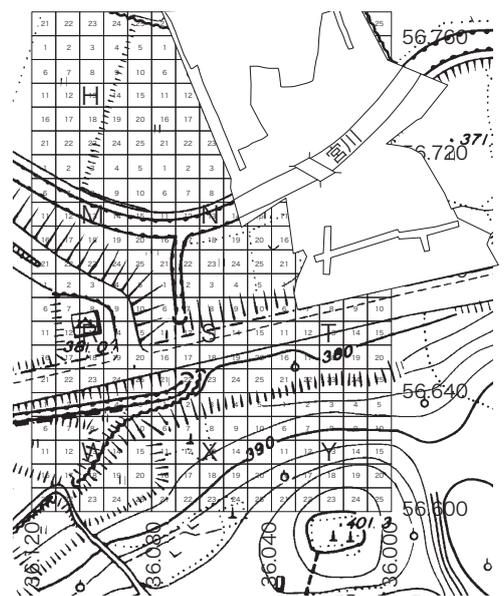


堆積土層

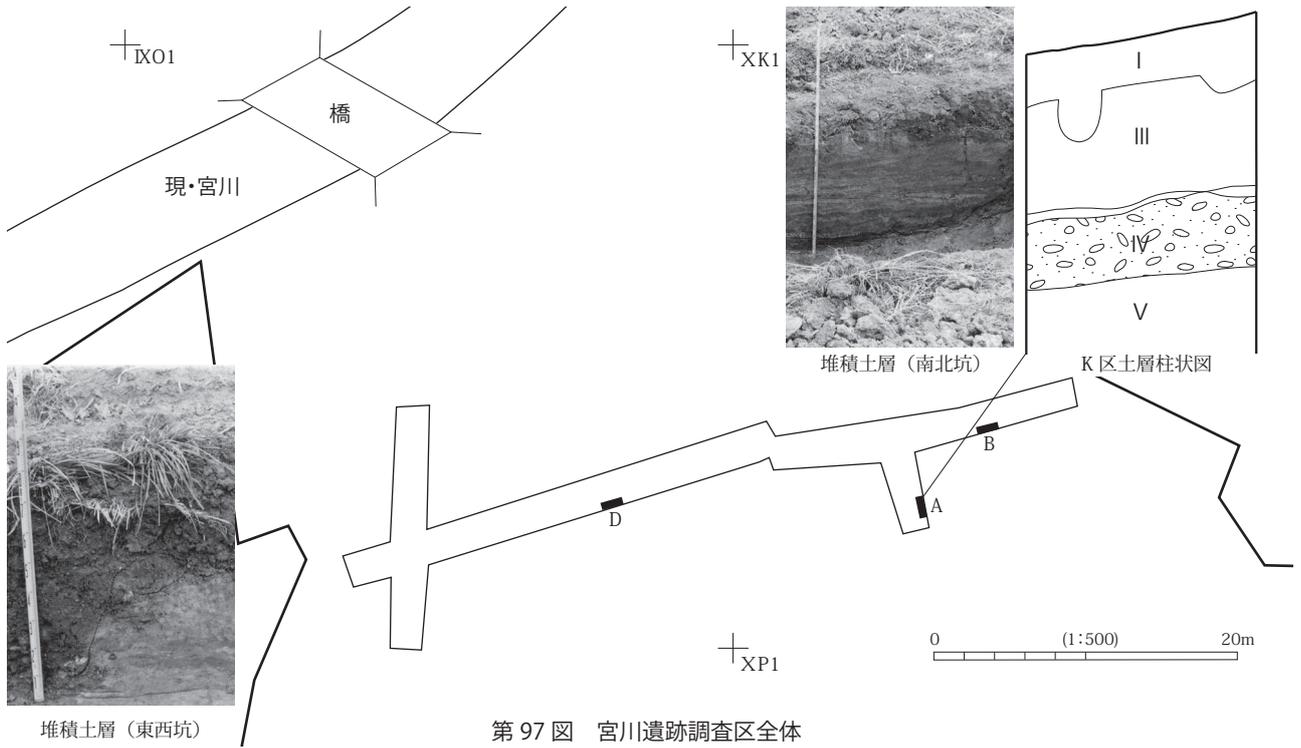


- I 層耕作土
- II 層黒色土 10YR1.7/1
- III 層にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3
- IV 層黄褐色砂礫土 10YR5/0
遺構検出面と同質の地山礫層
- V 層オリーブ灰色粘土 5GY6/1

第 95 図 土層柱状図 (S=1/20)



第 96 図 調査地と試掘坑位置図



第 97 図 宮川遺跡調査区全体

遺構名	土師器							須恵器				灰釉	数 / 総重量 (破片 / g)
	杯?	壺	甕B	小甕	甕?	高杯	不明	杯A	杯B	甕?	不明	長頸壺?	
腐植土表採	3	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14/109.8
												1	1/15.4

第 26 表 宮川遺跡出土土器組成



出土土器



八幡遺跡群調査前の風景
(姨捨停車場線・峯謡坂から)



バイパス建設中の風景
(姨捨停車場線・峯謡坂から)

第12節 しゃぐうじ 社宮司遺跡の調査

1. 調査の概要

地 籍： 千曲市大字八幡字社宮司 3492-2 ほか

期 間： 平成13年4月17日から12月20日、平成14年6月1日から7月5日、11月15日から11月29日

調査区： 農道8603号線から、現在の宮川河川までの範囲

調査面積： 9,188 m²

調査担当： 町田勝則 上田典男 寺内貴美子 西 香子 谷 和隆（4月から9月6日まで）

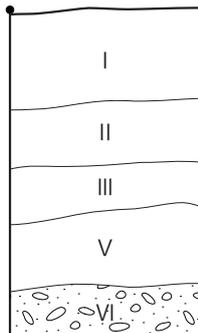
調査状況： 遺跡登録番号（85-16）が一部範囲にある。85-16は1975年（昭和60年）4月5日から5月16日の約1ヶ月間、西部冲県営ほ場整備事業に伴う発掘調査を旧更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会が実施した。掘立柱建物跡9棟、溝跡6本、集石2箇所等を調査し、竪穴式建物跡を含まない奈良・平安時代の遺跡であることが明らかとなり、出土遺物には、土師器や須恵器のほか、灰釉陶器、多数の墨書土器、奈良三彩陶器短頸壺の蓋なども含まれていた。遺跡の西方約500mには「郡（こおり）」地名の集落があり、古東山道の支道ルート（P19、第1章第4節）も想定されていることから、古代「更級郡衙」関連施設との見解が示された。今回の対象地は、遺跡登録範囲の一部が掛かる西側の隣接地であり、遺跡範囲の確認と遺跡の性格追究を念頭に、当初より面的掘削を実施した。ただし調査区西側のW-4区・5区からW-24区・25区にかけて、平成13年度未買収地となり、14年度に追加調査した。県埋文センター遺跡記号は（BSG）を符号する。

調査区の現況は水田地で、農道8603号線から現在の宮川まで、随時標高を下げる段々田んぼであった。水田耕土の除去後、僅かに40cm程度で、遺構検出面に達し、旧地形面を僅かに削り出した作田と理解できた。北側から、作田面を単位に、上段・中段・下段と仮称したが、調査の進行に伴ない上段を①区、中段はSD03を境に北側の②区と南側の③区に区別した。下段は遺構密度が粗であることから、③区に含めて扱った。



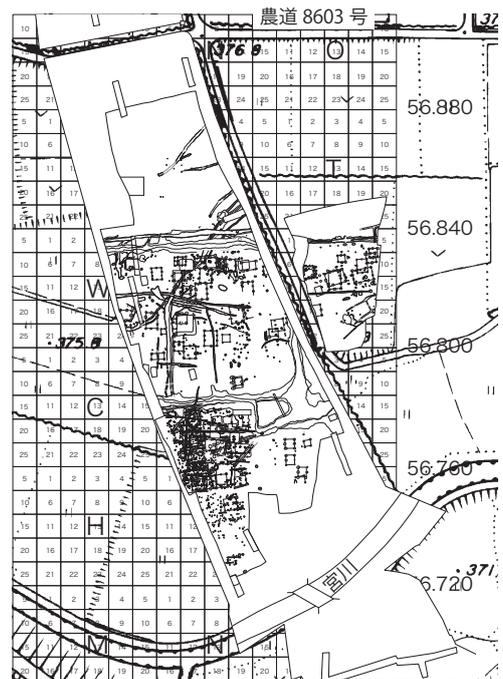
調査前の全景

375.65m



- I 層耕作土（水田耕土）
- II・III層耕作土（水田脚土）
- V 層黒色粘質土 10YR2/1
粘性・締まり強い。鉄分の沈着少量。
遺物を包含する。
- VI層にふい黄橙色砂層 10YR7/3
白色粒子多量に混入。鉄分の沈着中量。

第98図 土層柱状図



第99図 調査地と調査区位置図

調査区北側の①区は、農道 8603 号線沿いの N-21 区から南へ R-15 区付近まで、試掘坑による遺構確認を行ったが、遺構は認められなかった。S-7 区以南では、SD 32 等の溝状の落ち込みを確認できたことから面的検出を行った。時期不明の暗渠排水様の溝跡が中心で、SD 01 以北に顕著な遺構分布は認められなかった。また現在の宮川に近い調査区南側③区（下段部分）では、I-24 区・25 区・N-4 区・5 区の試掘坑で、旧宮川の流路と考えられる北岸を確認した。

調査結果： 調査全体の総括は、第 5 章にて詳述する。遺跡範囲は、遺構の検出状況から判断して、北が東西溝 SD 01 まで、南は旧宮川流路北岸までの約 120m 内と考えられる。東及び西は、今回の調査範囲外へさらに伸びると考えられる。東側については 1975 年の調査地区と農道 8372 号線を挟んで直結することが明かとなった。1975 年調査区については、第 100 図全体図に合わせ作成してあるが、遺跡はさらに東側へ伸びていくものと考えられる。遺跡の性格では、全体を東西溝 SD 01 と SD 03 で方形状に区画し、区画内に規則的な配置で建物を構築していることが判明した。建物群には竪穴式建物が組成していること、墨書土器のほか、習書木簡や漆紙文書等の文字関連資料が豊富なこと、奈良二彩陶器や緑釉陶器などの出土があることなど、新知見が得られた。「出挙返納帳」と推定できる漆紙文書が発見されたことから、更級郡衙との関連が、より濃厚となった。また SD 03 からは、国内初出となる木製幢、「六角木幢（ろっかくもくどう）」が一括出土し、古代末期の仏教関連遺物も提示された。

堆積層位： 水田耕土を 40cm～50cm 除去すると、遺物を包含する黒色粘土(10YR2/1)の堆積層となる。この層は、調査区中段から下段、すなわち②区と③区の東側に認められ、上段の①区と③区西側には、ほとんど層として堆積は認められなかった。状況から判断して、作田に伴う削平により除去され、遺構内にのみ残存したものと判断できる。黒色粘土層の下位に堆積したにぶい黄橙色砂質土(10YR7/3)の上面が遺構検出面である。水田耕土除去に伴ない①区で 2 箇所(R-20 区・S-24 区)、②区で 2 箇所(O-6 区・D-7 区)、③区で 2 箇所(D-14 区・I-20 区)の深掘を設定したが、にぶい黄橙色砂質土の下位層に文化遺物及び遺構の存在は認められなかった。遺構が密集する③区西半分については、再度の検出掘削(ダメ押し)を行い、最終的には、さらにもう 1 回の掘削作業を得て終了した(P129 写真)。

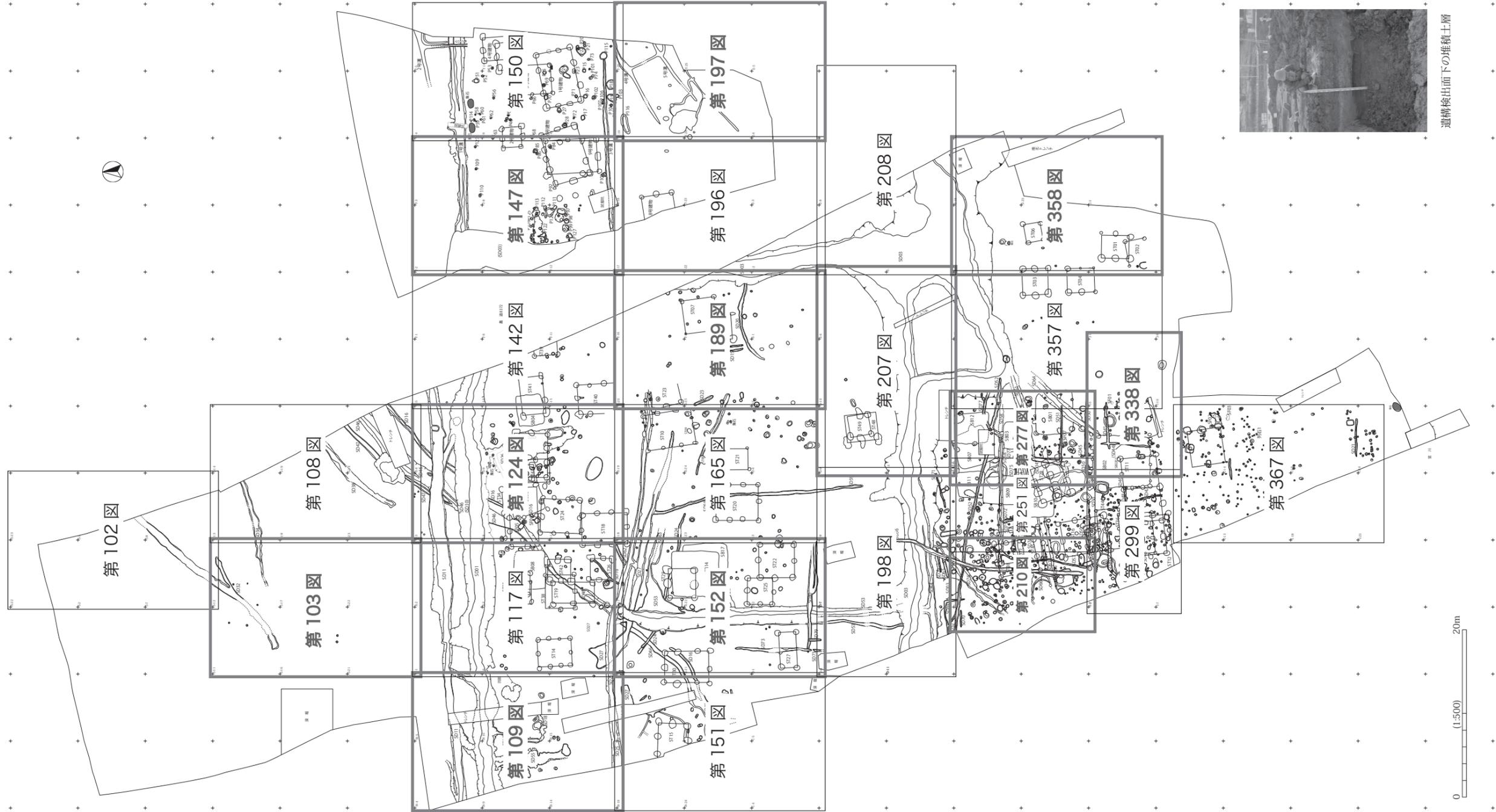
2. 遺構と遺物の概要

約 10000 m²に及ぶ範囲の調査につき、遺構と遺物の記述を以下のように進める。

- a. 遺構全体の位置図は、第 100 図に示す。測量区(グリッド)は 8m×8m を単位とすることから、それを説明の基準として、測量区 2 つから 4 つをひとつの単位として表示することにする。第 101 図が説明用の枠取り設定図である。
- b. グリッド調査として、まず調査区の①区から③区ごとに、枠取り設定図を用いて、溝跡と土坑跡ほかを説明する。竪穴式建物跡と掘立柱建物跡は後に個別に記述するので、該当するグリッドでは位置説明のみを行う。
- c. 本節の記述の順番は、グリッド設定図(溝跡・土坑・集石など)、竪穴式建物跡(SB)、掘立柱建物跡(ST)、大溝跡(SD 01・SD 03・SD 53)、特殊遺構(地鎮状遺構・SK 740)の順とする。

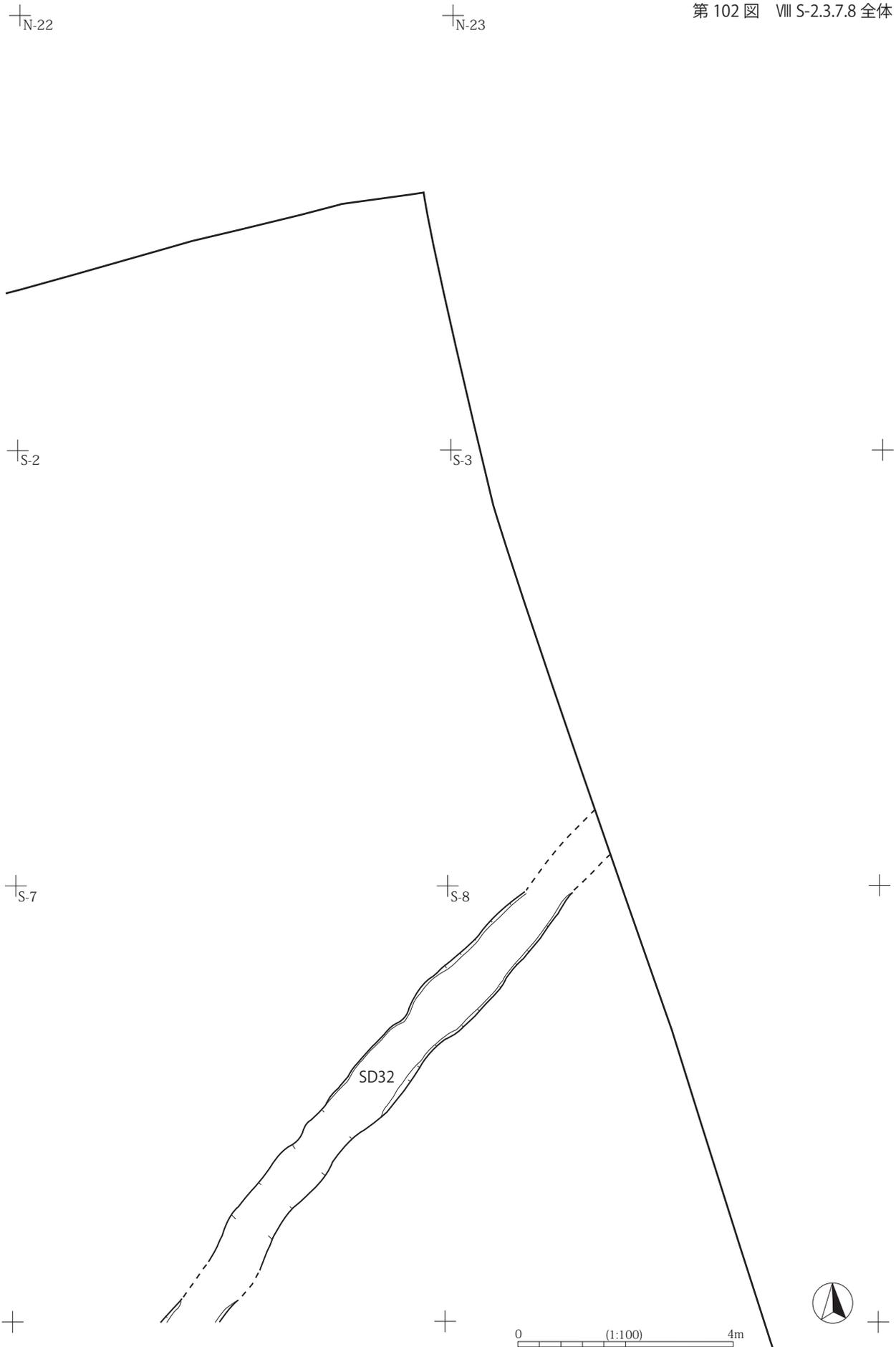


第100図 社宮司遺跡調査区全体 (S=1/500)

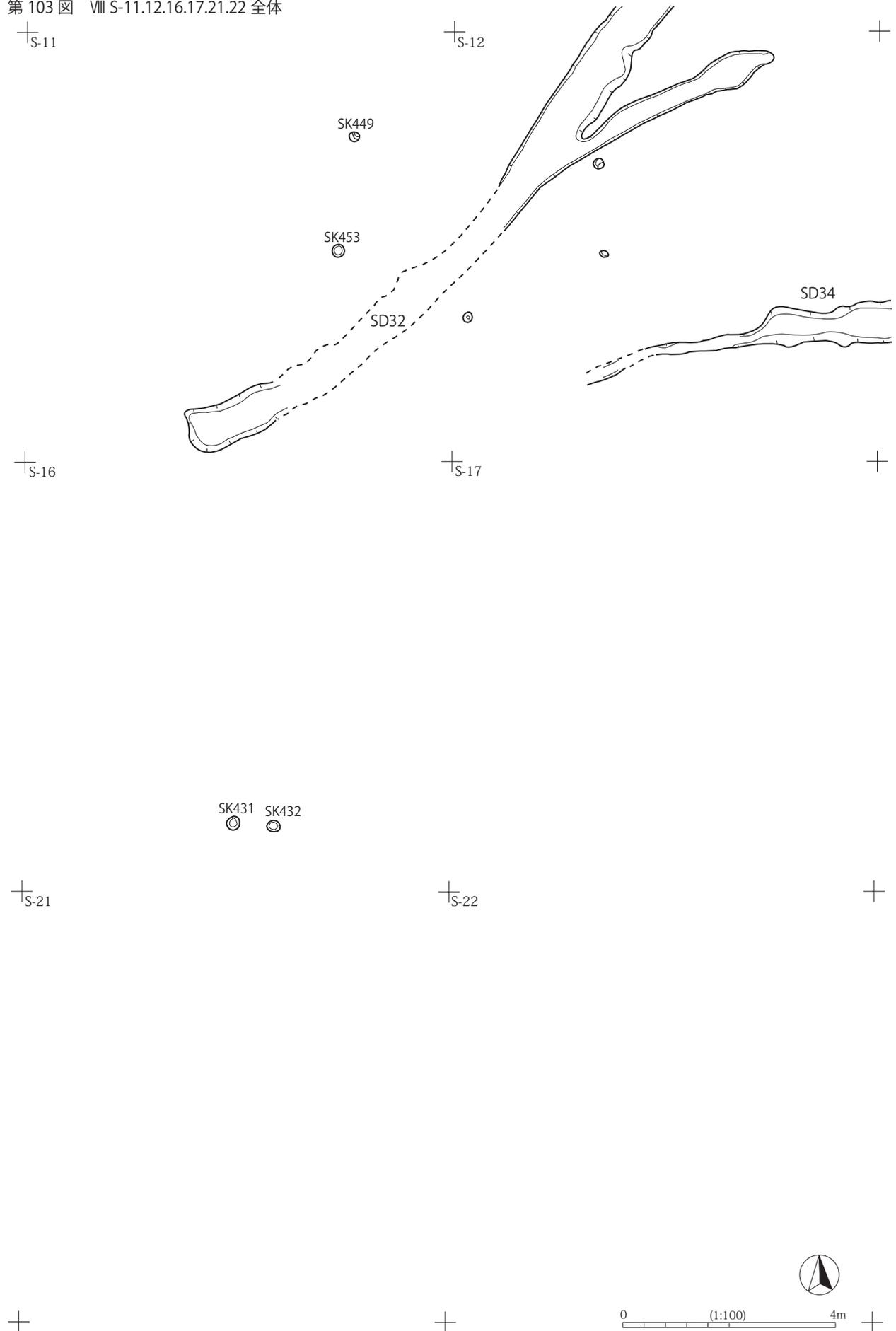


第101図 社宮司遺跡グリッド説明用枠取り図(S=1/500)

第 102 図 VIII S-2.3.7.8 全体



第103図 VIII S-11.12.16.17.21.22 全体



2-1. 土坑・集石及び溝跡

①地区

VIII-S-2・3・7・8区

本調査区は、SD 01 以北に位置し、それ以南とは比高差 40cm 以上の高さがある。遺構は極めて稀少で、溝跡 1 本(SD 32)を検出したのみで、ほか 4 本程度の近世と考えられる暗渠排水施設を確認したに留まった。

溝状遺構

3 2号溝跡 (第 104 図・第 105 図)

時期： 古代以前

位置： VIII S - 7・8・11・12

長軸方向： N - 40° - E

規模： 長さ 23m10cm、幅 88cm、残存深度 18cm

性格： 不明

断面形態： タライ状 (底面に凹凸あり)

壁立ち上がり： 27 度程度の傾斜

埋土堆積： 黒色粘質土 (7.5Y2/1) の単純堆積

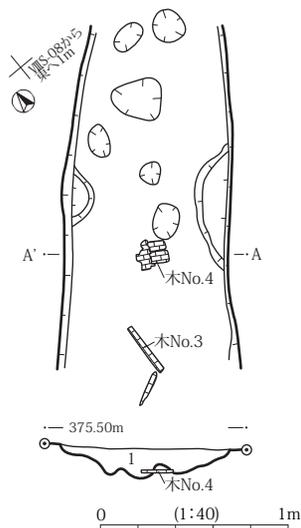
遺構重複： 暗渠に切られる

検出経過： 遺構検出面にて、黒色粘質土の落ち込みを確認する。本区には、近代以降と考えられる暗渠排水施設が無数に存在しており、埋没土から判断すれば、暗渠跡との区別は難しい。同様な状況は、SD 34 でも伺うことができた。

遺物出土状況： 埋土中から土器 4 片と、木製品 3 点が出土している。

底面の様子： 全体の形状は浅いタライ状を呈す。底面には直径 20cm から 40cm 程度の浅い凹みがあり、凹凸が激しい。

出土遺物： 土師器甕形土器と黒色土器 A 杯形土器 A 類の破片各 1 片、かわらけ及びはけ皿の破片各 1 片がある。木製品は 5 点が出土しており、角材、板状木製品、板材各 1 点がある。1 は第 104 図 No3 の角材で、両端が木目に対し直に切断されている。表面には工具の刃痕が入る。2 は第 104 図 No4 の板状木製品。薄板材を加工し、両端は直に切断される。中心部に 0.9cm の円孔がある。下端左側面部は刃状に薄く作りだされている。C14 炭素年代測定の結果は、454 ± 80 年 AD である。3 は薄板木片。2 の剥がれ材であろうか。他に棒材 1 点、板材木片 2 点が出土している。



SD 32 全景 (北東から)



土層断面の様子



木製品 No3 の出土状況



木製品 No4 の出土状況

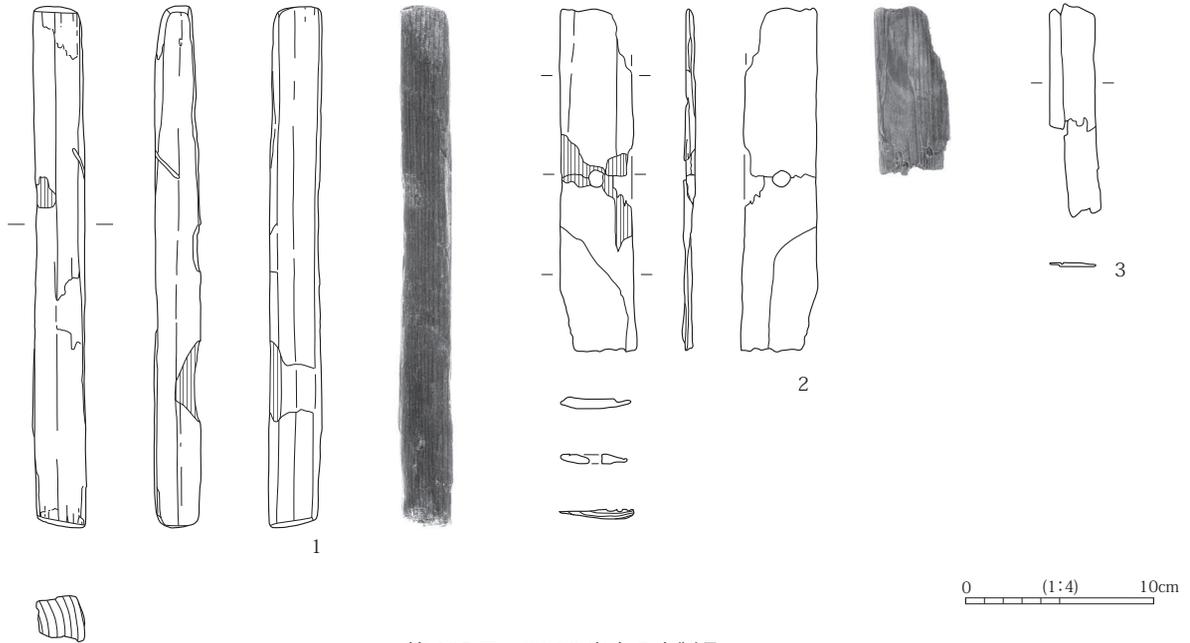
第 104 図 SD 32 の木製品出土部分

遺構名	土師器		黒色土器 A	陶器	数/総重量 (破片/g)
	甕	かわらけ	杯 A	はけ皿	
SD32 埋土	1	1		1	3/15.0
SD32 底			1		1/ 6.2

第 27 表 SD 32 出土土器組成

遺構名	板材	板材?	角材	棒材	板状木製品	総数
	SD 32 埋土	2	1	1	1	

第 28 表 SD 32 出土木製品組成



第 105 図 SD 32 出土の木製品

VIII-S-11・12・16・17・21・22区

本調査区も遺構は極めて稀少で、北側から続く SD 32 と土坑 4 基 (SK 431・SK 432・SK 449・SK 453) を検出したのみで、5 本程の暗渠排水施設を確認したに留まった。暗渠排水溝の認定は、明らかに近現代の所産と考えられる遺物を出土した例を基本としたが、中には遺物が出土せず、埋没土の状況から、それと判断した例も幾つかある。煩雑さを防ぐ目的で、それらの暗渠は図面から除いたが、必要に応じて原図・所見に立ちかえる必要がある。

土 坑

確認した土坑状の穴は 7 箇所ある。この内、径 20cm 程度以上の例を土坑と認定し、4 基に SK 番号を付した。S-16 区にて検出した SK 431 と SK 432 は、深さ 20cm を測る。西側 20cm の位置に南北に走る暗渠排水溝が存在しており、それと何らかの関連ある施設であろうか。出土遺物はない。S-11 区には、SD 32 と近接した北側に SK 449 と SK 453 がある。規模等 SK 431 及び SK 432 に近似するが、SK 453 は深さ 9.0cm と浅い。やはり出土遺物はない。

溝状遺構

34号溝跡 (第 106 図・第 107 図)

時 期： 中 世

位 置： VIII S-12・13

規 模： 長さ 11m70cm、幅 60cm、残存深度 11cm

断面形態： タライ状 (底面に凹凸あり)

長軸方向： N-67°-E

性 格： 不 明

壁立ち上がり： 30 度程度の傾斜

埋土堆積： 黒色粘質土（7.5Y2/1）の単純堆積

遺構重複： 暗渠に切られる

検出経過： 遺構検出面にて、他の暗渠排水施設とともに確認、調査した。

遺物出土状況： 埋土中からの土器6片と陶磁器片2片、木製品4点が出土している。

底面の様子： 全体の形状は浅いタライ状を呈すが、底面の凹凸は著しく、直径20cm程度の凹みが複数ある。

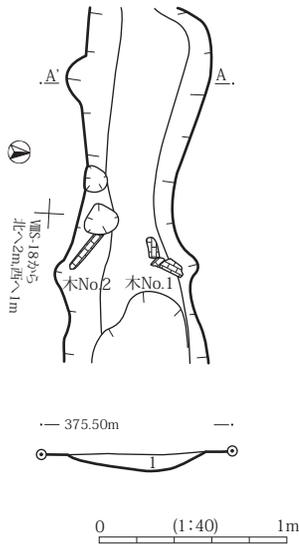
出土遺物： かわらけの破片1片、器種不明な微小破片4片等のほか、青磁椀の体部破片1片、すり鉢の破片1片が出土している。木製品は4点の出土がある。第107図1は櫛。板片の一侧縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に研ぎあげた横櫛。長方形のA型式。歯の破損は多いが、歯数は70枚前後と細かく挽きだす。頭の角が張るタイプか、丸みがつくタイプかは不明。炭素年代測定結果は、1044 ± 30年AD。2は薄板状の木製品の一部であろうか。欠損部多く、形状ははっきりしないが、上端縁が緩やかな円状を呈することから曲物等の容器の可能性はある。3も薄板状のため、2の一部の可能性はある。他に木片1点が出土している。

遺構名	土師器 かわらけ	不明	須恵器 杯B	磁器 青磁椀	陶器 すり鉢	数/総重量 (破片/g)
SD 34 埋土	1	4	1	1	1	8/72.6

第29表 SD 34 出土土器組成

遺構名	板材?	板状木製品	櫛	総数
SD 34 埋土	1	5	1	7

第30表 SD 34 出土木製品組成



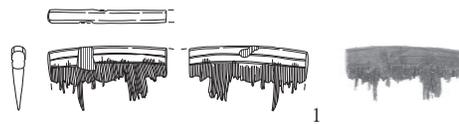
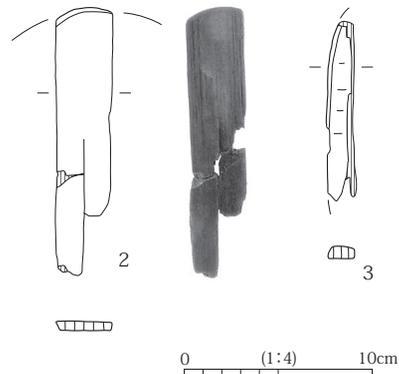
第106図 SD 34 の木製品出土部分



SD 34 全景（東から）



木製品 No1 の出土状況

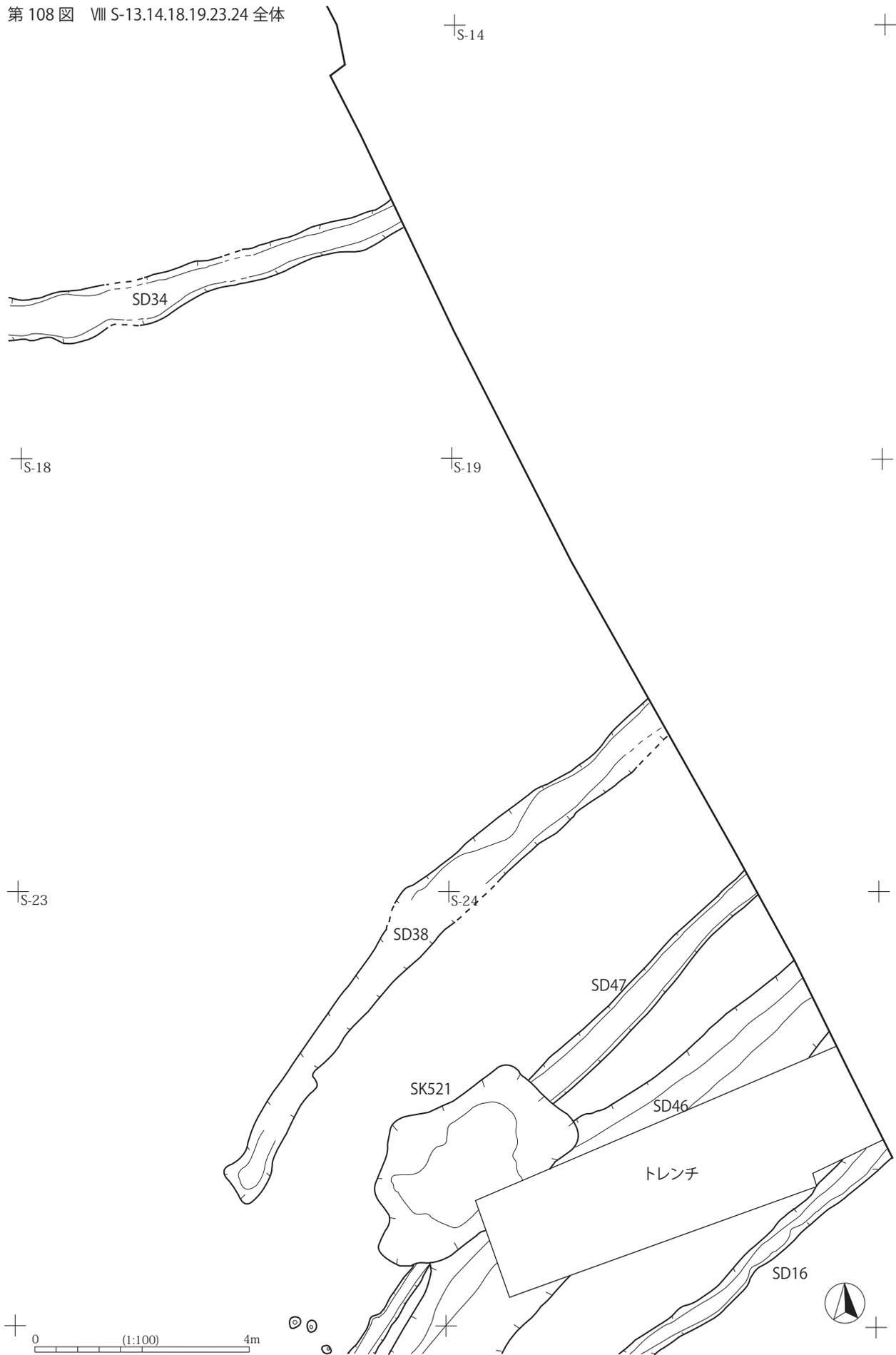


第107図 SD 34 出土の木製品

VIII-S-13・14・18・19・23・24区

本調査区も遺構は極めて少ないが、S-24区を中心に北東から南西方向に走る溝跡4本（SD 38・SD 46・SD 47・SD 16）を確認した。小さな穴状の落ち込みは8箇所ほど確認したが、規模等から土坑を推定して記録した例は、SK 441とSK 521の2基のみであった。以下に概略を示すが、SD 46はS-24区からW-24区まで、①地区から②地区を斜めに突き抜ける長い溝跡であり、145ページで扱う。

第108図 VIII S-13.14.18.19.23.24 全体



土 坑

土坑状の落ち込みとして記録した穴は2箇所ある。X-3区の3基は、いずれも小さな落ち込みで、掘り方も不明瞭であった。遺構としての認定要素に欠けるが、SK番号を符号せず、第108図に位置のみを記載した。またSK 521は直径410cmを測る大きな土坑であるが、深さが10cm程度と浅く、凹地状を呈している。人為的な掘り込みの可能性は低いと判断できる。



SK 521 土層断面（東から）

溝状遺構

38号溝跡

時 期： 不 明

位 置： VIII S - 18・19・23

長軸方向： N - 50° - E

規 模： 長さ10m19cm、幅90cm、残存深度12cm

性 格： 暗渠の可能性あり

断面形態： タライ状（底面に凹凸あり）

壁立ち上がり： 61度程度の傾斜

埋土堆積： 黒色粘質土（7.5Y2/1）の単純堆積

遺構重複： 東西方向に走る暗渠様の溝に切られる

検出経過： 遺構検出面にて、黒色粘質土の落ち込みを確認。暗渠排水施設との区別が難しい。

遺物出土状況： 埋土中から、土師器甕形土器の体部破片1片と、弥生後期の甕形土器の小破片1片が出土した。

底面の様子： 全体の形状は浅いタライ状を呈す。底面には直径20cmから40cm程度の浅い凹みがあり、凹凸が激しい。

47号溝跡

時 期： 8世紀前半以前（古代2期以前）

位 置： VIII S - 19・23・24、X-3

長軸方向： N - 37° - E

規 模： 長さ44m30cm、幅1m94cm、残存深度24cm

性 格： 不 明

断面形態： タライ状で南側は緩やかに立ちあがる

壁立ち上がり： 北側45度程度、南側23度程度の傾斜

埋土堆積： 黒褐色粘質土（2.5YR3/1）の単純堆積で、砂粒を多く含む

遺構重複： SB 08、SD 01、ST 17、SK 339ほかの遺構に切られる。SD 11との切り合い関係は判然としないが、SD 11を切るとの所見がある。

検出経過： SD 46と同時に検出した。SD 01付近でSD 46と重なり、それ以南では確認できなくなるため、同一の溝跡である可能性がある。SD 01との切り合い関係は不明である。8世紀前半と考えられるSD 11を切るとの所見があるが、SD 46と同一であれば、切り合い関係に矛盾が認められる。

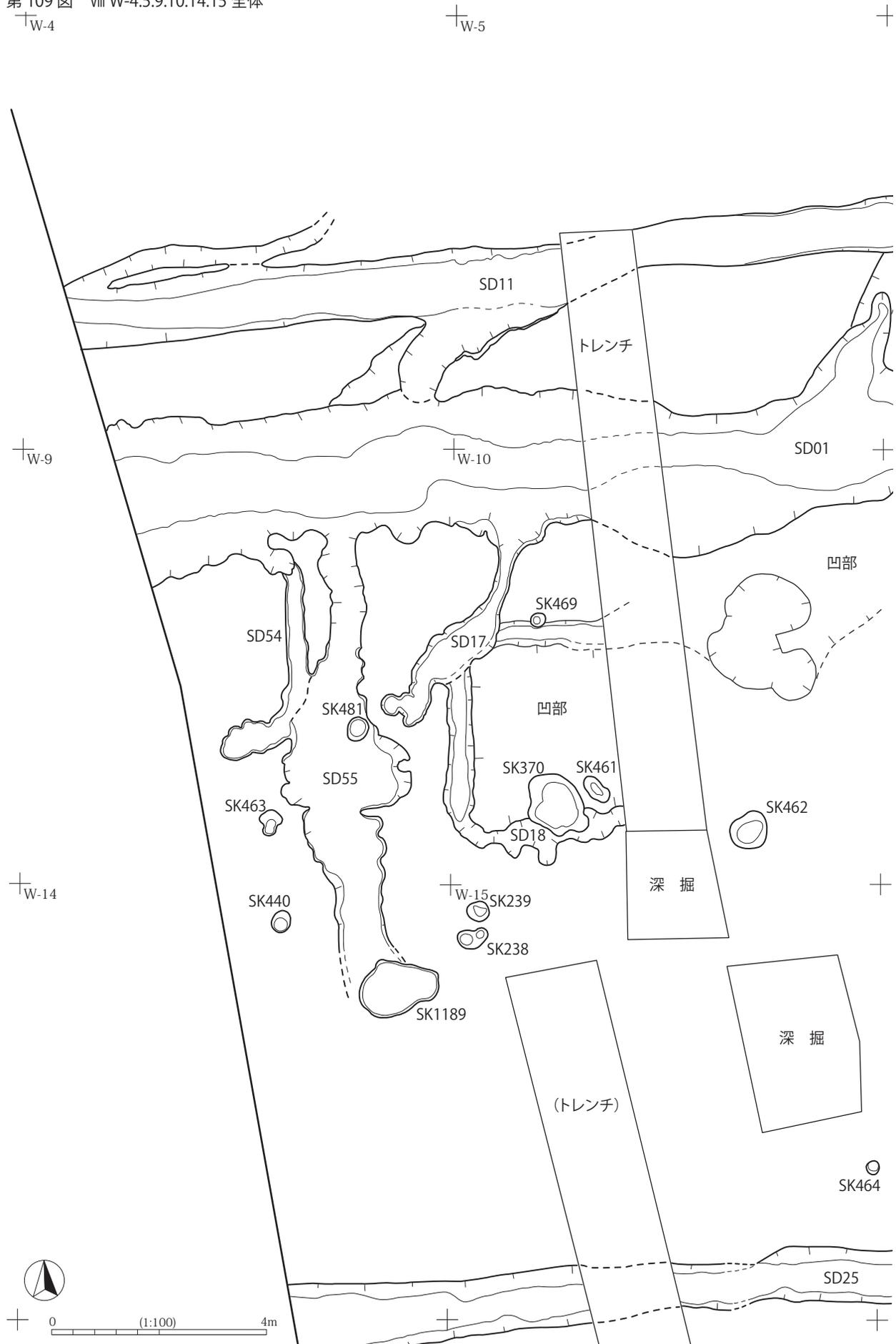
遺物出土状況： 埋土中から須恵器の小破片1片が出土している。

底面の様子： 全体形状は浅いタライ状で、南側は、緩やかに立ち上がる。



SD 68・46・47の全景（東から）

第109図 VIII W-4.5.9.10.14.15 全体



②地区

VIII-W-4・5・9・10・14・15区

本調査区は、遺跡を南北に大きく区切る東西方向の大溝、北側のSD 01と南側のSD 03に挟まれた②地区の北西端に位置する。SD 01と重複した幾つかの小溝4本（SD 17・SD 18・SD 54・SD 55）と土坑11基（SK 238・SK 239・SK 370・SK 440・SK 461～SK 464・SK 469・SK 481・SK 1189）を確認したに留まり、遺構密度の低い区である。主だった遺構につき、以下に概要を示す。

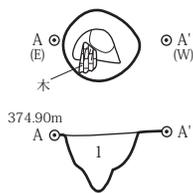
土坑

239号土坑（第110図）

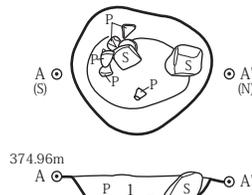
平面形状は円形で、断面形は有段のロート状の形態である。規模は40cm×37cm、深さは30cmを測る。埋土は単層で粘性の強い灰色粘土(N3/1)。埋土中から割り材の木片1点が出土している。8.2cm×3.0cm×2.1cmを測る。柱材・礎板材等、基礎材の木片であろうか。樹種はコナラ亜属コナラ節である。

462号土坑（第111図）

平面は楕円形で、断面形は底部がほぼ平坦なタライ状を呈する。規模は75cm×66cm、深さ15cmを測る。埋土は単層で粘性がやや強い褐灰色砂質土(10YR5/1)。埋土中には20cm前後の角礫が混在する。遺物は黒色土器Aの杯形土器A類体部破片5片と須恵器杯A類の口縁部破片2片が出土している。時期は古代。



SK 239 半截状況（北から）



SK 462 全景（東から）

第110図 SK 239 木製品出土状態

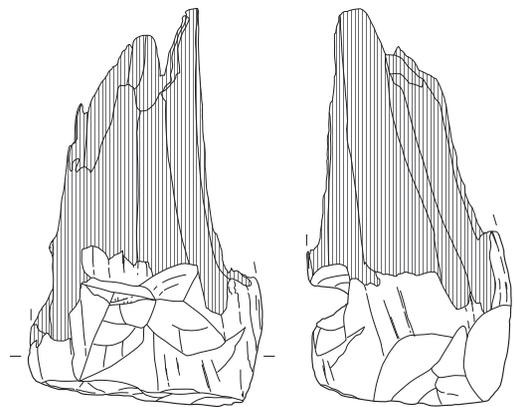
第111図 SK 462 遺物出土状態

469号土坑（第112図）

平面は円形で、砲弾状の断面形態を呈する。規模は29cm×26cm、深さは38cmを測る。埋土は単層で粘性の強い暗褐色土(10YR3/3)。出土遺物は柱材1点があり、クリの丸木芯持ち材。柱材分類D b。材の形状は多角形状で、底面に斧痕跡が明瞭に残る。底面の角には斜め方向の削り痕がある。側面部及び上部は腐食が著しい。



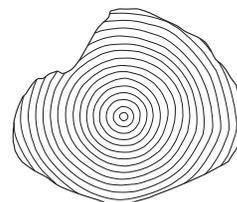
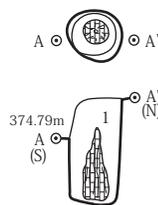
SK 469 全景



1

481号土坑（第113図・第114図）

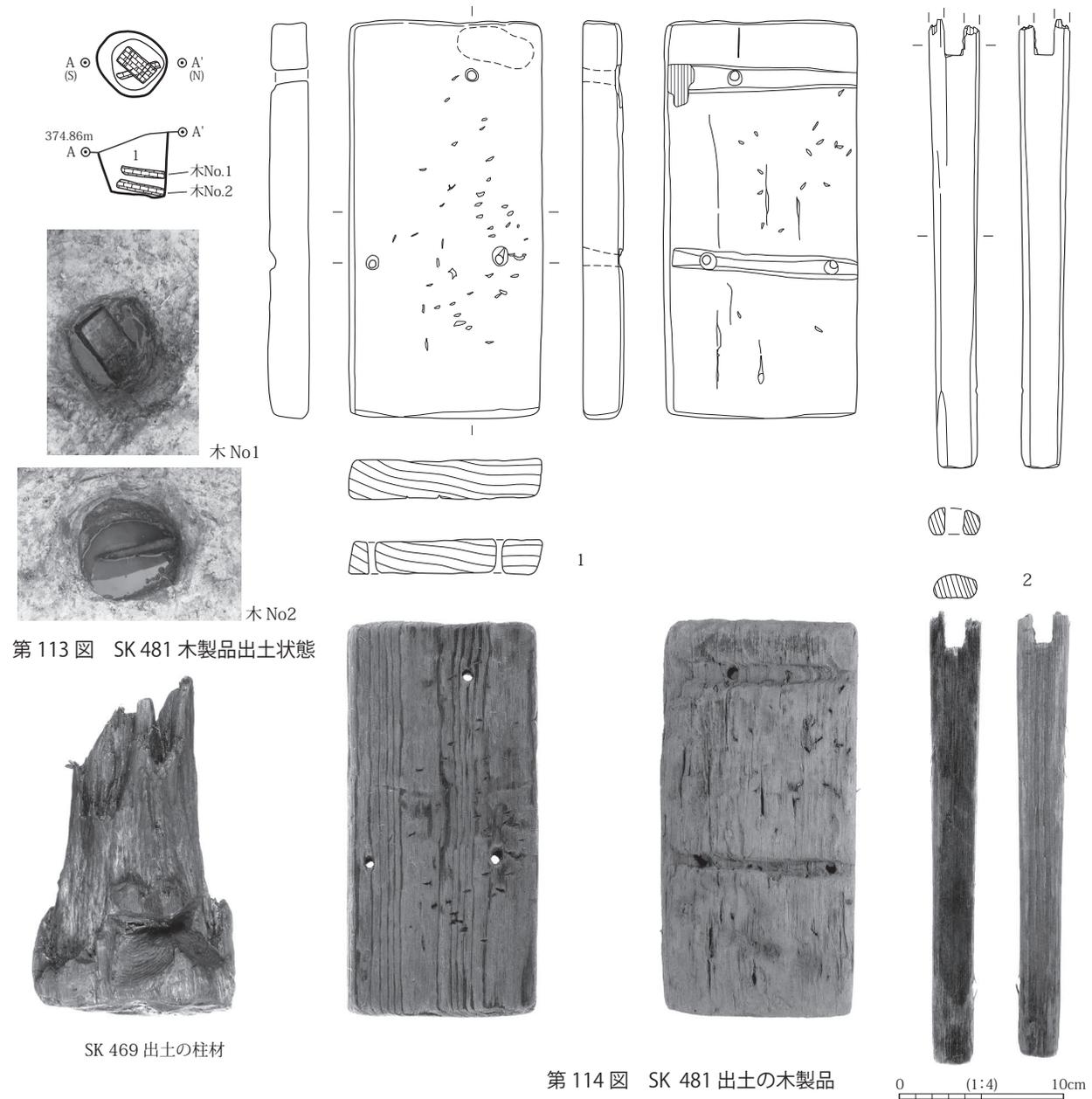
平面形は円形状で、断面形は底部平坦なタライ状を呈する。規模は44cm×38cm、深さ38cmを測る。SD 55と切り合うが新旧関係は不明である。底面近くから下駄（第114図1）、棒状木



0 (1:6) 10cm

第112図 SK 469 柱材出土状態と柱材

製品（第114図2）が各1点出土している。下駄は縦木取りで24.0×11.8×2.5cm、サワラ材。形状は長方形で、前壺が僅かに右側に位置することから左足用か。下駄の歯部分が欠落している。棒状木製品は削り出し材で、26.9×3.0×2.0cm。樹種はサワラ材である。一端はホゾ孔部分から割れたと観られる痕跡が残る。ホゾ孔部分から下端にかけて幅が減じ、断面形は表面にやや丸みをつけて加工していることから、容器等の取っ手部分と考えられる。時期は古代か。



第113図 SK 481 木製品出土状態

第114図 SK 481 出土の木製品

溝状遺構

17号溝跡

W-9区及び10区にかけて検出した。SD 01と重複するが、切り合い関係がつかめず、同一遺構であるか、別遺構であるか判断がつかない。規模は長さ400cm×幅60cm、深さ10cm程度を測る。埋土中から土師器甕形土器体部破片1片が出土。

18号溝跡

W-9区及び10区にて検出した。東側が判然としないが、方形状に巡る溝と考えられる。北西隅は

SD17 に切られる。この溝に囲まれた内部は凹地状を呈し、竪穴式建物等の遺構を考えたが、調査では判断がつかなかった。溝埋土からの出土遺物はないが、凹地部からは須恵器甕形土器 D 類の口縁部破片 2 片、杯形土器 A 類底部破片 1 片、土師器甕類、灰釉陶器壺形土器体部破片 1 片などが出土している。規模は一辺の長さ 350cm × 幅 50cm、深さ 10cm 程度を測る。

5 4 号溝跡

W-9 区にて検出した。南北方向に長く走り、SD 01 と重複関係にあるが、切り合い関係は不明である。同方向に走る SD 55 と一部重複するが、埋土に違いは確認できず、切り合い関係は不明。長さ 400cm × 幅 35cm、深さ 10cm 程度を測る。埋土から、須恵器杯形土器 A 類の底部破片 2 片があり、ヘラ切り離し調整と糸きり離し調整である。

5 5 号溝跡

W-9 区及び 14 区にかけて検出した。南北方向に走る溝跡で、北端は SD 01 と重複する。埋土に差異が認められず、切り合い関係は不明である。また西側の一部も SD 54 と重複するが、切り合い関係は不明。規模は長さ 820cm × 最大幅 240cm、深さ 10cm 程度を測る。出土遺物はない。

1 1 号溝跡 (第 115 図・第 116 図)

時期： 8 世紀前半 (古代 2・3 期)

位置： VIIIW-4・5、X-1~5

長軸方向： N-87°-E

規模： 長さ 51m72cm、幅 1m40cm、残存深度 17cm

性格： 排水施設か？

断面形態： タライ状 (底面に凹凸あり)

壁立ち上がり： 47 度程度の傾斜

埋土堆積： 黒色粘質土 (10YR2/1) の単純堆積

遺構重複： SD 01 に切れ、SD 47 を切る。SD 16 と SD 46 との切り合いは不明。

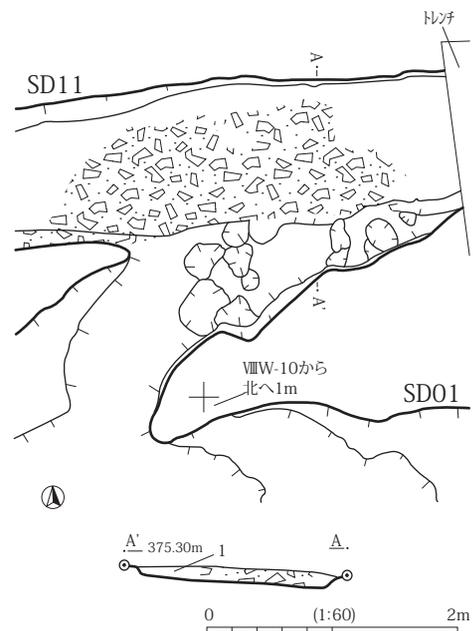
検出経過： ②区の遺構検出面にて、黒色粘質土の落ち込みを確認した。落ち込みは SD 01 の 150cm 程度北側に平行して認められ、SD 01 との関連を想定して調査を開始した。SD 01 の溝幅が拡大した X-1 区では、SD 01



SD11 西端の礫出土状態 (東から)



SD 11 西端の全景 (東から)



第 115 図 SD 11 礫出土部分

の埋土上層部が、本跡を切っていたことから、一応の新旧関係を認め、完掘に至った。しかしながら、SD 01 の上部堆積層のことであり、「埋土のかぶり」の可能性も考える必要がある。
 遺物出土状況： 埋土中から土器破片 22 片と木製品 18 点が出土した（第 31 表・第 32 表）。特記すべき資料として、拳大に破碎されたサイコロ状の礫がまとまって出土した（第 115 図）。

底面の様子： 全体の形状は浅いタライ状を呈す。底面には直径 20cm から 40cm 程度の浅い凹みがあり、凹凸が激しい。

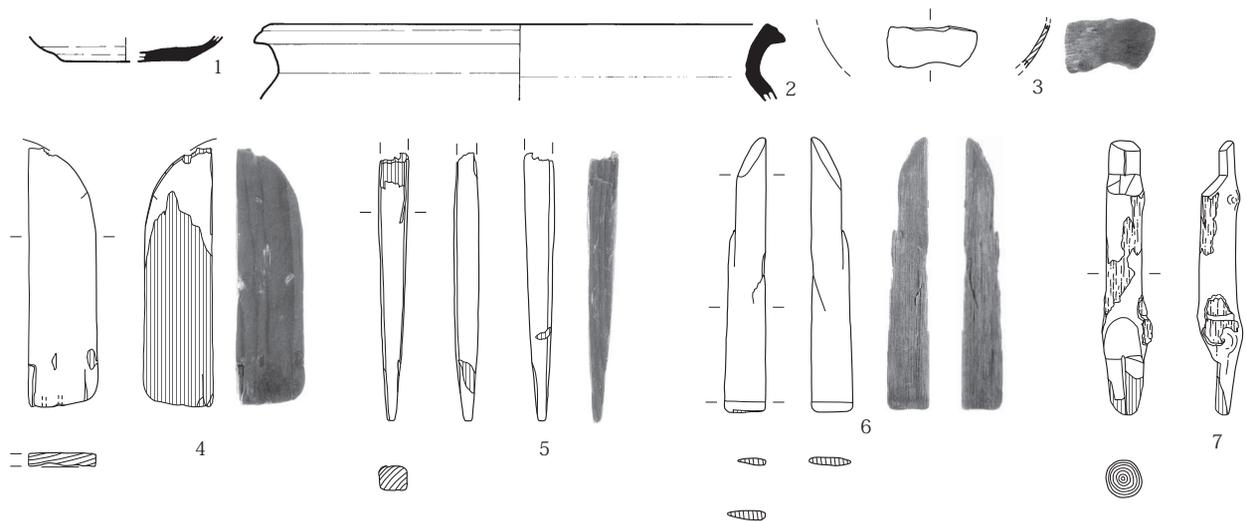
出土遺物： 埋土上層から須恵器の杯形土器 A 類底部 1 片と杯 B 類体部 2 片、黒色土器 A の杯 A 類体部 1 片、土師器の甕形土器体部 2 片の出土がある。いずれも小破片。埋土中からは、須恵器の甕形土器 E 類の口縁部破片 2 片と A 類体部 1 片、杯 A 類の口縁部 1 片に蓋のつまみ部 1 片、黒色土器 A の器種判別不能の土器破片 2 点、土師器甕体部破片 2 片、白色磁器の椀体部 1 片の出土がある。やはり、小破片である。1 はヘラ切り離しによる杯 A 類であり、底径 16cm を測る。2 は甕 E 類とした口縁部破片であるが、残存率が極めて低く、ロクロ整形と器厚から、短頸壺 D 類の可能性もある。図示してないが、11 世紀以降の白磁椀の体部破片 1 片がある。木製品は 18 点が出土している。その半数は板材、割材の木片であり、形状が不明なものが多い。3 は椀（漆器か）の一部。残存する湾曲した木片から椀の体部破片と観られる。両面に黒色の付着物（漆であろうか）が残る。4 は曲物の一部か。平面形状は円形ではないが、薄板状で下端には釘穴が 2 箇所残る。5 は角状木製品（1004 ± 30 年 AD）。一端は欠損。先端は加工され角頭状を呈する。6 は刀形木製品か。薄板の上端は斜めに切断し、片側から幅 4 mm 前後の刃区をつくりだす。下端は木目に対し直に切断される。完形品。7 は棒状木製品。一部に樹皮が残るが、両端部が対称に段状に削り落とされる。

遺構名	土師器			黒色土器 A					須恵器					磁器	数 / 総重量 (破片 / g)
	甕	甕 A ?	甕 E	杯 A	杯 A	杯 B	蓋 B	甕 A	甕 D	甕 E	椀				
SD 11 検出面				1		3				1	1			5 / 33.8	
SD 11 埋土	2				2		1	1				2	1	10 / 258.0	
SD 11 埋土上層		1	1	1	1	2								6 / 44.2	
SD 11 溝分岐点				1										1 / 22.9	

第 31 表 SD 11 出土土器組成

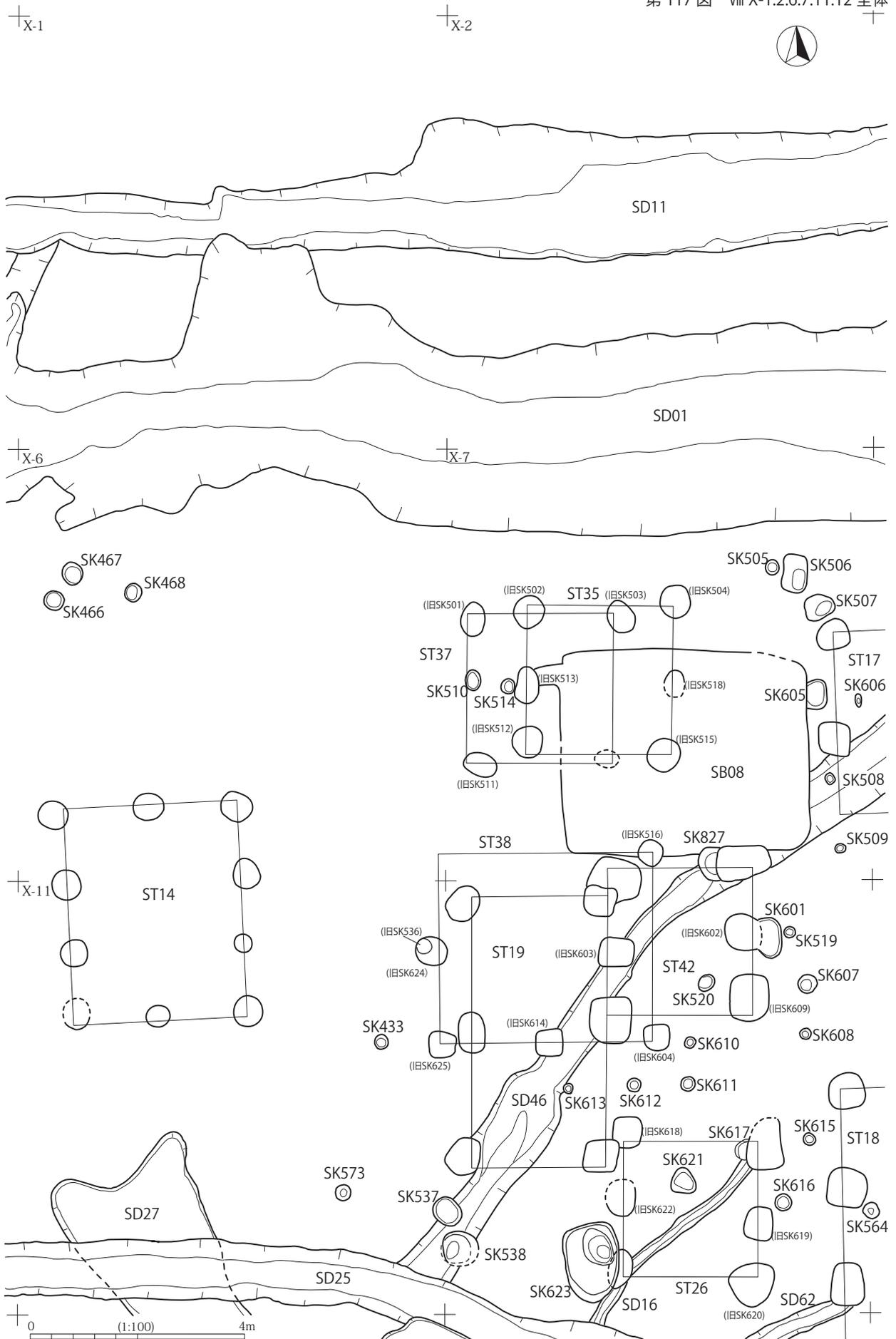
遺構名	板材	角材 (角状木製品)	棒材	割材	割材?	棒状木製品	曲物	刀形	漆器(椀)	総数
	SD 11 検出面	1		4		1		2		
SD 11 埋土	10	1	4	6	2	1	2	1	1	28

第 32 表 SD 11 出土木製品組成



第 116 図 SD 11 出土の土器・木製品

第 117 図 VIII X-1.2.6.7.11.12 全体



VIII-X-1・2・6・7・11・12区

本調査区は、遺跡を南北に大きく区切る東西方向の大溝、SD 01 の南側に隣接した地点である。SD 01 と重複する遺構は SD 11 のみであり、土坑等との切り合いはない。東側に進むに従い遺構密度が高くなる。X-7区に竪穴式建物跡 (SB 08・P304) 1軒を検出した。南北方向に斜走する SD 46 及び SD 16、東西に走る SD 25 を検出、土坑に関しては 76 基を確認した。土坑の内、その配列から 9 棟の掘立柱建物跡を想定できた。主だった土坑につき、以下に概要を示す。

土 坑

VIII X—6

4 6 8 号土坑 (第 118 図)

SD 01 南の隣接部に、平面形状円形で、断面形砲弾形を呈する柱状の土坑 3 基がある。SK 466、SK 467、SK 468 で、それらの規模はほぼ同大。SK 468 は、径 32cm、深さ 24cm を測る。埋土は、いずれも単層 (10YR5/1)。

VIII X—7

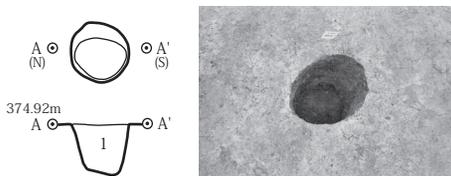
SB 08 と南北方向の溝 SD 46、掘立柱建物跡 ST 37 (P459)、ST 35 (P454) を検出した。土坑は SK 505、SK 506、SK 507、SK 508、SK 509、SK 510、SK 514、SK 605、SK 606、SK 827 を確認した。

5 0 9 号土坑 (第 119 図)

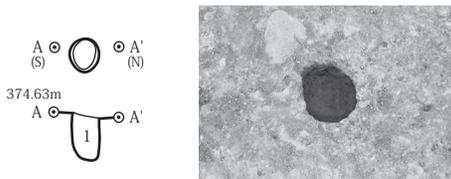
平面形は円形を呈し、断面形は砲弾状である。規模は 20cm × 16cm、深さ 24cm を測る。埋土は単層 (10YR2/3) で炭化物を僅かに含む。遺物は須恵器の蓋形土器及び壺形土器の破片が出土している。時期は古代。

8 2 7 号土坑 (第 122 図)

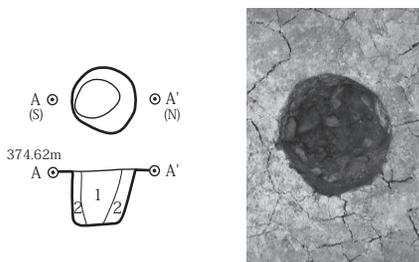
ST 42 の Pit1 に西側を半分程度破壊され、SD 46 及び SB 08 を破壊する。残存規模は 64cm × 29cm、深さ 26cm を測る。埋土は自然堆積で 2 層に分層可能。下層は黒褐色土 (10YR2/3)、上層は黒褐色土に礫を含んだ層である。出土遺物はない。



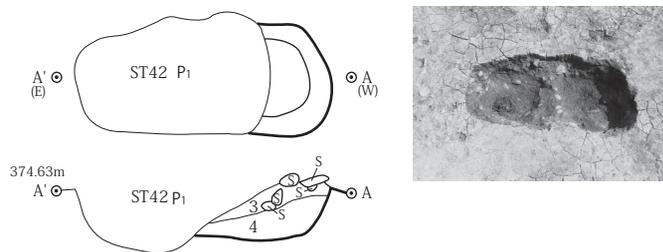
第 118 図 SK 468 の全景 (西から)



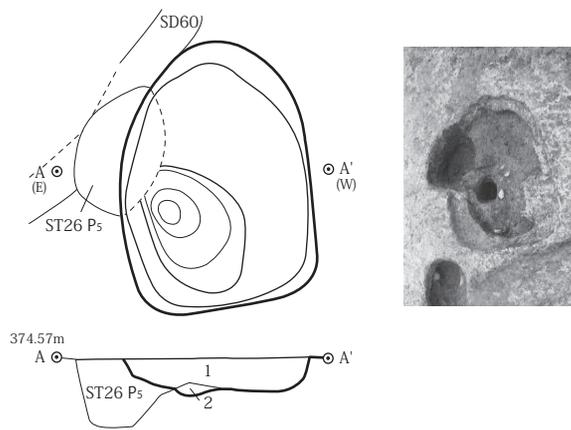
第 119 図 SK 509 の全景 (東から)



第 120 図 SK 607 の全景 (東から)



第 122 図 SK 827 の全景 (北から)



第 121 図 SK 623 の全景 (北から)

VIII X—1 1

南北方向のSD 27、東西方向に走るSD 25 及びSB 14 を検出した。X—6 区同様に土坑の密度は低く、SK 433、SK 537、SK 573 の3 基のみを調査した。検出面より緑釉陶器の皿小破片1 点が出土。

VIII X—1 2

隅丸方形、隅丸長方形の形状を呈する土坑が多く、そのほとんどが掘立柱建物跡 ST 18 (P409)、ST 19 (P412)、ST 26 (P428)、ST 38 (P460)、ST 42 (P464) に組成する。土坑ではSK 519、SK 520、SK 538、SK 564、SK 601、SK 607、SK 608、SK 610～SK 613、SK 615～SK 617、SK 621、SK 623 がある。6 0 7 号土坑 (第 121 図)

平面形は円形、断面は深いタライ形を呈する。規模は 38cm × 36cm、深さは 26cm を測る。埋土は複層で、10YR3/2 黒褐色土を下層に堆積する。出土遺物はない。

溝状遺構

4 6 号溝跡 (第 123 図)

時 期： 8 世紀前半以前 (古代 2 期以前)

位 置： VIII S—23・24、W—20・25、X—3・4・7・8 長軸方向： N—46°—E

規 模： 長さ 44m30cm、幅 1m94cm、残存深度 24cm 性 格： 不明

断面形態： タライ状で底面凸形 壁立ち上がり： 22 度程度の傾斜

埋土堆積： 黒色粘質土 (10YR3/1) の単純堆積で、下部に砂粒を多く含む。

遺構重複： SB 08、SD 01、ST 17、SK 339 ほかの遺構に切られる。SD 11 との切り合い関係は判然としないが、SD 11 を切るとの所見がある。

検出経過： ①から②区遺構検出面にかけて、やや砂質の黒色粘質土の落ち込みを確認した。落ち込みはSD 01 ほか多くの遺構に破壊されており、本遺跡で最も古い時期に構築された可能性がある。調査区を北東方向から南西方向へ 40m ほど縦走して構築されており、地区ごとに完掘した。確認の掘り込みは浅く、横位断面が凸形を呈する。

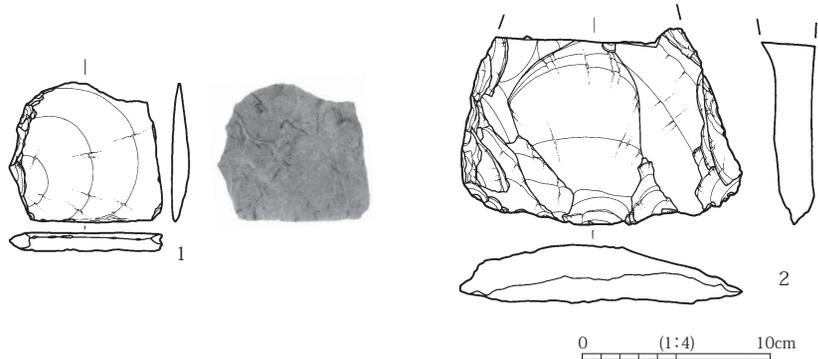
遺物出土状況： 埋土中からの土器の出土はなく、時期決定の根拠は希薄である。遺構間の切り合い関係から、古代以前と推定したい。

底面の様子： 全体形状は浅いタライ状で、中央部がやや小高く盛り上る。

出土遺物： 検出面にて、弥生時代後期箱清水式の壺形土器頸部破片 1 片と、古代土師器杯形土器底部破片 1 片、甕形土器体部破片 1 片、中世内耳鍋の体部破片が出土した。埋土中からは、石器 2 点の出土があった。1 は S—24 区にて出土した砂質泥岩材の打製刃器である。横長剥片の両端部を折断し、刃部のみを明瞭に研磨している。2 は X—4 区にて出土した頁岩材の石鍬の刃部破片である。刃幅 14.8cm を測る大形品。



SD 46 の全景 (東から)



第 123 図 SD 46 出土の石器

Ⅷ-X-3・4・8・9・13・14区

本調査区は、南北方向に走る大溝、SD 01 の南側に隣接した地点である。SD 01 と重複する遺構は SD 16、SD 46、SD 47。土坑等との切り合いはない。X-9 区にて SD 26 を検出できたが、状況から判断して、SD 01 と同一の溝跡（ただし、この場合は人工的掘削ではなく、溜り状の凹み）と考えられる。柱状の土坑は 107 基を確認した。配列・規模から、9 棟の掘立柱建物跡を考えた。結果、56 基の単独土坑が確認できたこととなった。X-3 区で 1 基（SK 293）、X-4 区で 1 基（SK 297）、X-8 区で 13 基（SK 296・299・300・329・334・337・338・349・448・523・524・526・532）、X-9 区で 19 基（SK 273・275～279・291・298・302・313・425・427・428・435・445・446・447・451・1203）、X-13 区で 10 基（SK 303・304・306・308・309・531・533・535・562・563）、X-14 区で 12 基（SK 316・272・264～270・317・320・327）がある。この他に、竪穴式建物跡が 2 軒（SB 04・SB 05）、焼土の塊（SF 04～06）が 3 箇所を確認できた。主だった土坑につき、以下に概要を示す。

土 坑

ⅧX-8

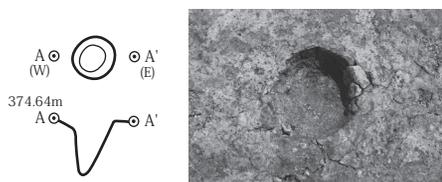
隣接して北側に SD 01 が位置する。本区から X-9 区にかけて極めて遺構密度が高い。SB 05、SD 16、SD 46 を検出し、ST 17（旧 SK 339・SK 346・SK 347・SK 522・SK 336 さらに旧 SK 335・SK 452 も含むか・P406）及び ST 34（旧 SK 525・SK 340・SK 348 さらに SK 305・SK 310 も含むか・P454）を設定した。

338号土坑（第125図）

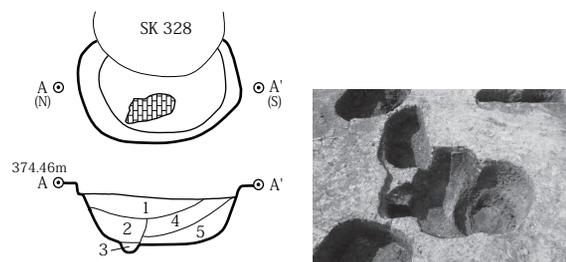
平面形は隅丸方形のやや不整形な形状を呈する。断面に段を有する形態で、埋土は黒褐色土（10YR2/3）を基調とした2層が水平堆積する。中央部には明瞭な柱痕跡1層（10YR4/4 褐色土）が残る。出土遺物はないが、時期は古代であろうか。

349号土坑（第126図・第127図）

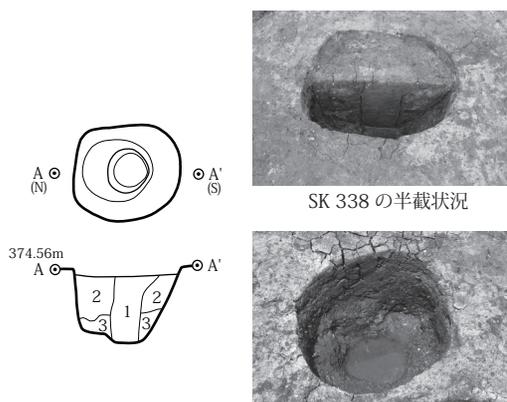
SK 328 に破壊される。平面は隅丸方形の楕円で、断面底部に僅かに段を有するタライ状。埋土は黒褐色土（10YR2/3）を基調とする。埋土中から分割材が1点出土している。板状であるため、礎板（礎板



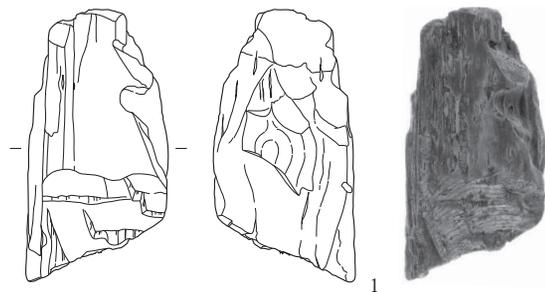
第128図 SK 526の全景（南から）



第126図 SK 349の全景（西から）

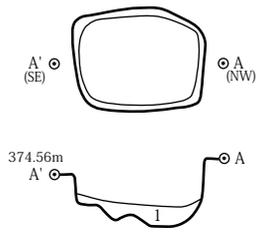


第125図 SK 338の全景（西から）

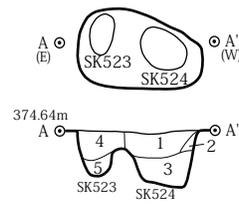


第127図 SK 349出土の板材

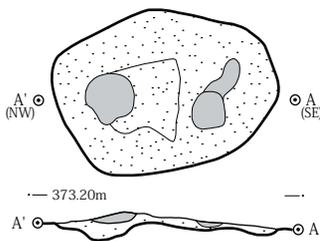
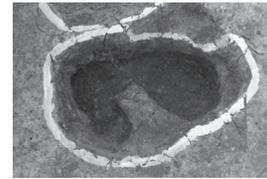
0 (1:6) 10cm



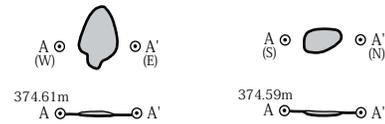
第130図 SK 532の全景（東から）



第129図 SK 523・SK 524の全景（南から）



第131図 SF 04の全景（北から）



第132図 SF 05・SF 06の全体

分類 Db) と判断した。長さは短く、製材はしていない。何らかの補強材とも考えられるが、基礎材には違いないであろう (21.5 × 11.8 × 7.5cm、樹種はケヤキ材)、時期は古代か。

5 2 3 ・ 5 2 4 号土坑 (第129図)

SK 523 と SK 524 は、切り合い関係にある 2 基の土坑と考えられるが、同時に調査したため、その関係ははっきりしない。SK 523 の断面は砲弾状で、SK 524 は、底部がタライ状である。両土坑とも黒褐色土 (10YR3/1) を基調とした 2 層の堆積。出土遺物はない。時期は古代か。

5 3 2 号土坑 (第130図)

平面は隅丸長方形で、断面に浅い窪みがある。SD 46 を破壊する。規模は 67cm × 55cm、深さ 37cm を測る。出土遺物はないが、時期は古代であろう。

4 号焼土塊 (第131図)

SB 05 検出面より、やや高位置にて確認した焼土分布で、SB 05 に伴う可能性が高い。100cm 四方に広がる焼土の分布と、マウンド状の塊で、焼土塊として扱った。

5 号焼土塊 (第132図)

SK 532 に隣接し、SD 46 上面にて確認した。検出状況から判断すると、SK 532 に伴う可能性が高い。赤褐色 (5YR4/8) で、堅緻、炭化物を僅かに含む。30cm × 20cm、厚さは 3cm。伴出遺物はない。

6 号焼土塊 (第132図)

SK 334 に隣接し、21cm × 13cm、厚さ 3.0cm の範囲に楕円形状に検出した。色調は赤褐色 (5YR4/6) を呈し、黄褐色土の粒子を含む。出土遺物はない。

VIII X—9

本区は X—8 区に続き土坑が密集して確認できた。ST 13 (P392)、ST 46 (旧 SK 330・SK 424・SK 274・SK 301 さらに旧 SK 291・SK 452 も含むか・P470) 及び ST 47 (旧 SK 312・SK 295・SK 280・SK 331・P471) を設定する。

2 7 6 号土坑 (第133図)

平面形は楕円形を呈し、底部が平坦なタライ状。規模は 32cm × 24cm、深さ 12cm を測る。SK 275 土坑を破壊する。出土遺物はない。時期は古代か。

277号土坑 (第134図)

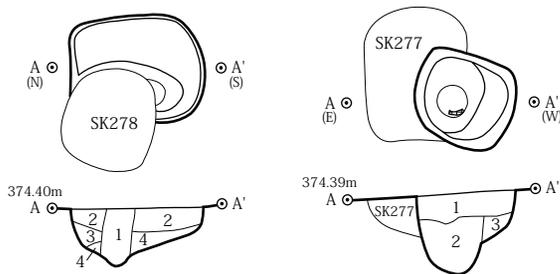
平面は方形で、断面は底部に段を有する形態。68cm × 54cm、深さ 30cm を測る。埋土の中心部に柱痕が残る。柱痕部分の埋土は暗褐色土 (10YR3/3)。SK 278 に破壊される。出土遺物はない。

278号土坑 (第134図)

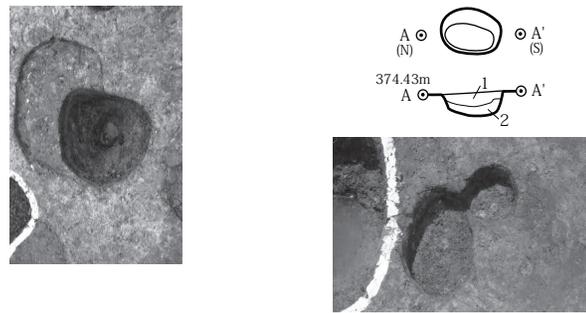
SK 277 を破壊する。埋土は3層からなり、柱痕部分は炭化物を僅かに含む暗褐色土。木製品は割材1点 (7.1 × 4.2 × 1.6cm) と板材1点 (4.2 × 0.4 × 0.3cm) が出土している。時期は古代か。

427号土坑・428号土坑・1203号土坑 (第136図)

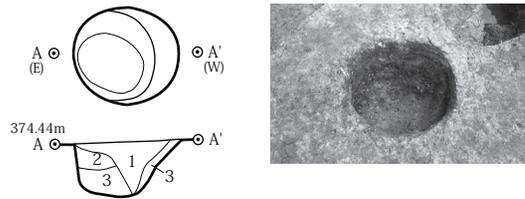
同時に検出調査し、3基の切り合い関係は判然としなかった。SK 427がSK 1203を破壊していたようだ。SK 427からは須恵器杯A類と土師器甕の破片が出土している。SK 1203からは埋土上面にて長さ30cm大の扁平礫が出土した。南へ4m50cmにあるSK 451も、これと同様な状況で検出した。掘立柱建物跡の礎石を想定したいが、同様な土坑は2基のみであったため、土坑として扱った。時期は古代か。



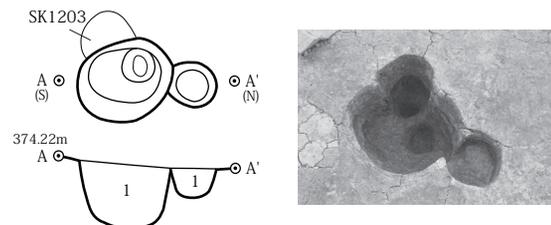
第134図 SK 277・SK 278の全景



第133図 SK 276の全景



第135図 SK 296の全景 (北から)



第136図 SK 427・SK 428・SK 1203の全景 (東から)

VIII X—1 3

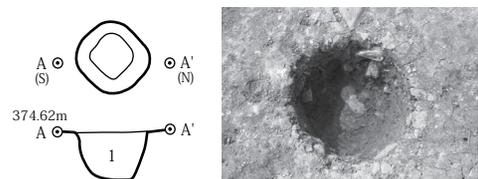
本区にて確認できた柱状の落ち込みは、X—8区・9区に比べてかなり少なく、その多くは配列から掘立柱建物跡と認定できた。ST 18 (P409) と ST 24 (P424) を検出・調査した。また遺構検出面では、近現代の暗渠排水施設を2条確認した。

531号土坑 (第137図)

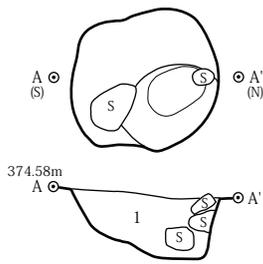
平面は方形状を呈し、断面は深いタライ状で底部はほぼ平坦である。規模は38cm × 38cm、深さは26cmを測る。黒褐色土 (10YR3/1) の単層。出土遺物はない。

533号土坑 (第138図・第139図)

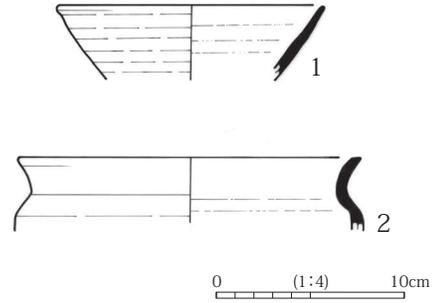
平面形は不整楕円形で、底部壁面に段を有する。規模は79cm × 74cm、深さ33cm。埋土中に径10cm～30cm前後の礫が混じる。須恵器杯A類体部 (第139図1)、杯B類底部破片、鉢あるいは短頸壺B類の口縁部 (第139図2) が出土している。時期は古代7期以前に位置付けられるか。



第137図 SK 531の全景 (東から)



第138図 SK 533の全景（東から）



第139図 SK 533出土の土器

VIII X-1 4

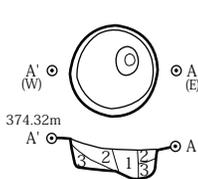
柱状の落ち込みは、ほとんど確認できなかった。東側のX-15区よりにST 40を検出した。

266号土坑（第140図）

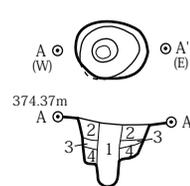
平面は円形で、断面は底部壁面に段を有する。埋土の中央部は柱痕状を呈し、黒褐色土（10YR2/3）が堆積していた。出土遺物はない。

269号土坑（第141図）

有段形で、中心部に柱痕状の掘り込みが明瞭にある。規模は38cm×29cm、深さ36cmを測る。柱痕部の埋土は10YR3/3の暗褐色土。その外側の埋土は黒褐色土（10YR3/2）が水平に堆積。出土遺物はない。



第140図 SK 266の全景（南から）



第141図 SK 269の全景（南から）



溝状遺構

16号溝跡

時期： 8世紀前半以前か？（古代2期以前）

位置： VIII S-24、X-3・4・8

長軸方向： N-45°-E

規模： 長さ23m30cm、幅40cm、残存深度7cm

性格： 不明

断面形態： 浅いタライ状

壁立ち上がり： 23度程度の傾斜

埋土堆積： 黒色粘質土（10YR3/1）の単純堆積

遺構重複： SD 11を切り、SD 01及びSB 05に切られる。

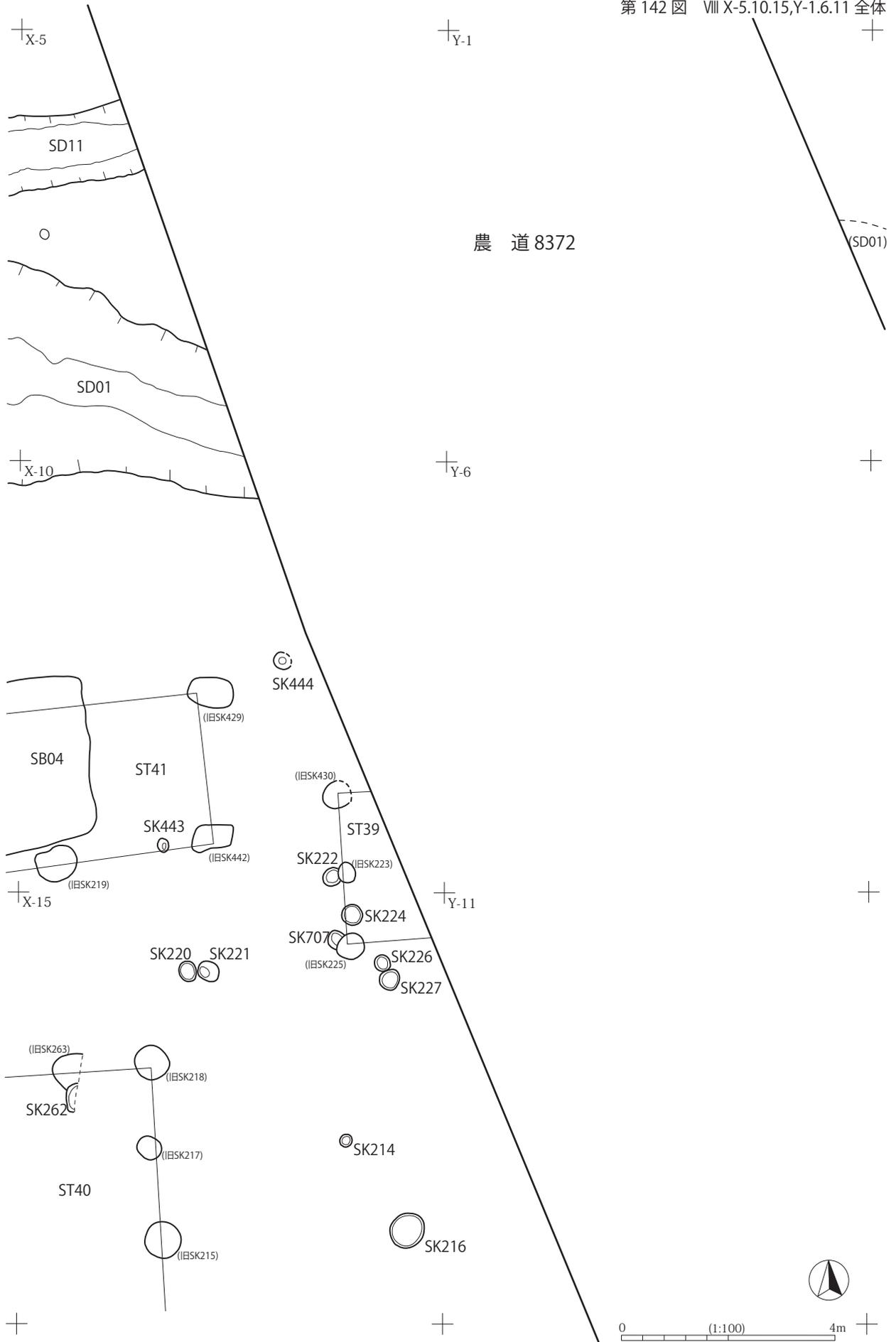
検出経過： ①から②区遺構検出面にかけて、SD 46及びSD 47に平行した黒色粘質土の落ち込みを確認、溝跡を想定し調査した。SB 05より南では連続的に検出できなかったが、X-21区で再び確認した。SD 46とほぼ平行に、遺跡を北東から南西方向にかけて縦断していることから、SD 46と同様な機能を考えることができる。SD 11との切り合いは判然としない。

遺物出土状況： 埋土中からは、土師器の破片2片のみが出土した。

底面の様子： 全体形状は浅いタライ状。

出土遺物： 器種の確定が難しい土師器小破片が2片出土。

第 142 図 VIII X-5.10.15,Y-1.6.11 全体



VIII-X-5・10・15区、Y-11区

調査区東端にあたり、1975年千曲市調査地点（以下B地点と仮称）と農道を挟み隣接地である。遺跡を南北に大きく区切る東西方向の大溝SD 01の南側に位置し、柱状の土坑の検出例は極めて少ない。すべて21基を調査し、その多くは配列・規模から掘立柱建物跡を想定できた。ST 39（P461、旧SK 223・SK 225・SK 430）、ST 40（P462、旧SK 263・SK 218・SK 217・SK 215）、ST 41（P463、旧SK 429・SK 442・SK 219、X-9区旧SK 318）を設定。竪穴式建物跡は1軒（SB 04、P293）を検出、調査した。土坑として認定した例は12基ある。主だった遺構につき、以下に概要を示す。

土 坑

VIII X-5

X-3区以西からつながる東西方向の大溝SD 01とSD 11の2本のみを確認した。

VIII X-10

SB 04及びST 41のほか、3基（SK 222・SK 443・SK 444）の土坑を調査した。また南北方向には近現代と推定できる暗渠排水施設を2本確認した。

443号土坑（第143図）

平面形は円形で、断面は砲弾状を呈する。規模23cm×22cm、深さ12cmを測る。黒褐色土（10YR2/3）の単層で、炭化物が僅かに混じる。出土遺物はない。時期は古代か。

VIII X-15

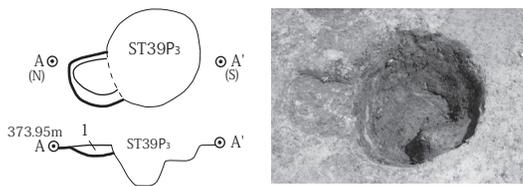
ST 40及び土坑9基（SK 214・SK 216・SK 220・SK 221・SK 224・SK 226・SK 227・SK 262・SK 707）を調査した。

214号土坑（第144図・第145図）

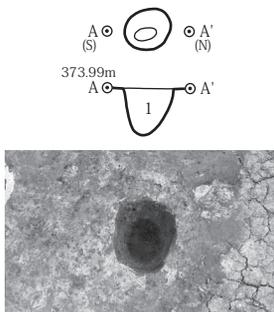
規模21cm×21cm、深さ23cmを測る。埋土は単層で粘性が強く鉄分を多く含む暗灰色粘土。埋土中から柱材が出土した。上部が腐食し、底部が僅かに残る（第145図）。削り出し材で、長さ15cm×径30cm、樹種はクリ材である。時期は古代か。

707号土坑（第146図）

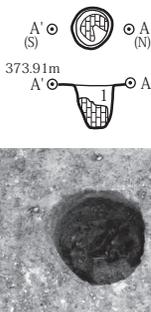
規模26cm×24cm、深さ5cmを測る。埋土は単層で、粘性が強い灰色粘土（N4/0）。ST 39のPit3に破壊される。時期は古代か。



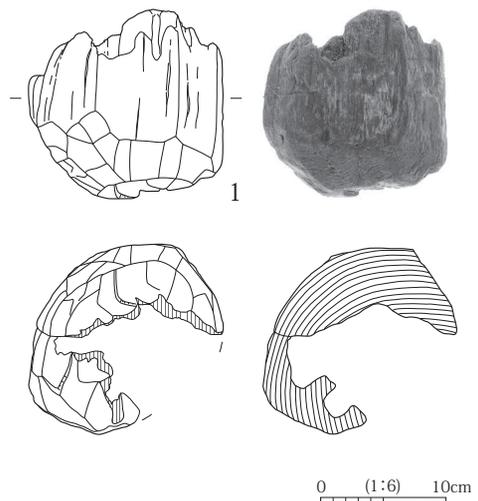
第146図 SK 707の全景（西から）



第143図 SK 443の全景

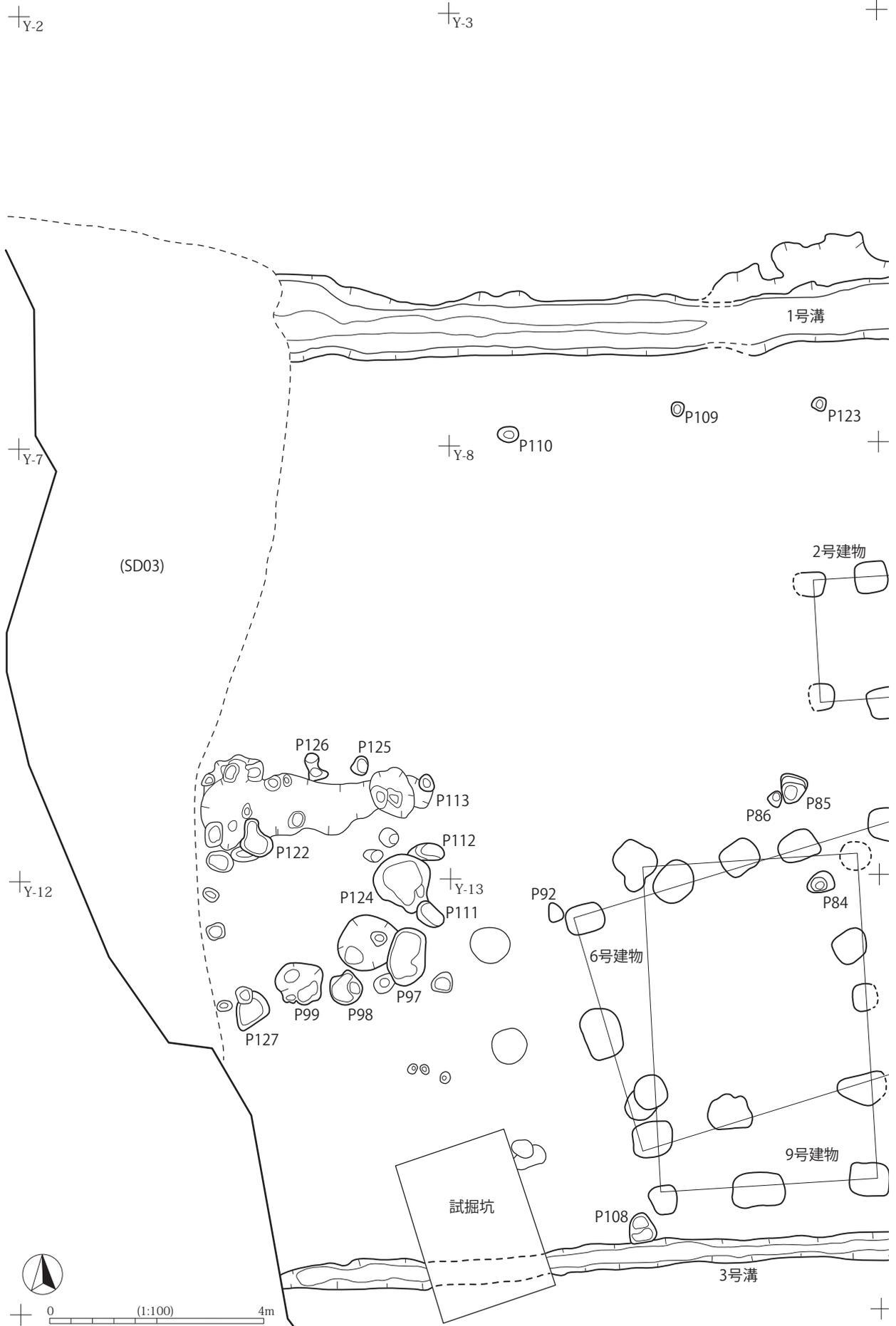


第144図 SK 214の全景



第145図 SK 214出土の柱材

第147図 VIII Y-2.3.7.8.12.13全体



VIII-Y-2・3・7・8・12・13区

千曲市調査のB地点（※）。遺跡を南北に区切る東西方向の大溝SD 01と東西方向に区切る大溝SD 03南北流路の一部を検出している。それらは1号溝及び黒色土と報告されている。1号溝に平行して、南に16m地点に3号溝があり、今回のSD 25と同一、あるいは関連する溝跡と考えることができる。掘立柱建物は2棟確認されている。

掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡

3間×2間で、西妻側に1間の底がつく可能性を示唆。規模8.0m×4.2mを測る。柱穴には明瞭に礎板材が残存している。

7号掘立柱建物跡

径20cm程度の柱穴状の掘り込みが、30基ほど集中し、コの字状に連結して検出された。状態から報告では、簡易な上屋構造を持った建物跡と考えている。今回①区W-10区で確認された逆コの字状の凹部と、ほぼ同様な施設と考えられ、遺跡の東西に対のように配置された特殊な構築物と判断しておきたい。また6号建物跡で想定された西側妻部分の底は、この特殊建物内に確認された柱穴を拾うことで、2間×3間の掘立柱建物跡を1棟想定することも可能である。一案として考えておきたい。

溝状遺構

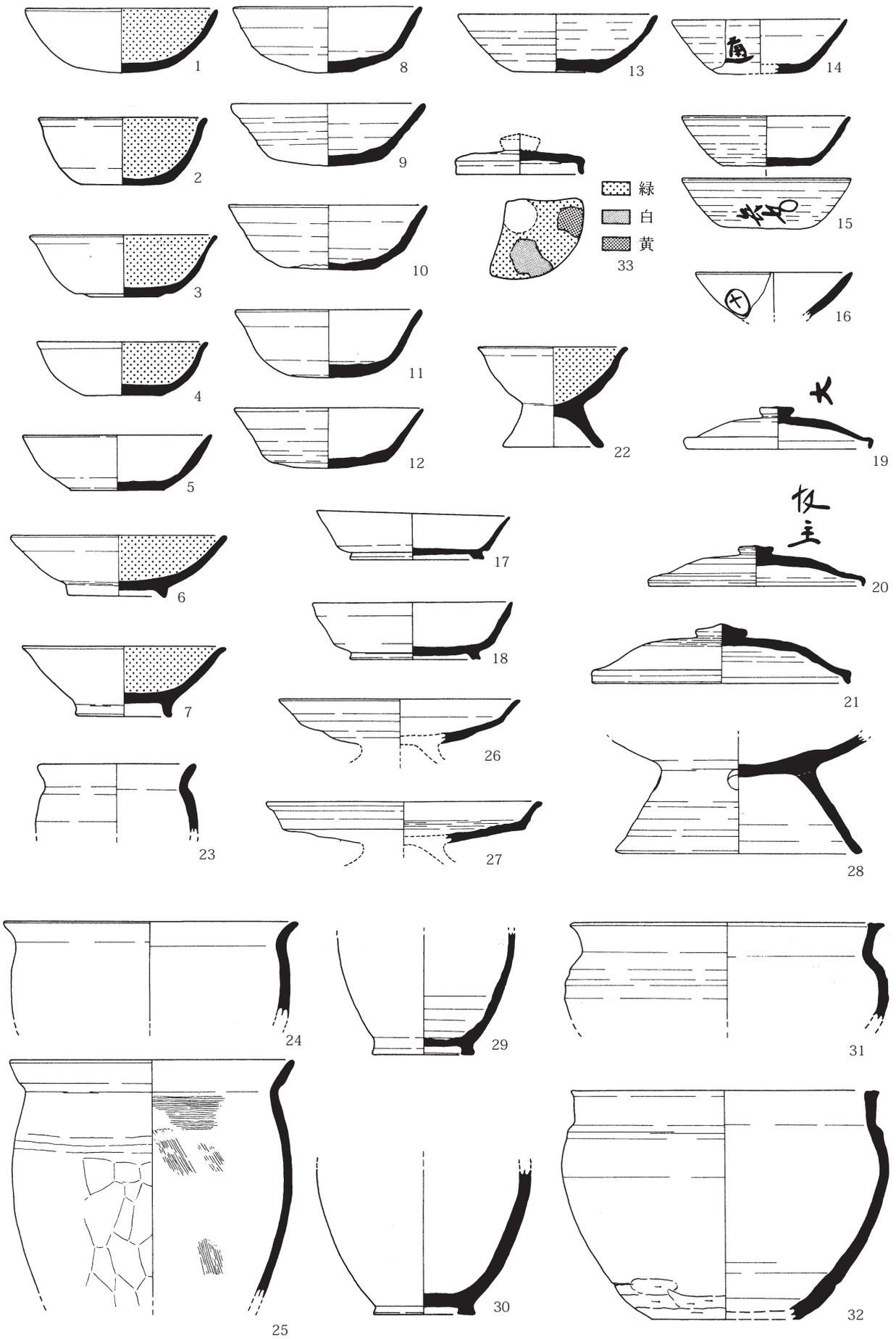
1号溝跡

本溝は調査区を貫通し、さらに東側に延びている。幅110cm、深さ60cmを測り、中位に段を持つ構造で、10cmから20cm程度の礫を多量に混入している。出土遺物には非口クロ成形の高杯形土器をはじめ、須恵器の杯類に甕類、黒色土器A杯A類など、さらには第148図33（第13図）にある奈良三彩陶器小壺の蓋も1点出土している。木製品では鍬の身、曲げ物、棒状加工品などが記録されている。黒色土器Aの杯A類は、体部に丸みのある器形で、ナデ調整またはケズリ調整仕上げである。高台のある椀形土器の出土もあり、6（図版1の11）などは灰釉陶器の器形に酷似する。須恵器は杯形土器A類のヘラ切り離し手法が主体であろうか。また糸切り離し調整の杯類には墨書が観察されており、「通」・「田」など今回A地点で出土した資料と同様な文字を看取できる。蓋形土器の墨書でも「友主（坂主か）」・「大」などの同様な文字が判読されている。木製品には鍬身の風呂部分の半欠品が出土しており、今回出土の第666図32と接合する可能性が高い。SD 25から出土した第182図19のU字状を呈する鍬先の鉄刃1点は、これらに装着されていたものであろうか。この他、砧棒状の木製品、曲げ物の側板等が出土している。

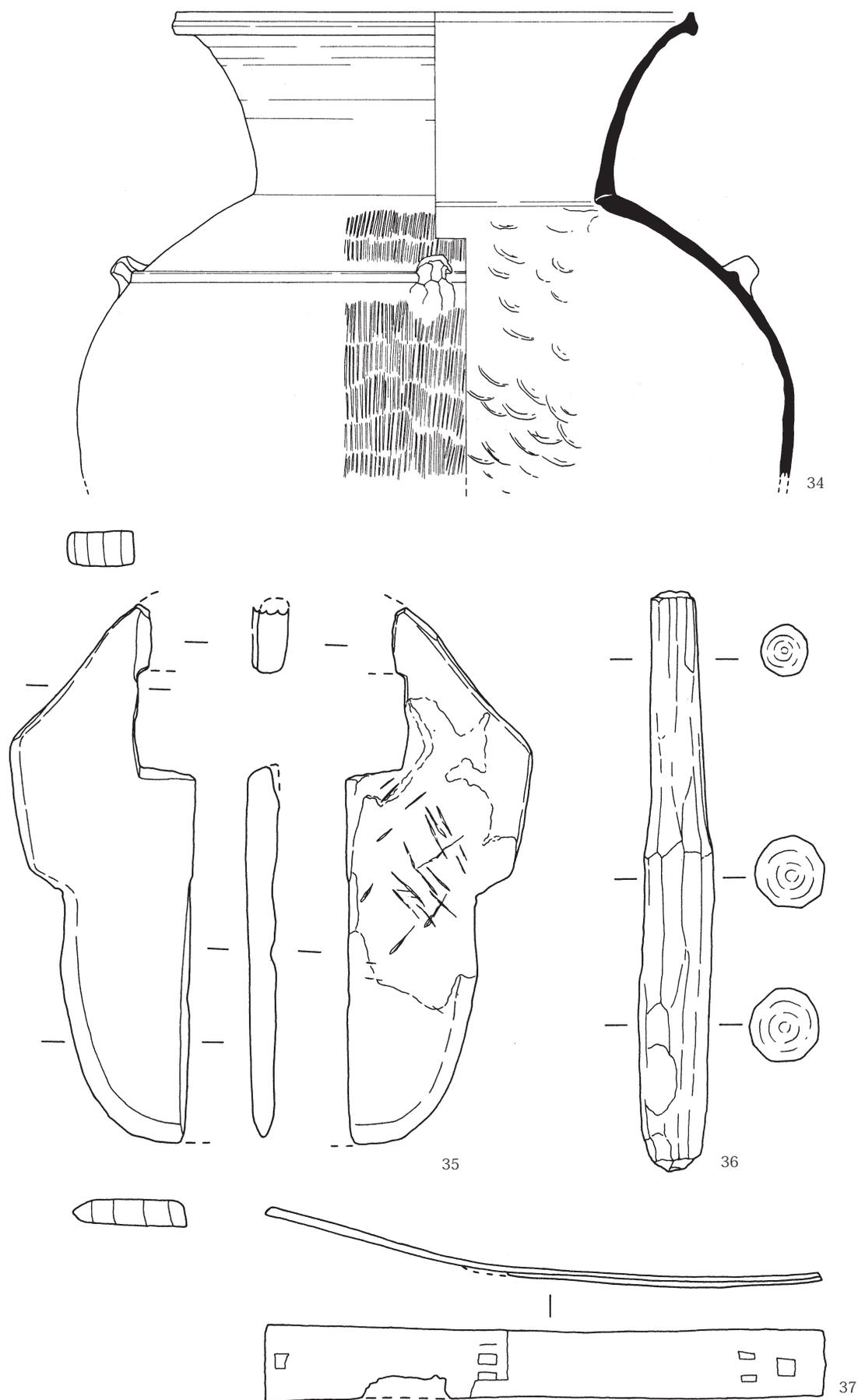
3号溝跡

本溝は調査区をほぼ貫通し、東端に位置するP115（第150図）まで延びている。位置的な検討からは、今回調査したSD 25と同一、もしくは関連した東西溝と判断できそうである。ことに9号建物跡の南端を避けるように横走する様は、A地点のST 18とSD 25の位置関係に酷似しており、それら建物構築の共時性を推定する根拠のひとつともなろうか。

※文中の（ ）内の図版番号は、更埴市（現千曲市）調査報告書所収の番号である。

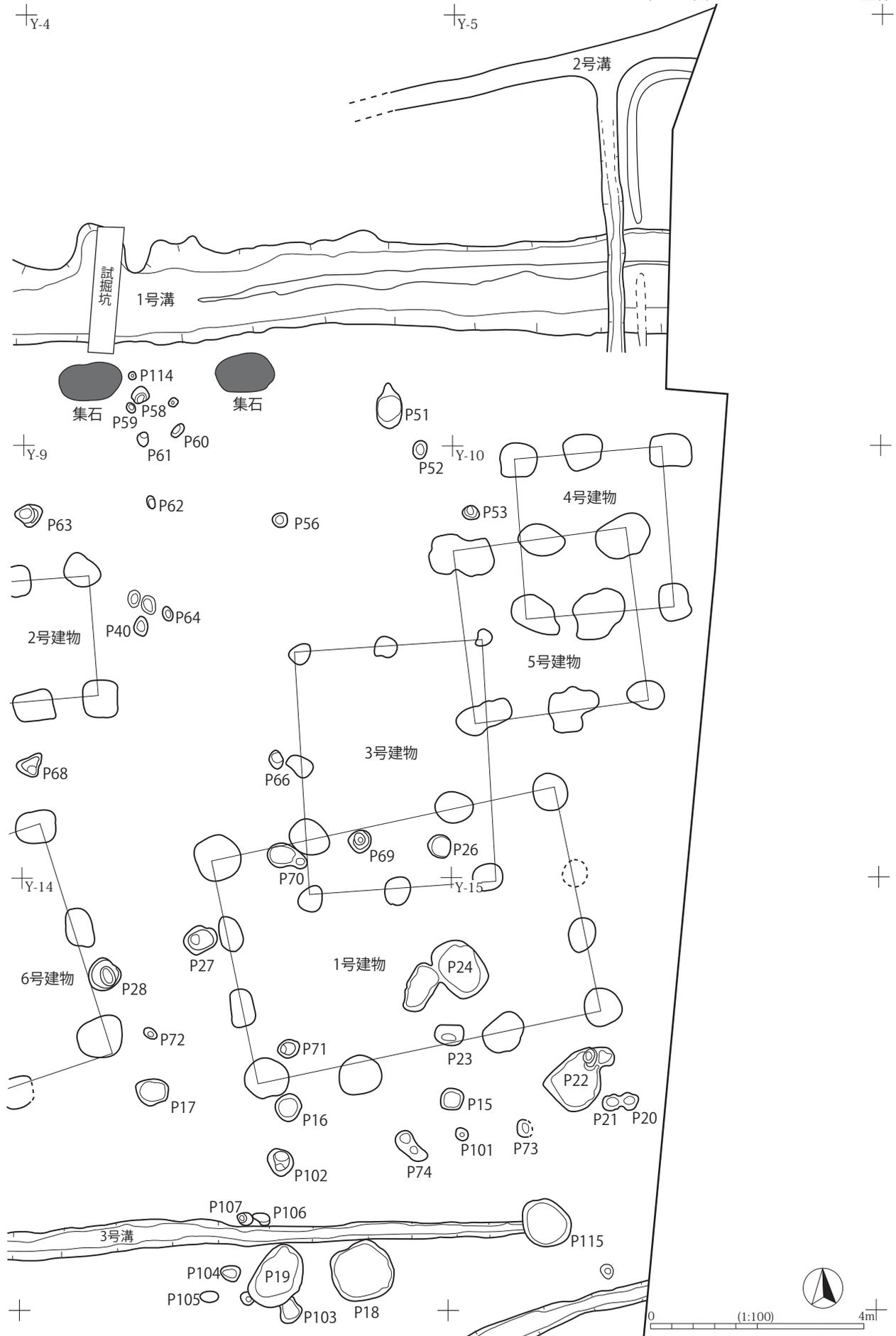


第148図 社宮司遺跡B地点SD 01 出土遺物 1 (S=1/4)



第149図 社宮司遺跡B地点SD01出土遺物 2 (No34はS=1/4、No35~37はS=1/3)

第150図 VIII Y-4.5.9.10.14.15 全体



VIII-Y-4・5・9・10・14・15区

遺跡を南北に区切る東西方向の大溝SD 01の南部に位置し、掘立柱建物跡5棟が確認されている。

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

長軸N-80°-E、3間×3間で規模6.5m×4.3mを測る。6号掘立柱建物の東側に、間隔を空けて並列している点から、ほぼ同時期の建設と推定できる。東側妻部分の柱穴列の1基が暗渠排水施設で破壊されて存在しないが、他のすべての柱穴に礎板材が確認されている。礎板材は肉眼観察でクリ材と判断され、今回の調査結果とも合致し、直径20cm前後の柱材を半截して使用する点など共通点も多い。柱穴間の礎板材に接合関係が確認された点は、特筆にあたいしよう。また柱穴配置の4隅部分に、礎板材を2枚づつを設置している点は、今回の調査例にない特徴である。柱穴から須恵器杯B類、壺形土器、土師器甕形土器の破片が出土している。古代5期・6期ころと推定できるか。

2号掘立柱建物跡

長軸N-80°-E、2間×1間で、規模は2.7m×2.5mと小さい。柱穴は深さ40cmほどあるが、礎板等の出土はない。柱穴掘り方から、ヒョウタンのほか、ヘラ切り離しの須恵器杯形土器及び蓋形土器が出土している。その特徴より古代2期前後に位置付けられるか。

3号掘立柱建物跡

長軸N-85°-E、2間×1間で、規模は3.4m×3.2mを測る。柱の掘り方は、120cm×70cmと大形で不整形、検出状況が今回調査のST 48に似ている。礎板材は2基の柱穴で確認されている。柱内出土遺物はなく、時期不明。

4号掘立柱建物跡

2間×1間で、規模は2.7m×2.9mを測る。3号掘立柱建物と重複するが、切り合い関係の新旧はつかめていない。検出面から柱穴の底面まで僅か5.0cmから10cm程度の深さであったが、すべての柱穴で礎板が確認され、北東隅の1基には2枚が重ねられていた。また南側列の3基には礎板上に柱材が残っていた。肉眼観察であるが、すべてクリ材と判断され、今回の分析結果とも合致する。柱内出土遺物はなく、時期は不明。

5号掘立柱建物跡

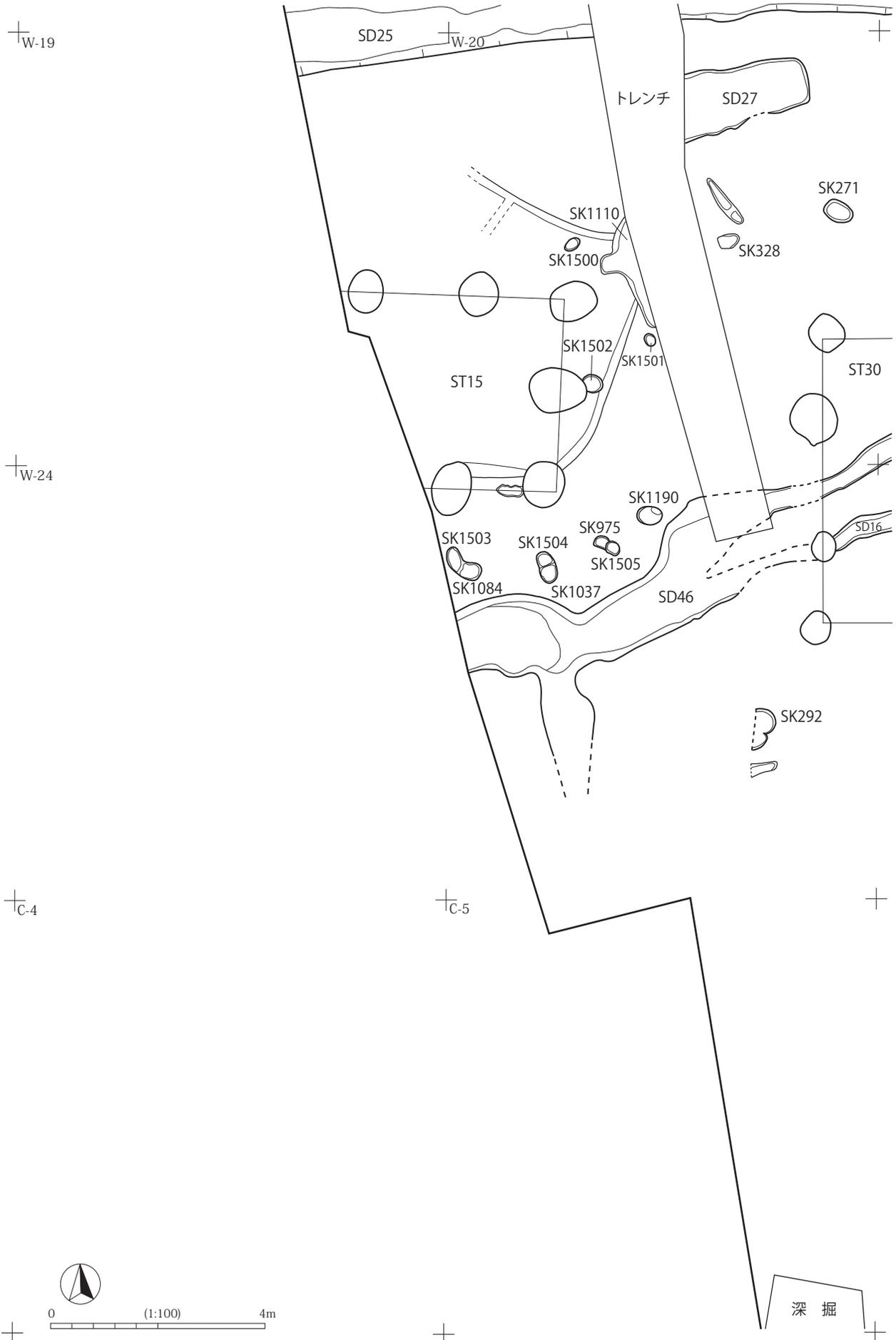
1号掘立柱建物と重複し、東妻側の柱穴も未確認部分があって、建物の間数を正確には決し難い。状況から2間×3間と想定でき、長軸はN-85°-Eを測る。所見から、柱穴に残存した柱材が、他の建物よりも細いとされる。柱穴から須恵器回転糸切り離しの杯形土器と土師器甕形土器の破片が出土している。時期は不明。

集石跡

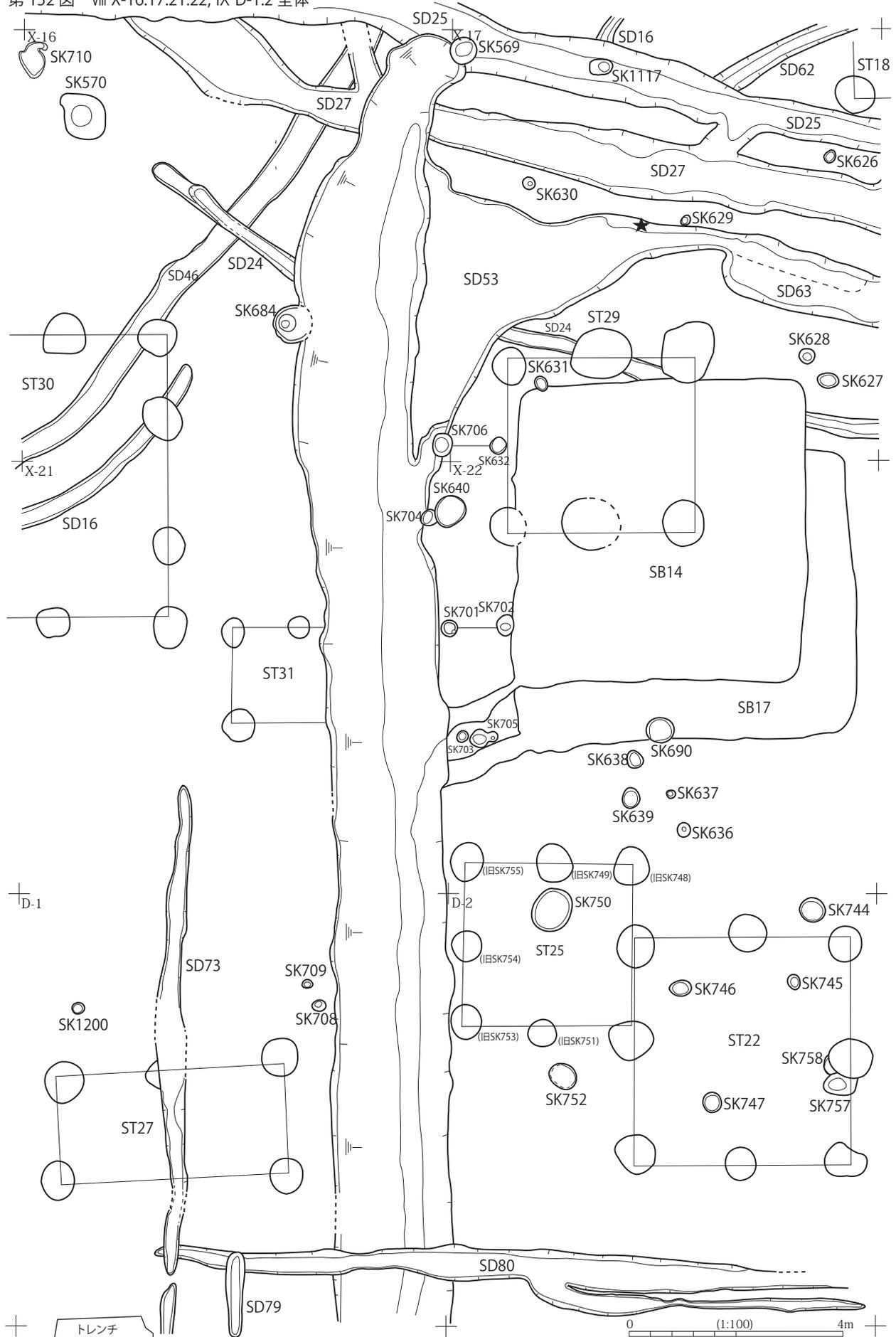
1号集石跡

Y-4区のSD 01に接した南部に、拳大からハンドボール大の礫が集中して出土した部分が2箇所ある。所見にもあるように、本遺跡は調査区内に礫が少ないため、一見して、その特異さが目につく。集石の周りには、4本の杭が打ち込まれていたらしい。こうした集石は、今回の調査でも3箇所を確認でき、ことにX-8区のSD 01南部の集石は、杭材の有無を除けば、位置・状態とも非常に酷似している。ほぼ同様な施設と考えてよいであろう。

第151図 VIII W-19.20.24.25, IX C-5 全体



第152図 VIII X-16.17.21.22, IX D-1.2 全体



VIII-W-19・20・24・25区、IX-C-5区

調査区西端にあたり、遺構密度は低い。土坑と考えられる落ち込みは10箇所あり、その他、配列から掘立柱建物跡(ST 15・P397、ST 30・P443)に組成できた穴が10基ある。②区を東西に走る溝跡SD 25、遺跡北東部(X-3区等)から南下して走る溝跡SD 16及びSD 46、部分的に検出したSD 27がある。以下に主だった遺構につき、概要を示す。

土 坑

VIIIW-20

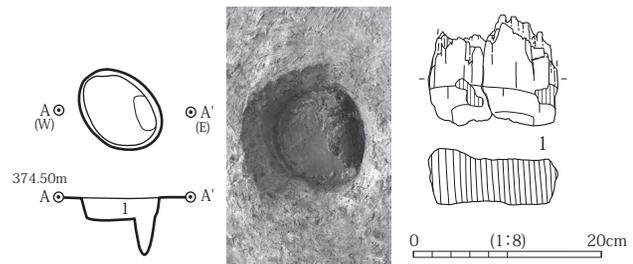
SD 25以南に、規模の小さい柱状の土坑6基がある。SK 271、SK 328、SK 1110、SK 1500、SK 1501、SK 1502である。またSD 25に隣接し部分的に確認できた溝跡(SD 27)が1本ある。

VIIIW-25

SD 46以北に隣接し8基(SK 292・SK 975・SK 1190・SK 1037・SK 1084・SK 1503・SK 1504・SK 1505)がある。

1190号土坑(第153図)

平面形は不整形形状を呈し、坑底面には明瞭な柱痕跡がある。規模は48cm×36cm、深さは29cm。埋土は単層(N3/O)。柱材と考えられる割材が1点出土している。柱材は底部付近に切断痕が残る。11.0cm×13.7cm×5.9cm、樹種はコナラ材である。



第153図 SK 1190 全景及び柱材

VIII-X-16・17・21・22区、IX-D-1・2区

SD 03以北のほぼ中央部付近にあたり、遺構密度、ことに掘立柱建物跡の検出が多い。柱状の落ち込みは、すべて70箇所あり、35基を配置から掘立柱建物と認定した。ST 18、ST 22、ST 25、ST 27、ST 29～ST 31の7棟である。竪穴式建物跡はX-17とX-22にかけてSB 14とSB 17の2軒を検出した。調査区北側には東西方向の溝SD 25及びSD 27が、南側にはSD 80が走り、南北方向には幅2mほどの大溝SD 53、これと平行してSD 73、SD 79、さらにSD 62を検出した。以下に主だった遺構につき、概要を示す。

土 坑

VIII X-16

柱状の落ち込みは4箇所に確認した。SK 570、SK 684、SK 706、SK 710である。SK 706は隣接区で確認したSK 632とともに、SB 14(P322)に付属した施設である可能性がある。規模は44cm×36cm、深さ34cmを測る。

VIII X-17

SD 25をはじめとする6本の溝跡が集中し、土坑の確認例は少ない。SK 569、SK 626～SK 632、SK 1117の9基を検出したが、いずれも小規模である。なお、SD 25内検出のSK 1117には、柱材が出土。

569号土坑(第154図)

平面は円形状で、断面はバケツ形状。規模は50cm×47cm、深さ32cmを測る。埋土は単層(10YR3/1)で、ブロック的に10YR1.7/1の土を含む。出土遺物はないが、SD 25を破壊している。古代2期以降であろう。

627号土坑(第155図)

平面楕円形で、断面はタライ状を呈する。規模は41cm×29cm、深さ18cmを測る。埋土は黒褐色土(10YR2/3)を基調に2層ある。遺物は須恵器杯形土器A類の破片、土師器甕形土器の破片が出土している。時期は古代。

VIII X—2 1

SD 53 以西に位置し、ST 30 (P443) 及び ST 31 (P451) を検出した。柱状の土坑は、検出密度が極めて低く、SK 640、SK 701、SK 704 の3基のみである。SK 701 は SK 702 とともに、SK 706 と SK 632 同様に SB 14 の付属施設の可能性を考慮することができる。規模は 30cm 前後で深さが 25cm 程度。SK 702 からは柱根と須恵器杯 A (ヘラ切り手法) の底部破片が出土している。

7 0 4 号土坑 (第 156 図)

平面形は楕円形で、砲弾状を呈する。規模は 32cm × 26cm で深さ 24cm を測る。黒褐色土の単純堆積で柱材の出土がある。東端を SK 640 に破壊される。SD 53 との新旧関係は不明である。

VIII X—2 2

調査区中央部に SB 14 (P322) と SB 17 (P346) を確認した。柱状の落ち込みは、いずれも比較的小規模である。SK 636、SK 637 ~ 639、SK 690、SK 702、SK 703、SK 705 の8基である。

7 0 2 号土坑 (第 157 図)

楕円形状の平面に、断面はバケツ形状。規模は 38cm × 31cm、深さ 26cm。黒褐色土の単層で柱材の出土がある。埋土中の遺物にはヌルデの割材 1 点と須恵器杯 A 類の破片 1 片 (ヘラ切り離し手法) がある。SB 14 との切り合い関係は不明である。

IX D—1

南北方向に走る SD 73 及び SD 79、東西方向に走る SD 53 があり、中央部には ST 27 (P430) がある。柱状の土坑は、SK 708、SK 709、SK 1200 の3基がある。

7 0 9 号土坑 (第 158 図)

平面形は円形、断面は砲弾状を呈する。規模は 18cm × 18cm と小規模で、深さは 23cm を測る。粘性の強い黒褐色土の単層 (10YR2/3) で、壁際に柱根が残る。

IX D—2

中央部に ST 25 (P426) と ST 22 (P417) を検出、南端に東西方向の溝 SD 80 がある。土坑は 8 基 (SK 744 ~ SK 747・SK 750・SK 752・SK 757・SK 758) を検出した。

7 4 4 号土坑 (第 159 図)

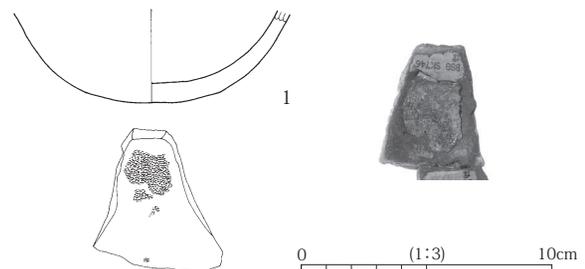
規模 48cm × 43cm の円形状で、深さは 30cm を測る。柱痕跡が北側の壁面に残っていた。黒褐色土 (10YR3/2) を基調とし 3 層に分層した。出土遺物はない。

7 4 6 号土坑 (第 160 図・第 161 図)

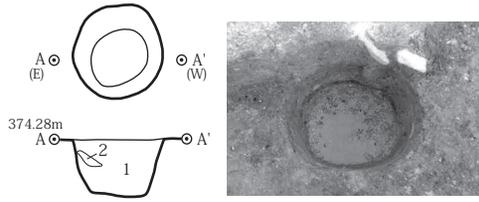
平面は楕円形状で、断面タライ状である。規模 37cm × 28cm、深さ 10cm。埋土中から黒色土器杯 A 類の破片が出土した。第 161 図 1 の黒色土器 A の杯 A 類底部破片には、長さ 2.2cm、幅 2.0cm の漆紙片と考えられる付着物 (P643) が残存していた。赤外線観察の結果、文字の書き込みは認められなかった。

7 5 0 号土坑 (第 162 図)

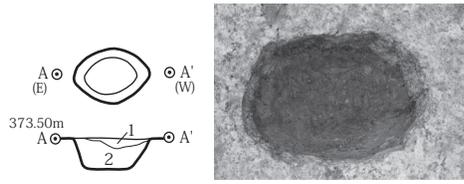
規模は 84cm × 71cm と大きい、断面はタライ状で深さ 11cm を測る。埋土は 2 層からなり、下層は 10YR6/3 のにぶい黄橙色粘質土、上層は 10YR3/1 の黒褐色土である。



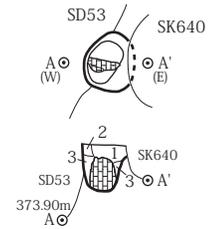
第 161 図 SK 746 出土の漆紙



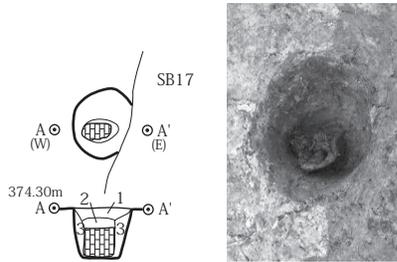
第 154 図 SK 569 の全景



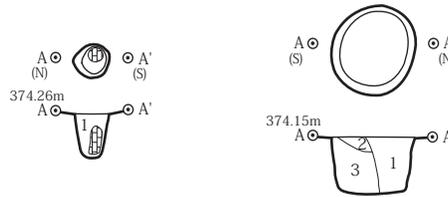
第 155 図 SK 627 の全景



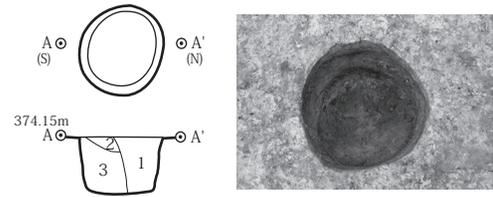
第 156 図 SK 704 木製品出土状態



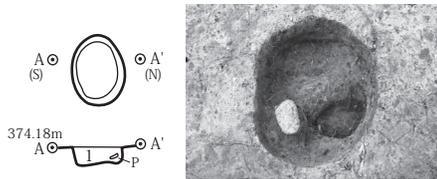
第 157 図 SK 702 木製品出土状態



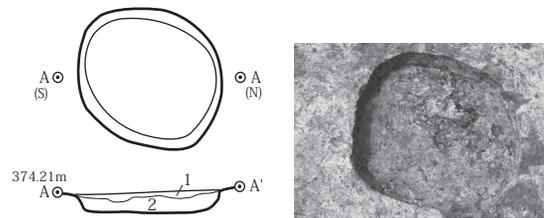
第 158 図 SK 709 木製品出土状態



第 159 図 SK 744 の全景



第 160 図 SK 746 の全景



第 162 図 SK 750 の全景

溝状遺構

73号溝跡 (第152図)

時期： 古代～中世か

位置： VIII X - 21、IX D - 1・6

長軸方向： N - 3° - E

規模： 長さ 10m12cm、幅 38cm、残存深度 10cm

性格： 不明・水田関連施設か

断面形態： 浅いタライ状

壁立ち上がり： 24度程度の傾斜

埋土堆積： 黒褐色土 (10YR2/3) の単純堆積

重複遺構： ST 27 を破壊すると思われるが、現場所見では不明。SD 80 を破壊し暗渠排水に壊される。

検出経過： 黄褐色の砂層上面にて、黒褐色土の落ち込みを確認、南北方向へ長く延びることから溝跡を想定し調査した。浅い掘り込みで、出土遺物もほとんどなかった。ほぼ正方位に走る幅狭の溝跡であり、SD 80 とほぼ直角に交わる。水田等の耕作に伴う溝跡であろうか。2点ではあるが、中世遺物も出土している。東側にほぼ平行する SD 79 も同様な溝跡と考えられる。SD 79 からは非口クロ土師器の杯 6 片、土師器甕破片 10 片、須恵器横瓶破片 1 片が出土している。

出土遺物： 出土土器の内訳は、第 33 表に示す。

遺跡名	土師器			須恵器			磁器	中世陶器	数 / 総重量 (破片 / g)
	甕 A	甕 E	小型甕 A	杯 A	杯 B	蓋 B	青磁椀	不明	
SD 73	1	2	1	1	1	3	1	1	11/110.6

第 33 表 SD 73 出土土器組成

80号溝跡（第163図・第164図）

時期： 古代～中世か

位置： IXD-1・2

長軸方向： W (N-90°-W)

規模： 長さ13m34cm、幅34cm、残存深度13cm

性格： 不明・水田関連施設か

断面形態： 浅いタライ状

壁の立ち上がり： 40度程度の傾斜

埋土堆積： 黒褐色土（10YR2/1）の単純堆積を基調とするが、部分的に黒味の強い下層（10YR3/3）を確認できた。

重複遺構： SD 53 を破壊し、SD 73 および SD 79 に壊されるか。

検出経過： 黄褐色の砂層上面にて、黒褐色土の落ち込みを確認、SD 73 及び SD 79 とともに調査した。

遺物出土状態： SD 53 に重複した部分から、板材等の木製品が一括して4点出土した。検出時の状況から、本跡に伴う遺物として取り上げた。

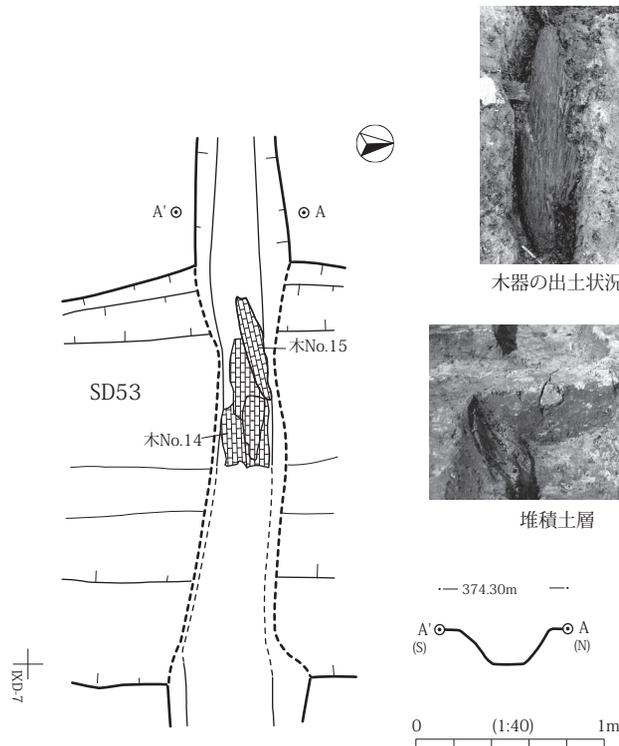
出土遺物： 出土土器及び木製品の内訳は、第34表及び第35表に示す。埋土中から土師器甕形土器と中世陶器類が出土している。1はSD 53 との重複部分で出土した割材、槽であろうか。大きさは76.8×18.0×3.0cmのサワラ材、ほぼ完形。木裏は緩やかに湾曲し、表側を削り貫いている。側面縁も調整加工が施され、丸みがつく。2は部材。角材と考えられるが上下欠損しており全体形は不明。ヒノキ科。3は1 とほぼ同様な割材で、1/4 程の欠損例であろうか。サワラ材。

遺跡名	土師器		須恵器		磁器		中世陶器	数 / 総重量 (破片/g)
	甕	甕A	壺	長頸壺A	壺	白磁壺		
SD 80	22	1	1	1	1	1	1	28/187.5

第34表 SD 80 出土土器組成

遺構名	木製品			総数
	板材	割材	割材(槽)	
SD 80 埋土	1	1	2	4

第35表 SD 80 出土木製品組成



第163図 SD 80 木製品出土部分



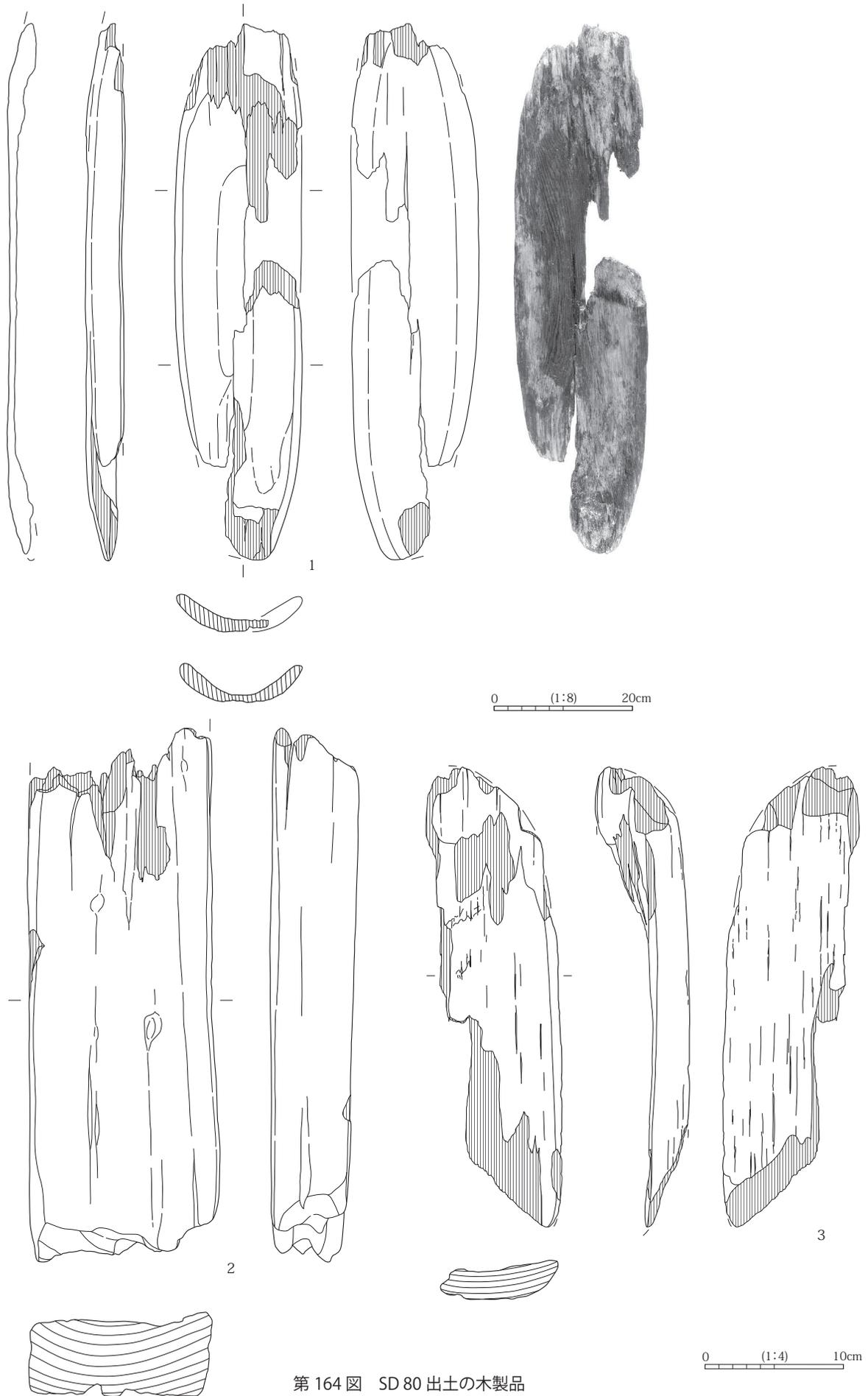
木器の出土状況



堆積土層



SD80の全景（東から）



VIII-X-18・19・23・24区、IX-D-3・4区

調査区のほぼ中央に位置し、東西方向の溝跡SD 25、SD 27、SD 24と柱状の落ち込み78箇所を確認した。落ち込みは、規模・形状から柱穴と考えられ、配列から28基が掘立柱建物跡と認定できた。ST 18 (P409)、ST 10 (P377)、ST 23 (P421)、ST 20 (P414)、ST 21 (P416)である。この他、X-24区で集石跡が1箇所確認できた。以下、主だった遺構につき、概要を示す。

土 坑

VIII X—1 8

ほぼ中央部に東西方向の溝跡SD 25とSD 27が走り、南北にはSD 59がある。柱穴等の遺構密度は低く、3基(SK 566～568)が確認できた。また北西隅にはX-12・13にかけて建つST 18の柱穴2基がある。567号土坑(第166図)

SD 25とSD 27の合間にある。平面は楕円形状で断面砲弾形。規模は28cm×20cm、深さは26cmを測る。埋土は黒褐色土(10YR3/1)を基調に、上下2層に分けられる。出土遺物はない。

VIII X—1 9

ST 10を中心に柱穴を確認し、SK 240、SK 251～SK 254、SK 324、SK 325、SK 342、SK 343の9基が該当する。

254号土坑(第167図)

楕円形で、底部は緩やかな丸みを持つ皿状。規模は43cm×36cm、深さは21cmを測る。単層で褐色粘質土(5YR4/1)。出土遺物はない。時期は古代であろうか。

325号土坑

断面砲弾状で、規模は44cm×24cm、深さは23cmを測る。SD 25との切り合い関係は不明だが、同様な土坑を周辺に2基(SK 324・SK 251)確認した。出土遺物はない。

VIII X—2 3

南北方向にSD 59が走り、中央にはST 20 (P414)を検出した。遺構密度は極めて低い。柱状の土坑は5基(SK 394・SK 565・SK 681・SK 682・SK 689)確認できた。

394号土坑(第168図)

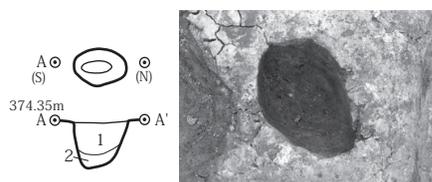
平面は楕円形を呈し、底部中央に段を有する形態。規模は28cm×26cm、深さは20cm。埋土は黒褐色土(10YR3/1)を基調に3層に分層できた。出土遺物はない。

VIII X—2 4

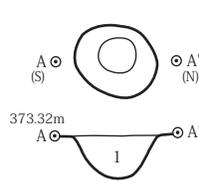
ほぼ中央部にST 21 (P416)があり、北東隅にST 10及びST 09 (P370)を検出した。本区の土坑には、良好な柱材・礎板が残存するものが多く、掘立柱建物跡の存在は濃厚であるが、配列等から認定できたものはなかった。ST 09と同様な扱いにすべきだが、ここでは単独に土坑として記述しておく。SK 231、SK 241～SK 244、SK 255、SK 290、SK 321、SK 422、SK 683の10基がある。

242号土坑(第169図)

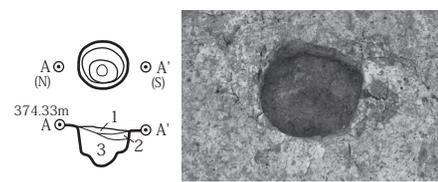
平面は楕円形で、断面すり鉢状、壁は緩やかに立ち上がる。底部に柱材の一部が残存している。分割材



第166図 SK 567の全景



第167図 SK 254の全景



第168図 SK 394の全景

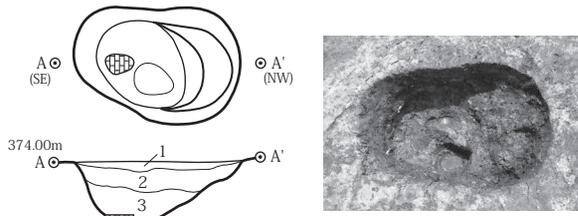
で6.0×7.4×5.5cm、樹種はフジキ材。埋土上層に柱痕跡が認められないことから、柱材を残したまま、人為的に埋められた可能性がある。出土遺物は、須恵器の破片が出土している。時期は古代か。

243号土坑(第170図)

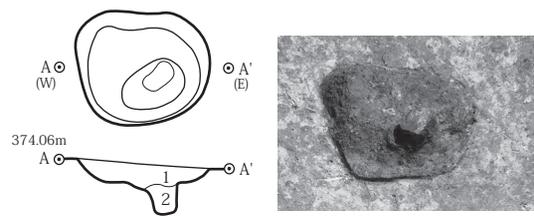
隅丸方形。底部に段を有する形態で、規模70cm×58cm、深さ27cmを測る。埋土は褐灰土(10YR4/1)を基調として2層に分けられるか。出土遺物はない。

244号土坑(第171図)

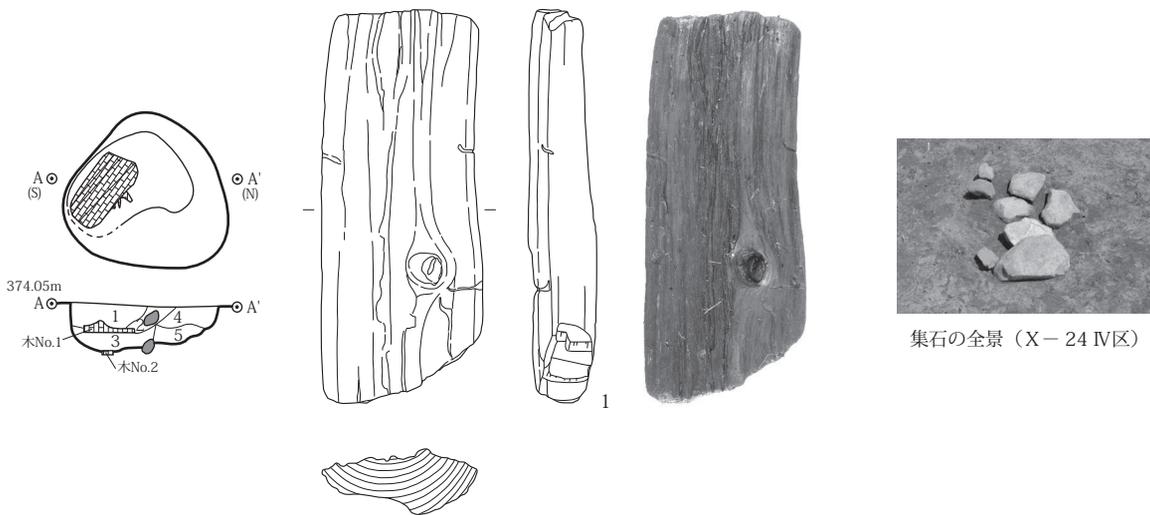
平面形は、やや不整形の隅丸方形である。底部が比較的平坦なタライ状である。84cm×82cm、深さ24cm。埋土は褐灰土(10YR4/1)を基調とし含有物の違いから5層に分層できた。3層上部からは礎板材が1点出土している。分割材で41.5×32.0×11.7cm、樹種はカツラ材。他に板材1点と土師器甕形土器B類の破片が出土している。



第169図 SK 242の全景



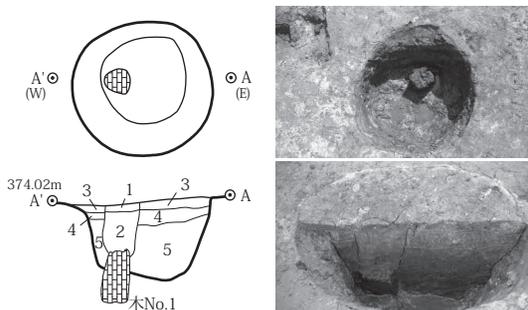
第170図 SK 243の全景



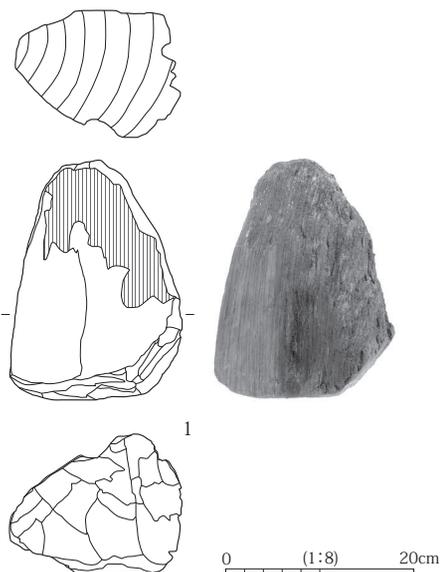
第171図 SK 244 木製品出土状態と礎板材



第172図 SK 321 木製品出土状態



第173図 SK 422 木製品出土状態と柱材



3 2 1号土坑 (第172図)

隅丸方形で、断面は底部が比較的丸く、皿状となる。38cm × 25cm、深さ 14cm。埋土は褐灰土(10YR4/1)の単層。締りの悪い粘質土である。柱材の残りは比較的よい。芯持ち材で 13.2 × 7.4 × 5.0cm、樹種はクリ材。他に須恵器の蓋破片が出土している。

4 2 2号土坑 (第173図)

平面形は、やや不整形の隅丸方形形状である。底部には明瞭に柱痕が確認できた。みかん割りの柱材で、23.5 × 18.3 × 14.7cm、上端は腐食している。下端は2方向から切断する。フジキ材。

IX D—3

中央に南北方向のSD 59が走るほか、北端にST 20の南妻側がかかる。遺構は極めて粗である。土坑は4基(SK 741～SK 743・SK 756)のみ検出した。

7 4 2号土坑 (第174図)

平面は楕円形状で、底部南壁面に段を有する形態。規模は40cm × 34cm、深さ20cmを測る。埋土は坑底部に2層の堆積が認められ、2層(10YR6/3)と3層(10YR3/1)、上面に1層(10YR3/2)が堆積する。出土遺物はない。時期は古代か。

7 4 3号土坑 (第175図)

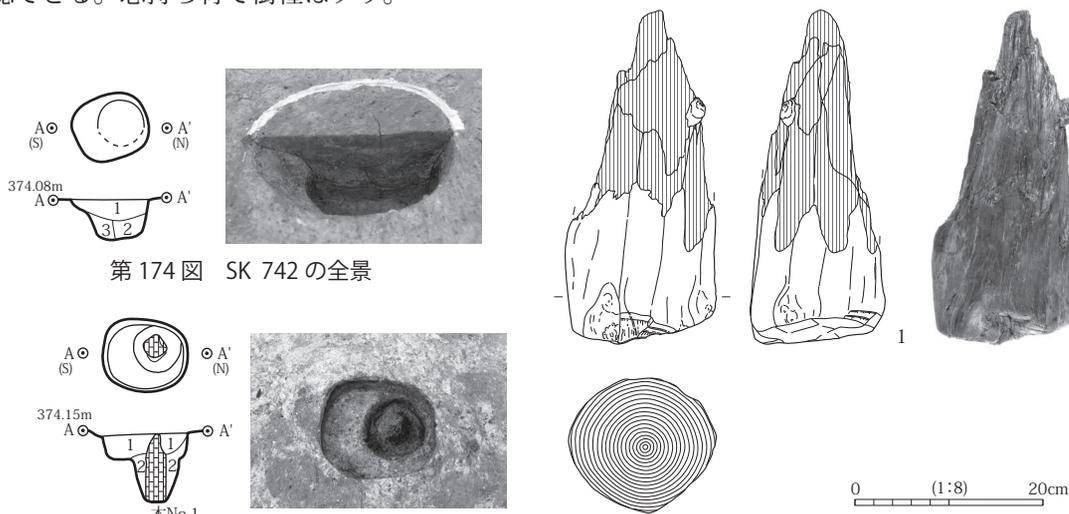
SK 742と同規模で同形態。坑底面に残存していた柱材の残りがよく、柱材は芯持ち材で残存長35.2cm・径15.8cm。埋土は2層が水平に堆積し、1層は黒褐色粘質土(10YR3/2)、2層はにぶい黄褐色の粘質土(10YR6/3)。出土土器はない。柱材は、側面を面取りし、底部の角を水平に斧で切断している。上部の腐食は著しい。樹種はクリ材。

IX D—4

柱穴と考えられる土坑は、全部で19基(SK 246～SK 250、SK 256～SK 260、SK 281～SK 289)あり、密度が高い。礎板材や柱材などの基礎材を出土した土坑も3基あり、掘立柱建物跡、あるいは柵列跡が存在した可能性は高い。しかしながら、どれも柱筋の通りが明確でないため、土坑として扱った。

2 5 7号土坑 (第176図)

平面形は楕円形状を呈し、断面形態が皿状。2基の土坑が礫を挟んで切り合っているような状態で検出できた。規模48cm × 21cm、深さ27cmを測る。埋土は粘性が強い褐灰色土(10YR4/1)を基調とし、3層程度に分層できるか。土坑底部に柱材が残る。柱材は上部が腐食するが、底部には明瞭な切断痕跡を確認できる。芯持ち材で樹種はクリ。



第174図 SK 742の全景

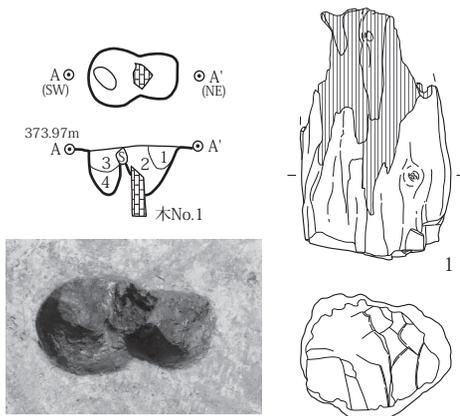
第175図 SK 743 木製品出土状態と柱材

281号・282号土坑(第177図)

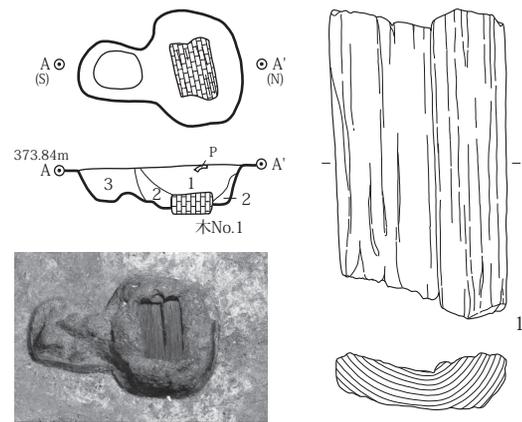
281号の規模は91cm×61cm、深さ20cmを測る。282号は80cm×65cm、深さ31cm。281号が282号に破壊されて構築される。両土坑の埋土は、ともに粘性の強い褐灰色土(10YR4/1)を基調としている。282号の坑底面には柱材のみが残る。柱材は削り出し材でクリ。上部・側面の腐蝕が激しい。21.8×20.7×13.5cm。埋土中の遺物には土師器小形甕と須恵器杯蓋の破片が出土している。

284号土坑(第178図)

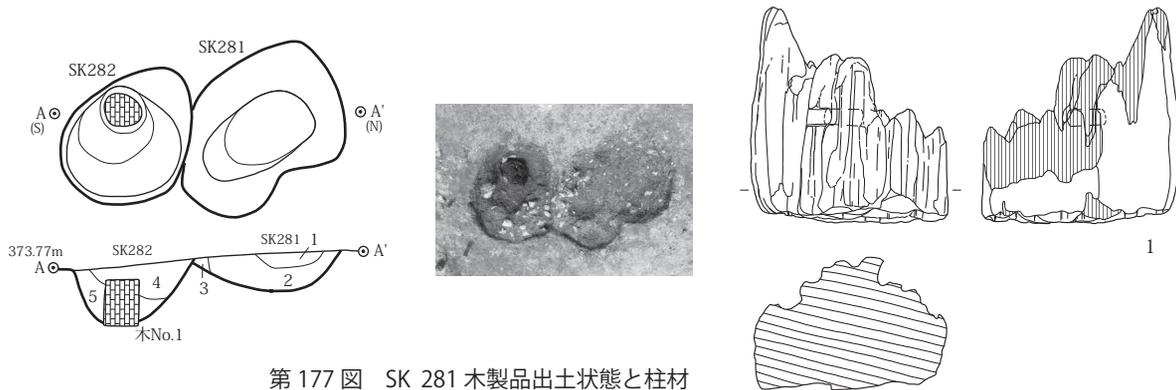
平面形は楕円形状で、断面に段を有する形態。西側が深く落ち込む。規模87cm×27cm、深さ23cm。褐灰色土(10YR1/4)を基調に、炭化物量の違いから3層程度に分層できるか。坑底部には礎板(分類Aa)があり、32.7×18.8×5.8cmを測る。分割材でクリ材。



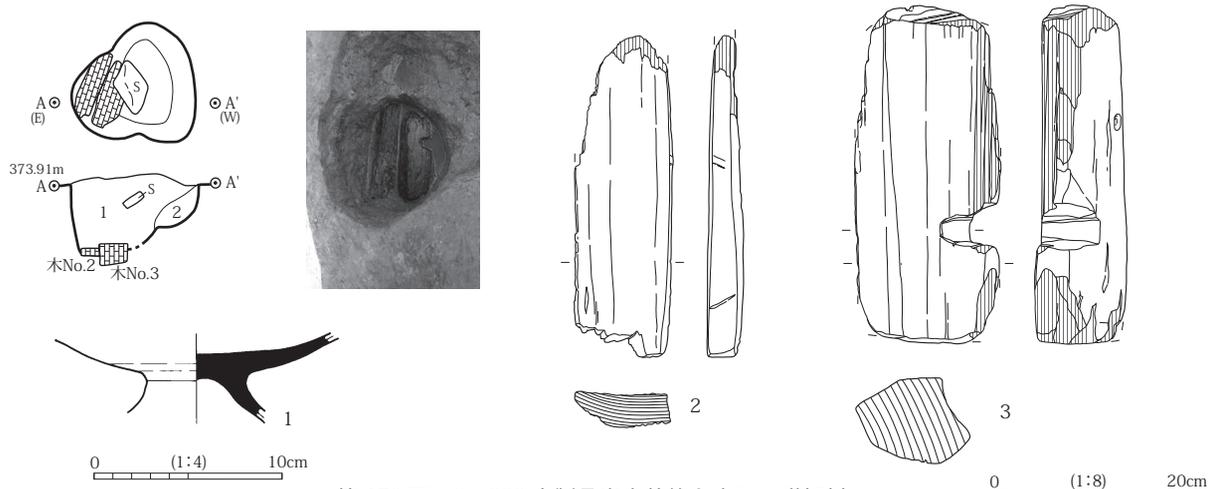
第176図 SK 257 木製品出土状態と柱材



第178図 SK 284 木製品出土状態と礎板材



第177図 SK 281 木製品出土状態と柱材



第179図 SK 289 木製品出土状態と土器・礎板材

285号・286号・287号土坑

285号土坑は、286号土坑、287号土坑を破壊して構築。76cm×63cm、深さ21cmを測る。埋土は粘性のある褐灰色土(10YR4/1)で、砂質土を含む層と2層に区別できる。遺物は、須恵器甕形土器の破片が出土している。時期は古代か。

289号土坑(第179図)

平面形は楕円形状で、壁面の底部に段を有する形態。規模65cm×49cm、深さ40cmを測る。埋土は褐灰土(10YR4/1)を基調とした2層で、上層に礫の混入がみられる。埋土中から須恵器の盤破片(第179図1)が出土。土坑底部には礎板が2点と棒材1点(長さ2.4cm・直径4.6cm)が出土している。礎板2はクリ材で、木裏を表にして使用されていた。礎板3は分割材で木裏を表にして使用している。面をとってあることから柱材等の骨格材、基礎材を転用した可能性がある。樹種はクリ材。

溝状遺構

25号溝跡(第180図・第181図・第182図・第183図)

時期： 8世紀前半から中頃(古代2期・3期) 長軸方向： E-3°-S
位置： VIII W-14・15、X-11・17・18・19・20 断面形態： タライ状
規模： 長さ34m96cm、幅1m6cm、残存深度30cm
性格： 土地区画溝か

壁の立ち上がり： 17度程度の緩傾斜

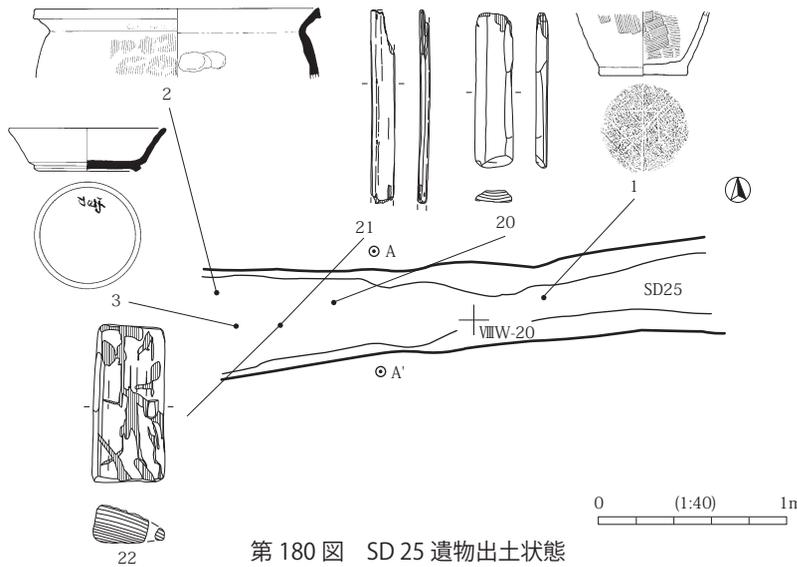
埋土の堆積： 1層褐灰色土(10YR4/1)、2層褐色土(10YR4/4)

重複遺構： SD 27、SK 323～SK 325・SK 233・SK 234・SK 251を切る。SD 53との切り合い関係は不明。

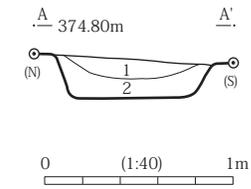
検出経過： 茶褐色砂質土上面にて、黒味のある褐灰色土の落ち込みを確認する。東西方向に細長く検出できたことから、溝状の遺構と判断し調査した。X-19区・20区ではST 10及びST 23と重複していたが、新旧関係は不明瞭であった。Pit埋没土の調査状況からSTが本跡を破壊していたと判断した。SD 27との切り合い関係も不明瞭であったが、SD 27の底面とSD 25の底面に差が認められSD 25が深く際立つこと、木製遺物がSD 25に伴う出土状態を示していたことから、SD 27を破壊すると判断した。SD 53との重複関係は不明で、調査の進行具合からSD 53の北端がSD 25を破壊するように検出したが、遺構所属時期等と考えると、両者に重複を見出す根拠は希薄である。

出土遺物： 埋没土は部分的には2層に区分できたが、出土遺物の大部分は層位区分できない埋土中からの出土であった。出土土器及び出土木製品の内訳は、第37表及び第39表に示す。

- 1層 1は土師器甕形土器B類の底部。幅1.8cm程度の板状工具により、外面縦方向、内面は横方向に調整される。底面には木の葉文があり、その上からヘラによる「×」印が刻まれる。
- 2層 2は須恵器甕E類、口縁部破破片。外面は板状工具による叩き締め、内面には直径2.0cmの当て具痕がある。年輪は観られない。3は須恵器杯形土器B類。ほぼ完形で、口径16.4cm、器高4.5cmを測る。底部は凸形、高台は低く、外傾し内



第180図 SD25 遺物出土状態



第181図 SD25 堆積土層



SD25 遺物出土状態 (東から)



SD25・SD27の全景 (西から)

側接地。使用によるものか、高台底面部分は磨耗しツルツルする。底部内面には墨痕と思われる痕跡があり、外面には「守部」の墨書がある。4画から6画の「寸」は、早い筆の動きで丸みのある書き風となり、6画の点は5画から流れるように書かれる。20は板状木製品。木裏を表にして面加工し、3面に工具の刃痕が残る。下端は材に対し斜めに切断される。21は割材。木表側面は平滑に加工される。22は器種不明品。分割材を整形加工し、平面形状は長方形を呈し、断面は台形状。厚みの薄い右側表面中心部に縦2cm、横幅1.2cmの貫通した方形の穴がある。左側面部には楕円形の緩やかな窪み(圧痕)が観察できる。

埋土 4・5は非ロクロ土師器。4は杯の口縁部破片。口縁やや直立気味に立ち上がり、横ナデ以下体部はケズリ調整がなされる。杯I類と考えられるが、A類またはB類の可能性もある。5は高杯の杯部破片。内面は横方向の良好なミガキ調整、口縁外面は口唇直下1.0cm幅を強く横ナデする。6は土師器甕形土器E類。やや長胴化した形態で、内面横方向の丁寧なナデ、外面は縦方向のミガキとナデ整形。8～10は須恵器杯A類で、8と10はヘラ切り離し調整。7は須恵器杯蓋B類の体部破片。つまみ部は平たいボタン状。外面1/2程度ケズリ調整。8は1/4程度の個体で、胎土中に白色粒子を混入、やや灰褐色を呈した土器。底部は切り離し痕を留め凸状。9は糸切り離しの杯A類1/3個体で、口縁部に带状に漆の付着が認められる。10は1/2の個体。内外面に細かなロクロ成形痕跡を留め、底部ヘラ切り離しナデ整形。11は須恵器杯B類の1/4個体、口径13.8cm、器高3.4cmを測り、底部はやや外側に凸。高台は外側に張出し平接。内面には墨汁痕があり、底から口縁にかけて全体

的に使用による磨耗か、ツルツルしている。12は須恵器杯BⅢ類、ほぼ完形。口縁内傾し、口径13.0cm、器高7.6cmを測る深碗形。高台は丸みのある端部で外に張り出す形態。底部外面には墨痕が、内面には墨汁痕のような付着物が観察できる。仏鉢形の口縁に相当するか。13は須恵器甕A類の口縁部破片。肩の屈曲部が一部に残り、内面には直径3.0cmの工具痕・青海波紋が明瞭に観られる。14～16は須恵器盤形土器。14は口径17.5cmを測り、口唇角頭状の明瞭な形態である。15は口唇がやや丸みを帯びた形態。16は脚部で、器高5.0cm程度で、ラッパ状に開く形態、皿部内面には墨汁痕を観察できる。17は細粒砂岩材の大形刃器。扇状を呈した横長剥片の直線的な端部をそのまま主刃とする。肩部(図左上辺)には使用によるものか細かな刃こぼれ状の微細剥離痕が観られる。大きさは8.6×7.6×1.5cm、70.5g。18は頁岩材の大形刃器1/2破片。横長剥片の端部を刃部とする。19はU字形鉄製鋏先、1/2個体。23・24は釘穴結合曲物の底板。23は側面に釘穴5箇所残る。表面は全面炭化?し、1.0cm前後の削り痕が帯状に残る。24は木釘孔を4箇所確認でき、内2箇所に木釘が差し込まれた状態で残る。残存部のみで判断すると、綴じ方が1列4段以上のものと考えられる。側板幅5.2cm、厚さ4cm。25は割材。上端は欠損し、下端は垂直に切断される。上端近くに斧痕跡が残る。26は板材。両端欠損し、下部右側面に欠き溝の痕跡がある。27は割材。残存する表面・側面部は平滑で、規模及び形状から建築材(骨格材)の割材と考えられる。組成表中にある黒色土器杯の体部微小破片1片(1.9g)はX-18区から出土しているが、非ロクロ土師器の体部の可能性もある。この他に埋土中に、石器と断定できない礫3点(380g)がある。

時期の判断基準：

非ロクロ土師器杯類及びミガキ甕の存在、黒色土器が存在しないことから、3期以前を想定。ヘラ切り離し須恵器杯A類を主体とし、杯B類を一定量組成する点等を加味し、概ね2期ないしは3期頃に位置付けられる。また埋土中から出土した曲げ物破片のC14炭素年代測定結果は、664±30年AD(7世紀代)であった。

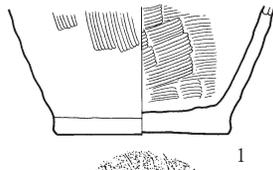
図版番号	出土位置	焼き物種類	器種	現存部位	記入方法	用筆ほか	記入部位	向き	文字	備考
第182図3	2層	須恵器	杯B	ほぼ完形	墨書	0.2cm	底部		「守部」	内面墨汁痕あり
第182図1	1層	土師器	甕B	底部	ヘラ書き	0.3cm	底部		「×」	木葉痕の上から

第36表 SD25 墨書土器属性

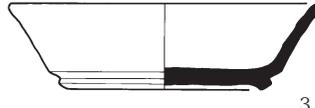
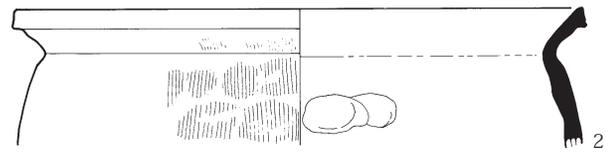
遺構名	非ロクロ			土師器							黒色A 須恵器							数/総重量 (破片/g)		
	杯?	杯C	高杯	甕	甕A	甕B	甕E	小型甕	不明	杯A?	杯A	杯B	蓋B	盤	甕A	甕C	甕E		壺	長壺A
SD25 埋土	3	4	1	1	19	14	74	3	1	1	29	16	7	5	9	11	18	3	2	221/4,566.2
1層						8														8/340.9
2層											3						1			4/404.0

第37表 SD25 出土土器組成

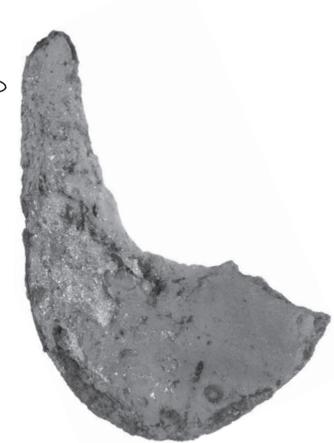
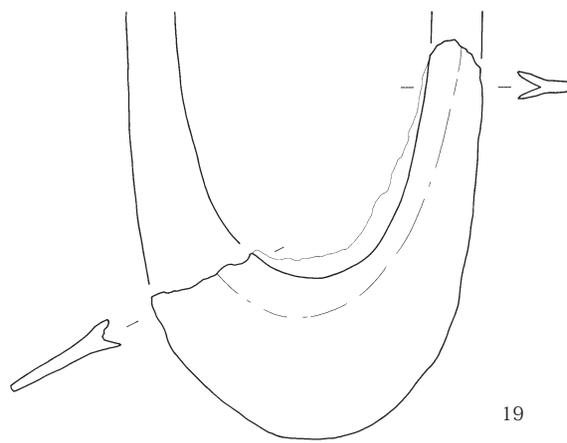
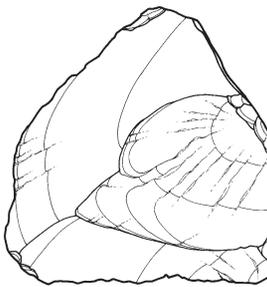
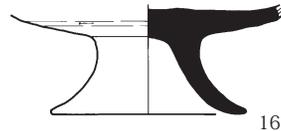
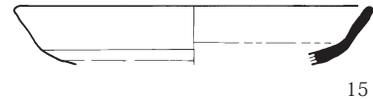
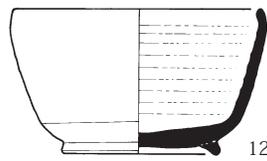
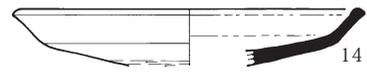
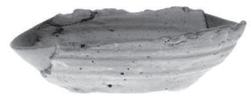
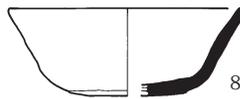
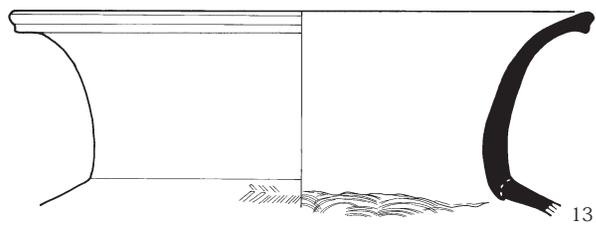
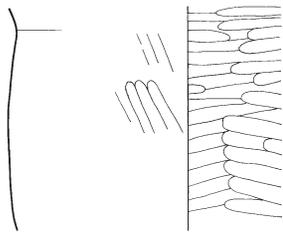
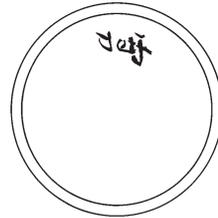
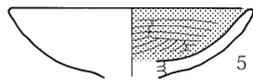
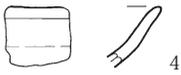
1層



2層



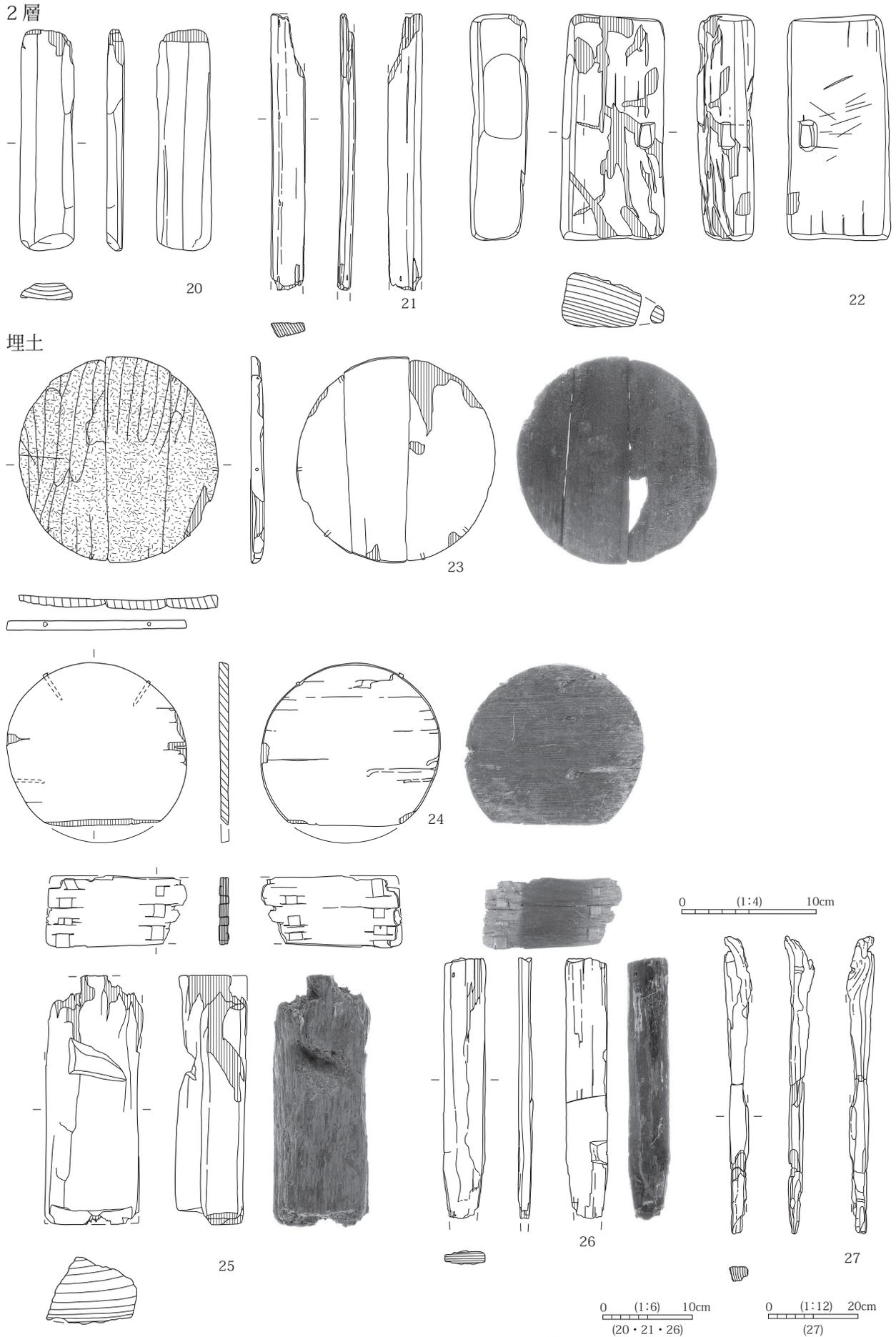
埋土



0 (1:4) 10cm 0 (1:3) 10cm

(17~19)

第182図 SD 25 出土の土器・石器・金属器



第183図 SD 25 出土の木製品

挿図番号	取上No.	層位	器種	木目	樹種	現存長	幅	厚さ	形状の特徴
第 183 図 20	108	2 層	板状木製品	板目	モミ属	24.6	6.1	1.8	面加工。
第 183 図 21	112-1	2 層	割材	みかん割	針葉樹	30.6	3.8	1.6	側面平滑加工。
第 183 図 22	112-2	2 層	板状木製品	みかん割り	コナラ節	16.7	7.5	3.9	部材か。圧痕あり。
第 183 図 23	1	埋土	曲物	柾目	ヒノキ	15.2	直径 15.2 (14.8)	0.9	釘穴結合曲物。削痕あり。
第 183 図 24		埋土	曲物底板	追柾目	ヒノキ	13.3	直径 12.0	0.7	釘結合曲物。木釘孔が 4 箇所あり
第 183 図 25		埋土	板材	みかん割り	サワラ	18.4	7.0	5.0	切断痕あり。
第 183 図 26	2	埋土	板材	柾目	スギ	28.9	4.6	1.4	ホゾ穴あり
第 183 図 27	3	埋土	割材	不明	サクラ属	65.8	5.9	5.5	骨格材の一部か。

第 38 表 SD 25 出土木製品属性

遺構名	板状木製品 (部材?)	柱材	板材	棒材	割材	杭材	曲物	自然木	不明	総数
SD 25 埋土		1	5	8	24	1	2	1	5	47
SD 25 2 層	1		1		1					3

第 39 表 SD 25 出土木製品組成

27号溝跡 (第 184 図・第 185 図)

時 期： 7 世紀以前 (古代 1 期以前)

長軸方向： E - 6° - S

位 置： VIII X - 11 ~ 19

規 模： 長さ 30m42cm、幅 1m 2 cm、残存深度 18cm

性 格： 土地区画溝か

断面形態： タライ状

壁の立ち上がり： 58 度程度の緩傾斜

埋土の堆積： 黒褐色土 (10YR3/1) の単純堆積

重複遺構： SD 25・SD 53 に破壊され、SD 46 を破壊する。ST 10、SD 59、SK 629・SK 630 の切り合い関係は不明。

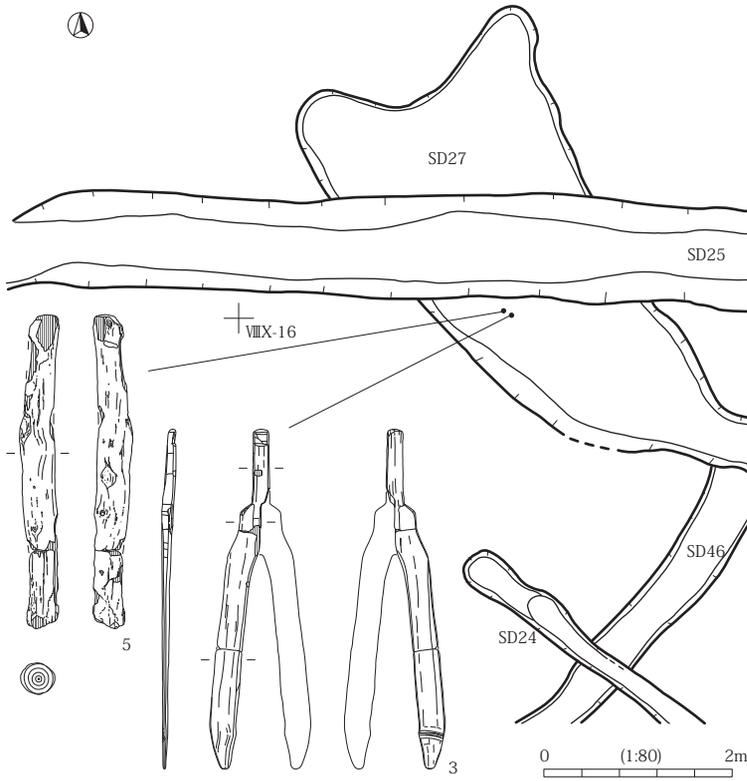
検出経過： SD 25 と同様に検出。検出状況の類似点から、東西方向の溝状遺構を想定し調査した。ST 10、SD 59、SK 629・SK630 との重複関係については、検出順序の手違いから新旧を決し難いが、調査状況から判断すれば、それらに破壊されると考えるべきか。

出土遺物： 埋没土中から 70 片の土器と 3 点の木製品 (鋏 1 点・割材 1 点・棒材 1 点) が出土した。出土土器の内訳は第 40 表に示す。

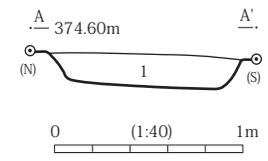
1 は古墳時代土師器の壺形土器口縁部。内外面良好にミガキ調整される。2 は須恵器甕 C 類口縁部破片。3 は鋏。片側の刃は欠損する。表面は平滑で、断面は下端より上端軸部の付近まで外側にうすく、分岐部分は角状になる。軸部断面は楕円形で、軸部と刃部の境が明瞭。肩幅の狭い刃部がしもぶくれ状で、曲柄又鋏 C I 式に該当する。長さ 72.0cm、刃幅 2.7cm、厚さ 2.2cm。クヌギ節、C14 炭素年代測定結果は 794 ± 30 年 AD (8 世紀末～9 世紀初頭)。4 は器種不明の棒状木製品。割材を加工、一端は斜めに切断する。5 は棒材で、長さ 66.2cm、直径 7.3cm。両端に工具による刃痕がある。表面に窪みがあるが、斧の痕跡であろうか。磨耗してはっきりしない。

遺構名	土師器							須恵器					数 / 総重量 (破片 / g)	
	非口ク 杯 C	甗	甗 A	甗 B	甗 C	甗 E	壺	黒色 A 杯 A	杯 A	盤	蓋 B	甗 C		甗 E
SD27 埋土	1	5	2	8	1	17	6	8	6	1	3	5	7	70/983.4

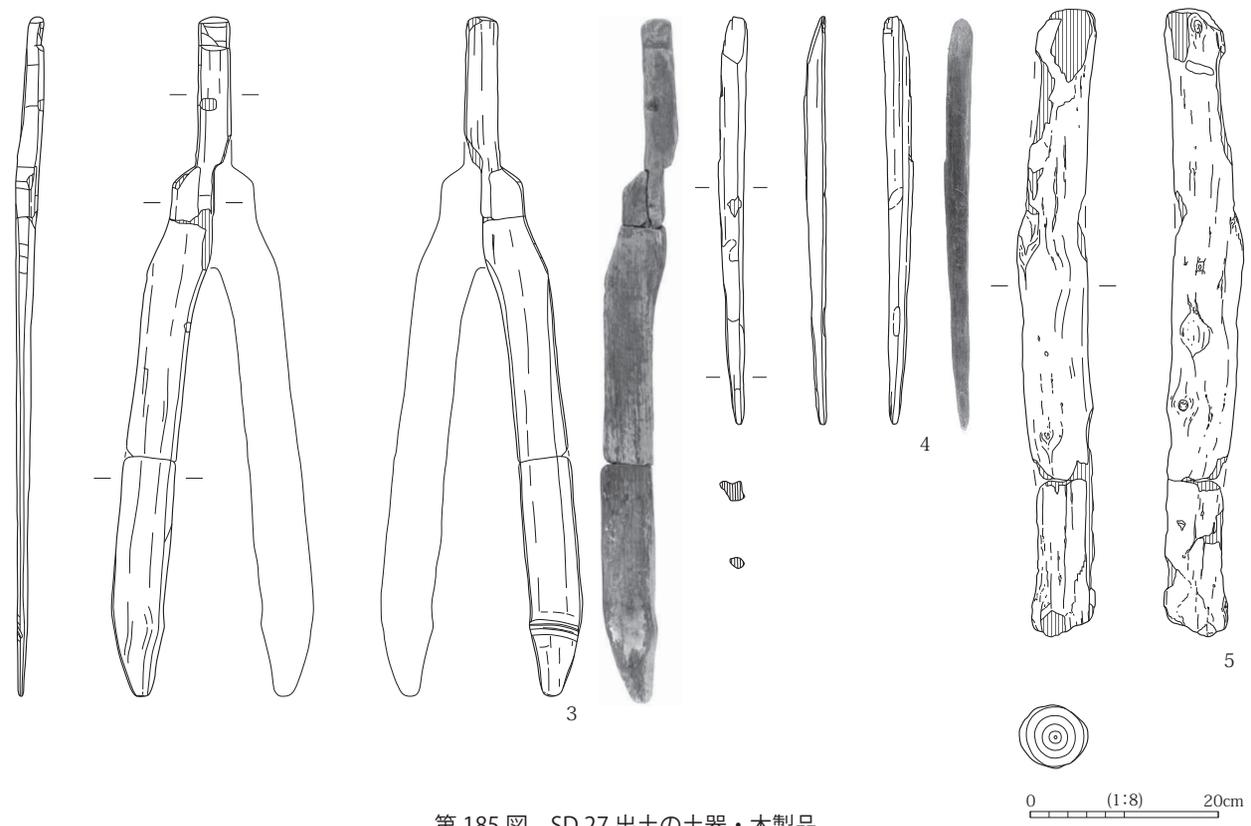
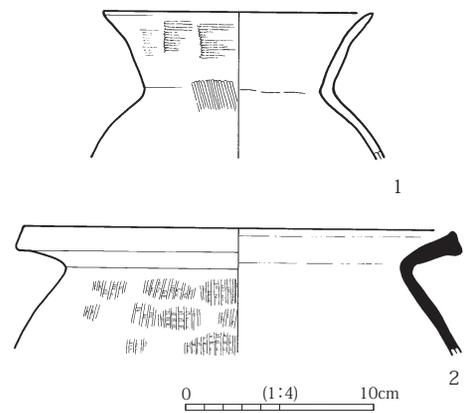
第40表 SD27 出土土器組成



第184図 SD27 遺物出土状態



SD27 堆積土層



第185図 SD27 出土の土器・木製品

24号溝跡

時期：不明（古代か？）

長軸方向：E-6°-S

位置：VIII X-16~18、23~25

規模：長さ30m76cm、幅54cm、残存深度15cm

性格：不明

断面形態：壁中位に段を有し、底部に流路部を持つ形態

壁の立ち上がり：24度程度の緩傾斜

埋土の堆積：褐灰色土（10YR4/1）を基調とし、粘性・粒子の含有量から3層に分層できる。

重複遺構：SD 46を破壊し、SD 53、ST 09・ST 29、SB 14、SK 422に破壊される。

検出経過：X-24区にて褐灰色土の落ち込みを検出、東西方向に細長く伸びる点から溝状遺構を想定し調査した。X-17区付近は遺構の切り合いが激しく、SD 53等と一連で調査した。規模・方向性から、SD 24が続く溝と判断し符号した。

出土遺物：埋没土中からは、1片の土師器甕形土器破片（13.3g）と2点の木製品（柄1点・割材1点）のみが出土した。



SD 24 全景（東から）

63号溝跡（第186図）

時期：不明（古代か？）

位置：VIII X-17・18

長軸方向：E-8°-S

規模：長さ4m以上、幅35cm、残存深度25cm

性格：不明

断面形態：深いU字状

壁の立ち上がり：47度程度の緩傾斜

埋土の堆積：黒褐色土（10YR3/1）を基調とし、粘性・締まりの強い下部層と2つに分層できた。

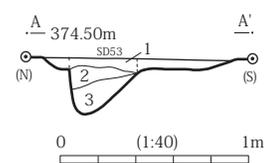
重複遺構：SD 53との切り合い関係は不明。

検出経過：SD 53の北端部の調査に伴ない東西方向へ伸びる溝状の落ち込みを確認し調査した。SD 53の北東端（X-17区）を東に掘り進めたところ、次第に浅くなり、人為的な掘削溝とは考えられない凹地状となった。精査した結果、さらに深く掘り込まれたU字状の溝跡を確認したが、X-18区境で検出できなくなった。SD 53との切り合い及び関連はつかめなかった。

出土遺物：埋没土中から少量の土器が出土したが、内訳は第41表に示す。



SD 53 と SD 63 の重複部分（西から）



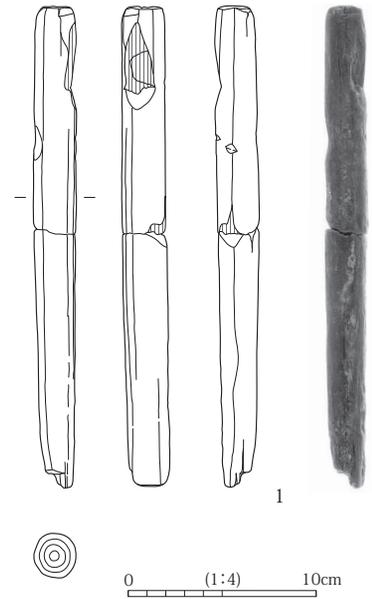
第186図 SD 63 堆積土層

遺跡名	土師器				須恵器		数 / 総重量 (破片 / g)
	杯 A	甕 A	甕 B	甕 E	蓋 B	壺	
SD 63	3	14	11	6	1	2	37/275.2

第41表 SD 63 出土土器組成

59号溝跡 (第165図・第187図)

時期： 不明 (古代か?)
 位置： VIII X - 18・23、D - 3・8 長軸方向： N - 7° - W
 規模： 長さ 25m10cm、幅 30cm、残存深度 14cm
 性格： 不明
 断面形態： U字状
 壁の立ち上がり： 40度程度の緩傾斜
 埋土の堆積： 黒褐色土 (10YR3/1) の単純堆積
 重複遺構： ST 20 及び SD 27 との切り合い関係は不明。
 検出経過： SD 27 の調査後、X - 23 区を中心に南北方向に走る溝状遺構を検出した。SD 27 との切り合い関係はつかめていない。
 出土遺物： 埋没土中からは須恵器破片 2 片 (杯 A1・横瓶 1) と木製品 2 点 (柄か? 1・割材 1) が出土した。1 は芯持ち材で、粗く面を削り、中心部はややふくらみ、下端にいくにつれ扁平となる。柄状の木製品。カバノキ属。



第187図 SD 59 出土の木製品

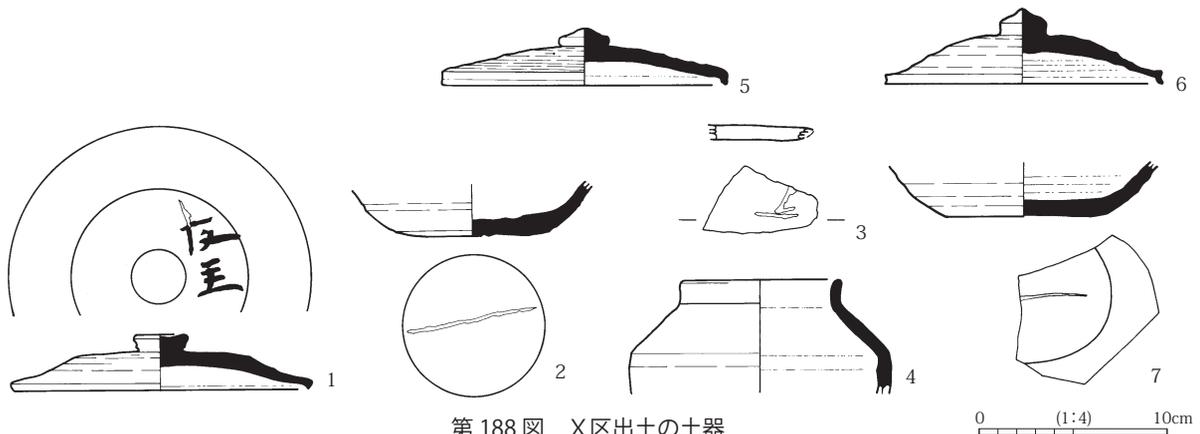
X区検出面出土の土器 (第188図)

X-17・18・19区

1 は須恵器杯蓋、1/2 個体。径 15.0cm を測る。つまみは中央の凹むボタン状で、体部 1/2 程度をケズリ調整。かえしは直行し僅かに 0.2cm 程度。ケズリ調整された体部表面に太さ 0.3cm の墨書「坂主」がある。「坂」の字は薄れて、図化表現では肉眼判読できた部分「友」のみとなっている。2 は須恵器杯 A の底部。ヘラ切り離し (幅 3.5cm の板状工具) で、ロクロ痕を顕著に留める。底部にヘラ書きで「一」印がある。3 は 18 区出土の須恵器杯 B の底部小破片。底部外面に焼成前の刻書があるが欠損により判読は難しい。径 0.2cm のヘラ状工具で刻まれ、「万か」。4 は 19 区出土の須恵器短頸壺。硬質で内外面良好にナデ調整される。図示してないが、長さ 6.5cm の土錘 1/2 個体が他に 1 点 (25.2g) ある。

X-21・24区

5 は 21 区出土の須恵器杯蓋 1/2 個体。径 15.0cm を測る。つまみは中央が突出した山形で、かえしは直でやや如意形に外反する。内面に赤色の朱墨付着痕がある。6・7 は 24 区出土の須恵器。6 は蓋 1/2 個体で径 14.0cm。つまみは宝珠形で、凹凸のあるロクロ痕を明瞭に残す。体部ケズリは 1/2 程度で、かえしは如意形に外反。7 は杯 A 底部。2 とほぼ同様な作りで、底部には「一」のヘラ書き印がある。



第188図 X区出土の土器

Ⅷ-X-20・25区、Y-16・21区、IX-D-5区、E-1区

調査区の中央東端、農道 8372 号線沿いに位置する。調査区は、近現代の暗渠排水施設の設置に伴ない、ほぼ中央部を南北方向に削平されていた。その結果であろうか、SK 212 及び SK 213 の 2 基を残し、遺構の存在しない空白帯が認められた。以外、柱状の落ち込みは 48 箇所を確認でき、このうち 12 基が配列から掘立柱建物跡と認定できた。ST 05 (P364)、ST 17 (P406)、ST 23 (P421)、SD 15、SD 19、SD 20、SD 23 がある。以下、主だった遺構につき、概要を示す。

土 坑

ⅧX-20

中央部に東西方向の溝跡 SD 25 が走り、ST 23 (旧 SK 236 と旧 SK 341 を含む) が確認できた。柱穴等の遺構密度は低く、7 基 (SK 212・SK 213・SK 232～SK 235・SK 323) が確認できた。

232号土坑 (第190図)

平面は円形、底部からアサガオ状に広がる断面形態。規模 51cm × 45cm、深さ 22cm を測る。埋土は 2 層あり、下層はにぶい黄橙色 (10YR6/3)、上層は締りの悪い粘質土 (5Y4/1)。出土遺物は土師器甕 B 類の破片。時期は古代。

ⅧX-25

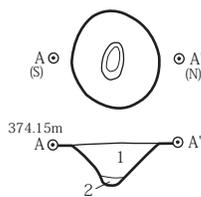
中心部は暗渠排水施設により破壊を受け、土坑は 4 基 (SK 207・SK 208・SK 209・SK 210) が散在するのみ。SK 207 や SK 210 は、検出状況から、掘立柱建物跡の可能性を考えるべきだが配列できない。SD 23 及び Y-21 区境に南北方向の溝状遺構 (SD 15・SD 19) を検出した。時期はいずれも不明であるが、SD 59 や SD 73 と同様な機能の溝 (水田耕作関連か) の痕跡であろうか。

207号土坑 (第191図)

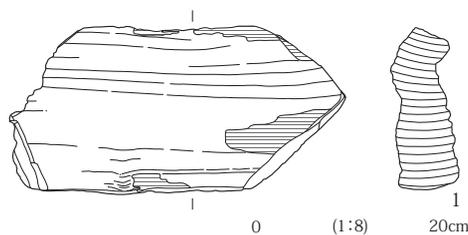
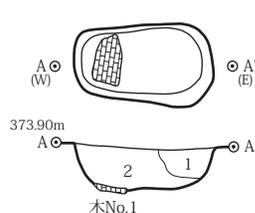
平面は隅丸長方形で、底面が平坦なタライ状を呈する。規模 74cm × 41cm、深さ 23cm を測る。埋土は褐灰色粘質土 (10YR4/1) を基調とし、壁面側にやや酸化の激しい埋土 (柱痕か) がある。出土遺物は、土師器甕及び須恵器杯 A 類の破片。坑底面から出土した礎板は片面が炭化する。分割材で一端は山形に切断、もう一端は斜めに切断痕が入る。樹種はクリ材。

210号土坑 (第192図)

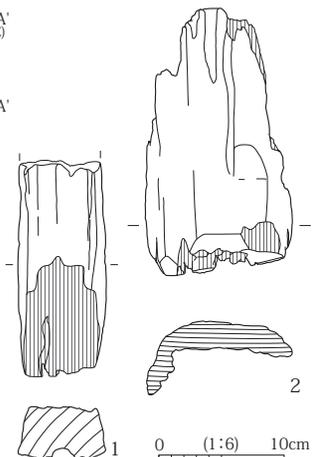
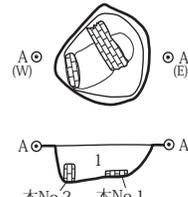
規模 49cm × 43cm、深さ 19cm を測る。埋土は僅かに酸化した褐灰土 (10YR4/1) の単純堆積で、埋土中から木製遺物が 2 点出土した。1 は角材で、出土状態から柱材の割材と考えられる。一端が斜めに欠



第190図 SK 232の全景



第191図 SK 207 礎板材出土状態と礎板



第192図 SK 210 礎板材出土状態と礎板

損。樹種はクリ。2は面が加工され、底面部分が残っていることから柱材の一部と考えられるが、出土状態から柱を礎板として転用していた可能性もある。21.0 × 11.6 × 2.2cmのクリ材。

VIII Y—16

調査区境で、土坑は4基（SK 26・SK 27・SK 211・SK 229）のみ検出できた。SK 229とSK 26はY—21区のSK 25とともに、1間×2間の掘立柱建物跡となる可能性がある。

VIII Y—21

南にSD 20、東にSD 03 南北流路がある。遺構の密集度は高く、土坑は11基（SK 17・18・22・23・24・25・28・29・30・311・1198）、掘立柱建物跡が2軒（ST 05・ST 07）検出できた。SK 28とSK 29とSK 311さらにSK 17とSK 24とSK 16（E—1区）は配列から、掘立柱建物跡の桁側柱となるか、あるいは柵列跡の可能性も考えられる。柵列であれば、Y—16区のSK 229、SK 26、本区のSK 25の組み合わせも、その仲間と考えるべきであろうか。性格は不明である。

17号土坑（第193図）

平面形は円形で、断面は底部が平坦なタライ状。規模66cm × 57cm、深さ16cmを測る。埋土は黒色粘土（10YR1.7/1）の単層。鉄分が僅かに含まれ粘性が非常に強い。木片（15.5 × 4.8 × 1.5 cm）が1点出土している。坑底面付近から出土したことから柱材、礎板の剥がれ材の可能性もある。

28号土坑（第194図）

規模は33cm × 25cm、深さ14cm。埋土は黒色土（10YR2/1）の単純堆積で粘性・締まりが強い。

30号土坑（第195図）

平面は楕円形で、壁面に段を有する断面形態。規模60cm × 47cm、深さ18cmを測る。埋土は単層で粘性締りが強い黒色粘土（10YR 1.7/1）。出土遺物はない。

IX D—5

中央部は暗渠により破壊されているが、その両側に土坑7基（SK 11・SK 12・SK 13・SK 204・SK 205・SK 206・SK 485）を検出した。SK 11とSK 12及びSK 13は配列から、Y—21区SK 28ほか同様に、掘立柱建物跡ないしは柵列跡を想定できるか。暗渠付近から真鍮製のキセル1点（第366図10）が出土している。

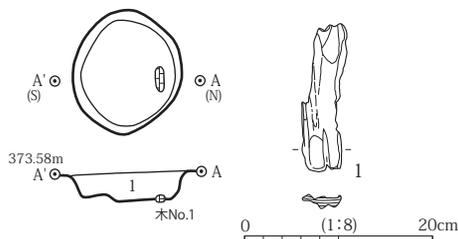
IX E—1

遺構は極めて少なく、土坑3基（SK 14・SK 15・SK 16）のみを確認したに留まった。

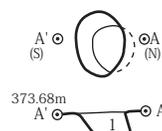
溝状遺構

20号溝跡

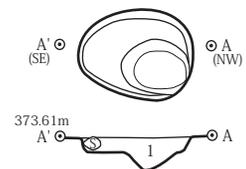
VIII X—25、Y—21、IX D—5にかけて、東西方向に走る溝状の落ち込みを確認した。埋土は黒色粘土（N2/0）の単純堆積。長さ10m22cm、幅38cm、残存深度12cm。西側は削平により検出不能で、東側はSD 03に破壊される。軸方向は27度西から北に傾くが、方向から判断すると、SD 24と関連をもつ溝跡であろうか。出土遺物は須恵器杯蓋の微小破片1片と板材1点がある。



第193図 SK 17 木製品出土状態と礎板？

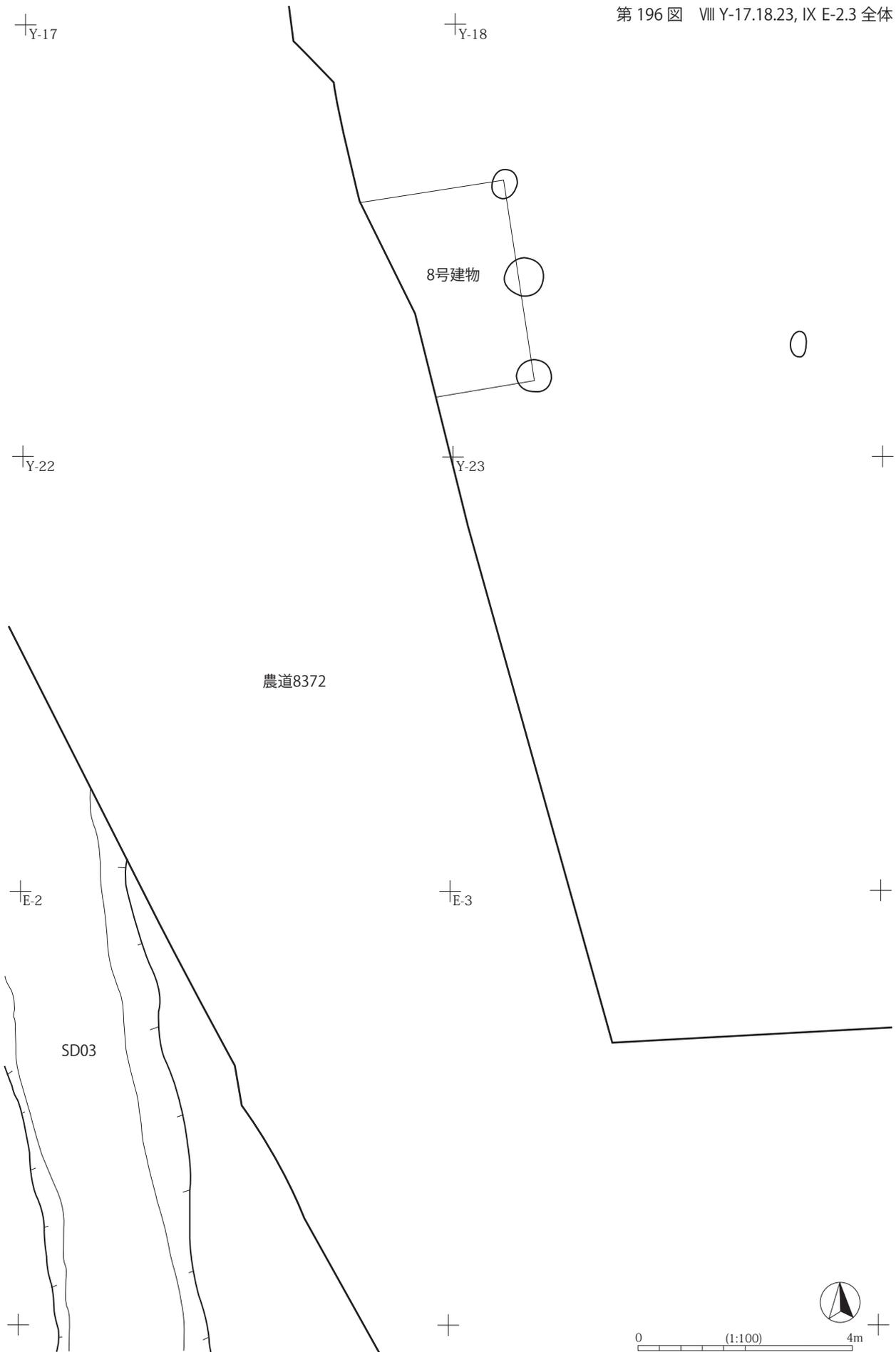


第194図 SK 28 の完掘

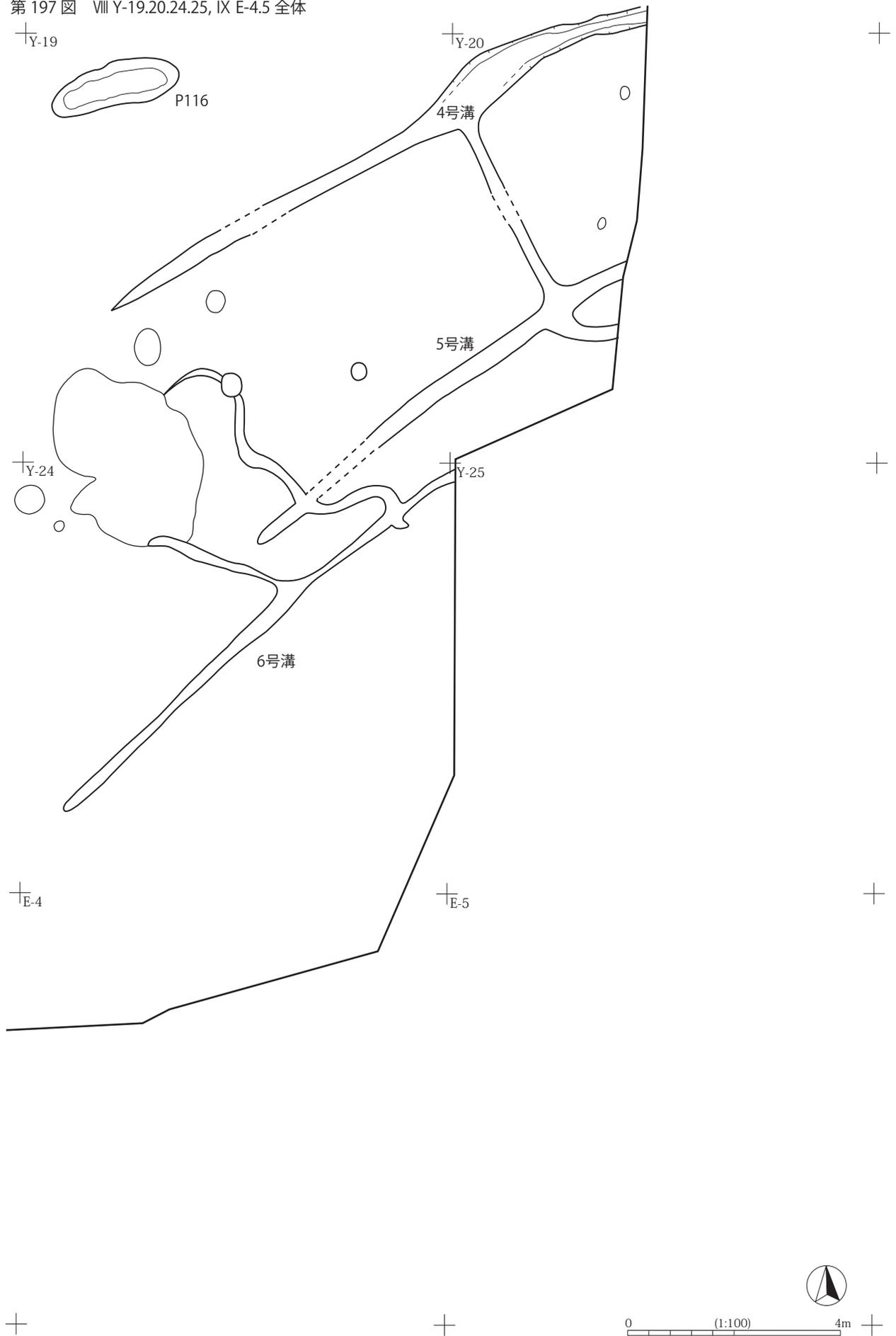


第195図 SK 30 の完掘

第 196 図 VIII Y-17.18.23, IX E-2.3 全体



第197図 VIII Y-19.20.24.25, IX E-4.5 全体



VIII Y-17~20・23~25、IX E-2~5区

B地点南端の本地区には、農道 8372 号に近接して 8 号掘立柱建物跡 1 棟がある。東端部には楕円形状の土坑 (P116) が 1 基と 4 号から 6 号の溝 3 本が調査されている。

掘立柱建物跡

8 号掘立柱建物跡

2 間×2 間以上の東西建物を想定する。調査区の西端にあり、西側の妻部分は調査区外の農道部分にかかり不明。検出時、掘り方の大部分が消失しており、柱穴底面にある礎板材のみが確認できた。礎板は長さ 40cm から 50cm ほどで、幅 10cm を測る。出土遺物はない。今回の A 地点 X-10 区・15 区で確認した ST 39 もほぼ同様な規模と形状を示しており、それと類似の施設であろうか。ただし ST 39 の 3 基の柱穴には礎板材の出土はない。SD 03 の南北流路を挟んで東西に位置していることから、時期的な差異がなければ、2 間×1 間以上の南北棟建物とも考えられるか。

溝状遺構

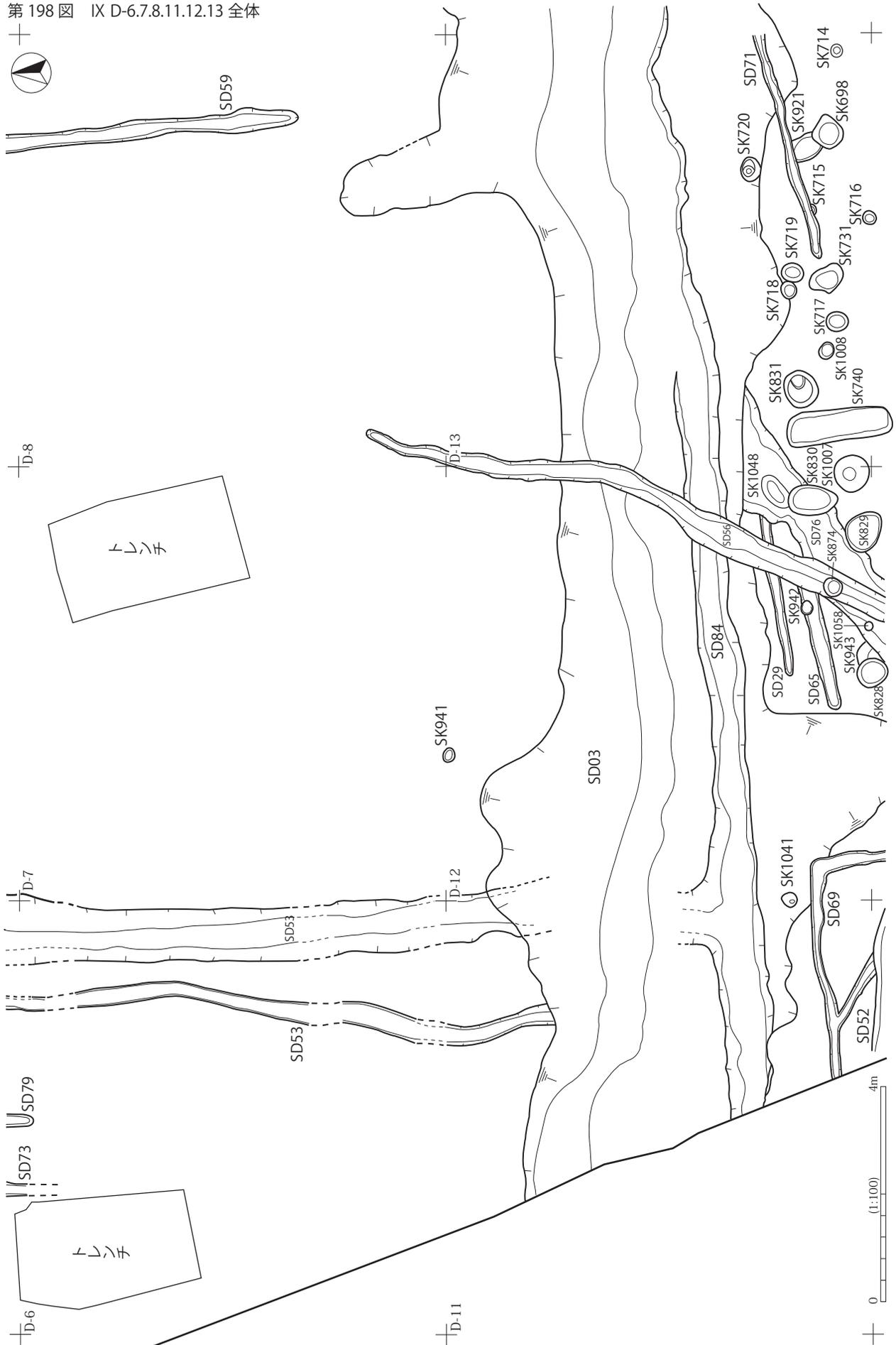
4 号～6 号溝跡

規模は幅 20cm から 30cm、深さ 20cm ほどで、断面は U 字状を呈する。出土遺物はない。規模形状から判断すると、今回 A 地点③区にて検出した耕作関連の溝跡と考えた痕跡と類似する。例えば、SD 51 と SD 14、SD 50 と SD 85 などの組み合わせのある溝である。ただし方向は今回のものが、ほぼ東西方向であるのに対して、B 地点の 4 号～6 号は E-40°-N の傾きがある。



SD 25 出土の土器

第198図 IX D-6.7.8.11.12.13 全体



IX-D-6・7・8・11・12・13区

本調査区は②区南端にあたり、中央部に東西方向の大溝 SD 03 がある。SD 03 を境に③区北端は遺構が密集する。②区南端の D-6 区から 8 区にかけての遺構は粗で、調査区北側から続く SD 73、SD 79、SD 53、SD 59、SK 941 のみを検出した。以下、主な遺構につき概要を示す。

IXD-11

大部分が SD 03 で、③には SD 69 及び SK 1041 がある。SD 69 は、D-1 区を中心に検出した SD 80 及び SD 73 と機能を同じくする溝跡と考えられる。

IXD-12

土 坑

SD 03 が大部分を占め、これを破壊する南北方向の溝 SD 56 が調査区中央部を走る。柱状の土坑は 11 基が確認できた。SK 828～SK 830、SK 874、SK 941～SK 943、SK 1007、SK 1041、SK 1048、SK 1058 がある。

830号土坑（第199図）

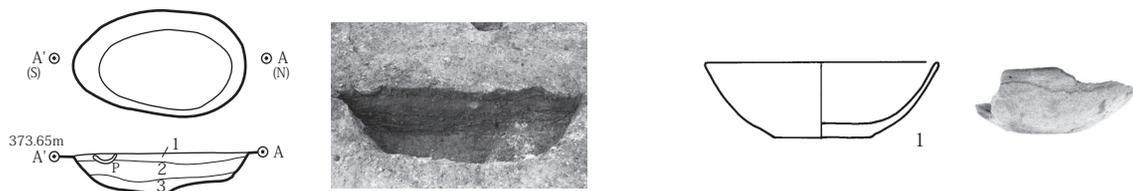
1048号土坑を破壊する。平面形は、楕円形状で、断面形は底部が平坦なタライ状。規模は93cm×54cm、深さ22cmを測る。埋土は3層からなり、水平に堆積、下層ほど炭化物が少なくなる。1層は黒褐色土（10YR2/3）、2層暗褐色土（10YR3/4）、最下層の3層黒褐色土（10YR1/3）。遺物は土師器、黒色土器A杯A類が出土している。1は杯A類の1/3個体だが、風化著しい。糸切り離し調整。時期は古代8期前後か。

941号土坑

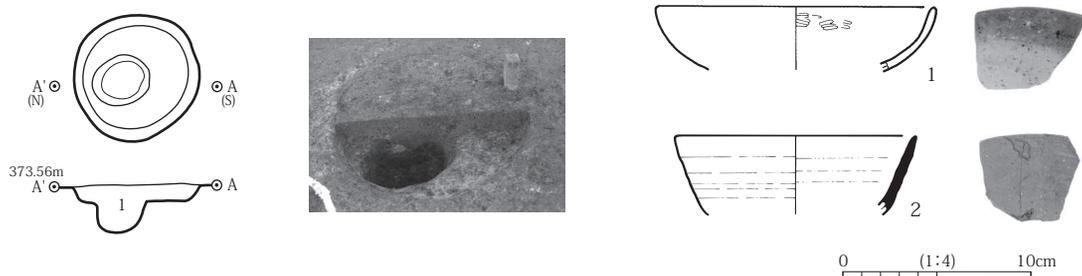
平面形は楕円状、断面は壁面底部に段を有する形態。規模は26cm×16cmと小さく、深さは17cmを測る。埋土は赤褐色粒子と砂混じりの粘質土で、灰黄褐色土（10YR5/2）の単純堆積。出土遺物はない。

1007号土坑（第200図）

平面円形状で、底部に段を有する断面形態。径66cm、深さ17cm。埋土は、単層で、鉄分、炭化物を含む。遺物は非ロクロ土師器の杯C類口縁部破片（No1）、須恵器杯A類口縁部破片（No2）が出土している。2は内面横方向に丁寧なミガキ整形が施される。2は外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。この他、川原石が1点（17.4g）ある。古代4期から6期か。



第199図 SK 830の全景（東から）と出土の土器



第200図 SK 1007の全景（西から）と出土の土器

1041号土坑

平面形は円形、断面は皿状である。規模は30cm×30cm、深さ19cm。埋土は2層で水平に堆積、1層は締りなく植物遺体を含む。2層は締りがあり、砂質を多く含む。検出時、埋土上面に径60cm前後の扁平礫があった。時期は古代か。

IX D—13

土坑

SB 07 及び SB 09 の北西部にあたり、中央部分を SD 03 が走る。SD 56、SD 71、SD 76、SD 84 を検出した。土坑は 12 基 (SK 698・SK 714・SK 715・SK 717・SK 718～SK 720・SK 731・SK 740・SK 831・SK 921・SK 1008) が検出できた。

698号土坑 (第201図)

SK 921 を破壊して構築。平面は円形で、底部がほぼ平坦なタライ状。規模63cm×63cm、深さ26cmを測る。埋土は4層に分層でき、中心部に柱痕跡(10YR3/2 黒褐色土)が残る。出土遺物はない。

718号土坑 (第202図)

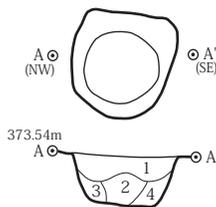
円形で、壁面底部に段を有する形態。SK 719 と隣接して検出した。規模30cm×30cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色土(10YR4/2)の単純堆積。出土遺物はない。

720号土坑 (第203図)

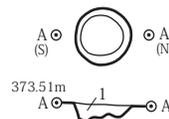
平面形は楕円形状で、断面は壁面底部に段を有する形態。43cm×36cm、深さ31cmを測り、埋土は2層ある。中央部には柱痕跡(10YR3/1 黒褐色土)がある。上部はSD 03によって破壊されたものか、切り合い関係は不明。遺物は黒色土器A杯A類、土師器杯A類、甕形土器の破片、羽口破片1点(11.3g)が出土した。

831号土坑 (第204図)

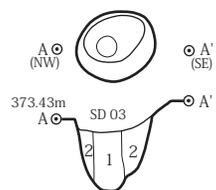
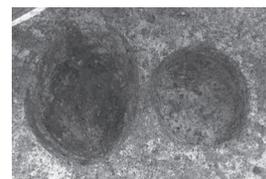
円形で、断面は壁面底部に段を有する形態。規模67cm×61cm、深さ38cm。埋土は2層に分層でき、1層は炭化物や細礫が混じる暗褐色土(10YR3/3)、2層は赤灰褐色土(2.5YR4/1)で、ほぼ水平に堆積。遺物は黒色土器A杯A類、黒色土器Bの耳皿、土師器甕、灰釉椀などが出土した。時期は古代8期以降であろう。



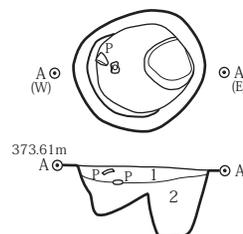
第201図 SK 698の全景(西から)



第202図 SK 718の全景(北から)



第203図 SK 720の全景



第204図 SK 831の全景



溝状遺構

84号溝跡（第205図・第206図）

時期： 8世紀前半（古代2期～3期）

位置： IX D - 11 ~ 13

長軸方向： W - 4.5° - S

規模： 長さ18m76cm、幅68cm、残存深度13cm

性格： 区画排水施設か

断面形態： タライ状（底面に凹凸あり）

壁立ち上がり： 約40度の傾斜

埋土堆積： 1層黒色粘質土（10Y2/1）、2層オリーブ灰色粘質土（10Y4/2）、3層黒色粘質土（10Y2/1）
2層は砂質で小礫を混入する。

遺構重複： SD 03・SD 56 に切られる。

検出経過： SD 03 調査終了後に、③区側にて黒色粘質土の溝状の落ち込みを検出した。SD 03 を完掘した後であったため、重複部分での遺物の混同はあったものと考えられる。

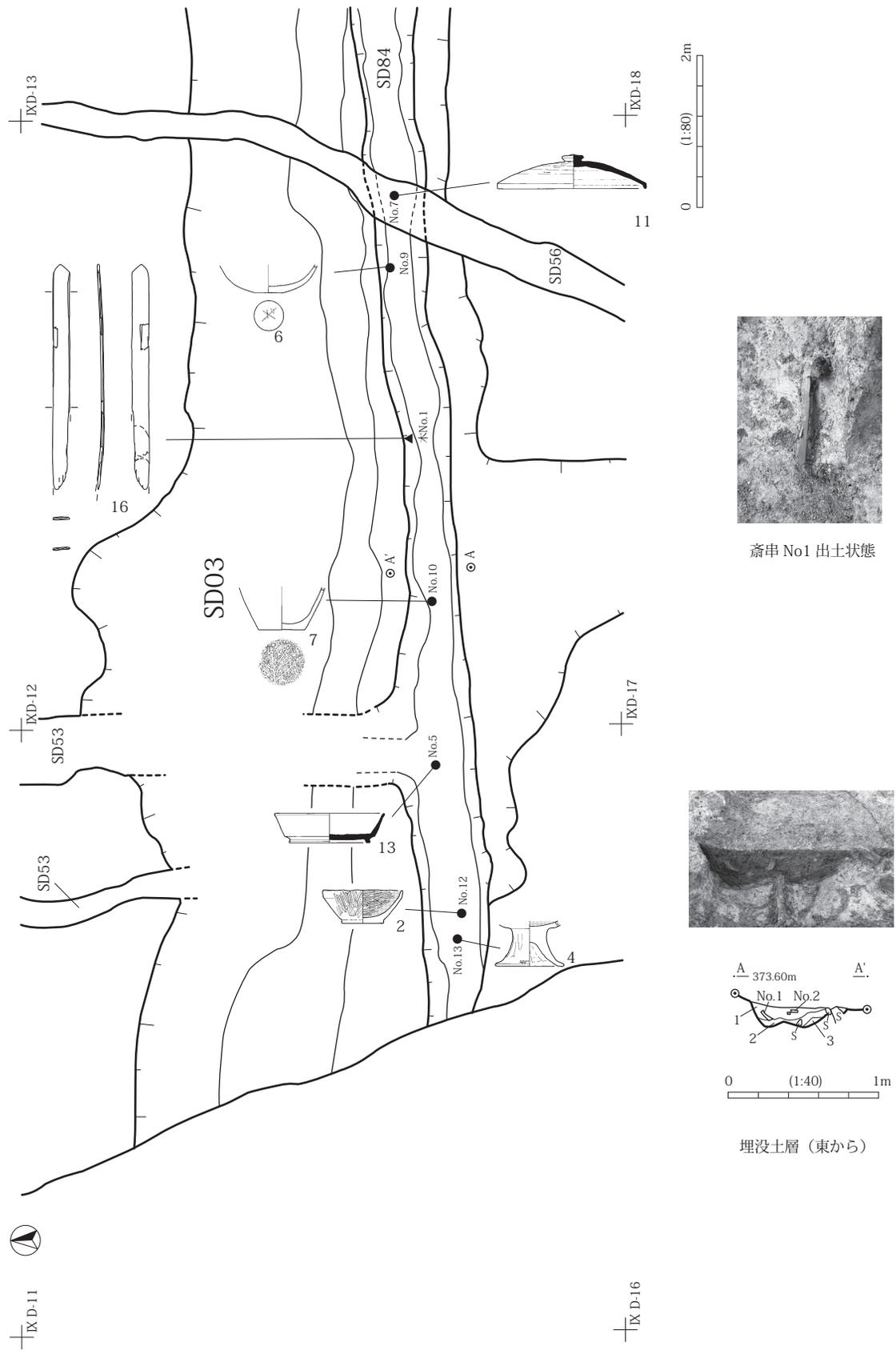
遺物出土状況： 埋土中から大量に土器が出土した。土器破片215片と木製品9点で、SD 03 との重複関係から、厳密には帰属を決し得ない資料も含まれる（第42表・第43表）。

底面の様子： 全体の形状は浅いタライ状で、底面に若干凹凸がある（第205図）。

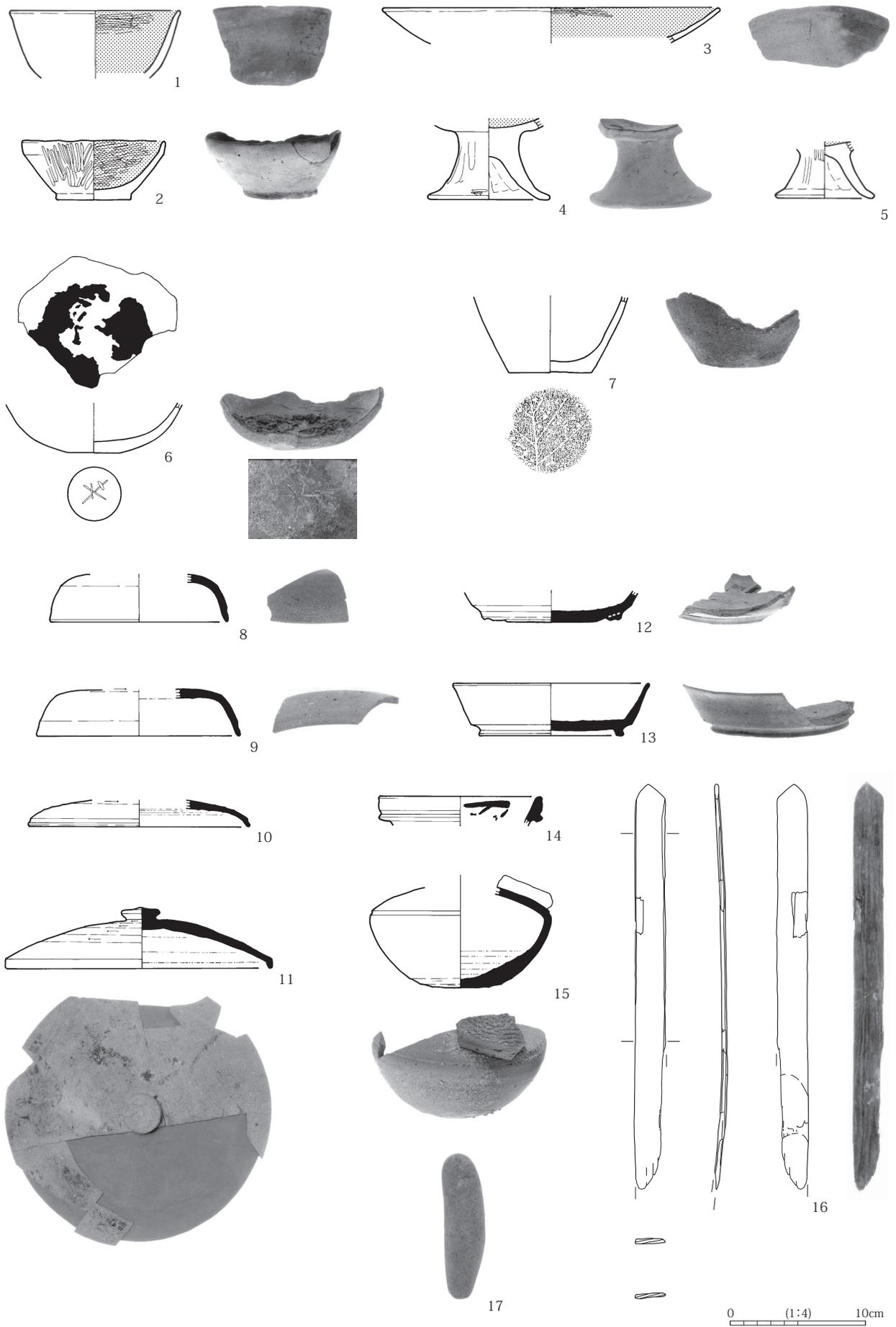
出土遺物： 1から6は非ロクロ土師器。1と2は杯I類。1は口縁部の破片で、口縁に平行な幅0.2cmのミガキ調整が施される。2はNo12に相当、底部円板状に張り出し、口縁は屈曲して立ち上がる形態。底部ケズリ成形後にミガキ調整。外面は、底部から口縁に向けて縦方向にミガキが、内面は横方向の丁寧なミガキ調整が施される。口径10.3cm、器高4.3cm、底径5.3cmを測る。3から5は高杯形土器。3は口縁部破片。内面は黒光りする程度にミガキ調整される。5と6は脚部で、縦方向のケズリがある。5はNo13に当たる。6はNo9の杯C類底部。内外面ともにミガキ調整仕上げ。内面には漆状の付着物が0.4cmの厚さで付着。底部にはヘラ書きによる「×」記号がある。7はNo10の土師器甕B類底部。極細い板目痕跡を観察できる。胎土は砂質で、底部に木葉痕がある。8と9は須恵器杯蓋A類。8は非常に硬質で、焼成良好。口径13.0cmを測る。9は天井部外面に2/3以上のケズリが施される。胎土に黒色の粒子を混入。口径14.8cm。10・11は須恵器の杯蓋。10は1/5程度の破片で、外面の2/3程度をケズリ調整する。かえしは天井部から滑らかに低く折れ曲がり、やや外反。11は外面3/4以上をケズリ調整し、つまみ部は高く、少し高い位置に笠状に貼り付く。かえしはなだらかに小さく折れ曲がり直立。直径9.5cm。12・13は須恵器杯B類。13はヘラ切り離し調整で、丸底風にケズリ成形した後、低い高台を貼りつけナデ調整仕上げする。高台面接地ではなく、丸底部が接地する。13はNo5で杯B類1/2個体。口径14.2cm、器高3.8cm、底部は切り離し後回転ケズリ調整し、高台貼りつけ。高台は如意形で平接地。底部は平らにケズリ込まれる。14は須恵器甕の口か。内面に付着物がある。15はNo14で、須恵器短頸壺の体部。肩部に一本沈線が巡り、焼成時の土器破片が付着する。底部はケズリ調整、体部に黒色粒子を含む。木製品は9点があり、板材4点、棒材2点、割材2点、斎串1点である。16は下端部を欠失するが、頭部を山形にカットした斎串か。30.0×2.2×0.4cmを測る。この他、17の閃緑岩材敲石1点（10.5×3.1×2.5cm、117.7g）と鉄石英材



SK 84の全景（東から）



第 205 図 SD 84 遺物出土状態



第 206 図 SD 84 出土の土器・木製品・石器

第3章 発掘調査の概要

の原石1点(13.7g)、川原石2点(64.5g)、動物骨(ニホンジカP・ニホンジカMC・不明)各1点がある。

時期の判断根拠： 第206図2をはじめとする非ロクロ土師器が多出し、8や9など須恵器杯蓋Aの出土、さらには底部丸底ヘラケズリの杯B類等、古代1期前後の特徴が強い。埋土中には黒色土器A類が11点出土し、2期以後の後出的要素も観られるが、SD03との重複関係も考慮すれば、遺物総体は1期ないしは2期と判断できる。

遺跡名	非ロクロ土師器				土師器										黒色土器A				須恵器				数/総重量 (破片/g)				
	杯C	杯I	高杯	塞E	杯A	杯D	塞	塞A	塞B	塞C	塞E	塞H	塞I	小型塞A	杯A	皿	杯A	杯B	蓋	蓋B	塞	塞A		塞C	壺	短頸壺	甕
SD84埋土	11		8	2	2	3	9	17	17	17	15		1	3	11	1	26	6	2	9	2	1	18	4	2	1	188/2,459.7
SD84(Na付)	2	2	3	1				2				1			1		2		8	3				2		27/1,879.6	

第42表 SD84出土土器組成

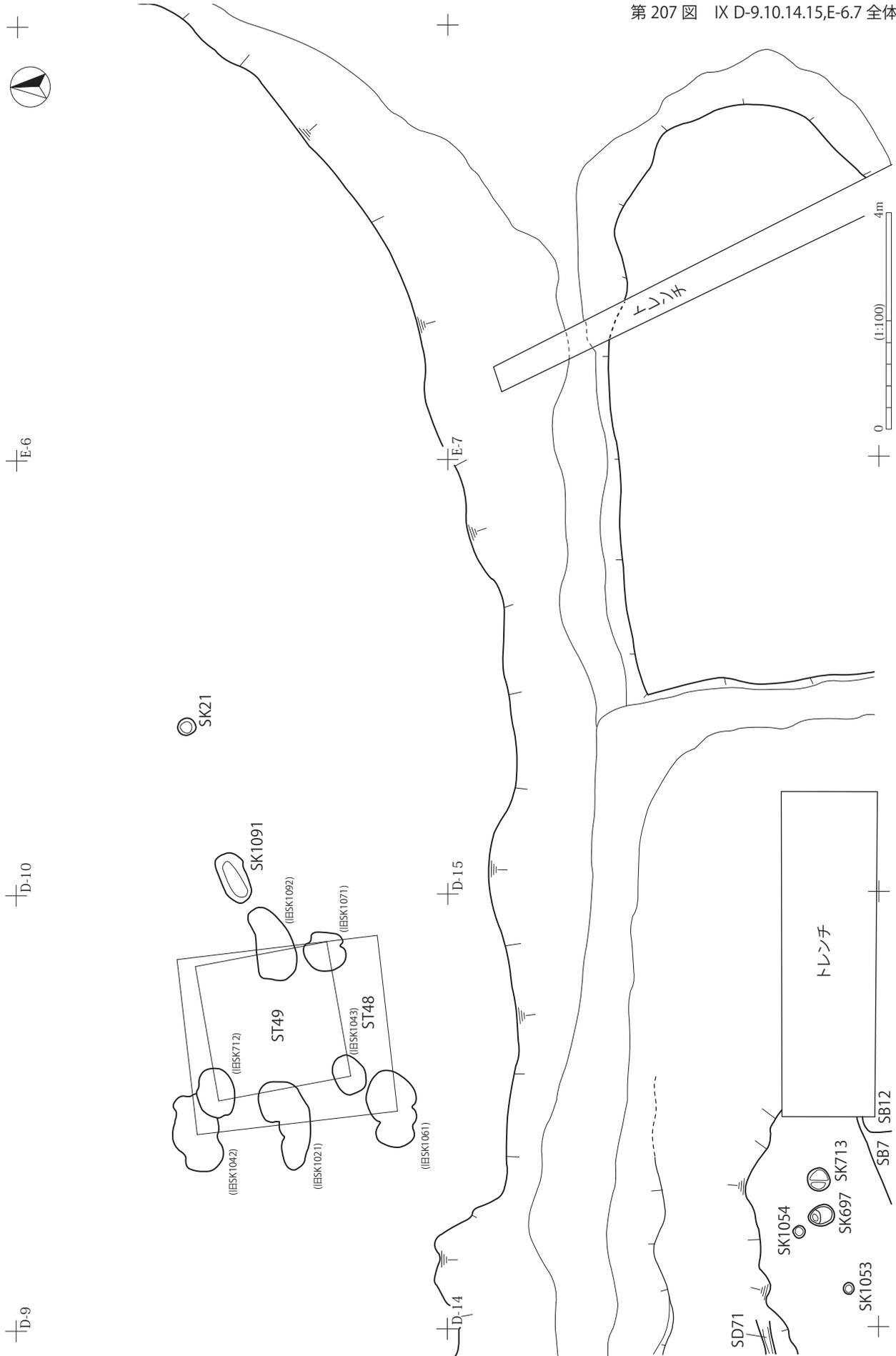
挿図番号	遺構名	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第206図16	SD84		斎串	板目		30.0	2.2	0.4	
	SD84	埋土	割材	板目		9.5	4.3	2.4	
	SD84	埋土	板材	柾目		14.5	1.5	0.8	
	SD84		板材	板目		23.5	3.7	0.8	炭化
	SD84		棒材	芯持丸木材		28.0	直径 2.5		
	SD84		割材	柾目		33.0	3.2	2.5	
	SD84	埋土	棒材	芯持丸木材		8.0	直径 1.0		先端に切断痕あり
	SD84	埋土	板材	板目		8.8	3.0	1.1	
	SD84	埋土	板材	柾目		18.7	1.5	0.8	

第43表 SD84出土木製品属性

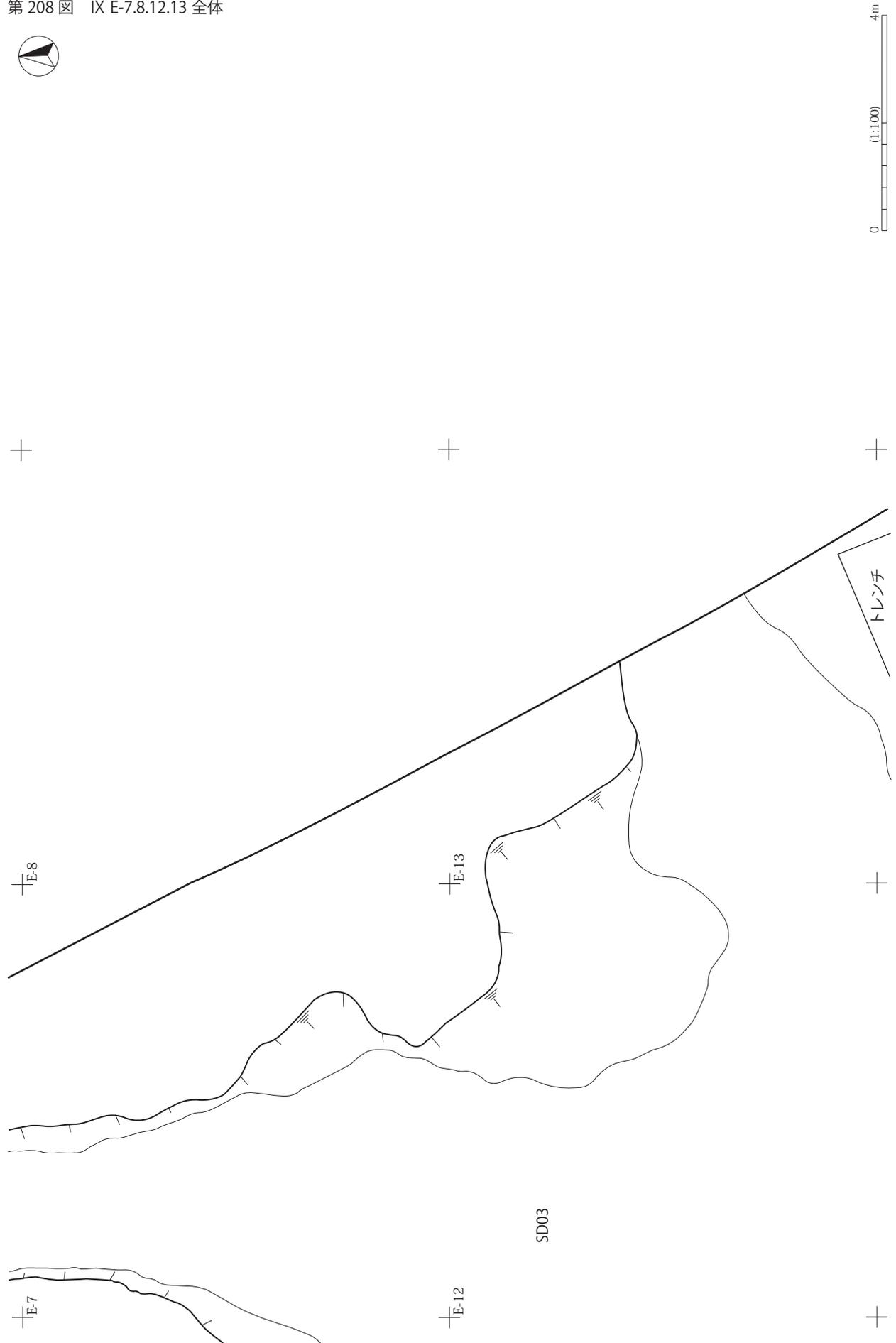


社宮司遺跡出土の斎串状木製品

第 207 図 IX D-9.10.14.15,E-6.7 全体



第208図 IX E-7.8.12.13 全体



IX-D-9・11・14・15区、IX-E-6・7区

本調査区は②区南端にあたる。ほぼ中央部にSD 03が東西方向に走り、これを挟んだ南北に柱状の落ち込み13箇所を確認した。これらの内、7基に配列から掘立柱建物跡を想定した。ST 48（旧SK 1042・SK 1021・SK 1061・SK 1092）とST 49（旧SK 712・SK 1043・SK 1071）である。

土 坑

IX D—1 0

土坑状の落ち込みは2箇所を確認できた。SK 21 と SK 1091 である。

1 0 9 1 号土坑

楕円形状で、暗褐色土（10YR3/3）の単純堆積。規模92cm×50cm、深さ22cmを測る。

IX D—1 4

土坑状の落ち込みは4箇所に確認した。SD 03 と SB 07 及び SB 12 の間に位置する。SK 697、SK 713、SK 1053、SK 1054。

6 9 7 号土坑

平面形は楕円形状で、埋没土は2層に分けられた。1層暗褐色土（10YR3/3）、2層にぶい黄褐色土（10YR4/3）。規模は48cm×38cm、深さ28cmを測る。埋土中から灰釉陶器碗の破片が出土している。時期は6期以降であろうか。

1 0 5 4 号土坑

直径20cmを測る円形状で、深さ8cmと浅い。埋土は黒褐色土（10YR3/1）の単純堆積。隣接して検出したSK 1053もほぼ同形態、同規模である。

D区検出面（②区該当区）出土の土器（第209図）

D—5・7区

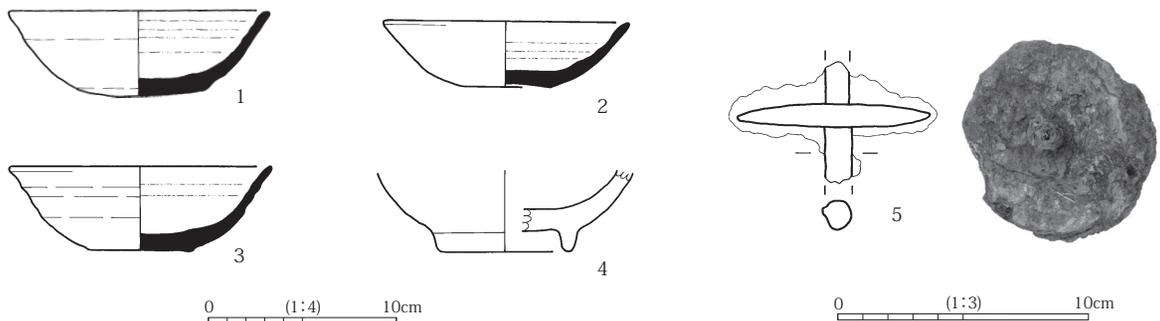
1は須恵器杯A類の2/3個体。底部ヘラ切り離し調整。口径13.6cm、底径6.1cm。2は須恵器杯A類の2/3個体。胎土中に黒色粒子を混入する。底部糸切り離し調整、口径12.8cm、底部内径7.0cmを測る。外面に墨汁痕を観察できる。

D—1 1 区

3は須恵器杯A類の1/3程度の個体。底部ヘラ切り離し後、ナデ調整。図の傾きは上手く表現できていないが、口縁部は強く外反し、鉄鉢状に開く形態である。

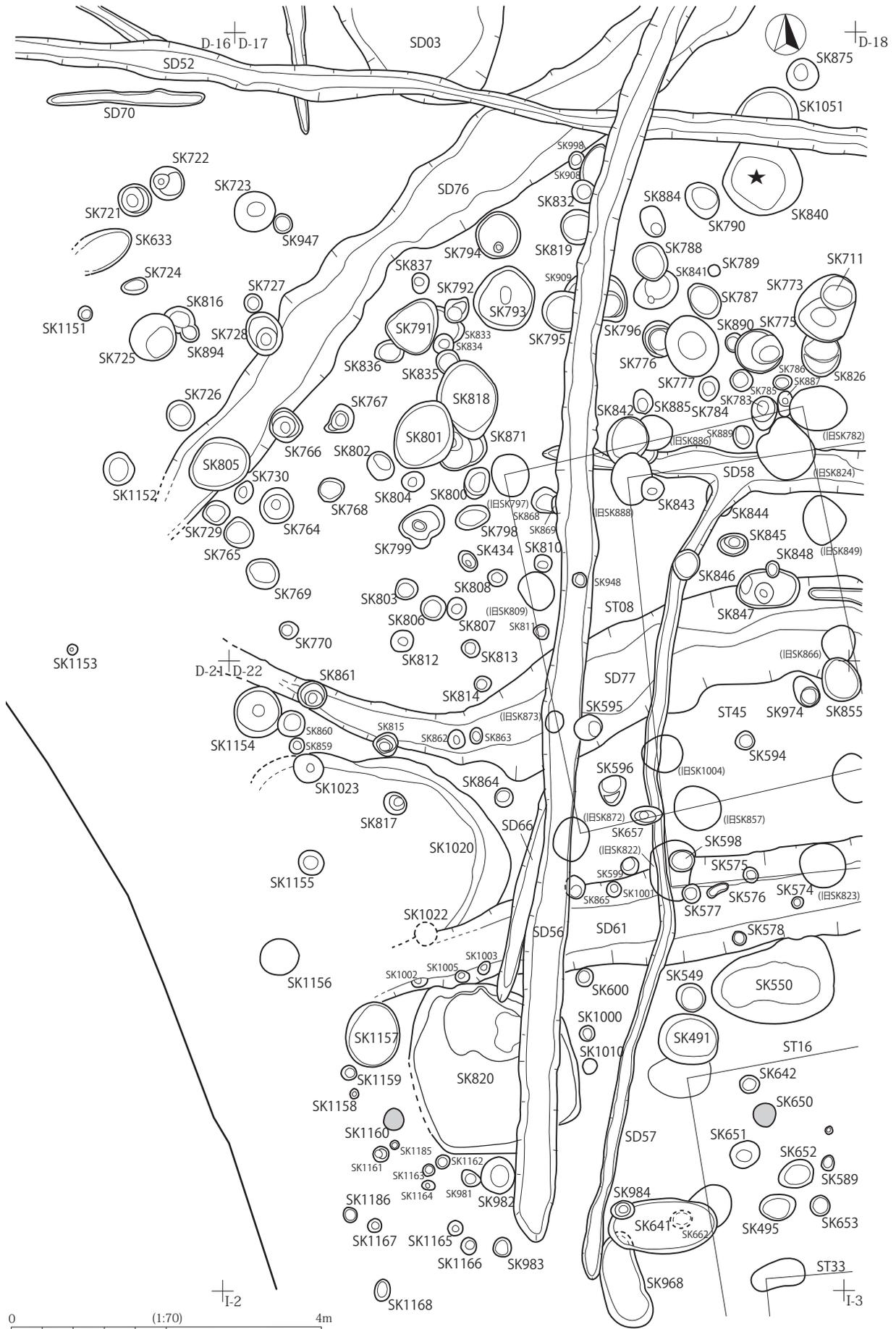
D—2・9・14区

4は青磁碗の底部。底径6.7cm。14世紀から15世紀頃の所産と考えられる。5はD—2区出土の紡錘車。



第209図 D区出土の土器

第210図 IX D-16.17.21.22 全体



③区

IX-D-16・17・21・22区

遺跡を東西方向に分断する大溝 SD 03 以南を③区とする。③区では無数の溝跡と密集する土坑群を確認した。土坑状の落ち込みの大多数は、その形状と規模から柱穴状の施設痕跡と想定でき、複数の掘立柱建物あるいは柵列等を考えるべきであるが、明瞭に建物の配列を推定できた例は、D-17 で 8 基 (旧 SK 782・797・809・824・849・866・886・888)、D-22 で 9 基 (旧 SK 496・822・823・857・872・873・1004) であった。

土坑

IX D-16

北端に東西方向の溝 SD 52 が走り、これに平行近接して SD 70 がある。中央部分には北東方向から斜めに南下する SD 76 を検出した。土坑と考えられる落ち込みは 13 基がある。SK 633、SK 721、SK 722、SK 724～SK 726、SK 729、SK 805、SK 816、SK 894、SK 1151～SK 1153 である。

722号土坑 (第211図)

平面形は円形で、壁面の底部に段を有する。規模は 44cm × 43cm、深さ 26cm を測る。埋土は水平に堆積し、3層に分層できた。柱痕部分の埋没土は2層からなり、下層は粘質ブロックと炭化物を含む暗褐色土 (10YR3/3)、上層は褐色土 (10YR4/4) で炭化物を含む。須恵器甕 E 類の破片が出土している。

725号土坑 (第212図)

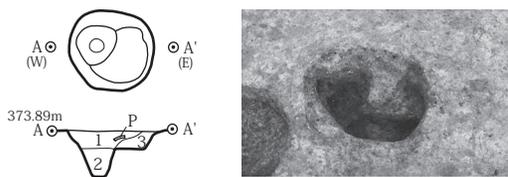
平面形は円形で、断面は皿状。816号土坑を破壊している。規模は 62cm × 59cm、深さ 18cm を測る。埋土は水平に堆積し、2層に分層できた。下層は炭化物と白色粘土ブロックが混じった暗褐色土 (10YR3/3) で、上層は同質の褐色土 (10YR4/4)。出土遺物はない。時期は不明。

894号土坑 (第213図)

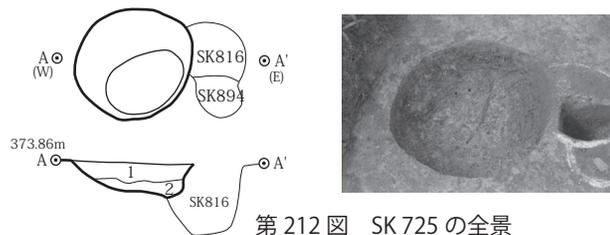
円形で断面は柱状を呈する。直径 23cm、深さ 20cm と比較的小さな掘り方であるが、坑内に径 20cm 前後の礫が 1 点出土した。埋土は単層の黒褐色 (10YR2/3) で、遺物は須恵器瓶の破片がある。816号土坑に壊される。時期は古代6期以降であろう。

1152号土坑 (第214図)

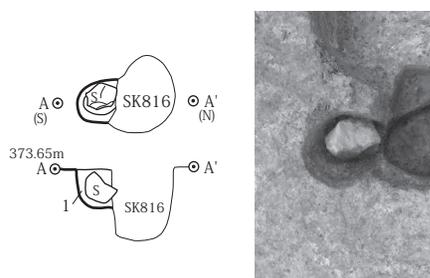
平面は円形で、底部が平坦なタライ状。規模は 44cm × 42cm、深さ 24cm を測る。埋土は単層。埋土中から 1 の黒色土器皿 B が 1 点出土した。時期は古代6期以降か。



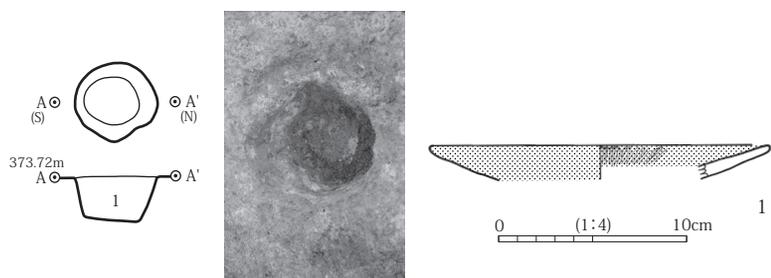
第 211 図 SK 722 の全景



第 212 図 SK 725 の全景



第 213 図 SK 894 の全景



第 214 図 SK 1152 の全景及び出土の土器

IX D—17

北端は16区から続くSD 52が東西に走り、中央部にはSD 76、さらにD—8区から真直ぐに南下するSD 56が調査区を縦断している。SD 76より東南部分にかけて柱状の土坑が密集する。78基（SK 434・711・723・727・728・730・764～770・773・775・776・777・783～796・798～804・806～808・810～813・818・819・826・832～837・840～848・868・869・871・875・884・885・887・889・890・908・909・947・948・998・1051）がある。

727号土坑（第215図）

平面形は円形で、底部が平坦なバケツ状。規模は24cm×23cm、深さ16cmを測る。埋土は黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積。出土遺物はない。

728号土坑（第215図）

楕円形状で、底部壁面に段を有する形態。規模は55cm×48cm、深さ30cmを測る。埋土は黒色土を基調とし、2層が水平に堆積。1層は10YR3/4、2層は10YR4/4。遺物は須恵器甕破片が出土。

766号土坑（第216図）

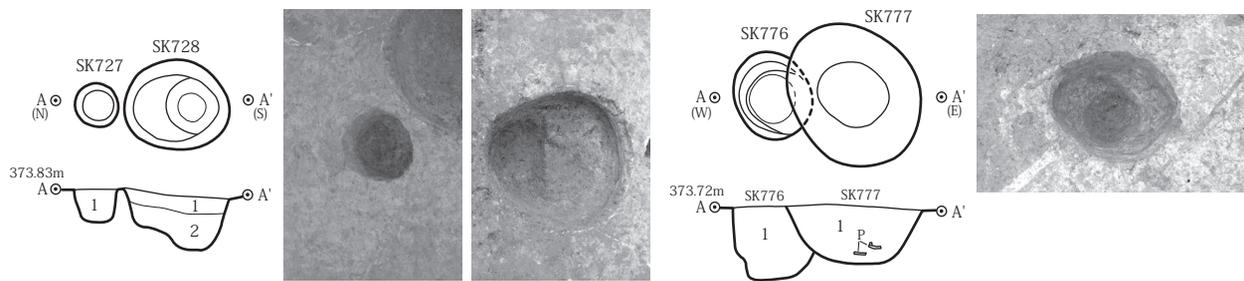
平面形は円形で、底部中央部に段を有する形態。規模は44cm×38cm、深さ24cm。柱痕状に埋土が残り、10YR2/3の黒褐色土。2層は掘り方部分の埋土で10YR3/4暗褐色土である。遺物は須恵器の破片が出土している。時期は不明。

769号土坑（第217図）

楕円形状で、底部が平坦なタライ状。規模は43cm×38cm、深さ32cmを測る。柱痕部分に径15cm前後の角礫2個が重なって出土。埋土は10YR3/3及び10YR3/4の暗褐色土。出土遺物はない。

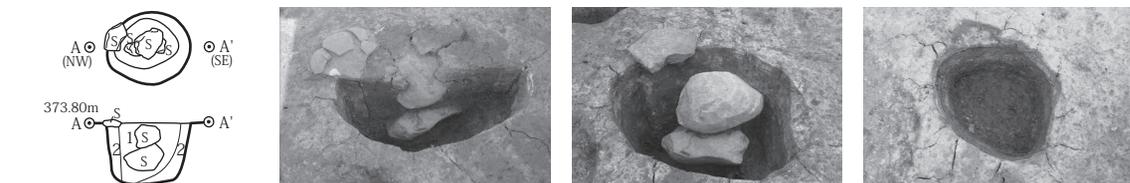
776号土坑・777号土坑（第218図）

776号は、楕円形状で壁面に段を有する。規模は46cm×39cm、深さ38cm。埋土は暗褐色土（10YR3/3）の単層である。777号土坑に破壊される。777号は、平面楕円形で底部皿状。規模は80cm×66cm、深さ35cm。暗褐色土（10YR3/3）の単純堆積で、炭化物を混入する。遺物は土師器甕形土器と黒色土器杯A類破片、磨石状の川原石1点と礫1点（14.3g）がある。時期は古代か。



第215図 SK727・SK728の全景

第216図 SK766の全景



第217図 SK769の全景

半截状態

礫出土状態

完掘状態

787号土坑 (第219図)

平面は楕円形で、底部が平坦なバケツ状。規模50cm×37cm、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色土を基調とし、3層に分層できる。1層10YR3/2、2層10YR4/4、下層の3層は10YR3/3。出土遺物は、須恵器杯A類と杯B類の破片が出土している。時期は古代。

799号土坑 (第220図)

平面は不整楕円形で、底部に段を有する形態。規模58cm×46cm、深さ34cmを測る。埋土は暗褐色土(10YR3/3)の単純堆積。底面中心付近に礫2個があり、柱材を固定する裏込めか。出土遺物には、須恵器杯A類破片、灰釉陶器碗破片が出土している。時期は古代6期以降か。

802号土坑 (第221図)

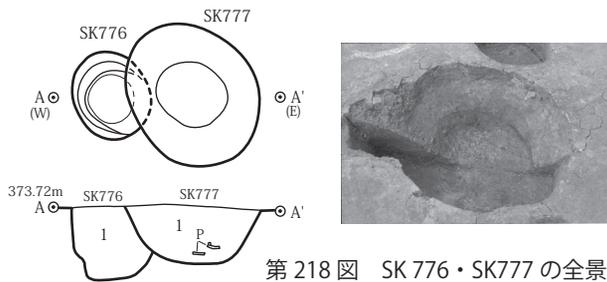
楕円形状で、深く掘りこまれた砲弾状を呈する。規模は38cm×33cm、深さ42cmを測る。埋土は3層(1層10YR3/3暗褐色土、2層10YR4/4、3層10YR3/3暗褐色土)に分層でき、ほぼ水平に堆積。遺物は1の灰釉陶器碗底部破片が出土している。時期は古代6期以降か。

832号土坑 (第222図)

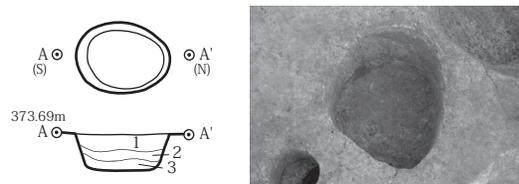
円形で、底部が丸く皿状。規模は32cm×29cm、深さ25cm。壁際に柱痕跡が残る。柱痕部分は、10YR3/4の暗褐色土。出土遺物はない。時期は古代か。SK908を破壊し、SD56に壊される。

868号土坑・869号土坑 (第223図)

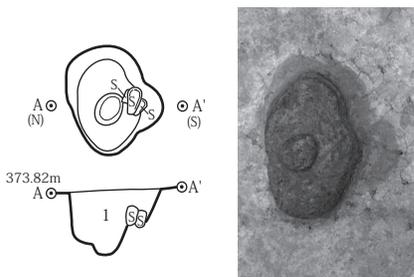
868号の平面形は円形で、断面は底部が丸い皿状。規模は33cm×32cm、深さ23cmを測る。柱状に柱痕跡が残る。柱痕跡は10YR3/4の暗褐色土。土師器甕形土器、小形甕形土器、須恵器杯A類、灰釉陶器碗の破片が出土している。他に川原石が1点(15.4g)ある。869号は868号を破壊して構築される。楕円形状で、底部が尖り気味に立ち上がる。規模は40cm×26cm、深さ56cm。



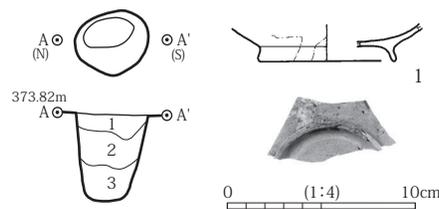
第218図 SK776・SK777の全景



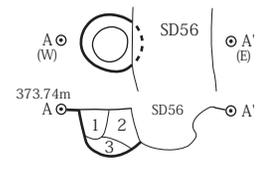
第219図 SK787の全景



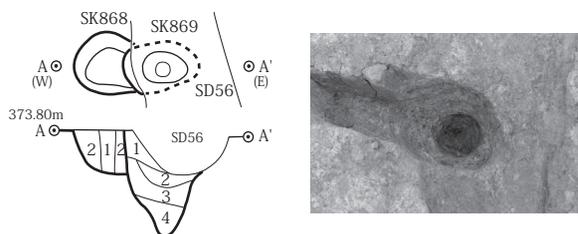
第220図 SK799の全景



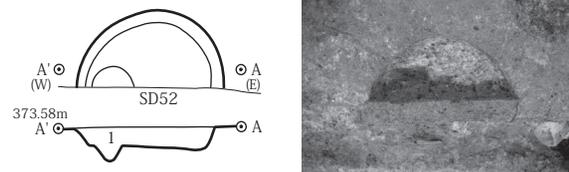
第221図 SK802の全景及び出土の土器



第222図 SK832の全景



第223図 SK868・SK869の全景



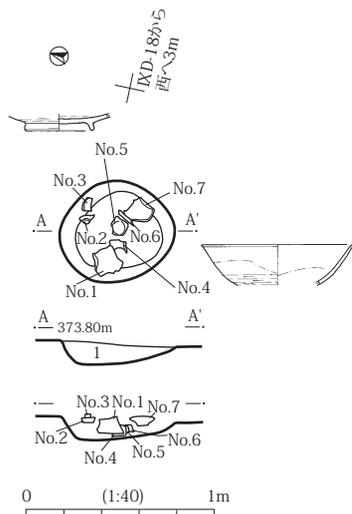
第224図 SK1051の全景

1051号土坑(第224図)

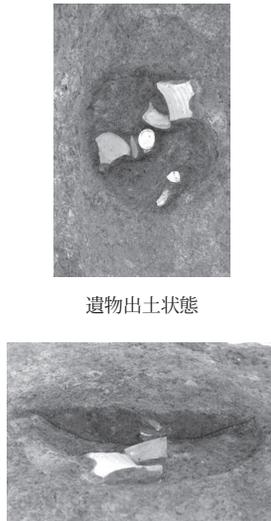
SD 52に破壊される。平面形は円形、断面は壁際に段を有する形態である。長径78cm、深さは18cm。単層で10YR3/4の暗褐色土。出土遺物はない。

828号土坑(第225図・第226図)

D-12区(D12区P186掲載)との境で確認した。SD 76に近接し、SK 943を破壊する。平面形は不整形円形状で、断面は浅いタライ状。規模は60cm×53cm、深さ11cmを測る。黒褐色土(10YR2/3)の単純堆積。埋土中には土器及び礫が投棄されたような状態で出土した。第225図No1とNo6・7は須恵器甕形土器A類の口縁部及び体部の破片、No2～No5は灰釉陶器碗形土器、同一個体であろうか。1はNo4の灰釉陶器口縁部破片で、口唇強く屈曲する器形で、口径18cm、施釉は刷毛塗り手法。2はNo5の底部破片。高台部分は丁寧にナデ調整される。古代6期以降か。

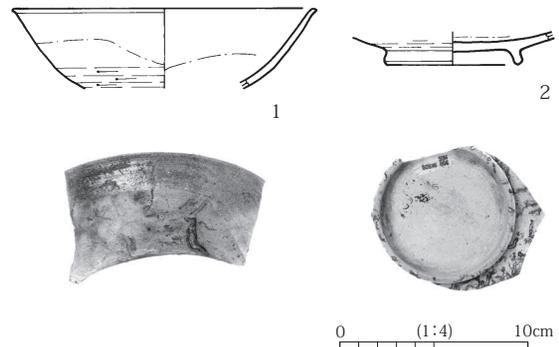


第225図 SK 828の遺物出土状態



遺物出土状態

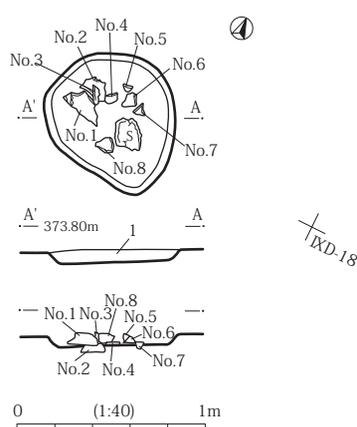
半截状態



第226図 SK 828出土の土器

829号土坑(第227図)

D-12区(D12区P186掲載)との境で確認。SD 76に近接し、SK 828と対峙した位置にある。SD 76との切り合い関係は不明。調査所見では切り合いはない。平面形は不整形円形状で、断面は浅いタライ状。規模は76cm×68cm、深さ7cmを測る。黒褐色土(10YR2/3)の単純堆積で、埋土中に土器が投棄されたような状態で出土した。第227図No1とNo3・5～7は須恵器甕形土器A類の口縁部及び体部の破片、No2とNo8は須恵器長頸壺の口縁部破片。



第227図 SK 829の遺物出土状態



遺物出土状態

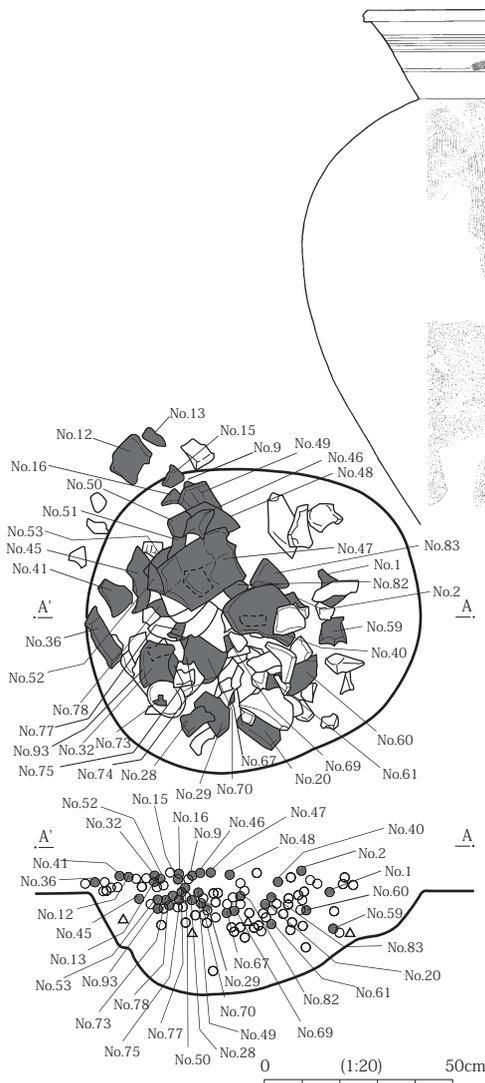
半截状態



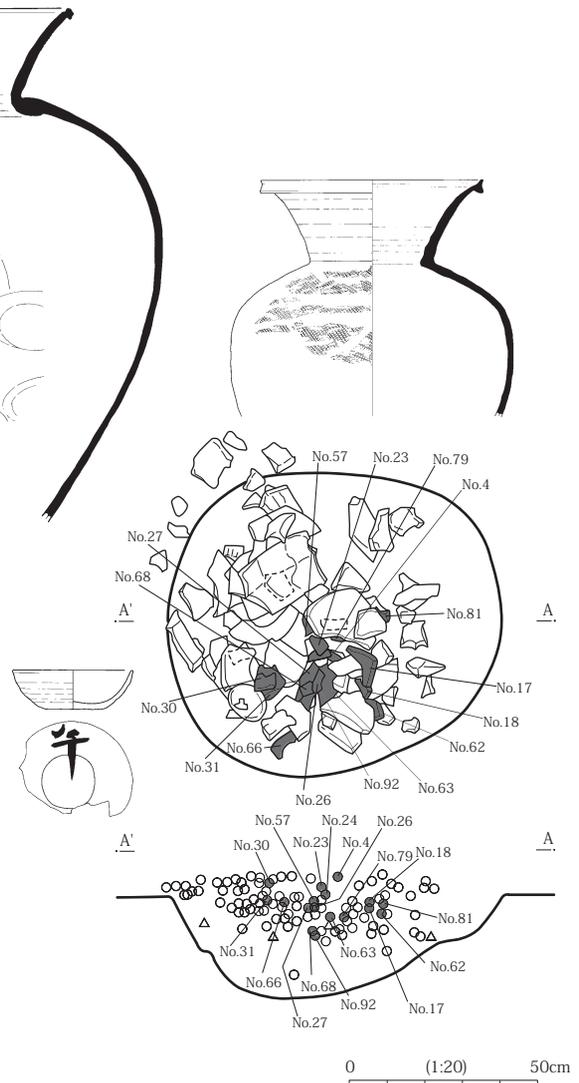
調査風景

840号土坑（第228図～第232図）

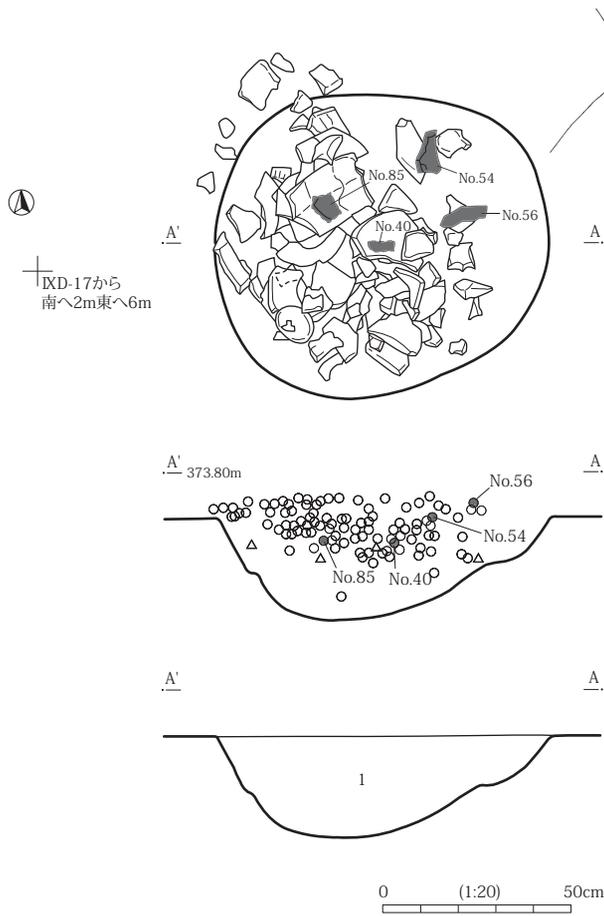
SD 52に北側の一部を破壊される。SK 1051とは別の土坑であり、接して施設されたと考えられるが、新旧関係、切り合いは不明である。平面形は不整円形状で、壁に段を有するボール形。規模は90cm×80cm、深さ26cmを測る。所見では、黒褐色土の単純堆積と判断し、焼土及び焼けた粘土塊を検出した深さ15cm程にある段部分が本来の坑底面で、再度の掘削が行われたと考えた。再掘削の後に、埋土中に須恵器甕形土器を一括投棄した祭祀色強い土坑と推定。一括個体土器は、3個体分の甕形土器であり、第232図2の個体Aは39片（No1.2.9.12.13.15～17.20.28.29.32.36.40.41.45.46.48～53.59～61.67.69.70.73～78.82.83.91.93）が接合、さらにSD 03 2層出土のNo41と接合関係にある。他に同一個体と考えられる破片79片がある。口縁部は横方向の回転ナデ調整、体部外面は板状工具による叩き締めで、当り痕は幅2.5cmを測る。総重量13.5kg。第231図3の個体Bは21片（No4.17.18.23.24.26.27.30.31.57.62.63.66.68.79.81.92他4片）が接合し、他に9片の同一個体がある。外面は布巻き板状工具による叩き締めで、内面は当て具痕跡を丁寧にナデ調整する。総重量2kg。第231図4の個体Cは3片（No54.56.85）が接合。口縁部外面には、櫛歯状工具による波状文が2段認められる。3片のみの接合破片である。第231図1は黒色土器杯A類の2/3個体で、口径13.0cm、底径6.0cm、内面は放射状のミガキ調整が顕著。外面はロクロ成形痕を残し、0.5cmほどの太さで正位に「八千」の墨書がある。また埋土中から砥石の可能性ある頁岩材の礫片2点（53.1g）と轆の羽口2片が出土している。出土土器の特徴から古代8期頃を推定。



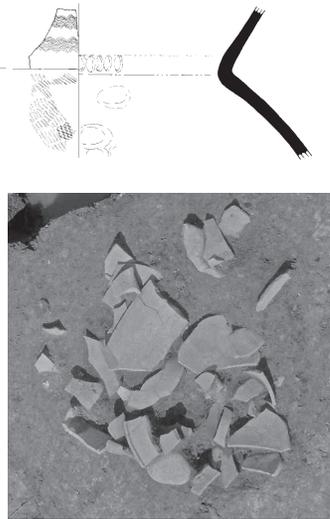
第228図 SK 840の遺物出土状態 1



第229図 SK 840の遺物出土状態 2



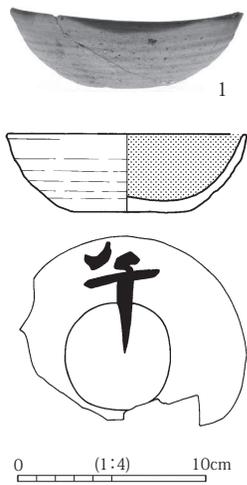
第230図 SK 840の遺物出土状態3



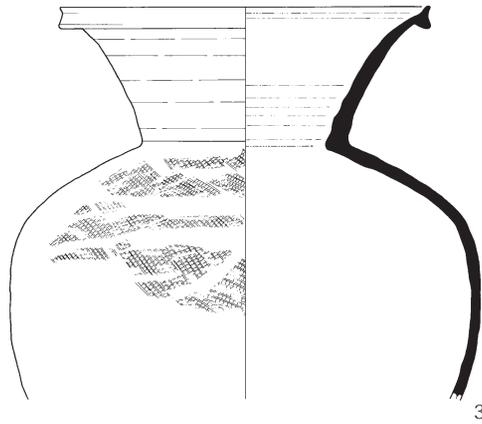
第231図 No3 甕形土器出土状態



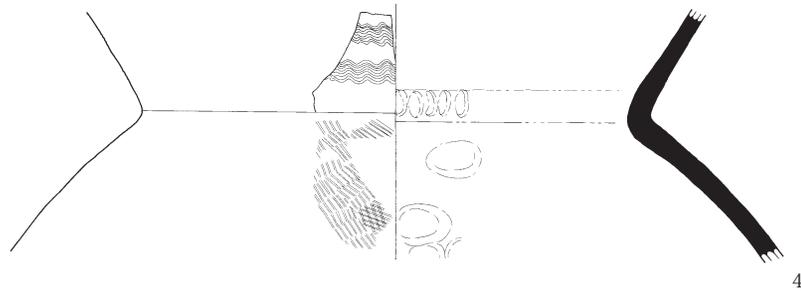
第231図 No4 甕形土器出土状態



0 (1:4) 10cm



3



4

第231図 SK 840 出土の土器1



0 (1:6) 10cm



2



第232図 SK840出土の土器2（須恵器大型甕形土器）

0 (1:6) 10cm

IX D - 2 2

北端に東西方向に走るSD 77があり、それと平行して南にSD 61が存在する。D-8区から南下するSD 56は本地区まで確認できる。集中する土坑群は、68基（SK 491・495・549・550・574～578・589・594～596・598～600・641・642・650～653・657・662・814・815・817・820・855・859～865・968・974・981～984・1000～1003・1005・1010・1020・1022・1023・1154～1168・1185・1186）ある。この内、SK 820とSK 1020は、長軸で200cmを超える大型の土坑で、SK 550とSK 641は150cm前後の長楕円形状の土坑で、他の柱状土坑とは区別できる。大型の土坑はI-2区のSK 1183やSK 1184と同様な規模と形状を示しており、機能的に同様な用途を想定できるか。同じように長楕円形状の土坑も、I-2区のSK 656やI-3区のSK 666と同規模で、同様な機能を想定できるか。地鎮様の遺構と考えられるSK 650とSK 1160は、別に619・622ページで扱う。

491号土坑（第233図）

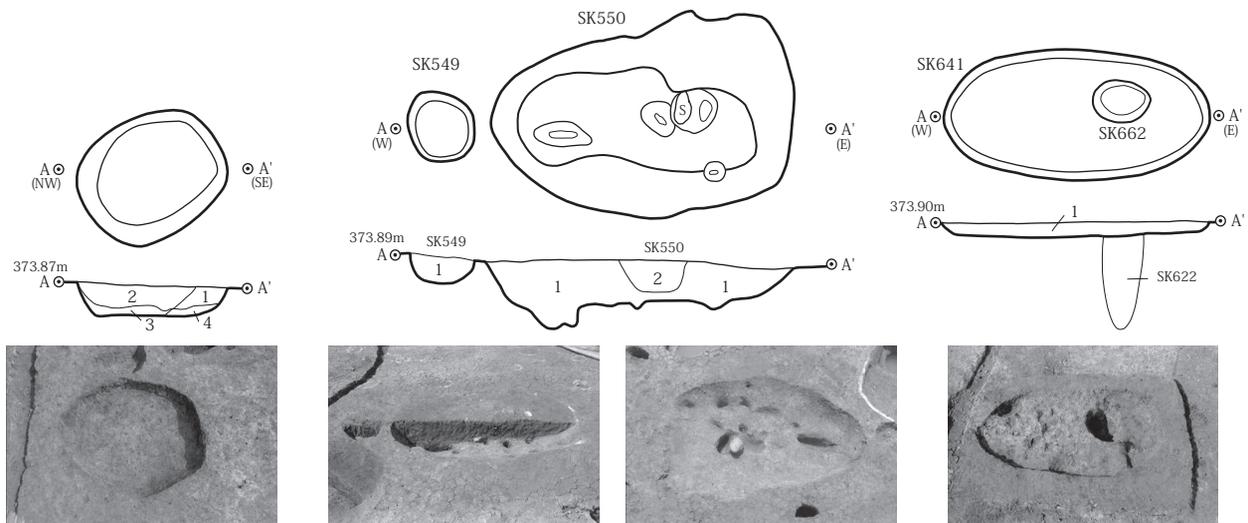
平面形は楕円形で、底部が平坦な浅いタライ状。規模は77cm×64cm、深さ18cmを測る。埋土は4層に分層でき、1層は10YR2/3の黒褐色土、2層は10YR3/1の黒褐色土、3層・4層は2.5YR4/8の赤褐色土である。出土遺物は、須恵器杯A類、灰釉陶器碗、黒色土器A杯A類の破片と川原石1点（4.6g）が出土している。時期は古代6期以降と考えられる。

550号土坑（第234図）

不整な楕円形状で、断面浅いタライ状、底面には複数の小さな凹凸がある。規模は160cm×104cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、2層に分層できた。1層は10YR3/2、2層は10YR3/1。遺物は須恵器甕形土器と土師器甕形土器破片が出土している。時期は古代か。

641号・662号土坑（第235図）

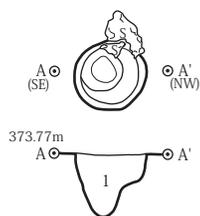
SK 641の平面形は楕円形で、底部は平坦なタライ状。規模は141cm×69cm、深さ8cmを測る。埋



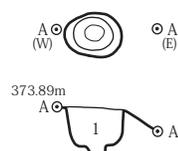
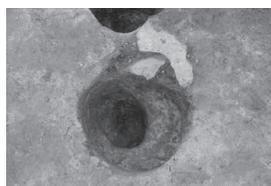
第233図 SK 491の全景

第234図 SK 550の全景（半截と完掘）

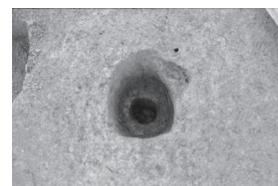
第235図 SK 641・662の全景



第236図 SK 861の全景



第237図 SK 984の全景



土は単層で、炭化物を含む 10YR3/1 の黒褐色土。川原石が 1 点 (14g) 出土したのみである。調査所見では、本跡が SK 662 を破壊して構築されたと判断したが、同一遺構の可能性もある。SK 662 は、楕円形で、砲弾状。埋土は黒褐色土 (10YR3/1) の単純堆積。出土遺物に須恵器甕が 1 点ある。時期は不明だが、両土坑ともに ST 16 の Pit10 を破壊しており、それよりも新しいと判断できる。

861号土坑 (第236図)

平面形は円形で、壁面底部に段を有する形態。規模は 38cm × 36cm、深さ 31cm。暗褐色土 (10YR3/3) の単純堆積である。出土遺物はない。時期は不明。SD 77 を破壊していると判断した。

984号土坑 (第237図)

SK 641 と切り合い関係がある。新旧は不明だが、SK 641 を破壊して構築された可能性が高い。平面形は楕円形で、断面は底部中央部に段を有する形態。規模は 30cm × 23cm、深さ 26cm を測る。埋土は単層で、鉄分を多く含む黒色粘質土 (10YR1.7/1)。遺物は土師器の小破片が出土している。

1005号土坑 (第238図)

平面形は円形状で、断面形態は砲弾状。規模は 18cm × 15cm、深さ 20cm。埋土は暗褐色土 (10YR3/3) の単純堆積。SD 61 を破壊する。出土遺物はない。時期は不明。

1010号土坑 (第239図)

平面形は円形で、底部及び埋土中に角礫がある。規模は 20cm × 18cm。埋土は焼土を僅かに含む粘質土で、褐灰色土 (10YR5/1)。出土遺物はない。

1154号土坑 (第240図)

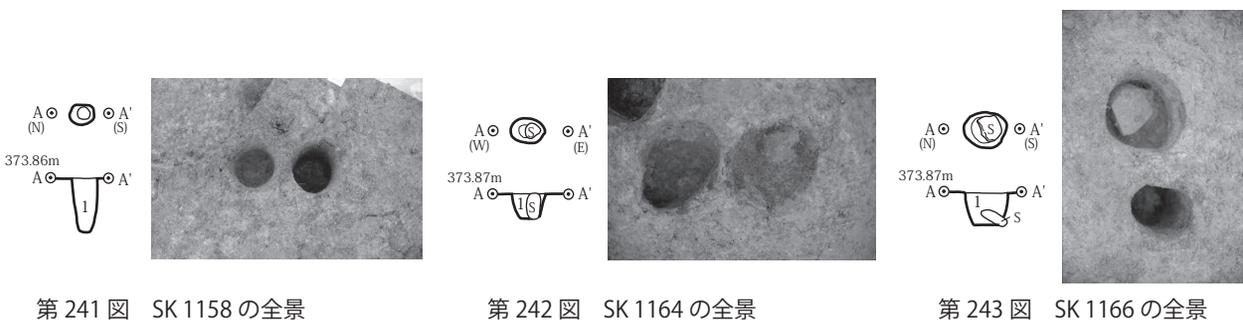
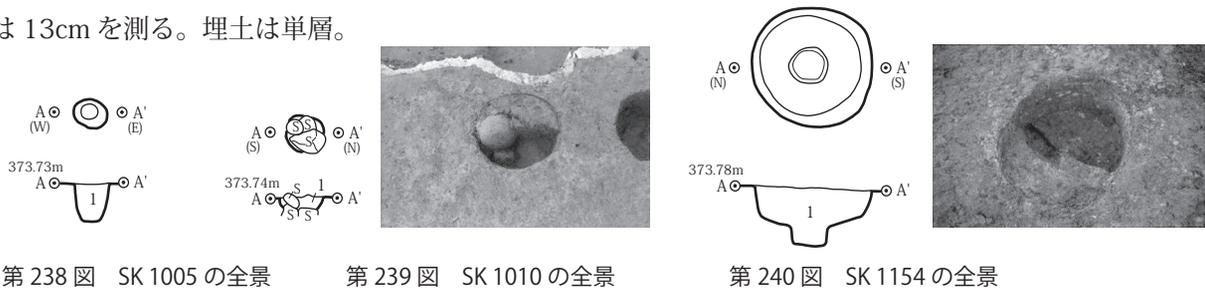
楕円形状で、底部中央部に段を有する。規模は 67cm × 63cm、深さは 30cm を測る。埋土は単層で褐色土 (10YR4/4)。出土遺物はない。時期は不明。SK 860 に破壊される。

1158号土坑 (第241図)

円柱状で、断面砲弾状の深い掘り込み。規模は 13cm × 11cm、深さは 28cm を測る。埋土は単層。出土遺物は土師器小破片がある。時期は不明。周辺にて検出した土坑もほぼ同形状で、SK 1159、SK 1185 さらには SK 1165 などが集中する。

1164号土坑 (第242図)

楕円形で、底部が平坦なタライ状。埋土中から 15cm 前後の礫が出土した。規模は 18cm × 12cm、深さは 13cm を測る。埋土は単層。

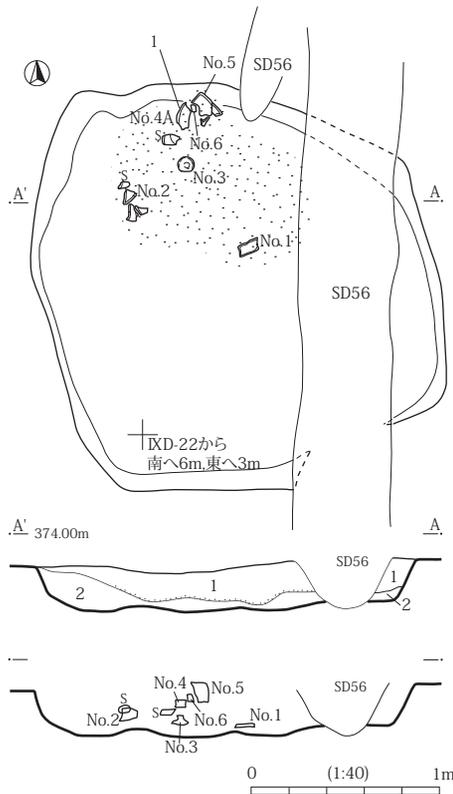


1166号土坑（第243図）

平面形は楕円形状を呈し、底部が平坦なタライ状。底面に礎石かと思われる20cm前後の平石を検出した。規模は23cm×18cm、深さ18cm。埋土は単層。遺物は土師器甕形土器の破片が出土している。

820号土坑（第244図・第245図）

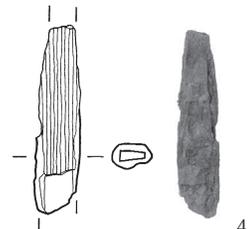
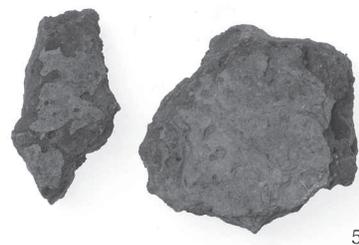
平面形は不整形形状で、断面はタライ状を呈する。底面には若干の凹凸がある。埋没土は炭化物及び焼土の薄層を挟み2層に分層できた。1層暗褐色土（7.5YR3/3）、2層褐色土（10YR4/4）でレンズ状堆積、遺物は1層下部から2層上面にかけて出土した。規模は長径216cm、深さ35cm、SD56に破壊される。遺物は非ロクロ土師器の高杯形土器1片、土師器甕形土器の破片2片、須恵器蓋1片、甕C類1片、黒色土器A杯A類1片、金属製刀子1点が出土している。1は第244図No4の須恵器蓋形土器破片。口径16.0cmを測り、かえし部はやや外反する。表面のケズリは1/3程度。焼成時の変形がある。2は須恵器杯B類底部破片。高台部は凹状で外面接地。3は土師器甕の底部破片。底部に木葉痕がある。4は刀子の柄部か。長さ（4.8cm）×厚さ0.5cm、4.8gを量り、表面に木質部が付着する。5は埋土中から出土した鉄滓片（2片接合、長さ4.0cm×厚さ1.2cm、23.0g）。この他、玄武岩材の敲石1点（一端に潰れ・12.2×4.4×4.4cm、339.1g）が出土している。



第244図 SK 820の遺物出土状態



完掘状態



第245図 SK 820出土の土器・金属製品

溝状遺構

5 2号溝跡 (第246図)

時期： 古代以降か。

位置： IXD-16~20

長軸方向： E-30°-S

規模： 長さ30m70cm、幅38cm、残存深度12cm

性格： 土地区画溝か

断面形態： U字状

壁立ち上がり： 32度程度の緩傾斜

埋土堆積： 黒褐色土の単純堆積

遺構重複： SB 11・SB 16・SB 07、SD 69・SD 76、SK 840・SK 1051 を破壊する。SK 879・SK 892 に破壊される。

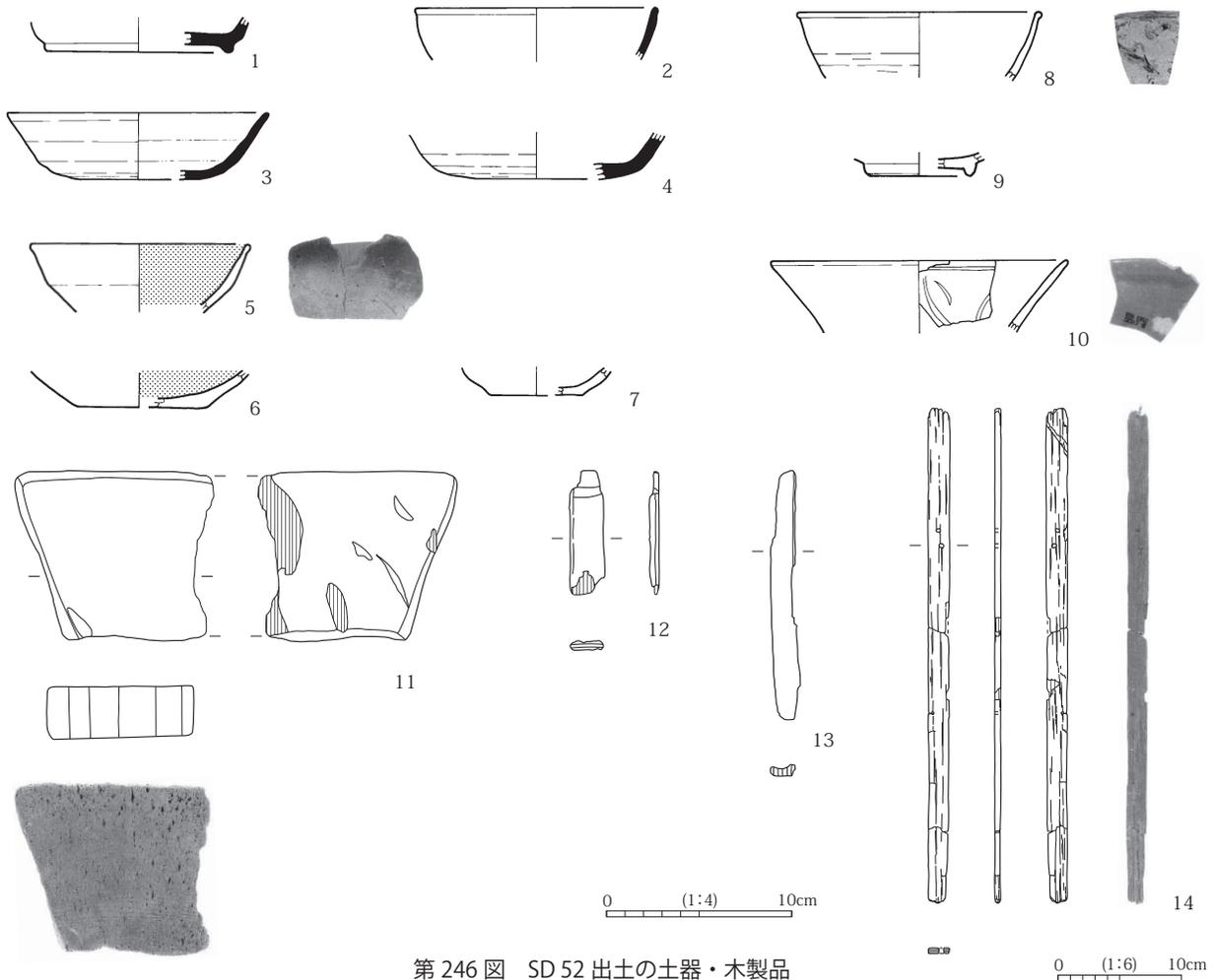
検出経過： 黄褐色砂礫面にて、黒褐色土の落ち込みを確認、東西方向に伸びる溝状遺構を想定し調査した。

遺物出土状況： 埋土中から181片の土器破片と5点の木製品が出土した。

出土遺物： 1~4は須恵器。1は杯B類底部破片。高台端部を欠失する。2は杯A類もしくはB類の口縁部破片。口唇直下は、幅0.7cmの強い横ナデがある。3と4はヘラ切り離し調整の杯A類。3は口径14.0cmを測り、外面はナデ調整痕をやや雑に残す。4は回転ロク口調整痕を

遺構名	土師器										黒色A		黒色B		須恵器					灰釉	緑釉	磁器	数/総重量 (破片/g)			
	杯A	椀	甕A	甕B	甕D	甕E	小型甕	小型甕A	不明	杯A	椀	杯A	杯B	蓋	盤	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	椀	皿		青磁椀		
SD 52	19	2	3	25	2	2	8	5	1	13	41	1	21	1	4	1	3	8	3	3	5	6	2	1	1	181/1,947.5

第44表 SD 52 出土土器組成



第246図 SD 52 出土の土器・木製品

明瞭に残す。5と6は黒色土器Aの杯A類。5は口縁部の破片で、体部屈曲して立ち上がる器形である。6は底部破片。7は土師器杯A類底部小破片。8は灰釉陶器碗の口縁部小破片。口唇は折り縁状で、釉薬は剥落。9は緑釉陶器底部破片。高台部は内面が面取り様にケズリ調整される。10は青磁碗の口縁部破片。口径約18.0cm、内面口唇直下に沈線が走り、花文が描かれる。11は部材。ケヤキの横木取りで、平滑な厚板。表は年輪がはっきり確認でき、裏は放射状組織のみ明瞭。12と13は板目の板材。12はモミ属で、13はヒノキ科。14は板材。板目で、0.5ミリ前後の孔が3箇所あり。この内2箇所は対になる。ヒノキ科。



SD 52・70・69の全景



SD 52 木製品出土状態



SD 52の全景（東から）



SD 76の全景（北西から）

76号溝跡（第247図）

時期： 古代以降か

位置： IXD-12・13・16・17区

長軸方向： N-48°-E

規模： 長さ12m80cm、幅100cm、残存深度12cm

性格： 古い土地区画溝か

断面形態： 浅いタライ状

壁立ち上がり： 20度程度の緩傾斜

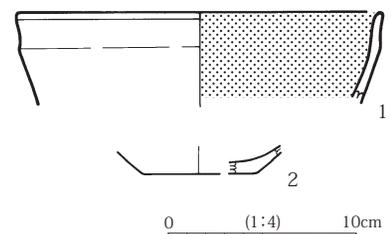
埋土堆積： 暗褐色土（10YR3/4）の単純堆積

遺構重複： SD 52・56、SK 728、766・805に破壊される。

検出経過： 黄褐色砂礫面にて、黒褐色土の落ち込みを確認、他の落ち込みに破壊されていたことから、古い溝跡を想定し調査した。

遺物出土状況： 埋土中から13片の土器破片が出土した。

出土遺物： 1は黒色土器Aの口縁部破片。口唇直下に幅1.0cmの強い横ナゲ調整が施される。2は土師器杯A類の底部破片。



第247図 SD 76 出土の土器

遺跡名	土師器				黒色土器A	須恵器			灰釉陶器	数 / 総重量 (破片 / g)
	杯A	甕	甕B	不明	杯A	杯A	甕A	甕E	椀A	
SD 76	1	4	1	1	2	1	1	1	1	13/123.9

第 45 表 SD 76 出土土器組成

5 6号溝跡 (第 248 図・第 249 図)

時 期： 古代以降か

位 置： IXD-8・12・13・17・22

長軸方向： N-8°-E

規 模： 長さ 25m20m、幅 28cm、残存深度 22cm

性 格： 不 明

断面形態： U 字状

壁立ち上がり： 91 度程度の緩傾斜

埋土堆積： 2層堆積 (1層黒色土 7.5YR2/1、2層オリーブ黒色土 7.5YR3/1)

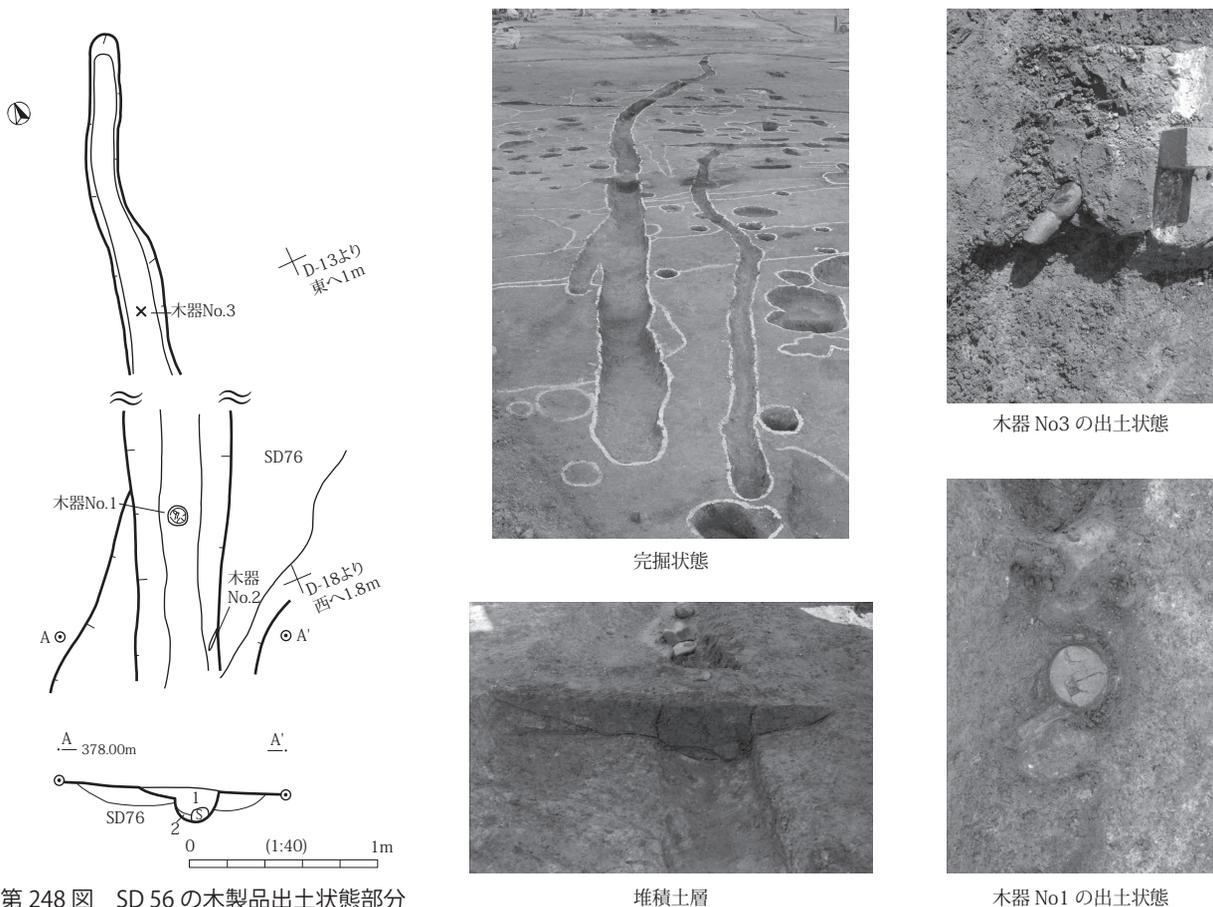
遺構重複： SD 52・61・76、SK 796・869 ほか、大部分の遺構を破壊することから、本地区で最も新しい遺構と判断できる。SK 595 及び SK 948 との切り合い関係は不明。

検出経過： 黄褐色砂礫面にて、褐色土の落ち込みを確認、南北方向に伸びる溝状遺構を想定し調査した。

遺物出土状況： 埋土中から 141 片の土器破片と 7 点の木製品が出土した。

出土遺物： 埋土中からは、非ロクロ土師器や灰釉陶器等、数時期にまたがる土器破片が混在して出土した。

1 は須恵器杯 A 類の底部破片。糸切り離し調整で、外面にはロクロ目を明瞭に残す。2 は非ロクロ土師器の高杯脚部。脚高 2.5cm を測る。4 は挽物の皿。欠損部はあるが残存率が高く全体形を観察できる。内面に黒漆が付着し、一部朱漆が残る。ケヤキの横木取り。5 は木偶。クリの芯持丸木材で、裏面に表皮近接部が残る。頭部は平らに周囲から削り出し、首の部分は上下方向から削り込みを施す。下部は欠損する。頭部中央には深さ 1 cm のやや方形状の小孔が



第 248 図 SD 56 の木製品出土状態部分

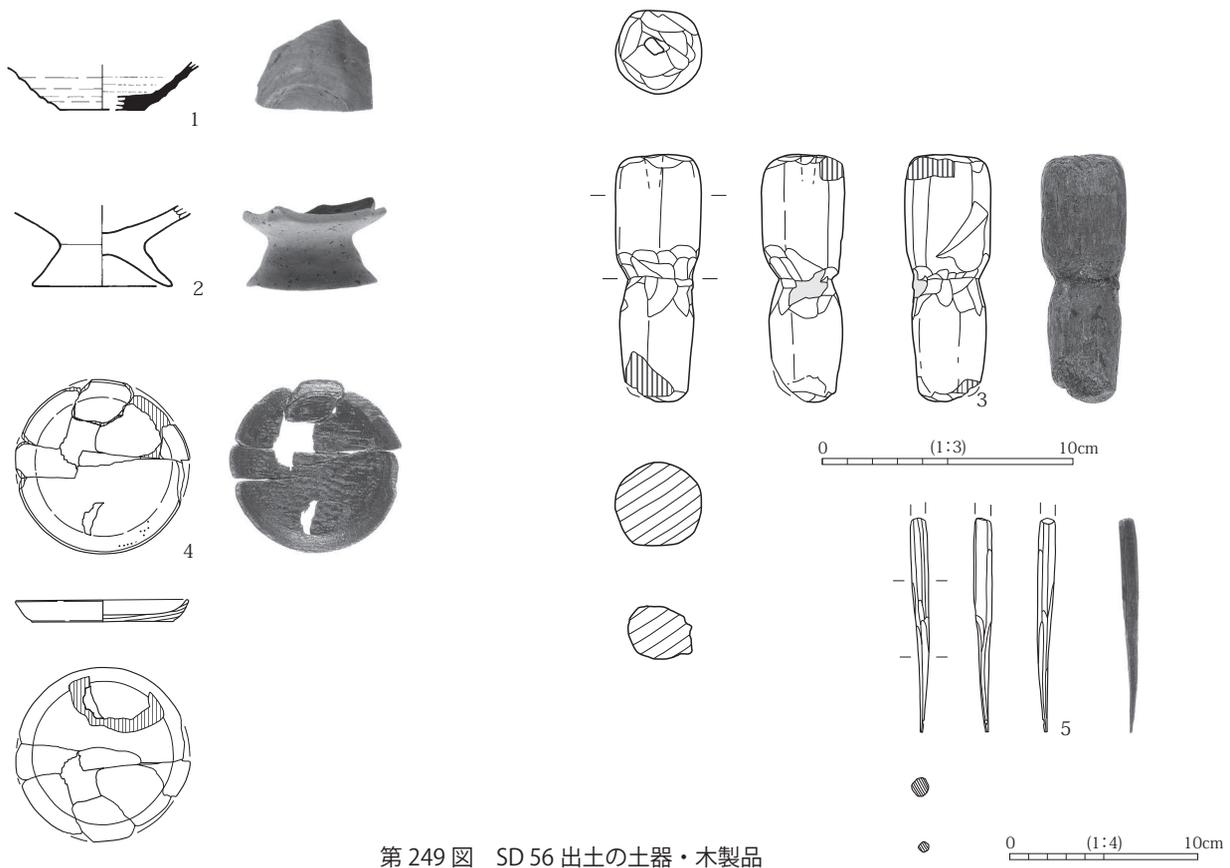
あけられ、顔面には、目玉の残存部分と考えられる円形状の浅い刺突と、鼻部さらに口が真横に削り込まれている。右側面から裏面にかけては被熱し炭化する。6は角状の木製品。上端は欠損か。下端は7cmほどを削り先を尖らせる。形状はやや湾曲している。削り出しのサワラ材。

遺構名	土師器									黒色A 須恵器							灰釉陶器				数 / 総重量 (破片/g)
	高杯	杯A	椀	甕	甕A	甕B	甕E	不明	杯A	杯A	蓋B	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	椀	皿	壺	長頸壺	
SD56	2	6	1	6	15	7	10	19	19	13	3	17	11	1	3	1	2	1	2	2	141/1,809.2

第46表 SD56 出土土器組成

遺構名	板材	角状木製品	割材	挽物	皿(漆)	木偶	総数
SD56	2	1	4	1	1		9

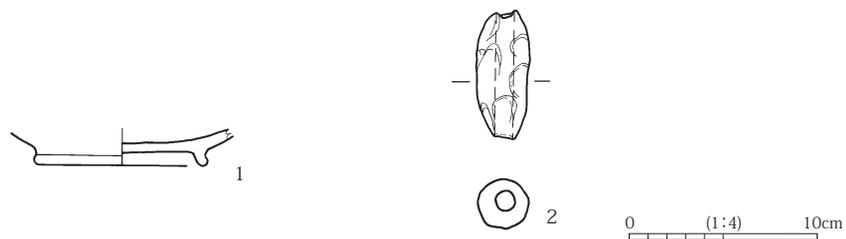
第47表 SD56 出土木製品組成



第249図 SD56 出土の土器・木製品

D-17・22区検出面出土の遺物

1はD-22区出土の灰釉陶器椀の底部。外側に外反する角状の貼り付け高台。内面に墨汁痕がある。2はD-17区出土で、手捏ねの土錘。完形で6.5cm×2.7cm、47.5gを量る。



第250図 D-17・22区出土の土器・土製品

IX-D-18・23区

SD 03以南の北端中央部にあたり、東西方向に走る溝跡7本（SD 50・52・58・61・75・77・78）を検出した。D-18区からD-19区にかけては竪穴式建物が密集し、本区では5軒（SB 09・10・11・15・16）がある。また土坑は123基があり、この内22基を、配列から掘立柱建物跡と認定した。

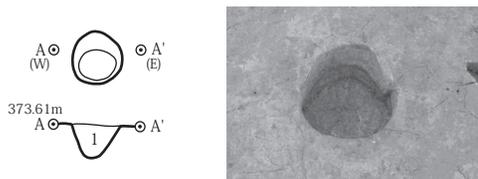
IXD-18

D-17区から横走するSD 52、SD 58、SD 77の3本の溝状遺構とSD 75とSD 50、南北方向のSD 72とSD 74がある。東側には竪穴式建物SB 09、SB 11があり、SD 52とSD 58に破壊される。掘立柱建物はD-18区にまたがるST 08とST 45（旧SK 738・821）があり、本区北西端に確認した土坑群もSTに組成できる可能性はあるが判然としない。土坑はすべて51基（SK 696・699・716・732～737・759～761・771・772・774・778～781・825・850～853・867・876～883・891～893・895・897～899・911・915・916・928・933・1040・1044・1055～1057・1081）があり、この内でSK 696とSK 867は規模と形状から他とは区別できる。

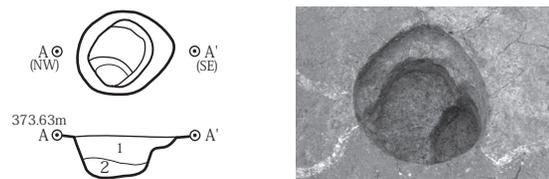
土坑

736号土坑（第252図）

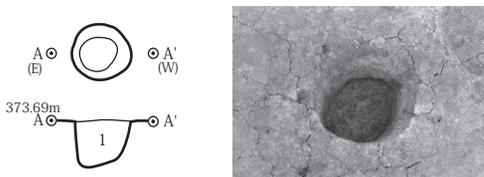
平面形は円形で、断面は皿状。規模は28cm×25cm、深さ19cmを測る。暗褐色土（10YR3/4）の単純堆積で、遺物は出土していない。付近4m内には、ほぼ同形状の柱穴を検出できた。SK 734、SK 735、SK 780、SK 781、SK 851、SK 853、SK 882、SK 898、SK 911、SK 1057などで、これらは、配置から掘立柱建物跡を想定できる可能性もあり、それについては第2項2で記す。



第252図 SK 736の全景



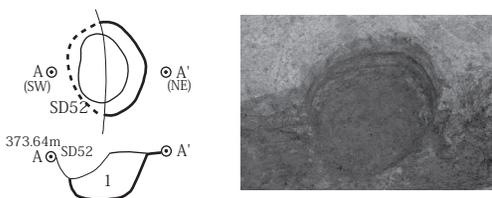
第255図 SK 851の全景



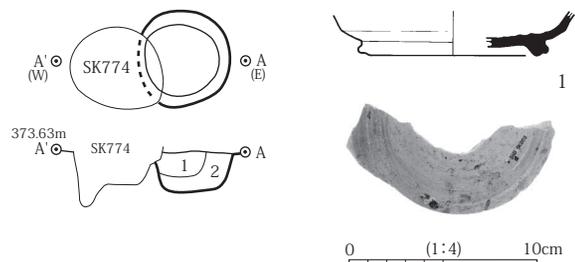
第253図 SK 774の全景



第256図 SK 879の全景



第254図 SK 780の全景



第257図 SK 880の全景及び出土の土器

774号土坑 (第253図)

880号土坑を破壊する。円形状で、壁面底部に段を有する。規模は50cm×46cm、深さ20cm。埋没土は2層からなり水平に堆積、下層は10YR4/2の灰黄褐色土で炭化物が僅かに混じる。上層は10YR3/3の暗褐色土。出土遺物は土師器甕、須恵器瓶の破片。本跡もSK 876、SK 825、SK 881等とともに掘立柱建物跡を組成する可能性があるが、一列のみの配列であり、土坑として扱っておく。

879号土坑 (第256図)

平面形は円形で、断面形は底部が平坦なタライ状。規模は48cm×41cm、深さ24cmを測る。暗褐色土(10YR3/3)の単純堆積。須恵器杯Aの破片が出土。SD 52を破壊する。本跡もSK 877、SK 771、SK 772等と組成するものであろうか。

880号土坑 (第257図)

774号土坑に壊される。平面形は円形で、底部が平坦なタライ状。規模は50cm×49cm、深さ21cm。埋土は2層に分層でき、柱痕跡部分は炭化物が僅かにまじった黒褐色土(10YR2/3)、掘り方埋土の部分は、暗褐色土(10YR3/3)である。遺物は、土師器甕、須恵器杯B類破片が出土している。時期は古代か。

883号土坑 (第258図)

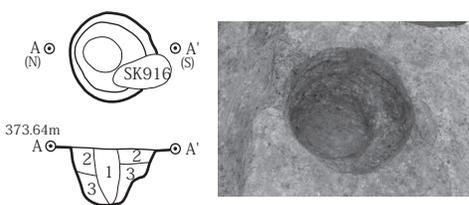
円形で、壁面底部に段を有する形態。規模47cm×45cm、深さ32cm。埋土は3層に分層でき、柱痕跡部分は炭化物が多く含まれる10YR2/3黒褐色土。柱の掘り方部分は、10YR3/3の暗褐色土と10YR4/2の灰黄褐色土。SK 915及びSK 916を破壊する。

898号土坑 (第259図)

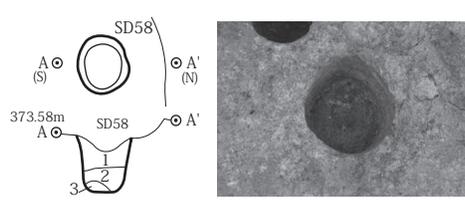
本跡もSK 736と組成する可能性ある土坑である。SD 58に上面を壊される。平面形は円形で、断面形態は砲弾状。規模31cm×27cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色土(10YR3/3)が水平に堆積する。出土遺物はない。

933号土坑 (第260図)

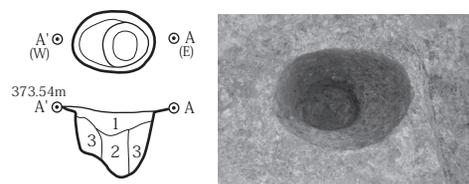
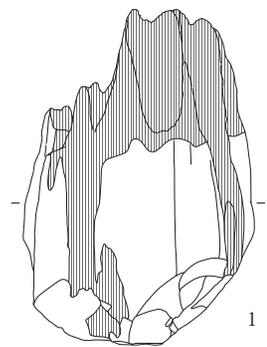
SD 58に破壊される。平面形は楕円状で、壁面に段を有する。規模43cm×31cm、深さ35cm。埋土は3層に分層でき、10YR3/2の黒褐色土を基調とする。本跡の上面を新たな別土坑が破壊しているようだが、調査では区別できていない。遺物には土師器、黒色土器の小破片が出土している。



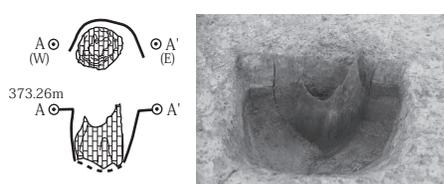
第258図 SK 883の全景



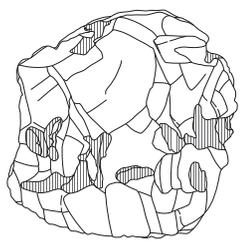
第260図 SK 933の全景



第259図 SK 898の全景



第261図 SK 1040の全景及び柱材



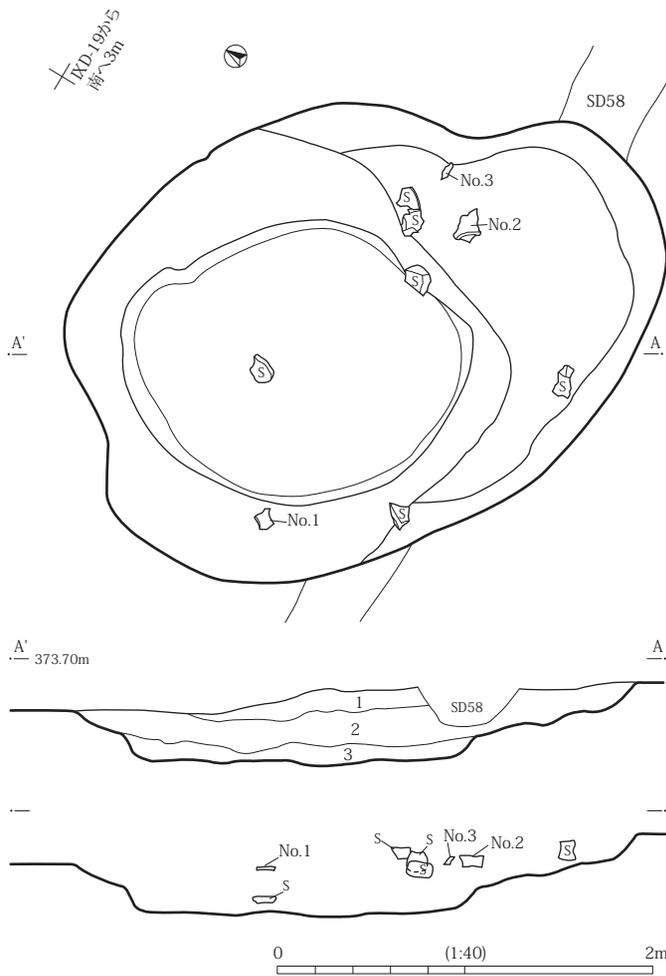
0 (1:8) 20cm

1040号土坑（第261図）

SD 52に破壊される。規模は26cm×22cm、深さ34cm。埋土中からは柱材と川原石2点(13.4g)が出土。柱材は径22cm、Bb類。形状は多角形状で、側面は加工してある。樹種はクリ材。

696号土坑（第262図・第263図）

平面形は楕円状で、断面は浅いタライ状。底面には凹凸がある。規模は268cm×240cm、深さ45cm。埋土は黒褐色土を基調に3つに分層できる。1層 10YR2/2、2層 10YR2/3、3層 10YR3/3。埋没土中からは、黒色土器A類の鉢、灰釉陶器の壺、須恵器甕の破片、安山岩材の磨石（10.1×9.2×3.0cm、351.2g）が出土した。1は第262図No1の黒色土器A鉢形土器口縁部破片。口縁部外面は幅0.7cmのへら状工具により回転調整される。2は黒色土器Aの杯A類底部。底部は凸状に張りだす形態で、底径4.5cm。3と4は灰釉陶器。3は碗の口縁部破片、刷毛塗り調整。4はNo2に相当する長頸壺の底部。



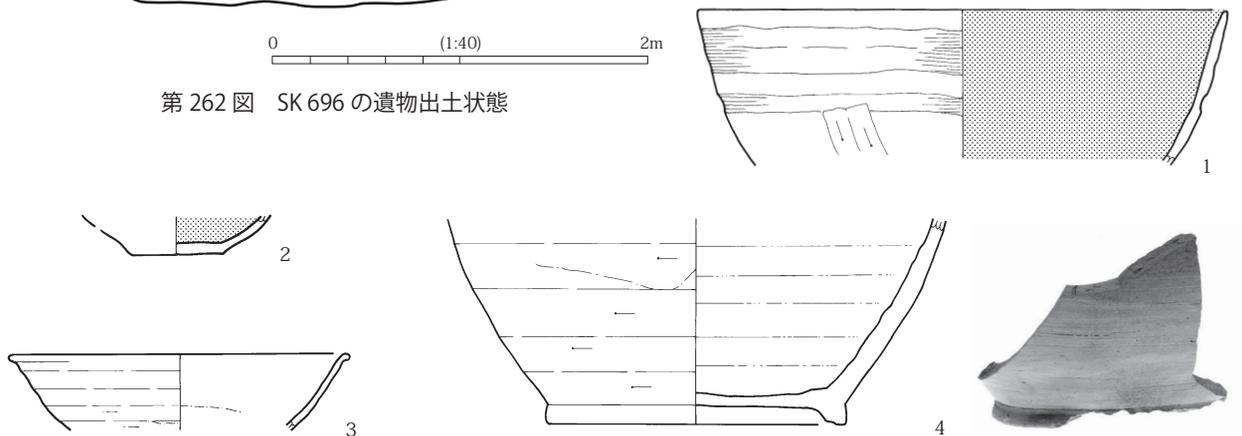
第262図 SK 696の遺物出土状態



完掘状態



半截状況



第263図 SK 696出土の土器

IX D—2 3

北端をSD 77 及びSD 61 が東西方向に走り、SB 10 とSB 15 に破壊される。D—22 区境付近に土坑群が集中する。また調査区中央部には竪穴式建物に破壊されて、遺跡唯一の総柱式掘立柱建物ST 28がある。土坑は51基(SK 494・544・546・547・551～560・571・572・579・584～588・590・591・593・739・854・870・913・914・934・949・985・986・988～997・999・1006・1009・1059・1060・1106・1107)があり、小規模で柱状を呈するものが中心である。SK 870 は大型の土坑で、SK 593、SK 590、SK 584 は深さのある井戸跡であろうか。

5 9 1 号土坑 (第264 図)

SB 10 及びSK 928 を破壊する。平面形は円形で、断面形態はアサガオ状。規模は28cm × 26cm、深さは28cm を測る。埋土は単層で黒褐色土(10YR3/2)、遺物はない。

9 1 3 号土坑 (第265 図)

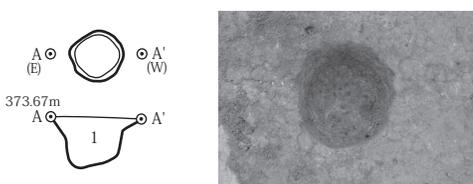
SB 10 を破壊する。楕円形状で、断面形態は砲弾状。規模は34cm × 28cm、深さ40cm。埋土は2層に分層でき、ほぼ水平に堆積。1層黒褐色土(10YR2/3)、2層黒褐色土(10YR2/2)である。出土遺物はない。

5 9 3 号土坑 (第266 図)

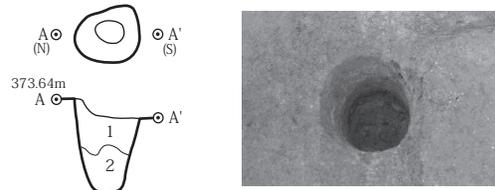
平面形は円形、断面は底部が平坦で深いバケツ状。規模は96cm × 94cm、深さ58cm を測る。埋土は単層で黒褐色土(5Y3/1)。深さと形状から井戸跡を想定できるか。SD 78 と切り合うが、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

5 8 4 号土坑 (第267 図)

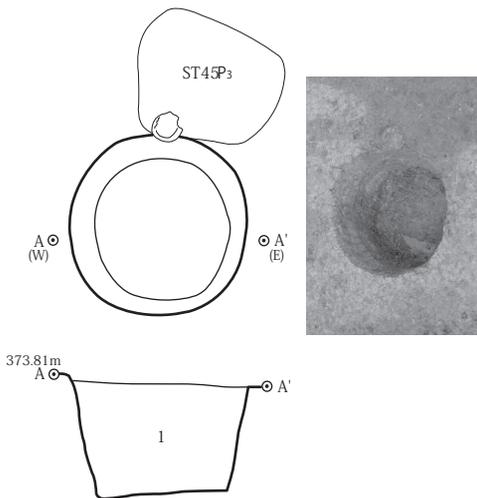
SD 50 に破壊される。平面形は円形状で、底部が平坦な深いバケツ状。規模は124cm × 112cm、深さ92cm を測る。埋土は4層に分層でき、上層はシルト質の黒色土(5YR2/1)、下層は水分が多く青黒色(5BG1/7)となる。最下層は砂と砂利を多く含む層(5BG2/1)である。形状と土質の特徴から、井戸跡と考えられる。遺物は須恵器杯B類、黒色土器杯A類、灰釉陶器碗の破片が出土している。時期は古代6期以降か。



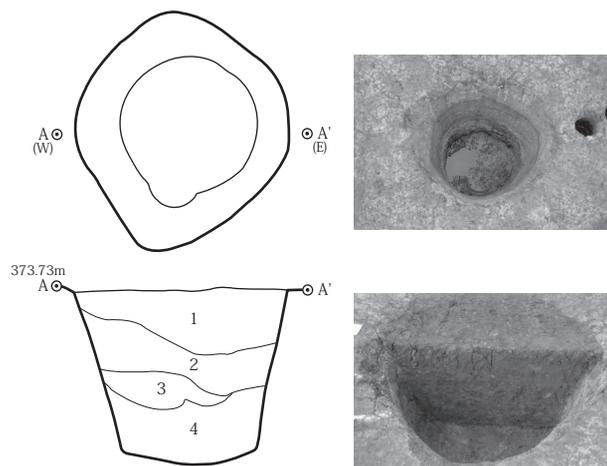
第264 図 SK 591 の全景



第265 図 SK 913 の全景



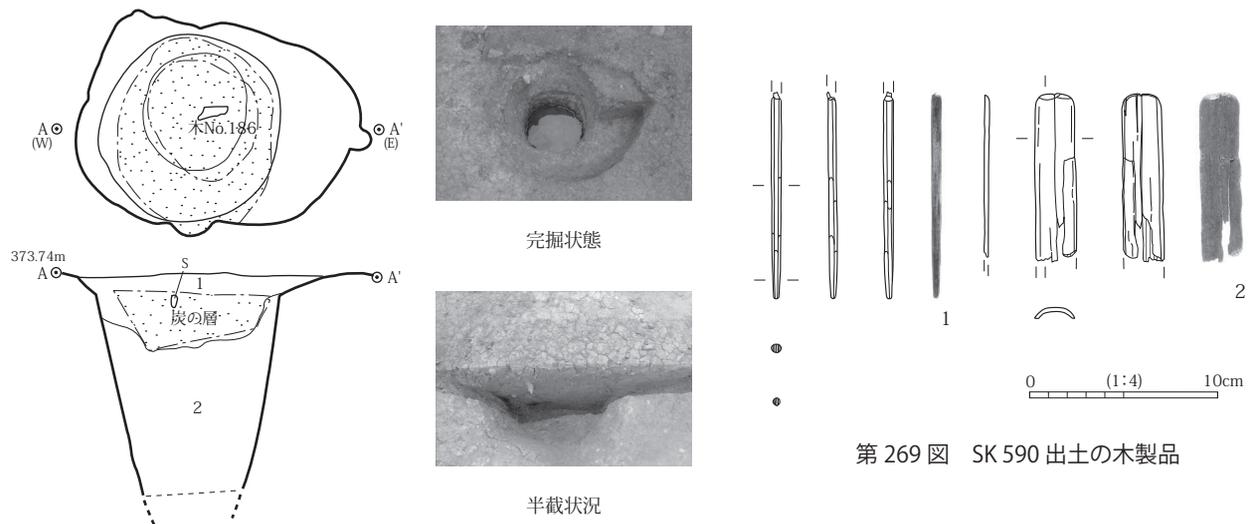
第266 図 SK 593 の全景



第267 図 SK 584 の全景

590号土坑（第268図・第269図）

SB 10、SB 15、SK 870 を破壊する。平面形は不整楕円形で、断面形態は深い砲弾状か。規模は 153cm × 114cm、深さは 112cm まで調査した。埋土は 2 層に分層でき、上層はオリーブ黒色のシルト質土(5YR3/1)で、炭化物、褐鉄を僅かに混じる。下層は 5YR2/1 の黒色土で灰、炭化物が混じる。また 1 層と 2 層の間には、すり鉢状に厚い炭化物の層を確認した。全体の形状から、井戸跡を想定できるか。遺物は黒色土器杯 A 類、皿 B 類、鉢形土器、須恵器瓶類、土師器杯 A 類、杯蓋 A 類等の破片が出土している。木製品では、竹材片と箸が出土した。1 の箸は先端部が残り、長さ 10.9cm × 0.5cm、厚さ 0.4cm を測る。削り出し材で、やや粗いが断面形は円形に近い。2 の竹材片は長さ 9.9cm × 2.2cm、厚さ 0.25cm を測り、端部に僅かではあるが、斜めの加工痕跡が入る。他に川原石が 2 点(11.7g)出土した。時期は古代 8 期以降と考えられる。



第 268 図 SK 590 の全景

第 269 図 SK 590 出土の木製品

870号土坑（第270図・第271図）

SB 15 に破壊される。平面形は不整楕円形で、断面は浅いタライ状か。規模は 380cm × 284cm、深さは 28cm。埋土は 7 層に分層でき、炭化物と焼土の薄層である 4 層を挟み上層（1 から 3 層）と下層（5 から 7 層）に分層できる。1 層と 2 層は暗褐色土（10YR3/4・3/3）、3 層にぶい黄褐色土（10YR5/4）、5 層褐色土（10YR4/4）、6 層黒褐色土（10YR2/3）、7 層赤褐色土（5YR4/6）である。規模形状から SK 696 と同様の用途であろうか。機能については不明。遺物は土師器杯類の出土が目立つが、SB 15 との切り合い関係があり、調査経過上、混在の可能性を考えておく必要がある。時期は古代 6 期から 8 期ころか。

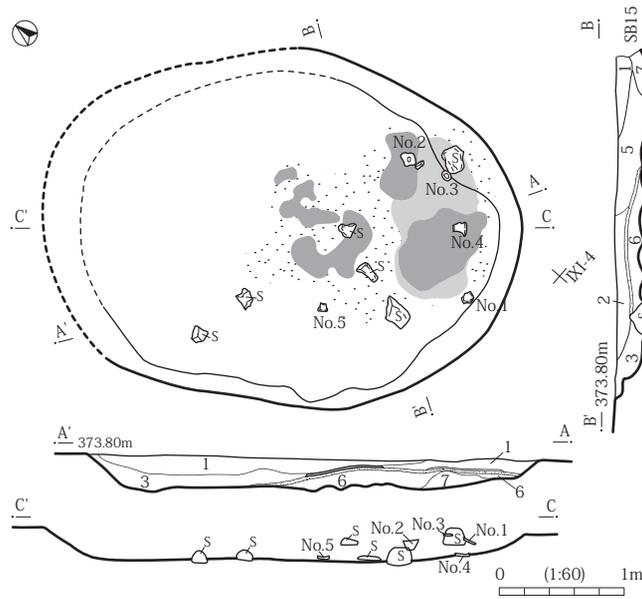
埋土 1 は須恵器杯 A 類 2/3 個体。糸切り離し調整、口径 14.0cm、底部内径 7.0cm を測る。2 は須恵器甕形土器 D 類の破片。

3 層 3 は内耳鍋の底部破片で、D - 23 区検出面出土破片と接合。

4 層 4 は第 270 図 No1 の須恵器杯 B 類底部。糸切り離し調整後、高台貼り付け、ナデ調整。高台は内側削ぎ取りか。5 は須恵器甕 E 類口縁部破片。

5 層 6 は No2 の土師器甕形土器 A 類の底部か。全面にナデ調整が施されているようだが、一部に刷毛状工具の痕跡らしきものが、観察できる。

6 層 7 から 9 は須恵器。7 は杯 B 類の 1/4 個体。口径 13.0cm、外側に大きく開口する器形。高台部分は激しく磨耗する。8 は杯 B 類底部破片。底部糸切り離し後、高台貼り付け。高台径 7.0cm、外面接地。9 は杯 A 類の口縁部破片。口径 14.0cm。10 は第 270 図 No5 の土師器小型甕の口縁



第270図 SK 870の遺物出土状態



遺物出土状態

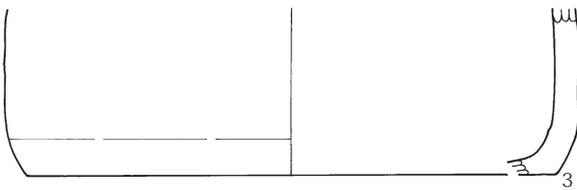


堆積土層

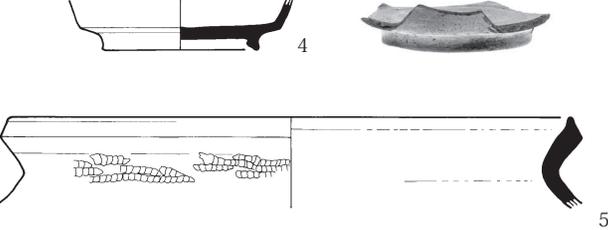
埋土



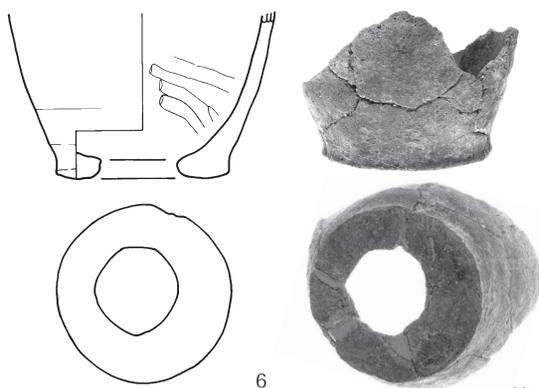
3層



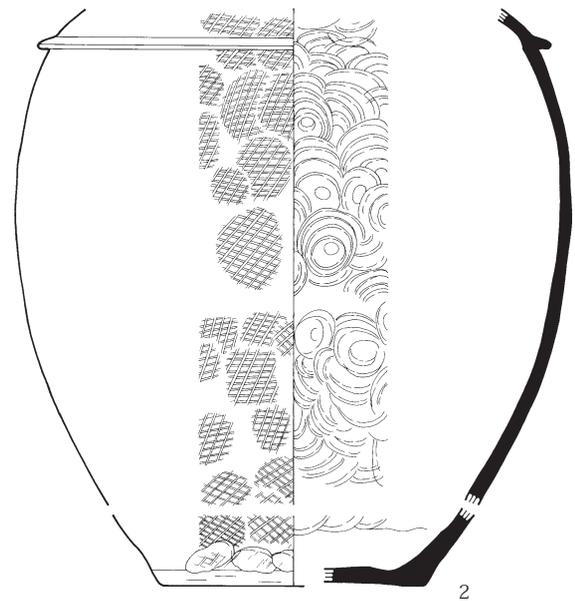
4層



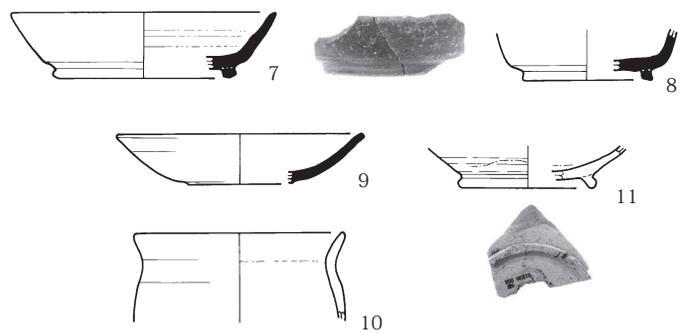
5層



7層



6層



第271図 SK 870出土の土器

0 (1:4) 10cm

部破片。外面風化し、調整痕は読み取れない。11は灰釉陶器碗底部破片。

7層 12は粘土を箱状にして焼成した角柱状の土製品破片。13片の破碎で、この内3片が接合 218.7g。

溝状遺構

58号・57号溝跡（第272図・第273図）

時期： 古代か

位置： IX D - 17から19

長軸方向： SD 58 = 0° E SD 57 = N - 5° - E

規模： SD 58 = 長さ 16m20cm、幅 64cm、残存深度 14cm

SD 57 = 長さ 10m80cm、幅 16cm、残存深度 5cm

性格： 区画溝か

断面形態： タライ状

埋土堆積： 黒色土

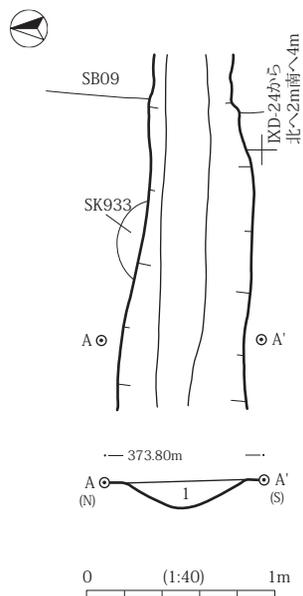
壁立ち上がり： SD 58 = 27度の傾斜 SD 57 = 35度

遺構重複： SB 03、SB 09、SD 77（SD 28 含む）を壊し、SD 56に破壊される。SD 56 以外は、切り合い関係あるすべての遺構を破壊する。南北方向に伸びるSD 57は重複関係にある溝跡とも考えられるが、切り合い関係はつかめず、同時に調査完掘した。

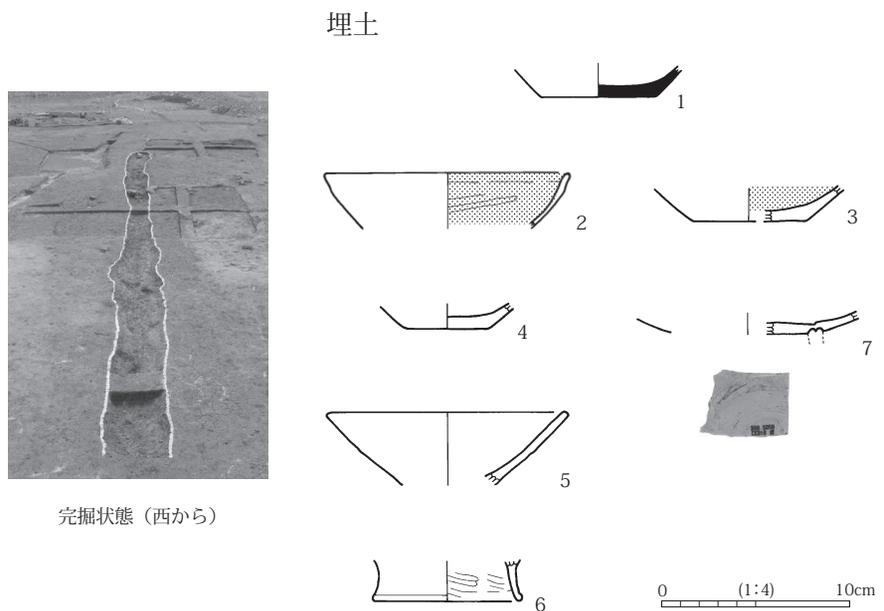
出土遺物： 2軒の竪穴式建物を破壊して構築していることもあり、埋土中から出土した黒色土器や土師器の破片類の多くが混在の可能性もある。出土土器の内訳は第48表に示す。1は須恵器杯A類底部破片。糸切り離しで、歪みがある。2と3は黒色土器Aの杯A類。2は口縁部破片で、口唇直下に強い横ナデが入る。3は2と同一個体の可能性ある底部。4は土師器杯A類の底部破片。5と6は土師器碗の口縁部及び高台部分。5の高台は高さがあり高台径7.0cmを測る。7は灰釉陶器碗の底部破片か。高台部分も欠失する。

遺構名	土師器										黒色土器A										黒色B										須恵器										灰釉陶器										数 / 総重量 (破片/g)
	杯C	杯A	碗	甕B	甕E	甕H	小甕	小甕D	不明	杯A	碗	碗	杯A	杯B	蓋A	甕A	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	短壺A	碗	段皿	長頸壺A																										
SD58	1	20	5	26	1	13	6	2	1	7	36	4	1	19	1	4	1	4	1	4	2	1	1	4	1	2	168/1,400.7																								

第48表 SD 58 出土土器組成



第272図 SD 58の土層観察部分



第273図 SD58 出土の土器

75号溝跡 (第274図)

時期： 古代か

位置： IXD-17・18

長軸方向： 0°E

規模： 長さ10m、幅28cm、残存深度6cm

性格： 区画溝か

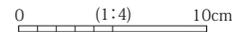
断面形態： タライ状

壁立ち上がり： 25度の傾斜

埋土堆積： 黒色土

遺構重複： SB 09、SD 72、SD 74 に破壊され、SD 77 を壊す。検出状況から、SD 72 及び SD 74 (写真)、SD 78 は同一時期の遺構である可能性があり、溝の方向や規模から、SD 50 (写真) に関しても本跡と同様な機能である可能性は高い。

出土遺物： 埋土中から須恵器杯A類を主体に、黒色土器A杯A類2片、黒色土器B椀1片の出土がある。1は須恵器壺底部破片。底部外面は回転ケズリ調整で、やや軟質。1はSD 78 出土の須恵器杯B類。



SD50 の全景 (西から)



SD72 の全景 (南から)



SD74 の全景 (南から)

D区検出面出土の土器

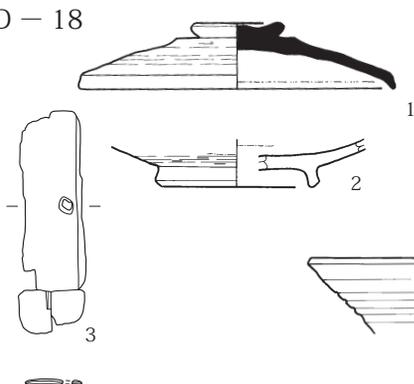
D-18区

1は須恵器杯蓋 2/3 個体。直径 18.0cm、かえし部は弱く、内面からのナデによる凹線で際立たせている。外面のケズリはほとんどなく、つまみ部の周囲のみに留まる。つまみ部中央が凹みボタン状で、直径 4.5cm を測る。生焼けの須恵器で、褐色を呈する。2は灰釉陶器椀底部破片。高台は高く三日月様を呈する。体部は大部分欠失しているが、刷毛塗り施釉と観られる。3は一孔のある加工材の破損品。

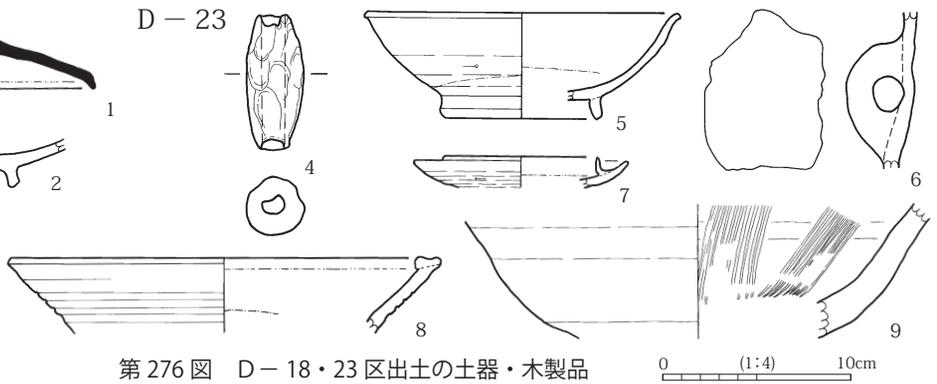
D-23区

4は土錘完形品。手捏ねで紡錘形。長さ 7.2cm、幅 3.0cm、重さ 58.5g を量る。5は灰釉陶器椀の 1/4 個体。三日月様の高い高台で、刷毛塗り施釉。口縁部は折り縁状に緩く外反する。6は内耳鍋の耳部破片。7は灯明皿の 1/5 個体。8は古瀬戸の鉢、口縁部破片。9は古瀬戸のすり鉢底部破片。

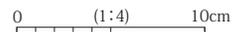
D-18



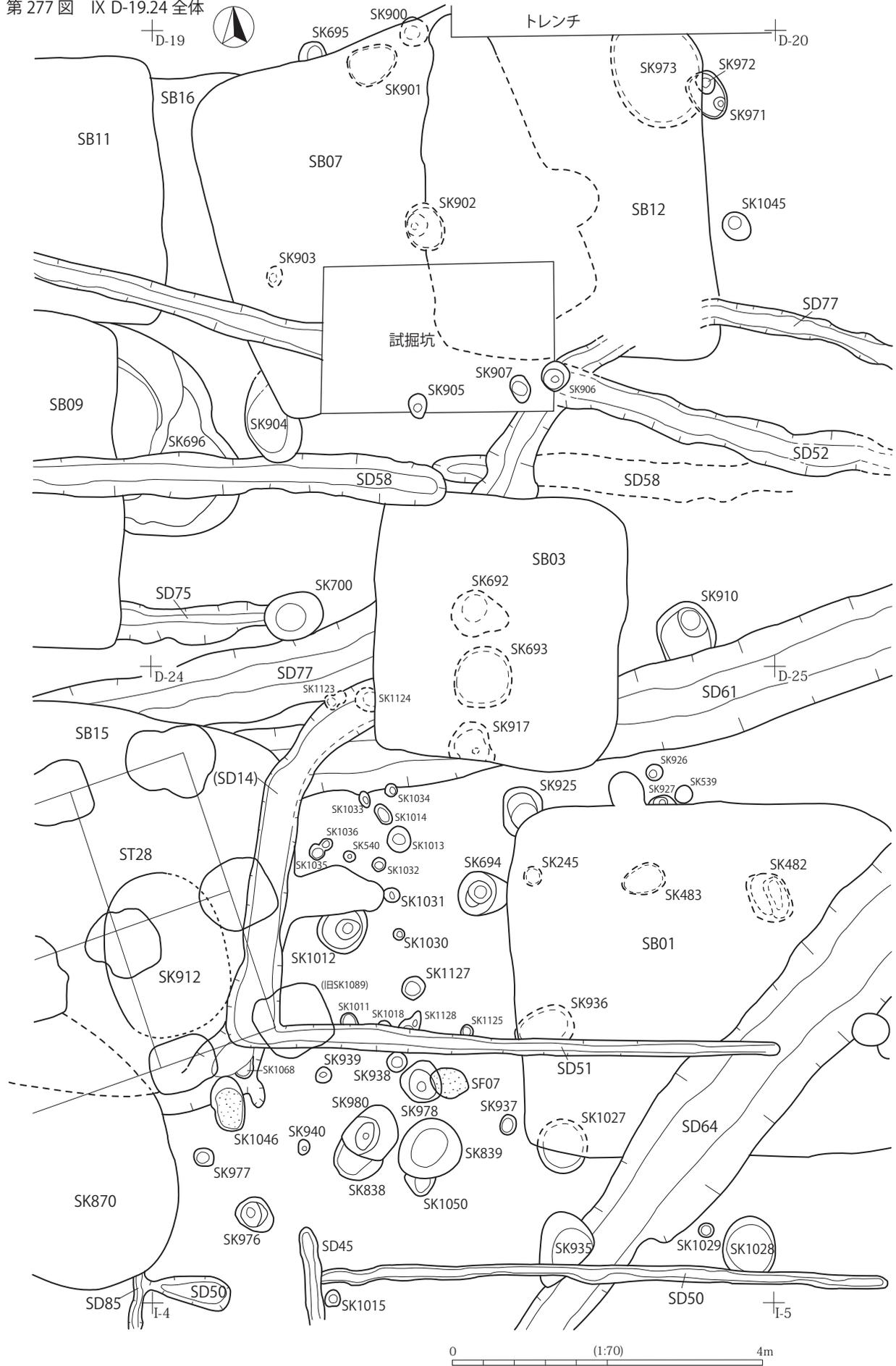
D-23



第276図 D-18・23区出土の土器・木製品



第277図 IX D-19.24全体



IX-D-19・24区

③区遺構密集域の東端に当たり、特に竪穴式建物跡の集中がある。6軒（SB 01・03・07・12・15・16）を確認調査した。また西側から横走する東西方向の溝跡6本（SD 50～52・61・75・77）と、D-23区にまたがる総柱式掘立柱建物跡1棟（ST 28）、さらにD-24区に柱状の土坑を集中して検出した。土坑状の落ち込みはすべて65基がある。

土坑

IX D - 1 9

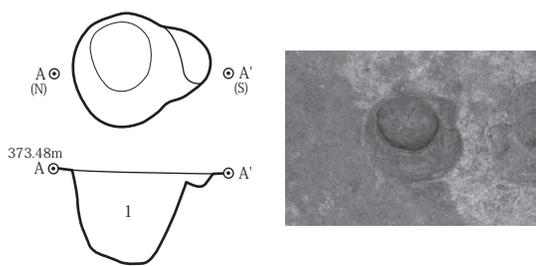
中央部分にSB 07、SB 12、SB 16、SB 03がある。東西方向の溝はSD 52とSD 58、それらに破壊されるSD 77がある。大型遺構が密集しており、検出できた土坑は17基（SK 692・695・700・900～907・910・971～973・1045）で、いずれもSBと切り合うか密接して確認できた。これに起因してか、大部分の土坑から出土遺物があった。

692号土坑（第278図）

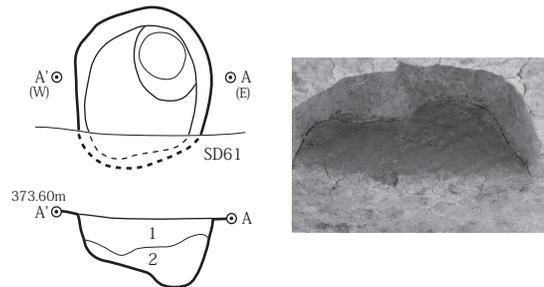
SB 03床下調査中に検出した。SB 03が破壊するSD 77は、本跡に壊されていた。したがって、SB 03よりは古く、SD 77より新しいと判断する。平面形は楕円状で、断面形態は深いバケツ型。規模は74cm×56cm、深さ48cmを測る。埋土は単層（10YR4/3）。黒色土器杯Aと甕の破片が出土している。時期は古代8期以前。

910号土坑（第279図）

平面形は不整円形状。SD 61と同時に確認調査したが、切り合い関係は不明である。規模は86cm×75cm、深さ36cmを測る。埋土中から須恵器杯A類破片が出土。



第278図 SK 692の全景



第279図 SK 910の全景

971・972号土坑（第280図）

SK 972がSK 971を破壊する。両土坑ともSB 12床下より検出され、SK 973を破壊。全体形状は掘削の結果、楕円状となってしまったが、断面図のように2基の切り合いは明瞭である。全体規模は62cm×46cm、深さ52cmを測る。埋没土は両土坑とも2.5Y3/1の黒褐色土を基調とする。出土遺物は、SK 972より黒色土器Aの杯A類、土師器甕I類の破片が出土している。

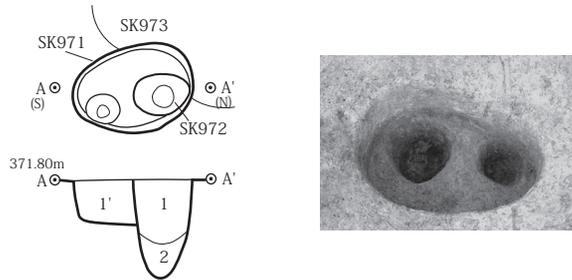
1045号土坑（第281図・第282図）

SB 12西側に隣接する。平面形は楕円状で、断面形態は砲弾状。規模は38cm×30cm、深さ46cmを測る。埋没土は北側に2.5YR3/1が柱状に堆積し、南側には2.5YR4/1が堆積する。北側の1層からは黒色土器の墨書が1点、2層からは須恵器杯Aが1点出土した。1は黒色土器杯A類のほぼ完形個体で坑底面出土。口径12.0cm、底径5.5cmを測る。ロクロ成形痕を残し、口唇直下に1.0cmほどの強い回転横ナデが入る。墨書文字は幅0.2cmの筆運びで、整然と「山川」の合わせ文字を外表面正位に記す。

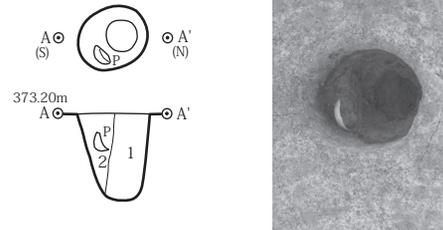
973号土坑（第283図）

平面形は楕円形状を呈する。断面形は浅いタライ状か。SB 12と重複して確認調査し、SK 971とSK 972

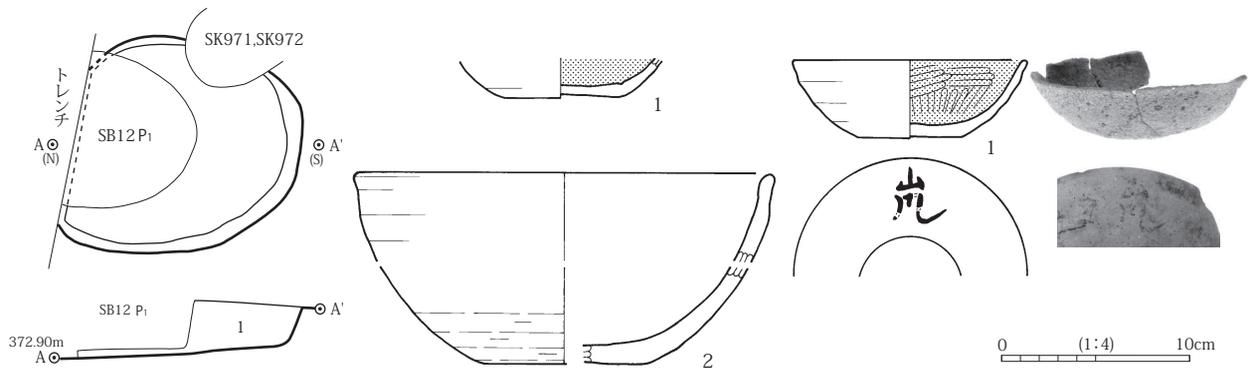
とも切り合い関係がある。残念ながら、それら3者の明確な切り合い関係はつかめなかった。規模は(116cm) × 116cm、深さ 26cm を測る。埋土はオリブ黒色土 (5Y2/2) の単純堆積。炭化物及び焼土ブロック等が混じる。遺物は、土師器鉢形土器、黒色土器A類、杯A類が出土している。1は黒色土器杯A類の底部と考えられる。糸切り離し調整で、底部付近はケズリ調整。2は土師器の大型の鉢。同一個体と考えられる口縁部と底部が出土している。口縁部は口唇直下外面を強く横ナデすることにより、口唇外反状に作出する。



第280図 SK971・SK972の全景



第281図 SK1045の全景



第283図 SK973の全景及び出土の土器

第282図 SK1045出土の土器

IXD-24

調査区にはSB 01、SB 03、SB 15があり、東西方向の溝SD 61、SD 51及びSD 50が走る。土坑はSB 検出部分以外で比較的密に確認できた。土坑は48基(SK 245・482・483・539・540・693・694・838・839・912・917・925～927・935～940・976～978・980・1011～1015・1018・1027～1036・1046・1050・1068・1123～1125・1127・1128)がある。

694号土坑(第284図)

平面形は不整円形状を呈し、断面形態は砲弾状。規模は70cm × 56cm、深さ53cmを測る。埋土は3層が水平に堆積し、1層は10YR4/6の褐色土、2層は10YR3/4の暗褐色土。3層は10YR3/2の暗褐色土である。出土遺物はない。

976号土坑(第285図)

平面形は円形状で、断面は砲弾状。規模は50cm × 40cm、深さ45cmを測る。埋土は2層からなり、1層は10YR3/3の暗褐色土、2層は10YR3/2の暗褐色土。出土遺物は黒色土器A、杯A類の破片が出土。

1031号土坑(第286図)

平面形は円形で、断面形態は砲弾状。規模は19cm × 18cm、深さ25cmを測る。10YR2/3の単純堆積層である。周辺には、同形状の柱穴が16基ほど確認でき、ことに、SK 1030、SK 1011、SK 939、SK

940 等は列状に並ぶ様から、建物跡あるいは柵列等の遺構の可能性も考えられる。本跡は位置から考えると、SB 15 の煙道煙出部の可能性も考えられるか。土師器盤 A 破片が出土している。時期は古代か。

978号土坑 (第287図)

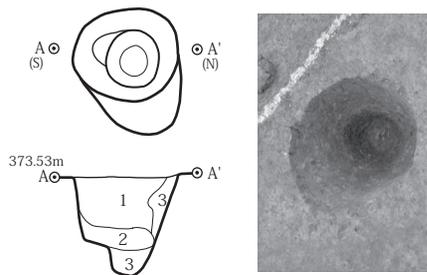
平面形は円形で、断面形はすり鉢状。土坑東側は焼土に壊される。規模は 54cm × 52cm、深さ 34cm を測る。埋土は 2 層に区別でき、下層は白色粘土ブロックや炭化物を僅かに含む暗褐色土 (10YR3/3)。上層はほぼ同質同色で、白色粘土や炭化物が多く混じる。遺物は、土師器杯 A 類、須恵器壺の破片が出土。

980号土坑 (第288図・第289図)

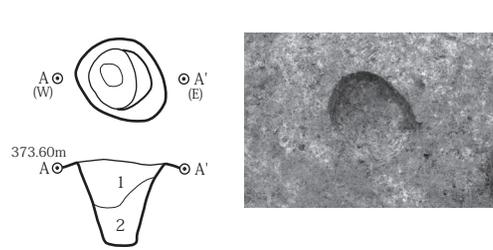
平面は楕円形状で、SK 838 を破壊する。規模は 70cm × 62cm、深さ 67cm を測る。埋土は 3 層からなり、柱根部分の主体は 10YR2/3 の黒褐色土。2 層は 10YR3/4 の暗褐色土、3 層は 10YR3/3 の暗褐色土である。埋土内には 20cm 前後の角礫が含まれ、黒色土器 A の杯 A 類、土師器杯 A 類の破片が出土したほか、置き砥石 1 点がある。1 は凝灰岩材の置き砥石。16.0cm × 9.4cm × 6.3cm、1320g を量る。

1046号土坑 (第290図)

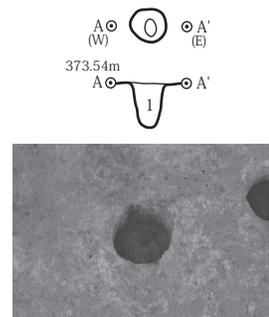
平面形は楕円形を呈する。断面は浅い皿状。規模は 70cm × 40cm。深さ 21cm を測る。単層で暗褐色土 (10YR3/3)。検出時に焼土を確認する。SK 978 と同様に焼土跡 (SF) の可能性もあるが、土坑範囲と合致していたことから、本跡扱いとした。出土遺物には、土師器杯 A 類、黒色土器 A 杯 A 類、椀形土器等の破片、川原石 2 点 (40.9g) がある。時期は古代 9 期か。1 と 2 は黒色土器 A の椀形土器。1 は口縁部破片。口唇直下には横方向の強いナデがある。2 は第 290 図 No2 の底部高台部。1 と 2 は同一個体か。3 は第 290 図 No1 の土師器杯 A 類 2/3 個体。口径 12.0cm、底径 4.0cm を測る。



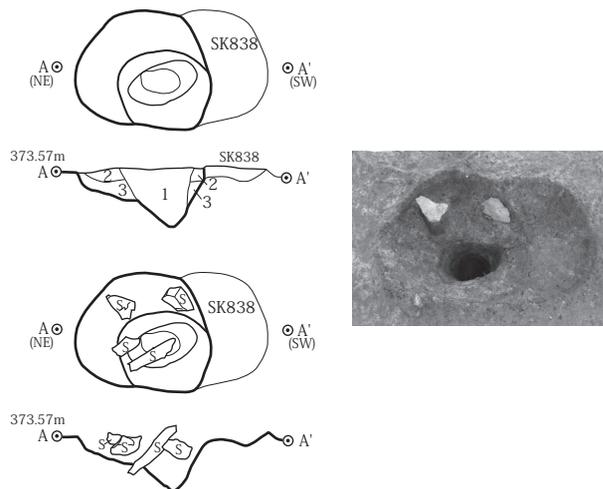
第 284 図 SK 694 の全景



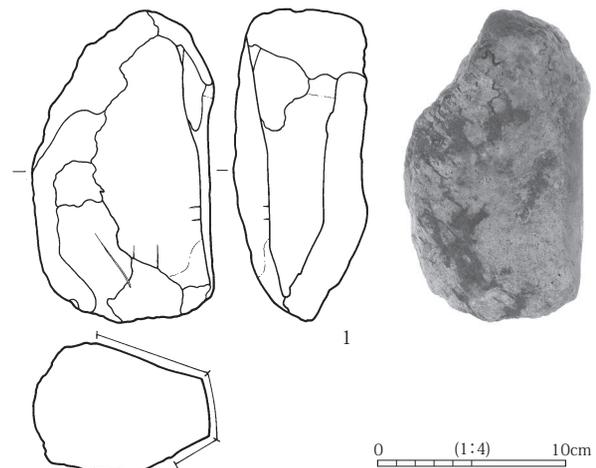
第 285 図 SK 976 の全景



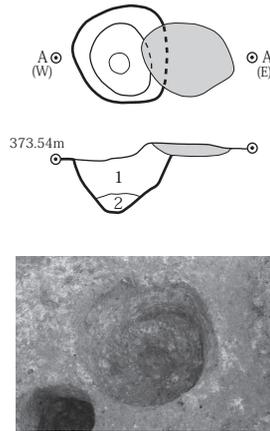
第 286 図 SK 1031 の全景



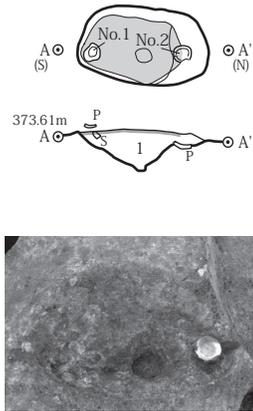
第 288 図 SK 980 の全景及び遺物出土状態



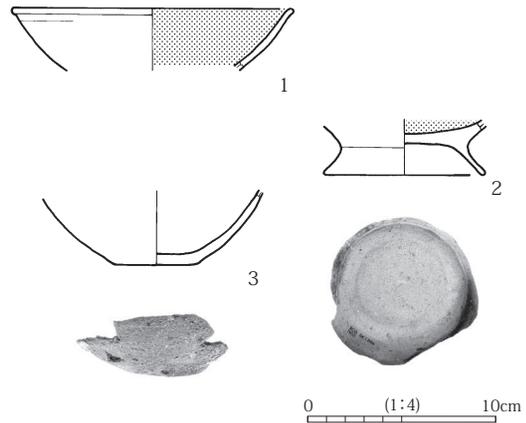
第 289 図 SK 980 出土の石器



第 287 図 SK 978 の全景



第 290 図 SK 1046 の全景及び出土の土器

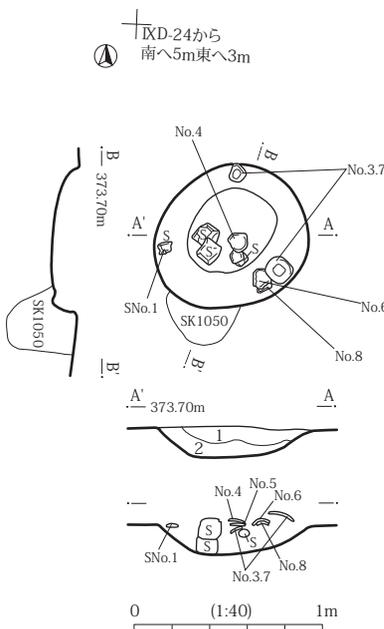


8 3 9号土坑 (第 291 図・第 292 図)

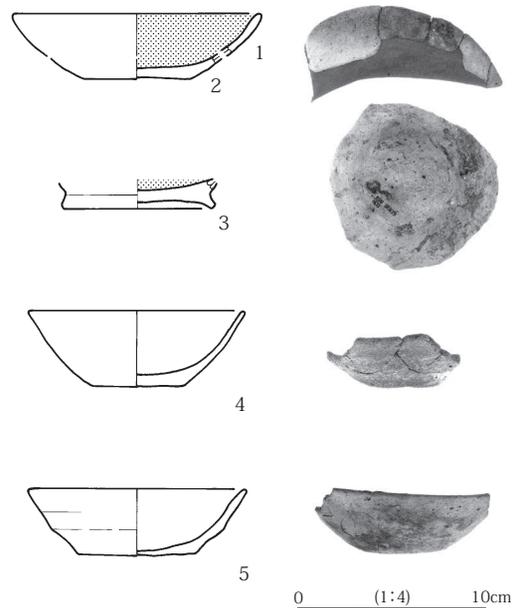
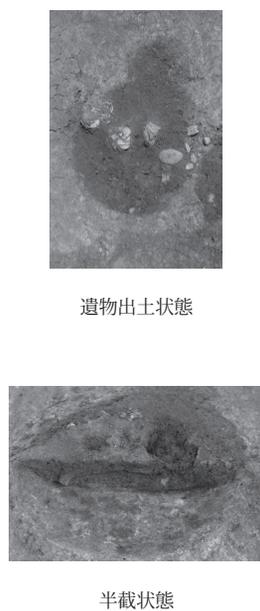
平面形は円形状で、断面は浅い皿状を呈する。規模は 80cm × 76cm、深さ 16cm。埋土は暗褐色土 (10YR3/3) を基調とする。SK 1050 を破壊する。埋土中から角礫と土師器及び黒色土器 A の杯 A 類、砥石 1 点が出土した。1 と 2 は第 291 図 No3 の黒色土器 A の杯 A 類。同一個体と考えられるが、接点はない。外面は風化し器面が剥落している。3 は第 291 図 No4 の黒色土器碗底部破片。風化激しい。4 は第 291 図 No6 で、土師器杯 A 類 2/3 個体。口径 13.0cm、底径 5.5cm を測る。胎土中に赤色粒子を多量に混じる。器面の風化著しい。5 は第 291 図 No8 の土師器杯 A 類 1/5 個体。底径 6.0cm を測る。やはり風化があり、内面が激しい。図示してないが、第 291 図 No1 の細粒砂岩材の手持ち砥石 1 点がある。1/2 程度の欠損例で、長さ (6.6) cm × 幅 4.6cm × 厚さ 2.7cm、重さ (128.0) g を量る。

9 1 2号土坑 (第 293 図・第 294 図)

平面形は楕円形状で、断面は浅い皿状。規模は (210) cm × (156) cm。深さ 30cm。埋土は黒褐色土 (10YR3/1) の単純堆積。SB 15 を調査中に確認し調査した。SB 15 を破壊する。SK 870 との切り合い関係は不明。埋土中からはバレーボール大の角礫がまとまって出土し、木片 1 片と玉石 1 点、すり鉢

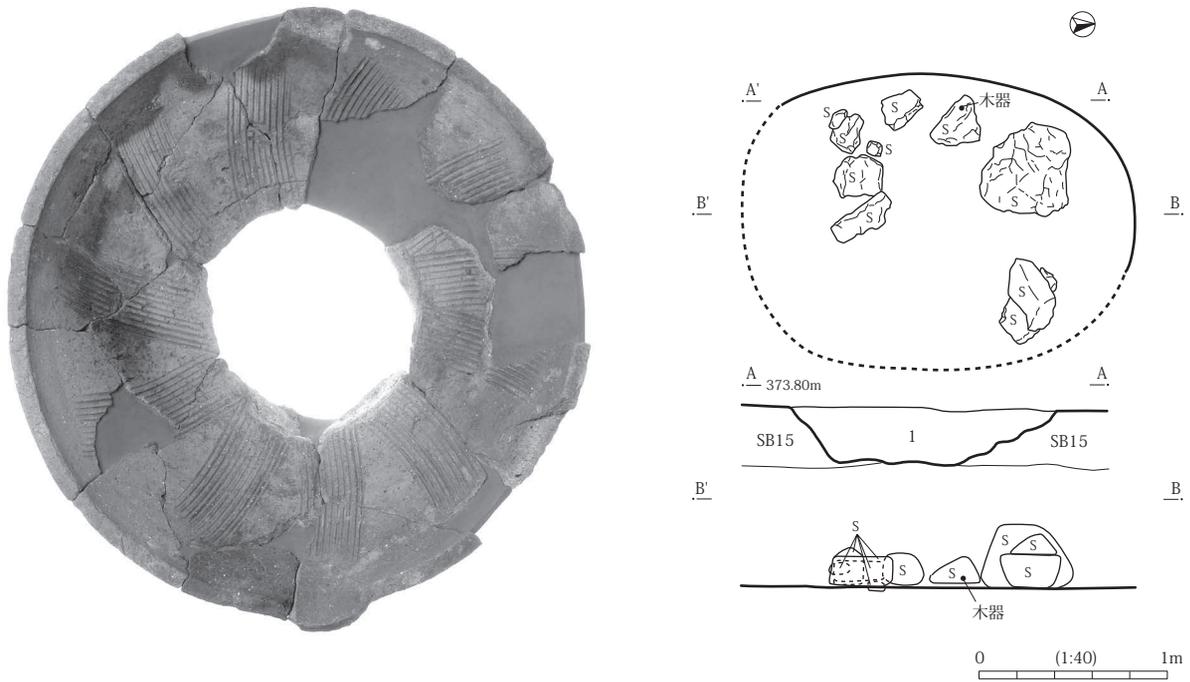


第 291 図 SK 839 の全景

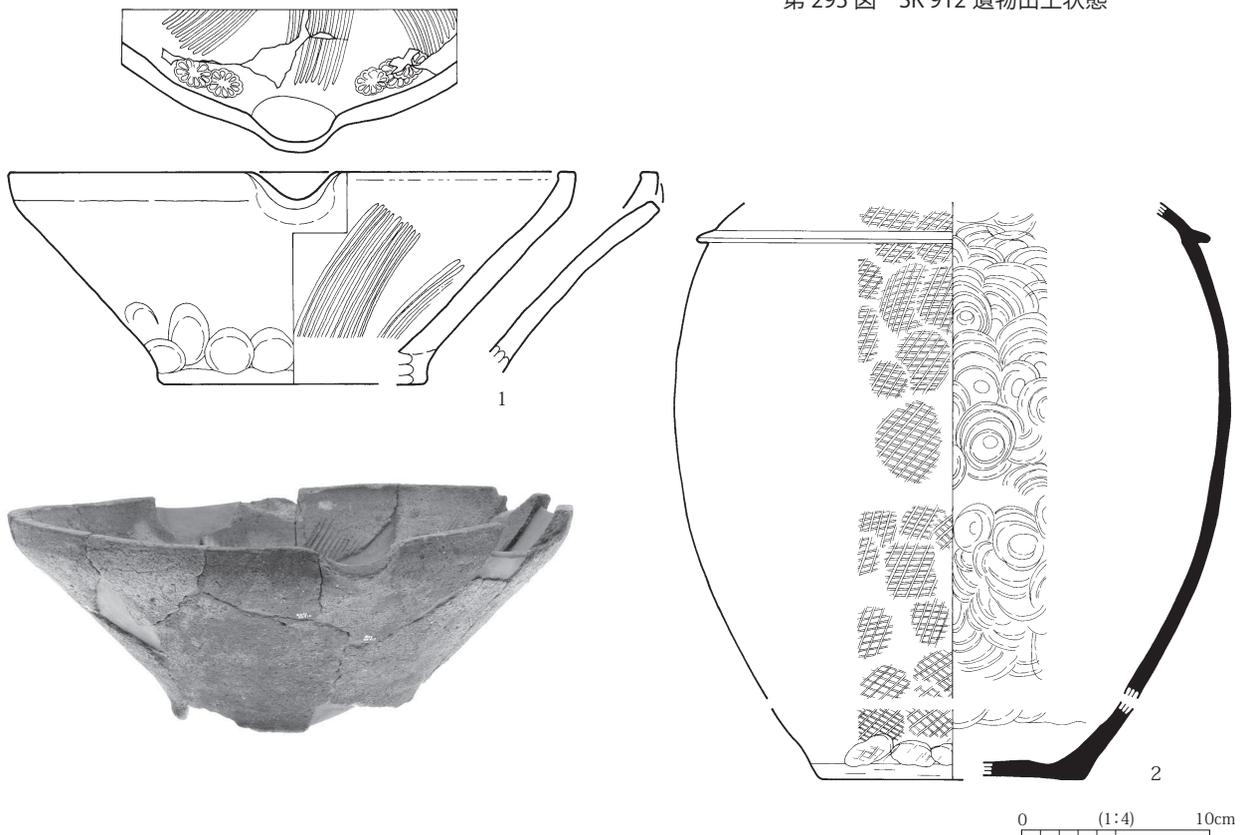


第 292 図 SK 839 出土の土器

と須恵器甕破片等が出土した。埋土中から出土した須恵器甕D類はSK 870 埋土中出土の破片と接合関係にあり、両土坑ともSB 15を破壊していることから、SB 15の遺物であった可能性は高い。1はすり鉢。底部を欠失するが、ほぼ完形。片口で、注ぎ部分の内面には菊花文が押捺される。また玉石1点は砂岩材で、2.5cm × 1.5cm × 0.6cm、2.1gを量る。



第293図 SK 912 遺物出土状態



第294図 SK 912 出土の土器

溝状遺構

5 1号溝跡（14号溝跡）

時期： 古代以降か

長軸方向： SD 51 = W - 2° - S、SD 14 = N - 9° - E

位置： IX D - 24

性格： 耕作に伴う溝跡か

規模： SD 51 = 長さ 6m74cm、幅 17cm、深さ 6cm、傾き 37度

SD 14 = 長さ 4m90cm、幅 50cm、深さ 18cm

埋土： 黒褐色土

遺構重複： SB 01、SB 15、ST 28、SD 64、SK 1011、SK 1018、SK 1025 を破壊する。SD 51 と SD 18 は重複関係ある溝跡とも考えられるが、調査上それらを区別することはできなかった。

出土遺物： 埋土中から土師器杯 A 類と須恵器杯 A 類の破片 20 片を主体に、黒色土器 A 杯 A 類 5 片、須恵器杯 A 類 7 片、灰釉陶器椀 1 片等が出土した。

6 1号溝跡（第 295 図・第 296 図）

時期： 古代

位置： IX D - 24

長軸方向： N - 80° - E

性格： 区画溝か

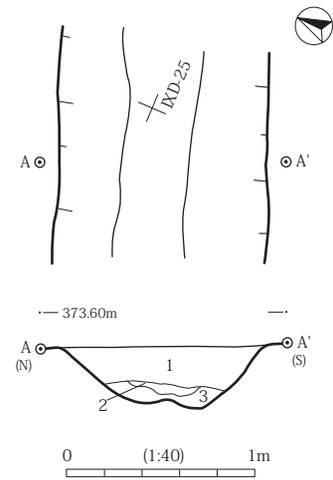
規模： 長さ 25m、幅 1m10cm、深さ 32cm

壁の立ち上がり： 52 度程度

埋土： 水平に 4 層が堆積する。1 層褐色土（10YR4/4）、2 層黄褐色土（10YR5/6）、3 層褐色土（10YR4/6）、4 層明黄褐色土（10YR6/8）。4 層は部分的に堆積。

遺構重複： SB 03、SB 10、SB 15、SD 56 と SD 57、ST 45 等重複するすべての遺構に切られる。

出土遺物： 1 から 3 は黒色土器 A。1 は鉢 A 類の口縁部破片。推定口径 19.0cm。2 は杯 A 類口縁部破片。推定口径 13.0cm、体部に稜を持つ。3 は椀の高台部分。4 は土師器盤 A 類脚部破片。この他、磨石 1 点の出土がある。

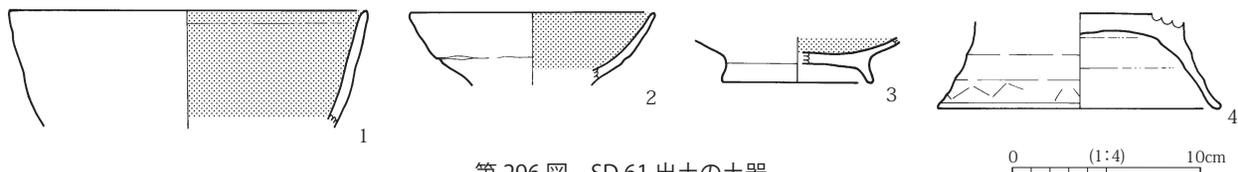


第 295 図 SD 61 の土層観察部分

遺構名	非ロク	土師器										黒色土器 A				須恵器				灰釉陶器				数 / 総重量 (破片 / g)					
		高杯	杯 A	椀	皿	甕 B	甕 C	甕 D	甕 E	甕 I	小甕	小甕 D	杯 A	椀	鉢	甕 B	杯 A	杯 B	蓋	盤	甕 A	甕 B	甕 C		甕 D	甕 E	壺	短頸壺	椀
SD61 埋土	1	52		1	33	9		5	2	2	3	46	1			14	2		3	2		1	5	2	1	1			186/1,503.4
" 1層		7	23	1		14		7		1		15	2			3		1	1	5	1	2	2		1		1	89/868.9	
" 2層		16				22	2		1	3		32				11		2	1		1		2	1			1	95/421.7	
SB10 との重複部分		3				1				1		1											1				2	9/132.8	
		9				1	1					11	1	2		4	1	1				2	2		3		1	39/464.3	

第 49 表 SD 61 出土土器組成

埋土



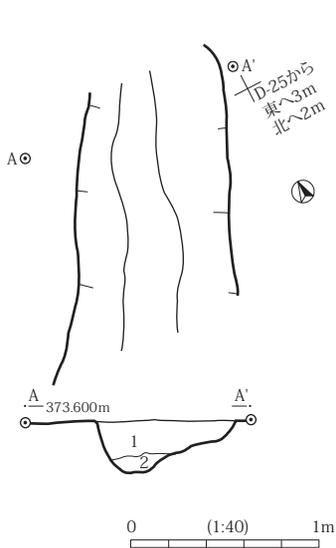
第 296 図 SD 61 出土の土器

77号溝跡 (第297図・第298図)

時期： 古代
 位置： IXD-17~20・22~24 長軸方向： N-78°-E
 性格： 区画溝か
 規模： 長さ28m30cm、幅80cm、深さ17cm 壁の立ち上がり： 25度程度
 埋土： 水平に2層が堆積。1層は黒色土(10YR2/3)で炭化物及び白色の微粒子を混じる。2層褐色砂質土(10YR4/4)で、白色粘質土ブロックを含む。
 遺構重複： SD 61 とほぼ同様な規模で東西方向に走る。遺構の重複もほぼ同様で、SB 03、SB 10、SB 15、SD 56 と SD 57、ST 45 等重複するすべての遺構に切られる。
 出土遺物： 1は須恵器杯B類もしくはA類の口縁部破片。2は須恵器杯B類の底部破片。高台内にヘラ書きで「◎」と「×」を重ねて記す。3は土師器杯A類の底部。糸切り離し調整で底径4.5cmを測る。4は灰釉陶器の皿口縁部破片。口唇部付近は極めて薄い作りとなっている。

D-19・24区検出面出土の土器 (第299図)

1は黒色土器Bの耳皿の耳部破片。2は磁器で合子の蓋部破片。4は青磁碗口縁部破片。5は須恵器蓋G類の破片。6は須恵器杯A類2/3。7は緑釉陶器碗の底部。ほかD-19区から土鍾破片1点がある。



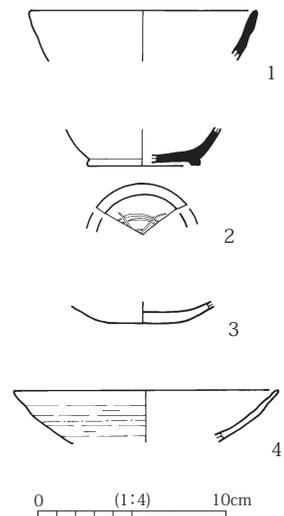
第297図 SD 77の土層観察部分



全景(東から)



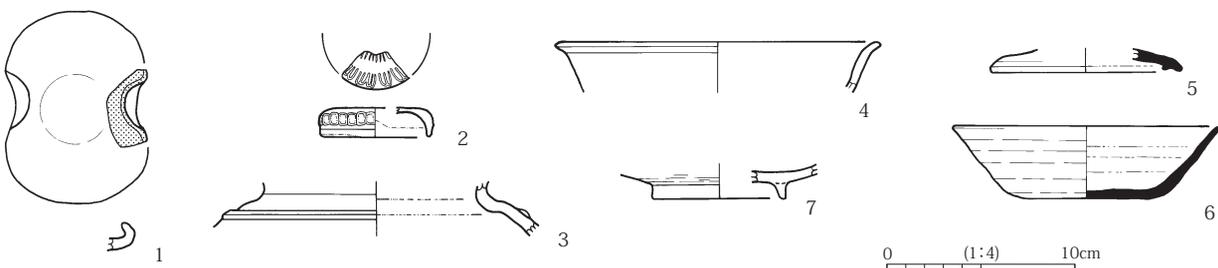
堆積土層



第298図 SD 77出土の土器

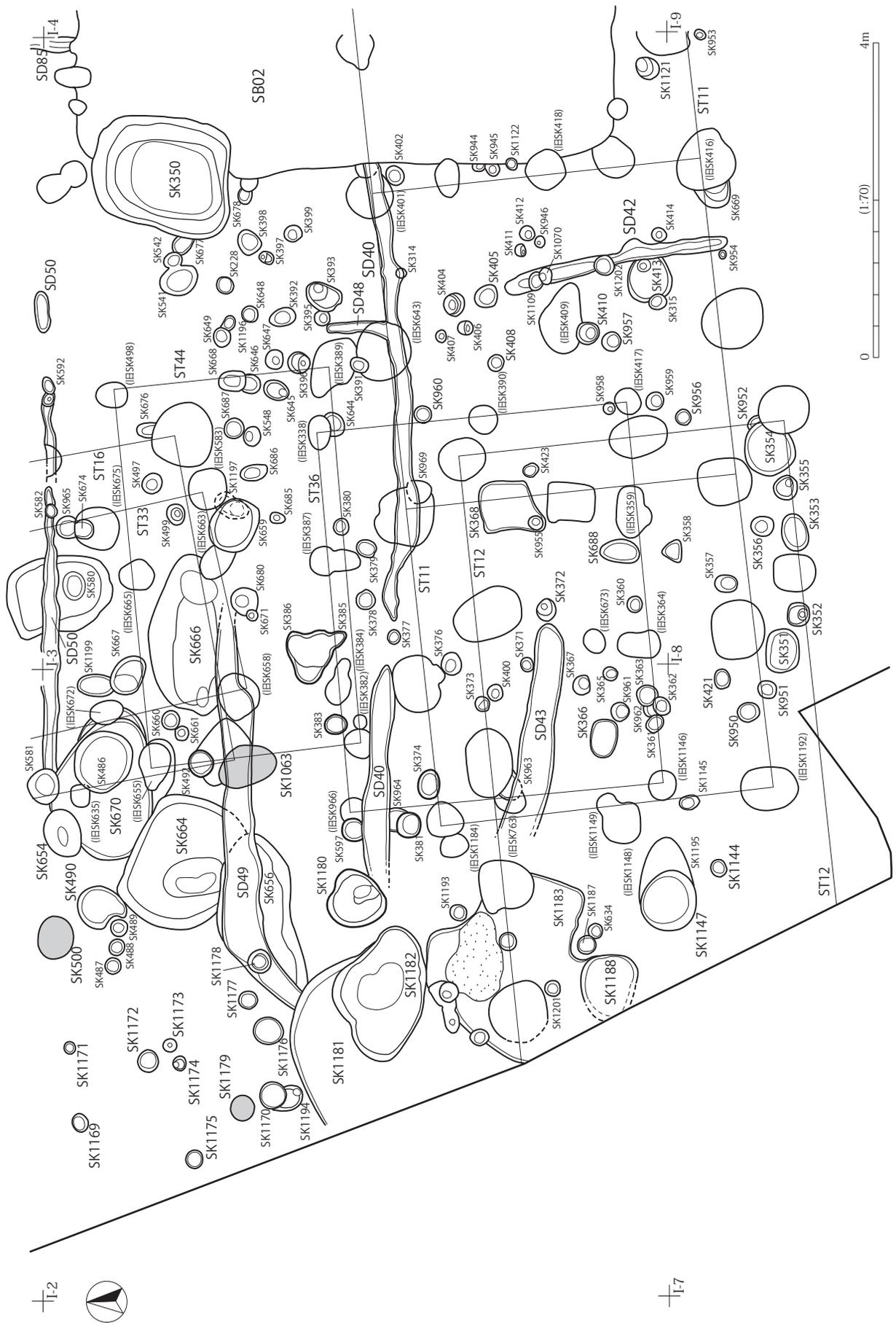
遺跡名	土師器									黒色A				須恵器			灰釉 皿A	数/総重量 (破片/g)
	杯A	椀	甕	甕A	甕B	甕D	甕E	小型甕	不明	杯A	杯A	杯B	蓋	甕A	甕D	壺		
SD77	7	2	14	4	3	1	7	3	3	15	9	2	3	4	3	1	1	82/789.3

第50表 SD 77出土土器組成



第299図 D-19・24区出土の土器

第300図 IX I-2.3.7.8全体



IX-I-2・3区

本調査区は、③区の南端にあたり、掘立柱建物跡と土坑が密集する。北端から東西方向のSD 50、SD 49、SD 40、SD 43がある。土坑はすべて137基があり、その内、規模・配列から48基が掘立柱建物跡と認定できた。掘立柱建物跡は6棟(ST 11・12・16・33・36・44)である。土坑はI-2区で58基(SK 361~363・365~367・371・373・374・376・381・383・400・486~490・492・500・581・597・634・654・656・660・661・664・667・670・961~964・1063・1147・1169~1183・1187・1188・1193・1194・1195・1199・1201)、I-3区で79基(SK 228・314・315・350・360・368・369・372・377~380・385・386・391~393・395~399・402・404~408・410~414・423・497・499・541・542・548・580・582・592・644~649・659・666・668・671・674・676~678・680・685~688・944・945・946・955・957~960・965・969・1070・1109・1112・1121・1122・1196・1197・1202)である。

IX I-2

大型の土坑であるSK 656、SK 664、SK 670、SK 1183、SK 1184と地鎮的遺構であるSK 500、SK 1170、SK 1063がある。掘立柱建物跡ではST 36 (P457)、ST 11 (P382)、ST 12 (P390)を検出した。

土 坑

367号土坑(第301図)

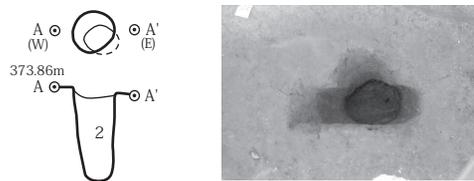
円形、砲弾状で深く掘り込まれている。規模は23cm×22cm、深さは48cm。黒褐色土(10YR3/1)の単純堆積である。出土遺物はない。

381号土坑(第302図)

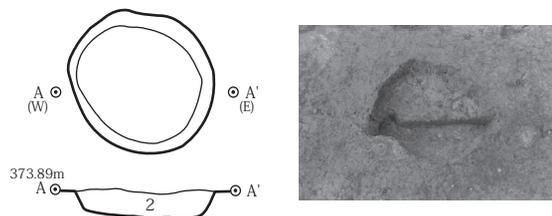
平面形円形状で、断面は砲弾形。規模は30cm×28cm、深さ45cmを測る。10YR3/2の単純堆積。SK 964を破壊する。埋土中から、須恵器杯A類、非ロクロ土師器杯C類破片が出土している。時期は古代4期前後か。

486号土坑(第303図)

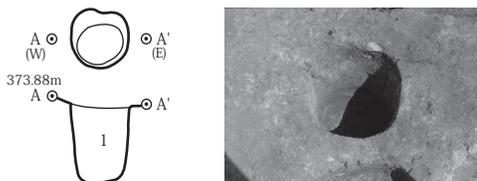
平面形は円形で、底部が平坦なタライ状。規模は78cm×72cm、深さ32cm。黒褐色土(10YR3/1)の単純堆積。1は須恵器杯A類の底部破片で、ヘラ切り離し手法。時期は古代4期前後か。



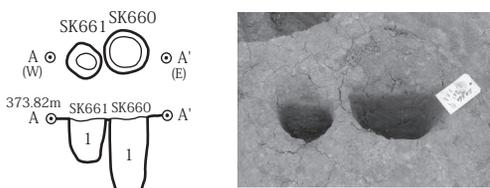
第301図 SK 367の全景



第303図 SK 486の全景と出土の土器



第302図 SK 381の全景



第304図 SK 660・SK 661の全景



第305図 SK 961 礫出土状態と完掘

660号・661号土坑（第304図）

SK 661は、円形で砲弾状。直径18cm、深さ22cm、小規模ではあるが、深さのある柱状の土坑。出土遺物はない。

961号土坑（第305図）

平面形は円形で、断面は砲弾状。規模は24cm×22cm、深さ25cmを測る。出土遺物はないが、基礎であろうか、角礫1点（長さ20cm、幅15cm、厚さ8cm前後）が埋土中に倒立して出土した。

581号土坑（第306図・第307図）

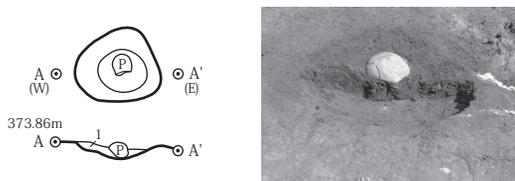
平面形は不整円形で、浅い皿状。規模は46cm×38cm、深さ4cm。埋土は10YR3/1の黒褐色土。1は土師器杯A類の2/3個体。口径13.0cm、底径5.5cmを測る。胎土中に赤色粒子を多量に混じり、内面はススける。2は灰釉陶器碗の口縁部破片。時期は古代6期以降か。

664号土坑（第308図・第309図）

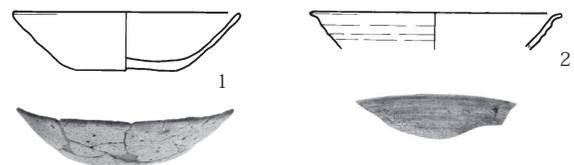
平面は不整円形状で、底部に段を有する形態。全体的に浅いタライ状だが、中央部に深い部分がある。規模は182cm×162cm、深い部分で68cmを測る。1層は10YR3/2、深い部分の2層は、10YR5/6である。SK 656に破壊される。1は須恵器杯H類の口縁部破片。口径14.0cm、口縁立ち上がり端部は丸みを持つ。TK10ないしはTK43型式頃か。2は須恵器杯A類のほぼ完形個体。口径14.0cm、底部内径6.0cmを測る。糸切り離し調整で、口唇外面は1.0cmほどのナデ調整が施される。3は土師器甑の把手部分。時期は古代6期以降か。

670号土坑（第310図）

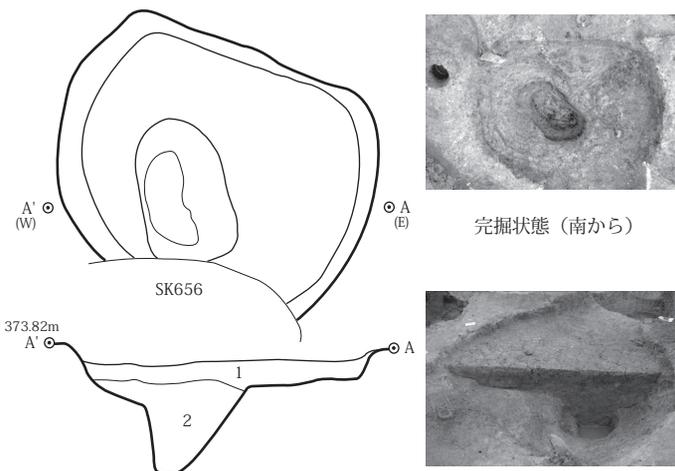
平面形は楕円形状で、断面は底部が平坦なタライ状。規模は176cm×128cm、深さは27cmを測る。埋土は10YR3/4の暗褐色土。SK 581、SK 654、SK 655、SK 672に破壊される。1は非ロクロ土師器の高杯脚部。時期は古代2期以降か。



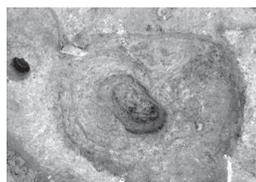
第306図 SK 581 土器出土状態と半截（南から）



第307図 SK 581 出土の土器



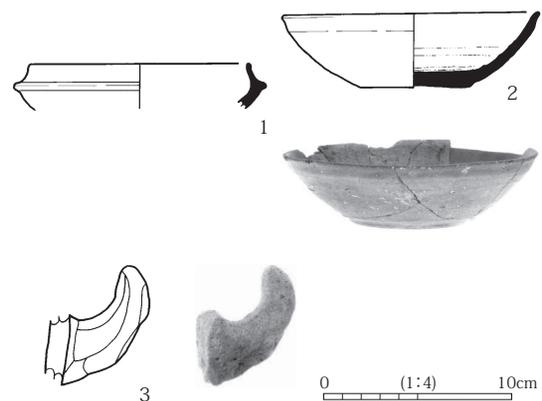
第308図 SK 664 の全景



完掘状態（南から）



半截状態（北から）



第309図 SK 664 出土の土器

1147号土坑 (第311図・第312図)

楕円形状で、底部に段を有する形態。規模は76cm×70cm、深さ35cm。埋土中から、黒色土器鉢Aと杯A、土師器甕形土器、須恵器杯A類、甕形土器の破片、さらに川原石が4点(24.4g)が出土した。1は黒色土器A類鉢形土器、口縁部破片。口唇は丸く作出し、外面は1.5cm幅の回転ナデ調整が入る。時期は古代6期以降。

1169号土坑 (第313図)

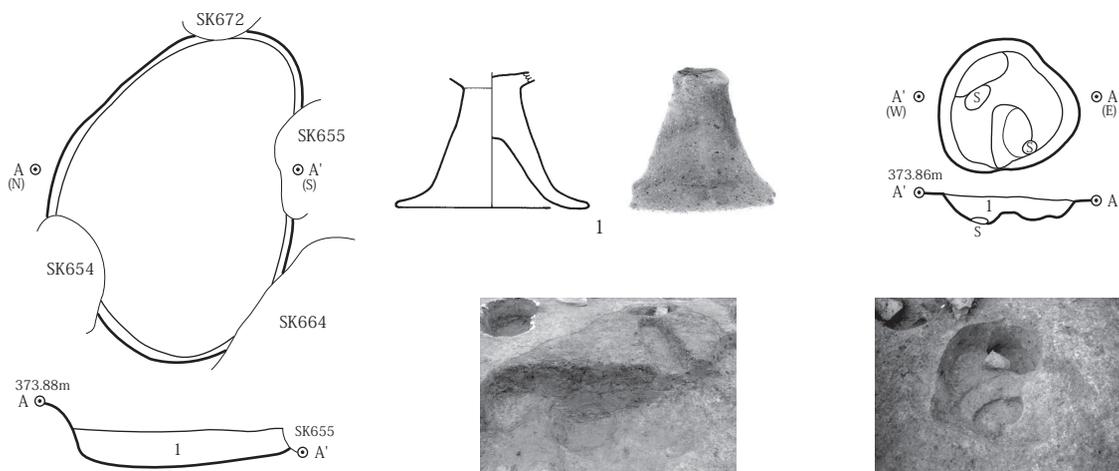
円形、砲弾状の柱穴。規模は23cm×20cm、深さ45cm。埋土中から割材が出土した。12.2cm×6.5cm×7.1cmを測り、斜めに切断痕が残る。樹種はクリ材。

1180号土坑 (第315図)

不整形円形状で、底部に段を有する形態。規模は74cm×70cm、深さ19cm。埋土中から幅10cm前後の角礫が出土したほか、須恵器甕形土器、黒色土器Aの杯A類破片が出土している。時期は古代か。

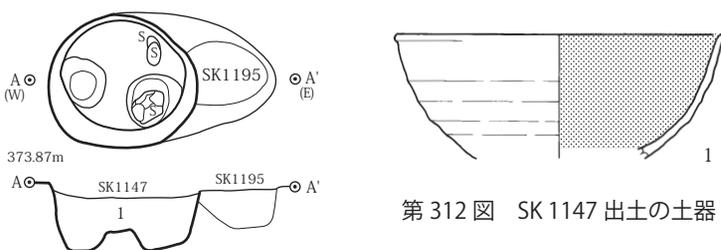
1193号土坑 (第316図)

円形で砲弾状の柱穴。規模は22cm×20cm、深さ30cm。土坑中心部に、縦20cm、幅10cm前後の角礫が倒立して出土、SK961と類似した施設である。時期は不明。



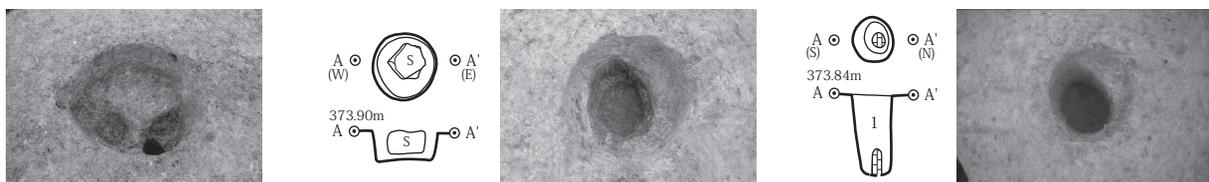
第310図 SK670の全景と出土の土器

第315図 SK1180の全景



第312図 SK1147出土の土器

第316図 SK1193 礫出土状態と完掘



第311図 SK1147の完掘状態

第314図 SK1170 礫出土状態と完掘

第313図 SK1169 礫出土状態と完掘

IXI—3

SK 350、SK 580、SK 660 の大型土坑と、掘立柱建物跡5棟 (ST 11、ST 12、ST 16、ST 33、ST 36)、
 竪穴式建物跡1軒 (SB 02)、I—2区から続くSD 50、SD 40がある。

350号土坑 (第317図)

平面形は楕円形状を呈する。底部が平坦なタライ状で、規模は198cm×153cm、深さ116cmを測る。
 埋土は3層に分層でき、1層黒褐色 (10YR3/2、2層5BG2/1、3層5BG2/1)。埋土中から坑底面にかけて
 ハンドボール大の礫がまとまって出土した。SB 02、SK 677を破壊する。時期は不明。

380号土坑 (第318図)

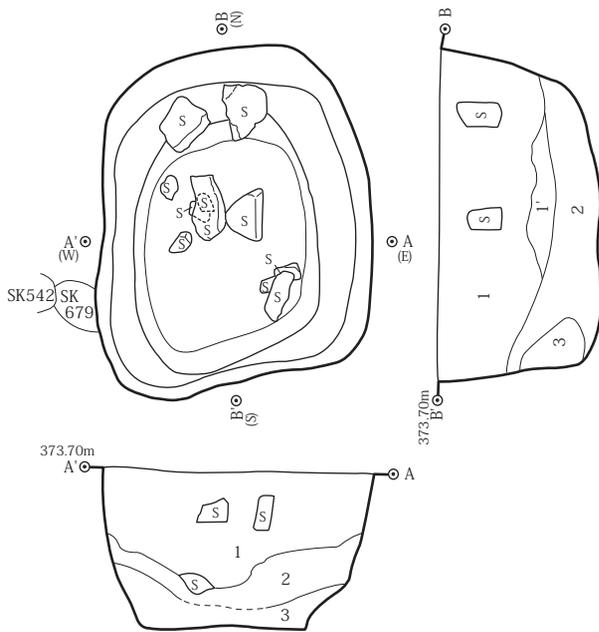
円形状で、断面は底部が平坦な柱状。SK 398同様に礎石と考えられる平石を持つ。平石は幅10cm、
 厚さ5cmほどで2点が重なるように出土した。規模は20cm×19cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色
 土 (10YR3/2) の単層。出土遺物はない。

398号土坑 (第319図)

楕円形状を呈し、底部は平坦。規模は33cm×25cm、深さ40cm。埋土は単層で、10YR3/2。幅
 20cm、厚さ10cm前後の平石1点があるほか、須恵器甕形土器の破片が出土している。

404号土坑 (第320図)

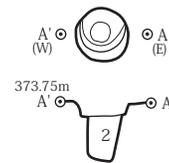
平面形は円形で、断面砲弾状。規模は26cm×27cm、深さ57cm。埋土は10YR3/1の黒褐色シルト
 質土で鉄分の沈着が多い。遺物は土師器の小破片が出土している。周辺には同規模・同形状の土坑、SK
 405～SK 408、SK 411とSK 412、SK 946等が存在する。



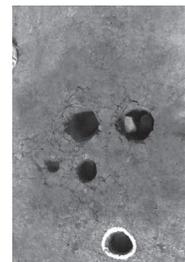
第317図 SK 350の全景



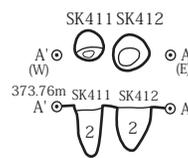
礫出土状態



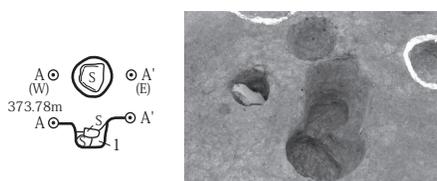
第320図 SK 404の全景



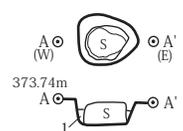
完掘状態



第321図 SK 411・SK 412の完掘状態



第318図 SK 380 礫出土状態と完掘



第319図 SK 398 礫出土状態と完掘

4 1 1号・4 1 2号土坑 (第321図)

両土坑とも円形、砲弾形の柱状土坑である。SK 411は16cm×16cm、深さ52cm。SK 412は20cm×18cm、深さ49cmを測る。埋土はいずれも10YR3/1の黒褐色シルト質土。SK 411は土師器盤A、杯Aの破片が出土している。時期は古代か。

5 4 1号土坑 (第322図)

平面形は楕円形状で、底部平坦なタライ状。規模は59cm×36cm、深さ69cm。2.5YR5/3。埋土中から、灰釉陶器の椀と長頸壺の破片が出土した。時期は古代か。SK 542との切り合い関係があるが、新旧は不明。

5 8 0号土坑 (第323図)

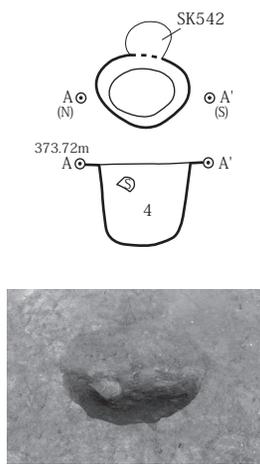
SD 50に破壊され、ST 33 Pit8との切り合い関係は不明。楕円形状で、壁面に段を有する形態。規模は133cm×96cm、深さ44cm。埋土は2層に分層でき、1層7.5YR2/2、2層7.5YR4/3。出土遺物は、須恵器甕形土器、黒色土器A杯A類、皿、土師器杯A類、灰釉陶器椀、長頸壺(第323図の1)などが出土している。時期は古代。

6 6 6号土坑 (第324図)

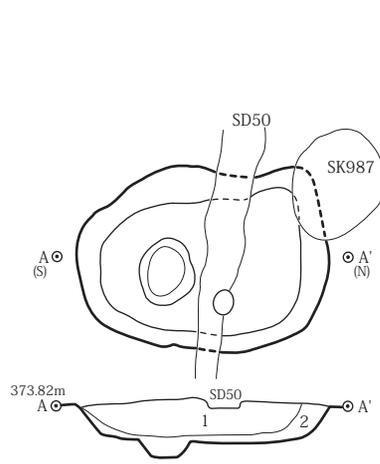
平面形は楕円形状で、底部に柱状の深い部分を有する形態。規模は197cm×104cm、深さは深い部分で40cmを測る。埋土は10YR3/2。東側壁面部をSK 663に、西側壁面部をSD 49に壊される。遺物は須恵器杯A類破片が出土しているほか、川原石が1点(38.5g)ある。時期は古代か。

6 7 8号土坑 (第325図)

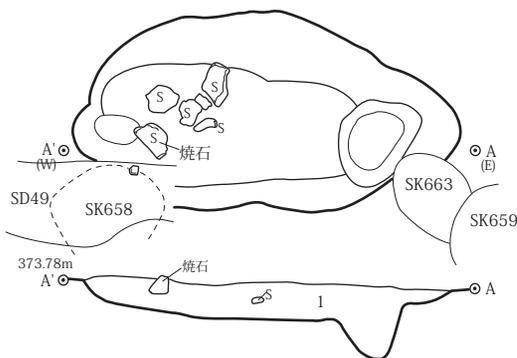
SK 679に破壊される。円形で柱状を呈する。規模は22cm×20cm、深さは82cmと深い。時期は不明。



第322図 SK 541の全景



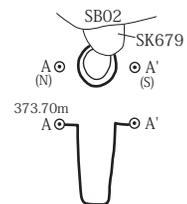
第323図 SK 580の全景と出土の土器



第324図 SK 666の全景



半截状態 (北から)



第325図 SK 678の全景

659号土坑 (第326図)

楕円形で、底部に段を有する形態。規模は73cm×58cm、深さ39cm。黒褐色土(10YR3/2)の単純堆積。土師器甕形土器、須恵器杯B類等が出土している。SK 663及びSK 1197を破壊する。時期は古代。1は須恵器杯A類底部。ヘラ切り離し手法で、器面は明瞭なロクロ成形痕が残る。2は須恵器杯B類の口縁部破片。

955号・368号土坑 (第327図)

SK 955はSK 368に破壊される。SK 368は正形状で、断面浅いタライ状。規模は80cm×79cm、深さ28cm。SK 955はSK 368の坑底面の施設である可能性もあるが、調査時に別遺構として検出した。

959号土坑 (第328図)

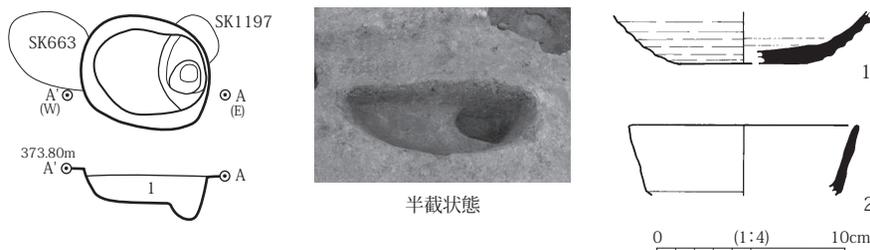
円形で柱状。規模は25cm×23cm、深さ65cmを測る。5YR2/1の単層。埋土中心部に20cm×10cm前後の角礫が入る。時期は不明である。

960号土坑 (第329図)

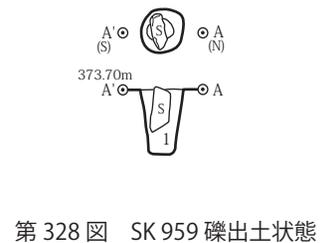
平面円形の柱穴。22cm×20cm、深さ94cmを測り、埋土は10YR2/1の単層。柱材が出土。

965号・674号土坑 (第330図)

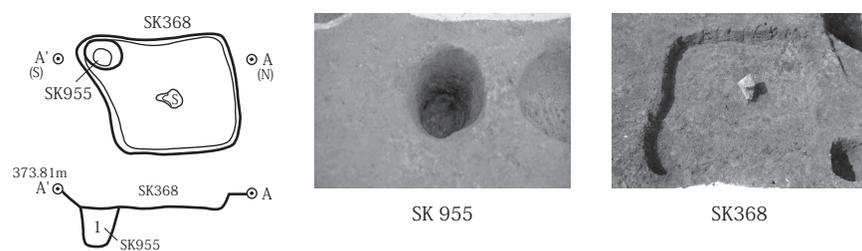
SK 674とST 33Pit2に破壊される。楕円形状で、底部に段を有する形態。規模は28cm×24cm、深さ39cm。埋土は10YR1.7/1の単層。SK 674埋土には径20cm前後の礫が出土した。SK 965から川原石が2点(7.4g)出土した。時期は古代か。



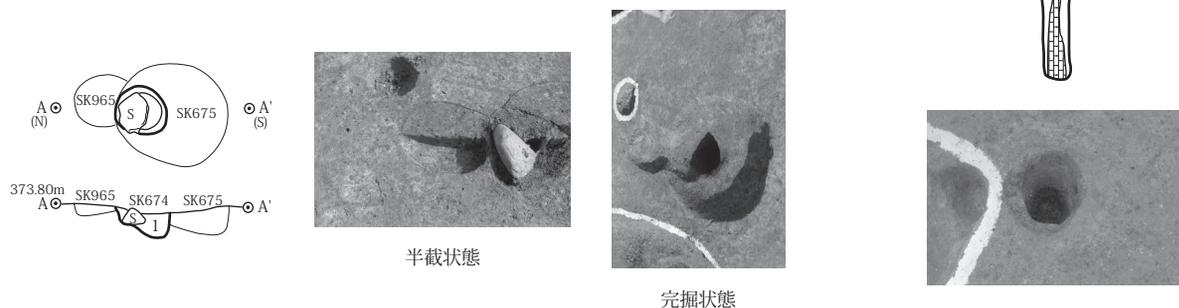
第326図 SK 659の全景と出土の土器



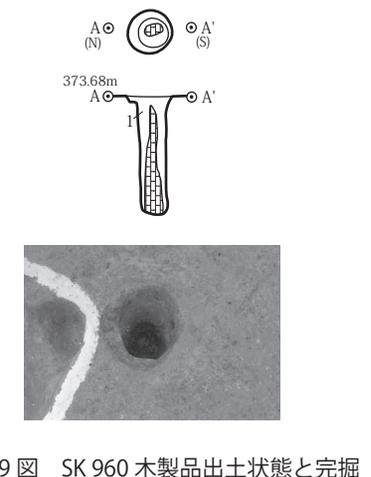
第328図 SK 959 礫出土状態



第327図 SK 955・SK 368の全景



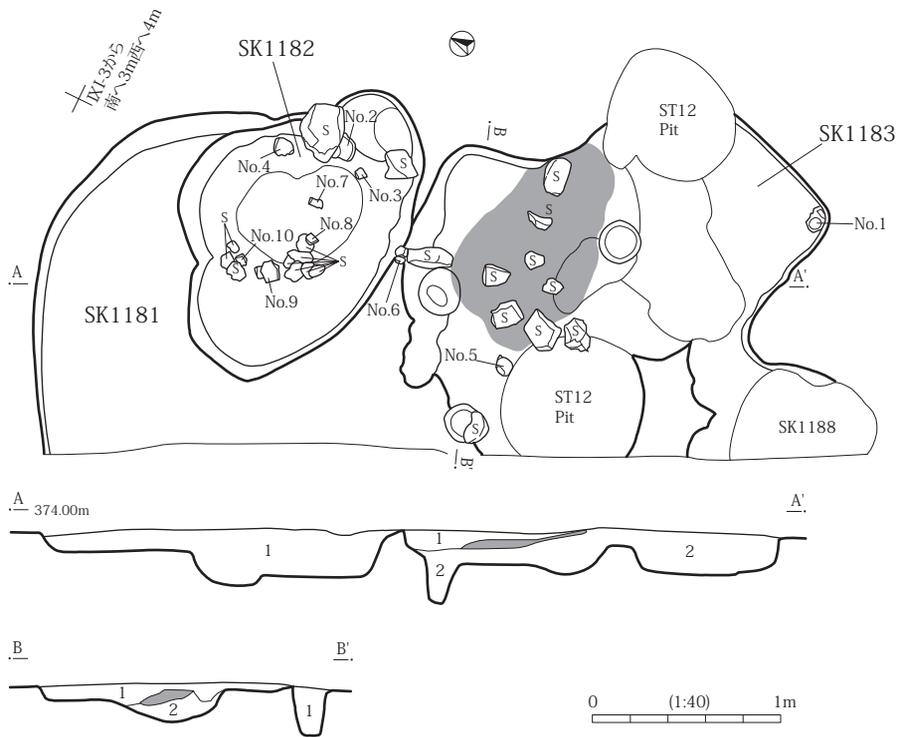
第330図 SK 965・SK 674の全景



第329図 SK 960 木製品出土状態と完掘

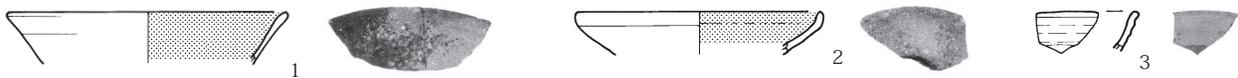
1181・1182・1183号土坑（第331図～第334図）

調査区西端にて、広がりのある黒色土の落ち込みを確認する。精査の結果、大型の土坑が重複していることが確認でき、それぞれに土坑番号を付して調査した。SK 1181 と SK 1183 の切り合い関係は、それらの重複部分を破壊する SK 1182 の存在により、不明瞭だが、SK 1183 が新しい所見がある。SK 1181 は、大きさ (234) cm × (170) cm、深さは浅く 9.0cm を測る。1 は黒色土器 A の杯 A 類口縁部破片。2 は黒色土器 A の杯 A 類口縁部の破片。器高が低く皿型の杯 A 類で、口唇部は強く内側に屈曲する。SK 1183 の1 と同一個体か。3 は灰釉陶器碗の口縁部小破片。SK 1183 は、大きさ (200) cm × (180) cm、深さは浅く 38cm を測る。埋没土は黒褐色粘土 (10YR2/2) を基調とし、部分的に焼土ブロック、炭化物粒子を混じる。焼土の薄層を境に上層と下層に区別した。埋土中からは角礫数点とともに、土器の破片が出土した。1 は第 331 図 No.1 に当り、黒色土器 A の皿型の杯 A 類 2/3 個体。口径 13.0cm、底径 5.0cm を測る。2 は灰釉陶器の広口壺底部破片。SK 1182 は、不整形で、規模 168cm × 118cm、深さ 45cm を測る。埋没土は、SK 1181 及び SK 1183 同様に黒褐色粘質土 (10YR2/2)。埋土中からは角礫が集中して出土した。坑底面からは 1 の非ロクロ土師器の高杯脚部が出土し、大部分の遺物は埋土上層からの出

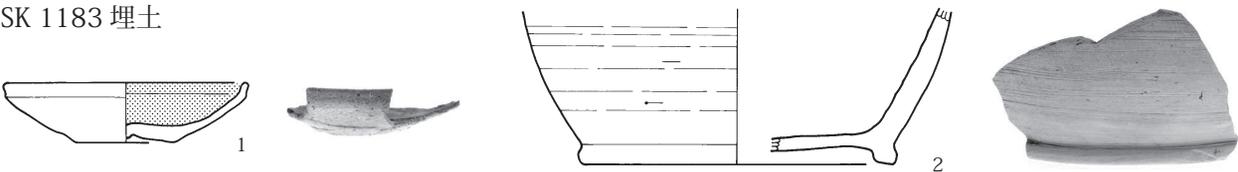


第331図 SK 1181～SK 1183 遺物出土状態

SK 1181 埋土



SK 1183 埋土



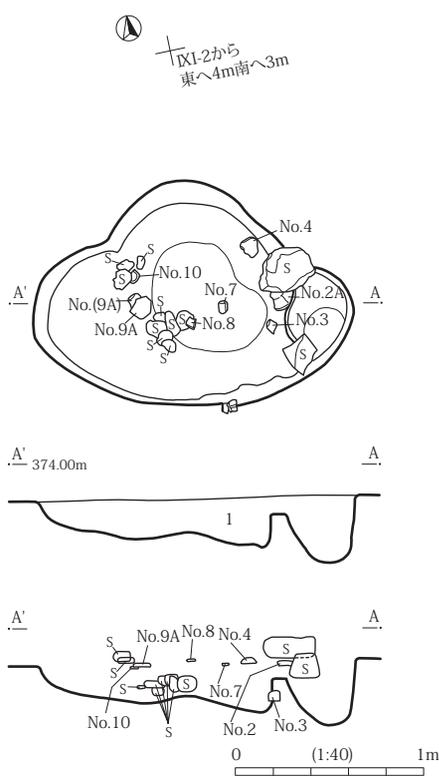
第332図 SK 1181・SK 1183 出土の土器

0 (1:4) 10cm

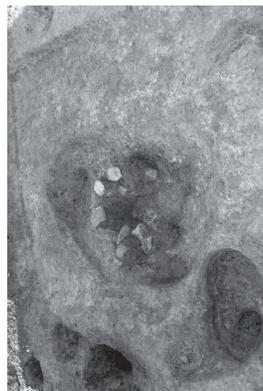
土であった。2～4は黒色土器A類。2は第333図No4で、杯A類の1/3個体。口径13.0cm、底径4.5cm。器面内外面の風化は著しい。3はNo9の杯A類2/3個体。体部の張る形態で、口唇外面には1.7cm幅のナデ調整仕上がある。口径12.5cm、底径6.0cmを測る。4は椀形土器2/3個体。高台はやや直立気味で、口縁は真直ぐに開く器形。口径14.0cm。高台径7.0cmを測る。5は土師器盤A類の口縁部破片。出土土器から、3つの土坑は古代6期頃と考えられるか。

遺構名	土師器											黒色A		黒色B		須恵器										灰釉	数 / 総重量 (破片 / g)
	非口ク 高杯	杯A	高杯	盤	甕	甕A	甕B	甕I	小甕	不明	杯A	椀	甕	椀	杯A	杯B	蓋	甕	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	椀			
SK 1182 埋土	1	33	1	1	30	46	18	2	11	1	118	7	1	1	10	1	2	3	15	3	4	2	1	2	314/3,237.8		
" 底面		2																						2/17.2			

第51表 SK 1182 出土土器属性



第333図 SK 1182 遺物出土状態

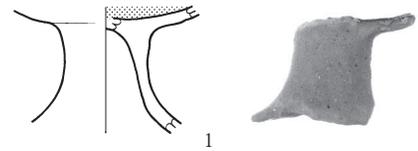


遺物出土状態 (東から)

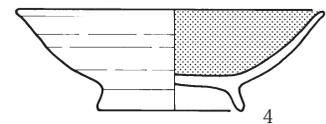
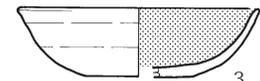
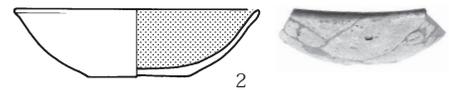


半截状態 (北から)

埋土下層



埋土上層



第334図 SK 1182 出土の土器

0 (1:4) 10cm

溝状遺構

40号溝跡 (第335図)

時期： 古代以降

長軸方向： N - 85° - E

位置： IXI-2・3区

規模： 長さ8m、幅16cm、残存深度8cm

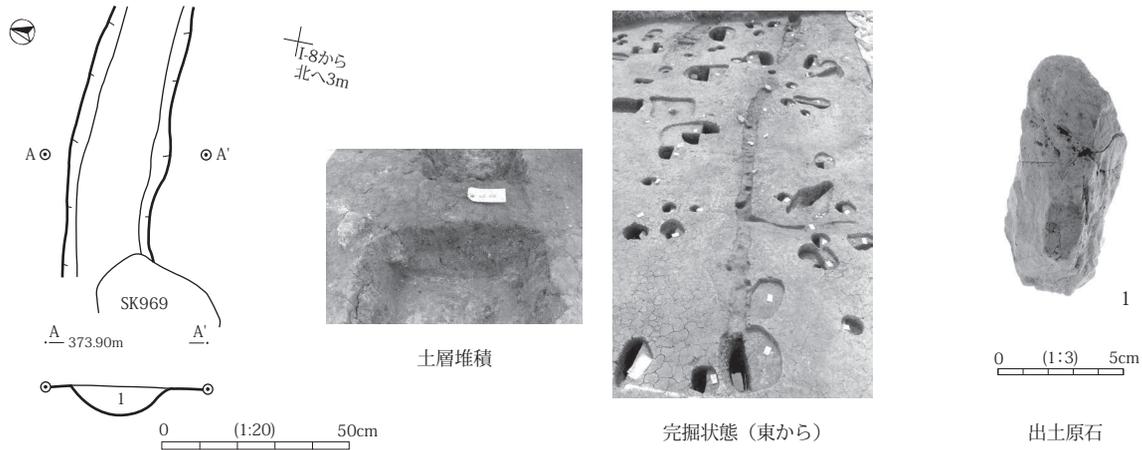
性格： 耕作に伴う溝跡か

断面形状： 浅いタライ形

壁の立ち上がり： 62度

埋土の堆積： 黒褐色シルト質土 (10YR3/2) の単純堆積

重複遺構： ST 11、ST 44、SK 969 を破壊する。SB 02 も破壊すると考えられるが重複関係は不明。



第 335 図 SD 40 完掘状態 (部分図)

検出経過： 検出時、重複関係ある遺構をすべて破壊する溝状の落ち込みとして確認した。東西方向に走る同様な規模と形状を示す溝跡としてSD 50があり、これらと、直交する南北方向の溝SD 48とSD 42、さらにSD 85は、重複関係はつかめないが、同一機能を持つ溝跡と考えられる。

出土遺物： 埋土中より土師器杯A類破片3片、甕形土器体部及び底部の破片13片、須恵器杯A類3片、甕1片、黒色土器A杯A類3片、椀1片、灰釉陶器の椀破片1片がある。1は埋土中出土の溶結凝灰岩材の原石(10.2×4.0×3.9cm、164.4g)。この他、川原石5点(111.1g)がある。

49号溝跡(第336図)

時期： 古代以降

長軸方向： 0°W

位置： IXI-2・3区

規模： 長さ5m、幅39cm、残存深度5cm

性格： 耕作に伴なう溝跡か

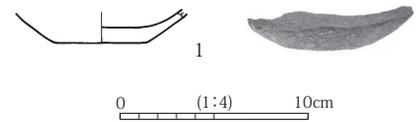
断面形状： 浅いタライ形

壁の立ち上がり： 30度

埋土の堆積： 黒褐色土の単純堆積

重複遺構： SK 656、SK 664、SK 1063等に破壊されると考えられるが、調査時に、切り合い関係は確認できていない。同様な状況で検出した同形態の溝跡としてSD 43がある。

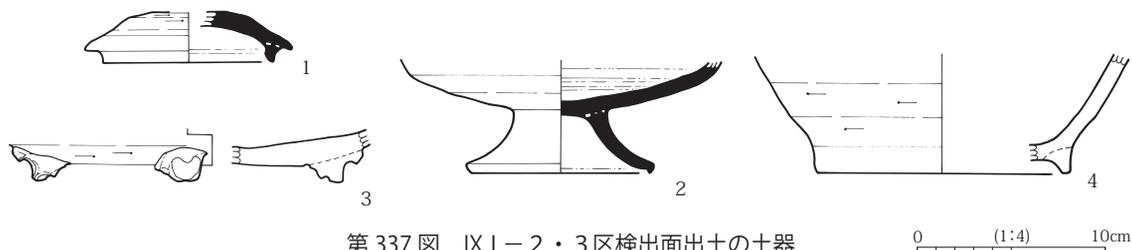
出土遺物： 埋土中から、黒色土器Aの杯A類5片、土師器杯A類4片、甕3片、須恵器杯A類1片、甕2片、瓶1点の出土がある。1は土師器杯A類の底部破片か、表裏面の風化著しい。



第 336 図 SD 49 出土の土器

I-2・3区検出面出土の土器

1は須恵器杯蓋A類。かえし部は長く端部はやや外反する器形。体部は厚く天井部が盛り上がる。TK217型式以後か。2は須恵器盤1/3。脚部高は低く、端部垂直。3と4は中世陶器。



第 337 図 IXI-2・3区検出面出土の土器

IX-I-4・9・10区

本調査区は、③区南西端に位置し、台状に高まりのある部分に該当する。東西方向に走る溝跡SD 50とSD 41、それらと直交するSD 44とSD 45がある。竪穴式建物跡ではSB 02とSB 06が、掘立柱建物跡ではST 11がある。土坑状の落ち込みは36基を検出し、この内で大型の土坑はSK 03とSK 454である。I-4区で30基(SK 230・419・420・454・455・458・460・465・471・474・931・932・1016・1017・1019・1024・1025・1047・1072・1082・1090・1100・1136～1141・1143・1150)、I-9区で5基(SK 436～439・930)、I-10区で1基(SK 03)がある。

土坑

IX I-4

本地区中央部には、SB 02 (P266) とSB 06 (P296) がある。土坑の検出は少ないが、これは竪穴式建物跡の検出と重なり、埋没土の違いを見分けられなかった可能性を多分に含むが、土坑そのものの密度が低いのも事実である。

419号土坑(第339図・第340図)

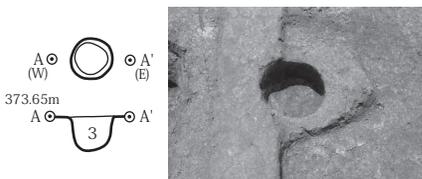
平面形は円形で、断面柱状。径22cm、深さ14cmを測る。小礫及び白色粘土ブロックを含む暗褐色土(10YR3/4)。1は土師器杯A類の2/3個体。深さがあり、口縁が朝顔形に開く鉢形の器形である。

420号土坑(第341図・第342図)

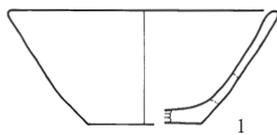
長方形を呈し、浅いタライ状。規模は86cm×56cm、深さ18cm。炭化物や焼土、小礫まじりの暗褐色土(10YR3/4)。検出時には、30cm四方の焼土堆積を確認した。1は土師器杯A類の底部破片。2は灰釉陶器皿の口縁部破片。古代8期以降か。

455号土坑(第343図)

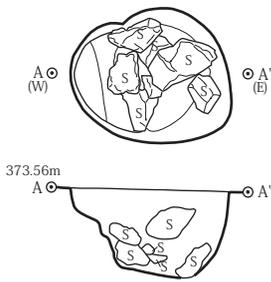
不整形円形で、断面形態は深いバケツ形。規模は85cm×66cm。深さ44cmを測る。



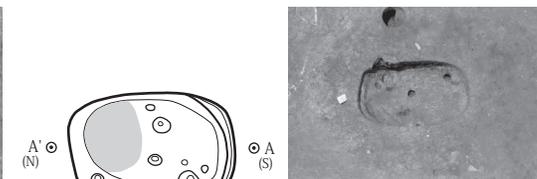
第339図 SK 419の全景



第340図 SK 419出土の土器



第343図 SK 455の全景



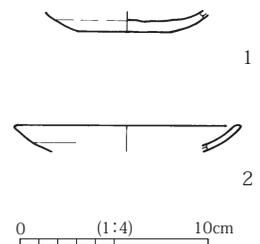
第341図 SK 420の全景



完掘状態



半截状態



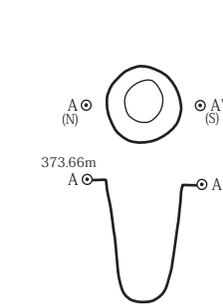
第342図 SK 420出土土器



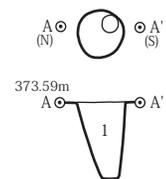
礫出土状態



半截状態



第344図 SK 474の全景



第345図 SK 1016の全景

極暗褐色土（7.5YR2/3）の単純堆積。炭化物、焼土ブロックを混入する。埋土中から径20cm前後の角礫が数点出土し、中層から下層に重なり合うように入り込んでいた。黒色土器A杯Aが出土。時期は古代か。

474号土坑（第344図）

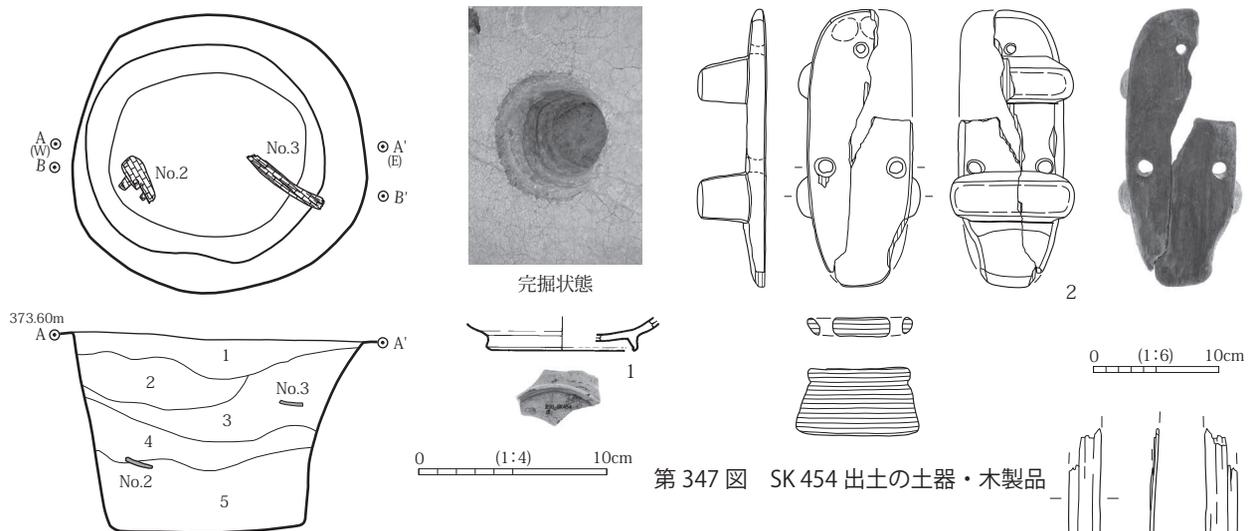
平面形は円形で、断面砲弾状。径40cm、深さ64cmを測る。出土遺物はない。

1016号土坑（第345図）

円形の砲弾状。径24cm、深さは38cmを測る。10YR2/3黒褐色土の単純堆積。

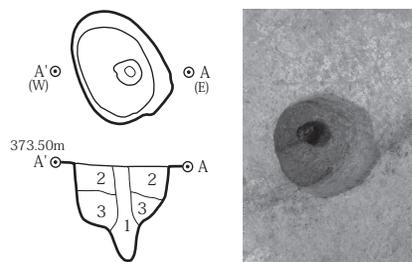
454号土坑（第346図・第347図）

平面形は円形を呈し、断面形態はバケツ状。規模は146cm×132cm、深さ104cmを測る。土層は5層に分層でき、白色粘土・小礫を混入する褐色シルト層を基調とする。1層は10YR4/4の褐色土、2層は10YR3/3の暗褐色土、3層は10YR3/4暗褐色土、4層・5層は黒褐色土（10YR2/2）となり、細礫や炭化物が多く混じる。遺物は、土師器椀、杯A類破片が出土している。1は灰釉陶器椀の底部破片。2は4層・5層付近から出土した下駄。1/4程度欠損。22.0cm×8.4cm×5.4cm。隅丸方形で、形状から左足用と推定できる。前壺はほぼ中央に位置し、台の両側から外開きに歯をつくる。周縁に面がとられる。前壺は前歯の前。後壺は後歯の前に位置し、a類。樹種はケヤキ材である。3は3層より出土した薄板材。曲げ物底板の可能性もある。炭素年代測定の結果、1064±40年ADの値を得た。この他、棒材1点と割材1点が出土。曲物や下駄などが出土していることや埋没土の堆積状況から考えて、井戸跡であろうか。

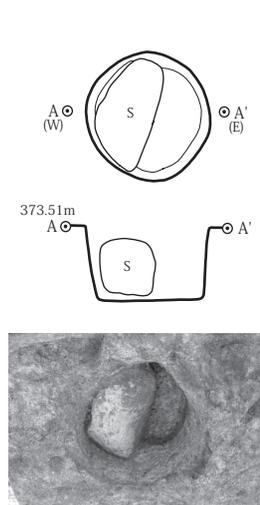


第346図 SK 454の全景

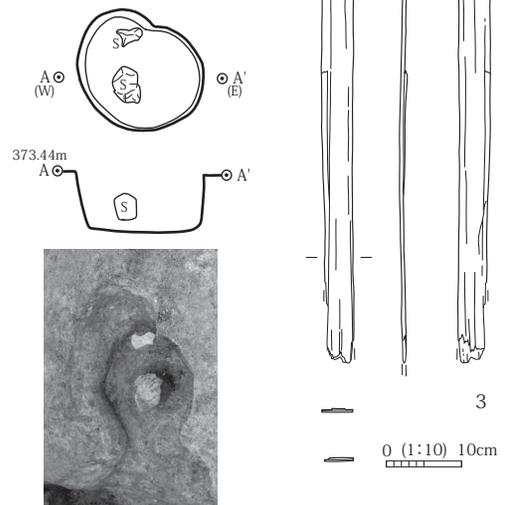
第347図 SK 454出土の土器・木製品



第348図 SK 1024の全景



第349図 SK 1140の全景



第350図 SK 1141の全景

1024号土坑（第348図）

楕円形状で、底面中央部に柱状の痕跡がある。規模は64cm×46cm、深さ50cm。柱状部分は10YR3/2の黒褐色土、2層・3層は暗褐色土。出土土器は、黒色土器A杯A類、土師器甕形土器B類、小型甕の破片がある。古代8期以降と考えられる。

1140号・1141号土坑（第349図・第350図）

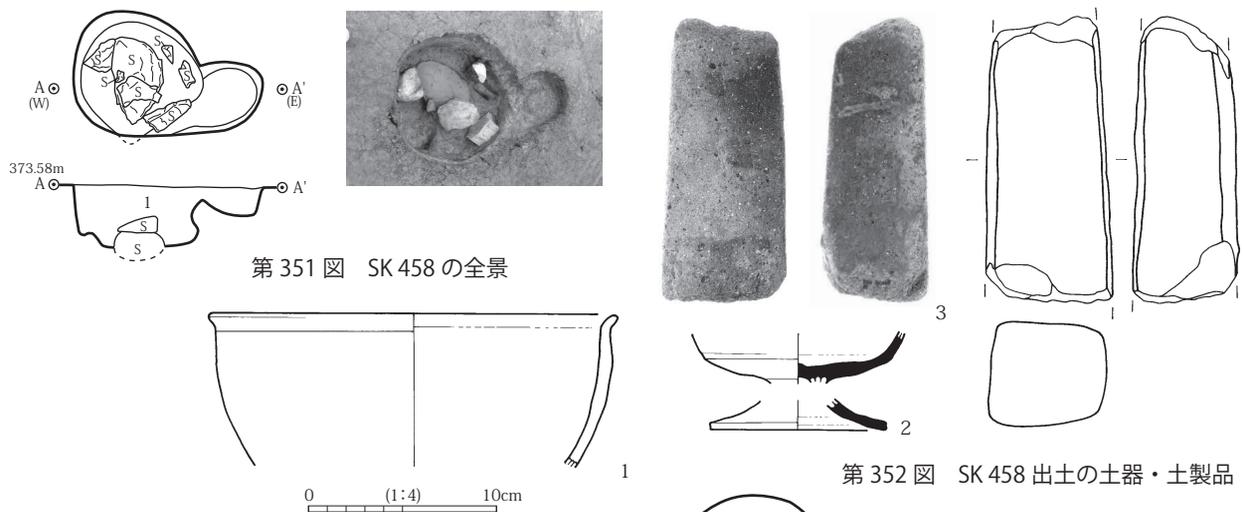
両土坑とも、SB 06 調査中に確認し、すでに床面を検出していたことから、SB 06 に伴う柱穴の可能性もある。確実な床面レベルではなかったことから、土坑として扱った。SK 1140 は円形で、断面形態は深いタライ状。径64cm、深さ38cmを測る。大きさ30cm大の角礫が出土。黒色土器Aの杯A、土師器小型甕等の破片が出土。SK 1141 も円形状で、タライ形。規模は68cm×56cm、深さは29cmを測る。埋土中から角礫が出土。黒色土器Aの杯A類破片が出土。両土坑とも古代6期から7期に相当。

458号土坑（第351図・第352図）

平面形は円形で、断面は深いタライ状。底部には径20cm前後の平石が重なり、フラットな状態で出土した。規模は98cm×64cm、深さ32cmを測る。単層（7.5YR2/3極暗褐色土）で炭化物、焼土ブロック、白色粘土粒子、細礫を混じる。1は土師器鉢（甕E？）口縁部破片。口縁部やや外反する形態。2は須恵器高杯の脚部及び皿部の一部破片。3は角柱状の土製品。14.9cm×6.3cm×5.5cm、699.5gを量る。時期は古代か。

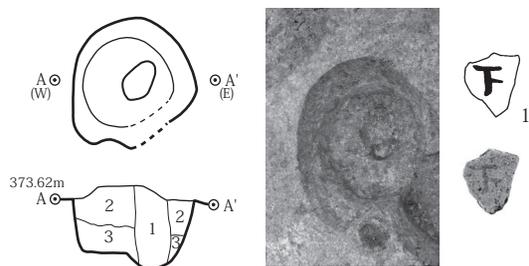
1090号土坑（第353図）

平面形は円形状で、底部の中央に柱痕を有する。規模は72cm×62cm、深さ42cm。1層暗褐色土（10YR3/3）で、炭化物を混じる。須恵器杯A類、土師器碗破片が出土したほか、川原石が5点（21.6g）、轆の羽口1片がある。1は須恵器杯A類底部小破片で、糸切り離し調整痕の上に「下」の墨書がある。筆幅は0.2cmと細く、2画は左にはらう。時期は古代か。

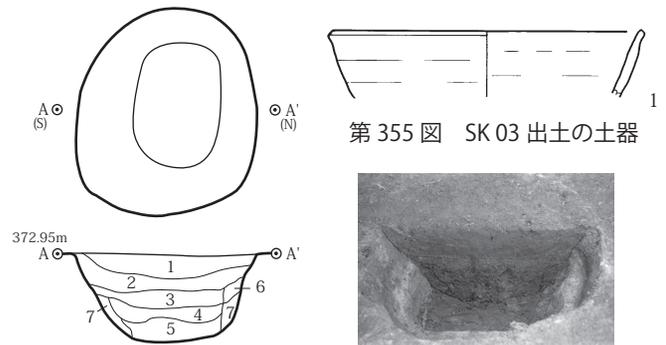


第351図 SK 458の全景

第352図 SK 458出土の土器・土製品



第353図 SK 1090の全景と出土の土器



第354図 SK 03の全景



半截状態

IXI—10

3号土坑（第354図・第355図）

平面形は円形で、断面形はバケツ形。規模は112cm×104cm、深さ46cmを測る。土層は、炭化物の混入や酸化の度合いから7層に分層した。上層、中層、下層の3層に大別し、上層の1層と2層と最下層の5層及び壁際の6層と7層の色調は10YR3/3の暗褐色土を基調とする。3層と4層は、ともに粒子が粗く、砂質分の多い中層である。出土遺物は、壺形土器、土師器杯A類、山茶碗等が出土。時期は、12世紀ないしは13世紀の遺構と考えられる。本土坑は、規模・形状から井戸跡と考えられ、同形状のSK04も同様な機能か。1は埋土中から出土した山茶碗の口縁部破片。口唇外削ぎ状に尖り成形し、外面の直下は回転横ナデ。尾張産のV類か。

溝状遺構

41号・42号溝跡（第356図）

時期： 古代以降

長軸方向： SD41 = 0° W, SD44 = N - 8° - E

位置： IXI - 4区

規模： SD41 = 5m60cm、幅26cm、残存深度4cm
SD44 = 5m88cm、幅20cm、残存深度3cm

性格： 耕作に伴う溝跡か

断面形態： 浅いタライ状

埋土の堆積： 黒色粘質土（10YR1.7/1）の単純堆積

壁の立ち上がり： SD41 = 28度 SD44 = 81度

重複遺構： SB02、SK454、SK1024を破壊する。

検出経過： SD41とSD44は同一の溝跡として調査したため、重複関係は不明。同様な溝として調査区北端にあるSD50とSD45があり、それらも同機能の溝跡と考えられる。

出土遺物： 土師器杯A類8片、盤3片、甕4片、黒色土器A杯A類12片、須恵器甕3片、蓋1片、杯A1片、短頸壺1片がある。1は須恵器短頸壺の口縁部破片。2は黒色土器杯A類底部破片。この他、土製品と考えられる小破片が1点ある。

I - 4区検出面出土の遺物

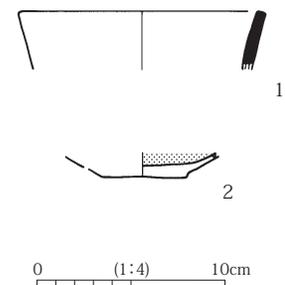
特記すべき事例として、内面に漆状附着物がある黒色土器A杯A類の体部破片2片がある。同様な遺物が、周辺地区から1片表採された。



SD 41の全景

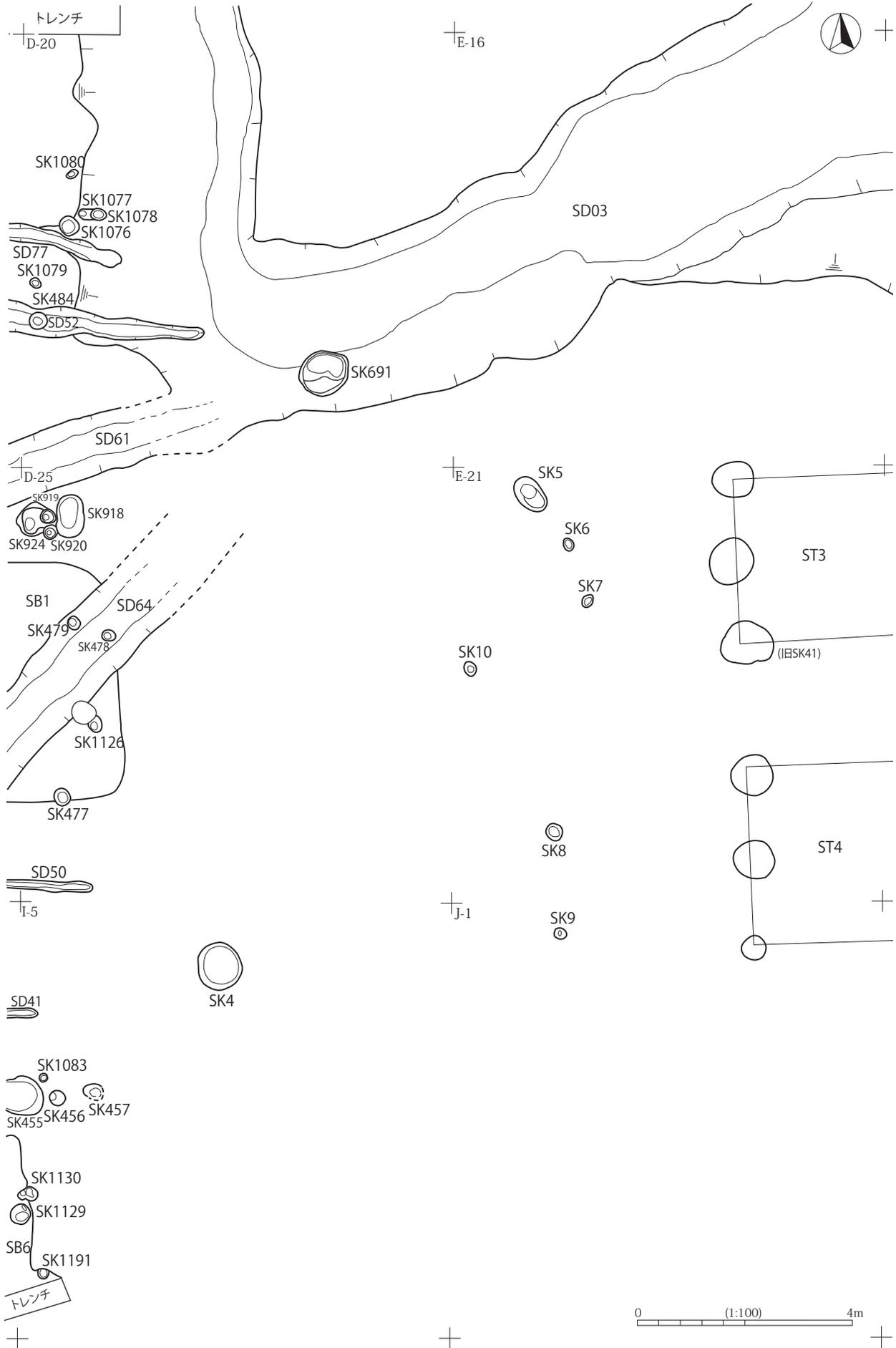


土層堆積

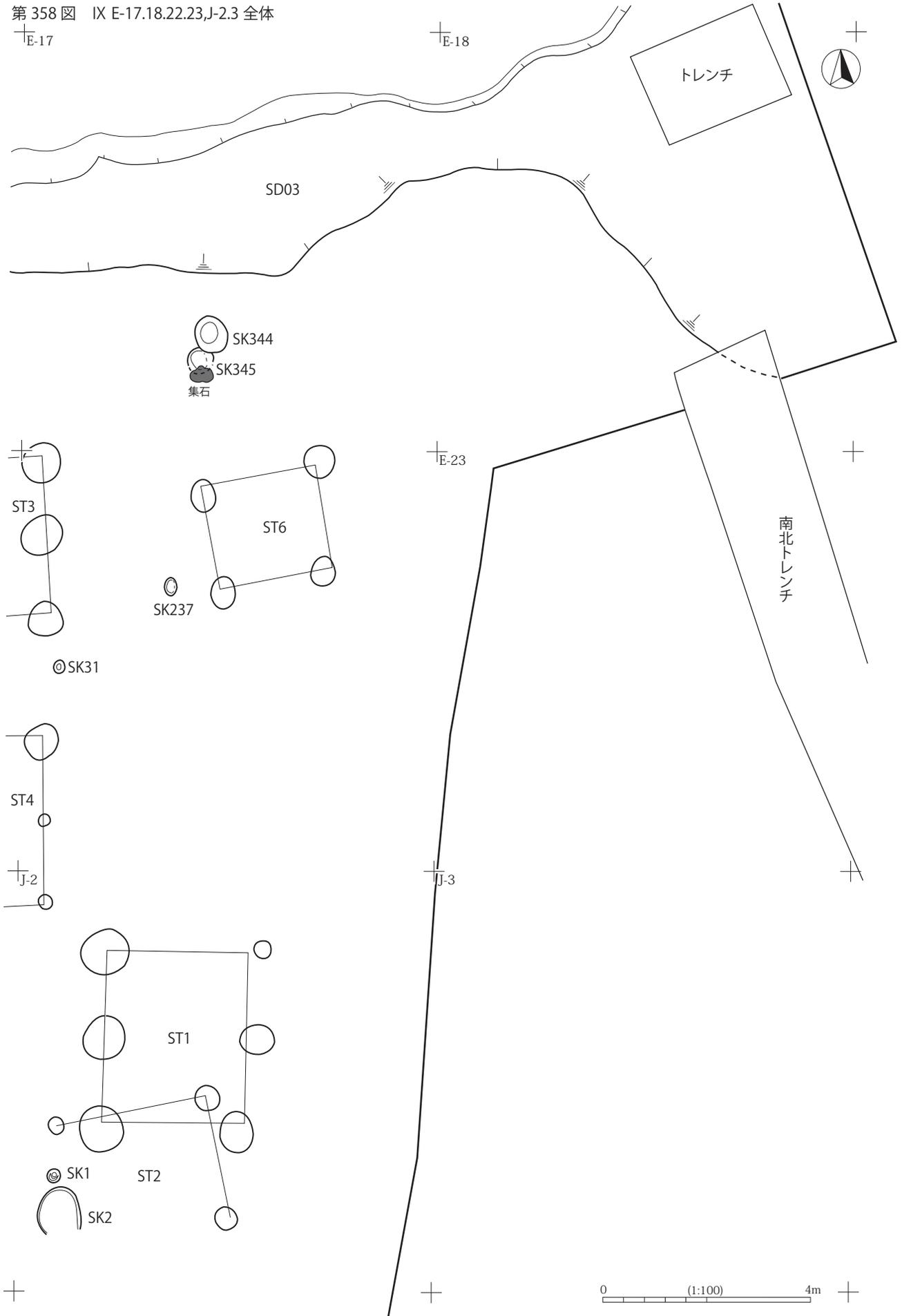


第356図 SD41出土の土器

第 357 図 IX D-20,25,E-16,21,I-5,J-1 全体



第358図 IX E-17.18.22.23,J-2.3 全体



IX-D-20・25、IX-E-17・21・22、IX-I-5、IX-J-1・2

本調査区は、③区の東端、③区台状部分より23cmほど低位な位置にあたる。この平坦部が後世の削平によるものかは即断できないが、土坑状の落ち込みや掘立柱建物跡が確認できたことから、削平があったとしても、遺構の大部分を破壊してしまうものではなかったと考えられる。むしろ、確認できた遺構から、破壊の度合いは極めて少ないと考えたい。

柱状の落ち込みは、すべて59基がある。この内、25基が規模と配列から掘立柱建物跡を構成すると判断できた。D-20区で7基(SK484・691・1076～1080)、D-25区で8基(SK477～479・918～920・924・1126)、E-17区で2基(SK344・345)、E-21区で5基(SK05～08・10)、E-22区で2基(SK31・237)、I-5区で7基(SK04・456・457・1083・1129・1130・1191)、J-1区で1基(SK09)、J-2区で2基(SK01・02)がある。

土坑

IXD-20

SD03がクランク状に掘削されて東西に走る。SD03の西岸に土坑が6基ある。SK691、SK1076、SK1077、SK1078はSD03の上端を破壊して構築されている。SK691からは黒色土器杯Aと須恵器長頸壺の破片が出土。SK1076からは土師器小破片が出土した。

IXD-25

③区の東端に位置するSB01と、それを破壊するSD64、西から続くSD50がある。SD64と切り合い関係を持つ土坑は2基(SK478とSK479)を検出した。

IXE-17

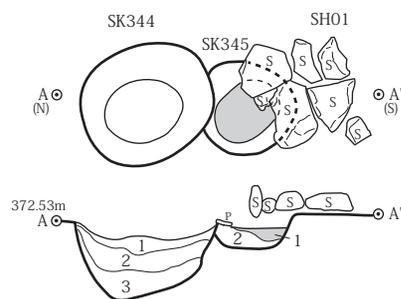
SD03の南岸にあたり、以下のSK344、SK345の2基を確認調査した。SK344の南には、集石遺構SH01が1基ある。径30cmから20cm前後の角礫が集石してあった(第359図の写真)。

344号土坑(第359図・第360図)

SK345を破壊する。平面形は円形で、断面形態は深い鉢形。規模は72cm×60cm、深さ40cmを測る。3層に分層できた。上層の1層は、5YR2/2の黒色腐植土でピート質の植物痕が多く残る。2層は黒色シルト層。3層は黒色砂層で径10mm以下の小礫が多く含まれる。

345号土坑(第359図・第360図)

平面形は円形で、断面形態は浅いタライ状。径50cm、深さ18cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は5YR4/2の暗灰黄色シルト。径10mm前後の焼土、炭化物を含む。下層は5YR4/3で、褐色焼土が堆積する。本土坑上面にはプランにやや掛かるように集石遺構(SH01)1基を確認した。SK344との切り合い部分から、土師器杯A類、甕形土器I類の破片が出土した。古代8期以降か。



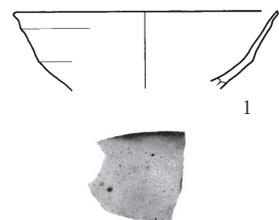
第359図 SK344・SK345・1号集石の全景



完掘写真



1号集石の全景



0 (1:4) 10cm

第360図 SK344・SK345出土の土器

IX E—2 1・2 2

土坑は、2つの地区で僅か7基のみ検出した。ST 03 (P360) と ST 04 (P362)、ST 06 (P366) と関連する土坑であろうか。

5号土坑 (第361図)

平面形は楕円形状を呈し、断面はタライ形。規模は70cm×40cm、深さ24cmを測る。土層は2層からなる。2層とも10YR3/1の黒褐色土。締まりがあり粒子が細かく、粘性が強い。1層は2層より酸化が強く、炭化物をやや多く含む層である。

IX I—5

SK1191、SK1129、SK1130、SK1083、SK456、SK457、SK04がある。SK04につき、以下に記す。

4号土坑 (第362図・第363図)

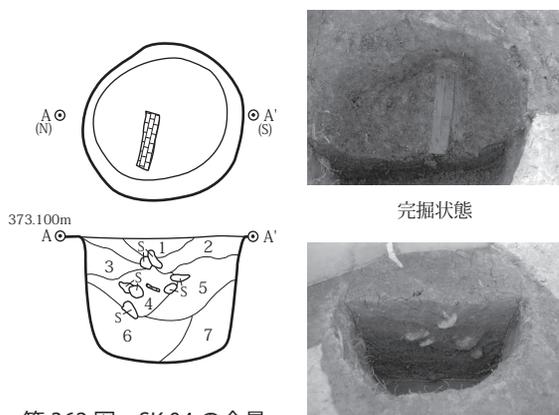
平面形は円形で、断面形はタライ状、垂直の竪掘りに近い。規模は74cm×72cm、深さは66cmを測る。土層は締まりがあり、粒子の細かい粘質土を主とし7層に分層できた。上層から中層にかけて粒子の混入の度合いによって4層に分層できた。上層の色調は10YR3/1の黒褐色土、中層から下層にかけての色調は5YR3/1、下層は10YR4/2である。出土土器は、黒色土器Aの杯A類、甕形土器B類の破片がある。中層の4層からは木製品が1点出土している。長さ30cm、幅10cm、厚さ5mmの薄板材で、木目は追柂目。曲物の一部であろうか。周囲の土坑に比べ、規模が大きく、竪掘りであることから井戸跡と考えられる。

IX J—1・2

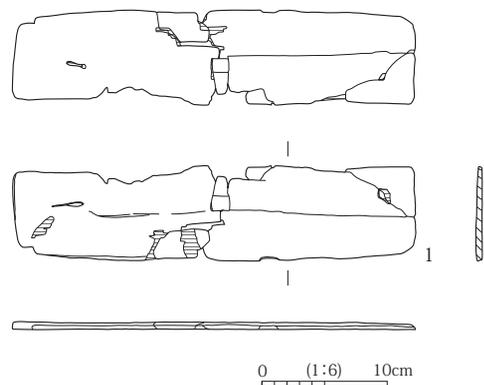
J—1区でSK 09が1基、J—2区でST 01 (P358) と ST 02 (P360)、SK 01 と SK 02を確認調査した。

2号土坑 (第364図)

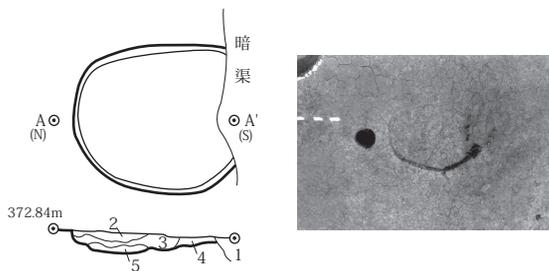
平面形は楕円形を呈し、断面形態は浅いタライ状。規模は86cm×78cm、深さは11cmを測る。暗渠によって南側を壊される。埋土は黒褐色土(10YR3/2)を基調とする。締まりがあり、粒子が細かく、粘性が強い。4層に分層し、最下層の5層のみ黒みが強い。ST 02の柱穴埋没土と類似する。



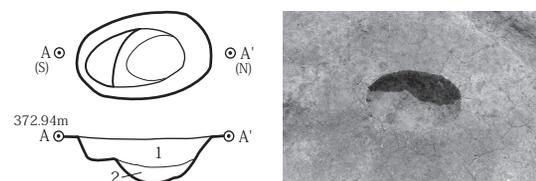
第362図 SK 04の全景



第363図 SK 04出土の木製品



第364図 SK 02の全景 (西から)



第361図 SK 05の全景 (東から)

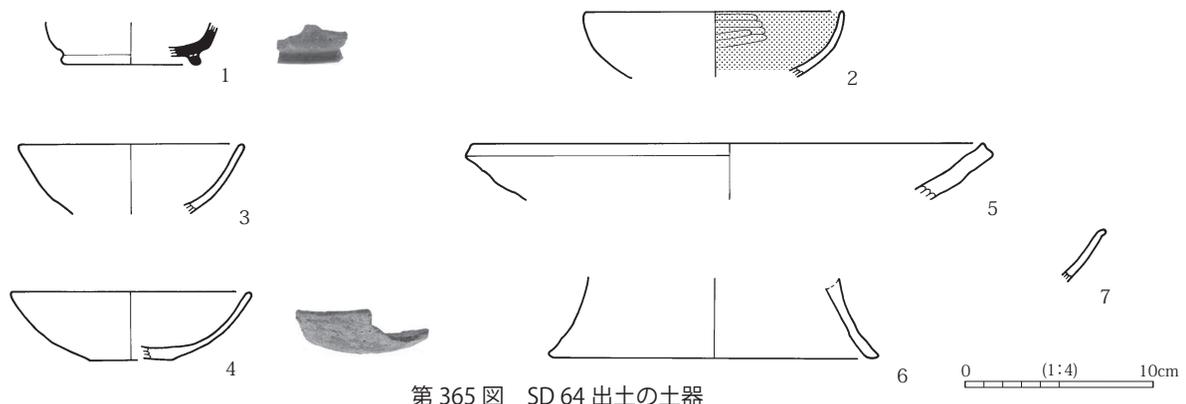
溝状遺構

64号溝跡 (第365図)

- 時期： 古代 長軸方向： N-45°-E
- 位置： IXD-24・25、I-4区
- 規模： 長さ(9m50cm)、幅60cm、残存深度30cm
- 性格： 排水溝か
- 断面形状： ボール形 壁の立ち上がり： 55度程度
- 埋土の堆積： 1層は暗褐色土(7.5YR3/4)、2層は暗褐色土(7.5YR3/3)とともに白色微粒子と細礫を含む。3層は極暗褐色土(7.5YR2/3)で炭化物粒子を多く混入する。下部には暗赤褐色焼土が混在し、溝底面には被熱痕跡が認められた。
- 重複遺構： SB01を破壊し、SK478、SK479、SK935に破壊される。
- 検出経過： SB01調査中に、それを破壊すると考えられる溝跡を確認した。調査は同時併行して進めた。SB01の床面を本溝跡が破壊していると判断できる部分があった(第357図P243)。再考の結果、本跡がSB01を破壊していたと結論づけたが、SB01にはカマド痕跡が2箇所に認められており、建物の建替え等の可能性を考える必要もある。ここでは建替えを考えない方向で判断を下したが、SB01(古)→SD64→SB01(新)の結論も一方にあることを明記しておく。また、SB02との切り合い関係についても、厳密には調査時に判断しきれなかった。SB02との重複関係は確実に、所見では、両遺構が一体のものである可能性を示唆している。SB02の北東端から、SD03に向けて本溝跡は掘削されるが、SD03との接続関係に関しても、調査時に確認できなかった。
- 出土遺物： 2軒の竪穴式建物跡との切り合い関係のある中、本跡の埋土中から出土した資料は第52表のようになる。土師器杯A類及び黒色土器A杯A類の出土が主体である。1は須恵器杯B類の高台部分の破片。高台は真直ぐ立つ形態。2は黒色土器Aの杯A類口縁部の小破片。3と4は土師器杯A類の口縁部破片。4の推定口径は14.0cm、底径4.5cmと大型。5と6は土師器盤A類の口縁部及び脚部の破片。5は被熱している。7は灰釉陶器碗の口縁部破片。口唇は折り縁様となっている。その他、鞆の羽口破片1片がある。

遺構名	土師器								黒色土器A				須恵器					灰釉陶器		数/総重量 (破片/g)		
	杯A	碗	盤	鉢	甕	甕B	甕E	甕I	小型甕	杯A	碗	鉢	壺	杯A	杯B	甕A	甕C	甕D	壺		短頸壺	碗
SD64 埋土	68	2	9	1	35	7	2	5	7	63	1	1	1	11	1	6	2	3	2	1	4	232/1,622.0

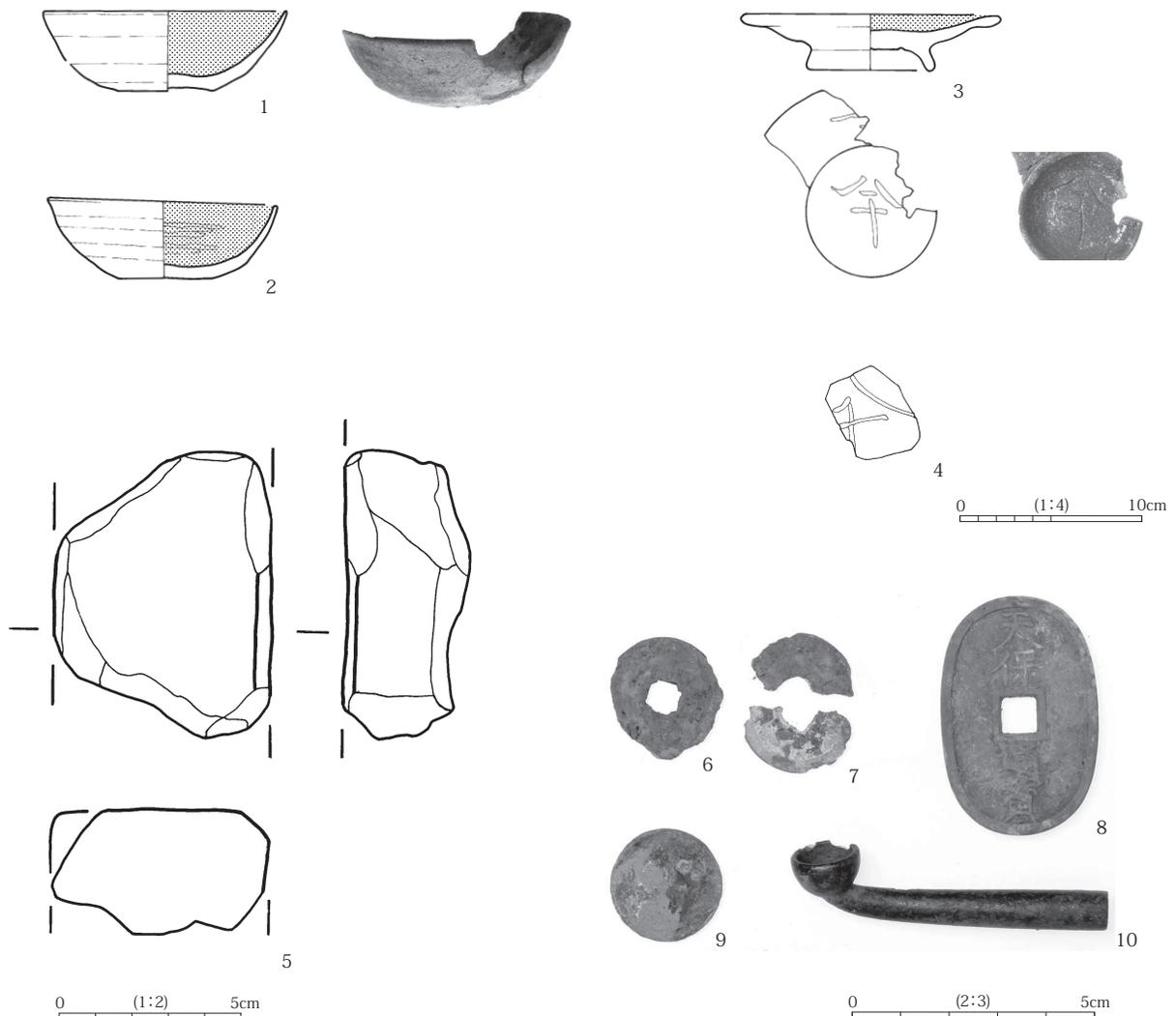
第52表 SD64出土土器属性



第365図 SD64出土の土器

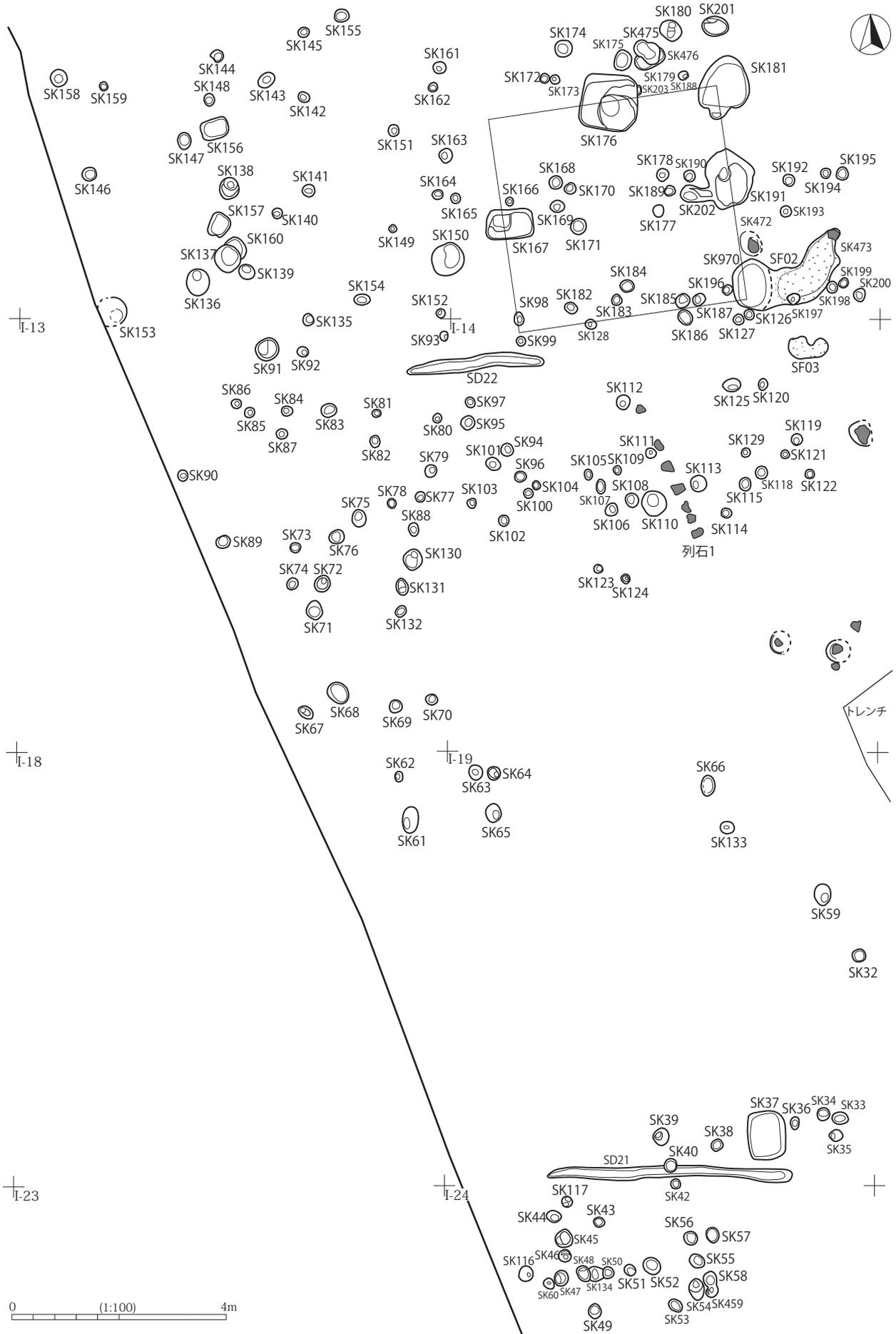
IXD-20・25、E-17、I-5区検出面出土の遺物

1と2はE-17区出土の黒色土器Aの杯A類。出土場所からSD 03 検出面の可能性が高い。両者とも風化が著しい。1は口径12.0cm、底径5.0cm。2は口径13.0cm、底径5.0cm、体部がやや脹らむ形態。3と4はD-20区出土資料。3は黒色土器Bの盤B類2/3個体。高台は高くしっかりしており、口縁は緩やかに開く器形である。内外面ともに丁寧にミガキ・ナデ調整される。体部は欠損しているため1箇所しか確認できないが、正位に刻書「八千」がある。同様な刻書は底部外面にもある。底部にある「八千」の「千」の3画は左から右に刻まれている。いずれも焼成前刻書。4は土師器の鉢形土器あるいは甕の体部破片。焼成前の刻書「八千」が正位に記される。刻線は太く0.15cmあり、力強い。5はD-25区とI-5区境から出土した角柱状の土製品。SK 458 (I-4区) 出土の資料と同形状の例で大部分を欠損する。7.7cm × 5.9cm × (3.3cm)、137.6g。6と7はD-24区出土の銭貨。6は「天喜通寶」(製作年代1017年)。7も6と同様か? 8はW-19区表採の「天保通寶」(製作年代1500年)。9はI-7区表採の「10円」(製作年代1961年?)。10はD-5区出土の真鍮製キセル雁首。



第366図 IXD-20・25ほか出土の土器・金属製品

第 367 図 IX I-8.9.13.14.18.19.23.24 全体



IX-I-7～9・13・14・18・19・23・24区

本調査区は、③区の南端にあたり、掘立柱建物跡の集中する高い台状部より23cmほど低い平坦面である。ここからは、小規模の柱状土坑が数多く検出できた。土坑はすべて195基検出し、この内で配列から掘立柱建物跡を想定できそうな例は5基である。I-7区で5基(SK 421・950・951・1144・1145)、I-8区で42基(SK 136～164・SK 351～SK 358・SK 669・SK 952～SK 954・SK 956)、I-9区で47基(SK 98・126・127・165～203・472・473・475・476・970)、I-13区で31基(SK 67～93・130～132・135)、I-14区で31基(SK 94～97・99～115・118～125・128・129)、I-18区で2基(SK 61・62)、I-19区で16基(SK 32～40・42・59・63～66・133)、I-24区で21基(SK 43～58・60・116・117・134・459)がある。この他、礎石様の列石がI-14区に1箇所ある。

土坑

IX I-7

台状の高い部分との境界にある。数多くの柱穴状土坑が確認できたことから、平坦面の削平等の工事が施されたとしても、その時期は中世以前と考えられる。残念ながら工事の証拠はつかめていない。

950号土坑(第368図)

平面形は円形を呈し、断面形は砲弾状。規模は28cm×28cm、深さ36cmを測る。10YR2/1黒色土の単純堆積である。出土遺物はないが、埋土内に径20cm前後の平石を確認した。

IX I-8

ST 11及びST 12の南側に位置する。それらSTに隣接する土坑は、何らかの関連施設とも考えられる。ことにSK 351～SK 358等の土坑断面はほとんど砲弾状で、柱穴と考えられる。30cm前後の小さいピットが多く、柵か小屋組程度の施設と考えられるが、配列から組成できる例はなく土坑とした。

136号土坑(第369図)

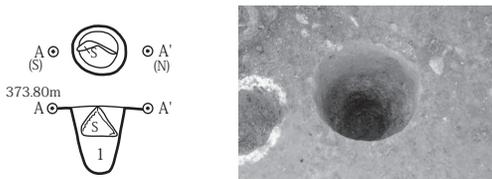
円形状で、断面形態は砲弾形。規模は47cm×45cm、深さ28cm。埋土は黒褐色土(10YR4/3)。底部に10cm前後の礫が出土したほか、黒色土器A杯A類、須恵器甕形土器D類の破片が出土している。

144号土坑(第370図)

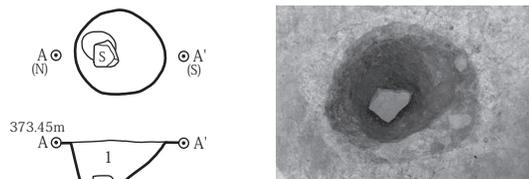
円形、砲弾状で、規模は22cm×18cm、深さ18cmを測る。黒褐色土層(10YR3/2)の単純堆積。出土土器は、黒色土器杯A類、須恵器長頸壺の破片がある。時期は古代か。

352号土坑(第371図)

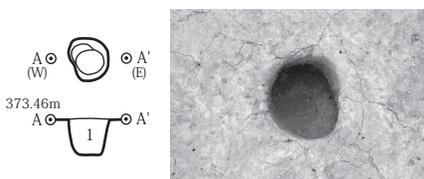
平面形は円形で、断面形態は、壁に段のあるロウト形。規模は29cm×27cm、深さ41cm。埋土は黒



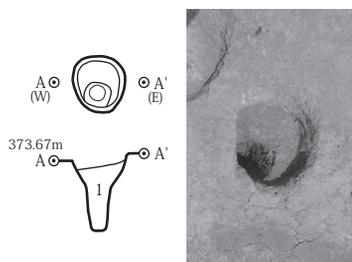
第368図 SK 950の全景(東から)



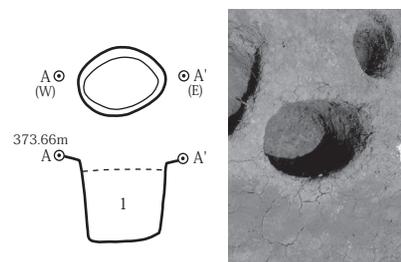
第369図 SK 136の全景(西から)



第370図 SK 144の全景



第371図 SK 352の全景



第372図 SK 353の全景

褐色土（10YR3/2）。土師器杯A類が出土している。時期は古代か。

353号土坑（第372図）

楕円形状で、断面形態はバケツ形。規模は45cm×34cm、深さ45cmを測る。黒褐色土（10YR3/2）の単純堆積。須恵器杯A類と土師器甕形土器、杯A類破片が出土している。

IX I—9

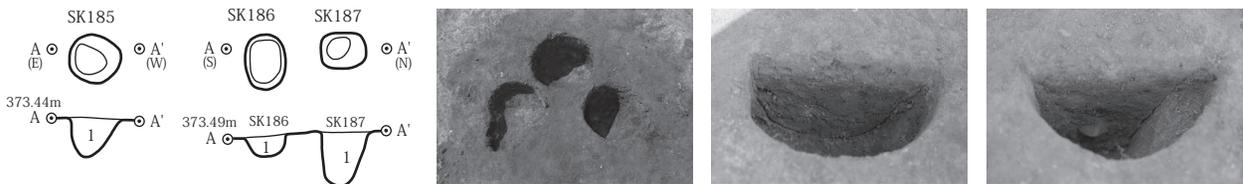
土坑が集中する調査区の中央部分に、長軸が100cm前後あるSK 176、SK 181、SK 191を検出した。それらの土坑は、隣接し、規則的な配列を示すように観られたが、形状等が異形で、互いの関連性は不明。またSK 472とSK 473は礎石を伴う土坑であり、I—14区には南北方向に連なる列石があり、その礎石との関連を考える必要があるか。

185号土坑～187号土坑（第373図）

本調査区にて検出した大部分の土坑を代表する例としてSK 185～SK 187を提示する。平面形は円形を呈し、断面形態は砲弾状。SK 185の規模は26cm×25cm、深さは19cmを測る。埋土は単層。SK 186は27cm×21cm、深さは9cm。埋土は単層（10YR2/3）。SK 187は26cm×18cm、深さは28cm。埋土は単層（10YR2/3）で、粒子の細かい粘質土。出土遺物は黒色土器A杯A類、土師器甕形土器、須恵器杯A類の破片等が出土している。

167号土坑（第374図）

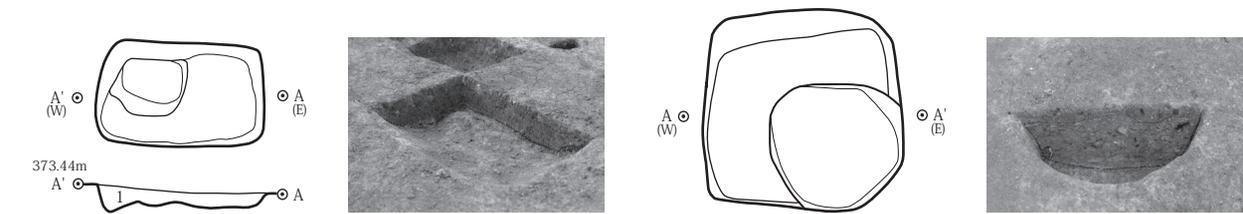
平面形は長方形を呈し、断面形はタライ状。規模は88cm×55cm、深さ12cm。10YR2/3の単純堆積で、粒子が細かく、粘性はやや弱い。10YR7/1及び10YR4/4のブロックと炭化物が僅かに混入する。北東壁際に柱根と考えられる深い落ち込みがある。出土土器は、土師器甕形土器B類、黒色土器A杯A類の破片が出土している。時期は古代4期以降か。



第373図 SK 185～SK 187の全景

SK 185の半載状態

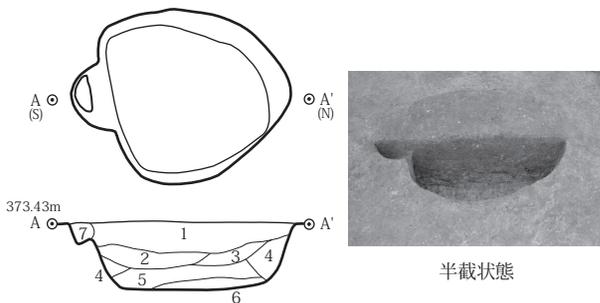
SK 187の半載状態



第374図 SK 167の全景（南から）

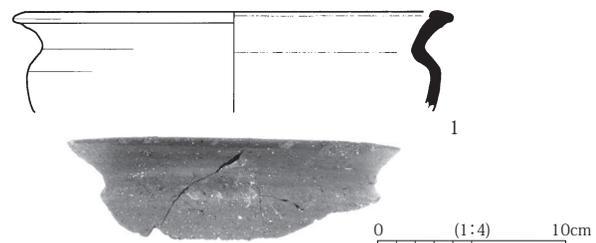
SK 176の半載状態

第375図 SK 176の全景（南から）

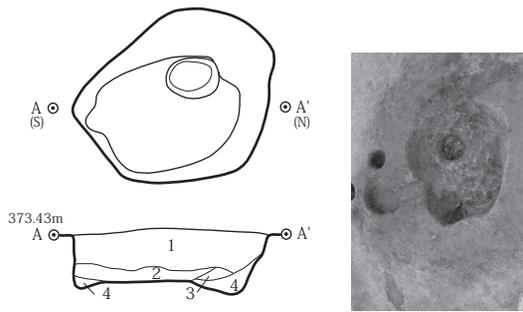


第376図 SK 181の全景

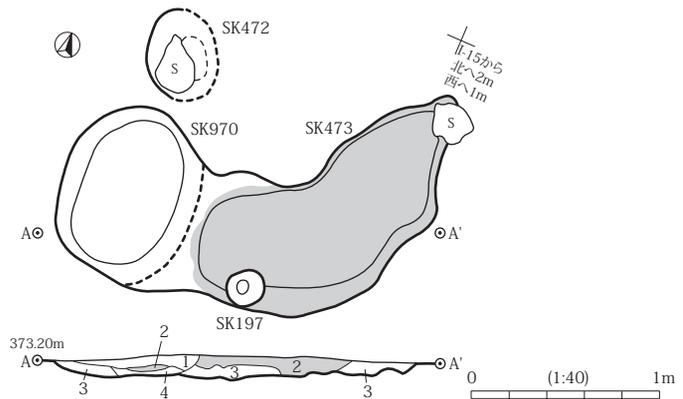
半載状態



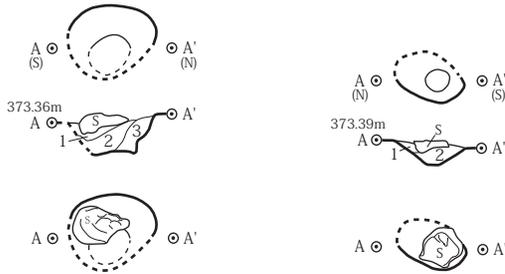
第377図 SK 181出土の土器



第378図 SK191の全景(東から)



第381図 SF02の全景



第379図 SK472の全景

第380図 SK473の全景

SF02 検出状況(南から)

176号土坑(第375図)

方形で、断面タライ形。規模は105cm×102cm、深さ26cmを測る。埋土は9層に分層でき、フラットな底面を持つ落ち込み部分(9層)が、他の1～8層を形成する深い落ち込みに切られることから、抜き取り穴を持つ土坑の可能性はある。出土遺物は土師器甕B類破片が出土。調査所見では、1層及び2層と、3～9層が別の遺構である可能性、または掘立柱建物跡の柱穴である可能性を想定した。埋土から川原石1点(10.5g)が出土。

181号土坑(第376図・第377図)

不整形形状で、断面形態はタライ形。規模は116cm×94cm、深さ36cm。6層に分層できた。1層から5層までは、黒褐色土で、粒子が細かく、締まりが強い。色調の異なる土がそれぞれの層に混入している。6層(10YR4/1)は、10YR7/1の粒子を多量に混入。出土土器は、須恵器鉢、黒色土器A杯Aの破片がある。1は須恵器鉢形土器の口縁部破片。時期は古代7期頃か。

191号土坑(第378図)

不整形な方形で、断面タライ状。規模は112cm×90cm、深さ30cm。4層に分層できた。締まりあり、粘性が弱く細かい粒子。上層に堆積する1層と2層は黒褐色土(10YR2/3)、3層は10YR4/4、最下層の4層は、上層に比べ色調がやや暗い。北壁際に10cm前後の落ち込みがある。出土土器は須恵器杯A類、黒色土器A碗、灰釉陶器碗の破片及び川原石1点(6.4g)が出土。古代6期頃か。

472号土坑(第379図)

礎石を持つ土坑。平面形は楕円形と推定でき、断面形はタライ状。規模は47cm×20cm、深さ20cmを測る。礎石の大きさは25cmほどで、厚さは12cm程度ある。埋没土は3層に分層でき、3層には砂混じりの粘質土が堆積する。近くに焼土跡(SF02)があり、その影響を受けたか、2層・3層には焼土、炭化物を混じる。

473号土坑(第380図)

礎石を持つ土坑。にぶい黄褐色土(10YR4/3)を基調とする砂質粘土。焼土及び炭化物の粒子が含まれる。SF02検出後の調査中に確認し、それとの切り合い関係はつかめなかった。SK472と同様な土坑と考え

られ、礎石の上に焼土が分布していたことから、SF 02 より古い可能性がある。規模は 35cm × 14cm、深さ 18cm を測る。

2号焼土跡(第381図)

SK 472 及び SK 473 に隣接し、焼土の厚く堆積した範囲は 100cm 程度である。焼土と黄褐色土の混じる下層がある。西側は本跡と切り合い関係ある SK 970 があり、それについても、同時調査の結果、新旧関係は不鮮明であった。状況から判断すると本跡が SK 970 を破壊していたと考えられるか。

IX I — 1 3 ・ 1 4

柱状を呈する土坑の検出密度が高い。13 区北側で検出した柱筋の通る土坑群 (SK 81 ~ SK 87) は掘立柱建物跡の可能性が高いが、全体像がはっきりしない。14 区は西側に遺構密度が高く、西側はほとんど確認できなかった。

75号土坑(第382図)

平面形は円形状を呈し、断面形は砲弾状。規模は 34cm × 27cm、深さ 24cm。10YR3/3 の暗褐色土で、締まりが悪い。坑底面に径 15cm 前後の角礫が出土した。

112号土坑(第383図・第384図)

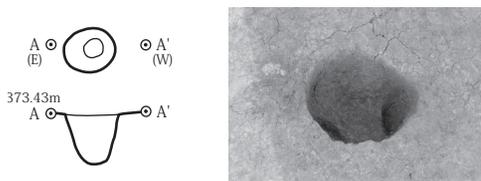
円形で、深いボール状。規模は 26cm × 24cm、深さ 26cm。にぶい黄褐色粒子を含む黒褐色土(10YR3/2)。黒色土器 A 杯 A 類、土師器甕形土器、白磁破片等が出土したほか、川原石が 1 点 (7.8g) ある。1 は白磁 V 類の椀、口縁部破片。2 は土坑検出時に出土した内耳鍋の口縁部破片。

113号土坑(第385図)

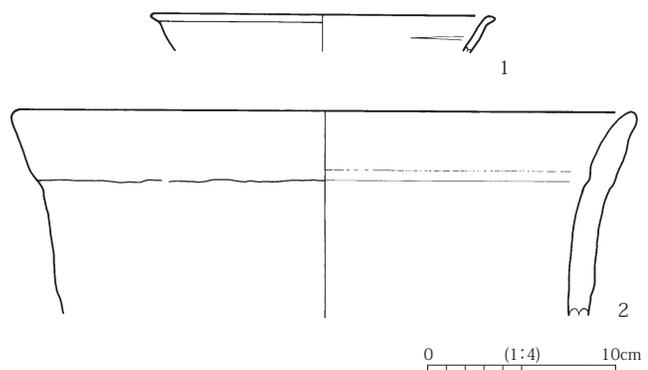
円形で、断面形はロート形。径 29cm、深さ 30cm。暗褐色土 (10YR3/3) の単純堆積。

121号土坑(第386図)

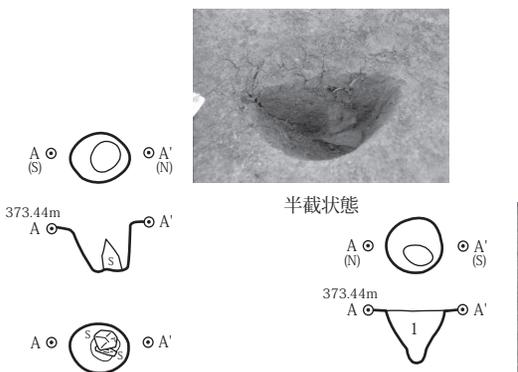
平面形は円形状で、断面砲弾形。径 16cm、深さ 30cm。埋没土は、10YR3/2 の黒褐色土。褐色の粒子 (10YR4/6)、焼土粒及び炭化物を僅かに混じる。出土土器は黒色土器 A 杯 A 類の破片が出土。時期は古代 6 期頃か。隣接する SK 118、SK 114、SK 122 は、規模がいずれも類似し、断面形も砲弾状である。これらは、その配置から北東を軸とした小形の掘立柱建物跡・柵列の可能性もあるが、柱筋がややずれ、柱間が定まらないことから土坑として掲載した。



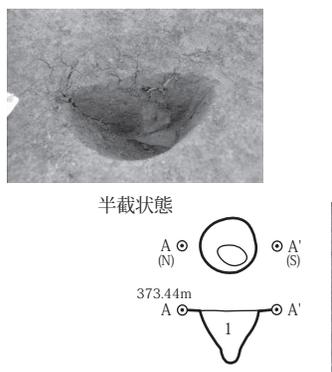
第 383 図 SK 112 の全景 (西から)



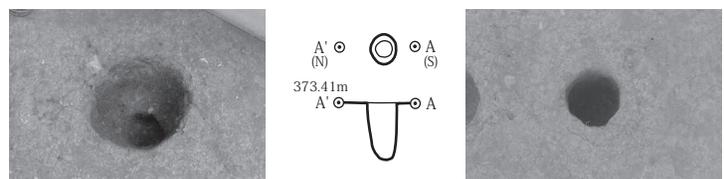
第 384 図 SK 112 出土の土器



第 382 図 SK 75 の全景



第 385 図 SK 113 の全景



第 386 図 SK 121 の全景

3号焼土跡

平面形は不定形。長軸 74cm、短軸 42cm の広がりを持つ。深さは 22cm ある。砂質混じりの暗褐色土を混入する。焼土跡を多く含むのは上層である。土師器甕形土器D類破片がある。

IX I — 18・19

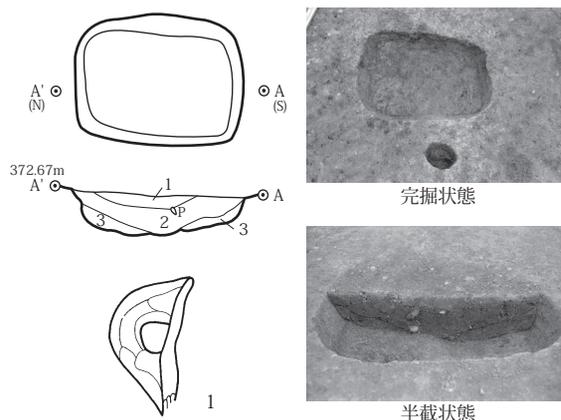
18区と19区は、旧地形上の変換部分にあたり、13区及び14区に比して70cmほどの高低差がある。ただし現地形は、近現代の水田化による掘削で、多少なりとも改変を受けているため、両地区の遺構検出密度が低いのは、その理由が大きいと考えられる。18区ではSK 61とSK 62の2基のみを確認した。19区では南端に東西方向の溝跡SD 21と大型の土坑SK 37を確認している。

37号土坑 (第387図)

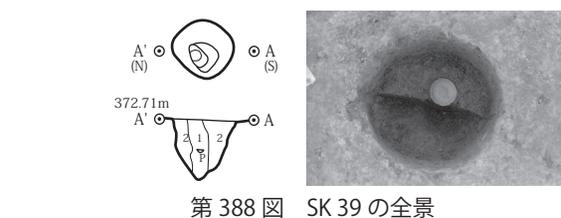
平面形状は長方形を呈し、断面は浅い皿状。規模は90cm×70cm、深さ22cmを測る。土質は粒子が細かく、粘性が弱い土を基調とし、3層に分けられた。上層(10YR7/1)は炭化物が多く混入し、中層は色調が上層よりやや暗く、下層には10YR7/1及び4/6のブロック状の土が混入する。出土土器は、土師器杯A類口縁部の破片1片、土師器杯A類小破片1片、土師器甕形土器体部破片1片、須恵器壺?の破片があるほか、1の内耳鍋口縁部破片1片が出土している。時期は14世紀以降か。

39号土坑 (第388図・第389図)

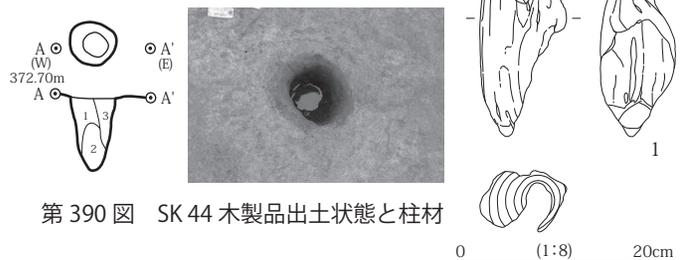
平面形は円形を呈し、径30cm、深さ32cmを測る。埋土は2層からなり、中央部分の1層は柱痕部分に相当し、底まで深く掘りこんでいる。黒褐色土(10YR2/3)で、粒子が細かく、粘性はやや弱く、炭化物が僅かに混入する。2層にはぶい黄褐色土(10YR4/3)。1層中から完形のかかわりけが1点出土している。1は口径7.2cm、器高2.1cmの糸切り底のかかわりけ完形。13世紀後半以後の所産か。



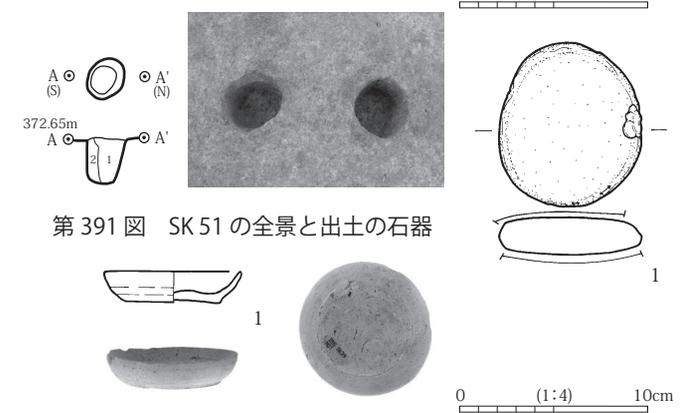
第387図 SK 37の全景(西から)と出土の土器



第388図 SK 39の全景



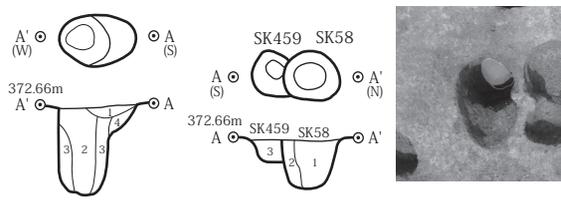
第390図 SK 44木製品出土状態と柱材



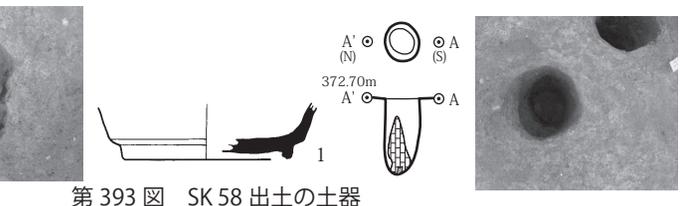
第391図 SK 51の全景と出土の石器



第389図 SK 39出土の土器



第392図 SK 54の全景とSK 58・SK 459の全景



第393図 SK 58出土の土器

第394図 SK 117木製品出土状態と完掘

IX I—2 4

本調査区より南側及び東側には、遺構の検出がない。最南端で検出したSK 49の南6mの位置には旧宮川の流路を確認したので、本地区の遺構が社宮司遺跡全体の中で、最南端と考えてよい。北側よりの南北3m×東西4mの間に21基の土坑が集中しており、部分的には柱筋を通り、規則性を示している。SK 39とSK 40（I—19）、SK 56、SK 55、SK 58、SK 459、さらにはSK 60、SK 47、SK 48、SK 134、SK 50、SK 51、SK 52などが該当する。小規模な掘立柱建物跡あるいは柵列等の遺構を想定すべきであるが、全体の形状を明瞭に把握できなかったことから、それらは土坑として提示する。

4 4号土坑（第390図）

平面形は円形状を呈し、断面は砲弾形に掘り込まれる。規模は24cm×20cm、深さ40cm。埋土は3層に分層でき、1層は黒褐色土（10YR2/3）で、締まりがあり粒子は細かく粘性はやや強い。2層は柱痕相当部分で、杭材が残っていた。1は残存した杭材で、丸木芯持ち、樹種はウメである。長さは19cm、径9.2cmを測る。腐食し樹芯の僅かな周囲のみ残っている。SK 177出土杭材と同様な状態である。3層には粘性の弱い土と炭化物、灰白土（10YR7/1）の粒子が混入する。

5 1号土坑（第391図）

円形状で、断面はタライ形。規模は22cm×19cm、深さ22cm。埋土は2層に分けられ、1層（10YR2/3）は柱痕相当部。締まりが強く、粒子の細かい粘質土を主とし、10YR7/1の土がブロック的に混じる。2層は1層に類似するが、混入物が少なく、色調はやや暗い。埋土中から磨石1点が出土している。

5 4号土坑（第392図）

楕円形を呈し、砲弾状の断面形を持つ。規模は41cm×27cm、深さ46cmを測る。埋土は4層からなる。1層の黒褐色土（10YR2/3）は、粒子が細かく粘性の弱い土で、炭化物が混入している。2層の黒褐色土（10YR2/3）は、締まり、粘性が弱い。3層は1層を基調とし、色調の異なる土（10YR7/1）が混じる。4層は3層に比べて、やや明るい色調である。

5 8号土坑と4 5 9号土坑（第392図・第393図）

断面観察からSK 58がSK 459を破壊する。SK 58の平面形は円形を呈し、断面は砲弾状。規模は径26cm、深さ24cmを測る。SK 459は、円形を呈し、断面形はタライ状。規模20cm×23cm、深さ12cmを測る。出土遺物はない。出土遺物は両土坑を区別し得ない部分もあり、須恵器杯B類底部破片1片、須恵器体部破片2片、土師器甕口縁部破片1片、土師器杯A類胴部破片1片などがある。

1 1 7号土坑（第394図）

平面形は円形で、砲弾状の断面形態。規模は18cm×17cm、深さ40cmを測る。埋土は2層からなり、上層は黒褐色（10YR2/3）で締まりが強く、粘性がやや弱い土。にぶい黄褐色土（10YR4/3）と炭化物を僅かに混じる。杭材の腐蝕痕跡があり、空洞化していた。炭素年代測定結果、1364±80年AD（ベータ法）を得た。坑底面からは水が滲み出し、極く小さな木端（長さ6cm×幅3.5cm×厚み2.2cm）が出土した。

溝状遺構

2 1号溝跡

位 置：	IX I—19区	時 期：	古代か
規 模：	長さ4m50cm、幅24cm、残存深度5cm	長軸方向：	0°E
性 格：	土地区画の溝跡か	埋土の堆積：	黒褐色土（10YR2/3）
断 面 形：	ボール形	壁の立ち上がり：	42度程度の傾斜

重複遺構： SK 40 に破壊される。

検出経過： 黄褐色砂礫面にて黒褐色土の落ち込みを確認する。周辺から規模の小さい柱穴状の土坑と方形でタライ状の大型土坑をともに検出した。I - 13 区から 14 区に伸びる SD 22 も、本跡と同様な機能を持つ溝跡と考えられる。

出土遺物： 須恵器杯A類、黒色土器杯A類、土師器杯A及び甕形土器の破片が出土。時期は古代であろうか。

列石状遺構

1号列石跡（第395図）

時期： 古代以降か

長軸方向： N - 24° - W

位置： IX I - 14 区

規模： 長さ 2m70cm 掘り方深度 20cm

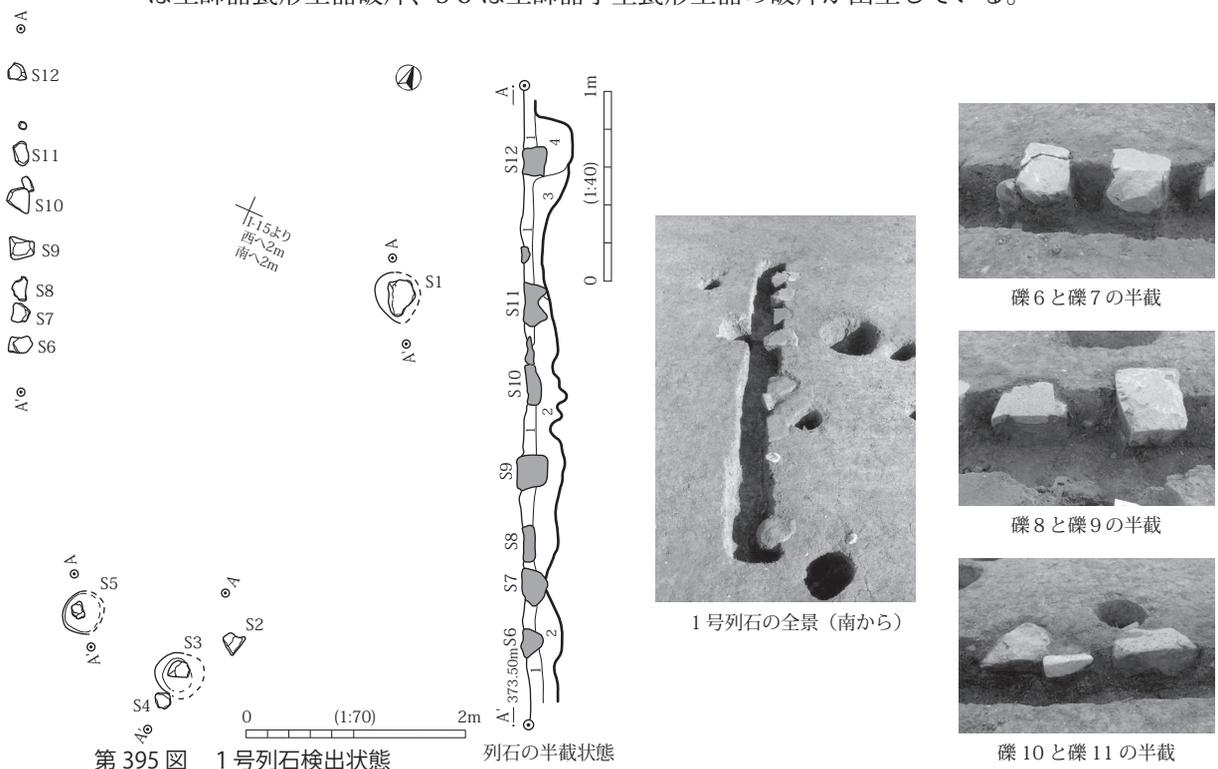
性格： 建物跡の礎石列か

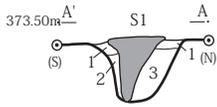
重複遺構： 不明

検出経過： 黄褐色砂礫面にて板状の礫 7 点が列状に出土した。礎石建物跡を想定し、慎重に精査した結果、西側 350cm に 1 箇所 (S 1)、南東に 300cm 程度の所に 4 箇所 (S 1 ~ S 5)、板状の礫を確認した。出土状況から、S 2 と S 4 は現位置を留めていないと判断、ほかの板石部分につき、掘り込みの有無を確認し、調査を終了した。

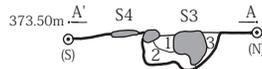
埋土の堆積： 列石状に確認した S 6 ~ S 12 では、S 12 以外に掘り込みを確認できなかった。S 12 は暗褐色土 (10YR3/3) を基調とした単純堆積の埋土で、焼土及び炭化物の微粒子を混じる。S 1 は深いロート状の掘り方断面形を呈し、3 層に分層できた。1 層黒褐色土 (10YR2/3)、2 層及び 3 層は暗褐色土 (10YR3/3) で、3 層にはにぶい黄橙色土 (10YR6/3) の土がブロック状に混じる。S 3 は S 1 とほぼ同様。S 5 はタライ状の断面形で、黒褐色土 (10YR3/2) の単純堆積である。

出土遺物： S 6 ~ S 12 は、土師器杯 A 類と甕形土器の破片、黒色土器 A 杯 A 類等が出土。S 1 と S 3 では土師器甕形土器破片、S 5 は土師器小型甕形土器の破片が出土している。

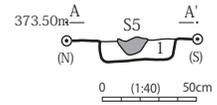




第 396 図 磔 1 の半截状態



第 397 図 磔 3 と磔 4 の半截状態



第 398 図 磔 5 の半截状態

I-7区検出面出土の遺物

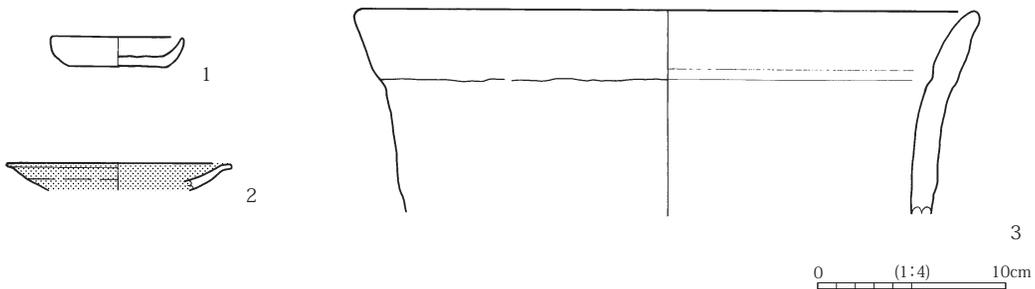
検出面より青磁の椀底部 1 片が出土。蓮弁文で 13 世紀頃の所産か。

I-8・9区検出面出土の遺物

1 は 8 区出土の土師器、かわらけの皿 2/3 個体。口径 7.0cm、底径 4.0cm、器高 1.5cm を測る。肌色の色調で、胎土内に赤色微粒子を混入する。SK 39 出土資料と同形態である。2 は 9 区出土の黒色土器 B 類の皿口縁部破片。

I-14区検出面出土の遺物

3 は内耳鍋の体部破片。この他、I-23区と 24区との境付近の検出面から木片が 1 点と川原石 1 点(3g)が出土している。木片は棒材で、木取りは芯持材。(長さ 6.4cm)×径 1.8cm を測る。一端が欠損するが、もう一端は斜めの切断痕が残る。



第 399 図 I-8・9・14区検出面出土の土器



I-13・14区周辺の土坑完掘状態(東から)



I-13・14区周辺の土坑完掘状態(北から)

2-2. 竪穴式建物跡

1975年の千曲市教育委員会発掘のB地点では検出がなかったが、今回の調査では16軒を確認した。遺構は、SD 01 南側の②区に5軒、SD 03 南側の③区に11軒を確認した。以下に調査の概要を建物番号順に記述するが、それぞれの所属時期は、概ね次ぎのようになる。

社宮司Ⅰ期	第1小期 (古代2期前半, 7世紀後半) …・2軒該当。SB 05・SB 16
	第2小期 (古代2期後半～3期, 8世紀前半) …・1軒該当。SB 17
	第3小期 (古代3期～4期, 8世紀中頃～後半) …・2軒該当。SB 11・SB 14
社宮司Ⅱ期	(古代5期～7期, 9世紀前半) …・4軒該当。SB 04・SB 06・SB12・SB 08
社宮司Ⅲ期	(古代8期, 9世紀後半) …・3軒該当。SB 01・SB07・SB 15
社宮司Ⅳ期	(古代9期, 10世紀前半) …・4軒該当。SB 02・SB 03・SB 09・SB 10

1号竪穴式建物跡 (第400図～第407図)

時期： 9世紀後半から9世紀終末を推定 (古代8期比定)

位置： IX D - 24, 25 (③区) 平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 22.4 m² (南北 450cm × 東西 518cm)、残存深度 14cm

主軸方向： S - 3° - W カマド位置： 南壁の東より

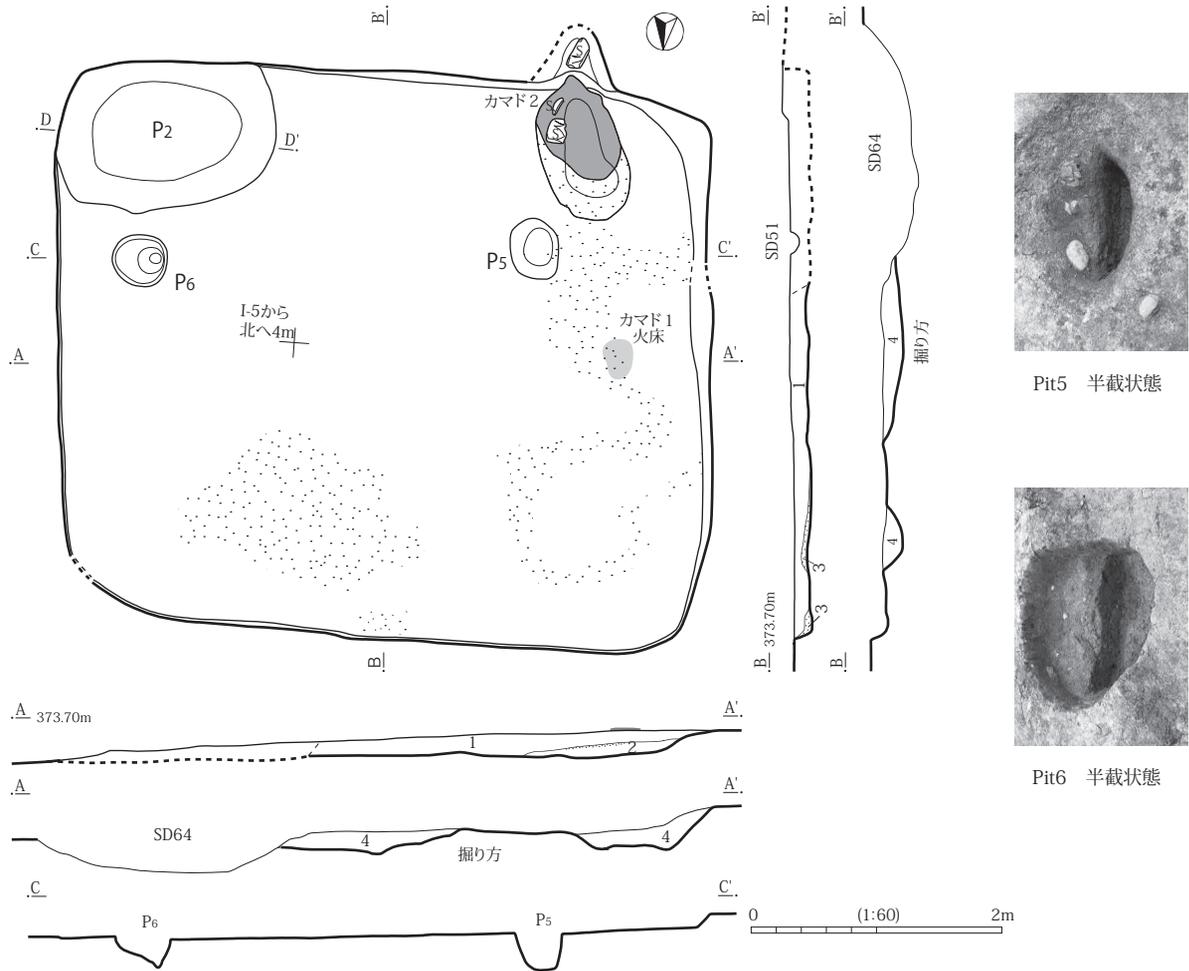
壁立ち上がり： 20度程度の傾斜 柱 穴： 2本主柱穴

埋土堆積： 1層・2層暗褐色土 (7.5YR3/3) の堆積、2層は1層よりも炭化物量及び焼土粒子が多い。3層は住居北側壁よりに堆積した炭化物層である。4層は黄褐色砂質ブロックを混入した暗褐色土 (7.5YR3/3) で、貼り床部分と考えられる。

遺構重複： SD 64 に切られると判断した。調査所見では SD 64 を本住居が破壊していたと記録されるが、貼り床と推定した4層が SD 64 の埋没土1層に切られており、所見には矛盾が認められる。貼り床相当部、つまり掘り方と考えられる掘り込み箇所は確実に存在したと考えられるから、それを切る SD 64 の掘り込みラインは、SB 01 を破壊している証左と判断できる (第405図掘り方断面図)。ただし、カマド相当部を2個所で確認しており、建替え等の所作を想定でき、そこに SD 64 を介在できる時間差があれば、ここでの判断も別になる。SK 477・478・479・482・1126 は、床下調査時に検出しており、古い遺構と判断できるが、調査経過から考えると、SB 01 に伴う土坑の可能性も考えられる (第357図)。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層 (10YR5/8) 上面にて、暗褐色土 (7.5YR3/3) の落ち込みを確認する。形状と規模から住居跡を想定し、調査に入るが、西側ラインは攪乱により不明瞭であった。埋土中には炭化物分布が数カ所で認められ、床面直上にも薄層として確認できた。床面にて確認できた SD 64 検出ライン内にも炭化物及び焼土の堆積が認められ、本跡との関連が予想できるが、堆積層の下位が床下の貼り床部分まで及んでいる点と、2者の新旧関係の判断から、SD 64 に伴う可能性が高い (第405図)。

遺物出土状況： 検出面及び埋土中からは、土器小破片が散在して出土した。大形の破片は、第401図に示した程度に留まる。SD 64 との切り合いが大きく、それとの遺物の混在を想定しておく必要がある。第401図 No2 (第406図の11) の土師器皿形土器は、床面から4.0cmほど浮いた状況で出土し、床面直上であるが、壁よりであったため埋土下層扱いとした。



第400図 SB 01 床面完掘の状態

床面の様子： 掘り方に貼り床した部分は軟質であるが、地山である黄橙色砂質土を床面とした部分では、堅緻で硬化した面が認められた。

カマドの様子： カマドあるいは、その痕跡と考えられる火床部分が2箇所認められた。所見に従えば、西側に確認できた火床部分は、その一部に床面と同質の土が覆っていたことから、カマドの痕跡であれば、古期のものと判断できる。本跡の確実なカマドは、南側に煙道部分を残したカマド2である。燃烧部の残存と考えられる火床と炭化物層、そして袖部の芯材と判断できる 20cm 程度の礫 2 個を確認した。



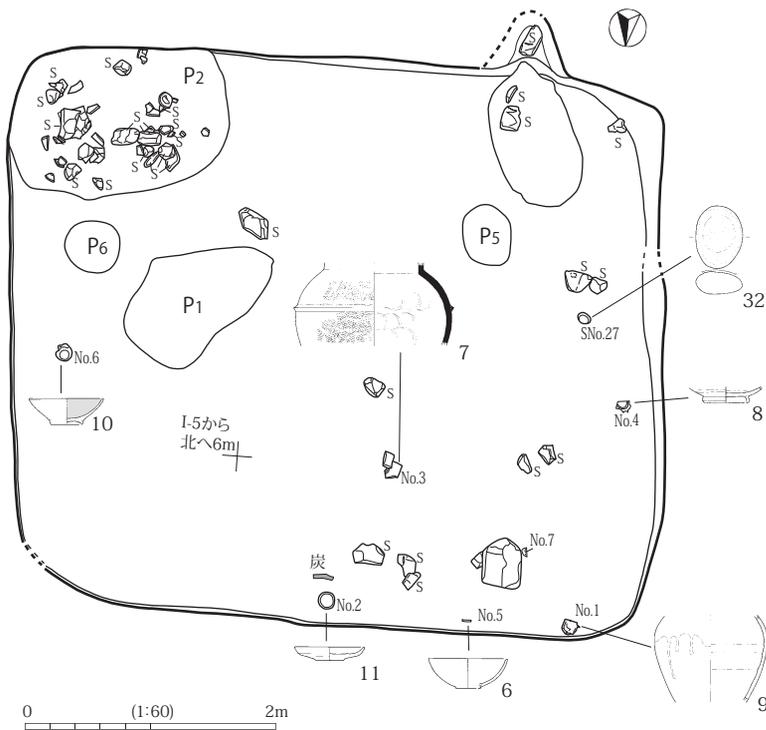
Pit5 半截状態



Pit6 半截状態



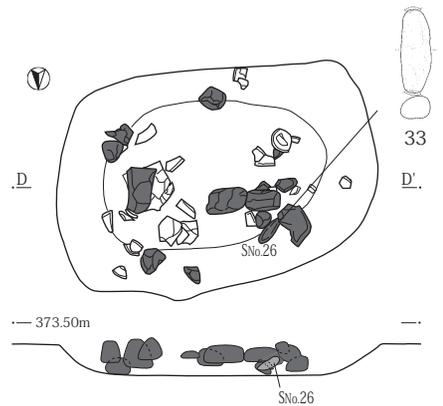
SB 01 遺物出土状態 (北から)



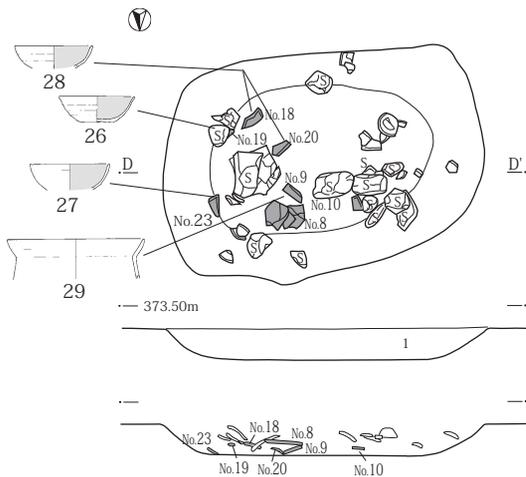
第401図 SB 01 遺物出土の状態



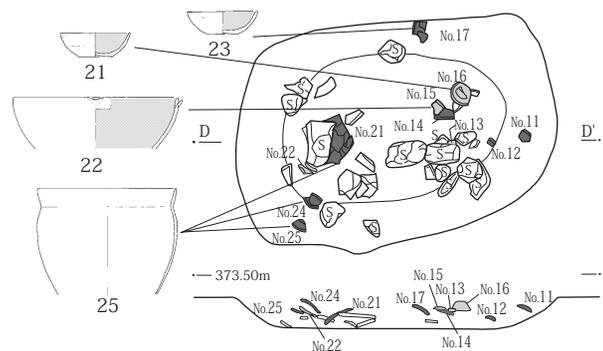
Pit2 遺物出土状態



第404図 Pit2 礫出土状態



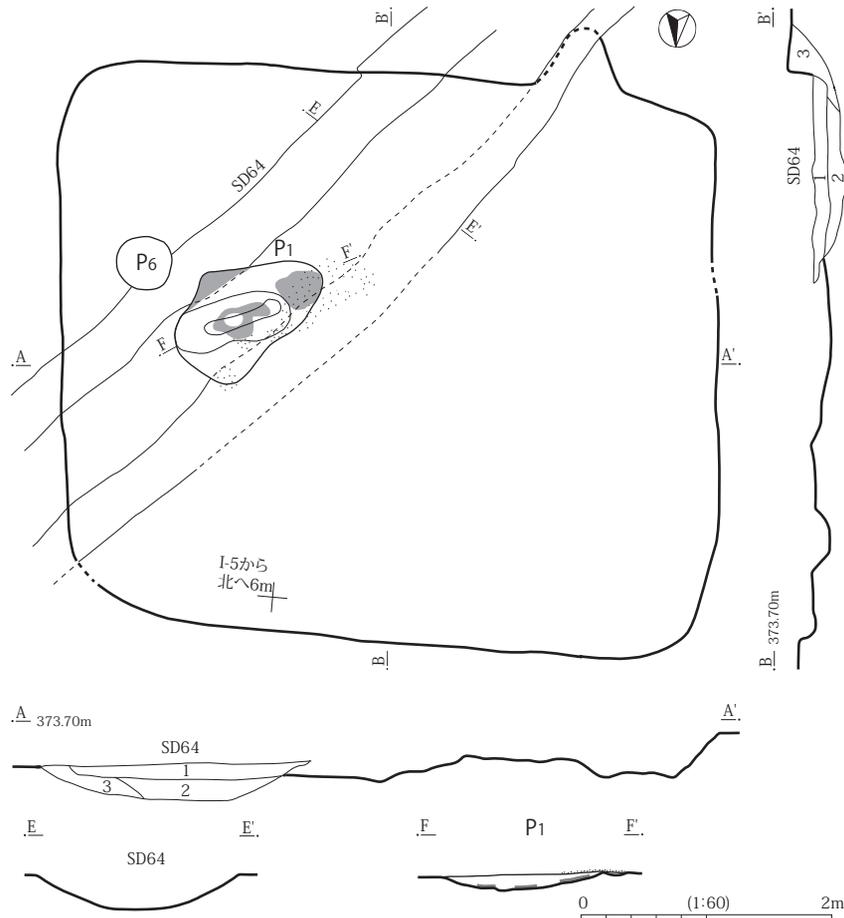
第403図 Pit2 下層土器出土状態



第402図 Pit2 上・中層土器出土状態

出土遺物： 出土土器の内訳は第53表に示すが、大部分の破片資料が埋土中及び検出面である。黒色土器Aの杯A類を主体とし、破片数的には土師器杯A類がこれと拮抗する。本跡床面では、SD 64を確認しているが、検出経過で示したように、SD 64が本跡を破壊していたと判断するので、床下を含め遺物には若干の混在を考える必要がある。Pit2に伴う一括出土土器が時期の判断根拠となる。

床下 1は土師器皿形土器A類の口縁部破片。口縁はやや内湾する形態で、外面は丁寧なナデ整形仕上げである。2は須恵器杯形土器A類の底部破片。ロクロ成形痕が明瞭で、ヘラ切り離し、堅緻な作りである。3から5は灰釉陶器。3は椀形土器口縁部の破片で、4は底部破片、5は瓶類の口部破片である。



第405図 SB01掘り方完掘の状態

遺構名	非開口土師器 高杯	土師器											黒色土器A											
		杯A	椀	皿	盤	甕	甕A	甕B	甕E	甕H	甕I	小型甕	小型甕D	不明	杯A	椀	皿	蓋	甕	甕B	小型甕	鉢		
SB01 検出面	1	95	5			43	6	1			3	3			69		1							
埋土		237	5	1	1	169		24	5		3			7	6	308	3	4					9	
2層		11		1	1										2	15		1	1					
床面		28	3			20		7			1					45								
床直上																	9							
床直 (炭集中部)		9		1				1																
床下	1	46		1	2	38		2		1		1		7	80	1							2	
2層 (火床)		19	1			13					1			25										
第2カマド						7								2										1
Pit1 埋土		22				13		6					2	26		1		5	1	5				
Pit2 埋土		4				2		1					1	17										1
上層		1																						2
中層											11				6									
上・中層			2												4									
下層		1													15									
Pit5 埋土															10									
Pit6 埋土		6				2				2		1	6	1	10									

遺構名	須恵器													灰軸陶器						磁器		土製品		数 / 総重量 (破片/g)
	杯A	杯B	蓋	甕	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	長頸壺A	短頸壺	不明	椀	皿	壺	短頸壺	小瓶	広口瓶	平瓶	椀	不明			
SB01 検出面	31	4	5	5	14		10	2	7	1	1		9	4	3						1			323/2,980.6
埋土	75	4	7	15	4	7	19		5				18		1									939/4,771.9
2層																								32/293.2
床面	10			1	2		2		1				5				2	4						131/1,072.9
床直上	2																							11/114.7
床直 (炭集中部)									1				1		1									21/58.9
床下	22	2	2	1	2		7	2	1				5	2			1							222/1,449.1
2層 (火床)	2						1	1					1			2								66/329.3
第2カマド					1																			11/239.9
Pit1 埋土	6	1		1			2		1							1								93/336.1
Pit2 埋土	1	1		2	1								1											34/337.6
上層																								3/36.3
中層						1																		18/410.5
上・中層																								6/150.9
下層																								29/470.7
Pit5 埋土																								10/246.9
Pit6 埋土																								28/192.7

第53表 SB01出土土器組成

床面 6は第401図No5の土師器杯形土器で、1/4程度の破片と考えられる。底部に高台とも観られる残存部分があり、椀形土器の可能性もあるが、状況が悪く、全体形は不明瞭である。極めて内面良好なナデ整形が施され、口径は14.0cm以上を測る。7は須恵器の突帯付き四耳壺の体部破片で、第401図No3に相当する。幅3.0cm以上の縄巻き板状工具による叩き締め後、突帯を巡らせる。内面のあて具は直径3.0cmほどの工具と判別できる。8は第401図No4の灰釉陶器椀底部破片で、1.0cm程度の高い三日月高台を貼り付け、釉は刷毛塗りである。9は灰釉陶器広口の瓶類体部破片で、第401図No1に相当する。10は黒色土器A類の椀形土器2/3程度の個体で、床面直上の第401図No6に相当する。外面は荒れて観察不能であるが、内面には「十字」状の暗文があり、口径12.7cmを測る。31は床面出土の刀子の切先である。32は第401図No27で床面出土の安山岩材の磨石。片面に明瞭な磨耗痕を観察できる。

埋土2層 11は第401図No2の土師器皿形土器A類、完形品である。口縁部内湾した形態で糸切り離して小さな底。口径12.2cm、器高2.3cmを測る。12は土師器皿A類の口縁部破片で、13と同形態である。13は黒色土器Aの皿形土器B類の口縁部破片。口縁の直線的に開く形態で、浅い皿部である。14と15は黒色土器Aの椀形土器の口縁部及び底部破片。16は灰釉陶器皿の口縁部破片。玉縁状の口縁を持ち、施釉手法は不明である。17はSD 03及びSB 12と接合関係にある灰釉陶器の平瓶。本跡の例は97.5g/788.5gを計る体部破片。18もSD 03と接合関係を求められそうな灰釉陶器広口壺の体部破片である。17及び18についての詳細はSD 03 (P524) に記す。

検出面 19は土師器椀形土器の底部付近の破片。高台高1.6cmを測り、胎土中に赤色粒子を混入する。20は土師器の小型甕形土器の口縁部破片。内外面良好にナデ整形されている。口径7.0cmを測る。

Pit2 上層

21は第402図No16の黒色土器Aの杯形土器A類完形品。糸切り離した後ナデ整形と看取できるが、器面の整形については内外面とも荒れて確定できない。広い底部で底径6.0cmを測る。22は第402図No15に相当し、黒色土器Aの土師器片口付き鉢形土器A類、口縁部破片である。内面は良好にナデ整形仕上げされている。

中層

23は第402図No17で、21と同様な整形手法を取るが、底径5.0cmと小さい。25は第402図No8・21・24・25の接合個体で、土師器甕形土器I類の1/5程度の体部破片である。内外面とも荒れて整形方法は判然としないが、回転ロクロ成形後のケズリとナデ整形仕上げのAタイプと考えられる。体部の器厚は薄いところで0.3cmを測る。

下層

26は第403図No19の黒色土器A杯A類で、上層出土の21と同様な特徴を呈する。27及び28は黒色土器A杯A類の1/3程度の個体である。体部の脹らむ形態で、口唇部も厚い作りである。29は土師器甕I類の口縁部破片で、Pit6出土土器と接合関係にある。中層の25と同型の別個体である。33は第404図No26で、安山岩製の敲石。上下両端部に潰れ＋磨耗の跡を観察できる。

埋土

24は黒色土器Aの杯A類で、下層出土の26と同様な特徴を示す。3片の接合資料で外面には太い刻書で正位に「件」、2.6cm脇に細い刻書で倒位に「八千」の刻書がある。この太い刻書と同様な刻書がPit6から出土した小破片(2.7g)にもある。これは、22と同一個体と考えられるが、接合面は確認できない。「八」の一辺のみ残存し、恐らくは「八千」の文字であろうか。

時期の判断基準：

床下遺物に関してはSKとの重複、さらにはSD 64との切り合いがあるが、3～5の灰釉陶器の存在、1の土師器皿の形態的特徴から、6期以降で8期前後に比定できる。床面出土のナンバーリング遺物では、土師器杯と須恵器甕D類、灰釉陶器椀、広口瓶類の存在から、8期から9期ころを推定できる。Pit2出土の黒色土器杯A類の21は、底径の大きな法量であり、8期前後に多出するものと考えられる。土師器甕形土器I類は、口縁が直立気味に立ちあがり、口径より体部の張出すプロポーションで、体部のケズリだしの不明瞭な点など8期・9期の特徴を示す。しかしながら、下層出土の29が口縁外反気味に立ちあがる、やや古式の形態であることから、8期前後に落ち着くものか。

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
第406図9	床面	1	灰釉陶器	広口瓶	体部	—	—	—	—	—	
第406図8	床面	4	灰釉陶器	椀	底部	—	(1.2)	(7.5)	—	—	光ヶ丘1 ハケヌリ
第406図7	床面	3	須恵器	甕D	体部	—	—	—	—	—	
第406図6	床面	5	土師器	杯A	1/4	—	4.5	—	—	—	椀か？
	床面	7	土師器	椀？	体部	—	—	—	—	—	破片
第406図10	床直上	6	黒色土器A	椀	ほぼ完型	12.7	4.5	5.4	4.5	—	十字暗文
第406図11	埋土2層	2	土師器	皿	完型	12.2	2.3	4.2	—	—	
第406図17	埋土	なし	灰釉陶器	平瓶	2/3	—	—	—	—	—	SB 12埋土、SD 03No237 他と接合
	Pit2下層	8A	土師器	甕I	1/3	(24.0)	—	—	—	—	No21と同一個体 (No21と一緒にいる)
第407図29	Pit2下層	9	土師器	甕I	口縁	(24.0)	—	—	—	—	Pit6と接合 (Pit6が破片が大きいのでPit6扱いとする)
	Pit2下層	10	土師器	甕I	口縁	(28.0)	—	—	—	—	破片 No9とは別個体
第407図28	Pit2下層	18	黒色土器A	杯A	1/3	(13.4)	(4.2)	—	—	—	直口 広底 No20と接合
第407図26	Pit2下層	19	黒色土器A	杯A	1/3	13.0	4.4	(5.6)	—	—	外反 広底 (糸切り?)
	Pit2下層	23-A	黒色土器A	杯A	口縁	(13.0)	—	—	—	—	破片 直口
第407図27	Pit2下層	23-B	黒色土器A	杯A	1/3	(13.0)	—	—	—	—	同一個体1片あり 直口
	Pit2下層	23-C	土師器	杯A	口縁	—	—	—	—	—	破片
第407図25	Pit2中層	21	土師器	甕I	1/3	(24.0)	—	—	—	—	No24, No25と接合 No8Aと同一個体
	Pit2中層	8-B	黒色土器A	杯A	口縁	(16.0)	—	—	—	—	破片
	Pit2中層	11	黒色土器A	杯A	口縁	(16.0)	—	—	—	—	破片 直口
	Pit2中層	12	須恵器	甕C	体部	—	—	—	—	—	破片
	Pit2中層	14	黒色土器A	杯A	口縁	(13.0)	—	—	—	—	破片 直口
第407図23	Pit2中層	17	黒色土器A	杯A	1/2	(12.0)	3.9	—	—	—	直口 狭底
	Pit2上層・中層	22-B	黒色土器A	杯A	1/3	(12.0)	4.2	(5.0)	—	—	外反広底 (糸切り?) No19と同一個体
第406図21	Pit2上層・中層	16	黒色土器A	杯A	完型	12.0	4.15	6.0	—	—	直口 広底
	Pit2上層・中層	22-A	土師器	椀	高台	—	—	—	—	—	破片
	Pit2上層	13	土師器	杯A	口縁	—	—	—	—	—	破片
第406図22	Pit2上層	15	黒色土器A	鉢A	口縁	(13.0)	—	—	—	—	破片 片口鉢 Pit2同一破片あり
第407図30	Pit5埋土		黒色土器A	杯A	完型	14.6	4.7	5.8	—	—	外反 広底 埋土と接合

第54表 SB 01 出土土器属性

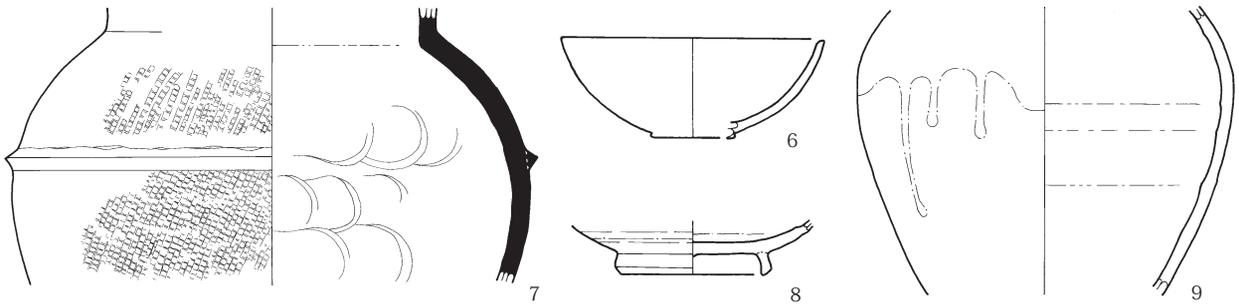
図版番号	出土位置	焼き物種類	器種	現存部位	記入方法	用筆ほか	記入部位	向き	文字	備考
第407図24	SB 01, Pit2	黒色土器A	杯A	口部周辺	刻書	直・0.5mm	体部・外面	正位	件	3片 2ヶ所あり
第407図24	〃				刻書	直・0.2mm	体部・外面	倒位	八千	上記と接合
	SB 01, Pit6	黒色土器A	杯A	体部？	刻書	直・0.5mm	体部・外面	不明	「八」か	「八千」の一部か、上記の杯Aと同一個体？

第55表 SB 01 出土刻書土器属性

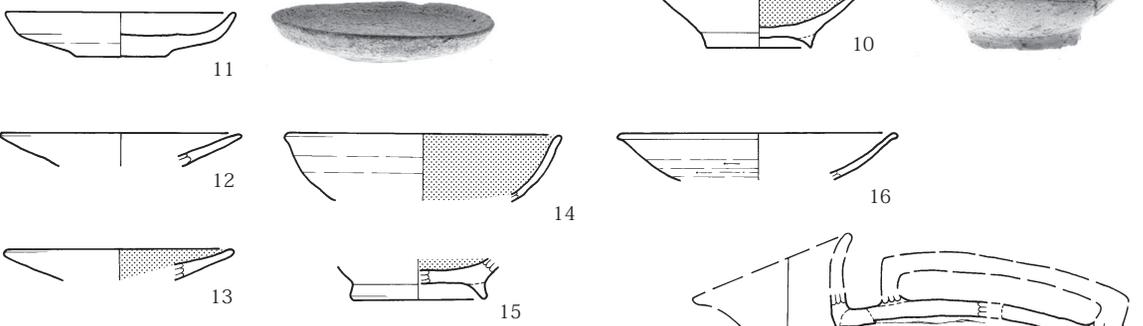
床下



床面



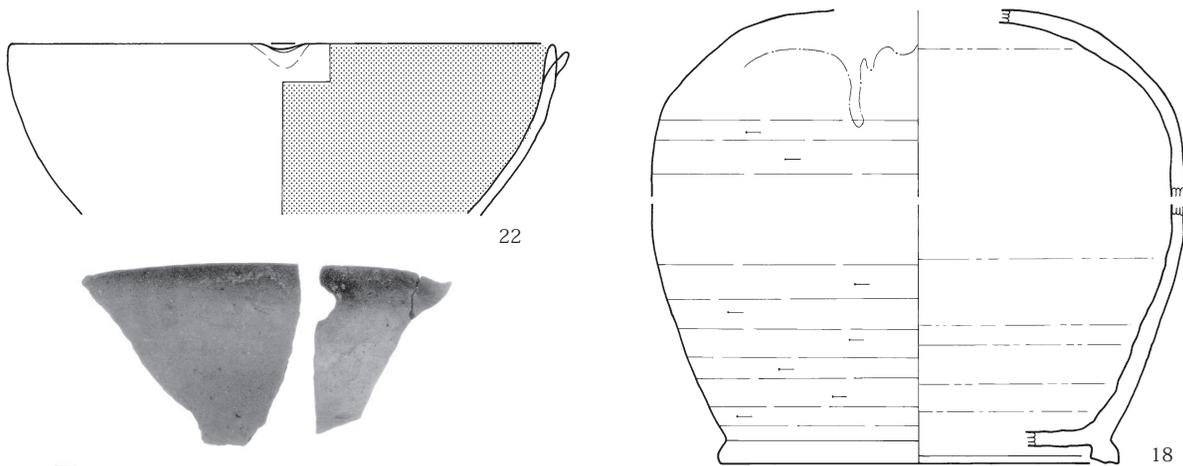
埋土2層



検出面

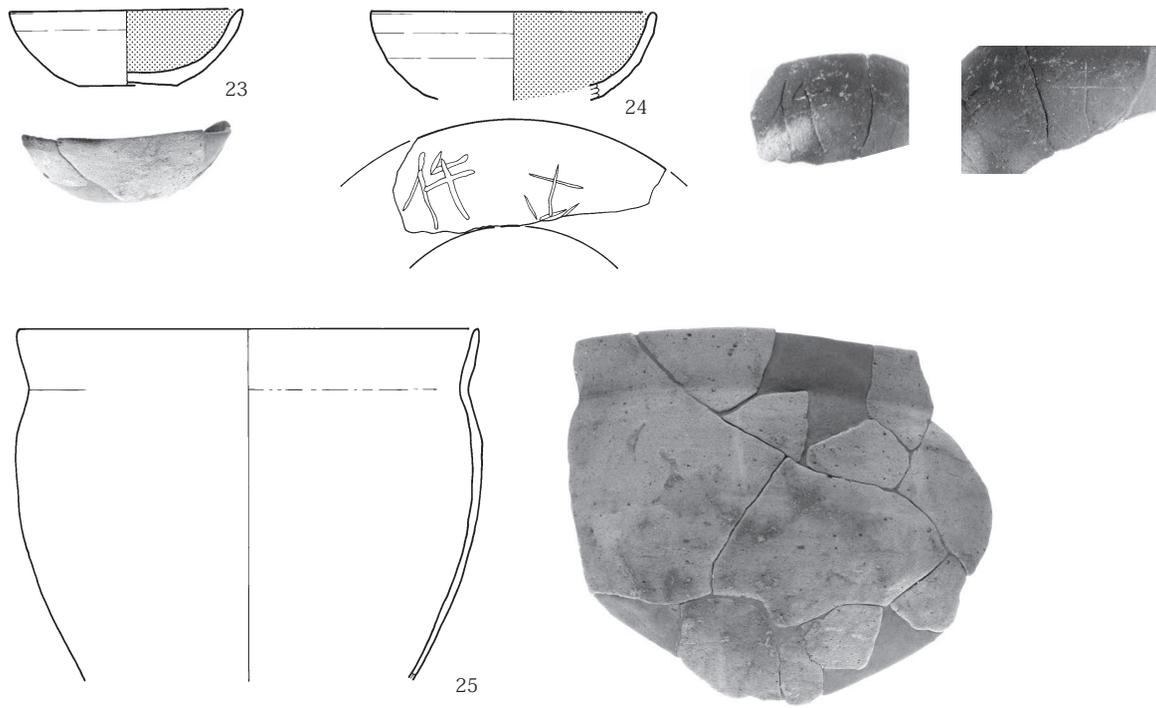


Pit2 上層

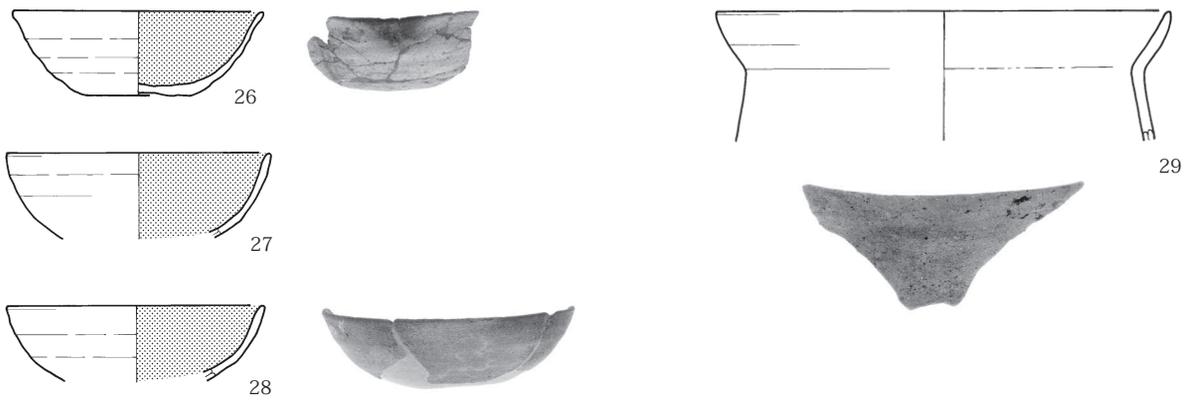


第406図 SB 01 出土の土器

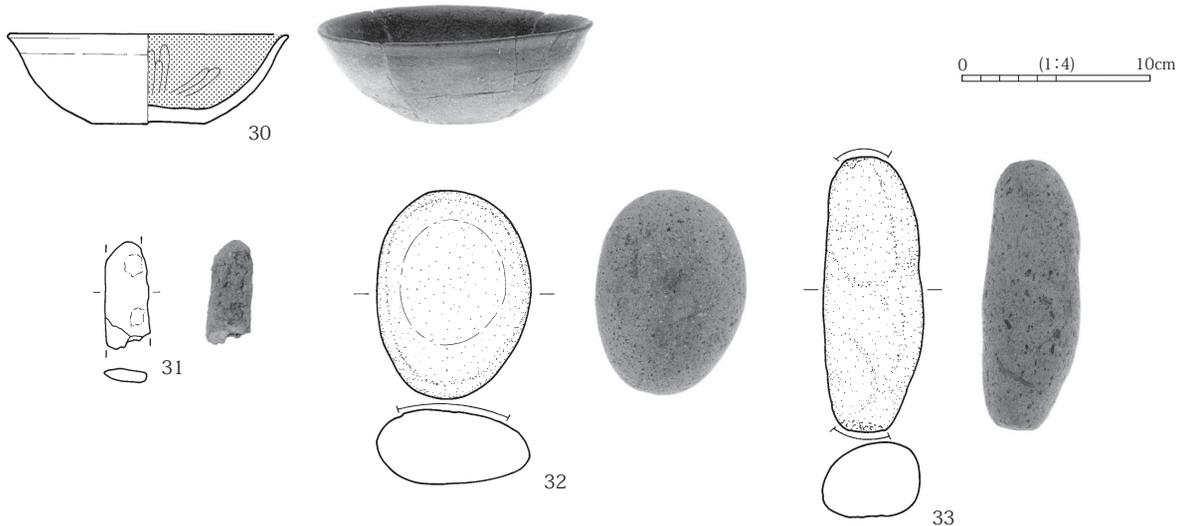
中層



下層



Pit5 埋土



第 407 図 SB 01 出土の土器・石器・金属器



SB 01 出土の土器

2号竪穴式建物跡（第408図～第426図）

時期： 9世紀終末から10世紀初頭を推定（古代9期比定）

位置： IX I - 3, 4（③区）

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 41.4 m²（南北 680cm × 東西 620cm）、残存深度 14cm

主軸方向： E - 3° - N

カマド位置： 北壁の東より

壁立ち上がり： 40度程度の傾斜

柱 穴： 2本主柱穴ないしは4本主柱穴

埋土堆積： 埋没土は4層ある。暗褐色土（10YR3/4）を基調とした埋土で、微細なブロック状の焼土粒子及び炭化物粒子を混入する。5層は床面溝内に堆積した土で、やや大きめな炭化物粒子と黄褐色砂質ブロックを混在する黒褐色土（10YR2/2）。

遺構重複： 本跡検出面には、東西・南北方向に走る幅 20cm ほどの耕作関連と考えられる溝跡、直径 20cm 程度の円形を呈する落ち込みが認められた。本跡の落ち込みプラン内には、円形状の落ち込み数は極めて少なく、大半がプラン線に沿った位置にて検出できた。本跡を破壊する主な土坑には SK 350・SK 420・SK 1122 がある。東南角では、SB 06 との切り合いがあり、本跡が SB 06 を破壊していた。ST 11 も本跡に破壊された建物跡で、Pit7・Pit8・Pit9・Pit20 は切られる。SD 64 については、切り合い関係が不明瞭で、精査したが判断できなかった。以下の建物床面溝跡で説明を加えるが、本跡に付属した施設である可能性を考えておく必要がある。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層（10YR5/8）上面にて、黒褐色土（10YR2/3）の落ち込みを確認する。形状・規模から竪穴式建物を想定し調査した。I - 3区では、柱状の落ち込みを数多く確認したが、本跡の推定プラン内では少なかった。また検出時、SD 64 に切られると考えていたが、調査を進めるに従い、埋没土の違いが不明瞭で、重複関係の根拠が希薄と判断できた。床面にて

検出した Pit12 や溝 B との位置関係を考えると、本跡と SD 64 は同一遺構と判断すべきと考えた（第 408 図）。床面では、Pit1 と Pit12、Pit15 の 3 基で、土器と礫を多量に混入する大きな落ち込みを確認、これに伴うと考えられる溝 A から溝 C を検出した。発見当初、それら溝跡は所謂「オンドル状遺構」と考えたが、燃焼部が存在せず、カマド掻き出し部より下位に位置していること、溝内に炭化物や灰・煤等があまり認められないこと、SD 03 に直結した SD 64 との関連を想定できることなどから、建物内排水施設と考えた。

遺物出土状況： 検出面及び埋土中から土器小破片が散在して出土した。大形の破片は、第 415 図に示した程度に留まる。出土遺物の大部分は、床面に構築された Pit1・Pit12・Pit15 からである。それについては、第 416 図から第 422 図に示す。カマド検出時に、その周辺から角礫状の石が出土し、袖部芯材の可能性が示唆された。

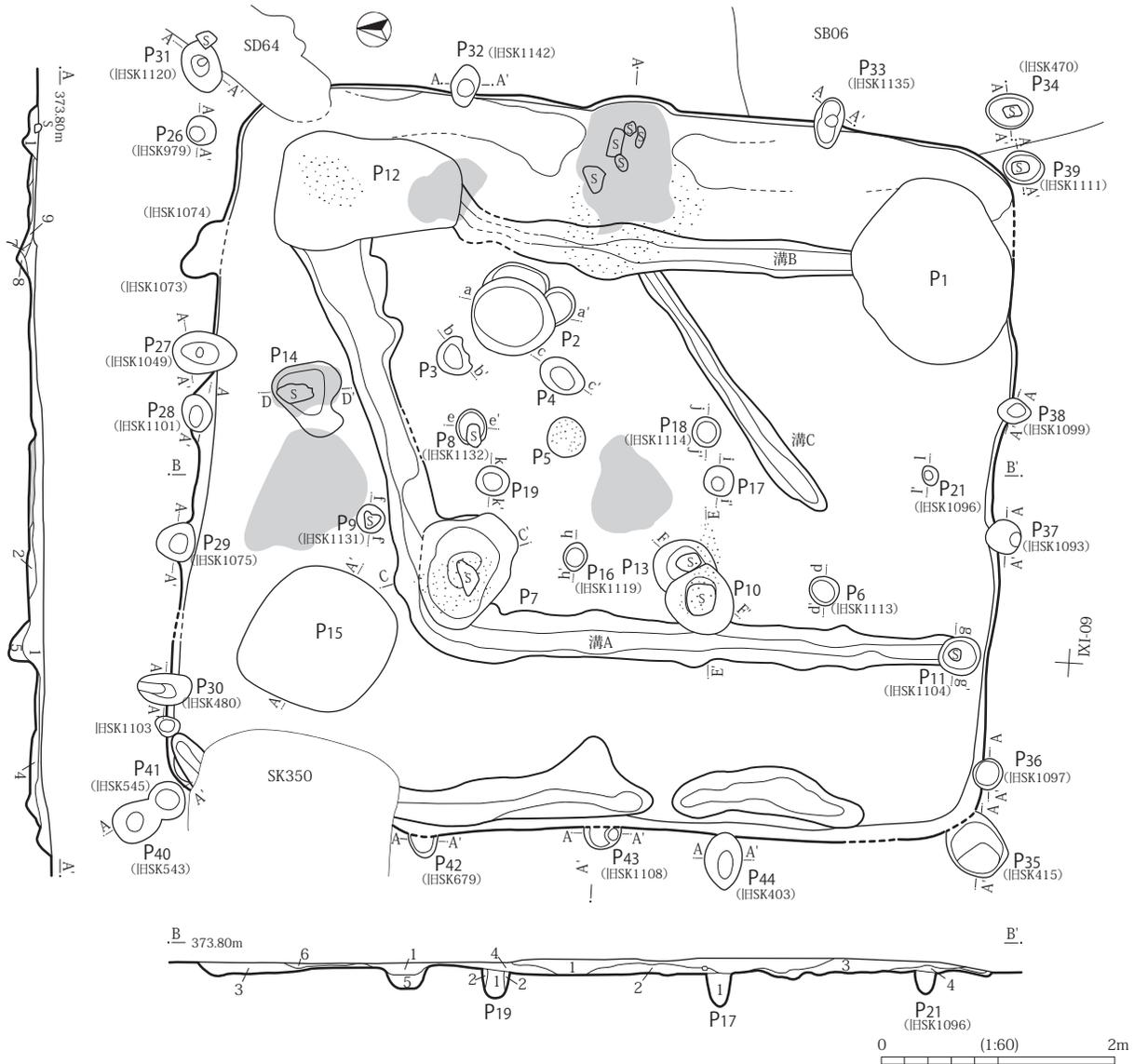
床面の様子： 掘り方に貼り床した部分は軟質であるが、地山である黄橙色砂質土を床面とした部分では、堅緻で硬化した面が認められた。主柱穴ほかの柱穴 18 基、土坑状の施設 3 基、溝 3 本を検出した。

主 柱 穴： 主柱穴を想定できる土坑は 3 基ある。いずれも床面の溝 A と溝 C に囲まれた部分に位置する。Pit2 は平面が円形を呈し、規模 74cm × 65cm、深さ 39cm を測る。埋土は複雑に堆積し、経過時間のある自然堆積とは考え難い状況を示していた。埋土には炭化物、焼土粒子を混入する。Pit7 及び Pit10 は平石のある柱穴で、Pit2 同様に複雑な埋没土の堆積状況がある。Pit7 の掘り込みは溝 A と一部重複する。最下位の埋土 4 層は両者を覆うように堆積し、3 層との間に薄い炭化物層を挟む。Pit10 は、Pit13 を破壊して構築されており、明かな改築が認められた。埋土 1 層中に炭化物の薄層がある。また Pit13 の坑底面からは微細な焼骨が出土している。

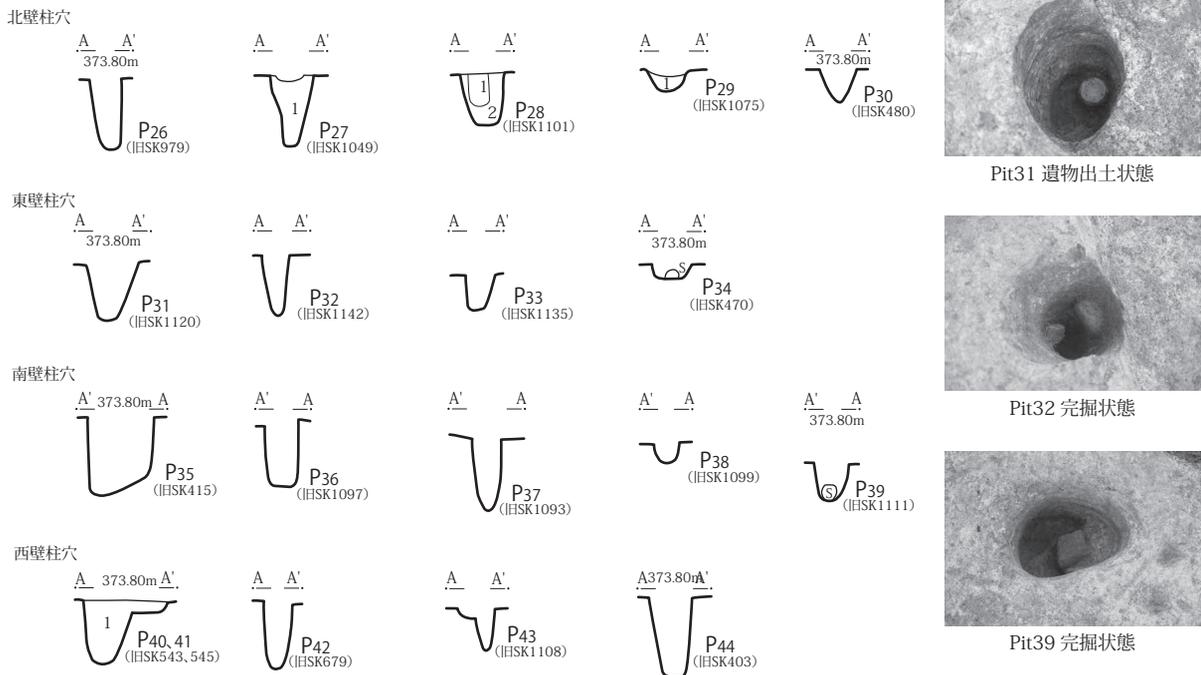
床面の柱穴： 床面にて検出できた柱穴は 18 基ある。そのすべてが本跡床面に備わるものか否かは定かではないが、検出経過に難しい面があったことを考慮しつつ扱う。Pit9(旧 SK 1131)、Pit8(旧 SK1132)、Pit16(旧 SK 1119)、Pit18(旧 SK 1114)、Pit6(旧 SK 1113)、Pit17、Pit19 は、深さ 30cm を超える筒状の柱穴で、その内の Pit8 と Pit9 は角礫を伴う。Pit21(旧 SK 1096) は、他の柱穴に比して小さく浅い形状で区別すべきか。Pit11(旧 SK 1104) も浅く断面タライ状を呈する点で他と区別でき、埋土中からは角礫が 1 点出土している。床面に走る溝 A の先端にあたり、丁度、溝を止めるように存在する。関連する遺構であろうか。Pit3 から Pit5 は、いずれも深さ 10cm 未満の浅い凹みであり、柱穴とは区別すべき例であろうか。

南側壁柱穴： Pit39(旧 SK 1111) は円形を呈し、坑底面に 20cm 程度の角礫がある。Pit38(旧 SK 1099) は円形のやや浅い柱穴で、埋土中から黒色土器碗の底部破片 1 点が出土。Pit37(旧 SK 1093) は円形で深さ 55cm ほどの柱穴、埋土中から灰釉椀形土器、土師器杯 A 類破片が出土している。Pit36(旧 SK 1097) は Pit37 と同様に円筒形の深い柱穴。Pit35(旧 SK 415) は西側壁柱穴列との交点にあり、径 50cm ほどの深くしっかりした柱穴である。壁立ち上がり部との切り合い関係は不明だが、深く鋭い突き刺し状の柱穴。

西側壁柱穴： Pit44(旧 SK 403) は、やや楕円形状で深さ 60cm 程ある柱穴。Pit43(旧 SK 1108) 及び Pit42(旧 SK 679) は、壁立ち上がり部との切り合いは判然としないが、深い突き刺し状の柱穴である。Pit41(旧 SK 545) 及び Pit40(旧 SK 543) は切り合いのある柱穴で、本跡に伴うのは深さのある Pit41 と考えられる。北側壁柱穴列との交点にある。



第 408 図 SB 02 床面完掘の状態



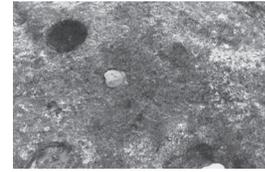
第 409 図 壁柱穴断面及び土層



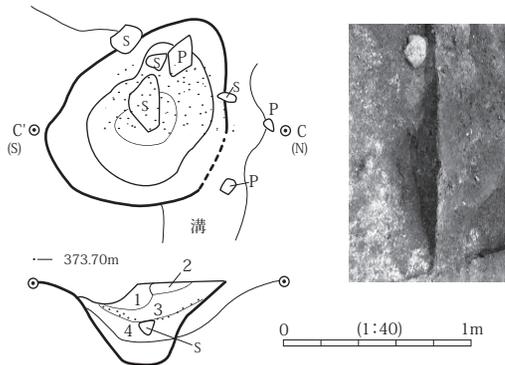
SB 02 完掘状態 (西から)



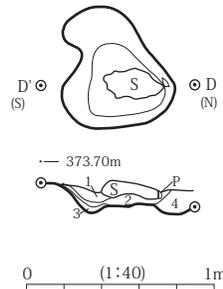
カマド完掘状態



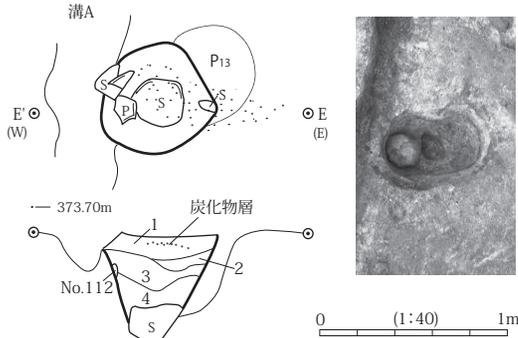
床面中央の焼土



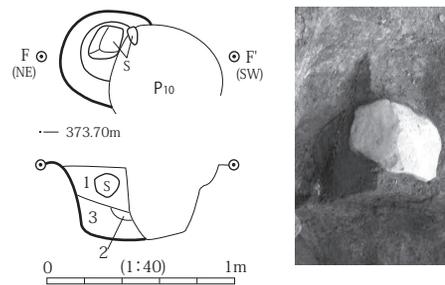
第 410 図 Pit7 土層及び半截状態



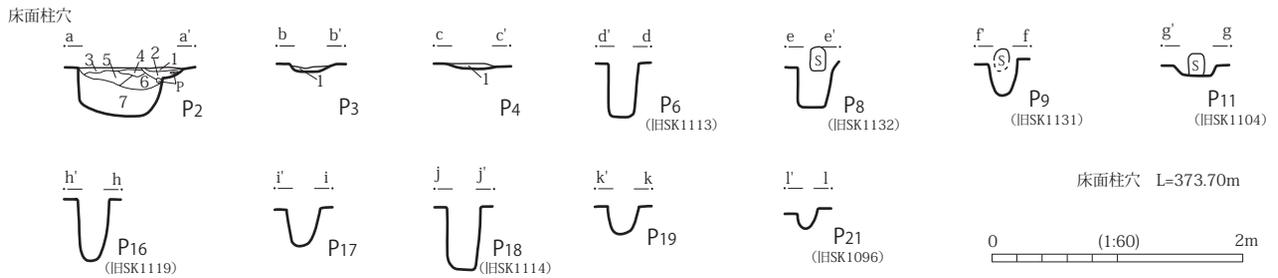
第 413 図 Pit14 土層及び完掘状態



第 411 図 Pit10 土層及び完掘状態



第 412 図 Pit13 土層及び半截状態



第 414 図 床面柱穴断面及び土層



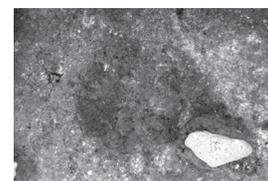
Pit2 半截状態



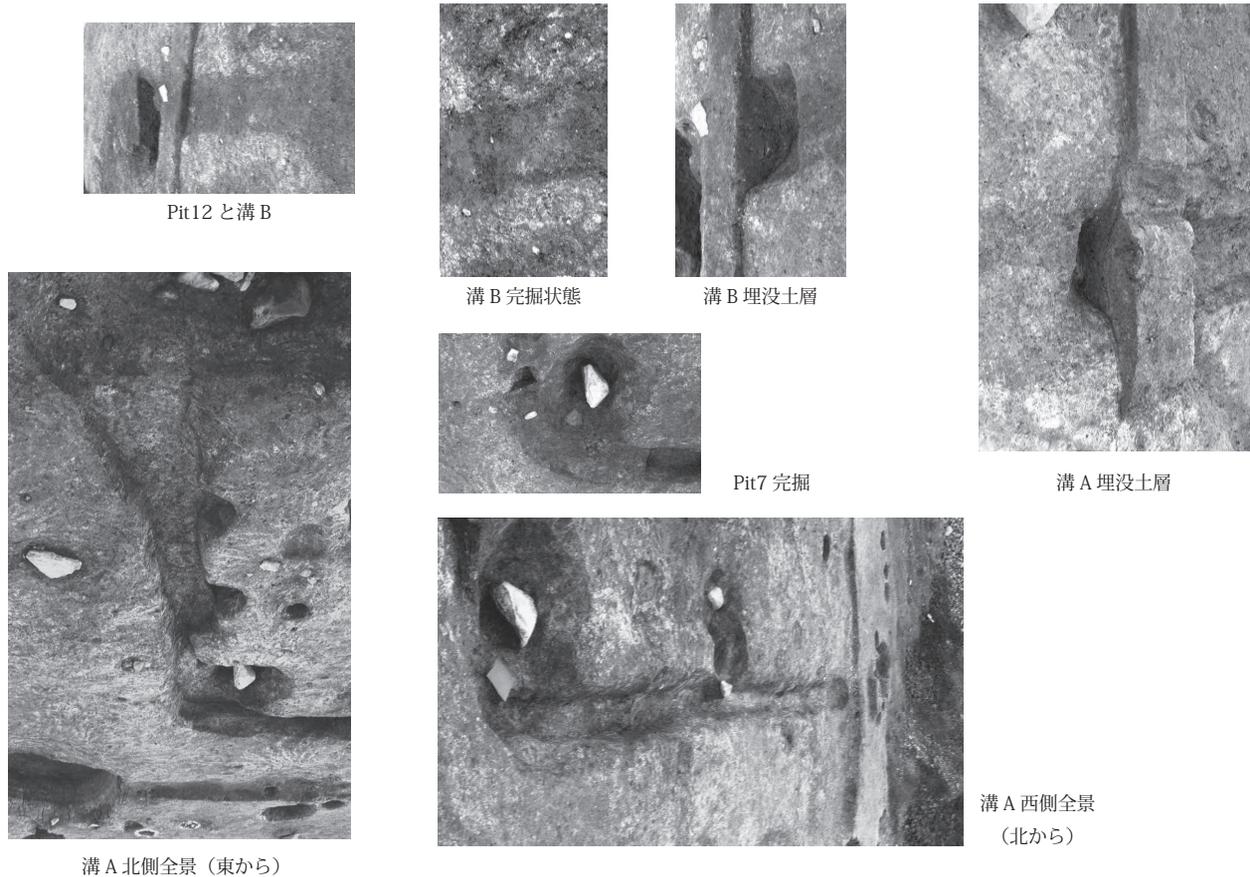
Pit3 半截状態



Pit4 半截状態



Pit5 完掘状態

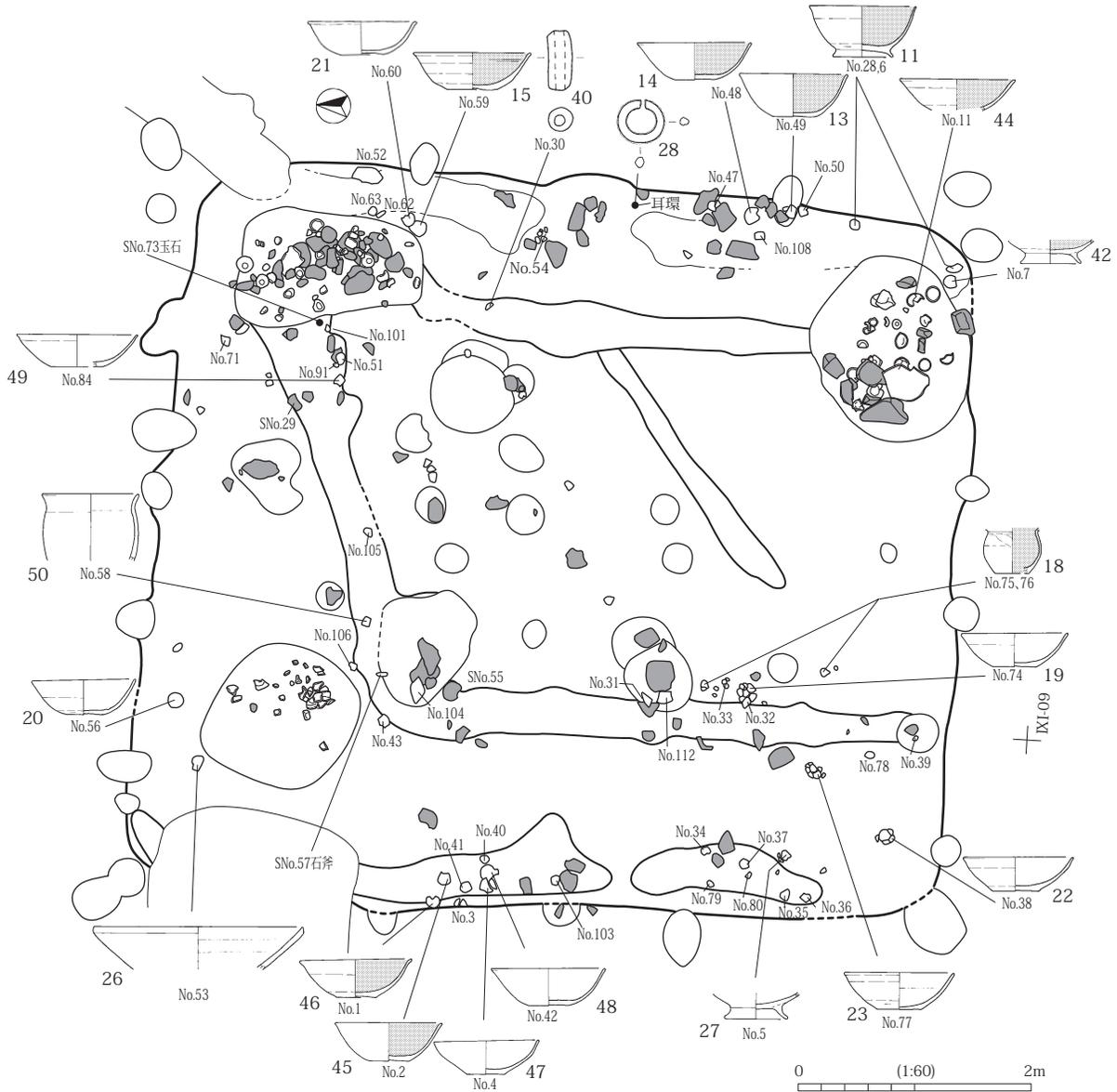


北側壁柱穴： SK 1103 は円形状の柱穴。Pit30 (旧 SK 480) は、平面楕円形状を呈し、断面ロート状の柱穴である。Pit29 (旧 SK 1075) は、他の柱穴に比して、やや浅い。これと重なり合う状態で SK 1102 があり、同一遺構であった可能性も考えられる。埋土中に炭化物と焼土粒子を含み、須恵器甕破片 1 点が出土している。Pit28 (旧 SK 1101) は、深さ 40cm ほどの柱穴。Pit27 (旧 SK 1049) は、深さのあるしっかりした柱穴で、埋土中から黒色土器 A 杯 A 類の破片と須恵器壺の破片が出土している。埋土には炭化物と焼土粒子を含む。Pit26 (旧 SK 979) は、深さ 60cm ほどある柱穴で、埋土中からは土師器杯 A 類、黒色土器 A 杯 A 類の破片が出土している。Pit31 (旧 SK 1120) は、東側壁柱穴列との交点にあり、SD 64 と重複する。切り合いは不明。検出時、20cm ほどの角礫が出土、埋土からは土師器碗底部破片 1 片のほか、土師器の小型甕、黒色土器 A 杯 A 類の破片が出土している。

東側壁柱穴： Pit32 (旧 SK 1142) は楕円状の深い柱穴。埋土中から灰釉陶器碗の破片が出土。Pit33 (旧 SK 1135) は、平面楕円形状で、断面が深いタライ状を呈する。土師器杯 A 類、黒色土器 A 杯 A 類の破片が出土。Pit34 (旧 SK 470) は、埋土に角礫がある柱穴で、南側壁柱穴列との交点にある。

壁周溝： 床面の壁際に周溝施設を確認した。東側で検出したカマドの両脇に一箇所、これと対峙した西側に一箇所である。幅 25cm、深さ 10cm 前後を測る。東側周溝として検出した南東方向へ延びる溝は、本跡コーナーのところで Pit1 と重なる。

床面の溝： 床面で黒褐色土 (10YR2/2) の溝状の落ち込みを確認した。やや大粒の炭化物、焼土粒子、黄褐色砂質土のブロックなどを混入する。幅 30cm、深さ 20cm 弱を測る明瞭な掘削溝である。溝 A は本跡西側を南北方向に走り、Pit7 を回り込むようにして東に曲がって、Pit12 へと重なる。



カマド周辺の遺物出土状態



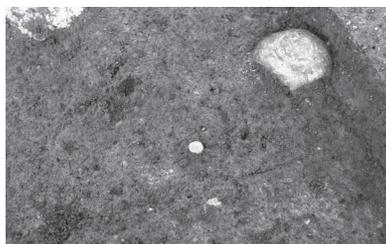
No.74 杯出土状態



西側周溝内の遺物出土状態



耳環出土状態



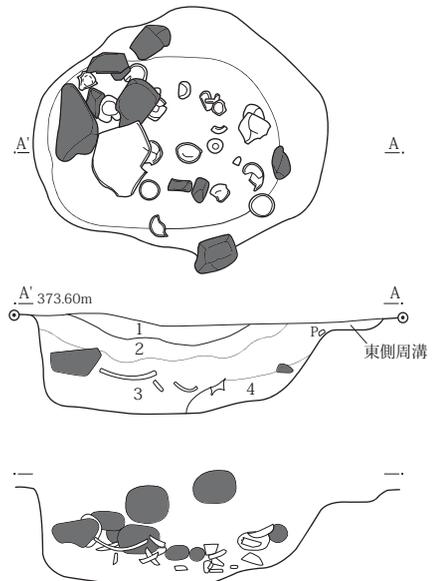
No.73 碁石様玉石出土状態



No.57 磨製石斧出土状態

Pit11 は、この溝の起点のような位置にある。溝Bは Pit1 と重なり、カマド下部を南北方向に走り、Pit12 へと重なるようである。また溝Bとカマドとの重複部分から南西方向に溝Cが斜めに走る。これら一連の3本の溝跡は、Pit12 に集約されて、あたかも SD 64 につながるような状況で検出できた。Pit12 と SD 64、溝BとPit12 には、重複部分を持たないが、全体的な様子から判断して、一連の施設と考えておきたい。

Pit1 : 南東壁コーナーに長径 160cm、短径 130cm、深さ 50cm の不整楕円形状の落ち込みを確認した。径 20cm 大の角礫が数点出土し、15cm 程度埋土を掘り下げると、角礫に混在する状態で土師器類の一括破片資料が出土した。埋土は上層から4層あり、土師器類の出土は3層に該当する。1層から3層までは黒褐色土(10YR3/2)を基調とし、炭化物・焼土粒子・黄褐色砂質ブロックを少量含む。4層は炭化物等の混入物の少ない褐色土(10YR4/6)で、その上面には土師器類が数点まとまって出土した。



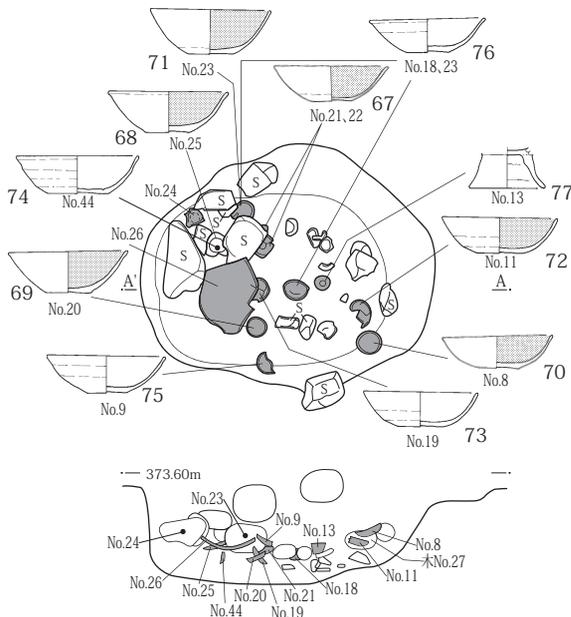
第416図 Pit1 礫出土状態



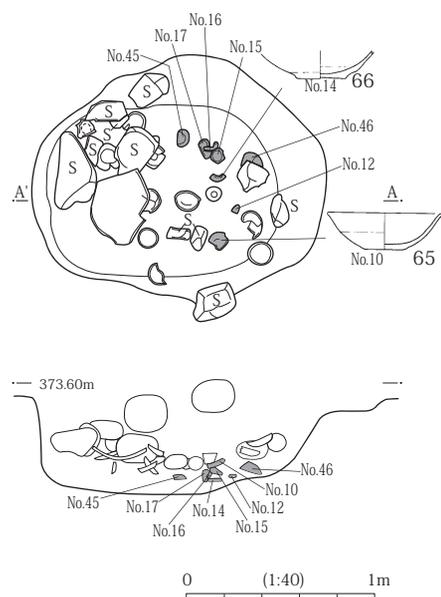
Pit1 検出状態 (西から)



Pit1 遺物出土状態 (南から)



第417図 Pit1 1~3層土器出土状態

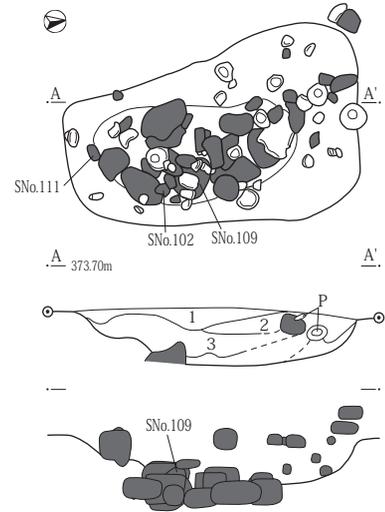


第418図 Pit1 4層土器出土状態

Pit12: 北東壁コーナーに長径 160cm、短径 106cm、深さ 25cm の不整長楕円形状の落ち込みを確認した。Pit1 同様な検出状況であったことから、土坑を想定し調査した。土師器類の一括破片資料は 2 層下部に集中しており、3 層中のもとの区別して取り上げたが、埋土の差異は混入物の含有量に基づく程度で、その一括性を否定するものではないと判断する。

Pit15: 長さ 120cm、深さ 25cm 程の隅丸方形形状の落ち込みで、埋没土は褐色土 (10YR4/4) の単純堆積である。形状・埋没土等から Pit1 及び Pit12 とは区別できる。底面より 10cm ほど上位に土師器碗及び杯類が一括で出土した。
 床下の様子: 掘り方は明瞭に確認でき、軟質な貼り床部分を除去した結果、建物中央部が若干高く、周囲に低い状況を確認した。

床下の柱穴: 床面除去後に検出した柱穴状の落ち込みは 13 基ある。ただし、それら柱穴のすべてが本跡床下に備わった柱穴であるか否かは定かではない。あくまでも床下掘り方の面にて検出できた落ち込みと判断しておく。Pit22 及び Pit23 ほか周辺に確認した 4 基は、カマド構築材としての袖石抜き取り痕跡と判断できる。



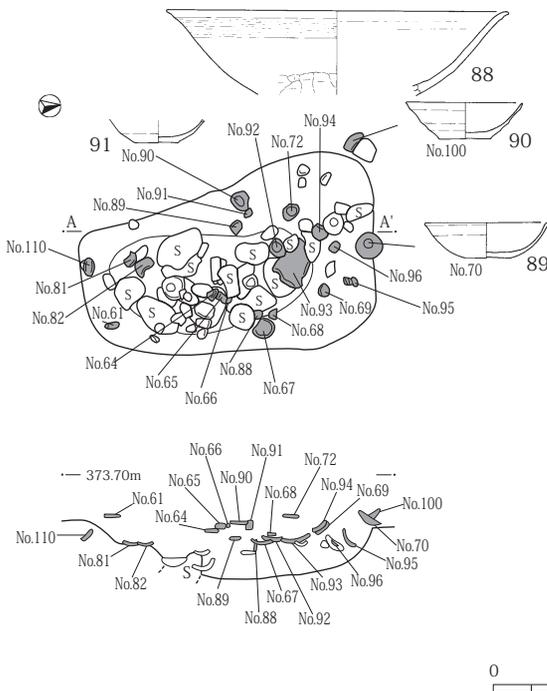
第 419 図 Pit12 礫出土状態



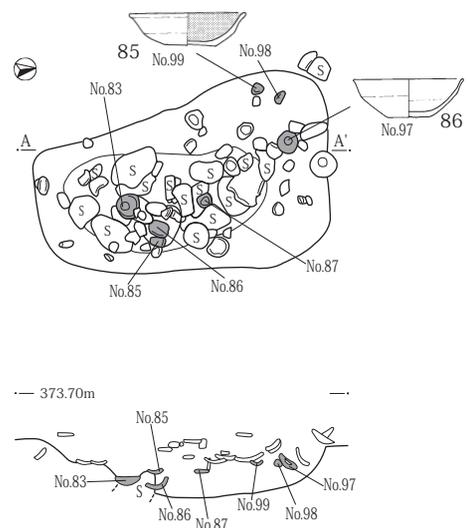
Pit12 埋没土層



Pit12 遺物出土状態 (東から)



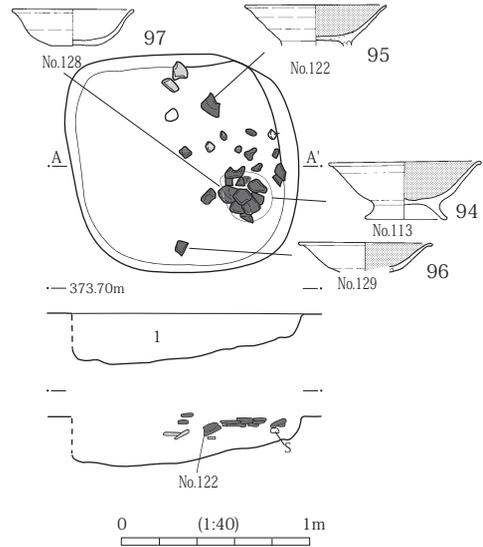
第 420 図 Pit12 1・2 層土器出土状態



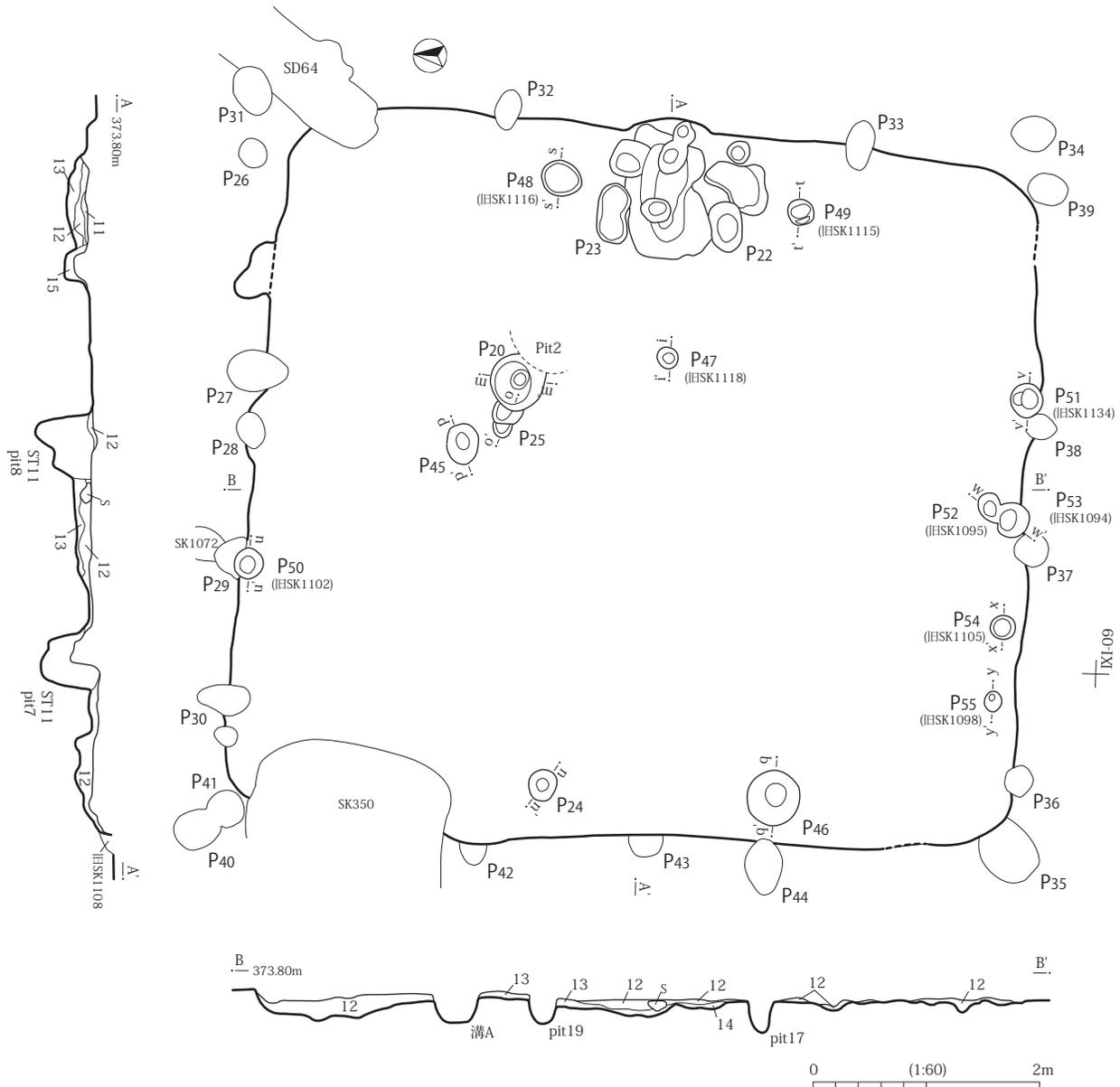
第 421 図 Pit12 3 層土器出土状態

Pit49（旧SK 1115）とPit48（旧SK 1116）もカマドに関連した施設痕であろうか、カマド左右に位置する。Pit20とPit25はPit2に破壊され、掘り方検出面にて確認した。状況から柱穴の作り変え等、何らかの関連ある遺構を想定できる。Pit24及びPit46はカマドと対峙した西側壁際にて確認したが、西側周溝と位置を同じくしており、関連施設なのであろうか。

カマドの様子： 埋土掘り下げ時に東側の壁際に 10cm から 20cm 程の礫が集中して出土した。周辺部には炭化物の分布が認められたことから、カマドを想定し調査した。カマド上部構造は壊れて原形を留めず、礫を伴ったであろう袖部構築物も確認できなかった。燃烧部と考えられる位置に、



第 422 図 Pit15 遺物出土状態



第 423 図 SB 02 掘り方完掘の状態

火床さらには袖部芯材の礫抜き取り痕跡を確認した。埋没土は6層（7～9層各2枚）あり、炭化物を主とした層が2枚、焼土を主とした層が2枚、灰層が1枚存在した。灰掻き出し部位置の直下には、深さ20cm程の掘り込みがあり、焼土粒子を混在する暗褐色土（10YR3/4）の堆積が認められた。また掻き出し部手前は、床面溝Bと重複していたが、明瞭な切り合い関係はつかめなかった。溝Bの上部にカマドが存在したかのように考えたが、同時存在の可能性は十分ある。

出土遺物： 出土土器の内訳は第63表・第64表に示すが、Pit1及びPit12、Pit15から黒色土器A類及び土師器の杯A類が集中して出土した。また、漆の付着した土器8点の出土がある。埋土中から黒色土器杯A類が2点、検出面から黒色土器杯A類3点、溝A下層より土師器杯A1点、カマド部より黒色土器杯A類1点、Pit2から黒色土器杯A類1点がある。検出面の2点とPit2の1点は同一個体と考えられ、推定した個体数は6点である。

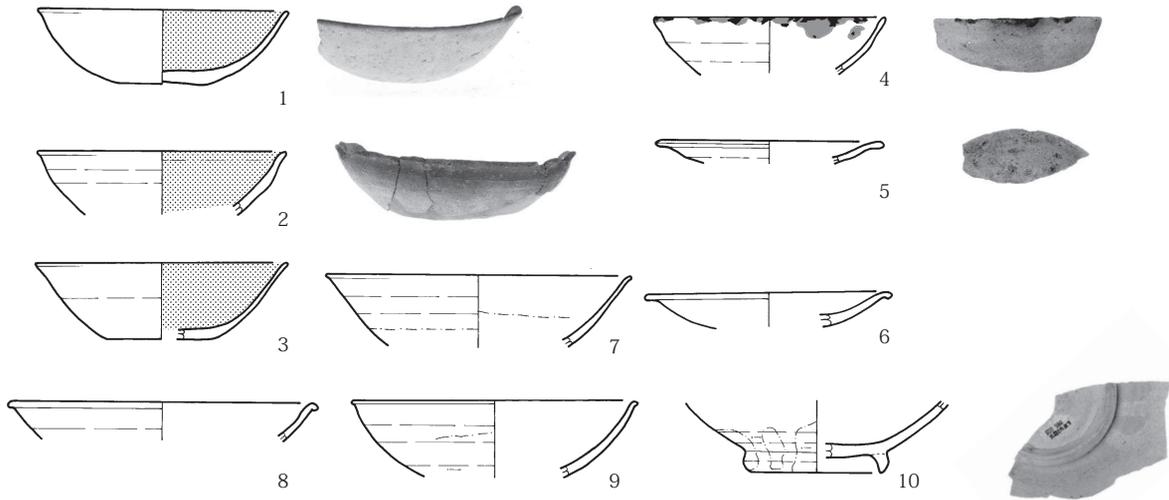
床下 1と2は北東部の溝B外側より出土した。1から3は黒色土器Aの杯A類。1は1/2程度の破片個体で、内外面とも劣化し磨耗激しい。口唇直下の強い回転ナデ調整によって、口縁部は外反状を呈する。外面はナデにより、ロクロ痕をきれいに調整、内面の黒色処理も丁寧である。口径13.0cmを測る。4は溝B直下から出土した土師器杯A類の口縁部破片。直行口縁で、口縁下、回転ナデ整形が施される。また口唇には漆状の付着物が観察できる。5は土師器皿形土器の口縁部の小破片。6は口径13.0cmを測る土師器の皿、口縁部破片。口唇は玉縁状を呈し、胎土中に赤色粒子を多量に混入する。7から10は灰釉陶器の椀。8は北東部溝B外側より出土した口縁部小破片で、口唇玉縁状、釉薬はほとんど剥落してしまっている。9・10は北東部溝B内側出土。10は底部破片。底部外面は丁寧なケズリ整形で、釉薬は漬け掛けか？。高台部は丁寧な成形で三日月状を呈する。この他、鉄滓断片が2点（74.7g）出土している。

遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit2(主柱穴)	IX I-4	円?	A	74	65(77)	39	1層 7.5YR2/2,2層 7.5YR2/3,3層 7.5YR3/3,4層 10YR5/6,5層 10YR4/6	
Pit7(主柱穴)	IX I-3,I-4	楕円?	B-2			44	1層 7.5YR2/3,2層 10YR4/6,3層 7.5YR2/2,4層 10YR3/2	
Pit10(主柱穴)	IX I-3,I-4	円	?	62	57	59	1層 7.5YR2/2,2層 7.5YR2/3,3層 10YR2/2	
Pit3	IX I-4	楕円	D	35	25	6	7.5YR3/3	
Pit4	IX I-4	楕円	D	41	39	4	7.5YR3/3	
Pit5	IX I-4	円	B-2	34	33	10	1層 7.5YR2/2,2層 7.5YR2/3	
Pit6	IX I-4	円	G	25	24	42		
Pit8	IX I-4	円	A	30	27	31		
Pit9	IX I-4	円	G	24	24	37		
Pit11	IX I-3,I-4	円	D	36	33	8		
Pit13	IX I-4	円?	A	52	(30)	40	1層 10YR3/3,2層 3層 10YR3/2	
Pit14	IX I-4	楕円		69	56	15	1層 7.5YR2/3,2層 3層 10YR3/4,4層 10YR3/4	
Pit16	IX I-4	楕円	G	24	19	49		
Pit17	IX I-4	円	G	27	26	22		
Pit18	IX I-4	円	G	25	24	49		
Pit19	IX I-4	楕円	G	29	24	29		
Pit20	IX I-4	円	B-2	51	50	35	1層 7.5YR3/3,2層 7.5YR4/4,3層 10YR3/4	
Pit21	IX I-4	円	G	16	14	14		
Pit22	IX I-4	楕円	D	33	28	16	7.5YR3/4	
Pit23	IX I-4	楕円	A	53	27	9		
Pit24	IX I-3	円	D	28	24	15	7.5YR3/4	
Pit25	IX I-4	楕円	?					
Pit47	IX I-4	円	G	18	17	20		
Pit48	IX I-4	円	G	37	30	36		
Pit49	IX I-4	円	B-2	24	23	34		
Pit50	IX I-4	円	D	27	24	16		
Pit51	IX I-4	円	G	31	28	50		
Pit52	IX I-4	円	G	(28)	20	42		
Pit53	IX I-4	円	G	31	31	33		
Pit54	IX I-4	円	G	22	20	30		
Pit55	IX I-3	楕円	D	17	14	11		

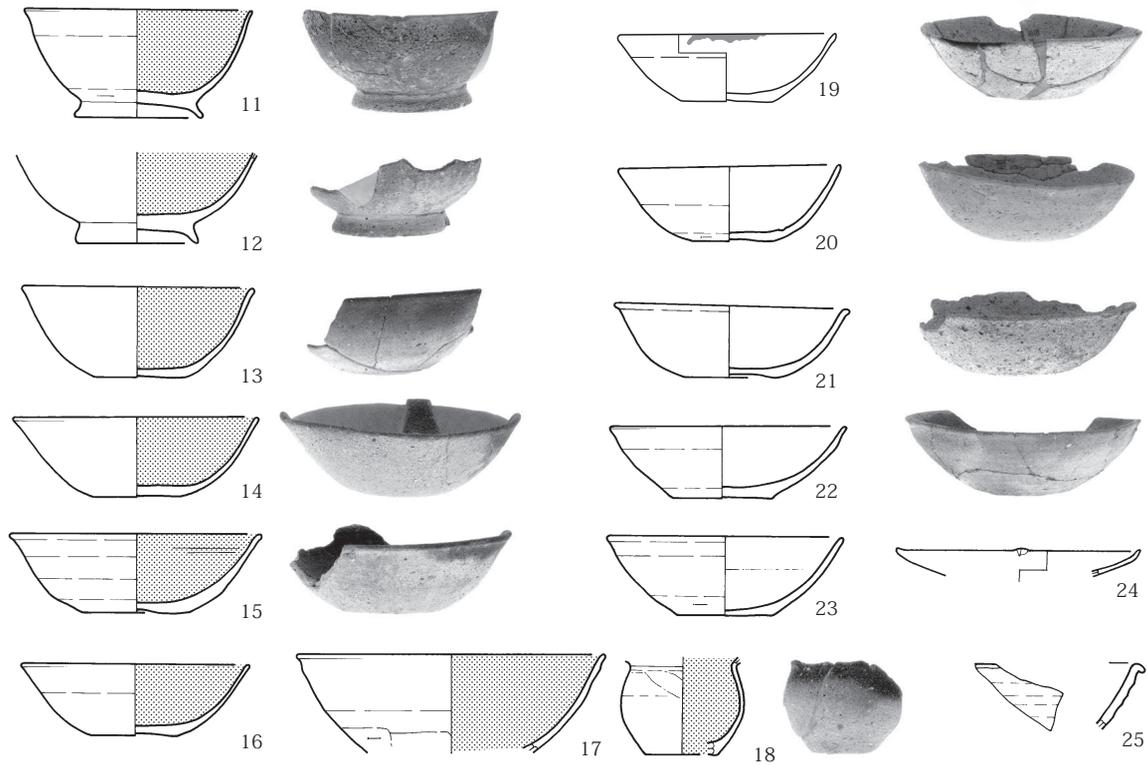
第56表 SB 02 柱穴属性

- 床面 11・12は黒色土器A類の椀形土器。11はNo6とNo28の接合個体。深椀系の土器で1/2個体口径12.0cmと小型の一群で、胴部が緩やかに張りだし、直立した口縁を呈する。内面良好にミガキ調整が施され、高台の貼付け処理も非常に丁寧である。13～17は黒色土器A杯A類。13はNo49に相当する1/3個体。口径12.2cm、底径4.6cm。14はNo48で、内面良好にミガキ調整され、口径12.9cm、底径4.5cmを測る。15はNo59、口縁部に緩やかな稜を持つ、厚みのあるぼってりしたタイプである。口径13.2cm、底径5.6cmを測る。16はNo50の1/3程度の個体。17は底部外面ケズリ整形した杯形土器で、口径16.2cmを測る大形品。18はNo75と76の接合個体。黒色土器Aの小型短頸壺で1/2個体。19から23は土師器杯形土器A類。19・20・22・23は口縁が緩やかに立ちあがり、口唇直口する器形。19はNo74の完形個体で、口径12.0cm、底径5.0cm、器高3.8cmを測る。胎土には赤色粒子をほとんど含まない。口唇部には極めて明瞭な灯明痕状の痕跡がある。20(No56)も19と形態法量ともに、ほぼ同様である。21(No60)・22(No38)は土師器杯A類のほぼ完全な個体。21は口唇部がやや玉縁状に張りだし、胴部緩やかに外湾する形態。胎土中に赤色粒子を混入する。22は非常に硬質感があり、須恵質に近い。口径12.3cmで口縁が緩やかに外反する。口唇直下に強いナデ調整が入る。24・25は灰釉陶器。24は皿の口縁部破片で、残存箇所には輪花状の刻みがある。25は深椀の小破片。29はNo73にあたる水晶製の碁石か。1.5×1.5×1.7cm、2.4gを測る。表裏面とも良好に研磨仕上げされる。
- 床面直上 26はNo53で、土師器盤A類の口縁部破片。口唇外削ぎ状で外面ナデ調整される。27はNo5、土師器椀形土器の底部破片。外反する高台で厚さは0.3cmと極めて薄い。28はNo130の青銅製耳環。
- 埋土 30はチャート材のみがき石か。2.7×2.4×0.8cm、7.3gを測る。31は土師器小型甕形土器の口縁部破片。この他、緑釉陶器椀の破片が2片出土しており、この内の1片は、Pit7(第425図53)と同一個体である。この他、韃の羽口破片1点がある。
- 検出面 32～34は黒色土器A。32は高台部分を欠失した椀形土器。表面はかなり劣化し、剥落部分も多い。33は皿形土器口縁部の破片。34は小型短頸壺の体部破片であろうか。35～38は土師器。35は器高の低い杯形土器A類。36は椀の底部破片。37・38は盤A類。39は素焼きの土錘で、38.1g。この他、焼成粘土塊が2点と韃の羽口破片2点がある。
- 東側周溝 下層
41は土師器杯Aの体部小破片で、幅0.2cmほどの浅い刻書がある。文字は判読できない。
- 中層
42(No7)は黒色土器A椀の底部破片。器壁0.2cm弱と非常に薄い作りで、底部には焼成中の破損であろうか、亀裂が認められる。
- 埋土
43は黒色土器Aの杯A類、器壁が0.4cmほどある厚い形態で、1/3程度の個体。内面は丁寧にナデ整形される。
- 上層
40はNo30、素焼きの土錘で47.9gを測る。44は黒色土器Aの杯形土器口縁部破片。
- 西側周溝 上層
45・46は黒色土器Aの杯A類。45はNo2で、口縁直口して立ち上がる形態。46はNo1、口縁部下の強いナデ整形により胴上半部に稜をもつ形態。47は土師器杯A類のほぼ

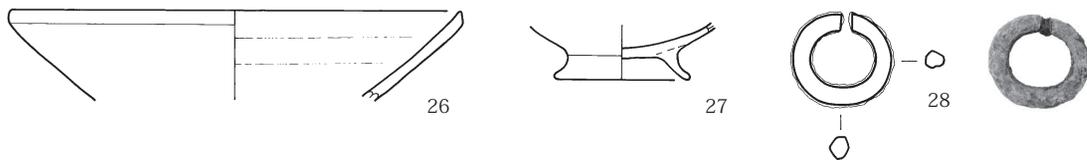
床下



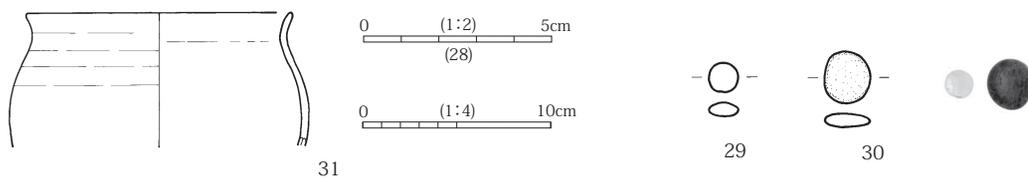
床面



床直



埋土



第424図 SB 02 出土の土器・金属器・石器 1

完形個体。緩やかに外湾して立ち上がる器形で、胎土に赤色粒子を混入する。48 (No42) は灰釉陶器の椀。ロクロのナデ整形。高台は低く、よくナデ仕上げされている。施釉は漬け掛け手法による。

北側周溝 上層

49 は No84 で、土師器杯 A 類の 1/5 破片。50 は No58、土師器小型甕 D 類の口縁部破片。回転ロクロ成形によるナデ調整仕上げ。51 は No57 の定角式磨製石斧で、刃部付近は側面の面取りが弱い。敲打具として利用されたものであろうか。緑色岩製で、8.7cm × 4.5cm × 23cm、149.1g を測る。

支柱穴

Pit7 埋土

52 は黒色土器 A 杯 A 類の口縁部破片。53 は緑釉陶器椀の底部破片。埋土 1 層から同一個体と考えられる破片 1 片がある。54 は No55 にあたり、SB 03 出土の No42 と接合する。多孔質の安山岩材で、直径 18.0cm、厚さ 11.6cm、凹部径約 9.0cm、深さ 9.3cm を測る。この他、焼成を受けた粘土塊 1 点と轆の羽口破片 1 点が出土している。

Pit10 1層・埋土

55 は 1 層出土の灰釉陶器皿の口縁部破片。56 は黒色土器 A の杯 A 類。57 は灰釉陶器の椀、口縁部破片。

柱穴

Pit2 埋土

58 は黒色土器 A 杯 A 類の 1/3 程度の個体。丁寧なロクロ整形で、内面も良好にミガキ調整されている。59 は土師器杯形土器 A 類の 1/4 破片。直行口縁で、口唇直下にはやや強い回転ナデ調整がある。

Pit3 埋土

60 は土師器杯 A 類の口縁部破片。Pit5 の 61 と同形態。

Pit5 埋土

61 は土師器杯 A 類の口縁部破片。口唇部やや外反し、外面にはロクロ調整痕が明瞭に残る。

Pit49 埋土 (旧 SK 1115)

62 は黒色土器 A 杯 A 類の口縁部破片。

Pit11 埋土 (旧 SK 1104)

63 は土師器杯形土器の底部破片。底径 4.0cm を測り、良好な焼成。

Pit31 埋土 (旧 SK 1120)

64 は土師器椀形土器の底部破片。

大形土坑

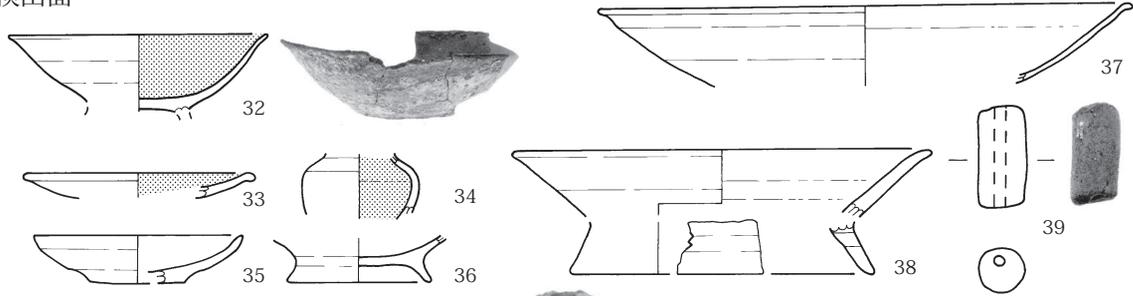
Pit1 4層

65 は No10 で、土師器杯 A 類 1/3 程度の個体。66 は No14 で、土師器杯形土器 A 類の底部破片。底部はヘソ状にやや突出気味に残る形態。

3層

67 から 72 は黒色土器 A の杯 A 類。67 は No21 で、口径 12.0cm、底径 4.0cm、器高 4.3cm を測る。68 も 67 とほぼ同型で、口径 12.4cm、底径 4.5cm、器高 4.3cm を測る。No25 に相当。69 は No20 の完形個体で、底部から朝顔形に開く器形。内面良好に黒色処理し、十字暗文

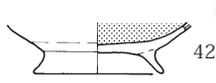
検出面



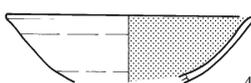
東側周溝内下層



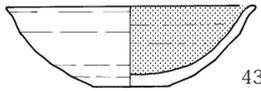
東側周溝内中層



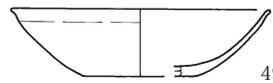
東側周溝内上層



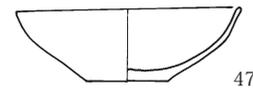
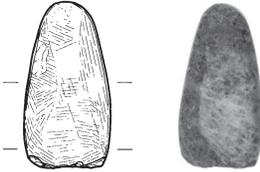
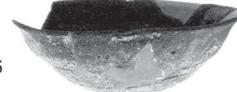
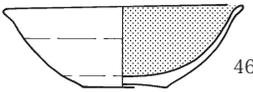
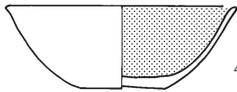
東壁周溝層内埋土



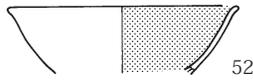
北側周溝内上層



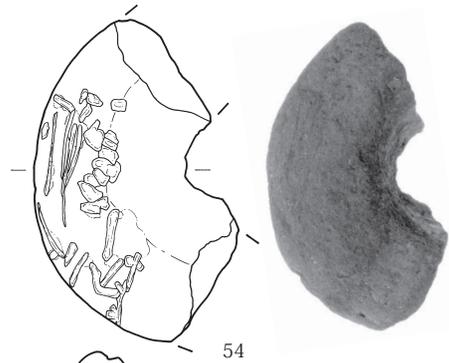
西側周溝内上層



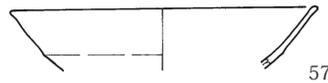
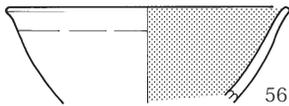
Pit7 埋土



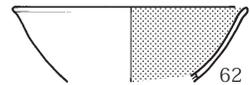
Pit10 1層



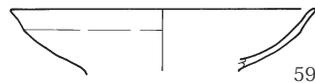
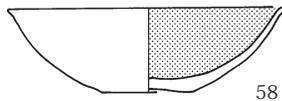
埋土



Pit49 埋土



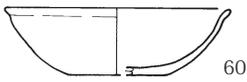
Pit2 埋土



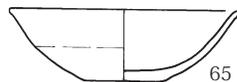
Pit11 埋土



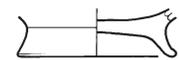
Pit3 埋土



Pit1 4層



Pit31 埋土



Pit5 埋土



第 425 図 SB 02 出土の土器・金属器・石器 2

0 (1:4) 10cm

様ミガキがある。口径 12.4cm、底径 4.5cm、器高 4.3cm を測る。70 は胴部緩やかに張りだし口縁が立ち上がる器形で完形。口径 11.6cm、底径 4.2cm、器高 3.4cm を測る。71 は No23、器高 4.6cm と、やや深い形態である。72 も 70 同様な器形。73 から 76 は土師器杯形土器 A 類。73・75・76 は、いずれも底径が 4.0cm と小さく、緩やかに外湾し立ち上がる直口の器形である。73 は No19 の完形個体。胎土中に赤色粒子を多く混入する。口径 12.4cm、底径 4.0cm、器高 4.0cm を測る。74 は No44 で、他とは法量が異なり、底径 6.2cm を測る広底の形態。口縁直下は強い回転ナデ整形により凹む。口径 12.8cm、器高 4.0cm を測る。75 は No 9、76 は No18 で、内外面とも丁寧にナデ整形されている。77 は No13 にあたり、土師器の盤脚部分。

埋土

78 は土師器碗の底部破片。高台端部は丸く、整形は丁寧である。二次的な被熱により劣化している。79～81 は土師器杯 A 類。79 は口縁が胴部半ばよりやや急に立ち上がる器形で、口径 12.0cm を測る。80 はやや緩やかに外反する完形個体。口径 14.0cm、底径 4.4cm、器高 3.6cm を測り、胎土中には赤色粒子を多量に混入する。81 は口縁部破片。口唇直下、2.5cm 幅で、丁寧なナデ整形が施される。82 の盤 A 類口縁部破片は推定口径 25.0cm を測る。丁寧なロクロ・ナデ整形で、胎土中に赤色粒子を含む。83・84 は灰釉陶器の碗及び皿の口縁部小破片。施釉は漬け掛けであろうか。

Pit12

3層

85 は No83、黒色土器 A 杯 A 類の完形個体である。86 と同様、口縁の立ち上がりが急で、体部に稜をもつ形態。口径 12.3cm、底径は 5.5cm とやや大きい。86 は No97 で、土師器杯形土器 A 類、口径 11.6cm、底径 4.4cm と小振りである。口縁の立ち上がりは、やや急で、胎土中の赤色粒子は微量である。87 は No109 の置き砥石。凝灰岩質の岩石で、14.2 × 11.7 × 8.5cm、重さ 1.370 g を測る。砥面は表と裏と側面にあり、側面には幅 1.6cm を溝状砥面を持つ。この他、軽石 2 点（いずれも欠損例）と磨石 1 点（No111・安山岩材の欠損例）がある。

1～2層

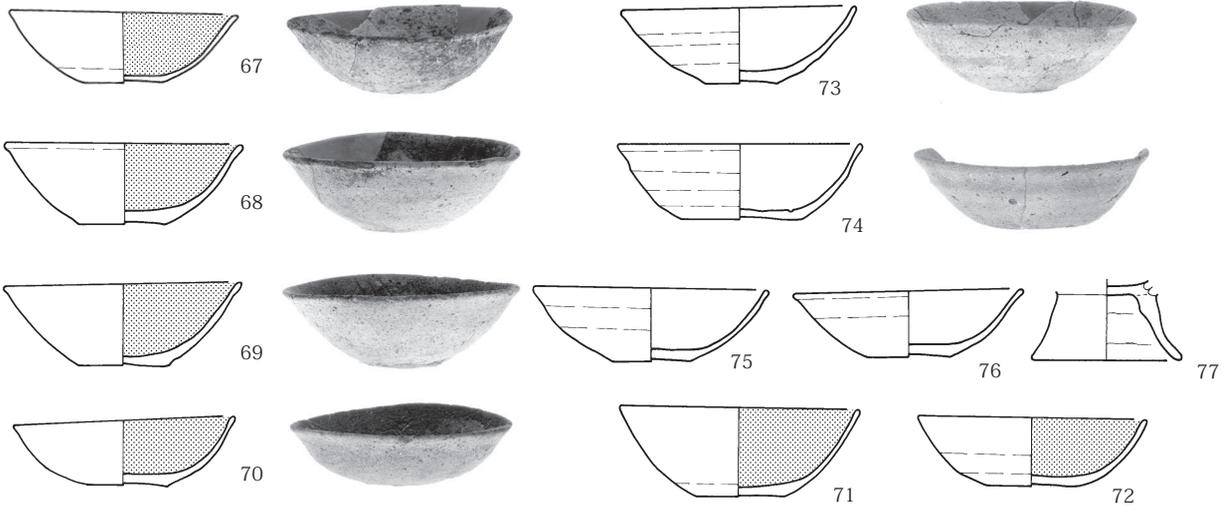
88 は土師器の盤 A 類、口縁部破片。口縁直下はヘラ状工具による回転ナデ整形、脚部付近はヘラ削りで仕上げられている。推定口径 36.0cm を測る。89 から 92 は土師器杯 A 類。89 は、ほぼ完形。口縁は緩やかに立ち上がり、口径 13.0cm、底径 4.6cm、器高 3.7cm を測る。90 (No100)・91 (No90) は 3 層の 86 とほぼ同形態か。92 は鉢形土器の底部破片であろうか、底部付近は横方向のケズリ調整である。93 は灰釉陶器の碗、口縁部破片。小破片だが、施釉はハケ塗りとみられる。この他、焼成を受けた粘土塊 1 点が出土している。

Pit15

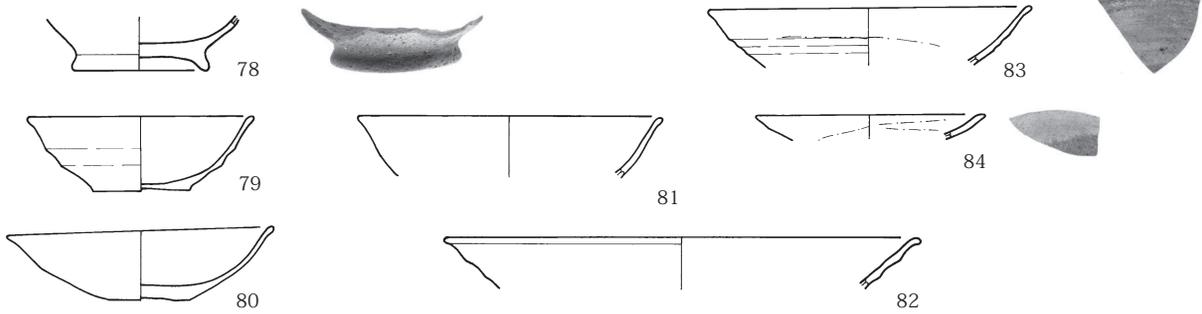
上層

94 と 95 は黒色土器 A 類の碗形土器。94 は口径 16.0cm、高台径 8.6cm を測る大形の完形個体。胴下半がやや張り出す形態で、口縁は朝顔形に開く。内面の黒色処理及び貼付け高台部のナデ調整は丁寧で、口縁直下は強めに指ナデ調整が施される。胎土内に赤色粒子を多量に混入する。95 (No122) は 94 と同型で一回り小振りの碗、1/4 個体。96 は No129、黒色土器 A 類の皿口縁部破片。口唇外反し、内面は良好な黒色処理。97 は No128、土師器杯 A 類 1/4 個体。口縁緩やかに立ち上がり、胴部上半に稜をもつ。底部はナデ整形される。

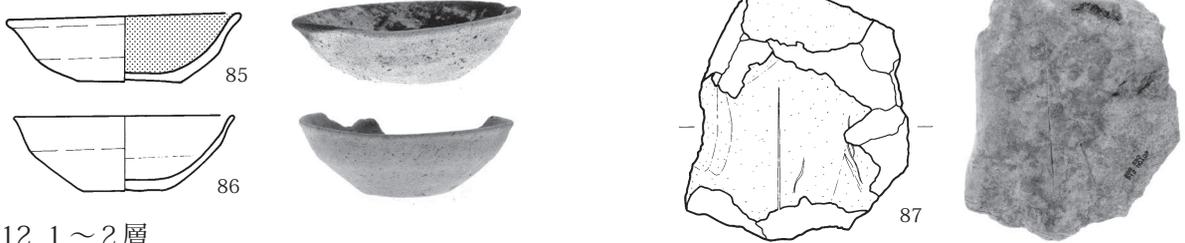
Pit1 3層



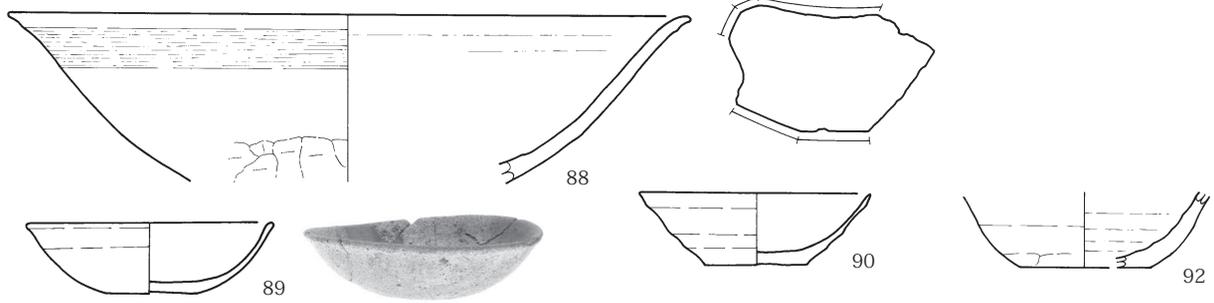
Pit1 埋土



Pit12 3層



Pit12 1~2層



Pit15 上層



第426図 SB 02 出土の土器・金属器・石器 3

0 (1:4) 10cm

第3章 発掘調査の概要

遺構名	土師器										黒色土器A						須恵器				灰釉陶器			数/総重量 (破片/g)
	杯A	椀	盤	盤A	甕	甕B	甕I	小型甕D	杯A	椀	杯A	椀	杯A	蓋	甕	甕A	甕C	甕D	短頸壺	椀	皿	長頸壺A		
Pit 1 埋土	260	13	3	2	18	4	1	3	191	5	6	1	1	17	1	2	1			3	1	1	534/3,431.8	
" 3層	17		1						24	1				1									44/3,112.1	
" 4層	8				1			2	2														13/394.9	

第57表 SB 02 Pit1 出土土器組成

遺構名	土師器													黒色土器A			黒色土器B	須恵器			灰釉陶器			数/総重量 (破片/g)
	杯A	椀	盤	盤A	甕	甕B	甕E	甕I	小型甕D	不明	杯A	椀	甕E	杯?	杯A	甕A	甕D	壺	椀	皿				
Pit12 埋土	5				1						3											9/19.4		
" 1層	70	3	2			2			1	1	62	2							1		2	146/649.4		
" 1・2層	25	5		3	1						14	2		1							1	55/1,732.6		
" 2・3層	59	2			3	2					53	1	1					1	1			123/454.1		
" 3層	29				1			1			14	2						2	3		1	54/837.6		

第58表 SB 02 Pit12 出土土器組成

遺構名	非口クロ土師器		土師器						黒色土器A			須恵器			数/総重量 (破片/g)
	高杯	杯A	椀	皿	甕	甕E	小型甕	杯A	椀	皿	杯B	蓋	甕?	長頸壺	
Pit15 埋土		8	1		5	1	2	6			1	1		1	26/294.2
" 上層	1	9	1	4			4	14	22	1				56/757.7	
" 中層							2	2					1	3/118.8	

第59表 SB 02 Pit15 出土土器組成

時期の判断基準：

床面下の掘り方内出土遺物に、灰釉陶器の椀類が出土していることから、古代6期よりは新しいと判断する。また、床面以上の出土遺物中に、須恵器は極めて少なく、いずれも復元実測できない程度の微小破片であることから、須恵器の食器類がすでに消滅した時期であり、黒色土器椀の法量分化が観られ、杯A類が少量しか伴わないなどの点から、古代9期前後と判断した。



SB 02 出土の土器

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
第 424 図 27	床上	5	土師器	椀	底部	—	—	7.0	4.0	1.6	9期?
第 424 図 26	"	53	土師器	盤	口縁	(13.5)	—	—	—	—	実測保留
	"	3	須恵器	甕 E	口縁	—	—	—	—	—	残存少なく不明
	"	43	黒色土器 A	椀	底部	—	—	6.3	—	—	
	床面	40	黒色土器 A	椀	底部	—	—	(6.4)	(5.0)	—	
第 424 図 20	"	56	土師器	杯 A	完型	11.8	3.9	4.2	—	—	直口 広底 9期~10期
	"	78	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	(4.8)	—	—	
第 424 図 22	"	38	土師器	杯 A	完型	13.0	3.7	5.2	—	—	糸切り残り 外口 広底 8期~10期
	"	106	土師器	杯 A	底部	—	—	5.2	—	—	
第 424 図 23	"	77-A	土師器	杯 A	2/3	(12.4)	4.2	(5.0)	—	—	外口 広底 9期~10期
第 424 図 19	"	74	土師器	杯 A	完型	11.6	3.9	4.4	—	—	灯明痕あり 直口 広底
	"	33-A	黒色土器 A	杯 A	1/10	—	—	—	—	—	直口 広底
	"	33-B	土師器	椀	口縁	—	—	—	—	—	同一個体?
	"	32	土師器	椀	底部	—	—	—	(4.6)	—	同一個体?
第 424 図 18	"	75,76-A	黒色土器 A	小型壺	1/2	—	—	(4.0)	—	—	非口クロ No75, No76 接合
	"	108	黒色土器 A	杯 A?	1/4	(12.0)	—	—	—	—	直口
第 424 図 13	"	49-A	黒色土器 A	杯 A	2/3	(12.2)	4.8	4.6	—	—	直口 広口 8期 9期
第 424 図 16	"	50-A	黒色土器 A	杯 A	2/3	(12.0)	3.8	4.4	—	—	No49, No54 と接合
	"	50-B	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	外口 狭底 8期 9期 1片 1.4g
第 424 図 12	"	47	黒色土器 A	椀	1/4	—	—	6.5	4.7	1.0	10期?
第 424 図 14	"	48	黒色土器 A	杯 A	ほぼ完型	12.9	4.2	4.5	—	—	外口 狭底 8期 9期
第 424 図 11	"	6-A, 28	黒色土器 A	椀	1/2	(12.0)	5.7	6.7	—	—	No6-A, No28 接合 9期 10期
	"	77-B	黒色土器 B	椀?	口縁	—	—	—	—	—	破片 1.3g
	"	77-C	土師器	杯 A	底部	(6.0)	—	—	—	—	破片 7.7g
	"	76-B	土師器	杯 A	底部	—	—	4.0	—	—	21.6g 狭底 糸切りナデ
第 424 図 15	"	59-A	黒色土器 A	杯 A	2/3	(13.2)	4.2	5.6	—	—	外口 広底
第 424 図 21	"	60	土師器	杯 A	2/3	(12.3)	3.8	4.8	—	—	外口 広底
	"	39	須恵器	甕?	体部	—	—	—	—	—	SK1104
	"	54	黒色土器 A	杯 A	1/6	—	—	—	—	—	破片 17点 33.0g
	"	49-B	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 3.3g
	"	71	黒色土器 A	杯 A	1/4	(12.0)	—	—	—	—	
第 426 図 72	Pit1 3層	11-A	黒色土器 A	杯 A	2/3	(12.0)	3.6	4.8	—	—	直口 広底 No6-B と接合
第 426 図 71	"	23-A	黒色土器 A	杯 A	2/3	(12.6)	4.6	4.6	—	—	直口 狭底
第 426 図 76	"	18-A	土師器	杯 A	2/3	12.1	3.5	4.4	—	—	外口 狭底 No23-B 一括中と接合
第 426 図 68	"	25-A	黒色土器 A	杯 A	完型	12.4	4.3	4.5	—	—	外口 狭底 No44 の上
第 426 図 74	"	44-A	土師器	杯 A	2/3	12.8	4.0	6.2	—	—	外口 広底 No25 の下
第 426 図 70	"	8	黒色土器 A	杯 A	完型	11.6	3.4	4.2	—	—	外口 狭底
第 426 図 69	"	20	黒色土器 A	杯 A	完型	12.6	4.3	4.6	—	—	外口 狭底 暗文(十字)
第 426 図 73	"	19	土師器	杯 A	完型	12.4	4.0	4.0	—	—	直口 狭底
第 426 図 67	"	21-A	黒色土器 A	杯 A	完型	12.0	4.3	4.0	—	—	外口 狭底 No22 と接合
	"	24	黒色土器 A	椀	2/3	—	—	—	(4.8)	—	糸切り痕
第 426 図 75	"	9	土師器	杯 A	2/3	12.3	3.8	4.0	—	—	外口 狭底
第 426 図 77	"	13	土師器	盤	脚部	—	—	8.0	—	—	
	"	26	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	
	"	21-B	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	No 21 より抽出
	"	25-B	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	3.3g
	"	25-C	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	1.6g
	"	44-B	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	0.8g
	Pit1 4層	45-A	土師器	杯 A	底部	—	—	4.5	—	—	糸切りナデ
	"	45-B	土師器	小型甕 D	口縁	重さ 3.6g	—	—	—	—	
	"	16	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	5.4	—	—	広底 No17 と接合
第 425 図 66	"	14	土師器	杯 A	底部	—	—	5.2	—	—	広底 底部糸切り No15 と接合
	"	46	土師器	小型甕 D	底部	—	—	6.1	—	—	ロクロ目
第 425 図 65	"	10	土師器	杯 A	1/3	(12.0)	3.8	4.2	—	—	直口 狭底
	"	12	土師器	杯 A	底部	—	—	—	—	—	
	"	45-C	土師器	甕	体部	—	—	—	—	—	1/2.7g
	Pit7 下層	104	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	Pit10 上層	31	須恵器	甕 C	肩部	—	—	—	—	—	破片
	" 中層	112	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	Pit12 1・2層	61-A	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 (2.6g)
	"	61-B	土師器	杯?	体部	—	—	—	—	—	破片 古代 1 期相当 (6.9g)
	"	64	土師器	杯 A	底部	—	—	(4.0)	—	—	破片 (20g)
	"	66	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 (5.6g)
	"	67	黒色土器 A	椀	底部	—	—	8.0	5.6	0.6	糸切り ナデ
	"	68	土師器	杯 A	口縁	(12.0)	—	—	—	—	直口 破片 (6.0g)
	"	69-A	黒色土器 A	杯 A	口縁	(13.0)	—	—	—	—	直口 破片 (10.6g)
	"	69-B	土師器	杯 A	底部	—	—	(5.0)	—	—	手持ちへら? 破片 (28.8g)
第 426 図 89	"	70-A	土師器	杯 A	完型	13.0	3.7	4.6	—	—	外口 狭底
	"	70-B	黒色土器 B	杯?	口縁	—	—	—	—	—	破片 (1.4g)
	"	70-C	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	1/1.6g
	"	72	黒色土器 A	椀	1/5	—	—	5.8	—	—	
	"	81-A	土師器	椀	体部	—	—	—	—	—	破片 (20.9g)
	"	81-B	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 (2.7g)
	"	82-A	土師器	椀	1/5	(12.5)	—	—	—	—	No81 と同一片
	"	82-B	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片 (2.4g)
	"	88	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	89	土師器	杯 A	口縁	(12.0)	—	—	—	—	破片
第 426 図 91	"	90	土師器	杯 A	1/4	—	—	4.8	—	—	狭底 糸切り

第 60 表 SB 02 出土土器属性 1

第3章 発掘調査の概要

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
	"	92-A	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	4.6	—	—	破片 狭底 暗文 糸切りナデ (35.7g)
	"	92-B	須恵器	壺	体部	—	—	—	—	—	破片 (11.4g)
第 426 図 88	"	94	土師器	壺 A	口縁	(36.0)	—	—	—	—	破片
	"	95	灰釉陶器	皿	1/2	13.2	2.7	7.6	6.6	0.5	墨書「平」? 大原 2
	"	96	土師器	杯 A	口縁	(12.0)	—	—	—	—	破片
第 426 図 90	"	100-A	土師器	杯 A	2/3	12.2	3.8	5.4	—	—	直口 広底
	"	100-B	土師器	椀	底部	(6.0)	—	—	—	—	破片 (3.4g) No72 と同一か?
	"	100-C	土師器	甕	体部	—	—	—	—	—	1/3.8g
	"	65	土師器	杯 A	口縁	(13.0)	—	—	—	—	破片
	"	93	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	110	土師器	椀	底部	—	—	(8.0)	6.0	1.0	破片 糸切り 1/2 以上
	"	91	黒色土器 A	杯 A	口縁	(12.0)	—	—	—	—	
	Pit12 3 層	87	黒色土器	椀	底部	—	—	4.0	—	—	
第 426 図 86	"	97	土師器	杯 A	ほぼ完型	11.6	3.9	4.4	—	—	外口 狭底 糸切り
	"	98	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
	"	99	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
第 426 図 85	"	83	黒色土器 A	杯 A	完型	12.3	3.4	5.5	—	—	外口 広底 糸切り ヘラ?
	"	85	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	86	須恵器	甕 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	Pit15 上層	107	土師器	杯 A	底部	—	—	(5.6)	—	—	
第 426 図 94	"	113-A	黒色土器 A	椀	完型	16.0	5.9	8.6	4.0	(1.7)	
	"	114-A	土師器	杯 A	底部	(12.4)	—	(7.3)	—	—	破片
	"	115	黒色土器 A	杯 A	口縁	(10.7)	—	—	—	—	
	"	116-A	土師器	杯 A	底部	—	—	—	5.0	—	
	"	118	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
	"	119	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	
	"	120	土師器	皿	1/2	(13.0)	2.0	(5.0)	—	—	
	"	121	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	
第 426 図 95	"	122	黒色土器 A	椀	2/3	(15.0)	(4.4)	(7.4)	—	—	
	"	126	非口クロ 土師器	高杯	脚部	—	—	—	—	—	
	"	127-A	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	(4.8)	—	—	
第 426 図 97	"	128	土師器	杯 A	1/4	(12.8)	3.8	(4.8)	—	—	
第 426 図 96	"	129	黒色土器 A	皿	口縁	14.0	—	—	—	—	
	"	113-B	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片
	"	113-C	土師器	小型甕	口縁	16.6	—	—	—	—	破片
	"	113-D	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
	"	114-B	土師器	椀	口縁	—	—	—	—	—	破片
	"	116-B	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	127-B	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	—	—	—	
	Pit15 中層	123	須恵器	甕?	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	124	黒色土器 A	杯 A	口縁	(12.7)	—	—	—	—	
	"	125	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	
	西側周溝上層	34	土師器	杯 A	底部	—	—	(6.0)	—	—	
	"	37	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	4.5	—	—	
	"	35	黒色土器 A	椀	底部	—	—	—	(5.0)	—	
	"	36	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	4.2	—	—	内面に炭化物付着
第 425 図 45	"	2	黒色土器 A	杯 A	2/3	(12.0)	4.3	4.6	—	—	直口 広底 8期~9期
	"	41-A	黒色土器 A	椀	底部	—	—	(7.4)	5.6	—	
	"	41-B	黒色土器 A	椀	体部	—	—	—	—	—	1片 1.0g
第 425 図 47	"	4	土師器	杯 A	完形	11.7	3.8	4.3	—	—	直口 狭底
第 425 図 48	"	42	灰釉陶器	小椀	2/3	(14.2)	4.2	7.0	—	—	
	"	103	土師器	甕 B	底部	—	—	7.2	—	—	実測保留
第 425 図 46	"	1	黒色土器 A	杯 A	完形	12.6	4.2	4.4	—	—	外口 狭底 8期~9期
	西側周溝下層	79	土師器	杯 A	底部	—	—	(4.8)	—	—	
	"	80	黒色土器 A	椀	底部	—	—	(5.0)	(4.0)	—	
第 425 図 40	東側周溝上層	30	土錘	—	完形	長さ 6.6	巾 2.8	重さ 47.5	外直径 2.7	内直径 1.3	
第 425 図 44	"	11-B	黒色土器 A	杯 A	1/4	(13.0)	—	—	—	—	外口 暗文
第 425 図 42	東側周溝中層	7	黒色土器 A	椀	底部	—	—	6.8	4.7	1.3	
	東側周溝上層	52	須恵器	甕 A	肩部	—	—	—	—	—	板目
	"	63	黒色土器 A	椀	底部	—	—	6.5	4.6	0.8	高台稍外
	東側周溝下層	62-A	土師器	椀	高台	—	—	—	—	1.4	
	"	62-B	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	(4.0)	—	—	広底
	溝 A 埋土	51	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	6.0	—	—	椀?
	溝 A 上層	101	土師器	杯 A	口縁	(12.0)	—	—	—	—	灯明痕? 直口 広底
第 425 図 49	"	84-A	土師器	杯 A	1/5	(13.8)	3.6	6.0	—	—	
	"	84-B	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 1.6g
	溝 A 下層	105	黒色土器 A	椀	底部	—	—	7.0	4.5	1.3	糸切り 1/2 以上
第 425 図 50	"	58	土師器	小型甕 D	口縁	(11.0)	—	—	—	—	カキ目なし

第 61 表 SB 02 出土土器属性 2

遺構名	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
SB 02	埋土	割材	板目	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	10.7	9.4	7.3	炭化
SB 02	埋土	割材	追柱目	バラ科ナシ亜科	5.3	3.7	0.8	
SB 02	溝 B 外側		不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節	2.9	2.1	1.4	

第 62 表 SB 02 出土木製品属性

遺構名	非口ク 高杯	土師器													黒色土器 A														
		杯 A	椀	血	鉢	蓋	盤	甕	甕 A	甕 B	甕 D	甕 E	甕 I	小型甕	小型甕 D	不明	杯 A	椀	血	鉢	盤	盤 B	甕	甕 E	小型甕 D	壺	短頸壺	小型壺	
SB 02 検出面		722	30	1			28	46	46	14	14	2	1	4	2	341	153				1	1							
// 埋土		685	18		6	1	17	137	8	12	1	2	2		6	514	33					2	4			1	1		
// 埋土トレンチ																1													
// 1層		68					1	6						2		31	3												
// 2層								1								13								2					
// 3層		7	1					3								8		1											
// 4層		15										1				7	2												
// 5層		19						1								7													
// 6層		5														9													
// 7・8層		2														1													
// 9層		4														7													
(カマド燃焼部上部)																													
// 床上							8		1								2												
// 床面	1	524	29		1		6	24	4	12				5		519	31	1	1			4						2	
// 床面焼土 (Pit12 検)		1						1								6													
// 床面中央部焼土		8						1								8													
// 焼土		3														7													
// 焼土 5		15	1					1								4													
// 床下	1	242	9	3			10	19	1	2		1	2		3	117	1												
カマド		25	3					5						1		17	3		1										
カマド掘り方		2	1													6													
Pit2 埋土		76	1					4								49	3												
Pit3 埋土		2														1													
Pit4 埋土		1														1													
Pit5 埋土	1	21	2				3			1		2				11													
// 炭層下		3										1																	
Pit7 埋土		28	4					8								16	1												
// 1~3層		12	2					6				1			1	14													
// 4層		9	2					2		1						9	1												
Pit10 埋土		14	2													7													
// 1層		7						1		1						3													
// 2・3層		14								1						11													
Pit11		4	1																										
Pit13 埋土		5														9													
Pit14 埋土		7	1					1								6	1												
Pit17 床下								1																					
Pit19 埋土																													
Pit20 埋土		9						2								1													
Pit22 埋土		3														1													
Pit23 埋土		1														2													
Pit25 埋土		1						1								3													
Pit26 埋土		4						1		1						2	1												
Pit27 埋土								2								3													
Pit29 埋土																													
Pit31 埋土		3	1					5					1			6													
Pit32 埋土		9						1		1						2													
Pit33 埋土		3						1					1			5													
Pit35 埋土		2						4								2													
Pit36 埋土		6														1													
Pit37 埋土		1																											
Pit38 埋土										2		1				2	2												
Pit39 埋土										1																			
Pit40 埋土																3													
Pit42 埋土		9					1	5								4													
Pit43 埋土		1						1																					
Pit44 埋土		2						1								2													
Pit48 埋土		2											1			2													
Pit49 埋土		4					1	1								2													
Pit51 埋土																3													
Pit52 埋土		5														2													
Pit54 埋土																													
SK 1073			1											2		1													
SK 1073・SK 1074								1																					
SK 1103		1																											
周溝部																4													
// 北壁西半部		4						1																					
西側周溝 上層		6								1						14	3												
// 下層		1														1													
東側周溝 上層																1	1												
// 中層																	1												
// 下層		1																											
東側周溝部 (北半)		18	1							1				6		17													
溝 A 埋土			</																										

3号竪穴式建物跡（第427図～第434図）

時期： 9世紀終末～10世紀初頭を推定（古代8期終末ないしは9期比定）

位置： IX D - 19, 24（③区） 平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 10.4 m²（南北 334cm × 東西 326cm）、残存深度 10cm

主軸方向： E - 2° - N カマド位置： 東壁の中央部か

壁立ち上がり： 67度程度の傾斜 柱 穴： 1本あり

埋土堆積： 1層黒褐色土（10YR2/2）の単純堆積。炭化物及び焼土粒子、細礫を多く含む。

遺構重複： 調査所見によれば、SD 58 に北東隅の一部を切られ、SD 61 及び SD 77 を本建物が破壊している。SD 58 は検出面での確認であり、SD 61 と SD 77 は床面調査時の発見である。所見では、SD 61 埋没土との区別は不明瞭で判然としない。

検出経過： 黄橙色砂質粘土（10YR5/8）上面にて、遺構確認調査中に方形に広がる黒褐色土（10YR2/2）の落ち込みを認めた。規模がやや小さいが、その形状から住居跡を想定し、調査に入る。結果、明瞭なカマド跡、硬緻な床面は確認できなかったが、東壁際で掘り方を伴う焼土跡と炭化物の分布を確認した。カマド残骸の可能性を考えることもできる。遺物は、この焼土跡の両脇にて発見した2基の土坑から多出している。

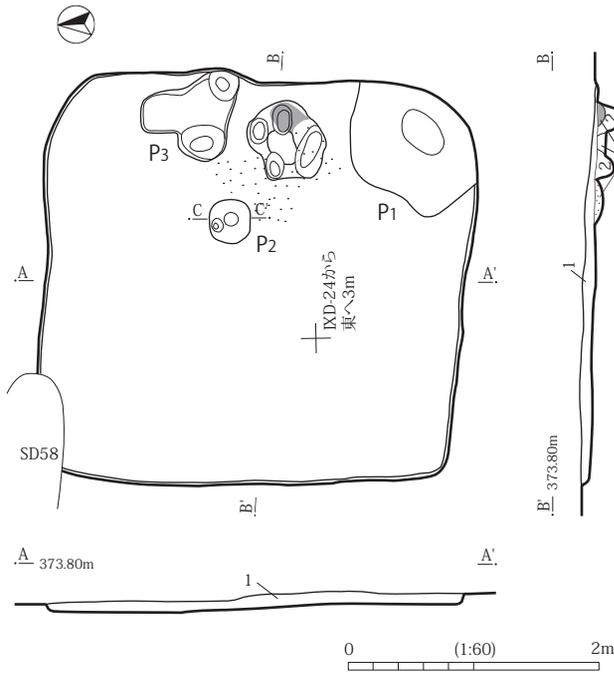
遺物出土状況： 埋土中からは、土師器及び黒色土器 A 類の杯類を主体とした小破片が多量に出土した。床面直上の遺物は、破片が中心ではあるが、埋土に比して数量的に限定されている。第 428 図 No1（第 434 図の 1）と No8（第 434 図の 2）の土師器に伴ない No6（第 434 図の 3）の黒色土器杯 A 類がある。カマド残骸の検出面からは、口径のやや大きな土師器杯 A 類第 428 図 No20（第 434 図の 4）が出土している。床面下の掘り方が確認されていないことから、ここで提示する床下遺物は、床面構築時の混入か、床面出土遺物と同等に扱うべき資料と考えられる。Pit1 では床面の精査レベルから、土器及び礫が出土した。土坑内を掘り下げたところ、ほぼ一括状態で土器が多量に出土したが、これを便宜的に上層から下層に分離して取り上げた。第 429 図～第 431 図では、その過程に基づいた作図を示したが、それらの出土土器に一括性を疑う余地はないものと考えられる。出土土器は、土師器杯類を中心に、黒色土器 A 類の椀と杯類である。Pit2 では、土師器と黒色土器 A の杯類小破片が埋土中から出土している。Pit3 からは、第 433 図 No7（第 434 図の 20・21）の土師器椀と黒色土器 A 類の椀が共伴して出土し、小破片ではあるが椀類が主体を占めている点、器種に偏りがある。

床面の様子： 掘り方はなく、地山掘削面を床面とする。

カマドの様子： カマド掘り方の痕跡と考えられる土坑と、その上面に焼土及び炭化物の分布を確認した。土坑底面は凹凸が激しく、石の抜き取り痕跡とも看取できる長さ 20cm 程度の凹みが認められた（第 427 図）。

柱穴の様子： Pit1 はカマドの右側（南）に掘られた長軸 120cm 程度の土坑である。浅い凹面状の断面を呈し、坑内からは多くの土器と礫が投棄されたような状態で出土している。Pit3 は Pit1 同様にカマド脇（左側・北）に掘られた土坑で、長軸 90cm を測り、底面には 20cm ほどの穴が認められる。Pit2 はカマド手前に掘られた円形状の土坑で、掘り込みが 9.0cm と浅いことから、柱穴とは即断できない。他の 2 基の土坑とは区別すべきと考え、ここでは柱穴状の土坑としておく。

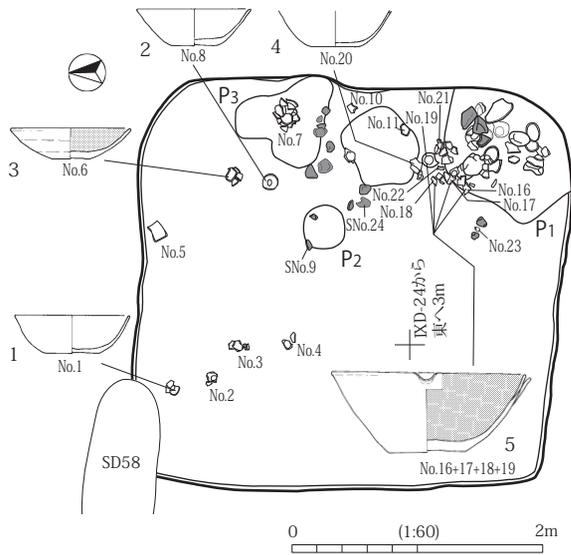
出土遺物： 埋土中から遺物が多量に出土している。土師器及び黒色土器を主体とし、須恵器は杯 A 類と甕形土器の破片である。それらの内訳は、第 65 表に示す。



第 427 図 SB 03 床面完掘の状態



完掘状態（西から）



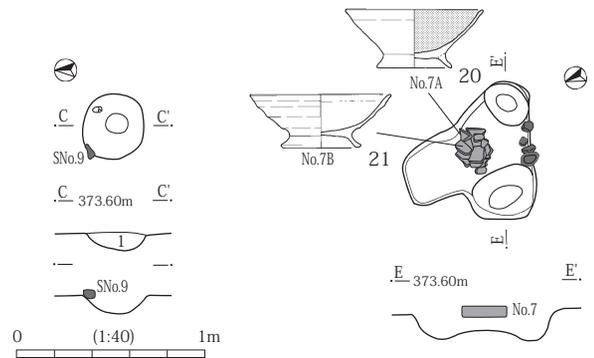
第 428 図 SB 03 遺物出土の状態



遺物出土状態（西から）



No8 杯出土状態



第 433 図 Pit3 遺物出土状態



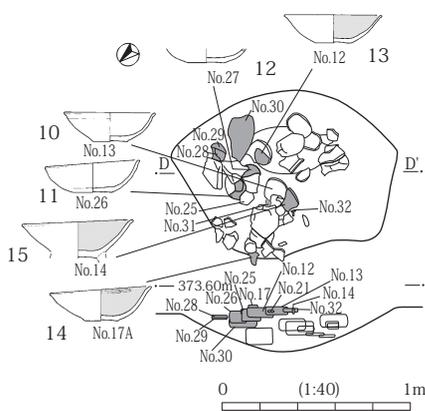
第 432 図 Pit2 完掘及び土層

床面 1はNo1の土師器杯形土器A類の1/4ないしは底部破片である。胎土中に赤色粒子を多く含む。口径12.0cm、底径5.0cmを測る。2も1と同様な土師器杯A類で、完形品。第428図No8に相当。3はNo6で黒色土器杯A類の2/3程度の残存個体。口径12.0cm、糸切り離して底径4.0cm未満と小さい。胎土中に赤色粒子を混入し、口縁外面を1.0cm幅でナデ整形する。

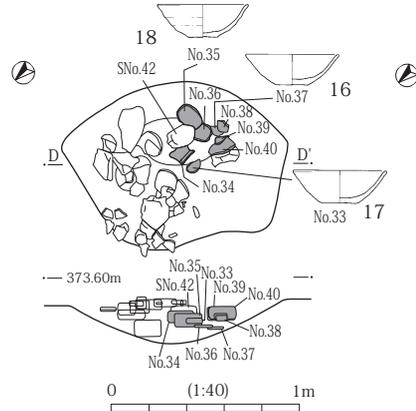
埋土上層 5はNo19に相当し、黒色土器Aの片口鉢形土器である。口縁やや外反し、外面1.0cm程度のナデ整形が認められ、内面も良好にナデ整形される。6は黒色土器B類の短頸壺口縁部。

埋土 7は先行トレンチ内にて出土した灰釉陶器椀形土器の口縁部破片。漬け掛け手法による施釉で、口唇部玉縁状を呈する。8は床下と埋土中出土の破片2点が接合した灰釉陶器椀の底部破片である。内面全体には明瞭な朱墨痕跡が認められる。この他、先行トレンチ内から出土した黒色土器B類椀形土器ないしは皿形土器体部破片があり、外面に「八千」の刻書がある。

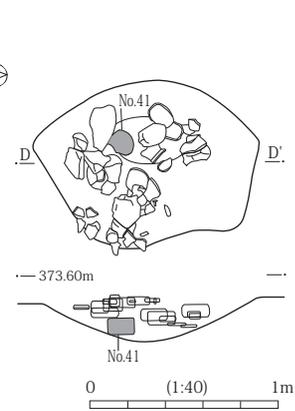
カマド検出面 4はNo20の土師器杯形土器A類の1/3個体である。胎土中に赤色粒子を含み、口径13.0cm程度、底径5.0cmを測り、床面の出土資料に比してやや大形である。この他、図示してないが、No24の閃緑岩材の敲石1/2程度欠損例1点がある。



第429図 Pit1 上層土器出土状態



第430図 中層土器出土状態



第431図 下層土器出土状態



SB 03 出土の土器

Pit1 上層

10は第429図No13の土師器杯形土器A類の2/3個体。口径12.0cmを測る。床面出土の1と同様な規格であるが、口縁外面直下に幅0.6cm程度の強い横線がある。11は第429図No26の土師器杯A類の完形個体。歪みがあるが口径12.0cm規格と考えられる。12は第429図No27の土師器杯A類底部破片である。底部径5.6cmと広めの底で、床面出土の1と同様な法量であろうか、他の一括個体と違い体部上半を大きく欠失し、破片資料もない。13と14は第429図No12とNo17Aに相当する黒色土器Aの杯A類2/3個体である。ともに歪みがあるが、口径12.0cm規格と判断でき、口縁部緩く外反する形態である。15は第429図No14の黒色土器A類の椀2/3個体である。高台部分を欠失するが、底部から若干の脹らみをもって口縁が立ち上がる器形で、外面は良好にナデ整形される。

中層

16は第430図No33、17はNo37にあたり、口径12.0cmを測る。10と同一規格の土師器杯A類と考えられる。18は第430図No35で、口径12.0cmを測る土師器杯A類完形個体。外面には幅1.0cmほどのロクロ成形痕を明瞭に残し、正面には則天文字類似の風に平の合せ文字「凧」の墨書を正位に施す。9は、No42の多孔質安山岩材の凹み石である。1/3程度の欠損品であり、凹部はロート形を呈する。SB02（第425図54）と接合する。

下層

19は第431図No41の黒色土器A類椀のほぼ完形個体。口径14.5cmの規格で、内面黒色処理に伴ない、ヒトデ状の暗文を施す。外面は極度に磨耗し、高台部分を欠失する。

Pit3 上層

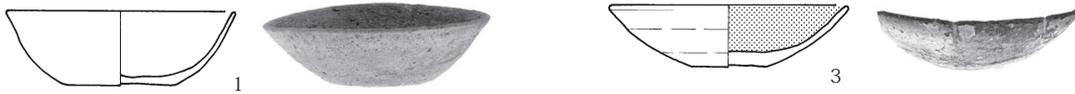
20は第433図No7Aの黒色土器A類椀形土器2/3個体。口縁部外面を幅1.0cm程度強くナデ調整する。口径14.5cmを測る。21はNo7Bの土師器椀形土器で、20のNo7Aと共伴して出土した。外面に明瞭なロクロ成形痕を留め、口唇内面がやや外削ぎ状にナデ成形される。底径8.4cm、口径14.8cmを測る大形品。

特殊遺物： 墨書土器1点（18第430図Pit1No35）、刻書土器1点（埋土中）、朱墨1点（埋土中）
漆状付着部のある土器1点が出土している（第68表）。

時期の判断基準：

床下遺物は、遺物出土状況で記した理由から、床面に含めて考えておく。土師器と黒色土器Aの杯類が主に出土しており、床面出土遺物の様子と矛盾するものではない。床面出土の口径12.0cmを測る規格化されたロクロ土師器杯A類と底径4.0cm未満を測る黒色土器杯A類の共伴事例、さらには本跡に付設されたPit1内の出土遺物中に須恵器類が甕形土器破片1点しか認められない点から9期に比定できる。Pit1内の土師器と黒色土器の杯類はいずれも口径12.0cmと考えられる規格品で、これに口径14.5cmの黒色土器椀が組成している点からも9期相当と考えてよい。ただし、須恵器杯類が小破片ながらも床面から出土している点と、口径13.0cmを測る土師器杯A類がカマド検出面から出土していることは、8期相当の様相が一部残ると考えてよい。

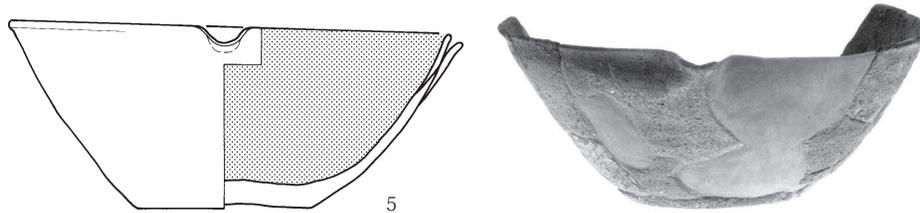
床面



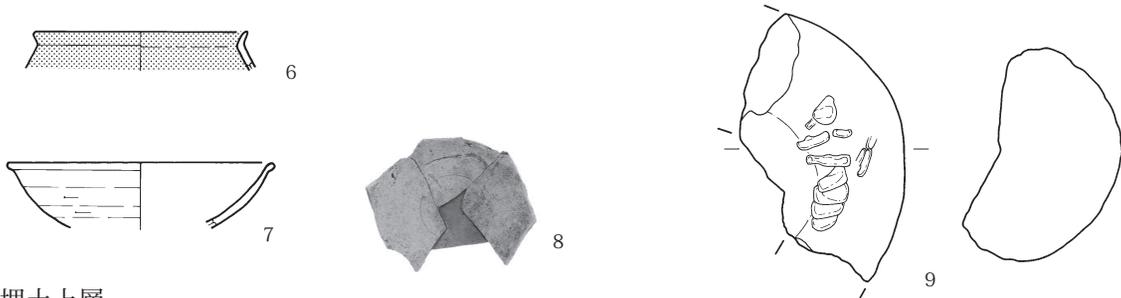
カマド検出面



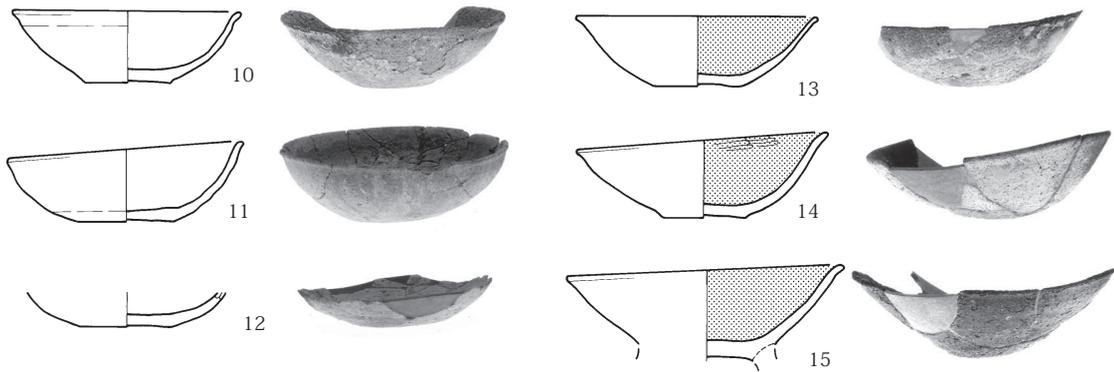
埋土上層



埋土



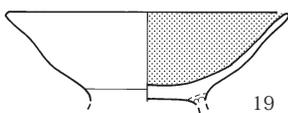
Pit1 埋土上層



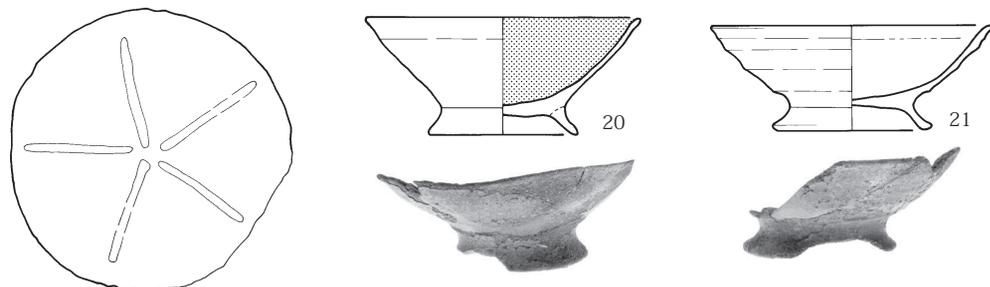
Pit1 埋土中層



Pit1 埋土下層



Pit3 埋土上層



第434図 SB03 出土の土器

0 (1:4) 10cm

第3章 発掘調査の概要

遺構名	非口ク:土師器											黒色土器 A			黒色土器 B			須恵器											灰軸:磁器		数 / 総重量 (破片 / g)
	高杯	杯 A	椀	皿	盤	甕 B	甕 I	甕	小型甕 D	小型甕	不明	杯 A	椀	鉢	椀	短頸壺	杯 A	杯 B	蓋	甕 A	甕 C	甕 D	甕	短頸壺	壺	不明	椀	青磁椀			
SB 03 検出面		14	1					3				12				7	1	1	1			2			1		1	44/346.3			
" 埋土	1	456	11	2	5	5		2	5		2	251	1			38		3	12	4	1	10	1	4		20	1	834/3,899.50			
" 上層		3										3		16									1					23/796.1			
" 床面		51			1	1	4	2	1			40	5	1		11		1				3				2		123/738.1			
" 床下		26	1			1				1		9							1				2					43/342.1			
カマド 検出面		10			1							5							1							1		18/128			
" 堀り方		9						3				3				1	1					2						19/225.6			
Pit 1 埋土		64				1						31	1			1	4		7							3		112/659.2			
" 上層		45										17	13										4					79/1,581.50			
" 中層		11																	2									13/777.2			
" 下層												1																1/166.6			
Pit 2 埋土		1										1																2/3.5			
Pit 3 上層		3	26									8																37/287.4			

第 65 表 SB 03 出土土器組成

遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit1	IX D-24	不整形	D	120	85	23	7.5YR3/3	
Pit2	IX D-19	円	D	34	34	9	10YR3/3	
Pit3	IX D-19	不整形	B-2	90	75	15		

第 66 表 SB 03 柱穴属性

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
	埋土上層	5	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	
第 434 図 5	"	19	黒色土器 A	鉢	2/3	23.0	9.5	9.2	—	—	No16,No17B,No18 と接合
	"	21	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	(5.8)	—	—	広底
	"	22	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片 3 点
第 434 図 1	床面	1	土師器	杯 A	底部	(10.7)	3.9	(4.5)	—	—	糸切り?
	"	2-A	黒色土器 A	杯 A	1/3	(12.5)	—	4.3	—	—	
	"	2-B	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 3 点
	"	3	土師器	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 9 (口縁 2, 体部 6, 底部 1)
	"	4-A	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	4.2	—	—	
	"	4-B	黒色土器 A ?	椀	高台	—	—	—	—	—	高台破片 (小片 2)
第 434 図 3	"	6	黒色土器 A	杯 A	2/3	12.3	3.2	3.8	—	—	糸切り 直口 狭底
第 434 図 2	"	8	土師器	杯 A	完形	12.0	3.8	4.7	—	—	糸切り 直口 狭底
	"	23	土師器	小型甕 D	口縁	(13.0)	—	—	—	—	口ク口
	床下	10	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	
	カマド検面	11-A	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片 3 点
	"	11-B	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	破片 5 点
	"	11-C	土師器	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片 2 点 (口縁 1 点)
	"	11-D	土師器	盤?	体部	—	—	—	—	—	破片 1 点
	"	11-E	須恵器	杯蓋	体部	—	—	—	—	—	破片 1 点
	"	11-F	灰釉陶器	椀	体部	—	—	—	—	—	破片 1 点
第 434 図 4	"	20	土師器	杯 A	1/3	—	—	5.0	—	—	広底
第 434 図 10	Pit1 上層	13	土師器	杯 A	2/3	12.0	3.75	4.4	—	—	外口 狭底 糸切り No31 と同一
	"	31	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	No13 と同一
第 434 図 13	"	12	黒色土器 A	杯 A	2/3	12.8	3.6	4.6	—	—	外口 狭底 糸切り
第 434 図 15	"	14	黒色土器 A	椀	2/3	14.4	4.6	4.8	4.5	—	
第 434 図 14	"	17-A	黒色土器 A	杯 A	2/3	13.2	4.0	4.6	—	—	外口 狭底 糸切り?
第 434 図 11	"	26	土師器	杯 A	完形	12.4	4.1	5.0	—	—	外口 広底
第 434 図 12	"	27	土師器	杯 A	底部	—	—	5.6	—	—	広底 糸切り ナデ
	"	25	土師器	杯 A	1/3	(13.5)	—	(5.8)	—	—	破片 6 (口縁 3, 体部 2, 底部 1)
	"	28	土師器	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片 糸切り
	"	29	黒色土器 A	椀	底部	—	—	5.8	—	—	破片
	"	30	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	No38 と接合
	"	32	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	
第 434 図 20	"	7-A	黒色土器 A	椀	1/2	14.4	6.1	7.8	4.5	1.0	
第 434 図 21	"	7-B	土師器	椀	底	14.8	5.5	8.4	—	—	接合
第 434 図 21	"	7-B	土師器	椀	口~体	—	—	—	—	—	接合
	Pit1 中層	38	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	No30 と接合
	"	34	須恵器	甕 A	口縁	—	—	—	—	—	No40 と接合 破片再利用
	"	40	須恵器	甕 A	口縁	—	—	—	—	—	No34 と接合 破片再利用
第 434 図 16	"	33	土師器	杯 A	2/3	11.9	4.2	4.2	—	—	外口 広底 糸切り
第 434 図 18	"	35	土師器	杯 A	完形	11.8	4.2	3.8	—	—	直口 狭底 墨書有 糸切り
	"	36	土師器	杯 A	底部	—	—	5.5	—	—	破片 広底 糸切り
	"	39	土師器	杯 A	口縁	(15.0)	—	—	—	—	
第 434 図 17	"	37	土師器	杯 A	完形	12.0	3.9	4.0	—	—	外口 狭底 糸切り
第 434 図 19	Pit1 下層	41	黒色土器 A	椀	完形	14.6	4.75	5.3	—	—	高台欠損 放射暗文

第 67 表 SB 03 出土土器属性

挿図番号	出土位置	焼物種類	器種	現存部位	記入方法	用筆ほか	記入部位	向き	文字	備考
第 434 図 18	Pit1 No35	土師器	杯 A	完形	墨書		体部・外	正	「風」	
	埋土+床下	灰釉	椀	底部	朱墨	転用硯	内面	—	—	3片接合
	先行トレンチ	黒色土器 B	椀	体部	刻書	焼成前	体部・外	正	「八千」	写真のみ

第 68 表 SB 03 出土墨書土器属性

4号竪穴式建物跡（第435図・第436図）

時期： 8世紀後半から9世紀前半を推定（古代5期・6期）

位置： VIII X - 9, 10（②区）

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 11.1 m²（南北 396cm × 東西 400cm）、残存深度 13cm

主軸方向： W - 5° - S

カマド位置： 西側

壁立ち上がり： 59度程度の傾斜

柱 穴： なし

埋土堆積： 1層黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積。炭化物及び焼土粒子を混入し、白色粘質土がブロック状に入る。カマド掘り方部の堆積土を2層とするが、1層同様の黒褐色土で、若干焼土粒子の混入量が多い。

遺構重複： SK 318 に切られる。

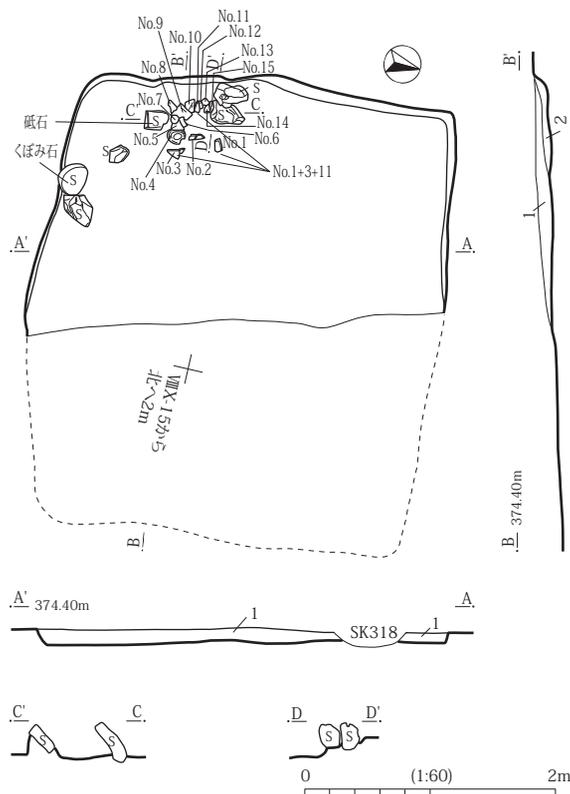
検出経過： 黄橙色砂質土上面にて、黒褐色土の落ち込みを確認する。東側は約半分程度削平され存在しない。規模は小さいが、推定できる形状から竪穴式建物跡を想定し、調査に入る。結果、崩れたカマドの残骸を確認し、床面調査に至る。堅緻な床面、掘り方は認められなかった。

遺物出土状況： 埋土中からの遺物は、土器の破片資料のみで、中でも土師器甕形土器を主体とする。カマド燃焼部からは甕形土器B類の口縁部から底部にかけての一括資料が出土した。

床面の様子： 地山を利用し床面とする。

カマドの様子： カマドは崩壊していたが、袖部芯材と考えられる礫が明瞭に確認できた（第435図）。残存部での燃焼部からの立ち上がりは22度を測る。

出土遺物： 埋土中から土器破片資料が少量出土したが、大部分はカマド燃焼部からの出土である。1はやや軟質の須恵器杯A類で1/5程度の破片。口径13.8cm、器高3.6cmを測る。回転口クロ成形痕を明瞭に留め、底部は糸切り離し調整である。2から5はカマド燃焼部の一括資



SB 04 カマド部土層



カマド完掘状態

第435図 SB 04 遺物出土の状態

料。2は須恵器杯A類の2/3個体。口径12.9cm、器高3.6cmを測り、底部から緩やかに開く器形で、底部は糸切り離し成形。内面底には明瞭な使用痕があり磨耗している。第435図No4に相当。3は第435図1・3・11の接合個体で、黒色土器杯A類。深い椀形を呈し、内面は良好なミガキ調整、外面はナデ整形である。口径16.4cm、器高5.0cmを測る。4・5は土師器甕形土器B類の一括個体で、第435図No5～7・No10～15に相当する。口縁部はやや強く屈曲し、外面は幅0.1cmほどの粗いハケ縦調整である。6は多孔質安山岩製のくぼみ石。23.0cm×23.0cm×11.0cm、重さ5000g、へこみ部の大きさ11.0cm×10.0cm、深さ6.0cmを測る。カマド部南の壁際床面から出土した。この他に凝灰質砂岩材の置き砥石。4面の機能面があり、表面は18.5cm×12.0cmの砥面、裏面には幅0.4cmのV字状の使用溝も観察できる。長さ21.5cm×幅15.4cm、厚さ9.2cm、重さ4770gを測る。転用材として用いられたものであろうか、カマド袖部芯材として使用されていた。

時期の判断基準：

カマド燃焼部一括土器に基づく。須恵器杯A類の器形及びその底部内径7.5cmから、5期前後を想定、土師器甕B類の長胴化した口縁の強い屈曲器形から6期前後を想定した。

遺構名	土師器							黒色土器A		須恵器							数 / 総重量 (破片/g)	
	杯C	甕A	甕B	甕E	小型甕	小型甕A	小型甕B	杯A	杯C	杯A	杯B	蓋	甕	甕E	小型甕A	長頸壺		短頸壺
SB 04 埋土	1	2		2	10	14	2	1	1	9	2	1	3	5	3	1	1	58/487.4
// 一括										2								2/27.4
カマド一括				7						1								8/103.1
// 内				49				14		3								66/520.5
// 2層											1							1/5.3

第69表 SB 04 出土土器組成

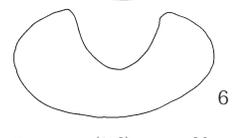
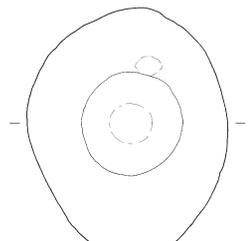
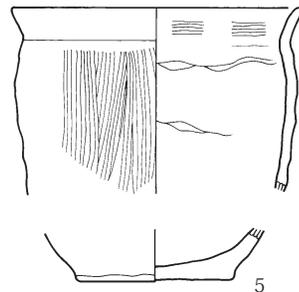
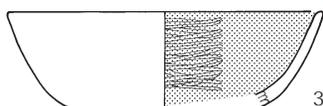
図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
第436図3	カマド内	1	黒色土器A	杯A	1/3	16.4	(5.0)	—	—	—	直口 No3, No11と接合
//	"	2	黒色土器A	杯A	底部	—	—	5.5	—	—	No1と同一個体か?
第436図2	"	4	須恵器	杯A	3/4	12.9	3.6	5.4	—	—	破片 No9と同一個体か No14と接合
//	"	8	黒色土器A	杯A	口縁	14.0	—	—	—	—	破片
//	"	5	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か
//	"	6	土師器	甕B	口縁	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か No14と接合
//	"	7	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か
第436図4	"	9	土師器	甕B	口縁	15.0	—	—	—	—	破片
//	"	10	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か
//	"	12	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か
//	"	13-A	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か
//	"	13-B	須恵器	杯A	口縁	—	—	—	—	—	破片
//	"	14	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か No6と接合
//	"	15	土師器	甕B	口縁	—	—	—	—	—	破片 No9と同一個体か
第436図3	"	3	黒色土器A	杯A	1/3	—	—	—	—	—	直口 No1と接合
第436図3	"	11	黒色土器A	杯A	1/3	—	—	—	—	—	直口 No1と接合

第70表 SB 04 出土土器属性

埋土



カマド



0 (1:4) 10cm

0 (1:8) 20cm

第436図 SB 04 出土の土器

5号竪穴式建物跡（第437図・第438図）

時期： 7世紀末～8世紀前半を推定（古代2期）

位置： VIII X - 8（②区）

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 15.6 m²（南北 396cm × 東西 400cm）、残存深度 12cm

主軸方向： N - 16° - W

カマド位置： なし

壁立ち上がり： 77度程度の傾斜

柱穴： なし

埋土堆積： 1層黒褐色土（10YR3/4）の単純堆積。白色粘質土及び黒色砂質土を極く微量含有し、炭化物粒子も僅かに混入する。床下、掘り方内の堆積土とした2層は、黒褐色土（10YR3/2）の単純堆積で、本跡の検出面である黄橙色砂質粘土のブロックを集中的に混在する。

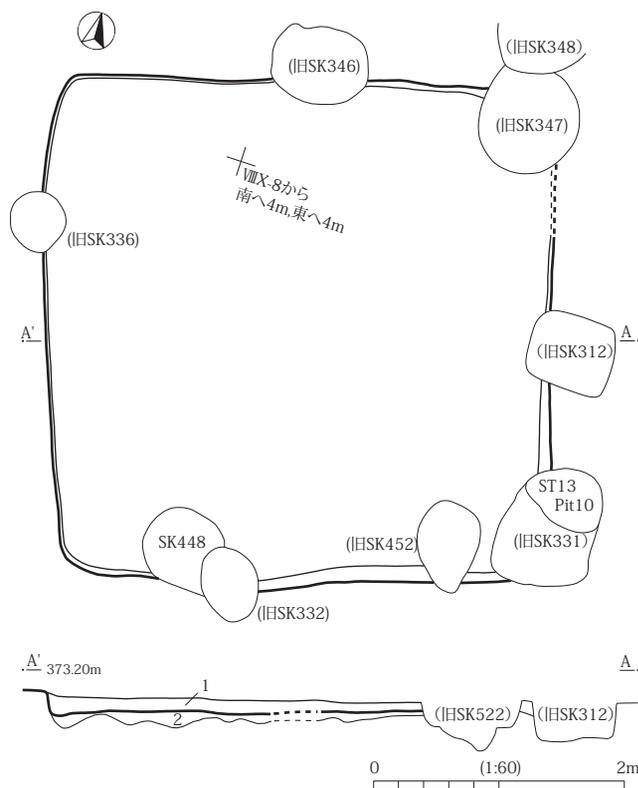
遺構重複： ST17Pit5（旧 SK346）、ST17Pit6（旧 SK347）、ST17Pit10（旧 SK336）、ST34Pit1（旧 SK348）、ST13Pit1（旧 SK311）、ST47Pit4（旧 SK312）、ST47Pit3（旧 SK331）、ST24Pit1（旧 SK332）、SK448、ST17Pit8（旧 SK452）に切られる。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層（10YR5/8）上面にて、暗褐色土（10YR3/4）の落ち込みを認めた。規模は小さいが、形状から住居跡を想定し、調査に入る。結果、明瞭なカマド跡、硬緻な床面及び柱穴は確認できなかった。

遺物出土状況： 埋土中からは、須恵器杯形土器の破片が主体的に出土している。土師器破片は杯A類の破片が僅かに2点あるのみで、他はすべて甕形土器の破片である。床面直上の遺物は発見できなかったが、床面下の掘り方から、須恵器蓋B類の破片2点が出土した。

床面の様子： 地山掘削後、掘削土等を利用し床面とする。

出土遺物： 主に埋土中から遺物が出土している。須恵器を主体とし、その内訳は、第71表に示す。



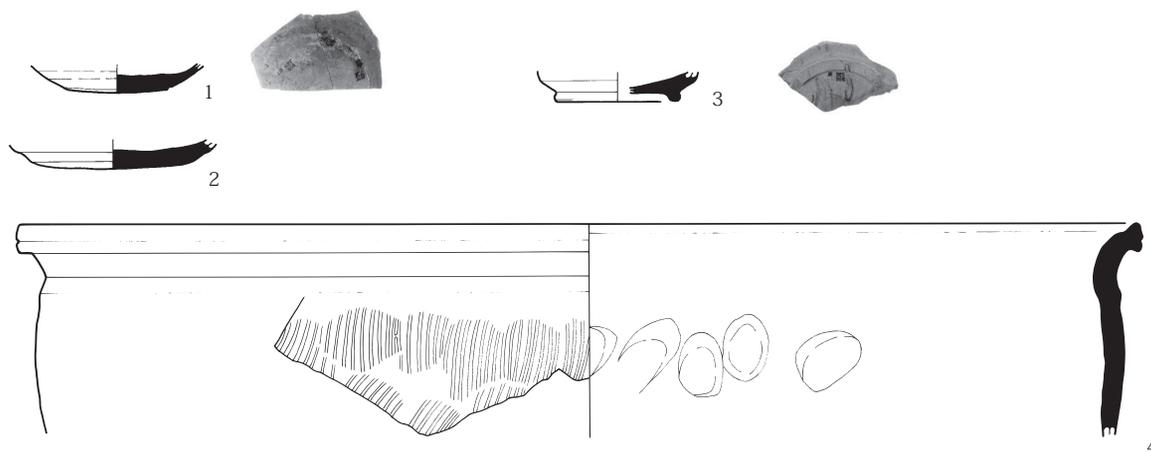
第437図 SB 05 床面完掘の状態



SB 05 完掘状態（南から）



埋没土層



第 438 図 SB 05 出土の土器

遺構名	土師器						須恵器								数 / 総重量 (破片 / g)
	杯 A	甕 A	甕 B	甕 E	小型甕 A	小型甕 C	杯 A	杯 B	鉢	蓋	甕 D	甕 E	小型甕 A	壺	
SB 05 埋土	2	36	14	11	2	6	23	1	1	11	2	11	3	2	125/1,217.4
// 床下										3					3/26.2

第 71 表 SB 05 出土土器組成

埋土 1 は先行トレンチ内にて出土した須恵器杯形土器 A 類の底部破片。ヘラ切り離した後、ナデ整形される。底部に僅かであるが、線状の刻み記号を確認できる。2 は須恵器杯 A 類底部破片である。胎土緻密で硬質、丁寧なナデ整形がなされる。底部ヘラ切り離し。3 は須恵器杯 B 類の底部破片で、高台径 7.0cm を測る。4 は須恵器甕 E 類の口縁部破片。外面の叩き締め具は、幅 3.0cm の板状工具である。内面の当て具痕は、軽くナデ整形される。

時期の判断基準：

床面出土遺物がなく、厳密には時期の特定はできないが、床下の掘り方出土遺物が須恵器杯蓋 B 類であることから、少なくとも古代 1 期以後の構築と判断できそうである。さらに埋土中の遺物は須恵器が中心をなし、杯 A 類に糸切り底が存在しない点から判断すれば、古代 2 期までの間と判断できる。2 点のみ出土した土師器の杯類は、小破片で器種が判然としないうが、重複する掘立柱建物跡や土坑内の出土遺物であった可能性も指摘できる。ここでは、総体から 2 期と判断しておきたい。

6 号竪穴式建物跡 (第 439 図・第 440 図)

時期： 9 世紀代を推定 (古代 6 期・7 期に比定)

位置： VIII I - 4, 5, 9 (②区)

平面形態： 隅丸不整形

規模： 表面積 12.9 m² (南北 [341] cm × 東西 412cm)、残存深度 5 cm

主軸方向： N - 85° - E

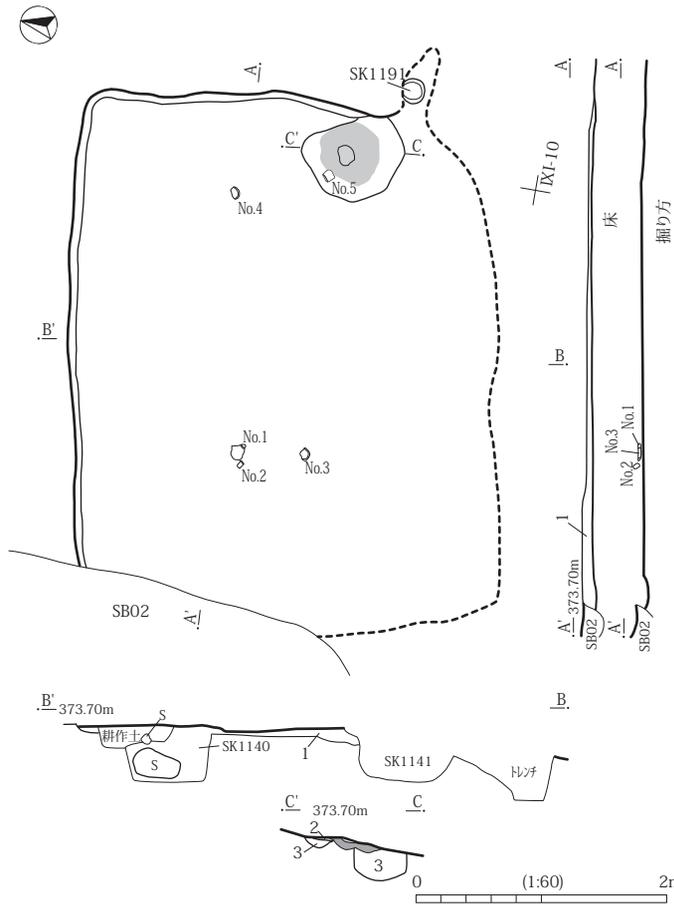
カマド位置： 東側壁

壁立ち上がり： 50 度程度の傾斜

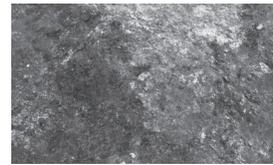
柱 穴： なし

埋土堆積： 1 層暗褐色土(7.5YR3/3)の単純堆積。白色粘質土及び炭化物・焼土をブロック的に混入する。

遺構重複： SB 02Pit34 (旧 SK 470)、SK 471、SK 1129、SK 1130、SK 1136、SK 1137、SK 1138、SK 1139、SK 1140、SK 1141 と切り合い、いずれも床下面での検出であることから、本跡がそれらを破壊して構築していると判断した。



SB 06 完掘状態 (西から)

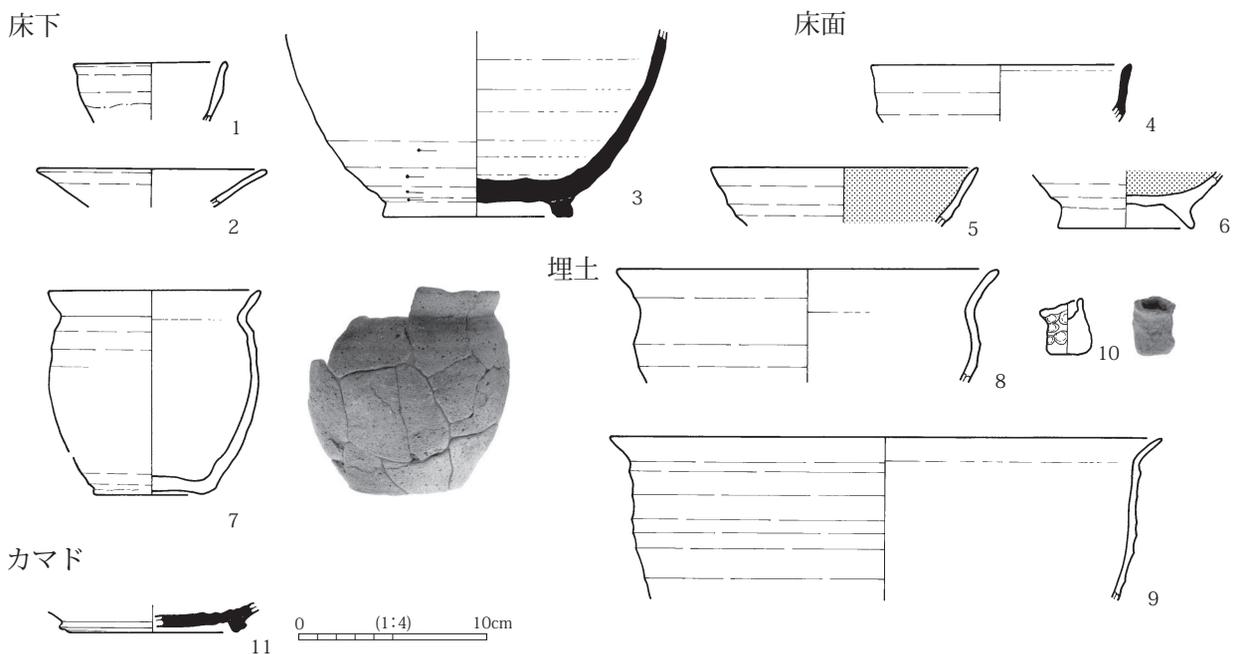


床面焼土

第 439 図 SB 06 床面完掘の状態

遺構名	非ロクロ		土師器		黒色土器 A										須恵器		灰袖陶器		土製品 不明	数 / 総重量 (破片 / g)								
	杯 C ?	杯 A	椀 ?	杯 A	椀 A	椀 B	椀 D	椀 E	鉢 I	小型椀	小型椀 D	不明	杯 A	椀	杯 A	杯 B	蓋	盤			椀	椀 C	椀 D	椀 E	長頸壺	短頸壺	皿	椀
SB 06 検出面	2	1	3	31	2	26	78	3	6	5	2	22	8	23	7	2	5	1	1	3	1	1	1	1			1	11/85.8
埋土				7		22		2	6		5	20	8	27	4	1	3											228/1,091.0
床面				2		19				1	2	13	2	5	2	1	2											109/747.2
床下																												62/529.3
カマド																												4/60.3
カマド内				6		4	4			2				1														17/95.0
カマド周辺						6	2					2		1								1						13/108.2
焼土下掘方				1										1														3/18.1
SK 1191				4			3							3														12/113.0
SB 06 を切る耕作土				14		12	3				1			10	1	2												44/230.8

第 72 表 SB 06 出土土器組成



第 440 図 SB 06 出土の土器

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて、暗褐色土（7.5YR3/3）の落ち込みを認めた。形状から竪穴式の建物を想定し、調査に入った。検出面から床面までの掘り込みは浅く、僅かに5cm程度であった。南側半分は耕作によって大幅に破壊されて、東南角に認められたカマド部分は火床部分しか残っていなかった。掘り方調査の時点で、9基の土坑を確認したが、厳密には、切り合い関係は確認できていない。

遺物出土状況： 埋土及び床面からは、土師器甕形土器及び杯形土器の破片が主体的に出土している。須恵器の出土は極めて少なく、床面及び床下からの須恵器類は、構築時に土坑埋土から混入した可能性も考えられる。

床面の様子： 地山掘削後、掘削土等を利用し床面となし、軟質である。

カマドの様子： 東側の削平部分にカマド煙道部分とみられる落ち込みを認めた。SK 1191 が存在していたことから、それを明瞭に調査確認できなかった。西側の火床部と合わせ、カマドを推定しておく。

床下の様子： 地山掘削後の埋土は2層あり、粘性・締まりのある1層黒褐色粘質土（10YR2/3）と炭化物粒子を含む締まりの強い2層褐色土（10YR4/4）である。

出土遺物： 埋土中からの遺物が主体で、土師器甕形土器を中心とする。須恵器類が極めて少なく、土師器小型甕類の破片数が多い点に特徴がある。

床下 1は灰釉陶器の椀、口縁部小破片。3.0cm程度で施釉手法は不明。2は灰釉皿形陶器の口縁部小破片。3は須恵器長頸壺の底部破片。高台部にはへら起こしの痕跡が残る。この他、石器とは判断できない石が1点（6.4g）出土している。

床面 4は推定口径16.0cmを測る箱形の杯B類、口縁部小破片。硬質で良好な作りである。5は黒色土器Aの杯A類、口縁部破片。直行口縁で、口径14.0cm、外面はロクロ成形痕をやや明瞭に残す。6は黒色土器椀の底部破片。高台部は真直ぐ立つ形状で、高台内はやや粗雑なナデ調整が施される。7は土師器小型甕D類の2/3個体。外面は胴上半部にロクロ成形痕を明瞭に残し、内面は黒味をおび、ナデ成形。底部は糸切り離し手法による。床面直下の第439図No4と埋土中の接合個体。

埋土 8は土師器甕形土器I類の口縁部破片であろうか。胎土に赤色粒子を多量に含み、外面丁寧なロクロ成形仕上げ。胴部はあまり張らず、緩やかに内湾し、鉢形に近い形態を呈する。9は土師器鍋形の土器、口縁部破片。口径27.0cm、口縁は薄手の作りで大きく外反する。外面にロクロ成形痕を残し、器面は極めて薄い作り。10は2.7cm×2.3cmの粘土手づくね状の焼き物で、三足盤脚部のような部品の脱落品であろうか。組成表では土製品として扱った。

カマド 11は須恵器杯B類の底部破片である。欠損後に研磨具として使用したものであろうか、高台部分が極度に磨耗している。また部分的に朱墨のような痕跡を観察できる。

時期の判断基準：

床下出土遺物中に灰釉陶器の椀（深椀形態でやや後出か）及び皿が存在する点から、少なくともその出現する6期以前には遡らない。須恵器が極めて少ないこと、ほぼ完形に近い小型甕D類と土師器鍋の特徴から、7期あるいは8期相当が妥当と判断した。

7号竪穴式建物跡（第441図～第444図）

時期： 8世紀代終末から9世紀前半を推定（古代5期ないしは6期）

位置： IX D - 9, 19 (③区) 平面形態： 隅丸不整形

規模： 表面積 17.9 m² (南北 434cm × 東西 442cm)、残存深度 10cm

主軸方向： N - 65° - E カマド位置： 東側壁

壁立ち上がり： 73度程度の傾斜 柱 穴： 2本

埋土堆積： 1層黒褐色土（10YR3/2）の単純堆積。炭化物及び焼土粒子、白色粒子を僅かに混入する。

遺構重複： SB 12、SB 16、SK 695、SK 904を破壊し、SD 52に壊される。SK 900～SK 903は床下調査時に発見され、本跡に伴なうものか否かも含め、新旧関係は明瞭でない。

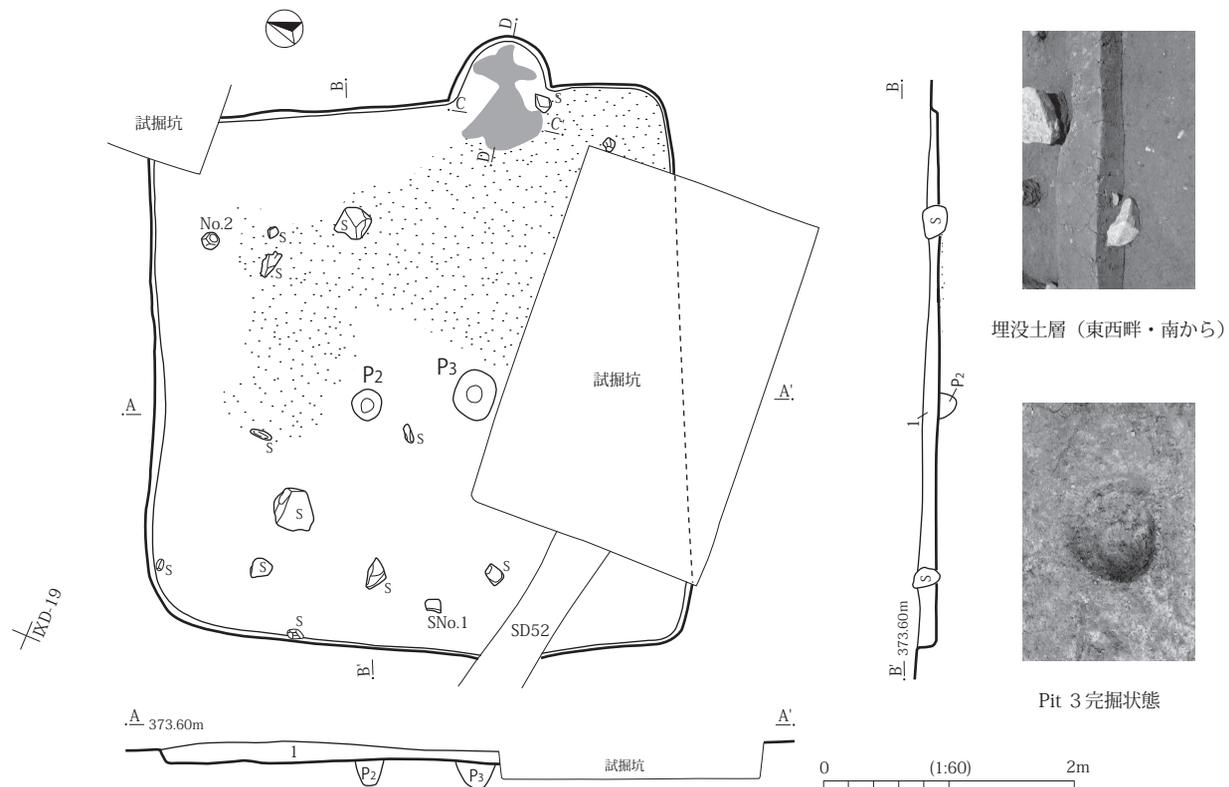
検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて、黒色土の落ち込みを認めた。竪穴状の遺構が幾つか重複していることが予想できたため、試掘坑を設定し確認した。結果、SB 16を破壊していることが判明した。SB 12との切り合い関係は不明瞭であったが、床面と考えられる硬化面及び炭化物の分布範囲がSB 12内まで広がっていたこと、本跡のカマドがSB 12内で発見されたことなどから、SB 12を破壊すると判断してよいか。

遺物出土状況： 埋土中及び床下から、土師器及び須恵器の甕形土器と杯形土器、さらに黒色土器A類の杯形土器、いずれも小破片が主体的に出土した。ただしSB 16及びSB 12との重複があり、そこからの混入は想定しなければならない。

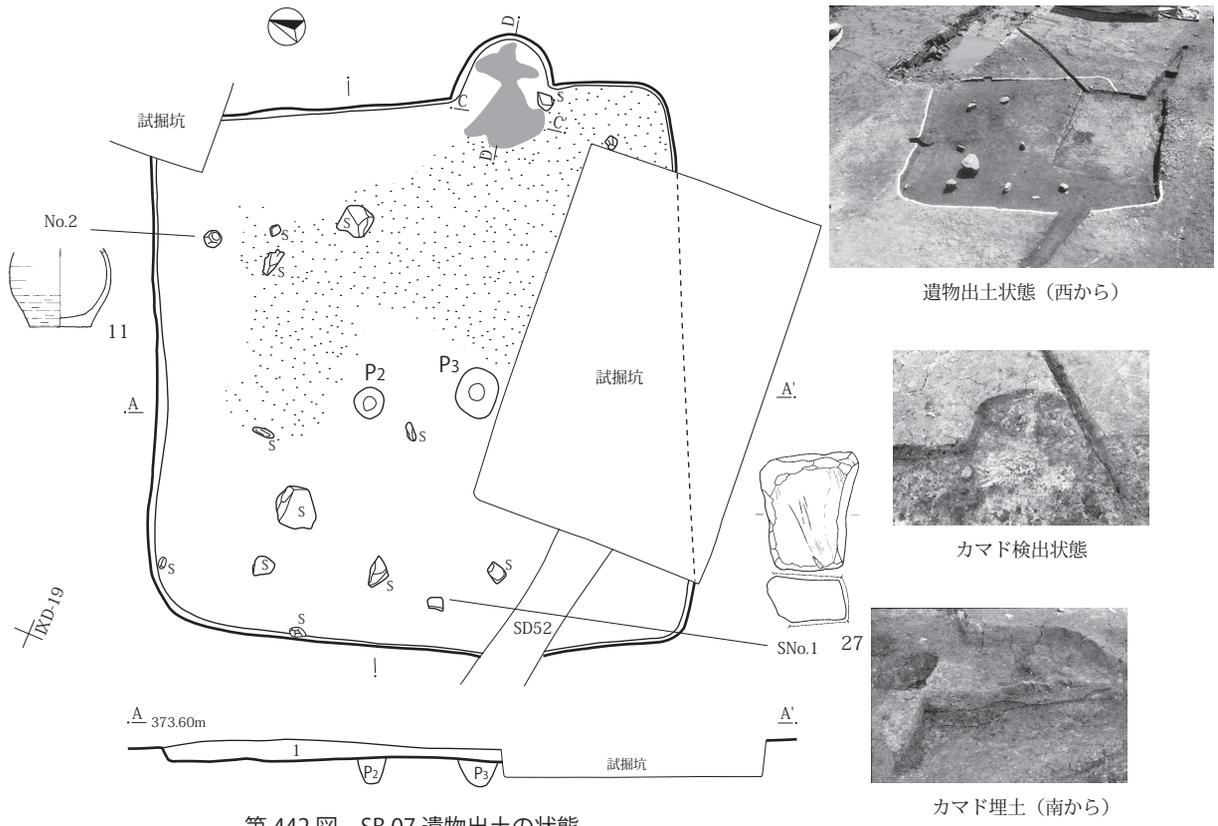
床面の様子： 地山掘削後、掘削土（3層）等を利用し床面とする。中央部分は硬質。床面直上には、厚さ 2.0cm～4.0cm 程の炭化物層が堆積していた。

床下の様子： 地山掘削後の埋土は2層あり、炭化物と白色粒子を含む黄褐色土で、下層の4層は 2.5YR5/2、上層の3層は 2.5YR4/2 で、4層基調のブロックを混入する。

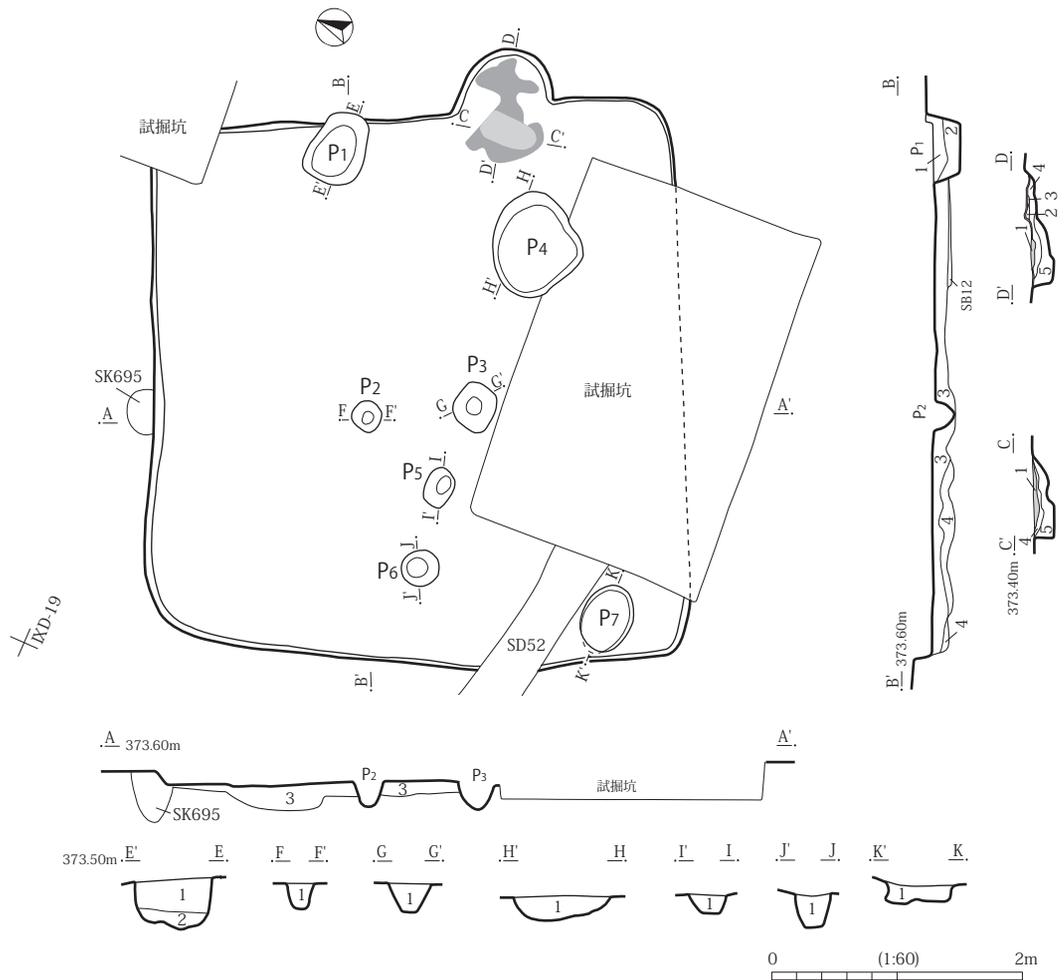
カマドの様子： カマドは崩壊していたが、掘り込みのある火床部分と袖部芯材と考えられる礫1点が確



第441図 SB 07 床面遺物出土の状態



第 442 図 SB 07 遺物出土の状態



第 443 図 SB 07 床下完掘の状態

遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit1	IX D-19	楕円	A	60	46	40	1層 10YR2/2, 2層 10YR4/2	
Pit2	IX D-19	円	A	24	23	20	10YR2/2	
Pit3	IX D-19	楕円?	A	38	31	22	10YR2/2	
Pit4	IX D-19	不整形	A	81	71	19	10YR2/3	
Pit5	IX D-19	楕円	A	30	22	14	10YR3/2	
Pit6	IX D-19	円	A	30	28	26	10YR3/2	
Pit7	IX D-19	楕円	A	53	40	14	10YR3/2	

第73表 SB07 柱穴属性

認できた(第441図)。火床下、掘り方部分に2層(4層 10YR6/4・5層 10YR3/4)、煙道入り口部に2層(2層 10YR3/3・3層 5YR3/2)の堆積が認められた。

柱穴の様子： 床面で検出した柱穴は2基ある。Pit2とPit3で、床面硬化面に近い中央部分に並んで確認できた。埋土は黒褐色土(10YR2/2)の単純堆積。一方床下調査時に確認した柱穴は7基。いずれも黒褐色土(10YR2/3)を基調とし、本跡全体の埋没土に似る。Pit1は2層に分層でき、1層は他と同様の黒褐色土で下部は白色粒子ブロックを混入する灰黄褐色土(10YR4/2)。

出土遺物： 埋土中の遺物と床下遺物の数量は拮抗する。埋土はSB12と、床下はSB16との重複遺物を含む可能性が高く、本跡に伴う遺物の限定は困難である。

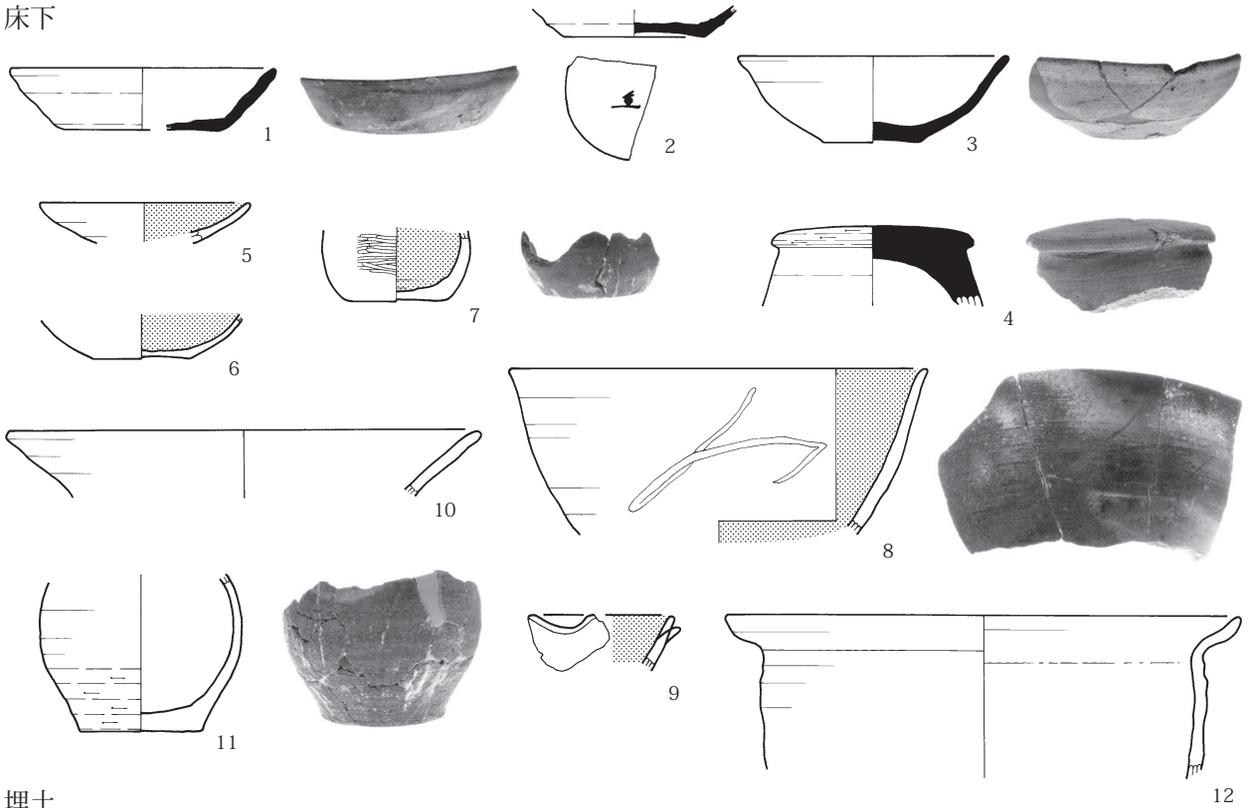
床下 1～3は須恵器杯A類。1は1/2個体。内面底径8.0cm、口径13.8cm、器高3.2cmを測る古式の糸切り底の杯A。2は底部破片。底内径7.0cmを測り、糸切り離しの手法。幅0.1cmほどの極細の墨書で「□主カ」の2文字を観察できる。3はやや軟質の感じを受ける須恵器で2/3個体。内面底径5.0cmを測る。体部はやや張りだし、土師器的な形態を示す。4は須恵器の白形土器か。白部と考えられる部位破片で、ケズリ後ナデ成形される。本遺跡では1例のみの出土である。5と6、8と9は黒色土器A類。5は皿A類の口縁部破片で、6は杯A類の底部破片である。7は黒色土器B類の瓶または小型壺1/3個体。外面は丁寧にミガキ整形され、黒光りしている。底部糸切り離し手法。8と9は鉢形土器。8は外面に幅1.3cmほどの回転ロクロ成形痕を留め、文字様のミガキ痕を観察できる。9は注ぎ口部分の破片。10は土師器盤A類の口縁部破片で口径24.6cmを測る。11は土師器小型甕C類の1/2個体。内面は丁寧にナデ整形され、外面はロクロ成形痕が残る。底部糸切り離し調整。12は土師器甕形土器I類口縁部破片。胎土は明るい褐色で、他の土師器類とは区別できる。口縁部受け口状を呈し外面にはロクロ成形痕を残す。この他に、チャート材の玉石2点がある。1.5×1.2×0.5cm、12gと1.7×1.5×0.6cm、2.1g。

床面 21は緑釉陶器碗の体部小破片。

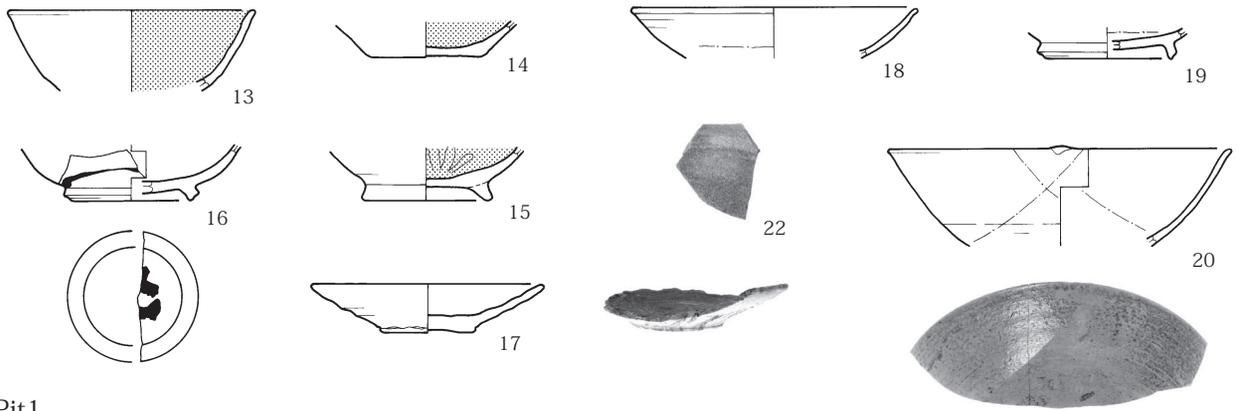
埋土 13～15は黒色土器杯A類。13は杯Aないしは碗の口縁部破片。表裏面の剥落激しい。14は杯A類の底部。15は碗の底部破片。外側に開く高さ0.9cm程の高台。内面は丁寧にミガキ整形。16は須恵器杯B類の底部。形態は灰釉陶器の模倣である。底部と体部外面に墨書がある。いずれも判読不能。17は土師器皿A類。1/3個体で、口径12.0cmを測る。底部は凸状に張り出し、糸切り離し調整。18から20は灰釉陶器。18は浅い碗で、口唇玉縁状に外反し、刷毛塗り施釉。19は碗底部。三日月状の高台。20は大形の碗、口縁部破片。口径18.0cm。底部付近は回転ケズリ整形し、口唇は輪花状。漬け掛け施釉。22は緑釉陶器稜碗の体部小破片。27は細粒砂岩材の置き砥石。12.0×10.1×5.0cm、918.8g。

Pit1 23は黒色土器杯Aの口縁部破片か。口径10cmを測る。24は黒色土器杯A類の底部。底部糸切り離し調整。底部に三角形(△)の刻目がある。25も24同様な三角形(△)の刻目がある。

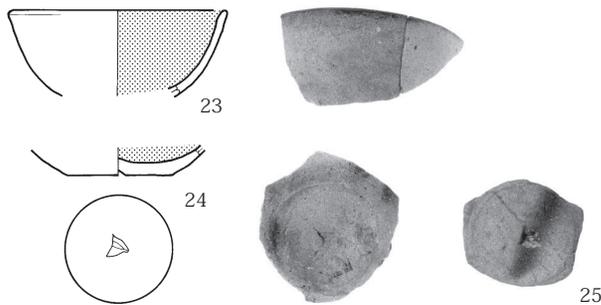
床下



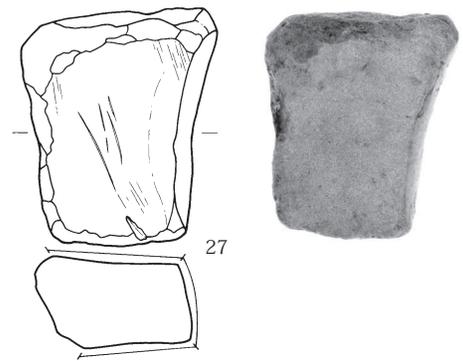
埋土



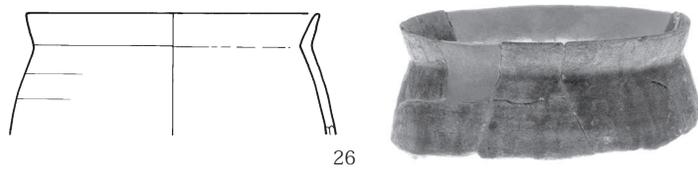
Pit1



埋土



Pit4



床面



0 (1:4) 10cm

0 (1:2) 5cm
(21・22)

第 444 図 SB 07 出土の土器・石器

Pit4 26は土師器小型甕形土器D類の口縁部。外面にロクロ成形痕があり、内面は丁寧にナデ整形される。

時期の判断基準：

床面直上の遺物は、ほとんど確認できない。床下遺物の中に黒色土器A皿A類があり、少なくとも、その出現する6期以降は間違いなさそうである。床面から土師器杯A類の小破片1点が出土していることから、土師器の出現する古代8期以降に比定できるか。埋土中ではあるが、3の須恵器杯A類は、土師器的な形態を模倣しており、須恵器生産の最終末に位置づけられ、8期的な様相と判断してよいか。また床下出土の2は内面底径の広い古代3期ないしは4期に位置付けられる須恵器杯A類で、恐らく、SB16の遺物の混在と考えられる。

遺構名	土師器	黒色土器A											黒色土器B													
		杯A	椀	盤	甕	甕A	甕B	甕C	甕D	甕E	甕H	甕I	小型甕	小型甕A	小型甕B	小型甕D	不明	杯A	椀	皿	甕E	鉢	鉢(片口)	椀	瓶	
SB07 埋土	51	2	2	40	9	6	1	2	5	13	7			2	1	8	137	12	1	2	1					
" 床	1			1												1	1									
" 床下	32	3	5	41	11	14	1	1	7	14	7	3	3	2	19	114		1		5	1		1	3		
カマド内	6			1												1										
Pit1 埋土	1			2	1											3	17		1							
Pit4 埋土	2								1	10	3				7	4										
Pit7 埋土											1					2										
Pit10 埋土																										

遺構名		須恵器										灰釉陶器			緑釉陶器		白磁	数 / 総重量 (破片 / g)					
		杯A	杯B	蓋	甕	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	長頭壺	短頭壺	白	血	椀	長頭壺A	椀		椀				
SB07 埋土		37	7	2		12	9	15	11	10							1	18	1		1	1	427/5,872.8
" 床		1					1	4							1						1		12/323.3
" 床下		36	9	5	5	11	1	9	5	2	2			1			9	1					384/4,551.2
カマド内																							8/35.6
Pit1 埋土		1				5				1													32/976.3
Pit4 埋土						4				1									1				33/1,028.3
Pit7 埋土																							3/17.4
Pit10 埋土		3																					3/9.4

第74表 SB07出土土器組成



SB07出土の土器

8号竪穴式建物跡 (第445図)

時期： 9世紀前半以前か (古代6期以前?)

位置： VIII X-7 (②区)

平面形態： 隅丸不整形

規模： 表面積 17.5 m² (南北 388cm × 東西 460cm)、残存深度 6 cm

主軸方向： N-87°-W

カマド位置： 西側壁

壁立ち上がり： 50度程度の傾斜

柱穴： 2本

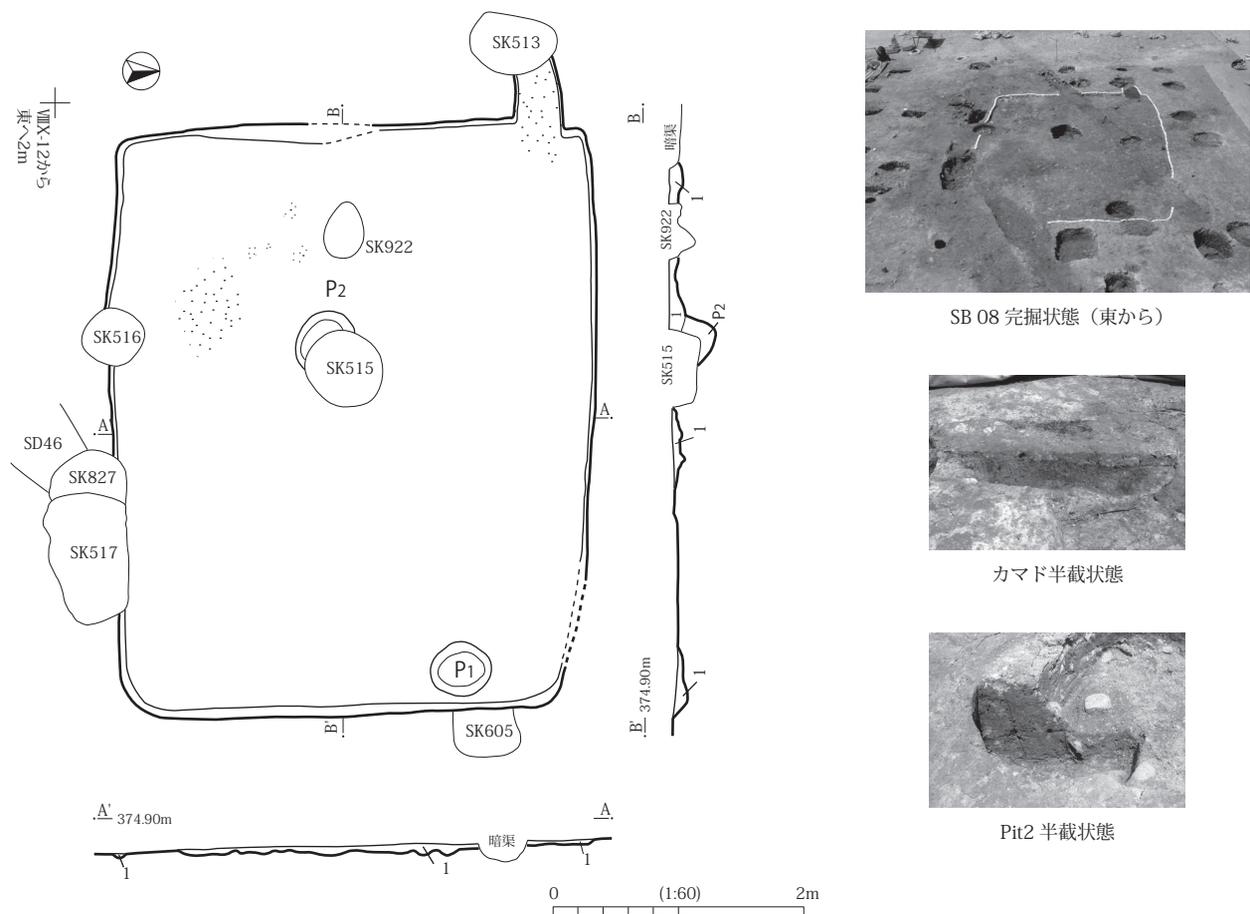
埋土堆積： 1層黒褐色土 (10YR3/2) の単純堆積。検出面が低く、埋土はほとんど残っていない。

遺構重複： ST 35、ST 37、ST 42、SK 513、SK 515、SK 516、SK 922 に破壊される。SK 605 との切り合いは不明だが、調査状況から SK を本跡が破壊すると判断した。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて、黒褐色土の落ち込みを確認、規模・形状から竪穴式建物を想定し調査した。遺構検出面が低く、部分的に床面が露出していた。掘立柱建物跡及び土坑との切り合いは認められたが、厳密には新旧関係は確定できていない。

遺物出土状況： 検出状況にも起因するが、埋土中からの出土遺物はほとんどなかった。すべてで 10 片の土器破片である。

床面の様子： 地山掘削後、床面とする。検出状況が悪く、床面の平坦面、明瞭な硬化面等の確認はできなかった。



第 445 図 SB 08 床面完掘の状態

遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit1	VIII X-7	楕円	A	50	42	24	10YR3/2	
Pit2	VIII X-7	円?	A	50	(22)	30	1層・2層 10YR2/3	

第 75 表 SB 08 柱穴属性

カマドの様子： カマドは煙道部分のみ残骸として確認できた。

柱穴の様子： 床面で検出した柱穴は2基ある。Pit1は東側隅に確認した。Pit2はほぼ中央部にあり、大半をSK 515に破壊されていた（写真）。

出土遺物： 埋土中から10片の土器小破片が出土した。黒色土器A杯A類2点と、須恵器杯A類2点ほかである。内訳は第76表に示す。

時期の判断基準：

埋土中から10片のみの出土であり、時期の特定には至らない。土師器や灰釉陶器の破片資料がないこと、黒色土器が出現していることなどから、概ね3期以降6期以前かと考えられる。

遺構名	黒色土器A	須恵器					数 / 総重量 (破片 / g)
	杯A	杯A	杯B	蓋	甕D	甕E	
SB 08 埋土	2	2	1	2	1	2	10/112.6

第76表 SB 08 出土土器組成

9号竪穴式建物跡（第446図～第452図）

時期： 9世紀代終末を推定（古代9期比定）

位置： IX D - 18（③区）

平面形態： 隅丸正方形

規模： 表面積 13.9 m²（南北 430cm × 東西 347cm）、残存深度 7 cm

主軸方向： W - 6° - N

カマド位置： 東側壁

壁立ち上がり： 57度程度の傾斜

柱穴： なし

埋土堆積： 1層黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積。炭化物及び焼土粒子を僅かに混入する。

遺構重複： SB 11、SB 16、SK 696、SK 928を破壊し、SD 58、SK 897に破壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて、黒色土の落ち込みを認めた。遺構重複の激しい場所であったが、隅丸正方形の四辺を確認できた。検出面が低く、埋土は僅かしか残存しておらず、直ぐに床面を検出した。中央部分でやや高まりのある砂質面を床面と認定した。

遺物出土状況： カマドと対峙した西側の床面直上に、比較的残りのよい土師器杯A類が数点まとまって出土した。

床面の様子： 地山掘削面を床面とする。

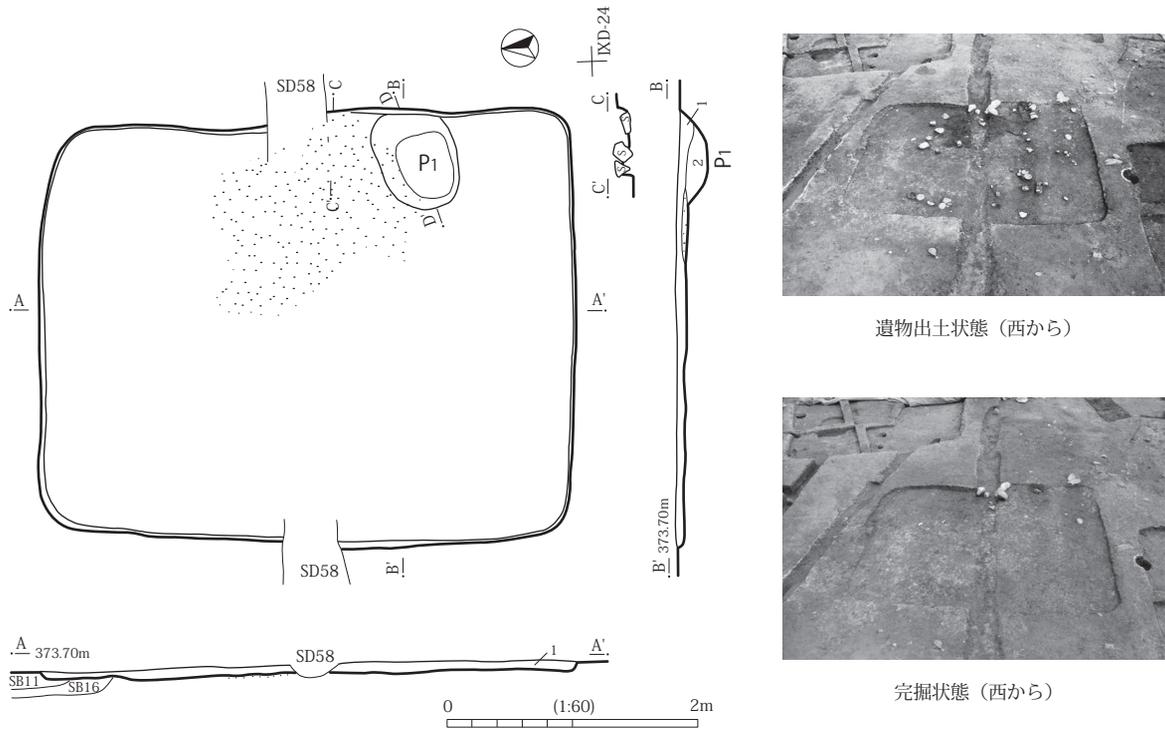
カマドの様子： カマド部分はSD 58に破壊されていた。ソフトボール大からハンドボール大の礫がまとまって出土しており、床面上には2m四方にわたり炭化物の堆積が認められた。

土坑の様子： カマドの右脇側、本跡東隅部分に規模76cm × 62cm × 14cmを測る円形状の土坑を確認し、調査した。埋土は白色粒子を含む黒褐色土（10YR2/2）の単純堆積で、礫を中心に50片ほどの土器が出土した（第448図～第450図）。

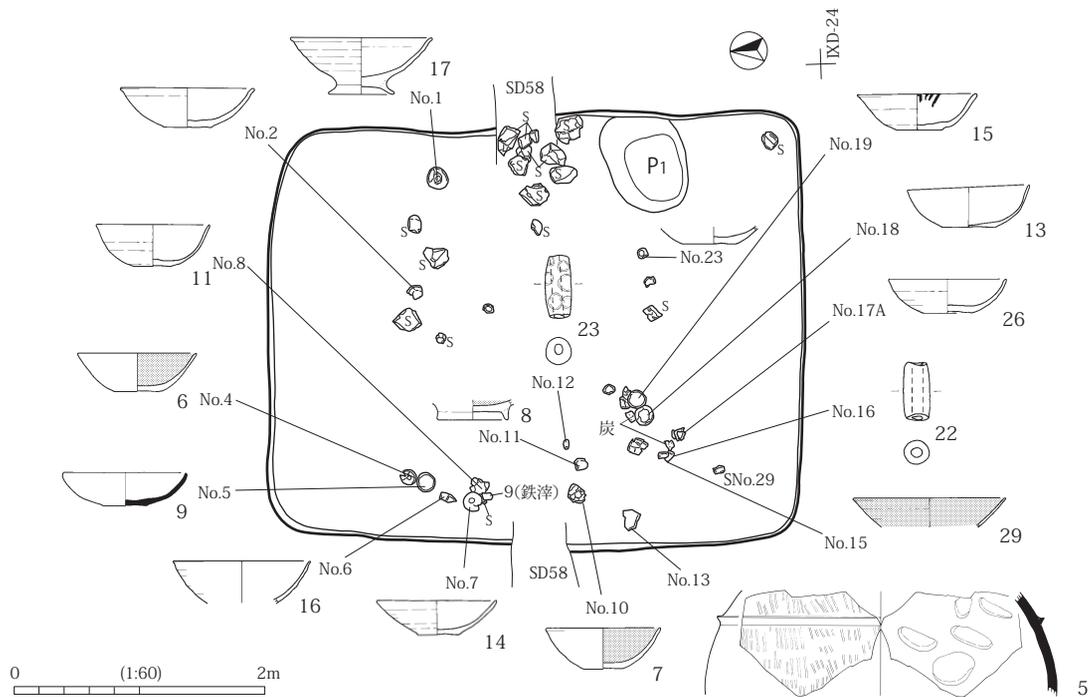
出土遺物： 埋土中の遺物と床面の遺物量は拮抗する。床面出土遺物を中心に提示するが、全体の出土土器組成は第78表に示す。

床下 1は黒色土器A杯A類。体部半ばに稜を有する器形で、内面は横方向のミガキ調整。口径14.6cmを測る。2は非ロクロ土師器の鉢口縁部破片。外面は斜め方向のケズリ調整で内面は黒色処理される。3は緑釉陶器の小破片。器種は不明。

床面 4は須恵器杯A類の底部。底部内径6.5cmを測り、糸切り離し手法。5は須恵器甕D類の肩部破片。外面は板状工具による叩き締め痕が、内面は年輪の目立たない直径5.0cmほどの工具痕が観察できる。6～8は黒色土器A。6は第447図No4に相当し口径12.4cm、底径4.8cm規格、7はNo10で口径11.9cm、底径4.0cm強の規格で、ともに狭底。8はNo11で椀底部の破片。9から15は土師器杯A類。9はNo5の生焼け須恵器の完形か？。



第 446 図 SB 09 床面完掘の状態



第 447 図 SB 09 遺物出土の状態

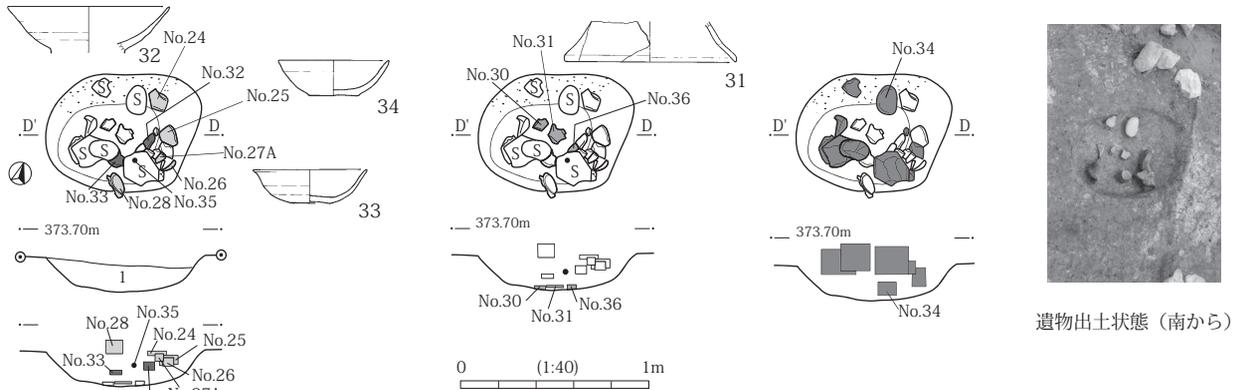


No6 ~ 8 出土状態 (西から)



No18・19 出土状態 (北から)

口径 13.0cm、底径 4.6cm、器高 4.0cm を測る。10 は直口口縁で、口径 13.4cm、底径 5.6cm の広底。11 は No8 で口径 11.9cm、底径 3.9cm の狭底。12 は口縁部破片で、口径 12.0cm を測る。13 も 10 とほぼ同じ法量タイプ。14 はやや朝顔形に開く形態で、口径 12.0cm、底径 4.2cm を測る狭底。15 は口径 12.4cm、底径 4.8cm を測る完形品で、糸切り離し手法で、底部は凸状に張出す。口唇部に灯明痕のような幅 0.3cm の付着物が芯状に 4 本認めら



第 448 図 Pit1 上・中層遺物出土状態 第 449 図 Pit1 下層遺物出土状態 第 450 図 Pit1 礎出土状態

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
第 452 図 29	埋 土	15	黒色土器 B	椀	1/4	15.9	—	—	—	—	
第 452 図 26	"	17-A	土師器	杯 A	2/3	12.3	3.5	5.0	—	—	糸切り 直口 広底
"	"	17-B	土師器	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片 糸切り
"	"	17-C	土師器	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片 4 片 切りはなし不明
"	"	22	土師器	杯 A	底部	—	—	3.2	—	—	破片 切りはなし不明
"	"	20-A	土師器	椀	口縁	14.0	—	—	—	—	破片 4 片
"	"	20-B	土師器	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片
"	"	20-C	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	破片
"	"	20-D	土師器	杯 A	口縁～体部	—	—	—	—	—	破片 5 片
"	"	20-E	土師器	甕	体部	—	—	—	—	—	破片 3 片
第 451 図 17	床 面	1-A	土師器	椀	完形	14.8	6.0	6.6	4.0	—	
"	"	1-B	土師器	杯 A	口縁	17.0	—	—	—	—	破片
"	"	2-A	土師器	杯 A	1/5	13.6	4.1	5.0	—	—	直口 狭底
"	"	2-B	灰釉陶器	椀?	体部	—	—	—	—	—	破片 2 片
"	"	3-A	黒色土器 A	椀	底部	—	—	4.5	3.0	—	
"	"	3-B	土師器	杯 A	口縁	15.0	—	—	—	—	破片
第 451 図 6	"	4	黒色土器 A	杯 A	2/3	12.4	4.0	4.8	—	—	直口 広底 切りはなし不明
第 451 図 9	"	5	須恵器	杯 A	完形	13.0	4.0	4.6	—	—	直口 狭底 糸切り 軟質
第 451 図 16	"	6	土師器	杯 A	1/3	14.2	—	—	—	—	
第 451 図 14	"	7	土師器	杯 A	完形	12.6	3.8	4.2	—	—	直口 狭底
第 451 図 11	"	8	土師器	杯 A	完形	11.9	4.3	3.9	—	—	直口 狭底
第 451 図 7	"	10	黒色土器 A	杯 A	2/3	11.9	4.3	4.0	—	—	直口 狭底 切りはなし不明
第 451 図 8	"	11	黒色土器 A	椀	底部	—	—	7.2	5.6	—	
第 451 図 5	"	13	須恵器	甕 D	体部	—	—	—	—	—	破片
"	"	14	土師器	杯 A	2/3	12.0	—	3.2	—	—	直口 広底 糸切り
第 451 図 13	"	18	土師器	杯 A	完形	12.7	4.1	5.4	—	—	直口 広底 糸切り
第 451 図 15	"	19-A	土師器	杯 A	完形	12.4	3.7	4.8	—	—	外はん 広底 糸切り
"	"	19-B	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
"	"	21	土師器	杯 A	底部	—	—	3.6	—	—	直口 広底 糸切り
"	"	23	土師器	杯 A	底部	—	—	5.6	—	—	直口 広底 切りはなし不明
第 451 図 23	"	12	土製品	土錘	完形	長さ 6.6	巾 2.6	厚さ 2.9	—	—	
第 451 図 22	"	16	土製品	土錘	完形	長さ 5.0	巾 2.7	厚さ 2.6	—	—	
"	"	9	鉄製品	鉄滓	—	—	—	—	—	—	
第 452 図 33	Pit1 上層	27-A	土師器	杯 A	ほぼ完形	11.8	3.5	4.3	—	—	外口 狭底 糸切り
"	"	27-B	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
"	"	27-C	土師器	甕 B	体部	—	—	—	—	—	破片
"	"	28-A	黒色土器 A	椀	底部	—	—	8.4	6.0	—	破片 2 片
"	"	28-B	黒色土器 A	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
"	"	35	土師器	杯 A	1/3	—	—	—	—	—	破片
第 452 図 32	"	24	土師器	椀	1/3	16.9	—	—	—	—	
第 452 図 34	"	25	土師器	杯 A	1/2	11.4	3.7	5.2	—	—	直口 広底 糸切り
"	"	26	土師器	杯 A	口縁	—	—	—	—	—	破片
"	Pit1 中層	33	土師器	椀	底部	—	—	—	—	—	破片
"	"	32	土師器	椀?	1/3	14.0	—	—	—	—	
"	Pit1 下層	30	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	7.0	—	—	破片 糸切り
第 452 図 31	"	31	土師器	盤 A	脚部	—	—	18.0	—	—	破片
"	"	36	黒色土器 A	椀	底部	—	—	9.0	8.0	—	破片 Pit1 1 片接合

第 77 表 SB 09 出土土器属性

遺構名	非ロク 杯C	土師器														黒色土器A		黒B				
		杯A	碗	皿	盤	盤A	鉢	甕	甕A	甕B	甕E	甕H	甕I	小型甕	小型甕A	小型甕B	小型甕D	杯A	碗	皿	碗	
SB 09	埋土	257	13	1		2	64	3	2	3	1	1	2				1	124	1	2	5	
"	床面	277	6	1	1		2	1	5	4	2	4	1		1		5	147	6		2	
"	床下	5	21				2									5						
カマド周辺	炭層内		17				1						1								20	
Pit1	埋土		6									1	1								14	1
"	上層		15	2					1												1	1
"	中層		4																			
"	下層					1															1	1

遺構名		須恵器											灰釉陶器			緑釉陶器	中世陶器	数 / 総重量 (破片 / g)	
		杯A	杯B	蓋	甕	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	短頸壺	不明	碗	壺	小瓶	碗	皿		
SB 09	埋土	27	3	2	3		6	2	6	2	1		7	1				2	544/2,714.2
"	床面	19	2	6	3	1	11	5	1	1	1		14		8				535/4,338.7
"	床下	11		2				2	1				1			1			54/328.3
カマド周辺	炭層内				1														40/134.1
Pit1	埋土								1										24/96.3
"	上層																		20/375.9
"	中層																		4/73.1
"	下層																		3/74.3

第 78 表 SB 09 出土土器組成

れる。16は土師器の杯Aもしくは碗の口縁部破片。口唇はやや外反し内削ぎ状となる。口径14.2cmを測る。17は土師器碗完形。口唇玉縁状、直下の外面には幅1.0cmほどの強いナデがある。高台は外側に強く開く形態。口径14.8cmを測る。18は土師器小型甕D類で、外面にはロクロ成形痕を留め、内面丁寧にナデ調整される。19・20は灰釉陶器の碗。19は底部破片。20は体部破片で口唇玉縁、施釉は刷毛塗り手法。21は灰釉陶器の小瓶1/2個体。口から頸部にかけて欠失する。施釉は漬け掛け。8片の接合資料であるが、1片のみが本跡で、他はSD 03のD-13区・14区の2層からの出土である。22・23は土錘。22はNo16に相当し、長さ5.0cm、径2.6cm、重さ40.4gを量る。23はNo12で、外面に指頭圧痕を残す。長さ6.6cm、径2.9cm、重さ49.8gを量る。24はNo9の碗形滓の破片で235.4gを量る。この他、No29は砥石の可能性もあるが、斑岩であり、無加工の石か。5.7×2.7×12cm、99.8g。

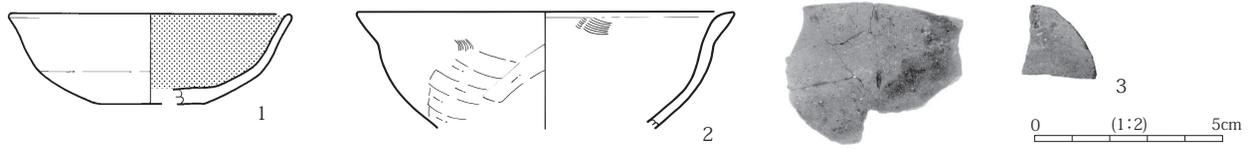
埋土 25～27は土師器杯A類。25は杯Aの底部と考えられ、幅1.5cm程のへら起こし手法の痕跡がある。26はNo17Aで、2/3個体。底径5.0cmの広底で、糸切り離し後、へら起こし。27は口縁部破片。口縁やや外反する形態で、口唇直下の外面には強いナデ整形が入る。口唇部に灯明痕と思われる付着物がある。28は灰釉陶器碗の口縁部破片。29は黒色土器Bの碗形土器口縁部破片。口径15.9cmを測る。30は土師器の鉢形土器であろうか。口唇折り返しにより肥厚する。本遺跡では1点のみの出土資料である。No34は安山岩材の敲石。13.2×8.2×2.2cm、932.1g。

Pit1 下層 31はNo31に相当する土師器盤Aの脚部破片。
上層 32はNo24の土師器碗の口縁部破片。口径16.9cmを測る。33・34は土師器杯A類。33は口縁外反する形態で、口唇直下の外面に1.0cm幅の強いナデ整形が入る。34はNo25に相当する2/3個体。底径5.2cmの広底。

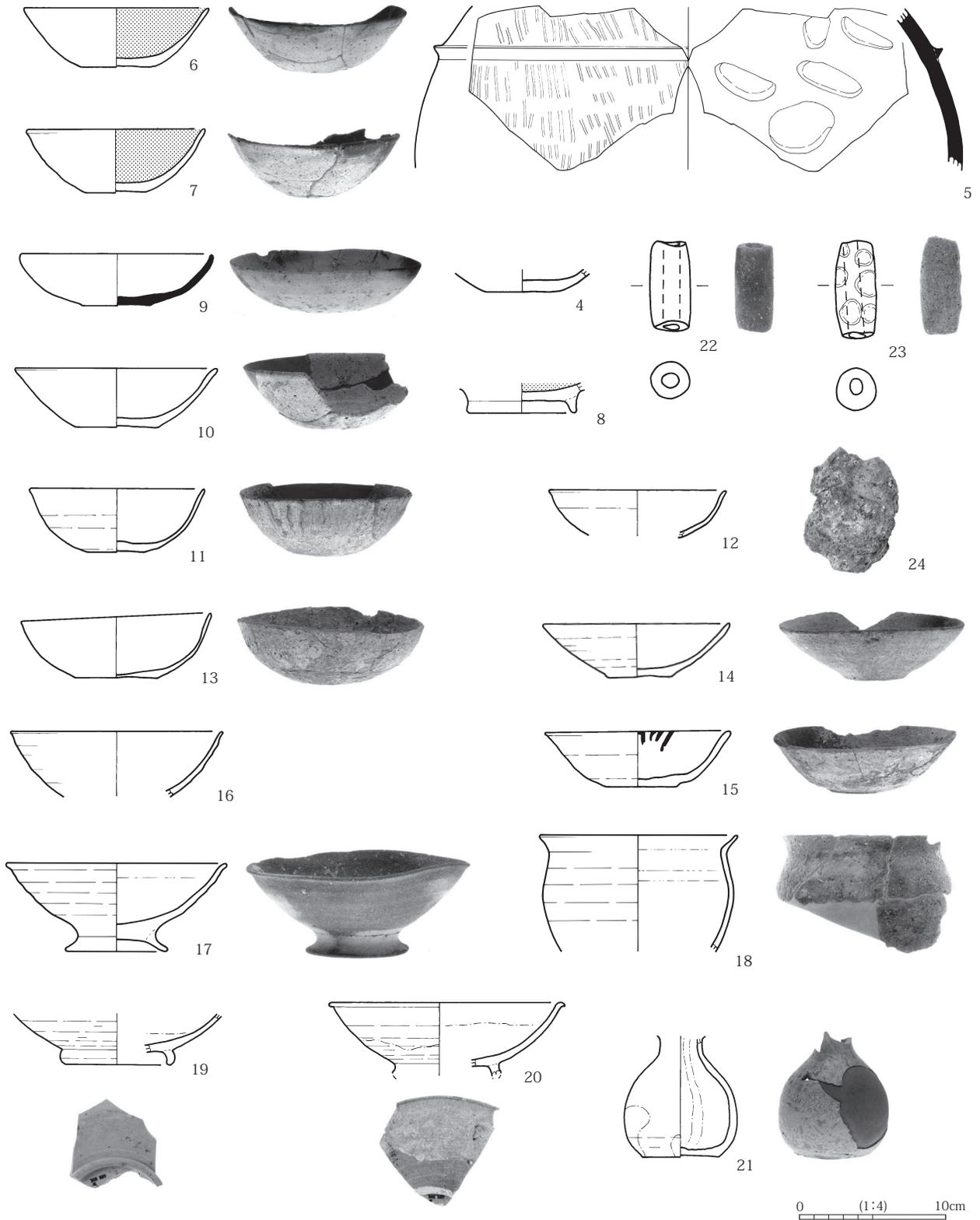
時期の判断根拠：

黒色土器の杯や碗類の数量が少なく、土師器のそれらが増大していること。Pit1では、1片の黒色土器を除きすべて土師器杯A類となっている点、土師器碗の法量分化はまだ進んでいないなどの根拠から、古代9期と考えられるか。黒色土器の6及び7は口径12.0cm、底径5.0cm未満の規格で、狭底グループである。底径4.0cm未満とならない点からも、所属時期は10期までは下らないと判断できる。

床下

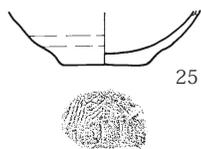


床面



第451図 SB 09 出土の土器 1

埋土



25



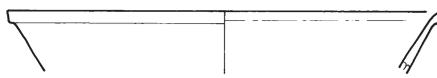
26



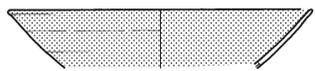
27



28



30



29



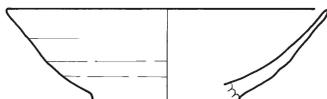
Pit1
下層



31



上層



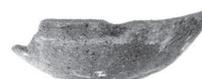
32



33



34



0 (1:4) 10cm

第 452 図 SB 09 出土の土器 2



SB 09 出土の土器

10号竪穴式建物跡（第453図・第454図）

時期： 9世紀代終末を推定（古代9期比定）

位置： IX D - 23（③区）

平面形態： 隅丸正方形

規模： 表面積 13.3 m²（南北 446cm × 東西 372cm）、残存深度 12cm

主軸方向： W - 3° - N

カマド位置： 東側壁

壁立ち上がり： 49度程度の傾斜

柱 穴： なし

埋土堆積： 黒色砂質土（2.5Y12）を基調とし、2層は淡黄砂（2.5Y8/3）の混合、3層は褐色シルト（7.5Y4/4）の混合がある。

遺構重複： SB 15、ST 28、SD 61 と SD 71 を破壊し、SK 591、SK 913、SK 914 に破壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて、黒色土の落ち込みを認めた。SB 15 と重複関係にあったが、東側ラインは明瞭に確認できた。黒色砂質土を掘り下げたところ、床面と考えられそうな面を捉えた。調査が進むに従いカマドと想定できる焼土部分及び土坑（Pit1）を2層から3層検出面にかけて認定したことから、3層下を床と認定した。

遺物出土状況： 大部分の遺物が検出面から埋土にかけての出土である。床面出土の土器は、僅かに18片。

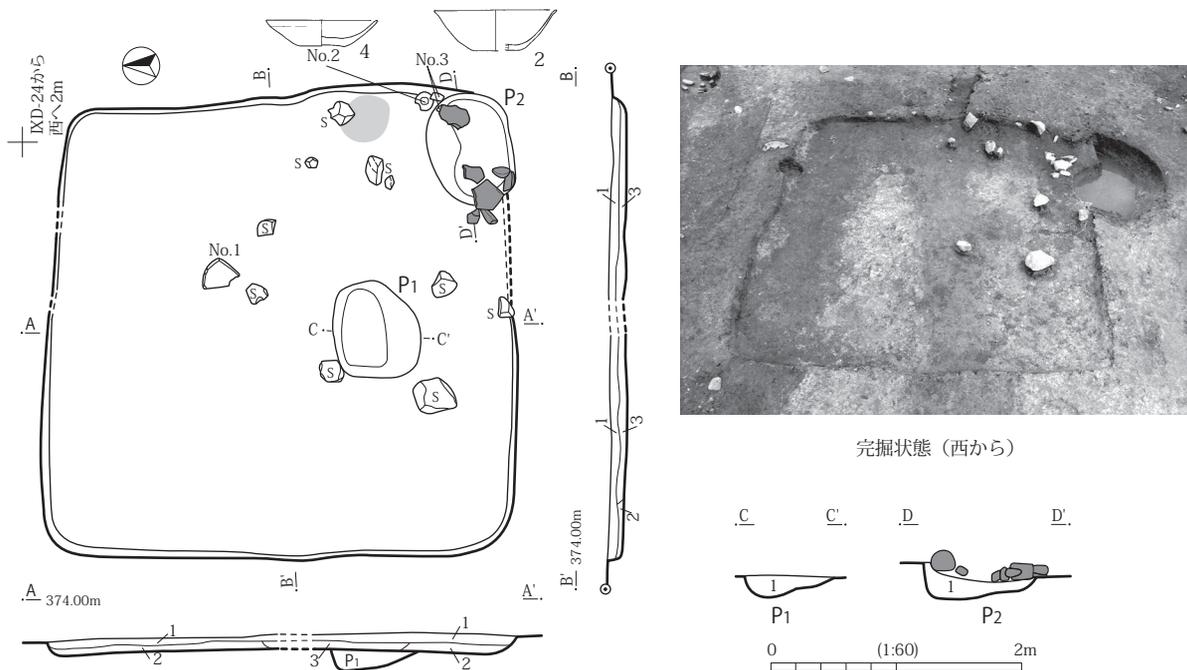
床面の様子： 地山掘削面を床面とするか？

カマドの様子： カマド部分は40cm範囲にわたり認められた焼土分布から想定した。明確な掘り込みや構築材等は確認できなかった。

土坑の様子： 2基確認できた。カマドの右脇側、本跡東南隅部分に規模84cm × 66cm × 16cmを測る楕円形状の土坑を確認、Pit2として調査した。本跡ほぼ中央よりに、規模78cm × 70cm × 16cmを測る楕円形状の土坑Pit1を確認した。ともに黒色砂質土（2.5Y2/1）の単純堆積であった。Pit2からはハンドボール大の礫数点が出土した。

出土遺物： 埋土中の遺物を中心とするが、全体の出土土器組成を第80表に示す。

埋土 1は須恵器杯A類の底部。ヘラ切り離し調整で、底部に「/」の刻書がある。2・3は土師器杯A類。2は口縁部やや広がる形態で、口径12.8cm、底径4.8cmを測る。内外面とも



第453図 SB 10 床面遺物出土の状態

に風化著しい。3はロク口成形痕を明瞭に留め、体部に稜を持つ形態。胎土中に赤色粒子を多量に含む。4・5は浅い皿形A類。4は口径11.6cm、器高2.6cm、底径4.8cmを測る。内面に漆状の付着物が観察できる。5は口唇玉縁状、口径13.6cmを測る。6は土師器盤A類の口縁部破片、口唇内湾し、やや受け口状を呈する。7は灰釉陶器碗の底部破片。内面は磨耗しツルツルし、墨汁痕がある。転用碗であろうか。8は土錘の1/2程度の欠損例。外面には指頭圧痕が観察できる。9は基石か。直径1.5cm、2.0gを量る水晶製。

Pit2 10は須恵器長頸壺の頸部破片。11は黒色土器碗の底部小破片。

時期の判断根拠：

大部分が埋土中の遺物であり、時期決定できる根拠に乏しい。Pit2内の土器が土師器杯A類を主体としている点から、古代9期ごろに比定できるか。また本跡が破壊するSB15が8期であることから、9期以後と考えてよいだろう。

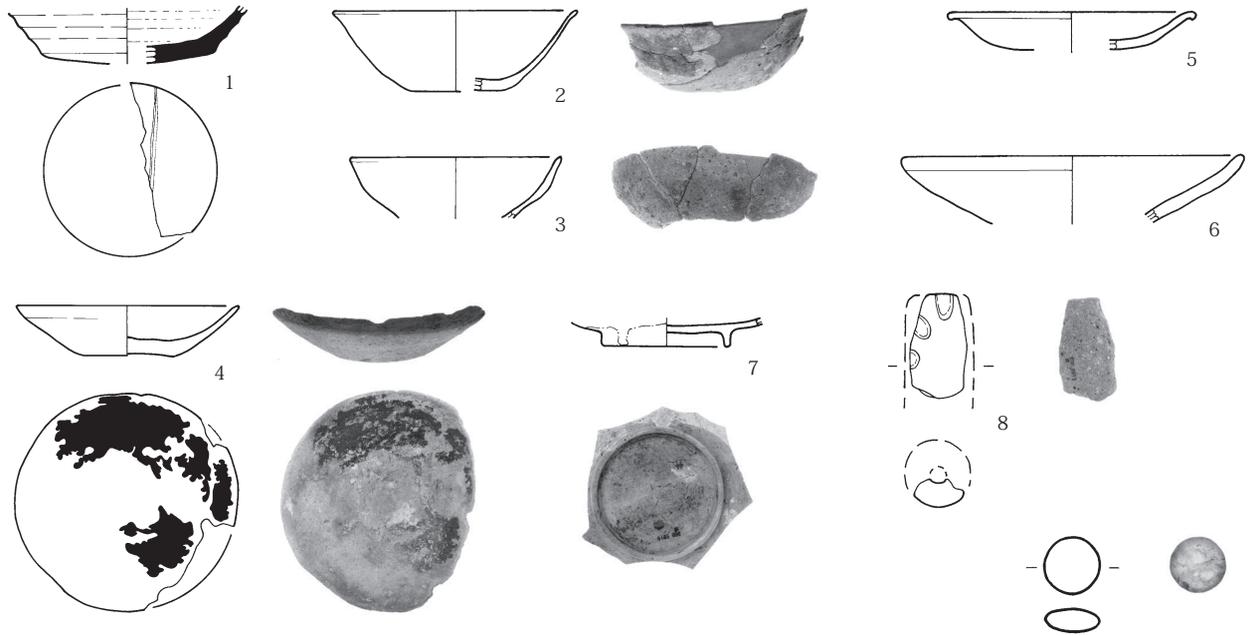
図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台内(cm)	高台高(cm)	備考
	上層	1	須恵器	甕A	体部	—	—	—	—	—	破片1点
第454図4	"	2-A	土師器	皿	3/4	11.6	2.6	4.8	—	—	うるしNo9 内面に漆付着
	"	2-B	須恵器	杯A	体部	—	—	—	—	—	破片1点 ヘラ切り
第454図2	"	3	土師器	杯A	1/3	12.8	4.2	4.8	—	—	外口 狭底

第79表 SB10出土土器属性

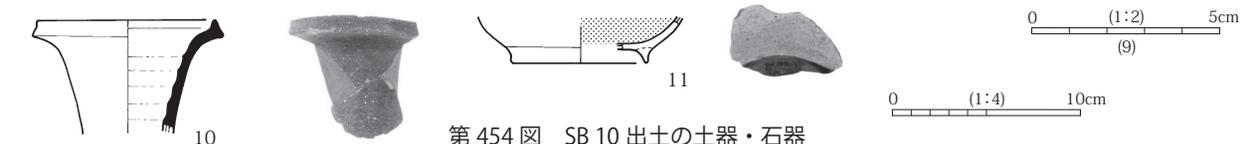
遺構名	土師器											黒色土器A							須恵器			灰釉陶器			数 / 総重量 (破片/g)				
	杯A	碗	盤	蓋	皿	皿B	甕B	甕E	甕I	小型壺	不明	杯A	碗	皿	杯A	蓋	甕A	甕C	甕D	甕E	壺	小型壺	長頸壺	碗		壺	長頸壺		
SB10 検出面	5	1					1	2				3	1		5				7						2			27/191.4	
" 埋土	67	4	2		1	1	26	13	3		1	1	44	4	1	40	4	4	5	8	4	1	7	1		3	1	3	249/2,248.6
" 上層	2				2								13			1			1									19/1,175.5	
" 床面			1					1	1				5			4			4			1					1	18/200.3	
カマド掘方									1				1			1												3/20.3	
Pit2 埋土	31	1	1				1	2		2			11	2		4			1				2					58/281.0	

第80表 SB10出土土器組成

埋土上層



Pit2



第454図 SB10出土の土器・石器

1 1号竪穴式建物跡（第455図・第456図）

時期： 8世紀代中頃から終末を推定（古代3期ないし4期比定）

位置： IX D - 18, 19（③区）

平面形態： 隅丸正方形

規模： 表面積 9.7 m²（南北 334cm × 東西 318cm）、残存深度 14cm

主軸方向： N - 5° - E

カマド位置： 東側壁

壁立ち上がり： 71度程度の傾斜

柱 穴： なし

埋土堆積： 1層暗褐色土（10YR3/3）の単純堆積。炭化物及び白色粒子を僅かに混入する。床面近くに白色粒子の粘質土をブロック状に混入。

遺構重複： SB 16, SK 867 を破壊し、SB 09, SD 52, SK 1040 に壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて、暗い褐色土の落ち込みを認めた。幾つかの遺構重複を認めたが、切り合い関係は比較的明瞭であった。ただし、SB 16 を破壊していたことは明白であったが、SB 16 のプランは判然としなかった。また SK 696 とは、接するが切り合わないと判断した。

遺物出土状況： 切り合い激しく、大半が埋土中の遺物である。カマド部分は SB 09 と重なり合って検出されており、遺物の混在を考慮する必要がある。

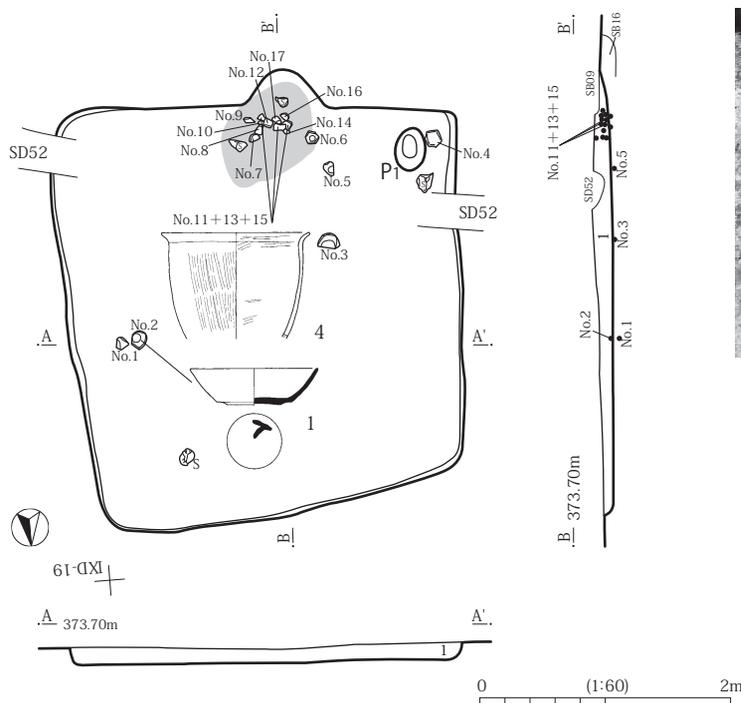
床面の様子： 地山掘削面を床面とする。

カマドの様子： カマド部分は SB 09 に破壊されていたが、煙道への接続部分と燃焼部残骸を確認することができた。カマド内からは、土師器甕形土器の一括個体が出土した。

土坑の様子： カマドの右脇側、本跡南西隅部分に規模 32cm × 24cm × 12cm を測る楕円形状の土坑を確認し、調査した。埋土は白色粒子を含む黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積。

出土遺物： 埋土中の遺物が大部分を占め、床面出土遺物は須恵器杯 A 類 1 片と甕 D 類 2 片のみであった。出土土器の内訳は第 82 表に示す。

床面 1 は第 455 図 No2 にあたり、須恵器杯 A 類 2/3 個体。口径 13.2cm、底部内径 7.0cm を測る。底部糸切り離し手法で、凸状。筆幅 0.4cm ほどの太さで、「人か」の一字墨書。



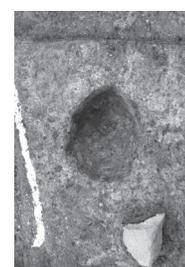
第 455 図 SB 11 床面遺物出土の状態



完掘状態（北から）



Pit1 半截状態



Pit 1 完掘状態

埋土 2は須恵器杯B類 1/4 程度の個体。体部がやや湾曲して張る形態で、外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。器高 5.2cm、高台は潰れた平接地。3は須恵器杯蓋の 1/3 程度の破片。つまみは中央やや突出するが平たく体部外面 1/3 程度ケズリ調整がある。かえしは直でやや端部外。図示していないが、1点須恵器杯A類の底部破片で、墨書一字「□」の観察できる資料がある。

カマド埋土 4はNo13Aの土師器甕B類の 1/4 個体。口縁部は強く外反し、体部は条の粗い板状工具で縦方向にナデ整形される。

時期の判断根拠：

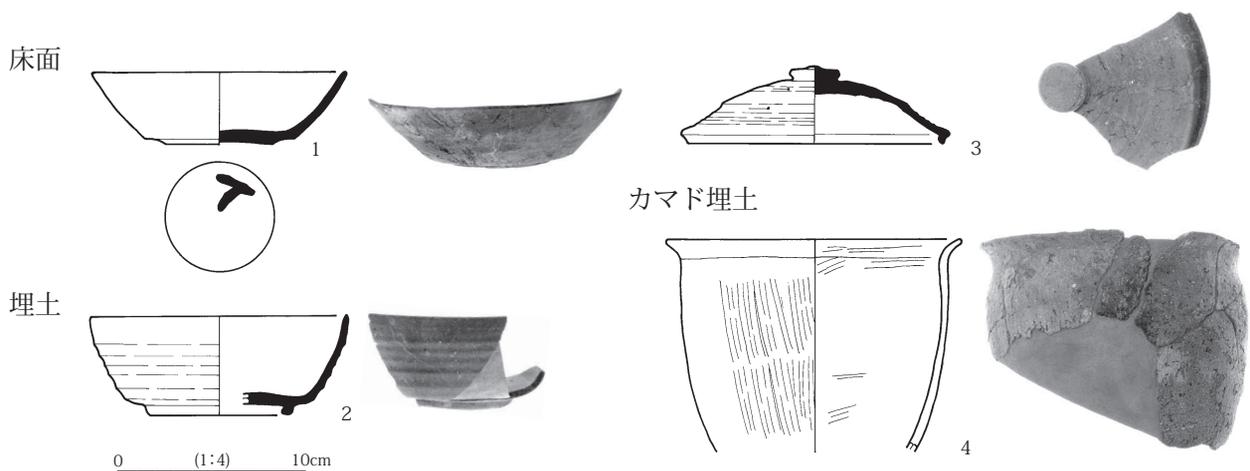
杯類は須恵器のみである点、床面出土の杯A類は底部内径 7.0cm と大きい特徴があることから、古代4期前後の様相と判断できるか。

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台内(cm)	高台高(cm)	備考
	埋土	4	須恵器	甕E	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	6	土師器	小型甕D	底部	—	—	6	—	—	糸切り
	"	7	須恵器	杯A	口縁	14	—	—	—	—	破片
	"	9	須恵器	杯A	口縁	16	—	—	—	—	破片
第456図1	床面	2	須恵器	杯A	2/3	(13.2)	(3.8)	5.7	—	—	糸切り 墨書あり
	床下	1	須恵器	甕D	口縁	—	—	—	—	—	破片 No3 と同一個体か
	"	3	須恵器	甕D	底部	—	—	—	—	—	破片 No1 と同一個体か
	"	5	黒色土器A	杯A?	底部	—	—	7	—	—	破片
	カマド埋土	12	須恵器	蓋	体部	16	—	—	—	—	1/2 以下ケズリ かえし外
	"	14	土師器	杯A	体部	—	—	—	—	—	破片 黒色土器か?
	"	16	土師器	杯A	体部	—	—	—	—	—	破片 黒色土器か?
	"	11	土師器	甕B							No13-A, No11 と接合
第456図4	"	13-A	土師器	甕B	1/4	(15.5)	—	—	—	—	No11, No15 と接合
	"	15	土師器	甕B							No13-A, No11 と接合
	"	13-B	土師器	杯?	体部	—	—	—	—	—	破片
	"	13-C	土師器	椀	高台部	—	—	—	—	—	破片
	"	8	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No13-A 接合と同一個体
	"	10	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No13-A 接合と同一個体
	"	17	土師器	甕B	体部	—	—	—	—	—	破片 No13-A 接合と同一個体

第81表 SB11 出土土器属性

遺構名	土師器									黒色土器A: 須恵器										数 / 総重量 (破片 / g)				
	杯A	椀	甕	甕A	甕B	甕E	小型甕	小型甕A	小型甕D	不明	杯A	杯A	杯B	蓋	甕	甕A	甕C	甕D	甕E		壺	短	長	頸壺
SB11 埋土	6	38	37	22	5	4	2	1	11		31	87	12	17	1	2	8	13	8	2	4	2		313/3,192.6
" 床面													1					1		1				3/199.6
" 床下											1							2						3/449.1
カマド埋土	5	1		14										1										21/227.9

第82表 SB11 出土土器組成



第456図 SB11 出土の土器

1 2号竪穴式建物跡（第457図～第464図）

時期： 9世紀代前半から中頃を推定（古代6期ないしは7期比定）

位置： IXD-14, 19（③区）

平面形態： 隅丸正方形

規模： 表面積 15.4 m²（南北（442）cm × 東西 362cm）、残存深度 8 cm

主軸方向： N - 15° - E

カマド位置： 北側壁

壁立ち上がり： 71度程度の傾斜

柱穴： なし

埋土堆積： 1層黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積。炭化物及び白色粒子、焼土ブロックを僅かに混入

遺構重複： SB 16、SD 77 を破壊し、SB 07、SK 902 に壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて実施した遺構検出では、落ち込みの全体を確認することはできなかった。試掘坑2箇所断面から、隅部分を確認できたことから、全体の形状を決定した。本跡とSB 07との関係は、SB 07のカマド跡が確認できたことによるが、新旧は不明。

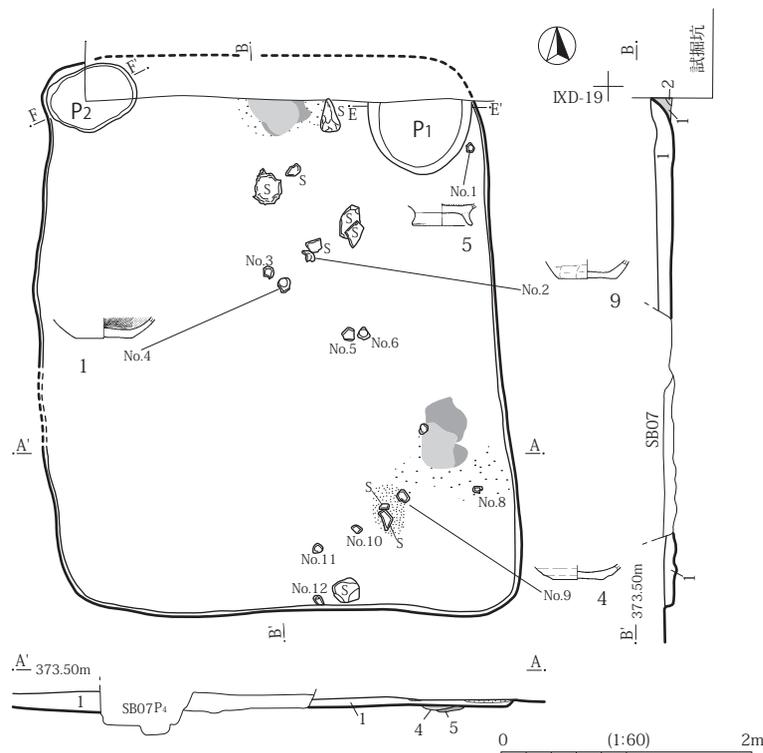
遺物出土状況： 切り合い激しく、大半が埋土中の遺物である。カマド部分はSB 09と重なり合って検出しており、遺物の混在を考慮する必要がある。

床面の様子： 地山掘削後、2枚の埋土により床面を形成したと考えられる。

床下の様子： 床下の埋土は、黒褐色土（2.5Y3/1）を基調とし、混入物により2層と3層に分層した。ともに炭化物及び白色粒子を含み、上層に従い白色粒子の混入量を増す。

カマドの様子： カマド部分は北側部分にて確認できたが、試掘坑により、半分程度破壊してしまった。燃烧部の火床と考えられる4層及び5層焼土、燃烧部掘り方にあたる6層及び7層（黒褐色土 10YR3/2）の埋土を確認した。カマド構築材等は確認できなかった。

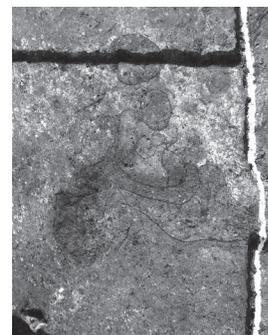
柱穴の様子： 床面では土坑以外に柱穴は検出できなかったが、床下調査時に10基の柱穴ないしは土坑を検出した。それぞれの属性は第83表に示す。Pit5とPit10は本跡のほぼ中央付近で検出したが、対になる位置にあって、ともに礎石と考えられる礫が出土している。



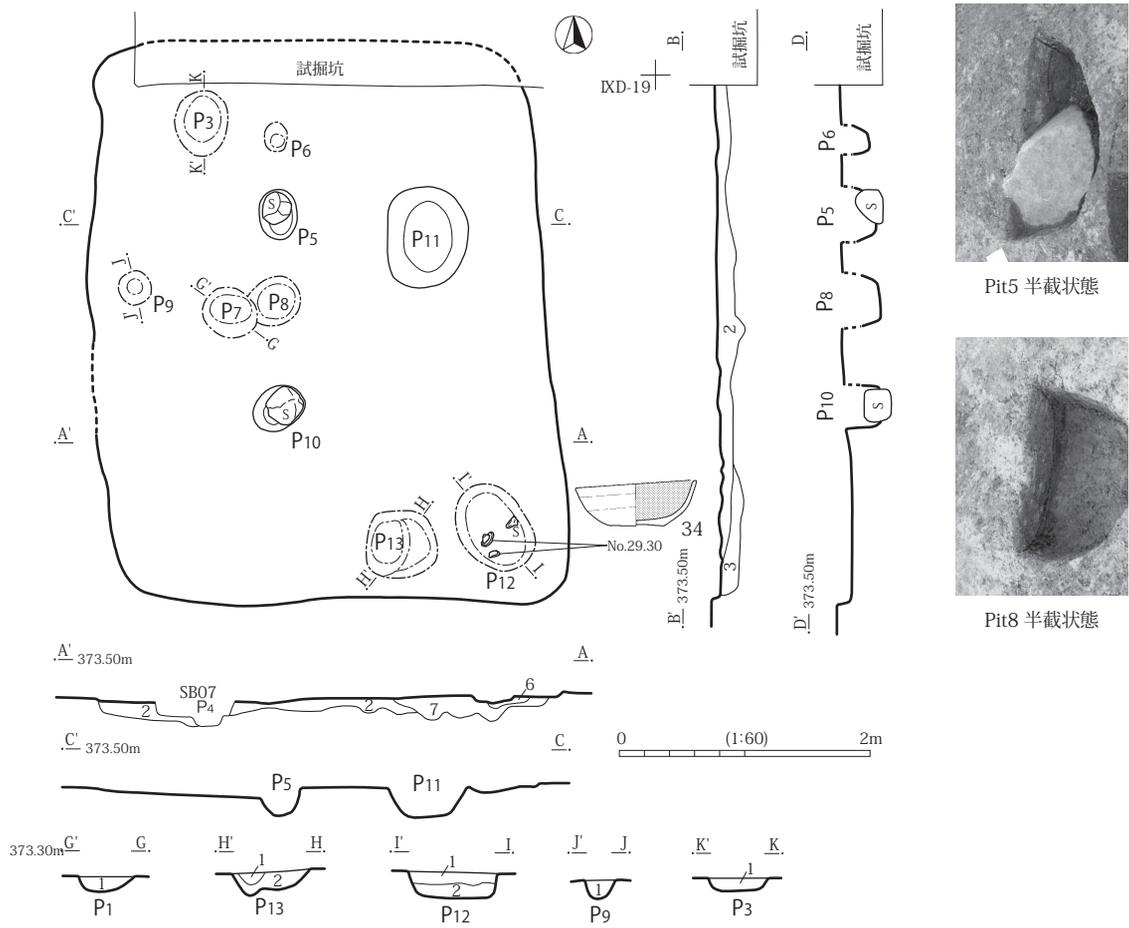
第457図 SB 12 床面遺物出土の状態



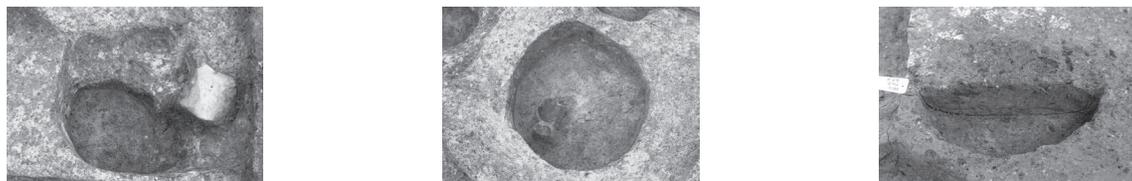
完掘状態（南から）



カマド完掘の状態



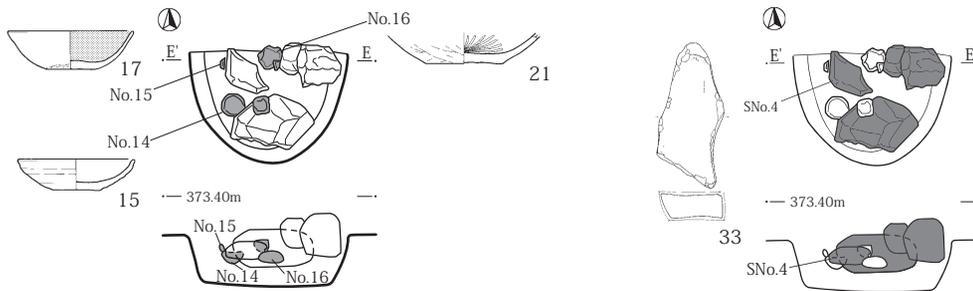
第 458 図 SB 12 床下完掘の状態



Pit13 完掘状態

Pit12 完掘状態

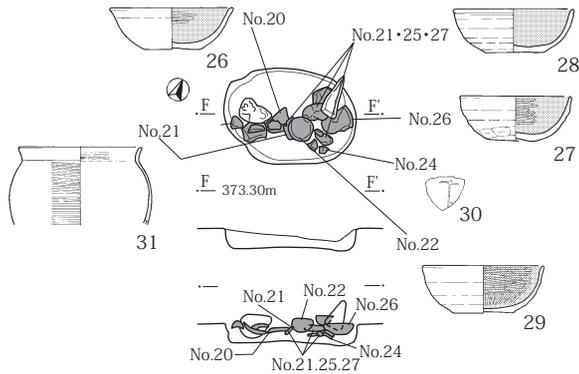
Pit3 半截状態



第 459 図 Pit1 遺物出土状態

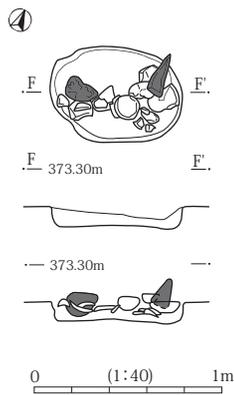


第 460 図 No4 砥石出土状態



Pit2 遺物出土の状態

第 461 図 Pit2 遺物出土状態



遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit1	IX D-19	楕円?	A	(60)	82	30		
Pit2	IX D-19	楕円	A	70	50	10	2.5Y3/2	
Pit3	IX D-19	楕円	A	50	42	10	2.5Y3/2	
Pit5	IX D-19	楕円	A ?	38	30	14	1層 2.5Y3/2, 2層 2.5Y3/1	
Pit6	IX D-19	楕円	D	22	18	16	2.5Y3/2	
Pit7	IX D-19	円	D	44	40	10	2.5Y3/2	
Pit8	IX D-19	円	A	40	38	12	2.5Y3/2	
Pit9	IX D-19	円	A	26	26	16	2.5Y3/2	
Pit10	IX D-19	楕円	G	42	34	26	1層 2.5Y3/2, 2層 2.5Y3/1	
Pit11	IX D-19	楕円	D	80	62	22	1層 2.5Y4/2, 2層 2.5Y3/2	
Pit12	IX D-19	楕円	A	72	54	20	1層 10YR3/2, 2層 2.5Y3/1	
Pit13	IX D-19	円	D	56	58	16	1層・2層 10YR3/2	

第 462 図 Pit2 礫出土状態

第 83 表 SB 12 柱穴属性

土坑の様子： 床面で検出した土坑は 2 基ある。いずれも北の壁側に検出でき、カマド右脇側の北東隅 Pit1 と北西隅の Pit2 である。Pit1 は試掘坑により半分ほど破壊してしまったか、埋土中位にバレーボール大もある礫が数点出土し、これに伴うように黒色土器杯 A 類が出土した。礫中には大形の置き砥石 1 点も含まれている。これらは出土状況から投棄されたものと考えられる。同様な状況は Pit2 でも確認でき、埋土の黒褐色土 (2.5Y3/2) 中位からハンドボール大程度の礫が多数と黒色土器の杯 A が主体的に出土した (第 459 図・第 460 図)。一方、ほぼ同規模な土坑が床下でも検出でき、Pit11 及び Pit12 などがそれにあたる。Pit12 からは、やはり黒色土器の杯 A 類 (第 464 図 34) が出土している。

出土遺物： 埋土中の遺物は 400 片を超すが、黒色土器の杯 A 類の破片数が多い。椀は極めて少なく、土師器と黒色土器で各 1 片しかない。出土土器の内訳は第 86 表に示す。

床下 1 は土師器の鉢形土器底部の破片。底及び底部付近の外表面は丁寧にケズリ調整される。2 は黒色土器 A の杯 A 類口縁部破片。体部外表面に太く「人カ」の墨書が観察できる。3 は灰釉陶器椀の底部。底にかすれて判読できない文字「□□」があり、内面には朱墨痕が観察できる。この他、鉄滓の破片 1 点 (5.9g) がある。

床面 4 は No9 にあたり、土師器杯 A 類底部。ロクロ成形痕を明瞭に残し、底部凸状に張り出す形態。5 と 6 は黒色土器 A 類。5 は No1 で椀底部の破片。6 は杯 A 類の口縁部破片。へら状工具による幅 0.2cm の焼成前刻書「八千」が観察できる。7 は土師器甕形土器 I 類の口縁部破片。外表面にロクロ成形痕を明瞭に残す。8 は黒色土器 B 類の小型瓶の底部破片か。SB 07 の第 444 図 7 と同様な個体であろうか。外表面丁寧にミガキ整形される。

埋土 中層からは 9 から 13 が出土している。9 は土師器小型甕の底部。10 は黒色土器 A 杯 A 類

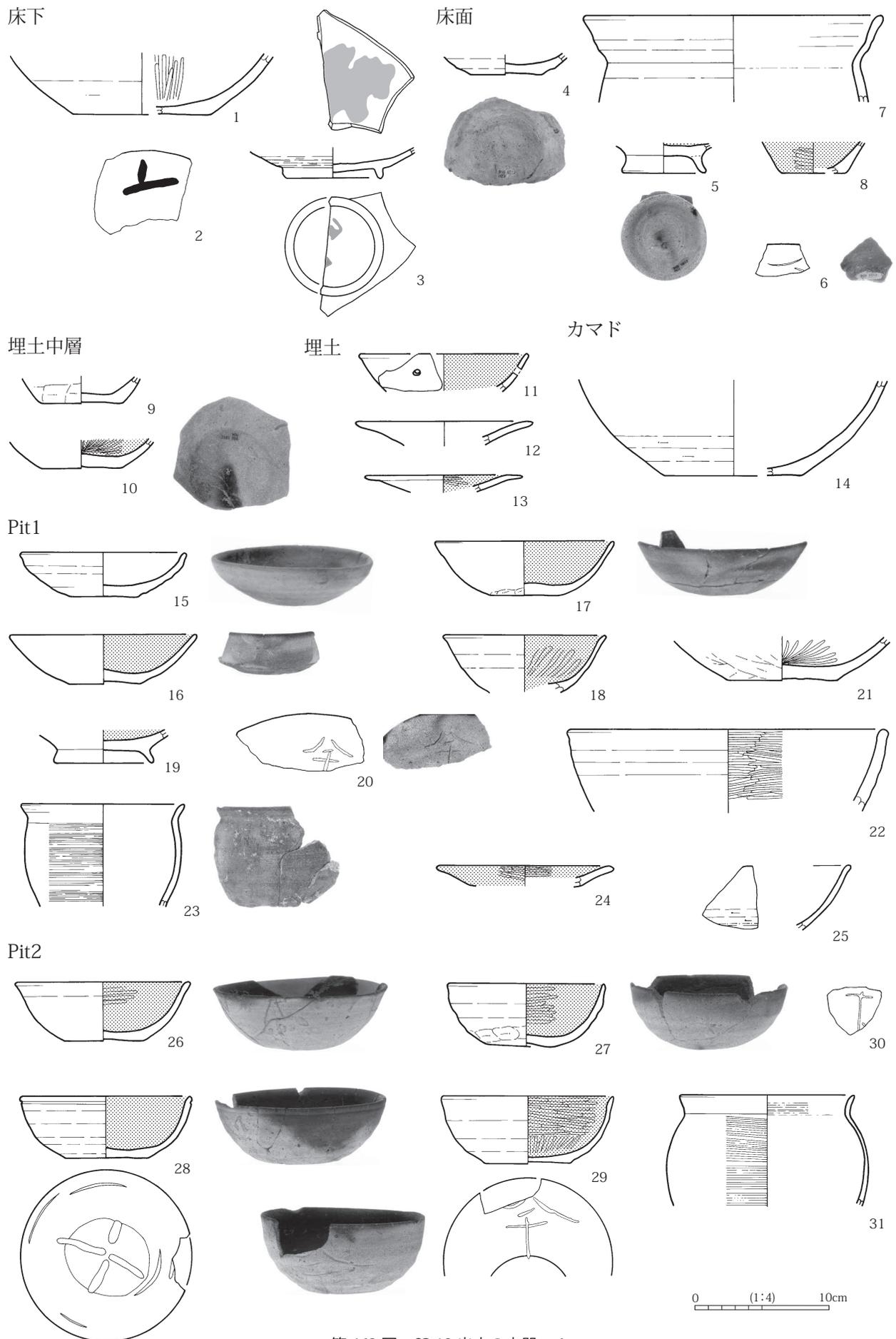
の底部で No4 に相当する。底部外面には刻目「△」が観察できる。11 は土師器の杯 A 口縁部破片。外面から直径 0.4cm の穿孔がある。こうした穿孔ある土器は本例だけである。12 は土師器皿形土器あるいは盤 B 類の口縁部破片。13 は同器種の黒色土器 A 類。その他、9.8cm × 2.1cm × 1.0cm の板目の割材 1 点がある。

カマド 14 は土師器の鉢形土器底部の破片で、床下出土の 1 と同一個体か。35 は鉄片 (3.9g) と考えられる。

Pit1 15 は No14 で、土師器杯 A 類。非常に硬質感のある焼成で、生焼けの須恵器の可能性もある。口径 12.0cm、底径 5.0cm、器高 3.3cm を測る。容量 120ml。16 ~ 20 までは黒色土器 A 類。16 から 18・20 が杯 A 類。16 は外に大きく直口して開く形態で、口径 13.6cm、底径 5.2cm を測る。17 は No15A で椀形の 2/3 個体。底部は幅 1.5cm 程の工具でへら起こし、底部外面付近はケズリ調整。口径 13.0cm、底径 4.9cm を測る。18 は口縁部の破片で、内面は非常に良好な放射状のミガキ調整。19 は土師器の椀底部。20 は口縁部破片で、外面には焼成前の刻書「八千」が幅 0.2cm の鋭いへら状工具で刻まれる。21 と 22 は土師器鉢形土器で同一個体か。21 は No16 で底部、22 は口唇直下外面を幅 1.0cm で強く横ナデする。23 は土師器小型甕 D 類の 1/4 個体。外面は幅 1.5cm の板状工具によるナデでかき目整形である。24 は黒色土器 B 類の皿 A 口縁部の破片。25 は灰釉陶器椀の口縁部破片。刷毛塗り施釉。33 は細粒砂岩材の置き砥石で、No4。30.4 × 12.6 × 5.0cm、表裏両側面使用。

図版番号	出土地点	土器番号 ()は新番	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
	埋土	なし	灰釉陶器	平瓶	2/3	—	—	—	—	—	SB01埋,SD03No237他と接合
	中層	3	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	5.3	—	—	広底 刺突あり 糸切り
第 463 図 10	"	4	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	5.8	—	—	広底 刺突あり ケズリ? ナデ
	"	5	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	5.4	—	—	広底 糸切り
第 463 図 9	"	2	土師器	小型甕 D	底部	—	—	6.0	—	—	底部付近ケズリ 糸切り
	"	6	須恵器	甕	体部	—	—	—	—	—	
	"	12	黒色土器 A	杯 A	口縁	12.0	—	—	—	—	
第 463 図 5	床面	1	黒色土器 A	椀	底部	—	—	6.0	3.5	1.3	
	"	7	土師器	甕	体部	—	—	—	—	—	
	"	8	土師器	鉢	体部	—	—	—	—	—	底部付近ケズリ
第 463 図 4	"	9	土師器	杯 A	底部	—	—	5.2	—	—	広底 糸切り
	"	10	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	4.7	—	—	狭底 糸切り?
	"	11	黒色土器 A	杯 A	底部	—	—	—	—	—	破片
第 463 図 15	Pit1 中層	1(14)	土師器	杯 A	完形	12.0	3.3	5.0	—	—	軟質須恵器 底広 内口
第 463 図 17	"	2-A(15)	黒色土器 A	杯 A	2/3	13.0	4.0	4.9	—	—	広底 直口 手持ちへらケズリ 底部ケズリ
第 463 図 21	"	3(16)	土師器	鉢 A	底部	—	—	8.0	—	—	底部ケズリ
	"	2-B(15)	土師器	甕?	体部	—	—	—	—	—	破片
	Pit2 中層	1(17)	黒色土器 A	杯 A	1/4	14.0	4.0	6.0	—	—	広底 外口 糸切り
	"	2(18)	土師器	盤 A	体部	—	—	—	—	—	
	"	3(19)	黒色土器 A	杯 A	口縁	12.0	—	—	—	—	破片
第 463 図 26	"	4(20)	黒色土器 A	杯 A	完形	12.7	4.35	5.8	—	—	広底 直口 糸切り
第 463 図 31	"	5-A(21-A)	土師器	小型甕 D	口縁	—	—	—	—	—	かき目
第 463 図 29	"	6(22)	黒色土器 A	杯 A	完形	12.4	5.0	6.2	—	—	広底 直口 刻書八千
	"	7(23)	黒色土器 A	杯 A	口縁	14.0	—	—	—	—	破片 直口
第 463 図 30	"	8(24)	黒色土器 A	杯 A	体部	—	—	—	—	—	刻書八千
第 463 図 28	"	9(25)	黒色土器 A	杯 A	完形	12.4	4.6	6.0	—	—	広底 直口 No27, No21-B と接合
第 463 図 27	"	10(26)	黒色土器 A	杯 A	完形	11.4	4.5	5.0	—	—	手持ちへらケズリ 底部ケズリ 狭底 直口
	"	12(28)	土師器	甕 I	体部	—	—	—	—	—	
第 464 図 34	Pit12	1(29・30)	黒色土器 A	杯 A	3/4	12.4	4.4	6.2	—	—	広底 直口 糸切りナデ No30 と接合

第 84 表 SB 12 出土土器属性



第 463 図 SB 12 出土の土器 1

第3章 発掘調査の概要

図版番号	出土位置	焼き物種類	器種	現存部位	記入方法	用筆ほか	記入部位	向き	文字	備考
第463図2	SB 12 床下	黒色土器 A	杯 A	口縁部	墨書	0.4cm	体部		「人」か	墨にじむ
第463図3	SB 12 床下	灰釉陶器	椀	底部	墨書	0.2cm	底部		「□□」	
	〃				朱墨痕		底内面		「□」	
第463図6	SB 12 床面	黒色土器 A	杯 A	口縁部	刻書	0.2cm	体部	正位	「八千」か	焼成前
第463図20	SB 12 Pit1	黒色土器 A	杯 A	口縁部	刻書	0.2cm	体部	正位	「八千」	焼成前
第463図29	SB 12 Pit2	黒色土器 A	杯 A	ほぼ完形	刻書	0.2cm	体部	正位	「八千」	焼成前
第463図30	SB 12 Pit2	黒色土器 A	杯 A	口縁部	刻書	0.2cm	体部	正位	「八千」か	焼成前
	SB 12 埋土	黒色土器 A	杯 A	体部	刻書	0.2cm	体部		「□」	焼成前

第85表 SB 12 出土墨書土器属性

遺構名	土師器	黒色土器 A												黒色土器 B				須恵器										灰釉陶器			数 / 総重量 (破片 / g)					
		杯A	椀	鉢	鉢A	蓋A	蓋B	蓋C	蓋H	蓋I	小型	小型A	小型B	小型D	不明	杯A	椀	鉢	鉢B	鉢	小型	杯A	杯B	蓋	蓋A	蓋C	蓋D	蓋E	蓋	短頸		長頸	椀	平瓶	長頸	
SB 12	埋土	83	1	1	1		42	5	2	1	23	21	23		3	15	127	4	1					25	2	3	2	4	3	4	5	3		10	1	415/3,090.3
〃	埋土中層														1	6																			8/374.5	
〃	床面	1		1			1	4		1	2	2		1	3	1	8	1					1												30/461.0	
〃	床下	19		4			2			5	15	6	3		7		44		3				4		1		2	3	1	1	1	3	1	125/1,259.0		
カマド																	1																	6/190.6		
Pit1	埋土	9	1	2	2		1		1	1	5	7	1		7		23	1	1	4	1	1								1	5		1	75/1,160.5		
〃	中層	1					1		2								4																	8/494.8		
Pit2	埋土	1													3	2	6						2										1	16/9.0		
〃	中層						1						1		4		31																	37/981.1		
Pit3	埋土	3								1					1		10		1					1									1	19/252.5		
Pit6	埋土																						1											1/1.0		
Pit7	埋土	1													1		1																	5/47.0		
Pit8	埋土	1													1																			2/9.1		
Pit10	埋土												1				2															1	4/11.0			
Pit11	埋土	2															4															3	17/247.7			
Pit12	埋土														1		6						3											10/149.6		

第86図 SB 12 出土土器組成

Pit2 26～30までは黒色土器Aの杯A類。26はNo20でほぼ完形。口縁直口して真直ぐに開く形態で、口径12.7cm、底径5.8cmを測る。27から29は深い椀形でほぼ同形態の完形品。27はNo26、底部糸切り離し後にヘラケズリ調整。底部付近の外表面もロクロ成形痕をヘラケズリ調整する。口径11.8cm、底径5.0cm。28はNo25、糸切り離し後、底部外表面をケズルと表現するより、押さえるように調整する。口径12.4cm、底径6.0cmを測る。内面は丁寧に黒色処理し十字暗文風のミガキが観察できる。29は底部糸切り離し後、無調整で、外表面にもロクロ成形痕を明瞭に留める。体部外表面には、焼成前の刻書「八千」が正位で刻まれる。30も29同様な杯Aで、体部の小破片。焼成前刻書で「□千」が正位に刻まれるが、恐らく「八千」であろう。31はNo21、土師器小型甕D類、口縁部破片。工具単位が判読できないほど、丁寧に重ねてかき目状に整形される。

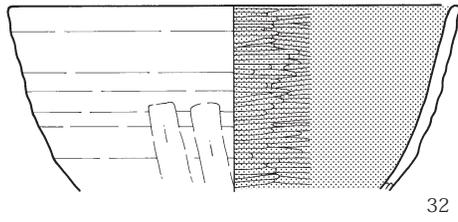
Pit3 32は黒色土器Aの鉢形土器。口縁部破片。外表面にロクロ成形痕を明瞭に残す。

Pit12 34はNo29・30の黒色土器Aの杯A類。底部糸切り離し後、ヘラケズリ整形し、底部付近は押圧調整か。口径12.4cm、底径6.2cmを測る。35は鉄滓片か、8.5g。

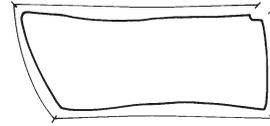
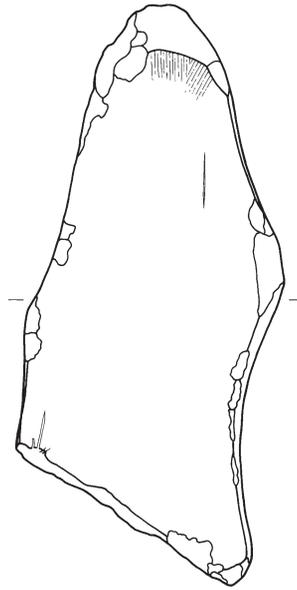
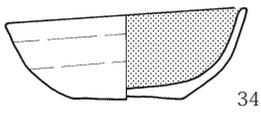
時期の判断根拠：

須恵器杯B類が皆無に近く、杯A類も少量であることから、須恵器の食器類は消滅していると判断できる。よって、6期または7期以後と考えることができる。土師器の食器がまだ少なく、黒色土器に主体がある点を考慮すれば、古代8期以後には下らないであろうから、概ね古代7期前後に比定できるか。Pit2の黒色土器の杯A類は、胴の張り出した深い椀形であり、底部にヘラ起こしに伴うケズリ調整が入る。こうした特徴は、6期に比較的顕著である。焼成前の刻書「八千」のみである点、留意すべきであろう。

Pit3



Pit12



0 (1:4) 10cm

第 464 図 SB 12 出土の土器・石器ほか 2



SB 12 出土の土器

1 4号竪穴式建物跡（第465図～第476図）

時期： 8世紀後半を推定（古代4期比定）

位置： VIII X-17, 22（②区）

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 30.2 m²（南北 564cm × 東西 543cm）、残存深度 14cm

主軸方向： N-2°-W

カマド位置： 北壁中央

壁立ち上がり： 58度程度の傾斜

柱穴： 4本主柱穴，柱穴8本

埋土堆積： 調査段階では、色調や締まり具合、混入物の量比等から15層に区別した。しかしながら、埋土全体の特徴として、基調は黒褐色土（1層 10YR3/2）であり、単純堆積と判断する。

遺構重複： SB 17、SD 24 を破壊し、ST 29 に壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認した。方形状に広がることから、竪穴式建物を想定したが、形状に歪みがあり精査の結果、2軒が重複していると判断した。平面確認では新旧関係がつかめなかったことから、土層観察用畔を設定し、慎重に調査を進めた。結果、落ち込み部分の東側にて、僅か 10cm 程度の掘削で床面と考えられる締まりのある砂質土及び北側から伸びる竪穴の東側壁と考えられるラインを検出した。重複した2軒は西側に新が、東側に古を想定できたので、西側に SB 14 を、東側に SB 17 を付号した。SB 14 の床面は浅く、僅かに 1cm 程度で、SB 17 とほとんど違いがない。床面のほぼ中央部に SB 17 の火床部分と考えられる焼土が認められたことから、極く極く近時に建て替えられた建物の可能性が高い。あるいは、我々の想定し得ない複雑な形態をもった一軒の建物である可能性も視野に入れておくべきであろう。以上から、本跡と SB 17 は同時に検出し調査した遺構であり、柱穴等も、その配置から、それぞれの帰属を決定した。ST 29 の重複を含め、非常に複雑で、厳密な意味で柱穴等の所属や新旧を決し得たものではない。

遺物出土状況： 埋土及び床面の出土土器はほとんどない。カマド内部より須恵器甕形土器の一括資料（第468図）1点が出土した。また Pit3・Pit4 の柱穴からは礎板材が出土し、西側と南側の周溝からは組み合わせの木製樋が出土した（第469図）。

床面の様子： 地山掘削面を床面とする。SB 17 床面との違いは不明瞭。

カマドの様子： カマドは北側壁中央部にて確認した。煙道接続の部分は、ST 29 の Pit1 により破壊され消滅。袖部は崩壊していたが、20cm ほどの厚さで構築材と考えられる粘質砂質土が帯状に認められた。付近から袖部芯材であろうか、長さ 20cm 程の板状の礫が散乱して出土した。両袖に囲まれた内部が燃焼部であるが、火床そして明瞭な焼土跡は確認できなかった。ただし、中央部分には支脚石と考えられる花崗岩が1点突き刺さった状態で出土した（第465図）。埋土は3層からなり、上位から1層黒色粘質土（10YR2/1）、2層褐色粘質土（10YR4/1）、3層黒色砂質土（10YR2/1）が堆積、カマド灰掻き出し部には、さらに4層黄褐色粘土（10YR5/6）、5層褐色粘土（10YR4/1）、の堆積が認められた。いずれの埋土も 0.5cm 大の炭化物を多量に含んでいた。



SB 14・17 調査の状況（南から）



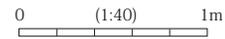
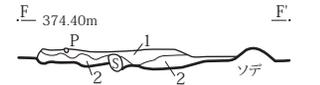
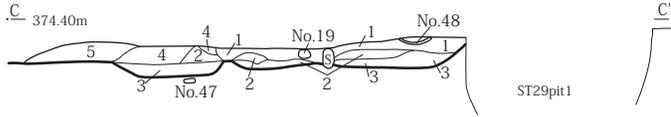
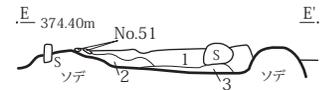
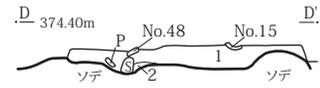
SB 14 埋没土層（東西畔・南から）



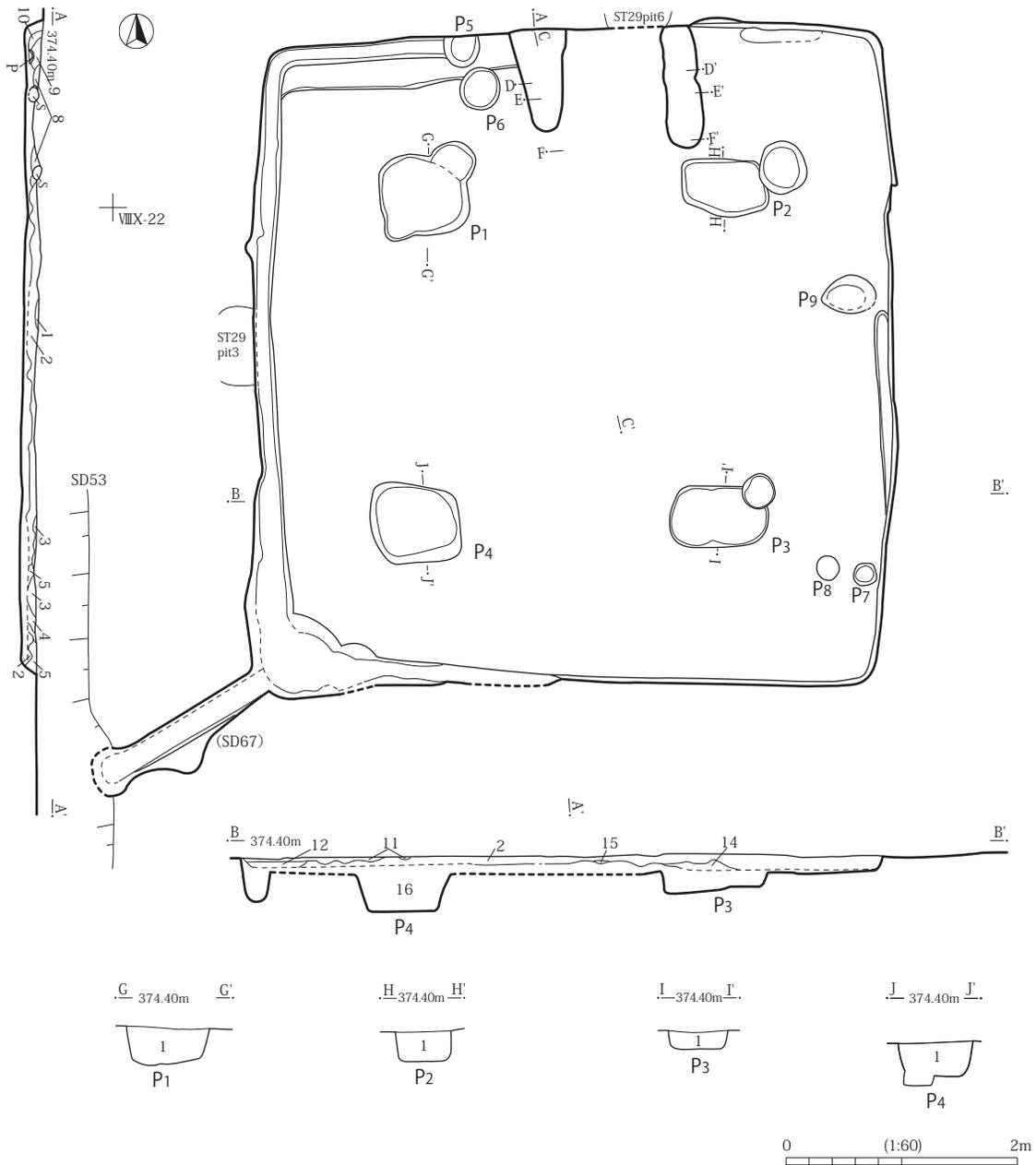
SB 14 カマド調査状況 1



SB 14 カマド調査状況 2



第 465 図 SB 14 カマド埋没土層



第 466 図 SB 14 床面完掘の状態

主柱穴の様子： 主柱と考えられる柱穴は4本検出でき、北西側から Pit1 を符号した。4基とも炭化物を混入し、粘性・締まりの強い黒褐色土（10YR3/1）の単純堆積である。形態は東西にやや長い方形である。Pit1 は検出時に付札木簡（第470図9）が出土した。Pit3 と Pit4 には礎板材が残っており、Pit3 では2枚が異方向に間層をもって重ねられたように出土した。各柱穴には円形状を呈する別の柱穴が複合しており、Pit3 の状況を考え合わせると、柱穴の建て替えを想定することができるか。この場合、各 Pit の新旧は、方形状のものから、円形のものへ交代すると判断できる。

柱穴の様子： 主柱以外の補助柱穴は5本検出できた。カマド左脇に2基（Pit5 と Pit6）、本跡東側壁際に2基（Pit7 から Pit9）である。Pit8 は掘り方は確認できなかったが、直径20cm 弱の柱材を検出した。また Pit9 からは礎板材2点（第472図14・15）が出土した。

周溝の様子： 本跡の四隅に周溝が認められた。北側は、カマド左脇に1本、Pit5 を始点とするように西周りに巡る。カマド右脇側から右周りにかけては、検出不明瞭で僅かにその痕跡を確認できたに留まった。左周り西側の周溝及び南側周溝部分には木樋が埋設されており、南西隅に枳のような集水用の土坑が掘られていた。枳からはさらに排水管状の施設が設置され、SD 53 に接続されていた。

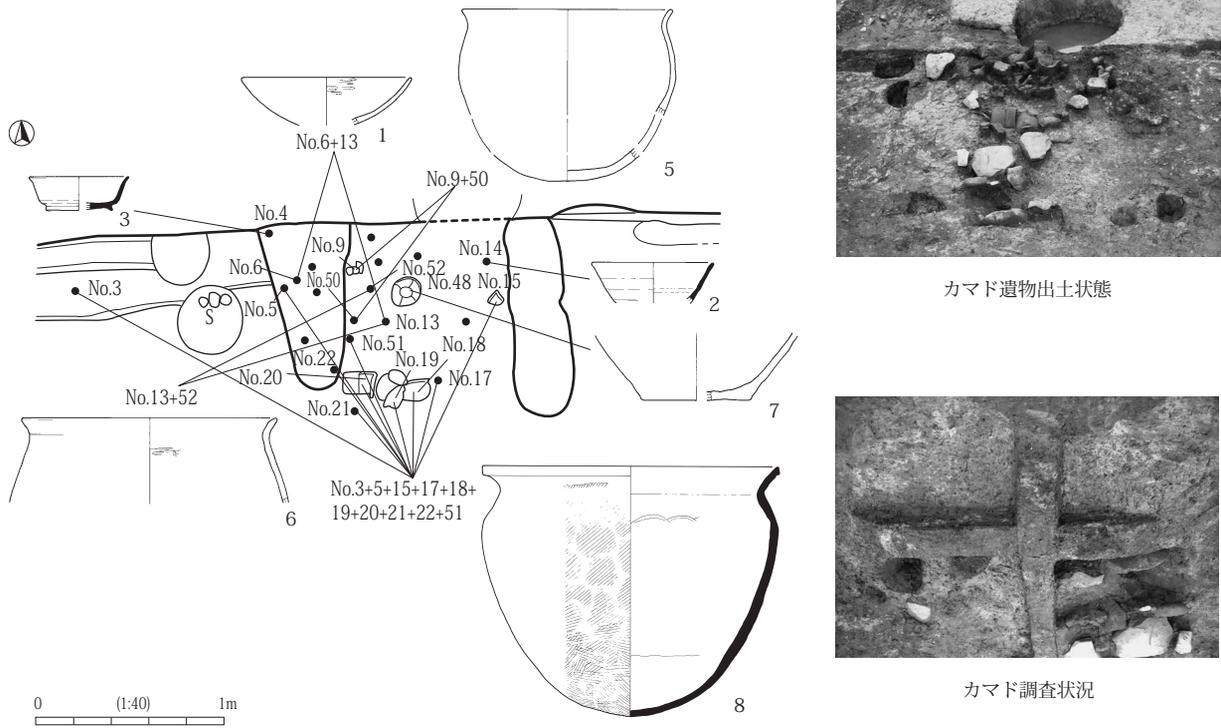
西側周溝： 木樋は本跡の西側ラインに沿って、北から約半分程度まで板状の例（木 No36. 54・第474図16）が施設され、ST 29Pit3 に破壊された部分より南側の半分は断面凹形の樋状に板を組み合わせた構造となっていた（木 No35・第475図19～21）。その構造は、底板1枚と側板2枚が、北から40cm、50cm、60cm、36cm、30cm の間隔を持って、目釘状の棒材により結合され、北から南へは緩やかな勾配を設けて敷設されて、枳状施設に連結していた。樹種はいずれもモミ属である。

南側周溝： 木樋は本跡の南側ラインに沿って、東から枳状施設まで板材（木 No37. 39. 40. 30. 33）が施設されていた。

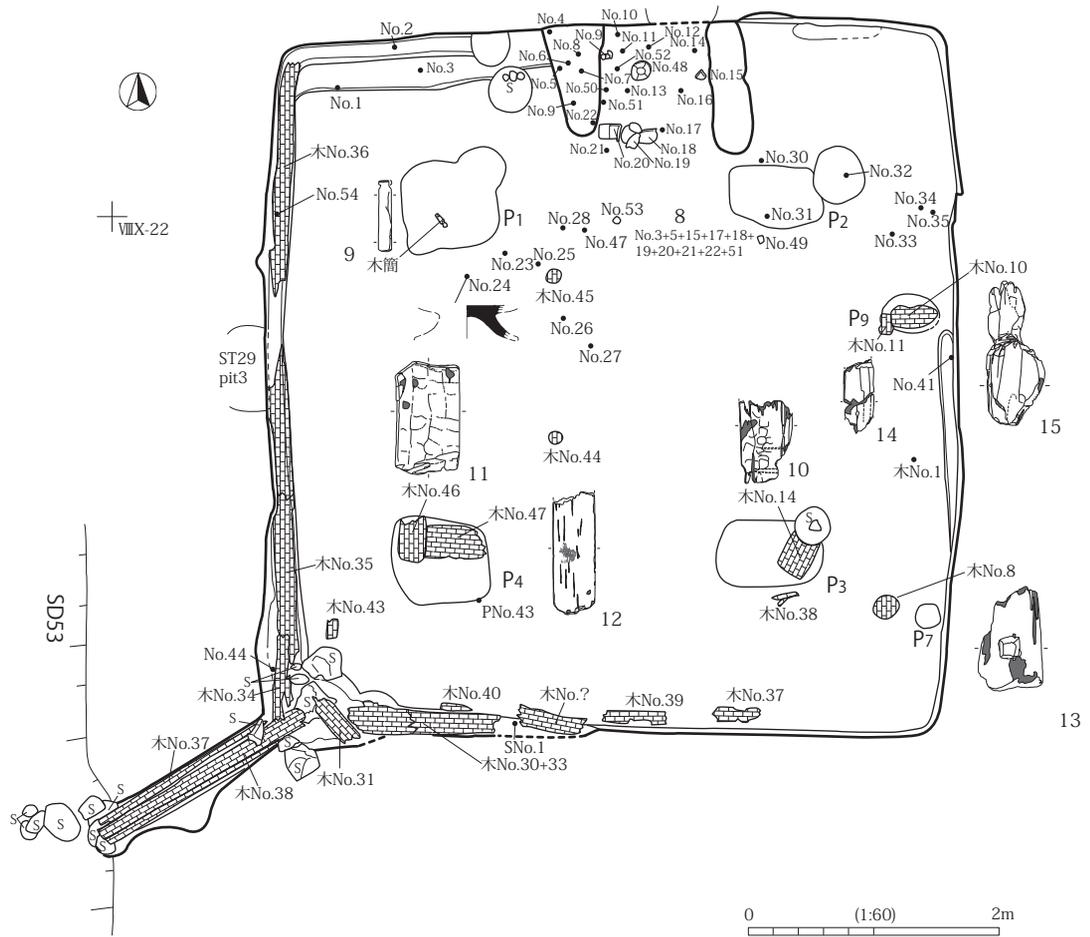
枳状施設： 西側及び南側木樋の施設は、南西隅にて集水用と考えられる枳状の施設に結合していた。枳状の施設は規模70cm × 60cm、深さ20cm の方形状？の土坑であり、直径30cm ほどのバレーボール大の礫が3点と、破損した板材（木 No31 と 34）をともに検出した。何らかの規格的な形状を呈した施設と考えるが、発見時はすでに崩壊していたようだ。

排水管： 枳状施設の坑底面から南西方向に、長さ180cm、直径30cm 程の丸太材が施設してあった。丸太はモミ属の一木を縦割した後、芯を削り抜き、2枚を管状に合わせたものであった。排水管と考えられ、SD 53 に接続していた。接続部分はソフトボール大の礫が数個敷き詰められ、その上に排水管を置き固定した状態であった。排水管内土壌の珪藻化石群を分析した結果、陸域指標種群（Hantzschiaamphioxys）が約4割程度認められ、本跡廃棄時には流水状態にはなかったものと判断できる。

出土遺物： 埋土中の遺物は、検出面から10cm 程度の掘り下げであったことも関与してか、ほとんど出土していない。また SB 17 と重複して検出調査したこともあって、両者の遺物を十分に区別できなかったことも事実である。ただし、床面より下位で確認できた周溝内あるいは柱穴内の遺物に関しては、それら遺構の所属に厳密には問題は残るが、多くの木製遺物を取り上げることができた。それら遺物の属性は第89表に示す。1は第468図 No6 の非ロクロ土師器で平底化した杯I類、内面は良好な研磨整形で黒色化する。口径17.8cm、器高5.5cm を推定。2は No14 で須恵器杯B類の口縁部破片、口縁部は直口、外面は丁寧にナデ整形される。やや軟質。3は No4 で硬質感ある須恵器杯B類である。口径10.4cm、口縁部は、やや



第 468 図 SB 14 カマド内遺物出土状態



第 469 図 SB 14 遺物出土の状態

図版番号	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	備考
	上層	26	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No47-Dと接合 No19と同一個体か
	"	25	土師器	甗B	底部	—	—	—	—	破片2点接合
第470図4	"	24	須恵器	盤	脚部	—	—	—	—	
	"	3	須恵器	甗D	体部	—	—	—	—	破片1点
	"	1	須恵器	甗D	体部	—	—	—	—	破片1点
	"	35	土師器	甗?	体部	—	—	—	—	破片1点
	"	33	非口ク口土師器	鉢	口縁	—	—	—	—	破片1点
	"	32	土師器	甗?	口縁	—	—	—	—	破片1点
	下層	30	須恵器	杯A	底部	—	—	—	—	破片1点 ヘラ切り SB17No29,No46と同一個体か
	"	27	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No54と同一個体か 小型甗-え個体
	"	43	須恵器	短頸壺	底部	—	—	—	—	破片1点
	床面	49	土師器	甗?	口縁	—	—	—	—	破片1点
	"	31	土師器	甗E	口縁	17.0	—	—	—	破片2点接合
	"	28	須恵器	杯A	口縁	—	—	—	—	破片1点
	"	23	土師器	甗?	体部	—	—	—	—	破片2点 No9-Bと同一個体か 小型甗-い個体
	床下	53	土師器	甗B	体部	—	—	—	—	破片1点
	"	47-A	土師器	甗B	体部	—	—	—	—	破片6点
	"	47-B	非口ク口土師器	鉢	体部	—	—	—	—	破片3点
	"	47-C	土師器	不明	不明	—	—	—	—	破片1点
	"	47-D	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No26と接合 No19と同一個体か
第470図1	カマド	6	非口ク口土師器	杯I	口縁	(17.8)	(5.5)	—	—	直口 外面ケズリ 1点 No13-C,埋土と接合 4点
	"	7-A	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片6点 小型甗A-あ個体
	"	7-B	土師器	甗?	体部	—	—	—	—	破片1点 No48-Aと同一個体か
	"	8-A	非口ク口土師器	鉢	底部	—	—	—	—	破片11点
	"	8-B	土師器	甗?	体部	—	—	—	—	破片1点
	"	9-A	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No19と同一個体
第470図5	"	9-B	土師器	甗E	口縁	22.2	—	—	—	破片10点 No50-A2点と接合 小型甗A-い個体
	"	9-C	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片20点 15点接合 小型甗-か同一個体
	"	10	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片12点 4点接合 No7-Aと同一個体か 小型甗-あ個体
	"	11-A	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片6点接合 No7-Aと同一個体か 小型甗-あ個体
	"	11-B	土師器	甗	体部	—	—	—	—	破片10点 4点接合
	"	11-C	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片2点 No50-Aと1点接合 No9-Bと同一個体か 小型甗-い個体
	"	12	土師器	甗E	1/4	—	—	—	—	破片1点
	"	13-A	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片8点 4点接合 No52-Aと2点接合同一 小型甗-う個体
	"	13-B	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片11点
	"	13-C	黒色土器A	杯A	体部	—	—	—	—	破片1点 No6と接合
	"	13-D	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片2点 No9-Bと同一個体か 小型甗-い個体
第470図2	"	14	須恵器	杯B	口縁	13.0	—	—	—	2点接合
第470図7	"	48-A	土師器	甗E	1/5	—	(7.0)	(11.6)	—	破片11点 3点接合 小型甗-お個体
	"	48-B	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片2点 No9-Bと同一個体か 小型甗-い個体
	"	48-C	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片2点 No13-Aと同一個体か
	"	50-A	土師器	甗E	1/5	—	—	—	—	破片7点 2点接合 No9-Bと2点接合 No50-A2点接合(1点) 小型甗-い個体
	"	50-B	黒色土器A	杯A	口縁	—	—	—	—	破片3点 No6と同一個体か
	"	51-A	須恵器	甗E	口縁	—	—	—	—	破片1点 No19と同一個体
	"	51-B	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片3点 No9-Bと同一個体か 小型甗-い個体
第470図6	"	52-A	土師器	甗E	口縁	(26.8)	—	—	—	破片3点 2点接合 No13-A2点接合 No13-Aと同一個体 小型甗-う個体
	"	52-B	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No9-Bと同一個体か 小型甗-い個体
第470図3	"	4	須恵器	杯B	1/3	(10.4)	3.5	6.9	5.4	2点接合
第470図8	"	19	須恵器	甗E	1/2	(31.3)	(26.4)	—	—	9点 No3,No5,No15,No18,No20,No21,No22,No51Aと接合
	"	3	須恵器	甗E						1点
	"	5	須恵器	甗E						1点
	"	15	須恵器	甗E						1点
	"	18	須恵器	甗E						1点
	"	20	須恵器	甗E						3点
	"	21	須恵器	甗E						1点
	"	22	須恵器	甗E						4点
	"	51A	須恵器	甗E						1点
	"	9A	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No19と同一個体
	"	15	須恵器	甗E	口縁	—	—	—	—	破片6点 口縁1点,体部5点 No19と同一個体
	"	16	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No19と同一個体
	"	17	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点 No21と接合 No19と同一個体
	"	18	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片2点 No19と同一個体
	"	21	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片2点 1点No17と接合 No19と同一個体
	"	51A	須恵器	甗E	口縁	—	—	—	—	破片1点 No19と同一個体
	北側周溝内上層	2	須恵器	甗E	体部	—	—	—	—	破片1点
	東側周溝内下層	41	土師器	甗B	体部	—	—	—	—	破片3点 2点接合 SB17No47と同一個体か
	西側周溝内上層	44	須恵器	甗	底部	—	—	—	—	破片1点
	" 床面	54	土師器	甗E	体部	—	—	—	—	破片7点接合 No27と同一個体か 小型甗-え個体

第88表 SB14出土土器属性

第3章 発掘調査の概要

挿図番号	遺構名	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第 470 図 10	SB14	3	下層	礎板	追証目	ケヤキ	32.7	21.3	4.0	礎板か
第 471 図 11	SB14	4	下層	礎板	追証目	ケヤキ	35.8	20.7	4.1	刃痕あり
第 471 図 12	SB14	4	下層	礎板	二方証	フジキ	64.9	22.7	8.3	
第 472 図 13	SB14	8	下層	柱材	削出	カツラ	(33.1)	直径 20.6		ホゾ穴あり
第 472 図 15	SB14	9	下層	礎板	板目	カツラ	38.1	15.7	6.2	柱材転用か
第 472 図 14	SB14	9	下層	礎板	追証目	モミ属	19.5	8.0	2.9	
第 474 図 16	SB14		下層	排水管	板目	サワラ	166.0	16.0	2.5	刃痕あり
第 475 図 19	SB14		下層	排水管	板目	モミ属	(100.8)	3.8	2.4	
第 475 図 20	SB14		下層	排水管	板目	モミ属	(110.1)	10.2	2.4	
第 475 図 21	SB14		下層	排水管		モミ属	140.7	6.3	4.4	
第 476 図 22	SB14		下層	排水管	証目 (分割材)	フジキ	178.0	直径 1.6	4.0	裏面加工か
	SB14		下層	排水管	板目	モミ属	59.0	6.3	1.5	
第 474 図 17	SB14		下層	割材		ヒノキ科	(67.0)	10.5	4.0	
	SB14		下層	棒材	芯持丸材	ウメ	22.5	直径 1.4		
	SB14		下層	棒材		キハダ	36.0	直径 3.5		
	SB14		下層	礎板	半丸太材	フジキ	41.0	21.0	9.5	刃痕あり
	SB14		下層	割材	板目	モミ属	7.3	1.8	0.8	
	SB14		下層	割材		クリ	32.0	3.0	2.8	
	SB14		下層	割材他	板目	ヒノキ科	18.0	4.0	2.5	
	SB14		下層	割材他	板目	モミ属	25.0	3.5	0.8	
	SB14		下層	材	証目	モミ属	3.5	0.8	0.3	
	SB14		下層	材	板目	モミ属	15.3	3.6	1.6	
	SB14		下層	材	証目	モミ属	13.1	1.6	0.6	
	SB14		下層	材	削出	モミ属	20.8	2.9	1.6	
	SB14		下層	材	板目	広葉樹	8.0	5.3	3.0	
	SB14		下層	材	みかん割り	ウルシ	5.1	2.1	1.8	
	SB14		床面	板材	証目	サワラ	(6.8)	2.1	0.7	
第 476 図 23	SB14		埋土	排水管	分割材	フジキ	177.0	直径 11.6	4.2	裏面加工
	SB14		埋土	割材	板目	カツラ	5.1	3.6	1.1	木片
	SB14		埋土	柱	芯持材 (半載)	ウルシ	13.5	10.0	4.6	

第 89 表 SB 14 出土木製品属性

遺構名	非ロク口土師器										土師器										黒色土器A	須恵器					灰釉陶器	数 / 総重量 (破片 / g)
	杯C	杯I	高杯	鉢	杯A	盤	甕A	甕B	甕E	甕H?	小型甕	小型甕A	不明	杯A	杯A	杯B	盤	蓋	甕	甕D	甕E	短頸壺	椀A					
SB 14 埋土上層			1			2		2																		7/192.2		
// 埋土下層										1				1									1			3/67.5		
// 埋土						4									1				1							6/16.8		
// 床面						3				2					1											6/55.3		
// 床下			3							7			1												2	13/282.5		
カマド	4		11			2	5	1	112					1					4			40				180/3,512.7		
焼土付近										1			8		1											10/45.7		
排水管付近						1																				1/4.0		
北側周溝内上層																									1	1/31.2		
東側周溝内下層										3																3/18.4		
西側周溝内上層																								1		1/66.8		
// 下層																									7	7/86.5		
周溝						1																				1/3.6		
不明	1		1			2	1	9		1	2	1	7	2	2	4	1	2						1		37/204.3		

第 90 表 SB 14 出土土器組成

外反し、貼り付け高台は、三角形状を呈し、外側にて接地する。底部の出っ張りはない。4 は No24 の高盤の脚部破片。脚は短く、緩やかに開く形態である。5 は No9B の土師器甕形土器E類の 1/3 個体。胎土は非常に砂質であり、表面は剥落してしまっているが、ナデ調整仕上げ。6 と 7 は球胴化したミガキ調整の甕であろうか、外面砂質で剥落しているが、内面は横方向のミガキ調整が観察できる。胎土の特徴から、別個体である。8 は須恵器甕形土器

- E類の1/2個体。外面は幅5.0cmの板状工具による叩き締め、内面は径3.0cm程の当て具が観察できるが、丁寧にナデ調整仕上げにより消される。口唇は外削ぎ状で、底部は丸底。
- Pit 1 9は付札木簡と考えられる木製品。15.0 × 2.8 × 0.7cmを測る。赤外線観察では墨書は認められなかった。
- Pit 3 10はケヤキ材の柵目板、礎板材。上下両端には明瞭な切断痕がある。
- Pit 4 11は10と同様にケヤキ材の柵目板、礎板材。上下両端には明瞭な切断痕（ノミを使用したものか）がある。12はフジキの二方柵目板の礎板材。長さ64.9 × 22.7 × 8.3cm。
- Pit 8 13は一端切断し、下端中央部にほぞ穴がある柱材。カツラ材の削りだし。
- Pit 9 14は上下両端の破損した柵目板材でモミ属。15と共に出土した。加工痕ははっきりしない。15は礎板材と考えられ、柱材の転用であろうか、溝が巡る。カツラ材。
- 周溝 16は西側周溝部の北側の木樋で、第469図木No36に相当する。166 × 16 × 2.5cmを測るサワラ材。19～21は木No35の木樋、いずれもモミ属。板材3枚を木製の目釘で凹状・樋状に接合した例（写真参照）。20は長さ124 × 10 × 3.5cmを測る。目釘は保管状態が悪く腐食し、図化されていない。17は西側周溝の木樋と本跡南西隅で確認した柵状施設の結合部より出土した板材でヒノキ材。第469図木No34に相当、柵状施設の蓋あるいは側板であろうか。18は柵状施設より出土した琴柱状木製品。4.1 × 2.3 × 0.7cm。
- 排水管 22と23は柵状施設からSD 53に結合する排水施設内の管。第469図No37と38でフジキ材。

時期の判断根拠：

黒色処理仕上げの杯及びナデ調整仕上げの深い鉢に、甕等非ロクロの土師器類に主体があること、それに須恵器杯A類と杯B類の登場共伴関係から、古代1期以後と判断できる。No8一括の須恵器甕E類の特徴が、口唇斜め外削ぎ状、底部丸底などから1期でも後半から2期に比定できる。木樋の炭素年代測定結果では、第469図木No35でAD724 ± 40年、排水管第469図木No38ではAD794 ± 40年を得ており、8世紀前半から後半、つまり2期から4期に該当する。



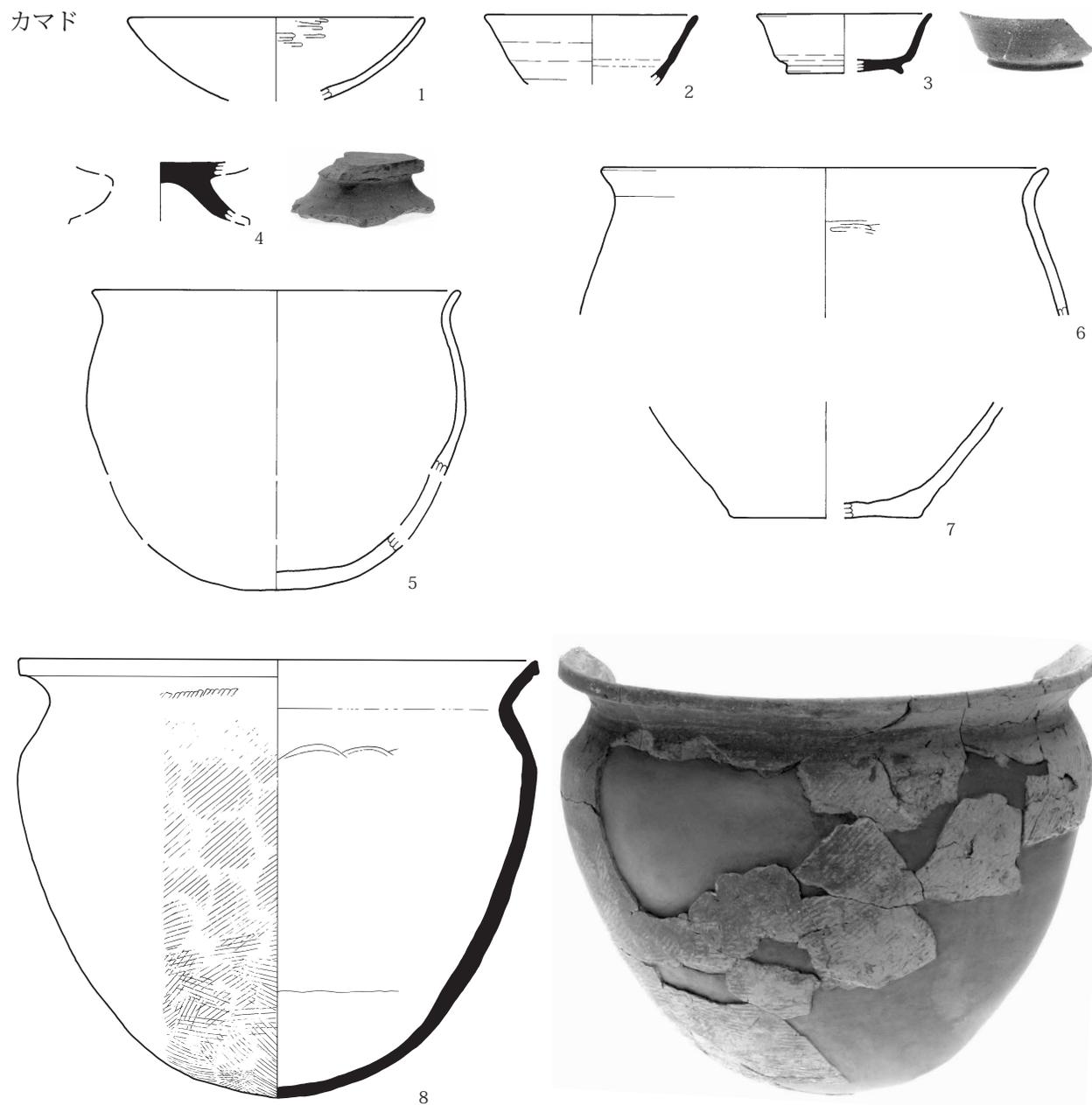
SB 14・SB 17 完掘状態



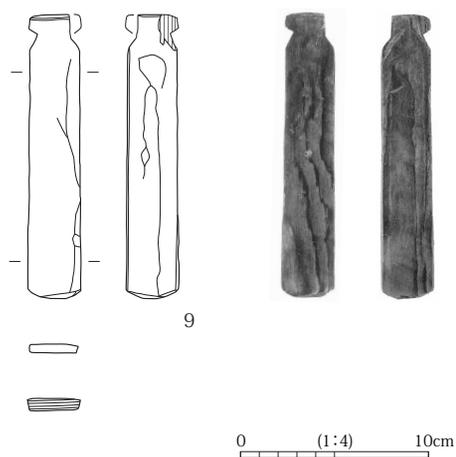
SB 14の完掘状態（白線入り）

第3章 発掘調査の概要

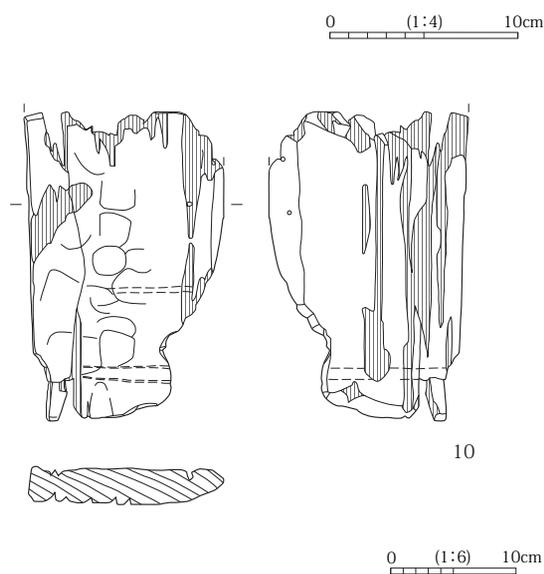
カマド



Pit1

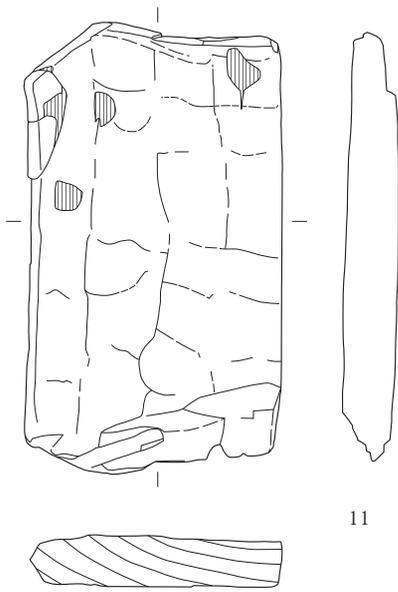


Pit3



第470図 SB 14 出土の土器・木製品 1

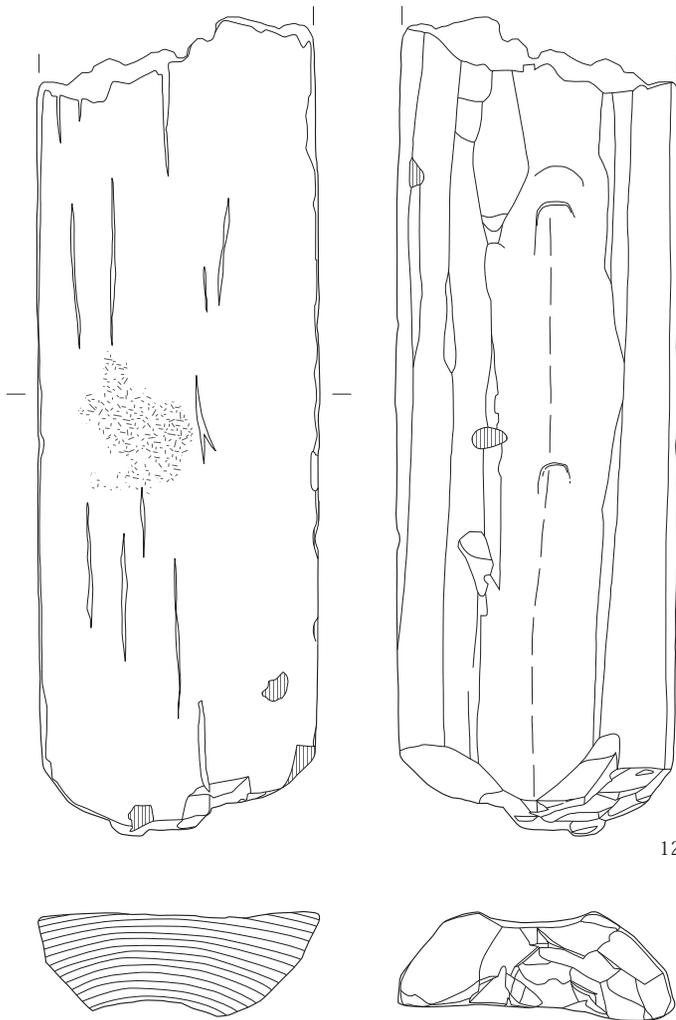
Pit4



11



礎板材出土状態



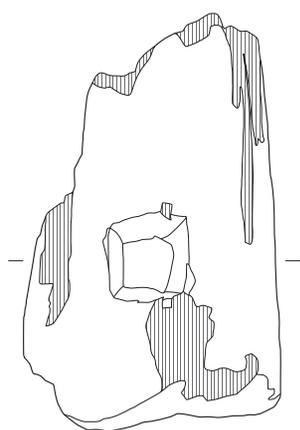
12



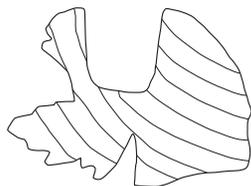
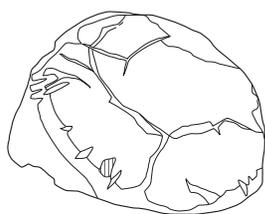
0 (1:6) 10cm

第471図 SB 14 出土の木製品 2

Pit8

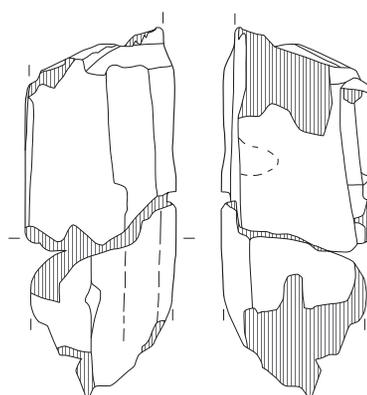


13



0 (1:6) 10cm

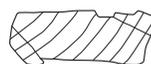
Pit9



14



0 (1:4) 10cm



15



0 (1:6) 10cm

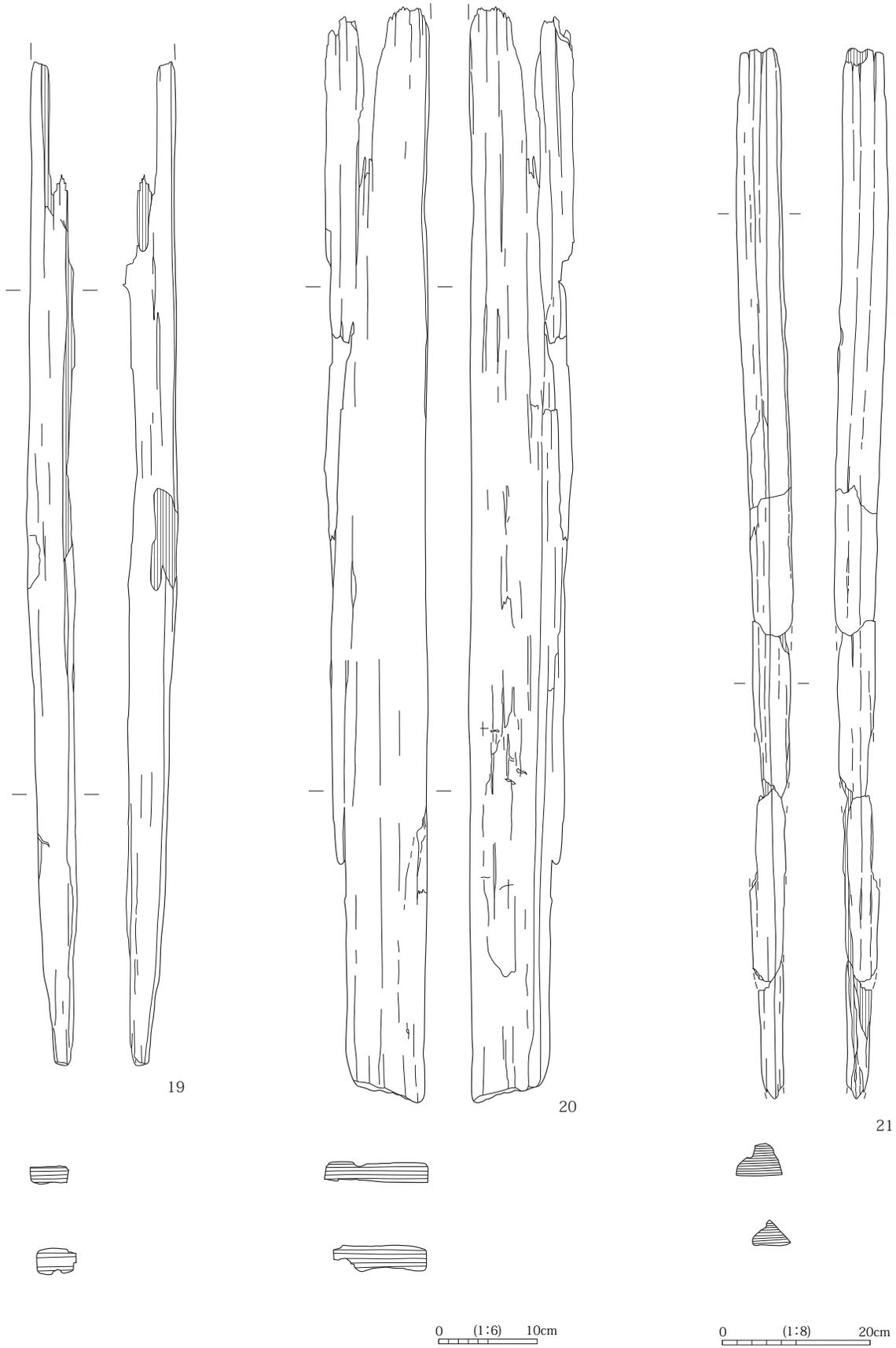


Pit9 半截状態

第472図 SB 14 出土の木製品 3



第474図 SB14出土の木製品（木樋・琴柱）4



第 475 図 SB 14 出土の木製品（木樋） 5



第 476 図 SB 14 出土の木製品（排水管） 6

15号竪穴式建物跡（第477図～第481図）

時期： 9世紀後半から終末を推定（古代8期比定）

位置： IX D - 23, 24（③区）

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 19.9 m²（南北 493cm × 東西 434cm）、残存深度 30cm

主軸方向： W - 5° - N

カマド位置： 東壁中央

壁立ち上がり： 59度程度の傾斜

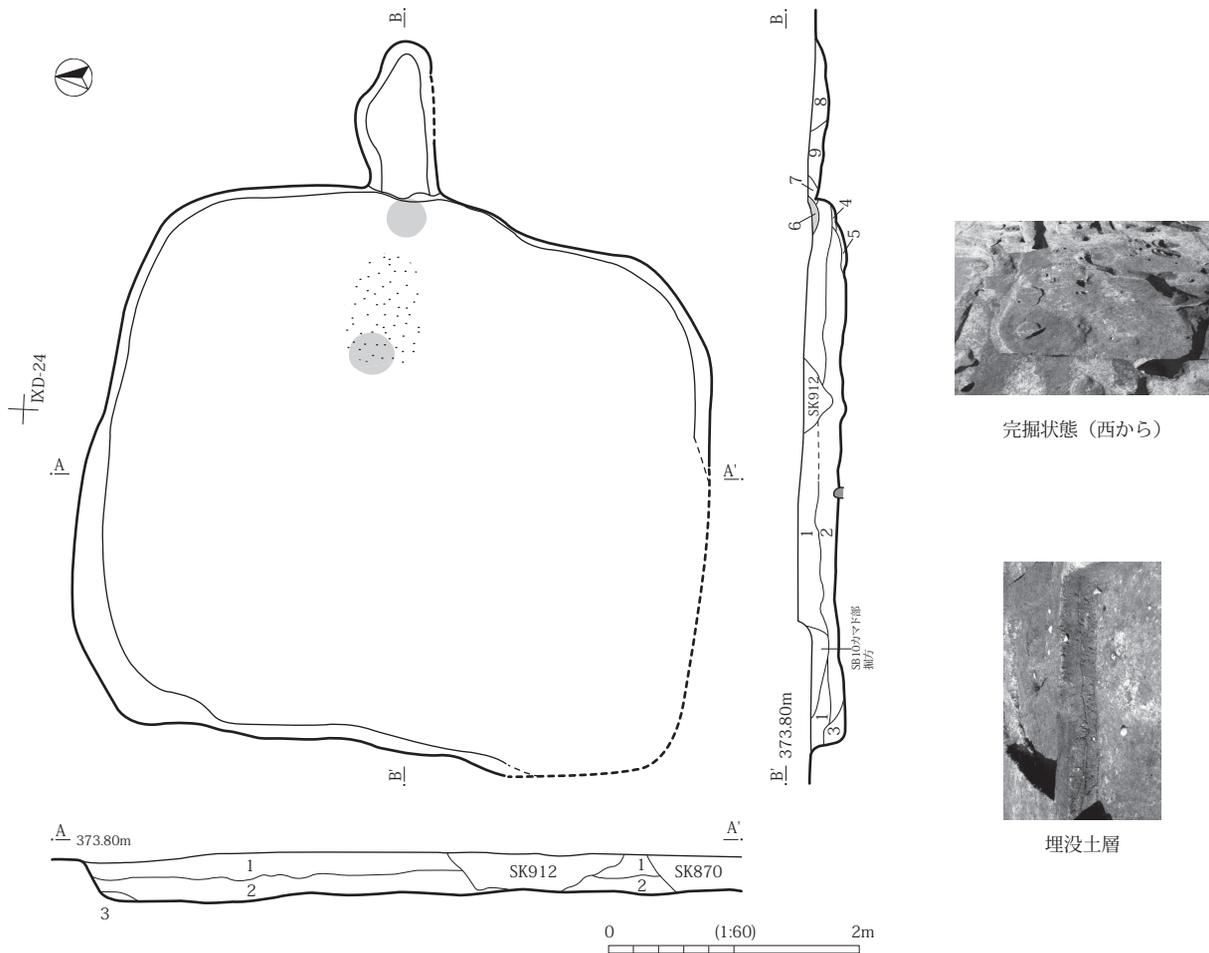
柱 穴： なし

埋土堆積： 大別3層の自然堆積土と判断できる。1層暗褐色土（10YR3/4）、2層黒褐色土（10YR2/3）、3層褐色土（10YR4/4）。1層及び2層には炭化物及び焼土粒子を混入する。3層は壁際にレンズ状に堆積した土で、白色微粒子を含む。

遺構重複： SK 870、SD 61 と SD 77 を破壊し、SB 10、SD 51、SK 912、SK 1012 に破壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて暗褐色土の落ち込みを確認した。幾つかの遺構が重複していたが、検出面でそれらを識別することは困難であった。落ち込み部分に土層観察用畔を残して、慎重に掘り進めたところ、南部分でSK 870が重複し、本跡がそれを破壊していたものと判断した。ただし、本跡内に確認したSK 912との切り合い関係は不明瞭で、最終的に床面の検出をもって新旧の判断をした。床面の精査段階で、ST 28のPit7・Pit8・Pit9を確認したことから、ST 28を本跡が破壊していたと判断した。

遺物出土状況： 大部分が埋土中の遺物である。床面出土遺物は、ST 28内の遺物と混在が予想できたので、STのPit 検出範囲の遺物は、床面遺物と区別して取り上げた（第91表）。



第477図 SB 15床面完掘の状態

床面の様子： 地山掘削面を床面とする。

カマドの様子： カマドは東側壁中央部に確認した。燃焼部は天井部の崩落であろうか。焼土及び炭化物の堆積を確認したのみで、火床や袖部は残存していなかった。煙道部分は 120cm 程度が残っていた。4 層から 6 層が燃焼部の堆積土、7 層から 9 層が煙道部の埋没土である。4 層・5 層は暗褐色土 (10YR3/3.3/4)、6 層が焼土、7 層褐色土 (7.5YR4/3)、8 層・9 層が暗褐色土 (10YR3/3)。

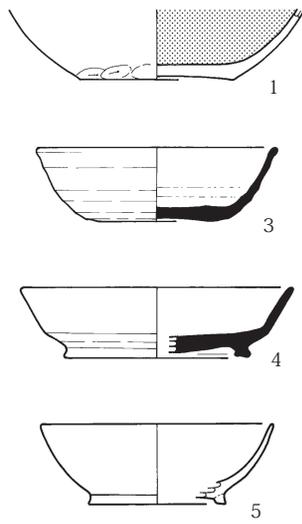
出土遺物： 出土遺物の詳細は、第 91 表に示す。

床下 1 は第 478 図 No24A の黒色土器 A の杯 A 類底部。底径 8.0cm を測る大形品で、底部外面はケズリ整形される。

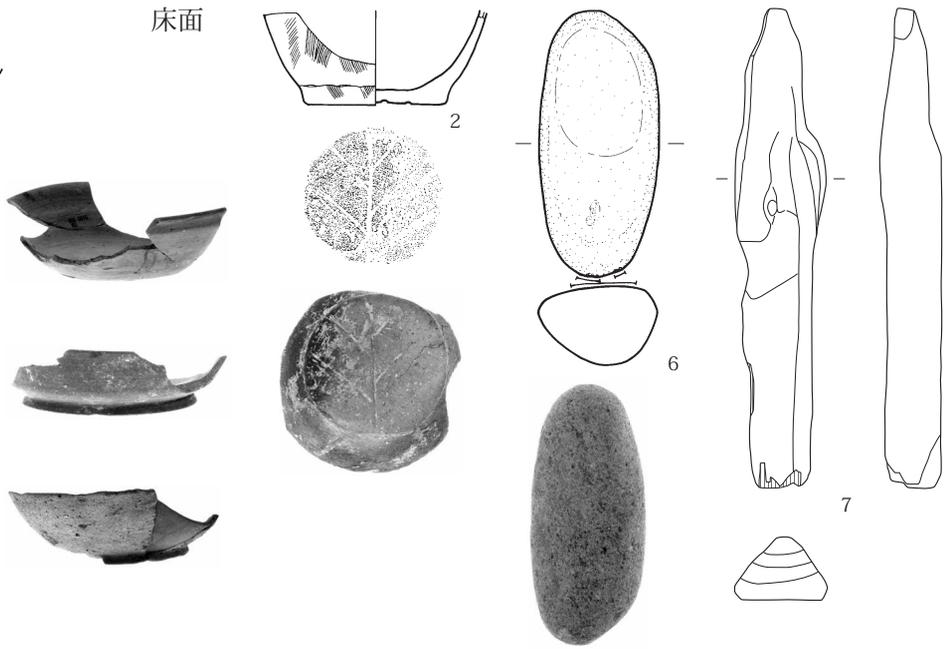
床面 2 は No17 で、土師器甕形土器 B 類の底部。3 は No19 で、須恵器杯 A 類の 1/2 個体。カマド内出土破片 1 点と接合。口唇直下に横方向の強いナデが巡り、底部内径 7.5cm。4 は須恵器杯 B 類 1/2 個体で No3 に相当。器高 3.7cm で、高台は外接地、硬質で底部は 0.8cm の厚さがある。5 は No16 で土師器椀 2/3 程度の個体。磨耗著しいが、内面は丁寧にミガキ整形される。6 は安山岩材の敲石で No15。下端に敲打痕が、表面には磨耗面を観察できる。13.2 × 6.0 × 4.5cm、558.7g を測る。7 は板目の加工材で、25.4 × 5.0 × 3.2cm を測る。

埋土 2 層 8 ～ 15 は須恵器杯類である。8 は須恵器杯 H 類の口縁部小破片。口径 11.8cm を測る。TK209 型式か。9 はヘラ切り離し手法の杯 A 類底部。10 と 11 は外面にロクロ成形痕を明瞭に留め、底部糸切り離し調整でやや上げ底の形態。底部内径はいずれも 7.0cm を測る。12 は杯 A 類の 1/2 個体。非常に硬質感のある土器で、外面も丁寧にナデ成形する。口径 14.4cm、底部内径 7.0cm を測る。13 も 12 同様硬質感ある杯 A 類で、ほぼ完形。口唇直下の外面は横方向のナデにより面取り状を呈する。口径 13.2cm、器高 4.0cm、底部内径 6.8cm。14・15 は須恵器杯 A 類で、墨書がある。14 は口縁部破片で、墨書は擦れて判読できないが、画数の多い文字のようだ。15 は糸切り底の底部に、「功」の墨書がある。筆幅 0.3cm ほどの勢いのある文字。16 から 18 は須恵器杯 B 類。16 は B II 類。口径 14.5cm、器高 4.2cm を測り硬質。糸切り離し後、高台貼付け、底部中心部分を除き、丁寧にナデ整形する。高台は高く、外面接地。17 は B III 類、口径 15.2cm、器高 6.6cm を測る。底部糸切り離し後、高台貼付け、底面の過半をケズリ整形し、最後にナデ調整する。高台は高く、凹形平接地。口縁部は、口唇直下に 1.0cm 程度の強いナデ調整が入る。18 は B III 類の口縁部破片で、口径 14.3cm。19・20 は須恵器杯蓋。19 は扁平なつまみ部で、体部ケズリ 1/2、かえし直で、端部は外反。20 は体部ケズリ 2/3 程度で、かえし直。21 は須恵器細頸壺の頸部破片。口唇角頭状を呈する。22 の口縁部であろうか。22 は須恵器長頸壺の体部破片。ロクロナデ成形痕を残す。23 は黒色土器 A 類の杯 A 底部。内面にはタスキ状の暗文様ミガキがある。24 は黒色土器 A の杯 A 類底部破片。底部円板状に張り出し、緑釉陶器の形態模倣であろうか。25 は土師器小型甕 B 類の口縁部及び底部。口縁は直口気味に立ち上がり、幅 1.0cm の板状工具 (中目と細目の 2 種) による縦方向の調整がある。26 は須恵器甕 E 類口縁部破片。口唇外削ぎ状にナデ成形され、体部は板縄まきの叩き具であろうか、叩き締め痕を観察できる。27 は須恵器甕形土器 A 類の体部破片 176.7g を量る。体部内面には長さ 3.0cm の木の葉圧痕がある。28 は刀子の先端部であろうか。6.5g を量る。この他、埋土 2 層中から、SK 912 内から出土したすり鉢と同一の口縁部破片 1 点が出土している。29・30 は須恵器杯 A 類。29 は口縁部破片 (1 層出土)。30 は第 478 図 No14・11 で、外面にロクロ成形痕を残

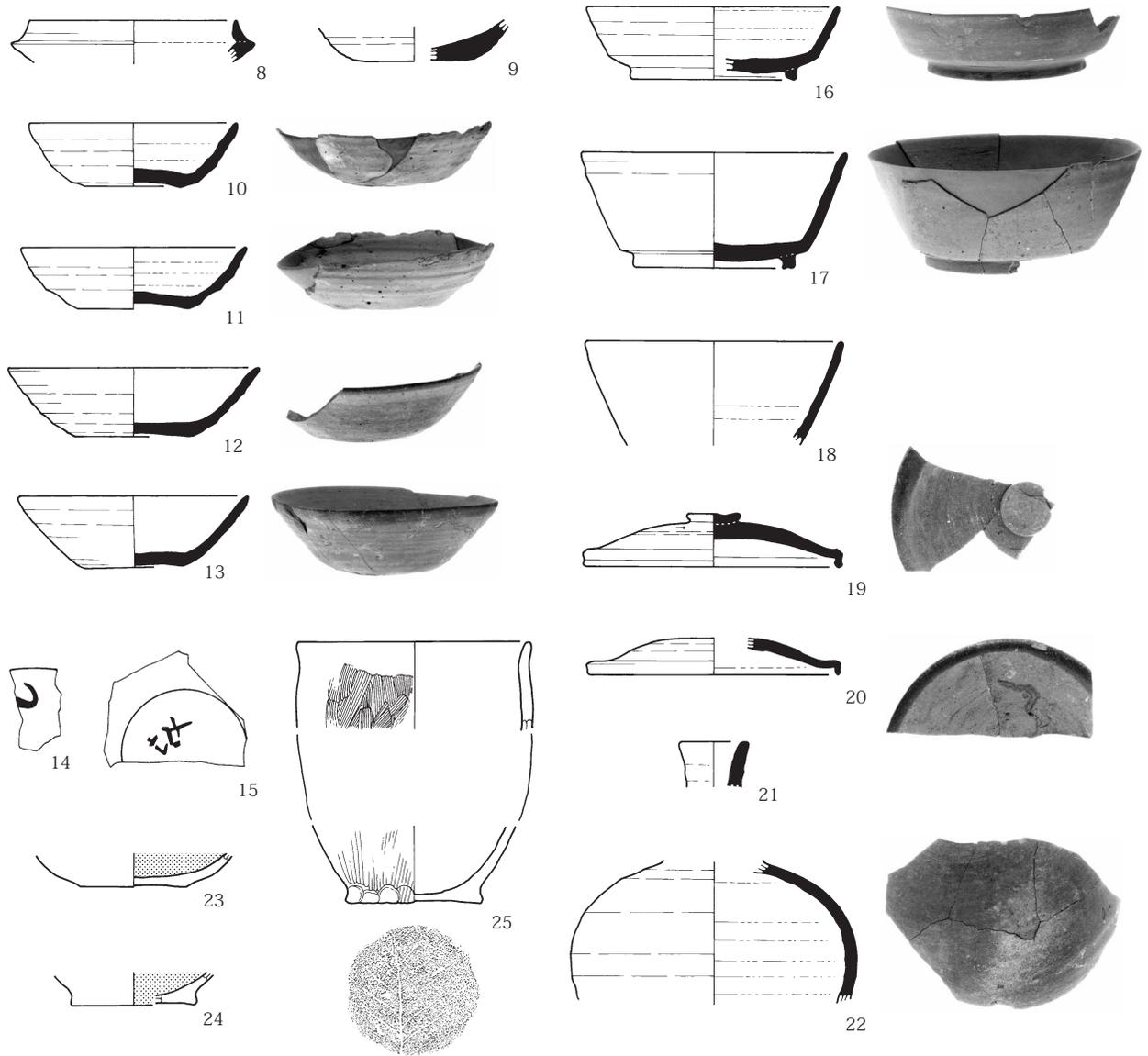
床下



床面



2層



第479図 SB15出土の土器・石器・木器 1

0 (1:4) 10cm

す、軟質の須恵器。底部内径 7.5cm。31 は No10 で、須恵器杯 B 類の 1/2 個体。口径 8.8cm、器高 4.9cm を測り、小型。底部糸切り離し、高台貼付け後ナデ整形。高台は外接地。32 は No1A で、黒色土器 A の杯 A 類 1/3 個体。内外面風化著しく表面剥落している。33 は No12 の須恵器短頸壺の体部 1/3。頸部内面の接合部は斜め方向のヘラナデがある。34 は No20 の須恵器長頸壺の体部破片。体部下半は回転ケズリ成形。肩部付近に自然釉がかかる。35 は、須恵器甕 D 類の 1/4 程度の破片。胎土は洗練されており、内面は淡い灰色で、直径 3.7cm の年輪が明瞭な当て具痕を観察できる。外面は幅 5.0cm の布巻板状工具による叩き締めがある。36 は非ロクロ土師器の杯 A 類口縁部の破片（1 層出土）。37・38 は土師器盤 A 類。37 は土師器盤 A 類の大型品一括個体。口径 32.6cm、器高 13.7cm、底径 22.6cm、脚高 5.5cm を測る。幅 3.5cm ほどの輪濟み痕を丁寧なナデ調整仕上げする。口唇外削ぎ状のナデ。38 は土師器盤 A の口縁部破片。口唇は折り縁様に外側に折り返す。

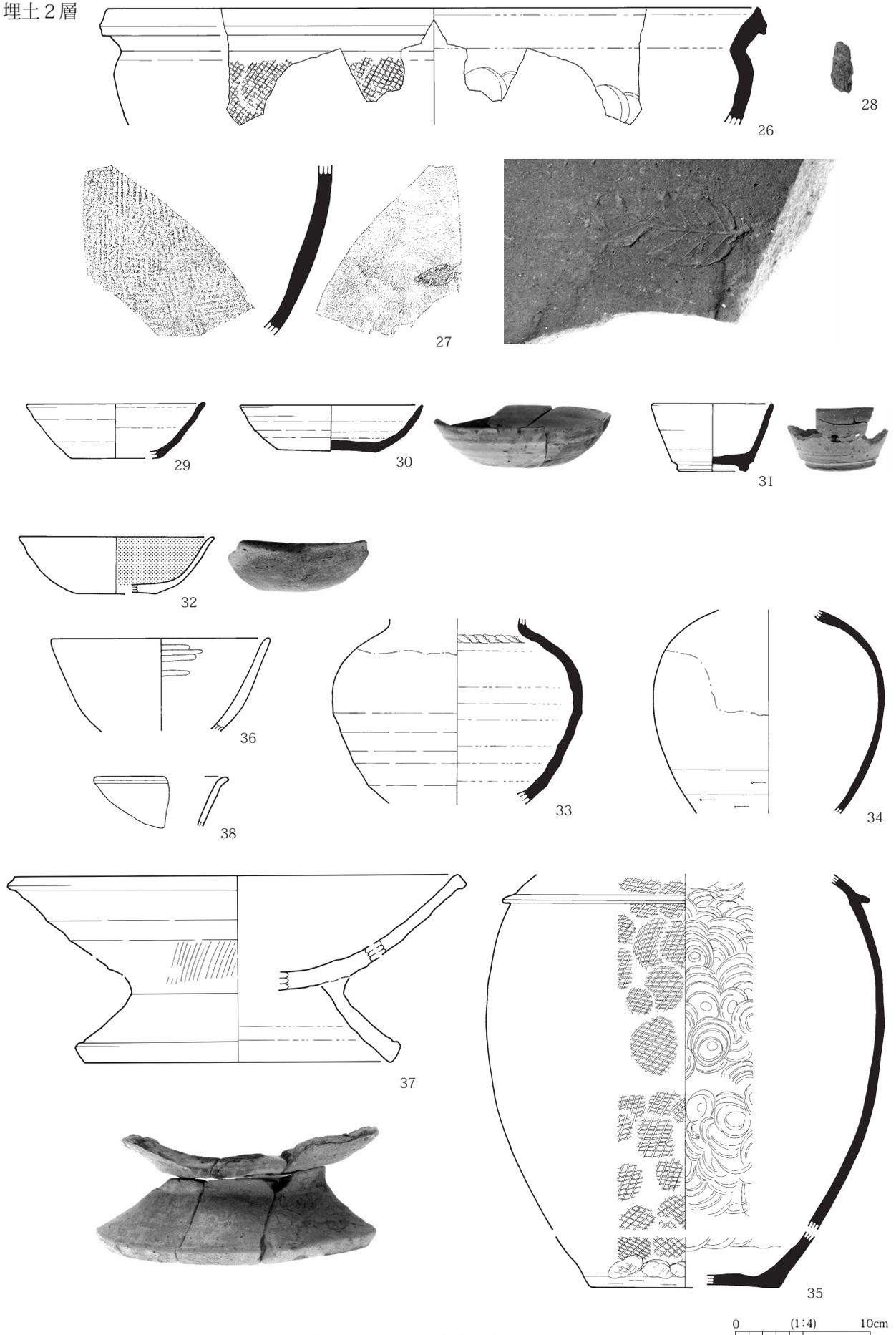
1 層 39 と 40 は埋土 1 層出土の土器である。39 は須恵器杯 A 類の 1/3 個体。硬質で良好な作りであるが、31 の杯 B と同様な胎土で 0.6cm ほどの黒色の混入物が混じる。40 は土師器皿 A 類の完形個体。41 は須恵器焼成屑で、14.5g を量る。

カマド 42～45 はカマド及び煙道部からの出土である。42 は煙道部の SK 1012 内の出土 No1 である。土師器杯 A 類のほぼ完形品。胎土内には赤色粒子を多量に含む。43 も土師器杯 A 類の体部破片で、0.5cm の穿孔がある。SB 12 出土の第 463 図 11 と同様な個体か。44 は須恵器長頸壺の底部。45 は土師器甕 I 類の口縁部破片。胎土中に赤色の粒子を混入する。外面丁寧にナデ整形される。

時期の判断根拠：

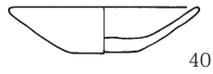
埋土 2 層には、若干時期的な混在がある。ただし図示した資料からも解るように、糸切り底の須恵器杯 A 類と杯 B 類が主体的に出土していることから、ヘラ切り杯 A 類の消滅した 5 期以降で、須恵器の食器類が消滅してくる 8 期前後までと考えられる。さらに床面から出土した 5 は土師器椀であるから、その出現した 8 期以後に本跡が位置付けられることは間違いない。土師器杯類及び椀類の組成量が少ないことを加味し、8 期でも早い段階と考えたい。

埋土2層

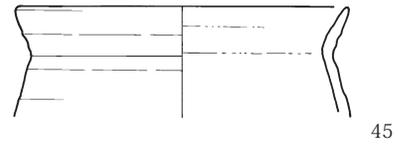
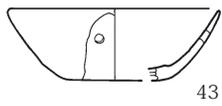
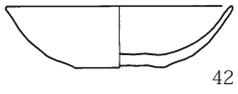


第480図 SB15出土の土器ほか 2

埋土1層



カマド



0 (1:4) 10cm

第481図 SB 15 出土の土器ほか 3



SB 15 出土の土器

16号竪穴式建物跡（第482図・第483図）

時期： 7世紀末～8世紀前半を推定（古代1期ないしは2期比定）

位置： IX D - 18, 19（③区）

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 13.4 m²（南北 375cm × 東西（340cm））、残存深度 20cm

主軸方向： W - 4° - N

カマド位置： 西壁中央

壁立ち上がり： 61度程度の傾斜

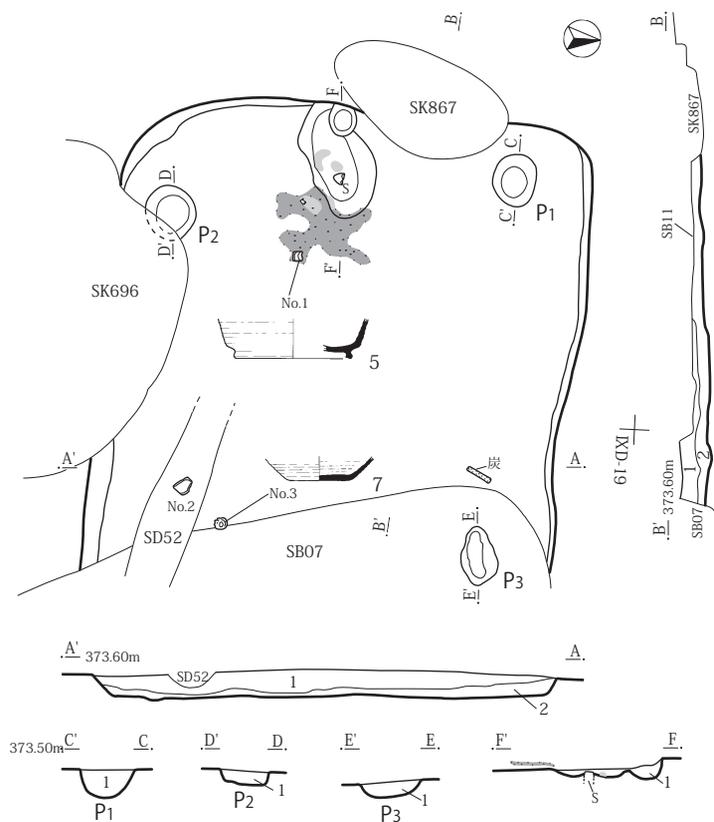
柱 穴： 3本

埋土堆積： 黒褐色土を基調とする2つの層の自然堆積土と判断できる。1層黒褐色土（10YR2/3）、2層黒褐色土（2.5Y3/2）。白色微粒子、炭化物粒子を混入し、1層と2層の境目に炭化物の薄い層状分布を確認した。

遺構重複： SB 07・SB 09・SB 11、SD 52、SK 696・SK 867 に破壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認、幾つかの遺構が重複しており、単独プランは判然としなかった。精査を繰り返した結果、SB 07 及び SB 09 とは切り合い関係を面的に確認でき、SB 11 は試掘坑による床面高さの違い等から判断した。重複遺構の中では、最も古い遺構である。

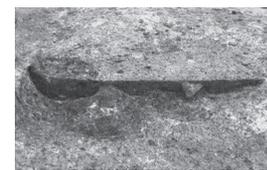
遺物出土状況： 大部分が埋土中の遺物で、須恵器杯類を主体に出土した。本跡が重複遺構の中で、最も



第482図 SB 16 完掘の状態



完掘状態（東から）



カマド半截状態



Pit1 半截状態



Pit2 半截状態



Pit3 半截状態

古い構築であるにかかわらず、床下から若干量の土器が出土したことは、床面下に掘り方が存在した可能性を考える必要がある。調査時点では確認できていない。

床面の様子： 地山掘削面を床面とするか。

カマドの様子： カマドと考えられ部分は、西側床面にて検出した焼土及び炭化物の分布のみである。それらの下には、深さ 10cm を測る楕円形状の掘り込みがある。カマドの埋没土は、炭化物粒子・焼土ブロックを混入する黒褐色土（10YR3/2）。

主柱穴の様子： 主柱と考えられる柱穴は 3 本検出した。カマド右脇側にある Pit1 は、深さ 22cm を測るが、ほかの 2 基はいずれも 10cm 程度と浅い掘り込みである。埋土は炭化物と白色粒子を混入した黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積。4 つ目の柱穴は SB 07 及び SD 52 との重複部分に存在した可能性はあるが、調査では確認できなかった。各柱穴の形態及び規模は第 93 表に示す。

遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit1	IX D-18	楕円	A	42	34	22	10YR2/3	
Pit2	IX D-18	円	A	42	40	10	10YR2/3	
Pit3	IX D-19	楕円	D	46	30	12	10YR2/3	

第 93 表 SB 16 柱穴属性

遺構名	非ロク 杯K	土師器								黒色土器A:須恵器								灰釉陶器		数 / 総重量 (破片 / g)						
		杯A	鉢	盤	甕A	甕B	甕E	小型甕	小型甕B	小型甕C	不明	杯A	杯A	杯B	蓋	甕A	甕C	甕D	甕E		壺	短頸壺	椀	皿	長頸壺	
SB 16 床下		4		3			3				1															38/459.7
" 2層				1	5	3		2									4				1	1				27/324.7
" 1層		2			3		4				1				1	2				1	1					19/427.6
" 埋土	1	10	1	1	20	4	8	2	6	1							4	2		4	3	1	2	1	1	155/1,654.0
カマド燃焼部					3	1																				9/47.7

第 94 表 SB 16 出土土器組成

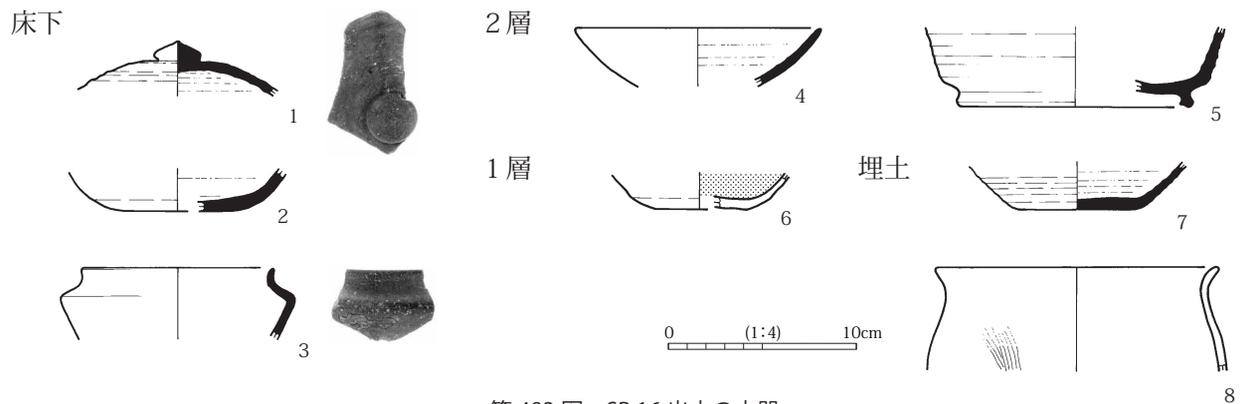
出土遺物： 埋土を中心とした出土土器の組成は、第 94 表に示す。

床下 1 は須恵器杯蓋 1/4 程度の個体、つまみ部は宝珠形。体部 1/3 程度をケズリ調整する。2 は須恵器杯 A 底部破片。ヘラケズリ後ナデ調整。3 は須恵器短頸壺の口縁部。胎土は洗練され緻密、焼き上がりは硬質感がある。口縁はやや外反しながら直立。内外面とも丁寧なナデ調整仕上げ。

埋土 2 層出土の 4 は須恵器杯 A 類、口縁部破片。緩やかに外反する器形で、口唇内面は使用により磨耗し、ツルツルしている。5 は第 482 図 No1 での須恵器杯 B Ⅲ類、底部破片。高台は高く、凹形。胎土中に黒色の混入物ある。1 層出土の 6 は黒色土器杯 A 類底部。底部付近の外面はケズリ調整。内面のミガキ調整には、十字状の暗文様ミガキが観察できる。7 は須恵器杯 A 類底部、No3。糸切り離し調整で、外面にはロクロ目を明瞭に残す。底部内径 6.5cm を測る。8 は土師器小型甕形土器 B 類の口縁部破片、胎土中には石英粒子を多量に混在する。

時期の判断根拠：

床面の掘り方と考えられる床下遺物の須恵器の特徴から、ヘラ切り杯 A 類と宝珠形つまみの口径が小さな蓋、肩の強く張る短頸壺等、古代 2 期前後に比定できるか。



第483図 SB 16出土の土器

17号竪穴式建物跡（第484図～第492図）

時期： 8世紀前半～中頃を推定（古代2期ないしは3期比定）

位置： VIII X - 17, 22 (②区)

平面形態： 隅丸方形

規模： 表面積 33.8 m²（南北 524cm × 東西 636cm）、残存深度 14cm

主軸方向： N - 2° - E

カマド位置： 北壁中央

壁立ち上がり： 62度程度の傾斜

柱穴： 4本主柱穴，柱穴3本

埋土堆積： 黒褐色土（10YR2/3）の単純堆積で、砂粒をブロック的に混入する。床下はほぼ同様な土が堆積するが、上層に比してやや黒味が強い。

遺構重複： SB 14 と ST 29 に壊される。

検出経過： 黄橙色砂質粘土層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認した。竪穴式建物を想定したが、形状に歪みがあり、2軒が重複していると判断した。平面確認では新旧関係がつかめず、土層観察用畔を設定し、慎重に調査を進めた結果、本跡が古く破壊されていると判断した。本跡を破壊する竪穴をSB 14 としたが、いずれの床面も浅く、両者僅かに1 cm 程度の違いしか認められなかった。床面のほぼ中央部にSB 17 の火床部分と考えられる焼土が認められたことから、近時に建て替えられた建物の可能性が高い。ただしSB 14 同様に、我々の想定し得ない複雑な形態を示す一軒の建物である可能性も視野に入れる必要がある。柱穴等の施設も、その配置から、それぞれの帰属建物を決定した。

遺物出土状況： 出土土器はほとんどないが、柱穴内から礎板材が出土した。

床面の様子： 地山掘削面を床面とする。SB 14 床面との違いは不明瞭。

カマドの様子： カマドはSB 14 との切り合いもあり、不明瞭で認定根拠は希薄である。北東隅からの北側ラインの延長推定ライン上に敷設する状況で、炭化物及び焼土の分布を確認したので、そこをカマドと想定した。袖部の残骸やカマド掘り方等は確認できなかった。

主柱穴の様子： 主柱と考えられる柱穴は4本検出でき、それらを破壊する状態で4基を確認した。柱穴の切り合い状態から考えると、建替えと判断できるが、南西の柱穴（Pit10）には平面的な切り合いは認められない。いずれの柱穴も炭化物を混入し、粘性・締まりの強い黒褐色土（10YR3/1）の単純堆積である。形態はPit10以外、ほぼ円形状を呈し、すべてに礎板材が残存する。Pit1及びPit4内の礎板材は東西方向に、Pit2・Pit3・Pit12・Pit8・Pit9・Pit10の礎板材は南北方向に長軸を向く。

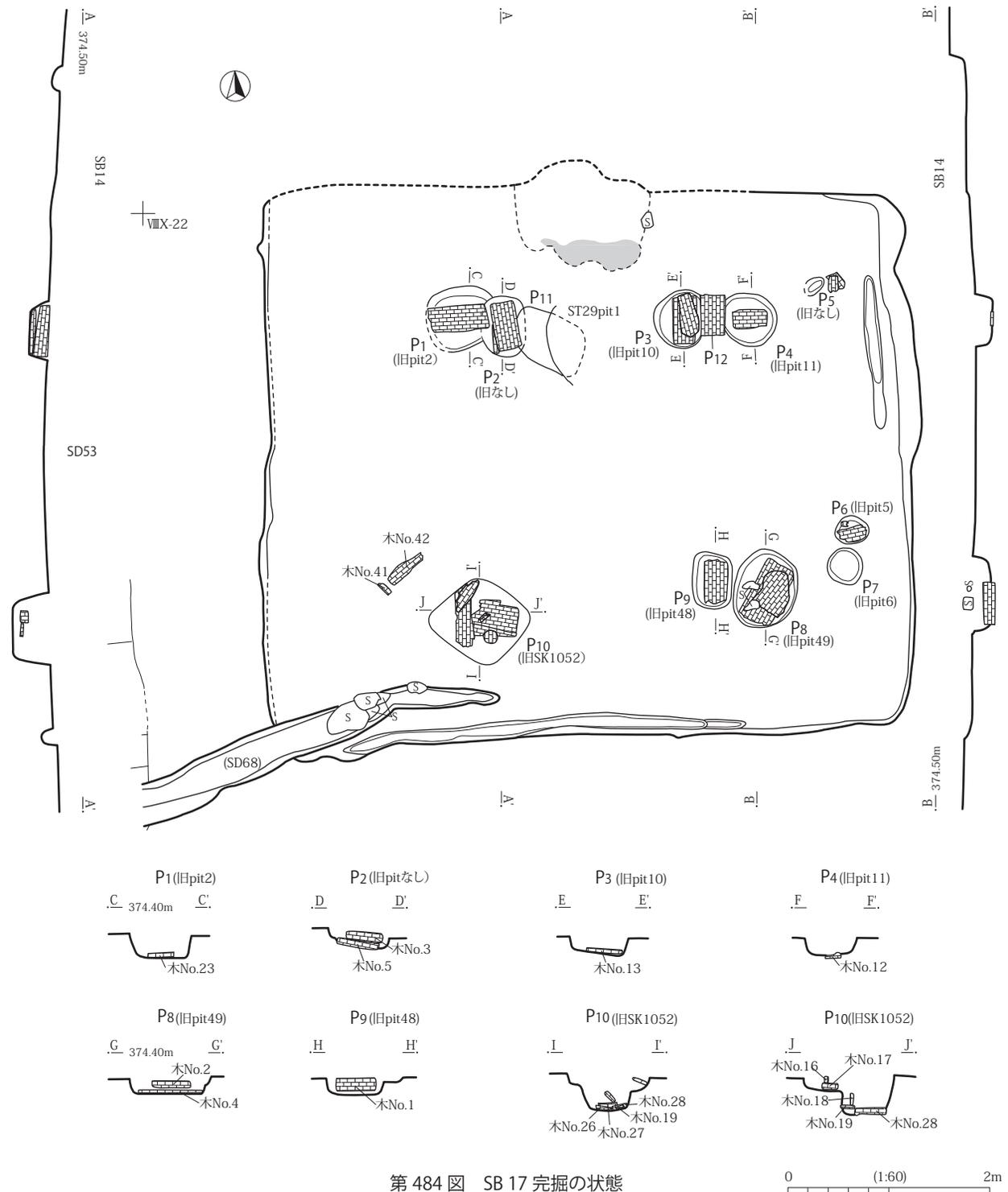
柱穴の様子： 主柱以外の補助柱穴は3本検出できた（Pit5～Pit7）。Pit4の右脇に1基、Pit8の右脇に2基がある。Pit6及びPit7は深さ20cmほどの角柱状の断面形態を呈する。

周溝の様子： 本跡の床面には東側と南側に周溝が認められた。さらに南西隅には、SB 14 と同様に排水用と考えられる溝が存在し、竪穴内から外に伸びていた（第 484 図）。

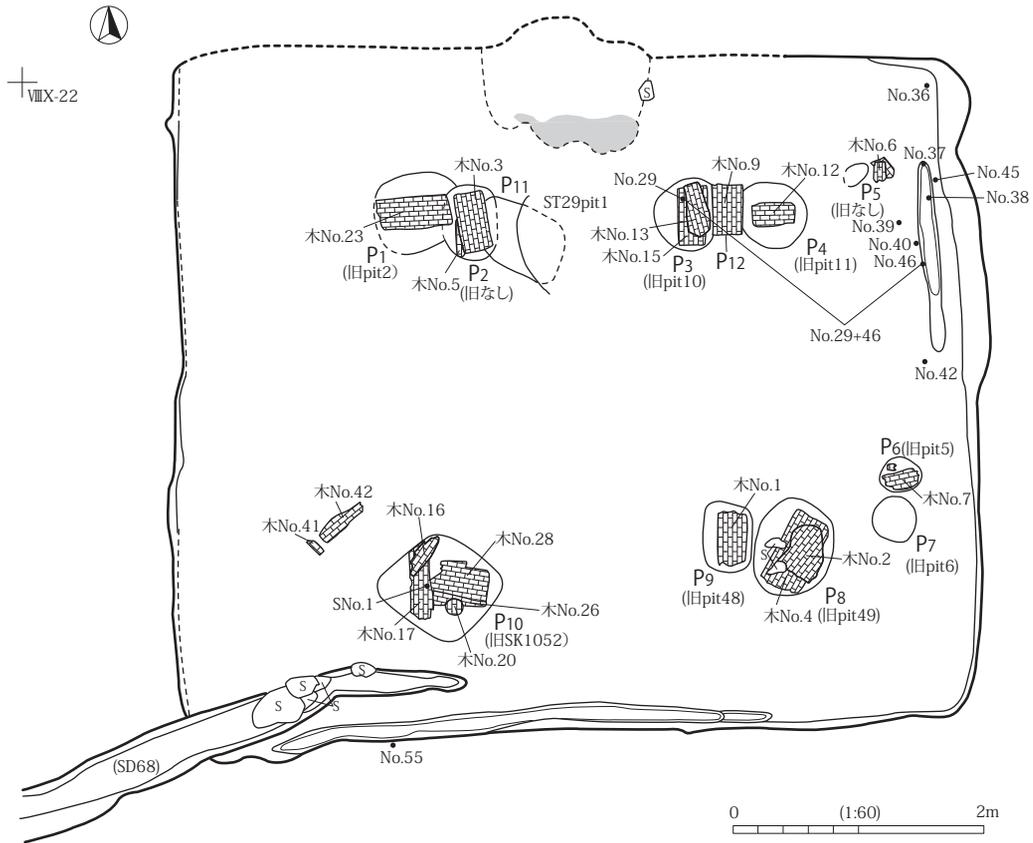
西側周溝： 素掘りの溝状で、長さ 100cm、深さ 10cm。

南側周溝： 素掘りの溝状で、長さ 400cm、深さ 10cm。

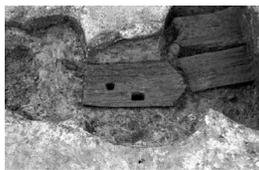
排水溝： SB 14 の排水施設とは違い、本跡南側周溝とは接続して検出できていない。別の溝であったのか、検出状況が悪かったのかは判断つかない。本跡外へ伸びる溝は当初、本跡とは別の溝跡（旧 SD 68）として調査したために、SB 14 の排水施設を発見した時点で、追認が不可能であった。本跡と SB 14 は建替えと判断していたので、その時点で、SD 68 を本跡の排水施設



第 484 図 SB 17 完掘の状態



第 485 図 SB 17 柱穴内柱・礎板出土の状態



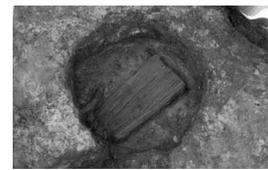
Pit1 礎板 (No.23) 出土状態



Pit2 礎板 (No.5) 出土状態



Pit3 礎板 (No.15) 出土状態



Pit4 礎板 (No.12) 出土状態



Pit8 礎板 (No.4) 出土状態



Pit10 礎板 (No.26) 出土状態



Pit6 板 (No.7) 出土状態

遺構番号	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土色帳記号	備考
Pit1	VIII X-22	(楕円)	A	(66)	60	26		
Pit2	VIII X-22	(楕円)	A	60	(36)	14		
Pit3	VIII X-22	楕円	A	57	(46)	18	10YR3/1	
Pit4	VIII X-22	楕円	A	57	51	16	10YR3/1	
Pit5	VIII X-22	(楕円)		(20)	14	11		
Pit6	VIII X-22	楕円		32	26			
Pit7	VIII X-22	楕円		38	34	(17)		
Pit8	VIII X-22	楕円	A	77	60	(18)	10YR3/1	
Pit9	VIII X-22	隅丸長方形	A	53	38	(15)		
Pit10	VIII X-22	隅丸方形	B2	77	73	37		

第 95 表 SB 17 柱穴属性

	出土地点	土器番号	種類	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台内 (cm)	高台高 (cm)	備考
第 486 図 3	上 層	34 (SB14)	須恵器	鉢か	口縁	16.0	—	—	—	—	No.40D と接合 SB17 と接合したため SB17 とする
第 486 図 3	〃	40-D	須恵器	鉢か	口縁	—	—	—	—	—	No.34(SB14) と接合
	〃	39	土師器	甕A	体部	—	—	—	—	—	破片 1 片
	〃	38	須恵器	瓶	体部	—	—	—	—	—	破片 1 片
	〃	37	土師器	甕E	体部	—	—	—	—	—	破片 1 片
	〃	36	非口クロ土師器	杯C	口縁	—	—	—	—	—	破片 3 片 2 片接合
第 486 図 5	〃	40-A	須恵器	杯B	1/4	—	—	—	—	—	3 片接合
第 486 図 4	〃	40-B	須恵器	杯A	1/5	10.2	—	—	—	—	ヘラ切り 3 片接合
	〃	40-C	須恵器	杯A	口縁	13.0	—	—	—	—	ヘラ切り 2 片
	〃	42	土師器	甕	体部	—	—	—	—	—	破片 3 片
第 486 図 2	下 層	29	須恵器	杯A	1/3	(13.2)	(4.1)	(7.4)	—	—	ヘラ切り 2 片接合 No.46 と接合
第 486 図 2	〃	46	須恵器	杯A		—	—	—	—	—	破片 1 片 No.29 と接合
	〃	55	須恵器	甕E	体部	—	—	—	—	—	破片 1 片
	〃	45	土師器	甕E	体部	—	—	—	—	—	破片 1 片

第 96 表 SB 17 出土土器属性

遺構名	非口ク 杯C	土師器					黒色土器A		須恵器				数 / 総重量 (破片 / g)
		杯A	甕	甕A	甕B	甕E	杯A	杯B	蓋	鉢か	甕E	瓶	
SB 17 床面			1				1			4		2	8/42.0
〃 下層						1						1	5/159.6
〃 上層	2		3	1		1			3	3			17/155.1
カマド内				1	3								4/25.2
Pit10		1											1/3.9

第 97 表 SB 17 出土土器組成

挿図番号	遺構名	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第 487 図 6	SB17	1	下層	礎板	板目	モミ属	55.1	26.5	5.2	穴あり、墨痕両面にあり
第 487 図 7	SB17	2	下層	割材	板目	ケヤキ	44.3	26.5	8.1	
第 488 図 8	SB17	2	下層	礎板	半丸太材	クリ	(43.2)	24.9	13.8	柱材の転用か
第 488 図 9	SB17	3	下層	割材礎板	板目	フジキ	50.7	22.5	4.3	4 片接合
第 489 図 10	SB17	3	下層	割材	板目	クリ	41.9	16.1	6.6	刃痕連続して入る
第 489 図 11	SB17	4	下層	板材	追衿目	サワラ	35.4	(17.6)	2.9	刃痕あり
第 489 図 12	SB17	6	埋土	割材	板目	オニグルミ	19.2	12.1	3.4	
第 489 図 13	SB17	6	埋土		板目	オニグルミ	13.6	5.4	1.3	
第 490 図 14	SB17	8	下層	礎板	板目	ケヤキ	58.1	28.6	8.6	ホヅ穴あり
第 490 図 15	SB17	9	下層	礎板	板目	フジキ	41.6	21.5	7.4	平滑、刃痕あり
第 491 図 16	SB17	10	埋土	割材	分割材	ケヤキ	52.6	19.0	9.4	柱材の転用か
第 491 図 17	SB17	10	埋土	板材	衿目	サワラ	37.4	14.9	4.5	礎板か 加工痕残る
第 491 図 18	SB17	10	下層	礎板	分割材	モミ属	35.6	18.2	4.9	加工痕あり ホヅ穴なし
第 491 図 19	SB17	10	下層	礎板	分割材	カエデ属	47.7			
第 492 図 20	SB17	12	下層	板材	板目	サワラ	37.0	(22.6)	3.2	穴あり
第 492 図 21	SB17		床面	板材	板目	サワラ	(19.9)	11.2	2.1	刃痕あり
第 492 図 22	SB17		床面	板材	板目	モミ属	24.4	12.7	5.5	
第 492 図 23	SB17		床面	割材	板目	クリ	25.5	3.4	1.1	加工痕
	SB17		下層	材	追衿目	モミ属	15.3	4.3	1.9	
	SB17		下層	材	衿目	広葉樹	9.4	3.4	1.2	
	SB17		下層	割材	板目	オニグルミ	15.4	7.1	3.0	
	SB17		埋土	板材	衿目	ケヤキ	(10.1)	3.8	(2.7)	
	SB17		埋土	割材	衿目	広葉樹	3.0	1.3	0.2	

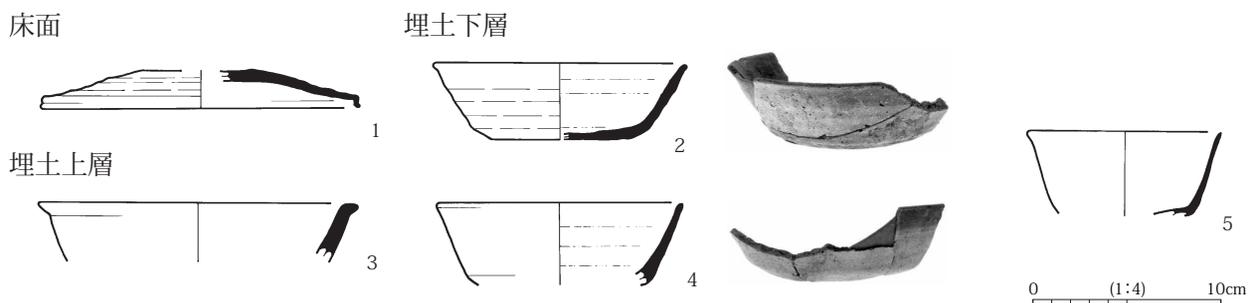
第 98 表 SB 17 出土木製品属性

設ではないかと考えた。ただし留意すべきは、SB 14 から南へ伸びるように溝跡が存在しており、これが旧 SD 68 と接続していたことである。接続部分にはハンドボール大の礫が数個確認できた（第 485 図）。検出経過にも記したように、SB 14 と本跡が同一の建物である可能性があり、その根拠にもなり得る要素だが、現時点では判断がつかない。

出土遺物： 埋土及び床面出土の遺物は、ほとんどない。SB 14 と大部分が重なるため、カマドあるいは重複外の遺物のみを本跡として扱った。

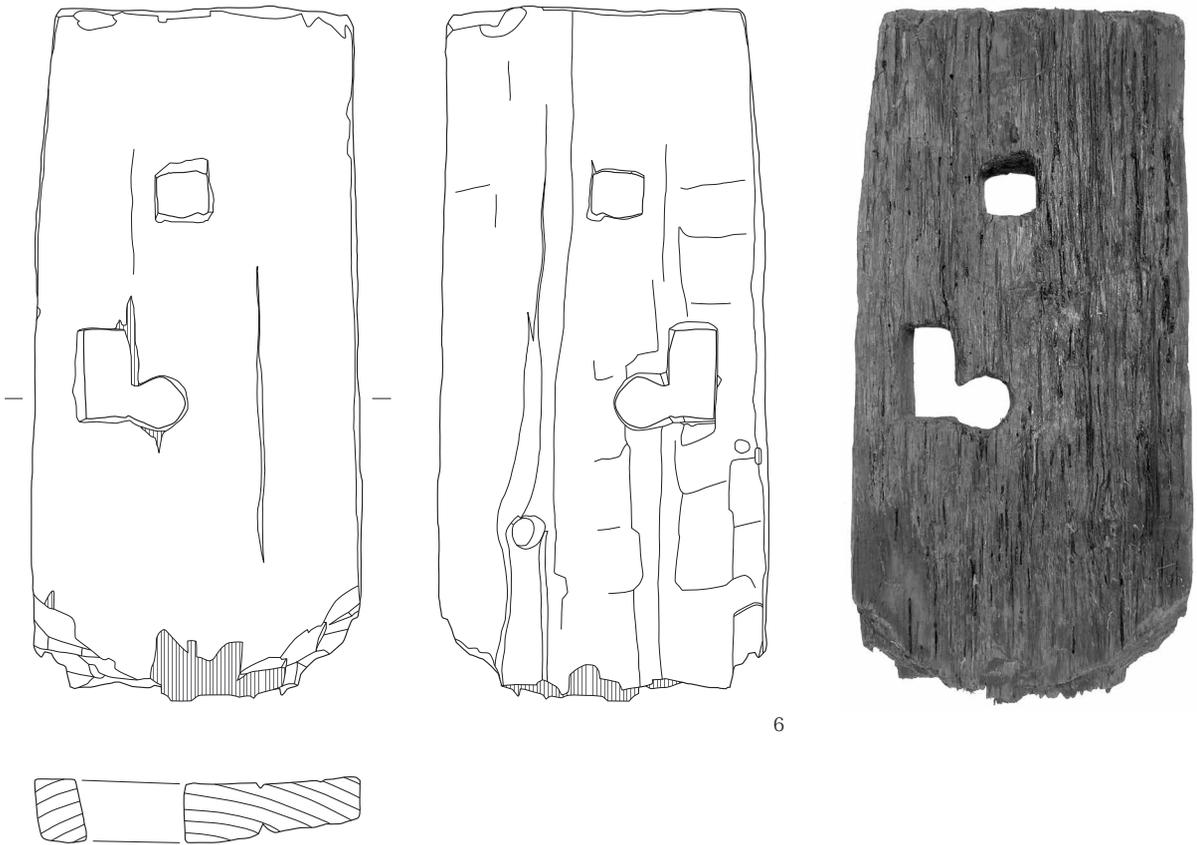
- 床面 1は須恵器杯蓋 1/4 程度の個体。ケズリは 1/2 程で、かえしは直、端部強く外反する。この他に床面から、黒色土器杯Aと判断した小破片 (5.3g) 1点が出土しているが、体部の小破片であり、非ロクロ土師器の可能性が高いか。21 から 23 は Pit5 の右脇から重なって出土した板材 3 点である。21 は板状で、表面には幅 4.0cm の工具痕が観察できる。サワラ材。22 は板目の板材で、表裏の大部分が腐食している。モミ属。23 は板材の破材か。クリ材。
- 埋土 2 は下層出土の須恵器で、底部ヘラ切り手法。口径 13.2cm、底部内径 7.4cm を測る。3・4 は上層出土の須恵器。3 は須恵器鉢の口縁部破片。口唇は外側に強く屈曲し、口径 16.0cm を測る。4 は No40B で杯A類の体部。ヘラ切り手法と考えられるが、底部を欠失する。5 は No40A の杯B類体部。口径 10.2cm、器高約 5.0cm を測る小型品。淡い灰色で、やや軟質。
- Pit1 6 は No23 の礎板材。板目の板材で、長さ 55.1cm、幅 26.5cm を測る。方形のホゾ穴が 2 箇所穿たれる。
- Pit2 7 は No3 の礎板材。ケヤキの板目材。下端は垂直に、上端は斜めに切断されている。8 は No5 の半丸太材で、横に溝が走る柱材を縦に分割している。クリ材。
- Pit3 9 は No15 の礎板でフジキ材。上下両端とも垂直に切断される。50.7 × 22.5 × 4.3cm。10 は No13 の礎板で、クリの板目材。下端には斜め方向の切断痕が複数観察できる。
- Pit4 11 は No12 の礎板材。両端垂直に切断した板材で、木裏を表にして使用されていた。切断痕はノコギリ痕のように観察できる。35.4 × 17.6 × 2.9cm。
- Pit6 12 と 13 は同一材と考えられる板目の割材で、ともにオニグルミ材。
- Pit8 14 は No4 の礎板材で、板目のケヤキ材。木表を表にして使用。
- Pit9 15 は No1 の礎板材。板目のフジキ材。木表を表にして使用。
- Pit10 16 は No26 の割材。ケヤキの柱材を切断・分割して転用したものか。礎板材か。17 は No27 の礎板材で分類 Aa 類。板状で表面にはチョウナの加工痕が明瞭に残る。サワラの柁目材。18 は No28 の礎板材で、分類 Aa 類。一端は鋸挽きにより、もう一端は斧による切断痕跡が明瞭。モミ属の追柁目材。19 は No17 の礎板材で分類 Aa 類。木裏を表とし、両端を切断する。カエデ属の分割材である。
- Pit12 20 は No9 の礎板材。板材で、表裏面とも一面構成である。サワラ材、37.0 × 22.6 × 3.2cm。
- 時期の判断根拠：

埋土下層出土の須恵器 A 類の特徴、ヘラ切り離し調整で、底部内径 8.0cm と大きいことから、2 期前後に比定できるか。柱穴出土の礎板材の炭素年代測定値は、ベータ法による測定で、Pit3 の No13 が 734 ± 80 年 AD、Pit8 の No4 で 594 ± 80 年 AD を得た。概ね 7 世紀から 8 世紀に所属するか。

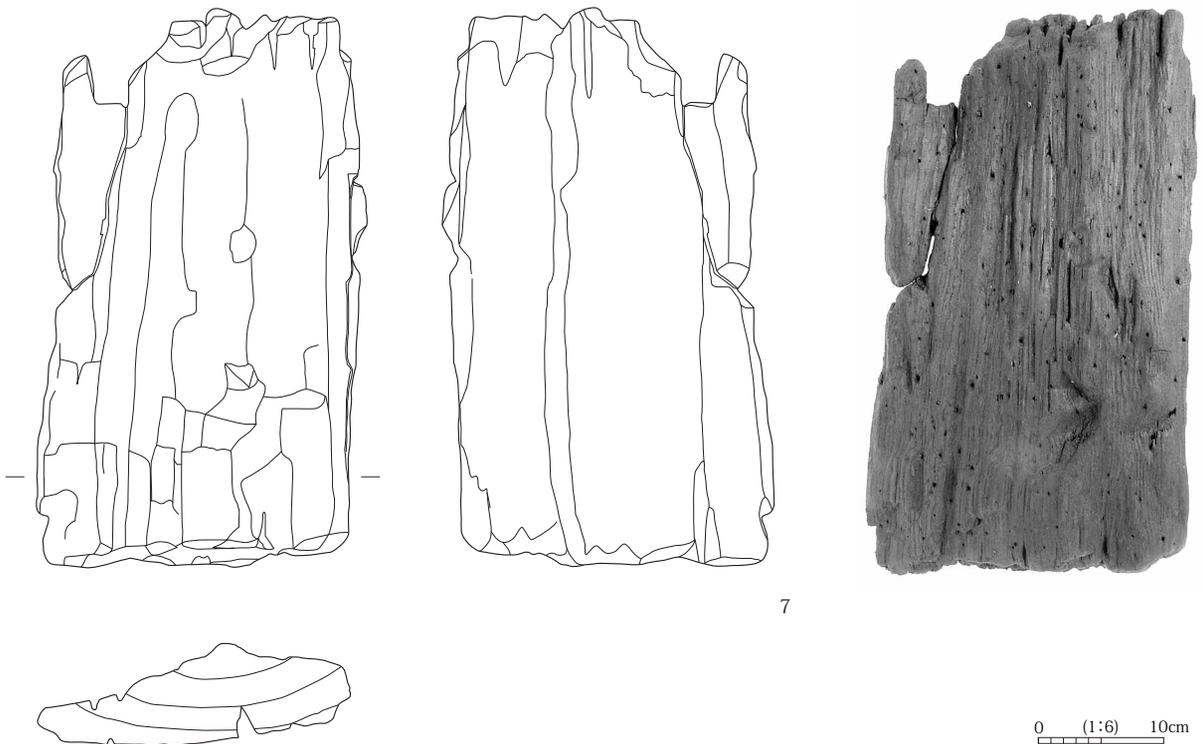


第 486 図 SB 17 出土の土器

Pit1

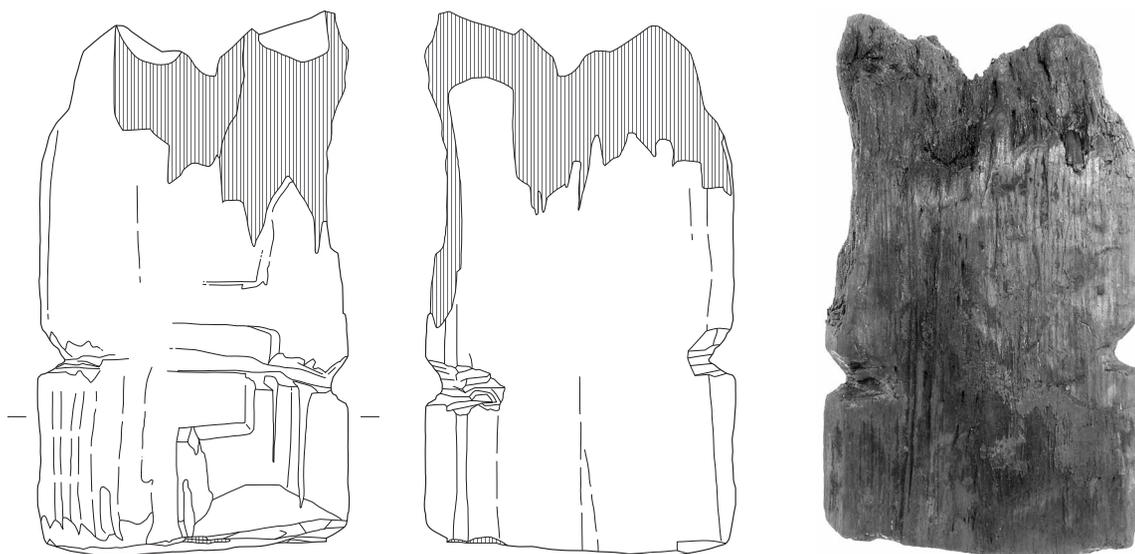


Pit2

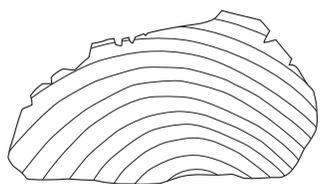
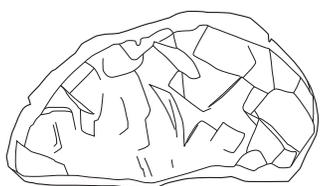


0 (1:6) 10cm

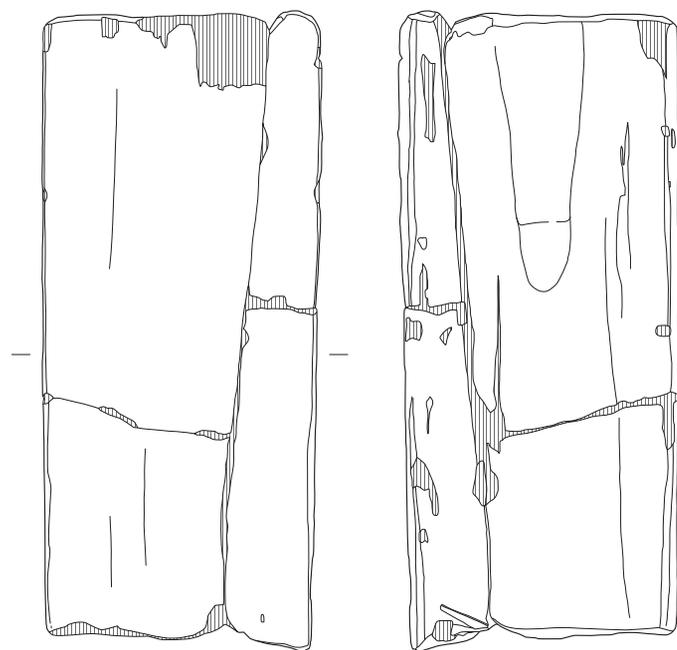
第 487 図 SB 17 柱穴出土の礎板 1



8



Pit3



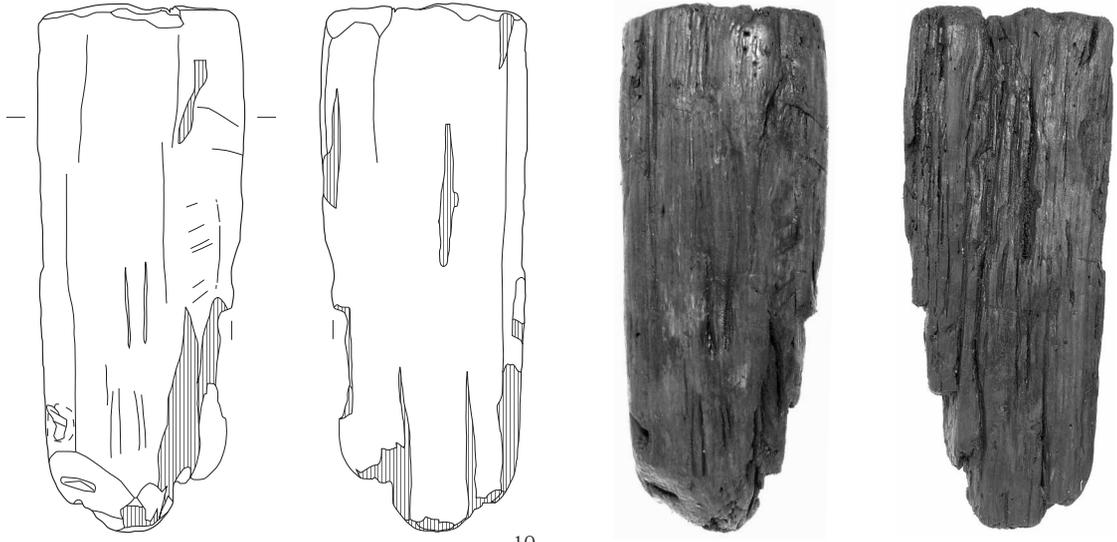
9



0 (1:6) 10cm

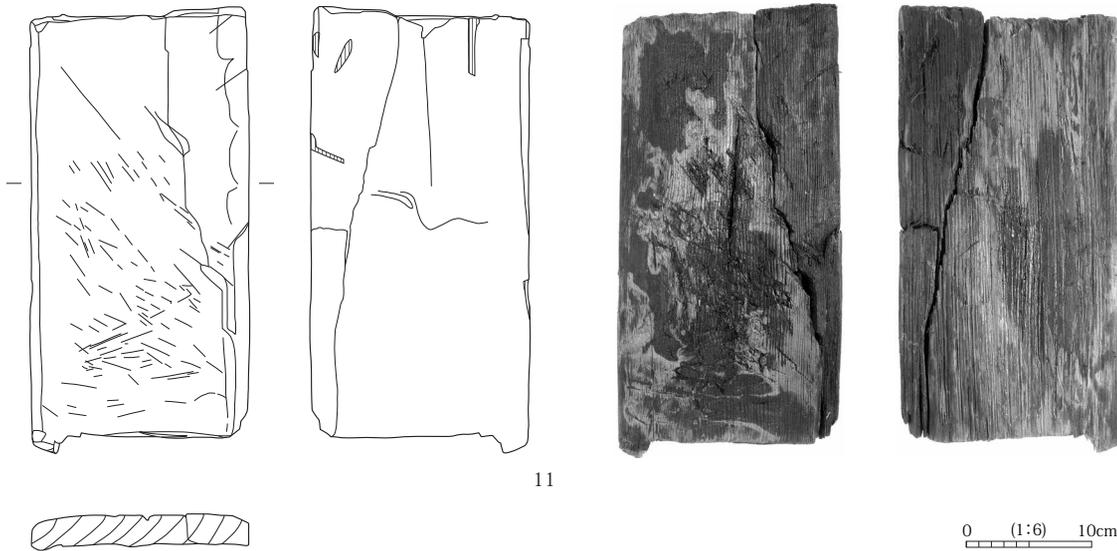
第488図 SB 17 柱穴出土の礎板 2

Pit3



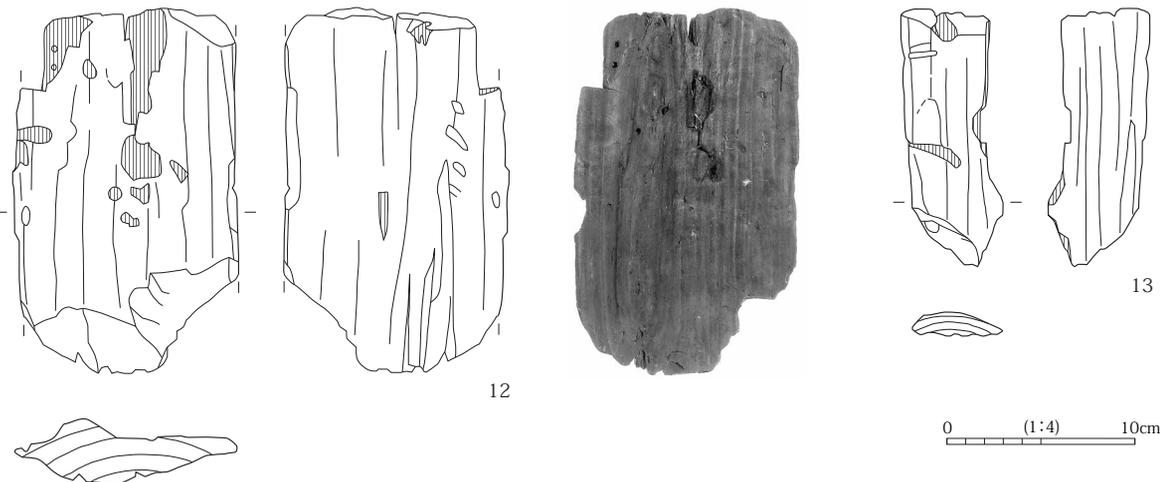
10

Pit4



11

Pit6



12

13

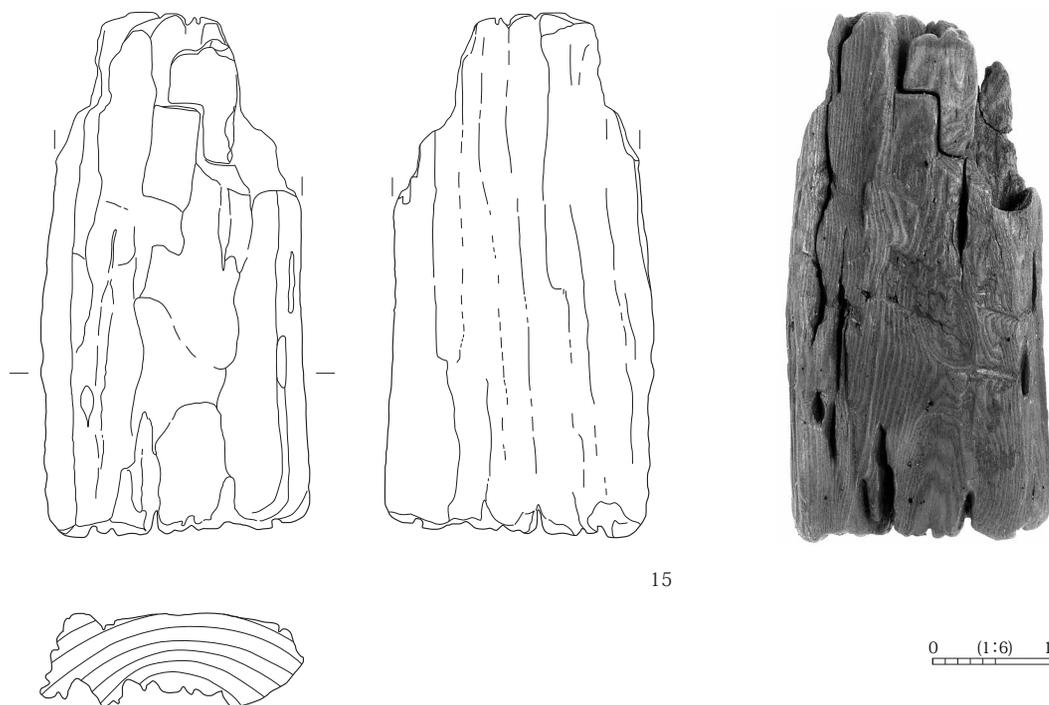
第 489 図 SB 17 柱穴出土の礎板 3

Pit8



14

Pit9

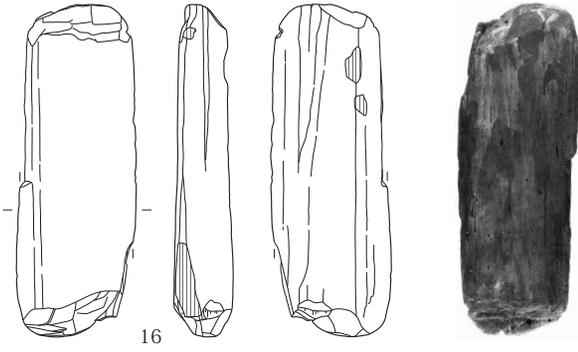


15

0 (1:6) 10cm

第 490 図 SB 17 柱穴出土の礎板 4

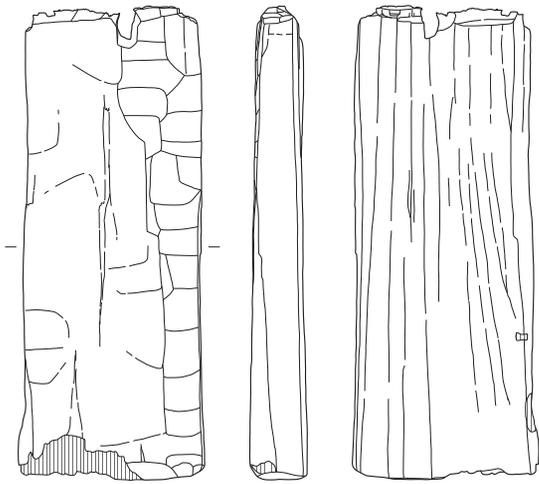
Pit10



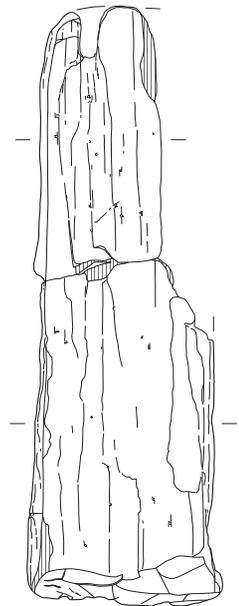
16



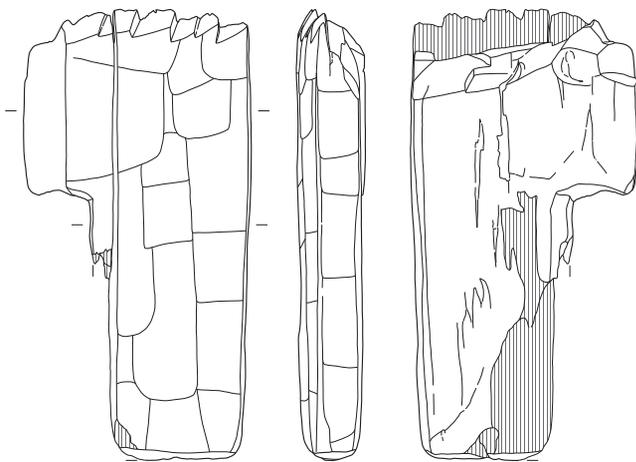
0 (1:12) 20cm



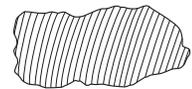
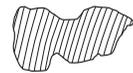
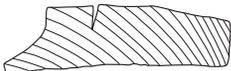
17



19



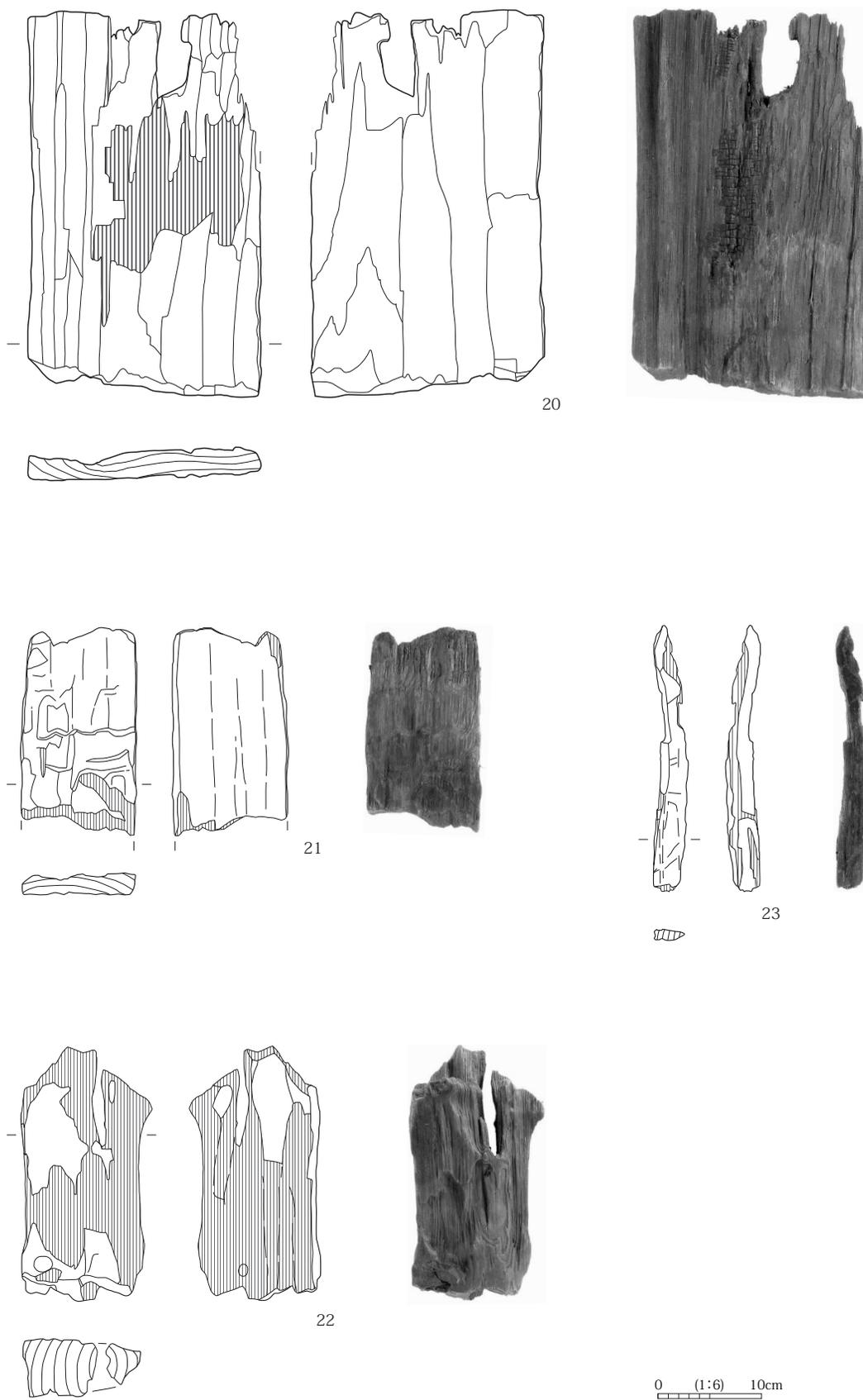
18



0 (1:6) 10cm

第491図 SB17柱穴出土の礎板 5

Pit12



第492図 SB17柱穴出土の礎板 6



社宮司遺跡②区全景



社宮司遺跡③区 SB 群

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 78

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 1

－千曲市内その 1－

社 宮 司 遺 跡 ほか ≪第 1 分冊≫

発 行 平成 18 年 3 月 31 日発行

発行者 国土交通省関東地方整備局

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒 381-0037 長野県長野市西和田 470

TEL 026-243-2105